一橋大学審査学位論文

博士論文

琉球沖永良部島国頭方言の文法

横山（徳永）晶子

A GRAMMAR OF OKINOERABU – KUNIGAMI DIALECT, RYUKYUAN

TOKUNAGA-YOKOYAMA, Akiko

本論文の構成

本論文は 1 章～7 章の本論と資料編で構成される。1 章「序論」では、論文の位置付け、データの説明、論文を執筆する上での表記・略号のルールについて述べる。2 章「言語の概要」では、研究対象である沖永良部語の、地理・系統・文化的背景、消滅危機度の度合い、主要な先行研究をまとめる。3 章「音韻論」では、音素体系、音節とモーラの構造、アクセントの体系、疑問イントネーションの仕組みを記述する。4 章「形態論」では、形態論の概説を述べたのち、名詞形態論、動詞形態論、形容詞形態論、その他品詞の形態論に分けて記述する。また、機能類から語をまとめたものとして「指示語」「疑問詞」の体系を述べる。5 章「統語論」では、統語的な概念の導入を行ったのち、語順、名詞句構造、述部構造、構文論、複文構造について記述する。6 章「語用・機能面からの記述」では、語用論のトピックとして情報構造、待遇表現を記述するほか、テンス・アスペクト体系、モダリティについて、機能面から記述する。7 章「結論」では、各章の要約を行うとともに、言語類型論からみた沖永良部国頭方言の特徴について述べる。資料編では、アクセントのデータ、及び、自然談話資料の一部を掲載する。

目次

本論文の構成 1
目次 2
1 章　序論 14
1.1　本論文の背景・位置付け・特徴 14
1.2　データ 17
1.2.1　データの種類 17
1.2.1.1　自然談話データ 17
1.2.1.2　質問調査、准自然発話データ 18
1.2.2　コンサルタント 18
1.3　表記のルール 30
1.3.1　音韻表記 30
1.3.2　例文表記 30
1.3.3　本文中の表記 30
1.3.4　略号一覧 30
2 章　言語の概要 32
2.1　地理・系統・文化 32
2.1.1　地理 32
2.1.2　系統 33
2.1.2.1　奄美語（方言）の一部とする立場 33
2.1.2.2　沖縄北部・与論方言との連続性を主張する立場 34
2.1.2.3　本稿の立場 35
2.1.3　文化・産業 36
2.2　話者数と危機の度合い 37
2.2.1　9 項目による判定 37
2.2.1.1　言語の世代間継承 (Intergenerational language transmission) 37
2.2.1.2　母語話者数 (Absolute Number of Speakers) 37

2.2.1.3　人口に占める話者の割合 (Proportion of Speakers within the Total Population) 38
2.2.1.4　言語使用場面 (Trends in Existing Language Domain) 38
2.2.1.5　新たな場面での言語使用 (Response to New Domains and Media) 38
2.2.1.6　教育の為の言語資料と書記法 (Materials for Language Education and Literacy) 39
2.2.1.7　国の言語政策 (Government and Institutional Language Attitudes and Policies) 39
2.2.1.8　コミュニティメンバーの言語への態度 (Community Member's Attitudes toward Their Own Language) 40
2.2.1.9　言語記録の質と量 (Amount and Quality of Documentation)..... 40
2.2.2　総評 41
2.3　主要な先行研究 42
3 章　音韻論 43
3.1　音素 43
3.1.1　母音 43
3.1.1.1　母音音素の認定 43
3.1.1.2　母音空間図 46
3.1.1.3　/u/について 47
3.1.1.4　/ɨ/ [ɪ]について 47
3.1.1.5　母音音素表 49
3.1.2　半母音 50
3.1.2.1　半母音音素の認定 50
3.1.2.2　半母音の分布特徴 51
3.1.3　子音 51
3.1.3.1　子音音素 51
3.1.3.2　異音 57
3.1.3.3　子音音素表 58

3.2 音節とモーラ 59
3.2.1 単位の認定 59
3.2.1.1 モーラの認定 59
3.2.1.2 音節の認定 63
3.2.2 音節と音の並び 64
3.2.2.1 頭子音の構造 64
3.2.2.2 核の構造 64
3.2.2.3 尾子音の構造 64
3.2.3 モーラの種類 65
3.2.3.1 自立拍 65
3.2.3.2 特殊拍 65
3.2.4 音節の重さ 65
3.2.4.1 軽音節 65
3.2.4.2 重音節 66
3.2.4.3 超重音節 66
3.3 アクセント 67
3.3.1 概論 67
3.3.2 アクセントの表記法 68
3.3.3 名詞のアクセント 68
3.3.3.1 2 モーラ語 69
3.3.3.2 3 モーラ語 69
3.3.3.3 4 モーラ語 70
3.3.3.4 d 型の通時的解釈について 71
3.3.4 動詞のアクセント 75
3.3.5 形容詞のアクセント 75
3.4 イントネーション 76
3.4.1 枠組み 76
3.4.2 疑問文の構造 77

3.4.3 疑問文のイントネーション 78
3.4.3.1 名詞述語の疑問文 78
3.4.3.2 動詞述語の疑問文 83
3.4.4 まとめ 86
4 章 形態論 88
4.1 序論 88
4.1.1 単位の導入 88
4.1.1.1 語、接語、接辞 88
4.1.1.2 語の内部構造 92
4.1.2 形態類型論 93
4.1.3 品詞分類 93
4.1.3.1 名詞 94
4.1.3.2 動詞 94
4.1.3.3 形容詞 94
4.1.3.4 副詞 95
4.1.3.5 連体詞 95
4.1.3.6 助詞 95
4.1.3.7 感動詞 96
4.1.4 語の機能分類 96
4.1.5 形態法一覧 96
4.1.5.1 接辞付加 (affixiation) 97
4.1.5.2 複合 (compounding) 97
4.1.5.3 重複 (reduplication) 100
4.1.5.4 判断が難しいケース 100
4.2 名詞形態論 102
4.2.1 普通名詞 102
4.2.1.1 接辞化 102

4.2.1.2 複合 107
4.2.1.3 重複 110
4.2.2 代名詞 111
4.2.2.1 人称代名詞 112
4.2.2.2 指示代名詞 120
4.2.2.3 疑問代名詞 122
4.2.2.4 再帰代名詞 124
4.2.3 数詞 124
4.3 動詞形態論 127
4.3.1 記述方針 127
4.3.1.1 語の部分の呼び方について 127
4.3.1.2 先行研究との違い 129
4.3.2 語形成 133
4.3.2.1 動詞の内部構造 133
4.3.2.2 語基交替規則 137
4.3.2.3 形態音韻規則 139
4.3.2.4 不規則変化 141
4.3.3 動詞の種類 143
4.3.3.1 動作動詞 143
4.3.3.2 存在動詞 144
4.3.3.3 コピュラ動詞 148
4.3.4 接辞の種類 154
4.3.4.1 派生接辞 154
4.3.4.2 丁寧（接辞グループ B） 157
4.3.4.3 継続（接辞グループ C） 158
4.3.4.4 否定（接辞グループ A） 158
4.3.4.5 時制 161

4.3.4.6 語尾接辞 163
4.4 形容詞形態論 181
4.4.1 形容詞の認定 181
4.4.2 形容詞の 2 つの形式 182
4.4.2.1 単独形式 182
4.4.2.2 融合形式 184
4.4.3 形容詞の分類 186
4.4.3.1 形容詞接辞の 2 つの形式 186
4.4.3.2 -sa / -sja 接辞の違い 187
4.4.3.3 -sa, -sja を取らない形容詞 188
4.4.4 派生・重複 188
4.4.4.1 副詞化接辞-ku 188
4.4.4.2 重複 189
4.4.4.3 -taama 190
4.4.5 複合形容詞 191
4.4.5.1 gisa「～そうだ」 191
4.4.5.2 gurusja「～苦しい、出来ない」 192
4.4.5.3 busja「～したい」 192
4.4.5.4 jasa「～やすい」 193
4.6 その他の品詞 194
4.6.1 連体詞 194
4.6.1.1 指示語 194
4.6.1.2 icjanu「どんな」 197
4.6.2 感動詞 197
4.6.2.1 感情感動詞 197
4.6.2.2 対人的感動詞 199
4.6.3 助詞 199

4.6.3.1 格助詞 200
4.6.3.2 接続助詞 201
4.6.3.3 副助詞 201
4.6.3.4 終助詞 206
4.6.4 副詞 207
4.6.4.1 副詞の統語位置 207
4.6.4.2 重複 208
4.7 語類 210
4.7.1 指示語 210
4.7.1.1 指示代名詞・指示連体詞 210
4.7.1.2 指示形容詞 214
4.7.1.3 指示副詞 215
4.7.2 疑問詞 217
4.7.2.1 疑問代名詞 217
4.7.2.2 疑問連体詞 218
4.7.2.3 疑問副詞 219
5 章 統語論 221
5.1 導入 221
5.1.1 統語上の単位 221
5.1.1.1 句 (phrase) 222
5.1.1.2 節 (clause) 223
5.1.1.3 文 (sentence) 223
5.1.2 意味役割 (semantic role) 224
5.1.2.1 動作主 (agent) 224
5.1.2.2 経験者 (experiencer) 224
5.1.2.3 受取人 (recipient) 225
5.1.2.4 被動者 (patient) 225

5.1.3 文法関係 (Grammatical relations) 226
5.1.3.1 主語 (subject) 226
5.1.3.2 直接目的語 (direct object) 229
5.1.3.3 間接目的語 (direct object) 230
5.1.4 節の内部構造 232
5.1.4.1 項 (argument) 232
5.1.4.2 述部 (predicate) 232
5.1.5 句の内部構造 233
5.1.5.1 主要部 (head) 233
5.1.5.2 補部 (complement) 235
5.1.5.3 付加部 (adjunct) 236
5.2 語順 237
5.2.1 主節の語順 237
5.2.2 助詞の位置 238
5.2.3 属格名詞と主要部名詞 238
5.2.4 主要部名詞と修飾部 238
5.2.5 従属節と主節 239
5.2.6 比較構文 240
5.2.7 補助動詞 240
5.2.8 疑問マーカー 240
5.2.9 疑問詞 241
5.2.10 接辞 241
5.3 名詞句構造 242
5.3.1 名詞句の基本構造 242
5.3.2 格の種類と機能 243
5.3.2.1 文法格 244
5.3.2.2 意味格 251
5.4 述部構造 261

5.4.1 名詞述部 261
5.4.2 動詞述部 261
5.4.2.1 項の数 261
5.4.2.2 述語句 263
5.4.3 形容詞述部 267
5.5 構文論 268
5.5.1 アライメント (alignment) 268
5.5.1.1 格 268
5.5.1.2 語順 270
5.5.1.3 動詞の一致 271
5.5.2 結合価 271
5.5.2.1 一項節 (intransitive clause) 271
5.5.2.2 二項節 (transitive clause) 273
5.5.2.3 三項節 (ditransitive clause) 276
5.5.3 結合価操作 277
5.5.3.1 結合価増加操作 277
5.5.3.2 結合価減少操作 279
5.5.4 有対動詞 281
5.5.4.1 有対動詞の形態的対応 281
5.5.4.2 自他交替の類型的傾向 282
5.5.5 文のタイプ 286
5.5.5.1 平叙文 286
5.5.5.2 疑問文 286
5.5.5.3 命令文 287
5.5.5.4 詠嘆文 287
5.6 複文構造 289
5.6.1 主節 289

5.6.2 連体節 289
5.6.3 副詞節 289
5.6.3.1 条件 290
5.6.3.2 理由 291
5.6.3.3 時 292
5.6.4 補文節 293
5.6.4.1 名詞化 293
5.6.4.2 引用 293
5.6.4.3 疑問 295
5.6.5 等位節 295
5.6.5.1 順接 295
5.6.5.2 逆接 297
5.6.6 並列節 297
5.6.6.1 並列 297
5.6.6.2 対比 298
6 章 語用論・機能面からの記述 300
6.1 情報構造 300
6.1.1 情報構造の 4 つのタイプ 300
6.1.2 主題 (topic) 301
6.1.2.1 主題の定義 301
6.1.2.2 主題標識 301
6.1.2.3 主題助詞= wa 301
6.1.2.4 語順 302
6.1.3 焦点 (focus) 303
6.1.3.1 焦点の分類 304
6.1.3.2 焦点標識 307
6.1.3.3 =du の出没 307

6.1.3.4 焦点助詞の位置 314
6.2 テンス・アスペクト 317
6.2.1 テンス 317
6.2.1.1 非動作動詞 317
6.2.1.2 動作動詞 319
6.2.2 アスペクト 321
6.2.2.1 導入 321
6.2.2.2 完結相 323
6.2.2.3 習慣相 323
6.2.2.4 継続相 325
6.2.2.5 完成 328
6.2.3 テンス・アスペクト・エビデンシャリティー 330
6.2.3.1 エビデンシャリティーの分類 330
6.2.3.2 過去 2 接辞-juta 331
6.2.3.3 動詞の継起形＋存在動詞*a 333
6.3 モダリティ 336
6.3.1 表現類型のモダリティ 336
6.3.1.1 情報系 336
6.3.1.2 行為系 345
6.3.1.3 感嘆のモダリティ 348
6.3.2 認識・評価のモダリティ 349
6.3.2.1 認識のモダリティ 349
6.3.2.2 評価のモダリティ 354
6.3.2.3 証拠のモダリティ 356
6.3.3 説明のモダリティ 359
6.3.3.1 baa 359
6.3.3.2 =gi 359

6.3.3.3 =moo 360
6.3.4 伝達態度のモダリティ 361
6.3.4.1 丁寧さのモダリティ 361
6.3.4.2 伝達態度 362
6.4 待遇表現 369
6.4.1 データ 369
6.4.2 敬語体系 370
6.4.3 尊敬語 370
6.4.3.1 名詞 370
6.4.3.2 動詞 371
6.4.4 丁寧語 374
6.4.4.1 自立形式 374
6.4.4.2 接辞形式 375
7 章 結論 376
引用文献 380
資料編 387
1. アクセント資料 388
2. 自然談話資料 403

1章　序論

序論では、1.1 で本論文の背景・位置付け・特徴について述べる。1.2 で論文を執筆するにあたり用いたデータを挙げ、1.3 に表記のルールを述べる。最後に 1.4 で略号を示す。

1.1　本論文の背景・位置付け・特徴

本論文は、琉球諸島の北部に位置する、沖永良部島国頭集落（鹿児島県大島郡和泊町国頭集落）で話されている言語（以下、国頭方言と呼ぶ）の体系を、包括的に記述した文法書である。

現在、世界では 6000～7000 の言語が存在するとされているが (*Ethnologue* 2015) 、その約半数が今世紀中に姿を消すと言われている （Crystal 2000, Nettle and Romaine 2000 など)。近い将来話者を失う可能性がある言語は「危機言語 (Endangered language) 」と呼ばれており、社会的価値（文化的多様性の保持、言語権の尊重）や言語学的価値（言語多様性・言語普遍性の把握、言語理論の修正）からその記録と継承が求められている。

日本には大きくアイヌ語と琉球諸語という危機言語群が存在する。アイヌ語とは、北海道、樺太、千島列島といった地域で、アイヌ民族によって話されていた言語[1]を指す。琉球諸語とは、琉球王国 (1429-1879) の影響下にあった、鹿児島県奄美群島から沖縄県先島諸島までの地域で話されている言語を指す。

琉球諸語の祖語と、日本本土の中央語（いわゆる上代語）とは、奈良時代より前に分岐したとされており（服部 1959, 上村 1997, Pellard 2014 等)、琉球諸語は、その歴史的背景や地理的な隔絶性から、本土諸方言とは異なる言語革新を遂げて来た。琉球諸語は、長年国内で「方言」として扱われてきたが、現在言語研究者の間で広く用いられている「言語相互理解性 (Mutual intelligibility: Trudgill 1974) の概念を用いるのならば、日本語と別の言語群として捉え直すことが必要である。

この地域で話されている言語は、内部での多様性も大きいため、琉球語という単一の言語ではなく、複数の言語であるという見解がある。例えば、現在最も信頼性が高いとされている言語データベース *Ethnologue*[2] では Kikai, Northern Amami Oshima, Southern Amami-Oshima, Tokunoshima, Yoron, Okinoerabu, Kunigami, Central Okinawa, Miyako, Yaeyama, Yonaguni の 11 の言語が認められている[3]。本論文では、*Ethnologue* の見解に従い、沖永良

---

[1] 現在も少数の話者に継承されているが、正確な話者数は明らかになっていない。

[2] Ethnologue: Languages of the World. https://www.ethnologue.com/ （2017 年 3 月 31 日閲覧）

[3] 琉球内部の言語数については、共通見解に至っていない。UNESCO の *Atlas of endangered language* では 6 言語に分割されている。2017 年現在、Mutual intelligibility（言語相互理解性）を実験によって測定し、琉球諸語同士の言語的距離を可視化する試みが進んでいる。

部島で話されている言語を「沖永良部語」と呼ぶ。

このように、琉球諸語は日本語と共通の祖語から分岐し、その後独自の変化を遂げた言語群であり、日本列島（先島までを含む）における言語の歴史を辿る上でも、言語の多様性を探る上でも貴重な言語群である。しかし、急速な社会変化や、過去の標準語教育などの影響から、現在すべての琉球諸語において「標準語」への言語シフト（Language shift）が進行している。2009 年に UNESCO が発表した「危機言語地図（*Atlas of endangered language*）」では琉球諸島全域の言語が「消滅の危機にある」とされた。

琉球諸語には、服部（1955）、平山・大島・中本（1966）、中本（1976）、平山・大島・中本（1967）、内間（1984）など一定の研究蓄積がある。しかし、これらの研究の多くは、歴史的変化の解明を主眼にしたものや、日本諸方言と比較して特徴的な言語現象の記述を目的としたものなど、限定された言語現象を扱ったものであり、1 つ 1 つの言語を包括的に記述したものではない。言語を包括的に記述することで初めて、音韻、形態、統語などの分野を超えた、互いに相関する言語事象を体系的に捉えることが出来る。また、これまで研究対象とされにくかった言語事象（例えば、構文論やイントネーション等）の研究を進めることで、言語類型論や一般言語学の理論構築・修正に寄与するデータや、日本語と琉球諸語（以下、日琉諸語と呼ぶ）の歴史変化を解明するための新たなデータを提供することが出来る。このような研究は、現在、琉球全域で伝統言語の衰退が進んでいる現状を考慮すると、喫緊の課題である。更に、現在琉球諸地域では、伝統言語の復興に向けた機運が高まっており、言語の包括的な記録は、こうしたコミュニティの活動を支える貴重な資料となる。

本論文は、このような問題意識のもと、1990 年代以降、国際的に活発化している危機言語の記述・記録研究の流れを汲むものである。伝統的に、言語の記録には、(a) 記述文法書、(b) 自然談話資料、(c) 辞書が必要だとされており (Boas1917) 、本研究はこのうち (a) 記述文法書の執筆と、それに伴う (b) 自然談話資料の公開に取り組んだものである。

日本国内においては、1999 年から始まった「環太平洋の消滅に瀕した言語」プロジェクトを筆頭に、国立国語研究所「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」プロジェクトなど危機言語・方言の研究が活発化している。また、琉球諸語においては、2000 年代以降、各地で方言ごとの包括的な文法記述（例えば、Shimoji 2008, Pellard 2009, 林 2013、Niinaga 2014, 原田 2015、ファン・デル・ルベ 2016、白田 2016 など：未公開のものを含む）および文法スケッチ集 (Shimoji and Pellard 2012, Heinrich, Shimoji and Miyara 2015) が発表されている。本論文は、琉球諸語の中でも、特に先行研究が少ない沖永良部島の言語を記述するものである。前述の通り、琉球諸語は内部の地域差が大きく、沖永良部語にも方言差が存在する。このため、島内でも比較的伝統言語が保たれており、話者人口の多い国頭集落の言語（国頭方言）を記述の対象とした。

本論文の特徴として、 (a) 国頭方言の音韻、形態、統語、機能面（語用、意味）に渡る包括的な記述を行うこと、(b) 質問調査 (elicitation) だけでなく、話者の自然な発話（自然

談話資料）に基づく分析を行うこと、(c) データベースを構築し、大規模なデータを分析対象にすることが挙げられる。

(a) について、本論文は Payne (1994) が提案した記述文法書に必要な執筆項目と、琉球諸語に特化した執筆項目（下地 2015）を元に構成しており、言語の基本的な理解に必要な項目を網羅するように心がけている。(b) について、自然談話資料を分析することで、調査者や被調査者の知識・予測を超えた言語事象を発見することが出来る。(c) について、SIL International が公開する言語分析ツール FLEx (Field Language Explorer) を用いてデータベースを構築することで、5 年間の調査による大量のデータを分析対象にすることが出来る。こうした手法を取ることにより、先行研究で指摘されてこなかった沖永良部語の言語事象を各所で報告することが出来たと考えている。

本研究を通じて、これまで明らかにされてこなかった、沖永良部語の文法体系を明らかにすると同時に、言語類型論や歴史言語学に寄与するデータや、将来的な言語継承・復興 (Language revitalization) の基礎になるデータを提供できればと考えている。

1.2　データ

本論文を執筆するにあたって用いたデータは下記の通りである。

1.2.1　データの種類

データは、「自然談話資料」「准自然発話資料」「質問調査結果」に分けられる (1-1) 。

(1-1)　データの種類

(a) **自然談話資料**：話者が自然に発した独話や昔話・歌、話者同士の会話の中で発した発話を、国頭方言の話者と筆者が書き起こしたものを指す。

(b) **准自然発話資料**：質問調査中に、（質問への回答とは別に）話者が自然に発した発話や、非母語話者（質問者）に対して国頭方言で発した発話を指す。

(c) **質問調査結果**：調査者の質問に対し対する話者の回答を指す。

自然談話資料と、質問調査・准自然発話データの一部は、FLEx (Field Language Explorer) によってデータベース化した（その他の質問調査の結果は個別に管理)。現在、FLEx には 7100 文、ユニーク・ワードが 12383 語、語彙として 1982 語が収録されている。

1.2.1.1　自然談話データ

本論文で用いる自然談話のデータを、表 1-1 に記す。データの合計時間は 1 時間 33 分である。これらのデータは、全ての形態素毎に、語彙情報・文法情報がタグ付け（グロス付け）されている。具体的な資料の一部は「資料編」に収録する。

表 1-1 自然談話データ一覧

ジャンル	時間	データ名	コンサルタント	内容
独話	0:02:28	20130125-1.wav, IMGA0144.mp4	TK	自己紹介
独話	0:02:25	20130125-2.wav, IMGA0144.mp4	TK	昔の話
独話	0:12:00	20140422-7.wav, 20140422.mp4	YK	岬神社の話
昔話	0:08:48	IMGA0152.mp4	TT	米と麦と粟の姉妹
昔話	0:09:45	IMGA0153.mp4	TT	継母の話
昔話	0:14:50	IMGA0157.mp4	TT	羽衣伝説
昔話	0:07:00	20130326-1.wav, IMGA0162.mp4	TT	タシキマタ
昔話	0:02:14	20140623-2.wav	MF	天国と地獄の話
昔話	0:02:27	20140623-3.wav	MF	東の家と西の家
唄	0:05:17	20130128-1.wav, IMGA0151.mp4	TI	ヤイチクドゥチ
会話	0:02:51	20130809-4.wav	MF, TN	防空壕の話
会話	0:01:17	20150113.wav	YK, TN, SK	トイレの話
会話	0:03:41	20150113.wav	YK, TN, SK	サトウキビ業の話
会話	0:02:48	20150113-5.wav	YK, TN, SK	国盗りの話
会話	0:05:32	20150113-5.wav	YK, TN, SK	子守りの話
会話	0:09:39	20150803-4.wav	YK, TN	子供への教育、標柱碑
合計	1:33:02			

1.2.1.2 質問調査、准自然発話データ

論文の執筆用いた質問調査のデータは、表 1-3、表 1-10（量が多いので、2「コンサルタント」の後に提示）の通りである。データの合計時間は、約 163 時間である。これらのデータは、1.2.1.1 自然談話のデータとは異なり、適宜書き起こされタグ付けが行われている。質問をベースにした調査だが、准自然発話（質問調査中で話者が自然に発した発話）を多分に含んでいる。

なお、質問調査は現地で行ったものと、インターネット電話 (Skype) を通じて行ったものがあるが、結果については特に両者を区別しない。

1.2.2 コンサルタント

国頭集落の出身で、言語形成期を国頭集落で過ごした方々をコンサルタントとした。コ

ンサルタントの方々の生年は表 1-2 の通りである。

表 1-2 コンサルタントと生年

ID	生年	ID	生年
TK	昭和 18 年	TI	大正 8 年
TN	昭和 22 年	TS	昭和 23 年
YK	昭和 8 年	RT	昭和 19 年
KF	大正 14 年	TK2	昭和 6 年
TT	昭和 27 年	SK2	昭和 2 年
TN2	昭和 20 年	TS2	昭和 21 年
UM	昭和 3 年	SK	昭和 8 年
YM	昭和 32 年	MF	昭和 6 年
YM2	昭和 9 年	KH	昭和 38 年
HO	昭和 14 年	TS3	昭和 6 年
SM	昭和 6 年	FS	昭和 7 年
SM2	昭和 9 年	CK	昭和 8 年
MS	昭和 26 年		

表 1-3 現地調査のデータ

type	ファイル名	コンサルタント	日付	時間	調査内容
audio	20120815-1.wav	TK	20120815	0:48:29	アクセント
audio	20120815-2.wav	TK	20120815	0:47:21	全集落調査票
audio	20120817-1.wav	TK	20120817	1:05:54	全集落調査票
audio	20120817-2.wav	TK	20120817	0:47:01	全集落調査票
audio	20120817-4.wav	TK	20120817	0:11:33	全集落調査票
audio	20120820-1.wav	UN	20120820	0:55:29	第一調査票 2
audio	20120820-2.wav	UN	20120820	0:40:56	第一調査票 2
audio	20120820-3.mp3	TK	20120820	1:37:27	自然談話
audio	20120820-4.wav	TK	20120820	1:13:55	第二調査票
audio	20120820-5.wav	TK	20120820	0:14:46	第二調査票
audio	20120820-7.wav	TK	20120820	0:09:21	第二調査票
audio	20120820-8.wav	TK	20120820	0:09:53	第二調査票
audio	20120821-1.wav	YM、HO、SM、SM2、TK	20120821	0:16:00	自然談話
audio	20120821-2.wav	YM、HO、SM、SM2、TK	20120821	1:36:30	自然談話
audio	20120821-3.wav	YM、HO、SM、SM2、TK	20120821	0:00:30	自然談話
audio	20121109	MS	20121109	1:09:42	
audio	20121217_1	MS	20121217	1:02:51	
audio	20121217_2	MS	20121217	0:37:40	
video	IMGA0158.mp4	TK	20130325	0:36:28	音素の確認と状態動詞の活用
video	IMGA0159.mp4	TK	20130325	0:04:22	音素の確認と状態動詞の活用
video	IMGA0162.mp4	TT	20130326	0:07:08	タシキマタ（物語）
video	IMGA0163.mp4	TT/TK	20130326	0:16:14	ウイリ（神事）について
video	IMGA0165.mp4	TN/TN2	20130327	0:10:47	指示代名詞の説明
video	IMGA0167.mp4	TK	20130327	0:00:45	南日本新聞販売所の中
video	IMGA0168.mp4	TK	20130327	0:01:14	南日本新聞販売所の中
video	IMGA0169.mp4	TN2	20130327	0:00:21	料理の差し出し方
video	IMGA0170.mp4	TK	20130328	0:04:17	指示代名詞の説明
video	IMGA0171.mp4	TK	20130328	0:02:23	指示代名詞の説明
video	IMGA0172.mp4	TN	20130329	0:04:06	指示代名詞の説明

表 1-4 現地調査のデータ（続き）

type	ファイル名	コンサルタント	日付	時間	調査内容
audio	20130125-1	TK	20130125	0:02:40	TK さん談話書き起こし
audio	20130125-2	TK	20130125	0:02:51	TK さん談話書き起こし
audio	20130125-3	TK	20130125	0:34:51	TK さん談話書き起こし
audio	20130126-1	TN	20130126	0:37:34	動詞活用
audio	20130126-2	TN	20130126	1:20:20	談話
audio	20130126-3	TK	20130126	0:39:11	談話書き起こし
audio	20130126-4	TK	20130126	0:26:38	談話書き起こし
audio	20130126-5	TK	20130126	0:14:34	談話書き起こし
audio	20130127-1	TN	20130127	0:29:59	動詞活用
audio	20130127-2	TK	20130127	1:15:16	談話書き起こし
audio	20130128-1	TI, TS, RT	20130128	0:32:22	ヤイチクドゥチ
audio	20130128-2	TI, TS, RT	20130128	0:46:28	ヤイチクドゥチ
audio	20130128-3	TI, TS, RT	20130128	0:50:17	ヤイチクドゥチ
audio	20130128-4	TI, TS, RT	20130128	0:01:48	じゃんけん
audio	20130128-5	TI, TS, RT	20130128	0:00:57	花いちもんめ
audio	20130128-6	TI, TS, RT	20130128	0:06:26	花いちもんめ
audio	20130128-7	TK	20130128	0:26:43	ヤイチクドゥチ書き起こし
audio	20130128-8	?	20130128	0:06:56	ホーラノマーヤ
audio	20130129-1	TT	20130129	1:50:46	昔の話
audio	20130129-2	TK	20130129	0:11:07	ヤイチクドゥチ書き起こし
audio	20130130	TT	20130130	1:06:58	タシキマタの話解説
video	IMGA0144	TK	20130125	0:02:52	自己紹介、昔の話
video	IMGA0146	KF	20130126	0:05:41	昔の話
video	IMGA0148	KF	20130126	0:12:56	昔の話
video	IMGA0151	TI	20130128	0:02:31	ヤイチクドゥチ
video	IMGA0152	TT	20130129	0:08:48	TT さんお話（米と粟と麦の話）
video	IMGA0153	TT	20130129	0:09:44	TT さんお話（継母の話）
video	IMGA0154	TT	20130129	0:06:50	おしゃべり
video	IMGA0155	TT	20130129	0:08:45	おしゃべり
video	IMGA0156	TT	20130129	0:10:44	おしゃべり
video	IMGA0157	TT	20130129	0:14:50	TT さんお話（羽衣伝説）
audio	20130326-1.wav	TT	20130326	1:25:31	タシキマタ（物語）
audio	20130326-2.wav	TT	20130326	0:48:49	継母の話の確認

表 1-5 現地調査のデータ（続き）

type	ファイル名	コンサルタント	日付	時間	調査内容
audio	20130326-3.wav	YM	20130326	1:14:12	オノマトペの確認
audio	20130327-1.wav	TN	20130327	0:27:19	動詞の活用
audio	20130327-2.wav	TN/TN2	20130327	0:34:19	動詞形容詞の活用・指示代名詞
audio	20130327-3.wav	TK	20130327	0:09:13	談話書き起こし
audio	20130327-4.wav	TK	20130327	1:17:56	継母の話書き起こし
audio	20130328.wav	TK	20130328	1:38:52	文法確認・継母の話書き起こし
audio	20130329-1.wav	TK	20130329	0:04:43	継母の話の確認
audio	20130329-2.wav	TK	20130329	1:12:28	継母の話の確認
audio	20130329-3.wav	TK	20130329	0:10:23	文法確認（敬語など）
audio	20130329-4.wav	TN	20130329	0:24:41	形容詞の活用
audio	20130714.wav	TS3, FS, YS	20130714	2:14:24	疑問、複数接辞
audio	20130805-1.WAV	TK	20130805	0:51:02	継母の話書き起こし
audio	20130805-2.WAV	TK	20130805	0:42:16	準体助詞接続の動詞活用
audio	20130805-3.WAV	TK	20130805	0:42:16	弥一さまの話（冒頭）
audio	20130806-1.WAV	TK2, CK, SM2, SM	20130806	1:01:36	自然談話
audio	20130806-2.WAV	TK2, CK, SM2, SM	20130806	0:42:09	自然談話
audio	20130807-1.WAV	TK	20130807	1:00:33	アクセント
audio	20130807-2.WAV	TK	20130807	0:55:46	アクセント
audio	20130808.WAV	TN	20130808	1:17:11	疑問文過去
audio	20130809-1.WAV	TN	20130809	0:22:28	疑問文現在
audio	20130809-2.WAV	KF, TN, TK	20130809	0:20:14	自然談話
audio	20130809-3.WAV	KF, TN, TK	20130809	0:12:39	自然談話
audio	20130809-4.WAV	KF, TN, TK	20130809	2:05:06	自然談話
audio	20130809-5.WAV	KF, TN, TK	20130809	0:09:37	自然談話
audio	20130809-6.WAV	KF, TN, TK	20130809	0:11:26	自然談話
audio	20130810-1.WAV	TK	20130810	0:00:51	疑問文現在、進行、可能
audio	20130810-2.WAV	TK	20130810	1:48:34	引用
audio	20130814-1.WAV	TN	20130814	0:43:51	形容詞疑問
audio	20130814-2.WAV	TN	20130814	0:03:21	
audio	20130816-1.WAV	TN	20130816	0:50:30	文法確認
audio	20130816-2.WAV	TK	20130816	1:17:56	動詞穴埋め
audio	20130816-3.WAV	TK	20130816	0:31:43	双数形
audio	20130327-2.wav	TN/TN2	20130327	0:34:19	動詞形容詞の活用・指示代名詞

表 1-6 現地調査のデータ（続き）

type	ファイル名	コンサルタント	日付	時間	調査内容
audio	20130327-3.wav	TK	20130327	0:09:13	談話書き起こし
audio	20130327-4.wav	TK	20130327	1:17:56	継母の話書き起こし
audio	20130328.wav	TK	20130328	1:38:52	文法確認・継母の話書き起こし
audio	20130329-1.wav	TK	20130329	0:04:43	継母の話の確認
audio	20130329-2.wav	TK	20130329	1:12:28	継母の話の確認
audio	20130329-3.wav	TK	20130329	0:10:23	文法確認（敬語など）
audio	20130329-4.wav	TN	20130329	0:24:41	形容詞の活用
audio	20130329-5.wav	TN2/TK2/SK2	20130329	0:05:05	ユンタク
audio	20130714.wav	TS3, FS,　YS	20130714	2:14:24	疑問、複数接辞
audio	20130805-1.WAV	TK	20130805	0:51:02	継母の話書き起こし
audio	20130805-2.WAV	TK	20130805	0:42:16	準体助詞接続の動詞活用
audio	20130805-3.WAV	TK	20130805	0:42:16	弥一さまの話（冒頭）
audio	20130806-1.WAV	TK2, CK, SM2, SM	20130806	1:01:36	自然談話
audio	20130806-2.WAV	TK2, CK, SM2, SM	20130806	0:42:09	自然談話
audio	20130807-1.WAV	TK	20130807	1:00:33	アクセント
audio	20130807-2.WAV	TK	20130807	0:55:46	アクセント
audio	20130808.WAV	TN	20130808	1:17:11	疑問文過去
audio	20130809-1.WAV	TN	20130809	0:22:28	疑問文現在
audio	20130809-2.WAV	KF, TN, TK	20130809	0:20:14	自然談話
audio	20130809-3.WAV	KF, TN, TK	20130809	0:12:39	自然談話
audio	20130809-4.WAV	KF, TN, TK	20130809	2:05:06	自然談話
audio	20130809-5.WAV	KF, TN, TK	20130809	0:09:37	自然談話
audio	20130809-6.WAV	KF, TN, TK	20130809	0:11:26	自然談話
audio	20130810-1.WAV	TK	20130810	0:00:51	疑問文現在、進行、可能
audio	20130810-2.WAV	TK	20130810	1:48:34	引用
audio	20130814-1.WAV	TN	20130814	0:43:51	形容詞疑問
audio	20130814-2.WAV	TN	20130814	0:03:21	
audio	20130816-1.WAV	TN	20130816	0:50:30	文法確認
audio	20130816-2.WAV	TK	20130816	1:17:56	動詞穴埋め
audio	20130816-3.WAV	TK	20130816	0:31:43	双数形
audio	20130817		20130817	1:56:59	
video	20130809-1	KF	20130809	0:06:51	
audio	20140117-1.WAV	TK	20140117	1:44:46	複数接辞

表 1-7 現地調査のデータ（続き）

type	ファイル名	コンサルタント	日付	時間	調査内容
audio	20140422-1.WAV	TS、RT	20140422	0:08:25	ヤイチクドゥチ解説
audio	20140422-2.WAV	TS、RT	20140422	0:21:05	ヤイチクドゥチ解説
audio	20140422-3.WAV	TS、RT	20140422	2:11:48	ヤイチクドゥチ解説
audio	20140422-4.WAV	TS、RT	20140422	0:03:24	ヤイチクドゥチ解説
audio	20140422-5.WAV	TS、RT	20140422	0:04:49	ヤイチクドゥチ解説
audio	20140422-6.WAV	YK、TN	20140422	0:23:53	雑談
audio	20140422-7.WAV	YK、TN	20140422	0:28:37	岬神社の由来
audio	20140425-4.WAV	KH	20140425	0:28:52	全集落調査票
audio	20140426.WAV	TN	20140426	1:06:15	戦争の話書き起こし
audio	20140427-1.WAV	KH	20140427	0:52:44	全集落調査票
audio	20140427-2.WAV	YK	20140427	0:59:14	岬神社の由来書き起こし
audio	20140427-3.WAV	YK	20140427	0:24:36	新聞記事の方言訳
audio	20140428-1.WAV	TT	20140428	1:24:28	米と麦と粟の姉妹書き起こし
audio	20140428-2.WAV	TT	20140428	0:04:46	米と麦と粟の姉妹書き起こし
audio	20140428-3.WAV	TT	20140428	0:03:01	米と麦と粟の姉妹書き起こし
video	20140422.mp4	YK	20140422	0:12:53	岬神社の由来
video	20140429-1.MP4	TN	20140429	0:14:23	skype
video	20140429-2.MP4	TN	20140429	0:03:47	skype
audio	20140622.wav	MF	20140622	1:03:50	接辞
audio	20140623-1.wav	MF	20140623	1:09:50	人称代名詞
audio	20140623-2.wav	MF	20140623	0:02:13	「天国と地獄の話」
audio	20140623-3.wav	MF	20140623	0:02:27	「東の家と西の家」
audio	20140623-4.wav	MF	20140623	0:12:11	昔の話
audio	20140624.wav	TN	20140624	0:50:26	KF さん談話書き起こし、談話
audio	20140625-1.wav	YM	20140625	0:43:54	「天国と地獄の話」書き起こし
audio	20140625-2.wav	YM	20140625	0:32:05	「東の家と西の家」書き起こし
video	20140626-1.mts	YK、TN	20140626	0:13:03	談話「明治 12 年次帳の話」
audio	20140626-1.wav	YK、TN	20140626	1:33:29	「岬神社の由来」書き起こし
video	20140626-2.mts	YK、TN	20140626	0:02:59	屋号の話
audio	20140626-2.wav	YK、TN	20140626	0:18:16	昔の話
video	20140626-3.mts	YK	20140626	0:07:20	岬神社にまつわる話②
video	20140626-4.mts	YK、TN	20140626	0:04:36	国頭の名前、標識の話
video	20140626-5.mts	YK、TN	20140626	0:03:33	雑談

表 1-8 現地調査のデータ（続き）

type	ファイル名	コンサルタント	日付	時間	調査内容
video	20140626-6.mts	YK、TN	20140626	0:29:12	雑談
audio	20140629-1.wav	YM	20140629	1:26:43	「タシキマタ」書き起こし
audio	20140629-2.wav	YM	20140629	0:41:03	「タシキマタ」書き起こし
video	20140630-1.mts	KF、TN	20140630	0:14:45	趣味の話、方言の確認
audio	20140630-1.wav	KF、TN	20140630	2:10:02	談話
video	20140630-2.mts	KF	20140630	0:14:34	紡績場での話
audio	20140630-2.wav	KF、TN2	20140630	0:06:39	談話
video	20140630-3.mts	TN、TS2、KF	20140630	0:02:11	skype でのお喋り
audio	20140630-3.wav	TN	20140630	0:48:33	「トイレの話」書き起こし
video	20140630-4.mts	TN、TS2、KF	20140630	0:03:03	skype でのお喋り
audio	20140630-4.wav	TN、TS2、KF	20140630	1:17:27	skype でのお喋り
video	20140630-5.mts	TN、TS2、TN2	20140630	0:01:43	skype でのお喋り
audio	20140630-5.wav	KF、TN2	20140630	0:47:10	昔の話（家族、土地）
audio	20140701.wav	大勢	20140701	1:10:22	徳洲会
video	20140702-1.mts	TT	20140702	0:09:51	月の一本足の姉妹の話
audio	20140702-1.wav	YM	20140702	0:44:00	アクセント
video	20140702-2.mts	TT	20140702	0:29:45	ヌンギバナシ、昔の生活
audio	20140702-2.wav	TT	20140702	3:20:05	民話、昔の話
video	20140702-3.mts	TT	20140702	0:03:13	手が痛くなった時のおまじない、腫物を治すおまじない
audio	20140702-3.wav	TT	20140702	0:13:51	おまじない
audio	20150113-1.wav	YM	20150113	2:15:58	天女物語書き起こし
audio	20150113-2.wav	YK、SK、TN	20150113	1:19:52	昔の話
audio	20150113-3.wav	TN	20150113	0:36:30	天女物語書き起こし
audio	20150113-4.wav	YM	20150113	0:07:53	喉頭化音の区別
audio	20150113-5.wav	YK、SK、TN	20150113	0:11:01	昔の話（国盗り 2:48 まで）
audio	20150113-6.wav	YK、SK、TN	20150113	0:05:38	昔の話
audio	20150114-1.wav	TN、YK	20150114	0:13:14	書き起こしなど（全体）
audio	20150114-2.wav	TN、YK	20150114	1:14:14	やーみし、岬神社書き起こし
audio	20150114-3.wav	TN、YK	20150114	0:20:05	再婚の話
audio	20150115.wav	TN	20150115	0:58:23	やーみし書き起こし
audio	20150714-1.wav	TS2	20150714	1:36:00	国盗り書き起こし
audio	20150714-2	TS2	20150714	0:08:40	国盗り書き起こし

表 1-9 現地調査のデータ（続き）

type	ファイル名	コンサルタント	日付	時間	調査内容
audio	20150714-3	TS2	20150714	0:30:51	行くアスペクト
audio	20150802.wav	TN	20150802	0:37:31	喉頭化音の区別
video	20150802-1.wav	TN	20150802	0:00:27	喉頭化音の区別
video	20150802-2.wav	TN	20150802	0:01:31	喉頭化音の区別
video	20150802-3.wav	TN	20150802	0:00:50	喉頭化音の区別
video	20150802-4.wav	TN	20150802	0:02:22	喉頭化音の区別
video	20150802-5.wav	TN	20150802	0:00:32	喉頭化音の区別
video	20150802-6.wav	TN	20150802	0:00:17	喉頭化音の区別
audio	20150803-1.wav	YK	20150803	0:31:53	イントネーション
audio	20150803-2.wav	YK	20150803	0:19:49	中舌母音
audio	20150803-3.wav	TN	20150803	0:13:48	イントネーション
audio	20150803-4.wav	YK、TN	20150803	0:13:39	教育振興会の話
audio	20150803-5.wav	YK	20150803	0:05:27	昔の話
audio	20150804-1.wav	TN	20150804	0:04:31	喉頭化子音
audio	20150804-2.wav	KF	20150804	0:34:44	アクセント
audio	20150804-3.wav	KF、TN、TN2	20150804	2:16:17	アクセント、雑談
audio	20150804-4.wav	KF、TN、TN2	20150804	0:14:45	雑談
audio	20150806-1.wav	TN	20150806	0:24:08	イントネーション
audio	20150806-2.wav	TN	20150806	0:17:40	イントネーション
audio	20150806-3.wav	TN	20150806	1:16:48	アクセント
audio	20150807.wav	TN	20150807	0:10:22	母音、イントネーション
audio	20160907-2.wav	KF、TN	20160907	0:22:09	塩の作り方→塩一升の説明→訳
audio	20160907-3.wav	KF、TN	20160907	0:37:00	塩一升の運訳
audio	20160907-4.wav	KF、TN	20160907	0:20:05	塩一升の運訳
audio	20160909-1.wav	KF、TN	20160909	1:13:54	塩一升の運訳
audio	20160909-2.wav	KF、TN	20160909	0:03:12	「シルゴイゴイ」
audio	20160911-1.wav	YK、TN	20160911	0:20:50	
audio	20160911-2.wav	YK、TN	20160911	0:29:01	
audio	20160911-3.wav	YK、TN	20160911	0:10:26	
video	20160911-1	YK、TN	20160911	0:08:28	字誌『塩一升の運』
video	20160911-2	YK、TN	20160911	0:12:16	麦の祝い、竹細工

表 1-10　Skype 調査のデータ

ジャンル	データ名	コンサルタント	日付	時間
audio(Skype)	20141003_1	TN	20141003	0:10:00
audio(Skype)	20141003_2	TN	20141003	0:10:00
audio(Skype)	20141003_3	TN	20141003	0:57:04
audio(Skype)	20141004	TN	20141004	0:51:37
audio(Skype)	20141102	TN	20141102	0:32:12
audio(Skype)	skype20141118	TN	20141118	0:53:51
audio(Skype)	20141215	TN	20141215	1:00:00
audio(Skype)	Skype150329	TN	20150329	0:50:27
audio(Skype)	20150405	TN	20150405	1:00:00
audio(Skype)	20150405-2	TN	20150405	0:09:02
audio(Skype)	skype20150412	TN	20150412	0:33:19
audio(Skype)	skype20150412-2	TN	20150412	0:07:52
audio(Skype)	skype20150412-3	TN	20150412	0:05:58
audio(Skype)	skype20150412-4	TN	20150412	0:18:54
audio(Skype)	20150419-1	TN	20150419	0:03:19
audio(Skype)	20150419-2	TN	20150419	1:00:00
audio(Skype)	20150419-3	TN	20150419	0:10:14
audio(Skype)	Skype20150426-1	TN	20150426	0:18:57
audio(Skype)	Skype20150426-2	TN	20150426	0:29:38
audio(Skype)	Skype20150510	TN	20150510	0:09:11
audio(Skype)	Skype20150510_2	TN	20150510	0:36:45
audio(Skype)	Skype20150510_3	TN	20150510	0:18:03
audio(Skype)	Skype20150517-1	TN	20150517	1:00:00
audio(Skype)	Skype20150517-2	TN	20150517	0:03:28
audio(Skype)	Skype20150601-1	TN	20160601	0:07:41
audio(Skype)	Skype20150601-2	TN	20160601	0:02:18
audio(Skype)	Skype20150601-3	TN	20160601	0:35:11
audio(Skype)	Skype20150601-4	TN	20160601	0:09:06
audio(Skype)	Skype20150601-5	TN	20160601	0:07:35
audio(Skype)	Skype20150607-1	TN	20160607	0:04:27
audio(Skype)	Skype20150607-2	TN	20160607	0:03:01
audio(Skype)	Skype20150614	TN	20150614	1:00:28
audio(Skype)	Skype20150621	TN	20150621	0:08:56

表 1-11　Skype 調査のデータ（続き）

audio(Skype)	Skype20150621-2	TN	20150621	0:01:00
audio(Skype)	Skype20150621-3	TN	20150621	0:55:40
audio(Skype)	Skype20150628	TN	20150628	0:36:01
audio(Skype)	Skype20150628-2	TN	20150628	0:13:16
audio(Skype)	Skype20150706	TN	20150706	1:00:51
audio(Skype)	Skype20150706-2	TN	20150706	0:30:10
audio(Skype)	Skype20150727	TN	20150727	0:48:17
audio(Skype)	Skype20150913_1	TN	20150913	0:02:48
audio(Skype)	Skype20150913_2	TN	20150913	1:05:37
audio(Skype)	Skype20150913_3	TN	20150913	0:00:57
audio(Skype)	Skype20150920_1	TN	20150920	0:00:15
audio(Skype)	Skype20150920_2	TN	20150920	0:59:38
audio(Skype)	Skype20150927	TN	20150927	1:01:47
audio(Skype)	Skype20151004_1	TN	20151004	0:36:45
audio(Skype)	Skype20151004_2	TN	20151004	0:19:15
audio(Skype)	Skype20151012	TN	20151012	0:54:29
audio(Skype)	Skype20151025-1	TN	20151025	1:01:44
audio(Skype)	Skype20151025-2	TN	20151025	0:01:07
audio(Skype)	Skype20151102	TN	20151102	0:30:55
audio(Skype)	Skype20151108	TN	20151108	0:46:44
audio(Skype)	Skype20151129_1	TN	20151129	0:41:14
audio(Skype)	Skype20151129_2	TN	20151129	0:09:53
audio(Skype)	Skype20151129_3	TN	20151129	0:05:18
audio(Skype)	Skype20151206	TN	20151206	0:54:27
audio(Skype)	Skype20151220	TN	20151220	1:03:14
audio(Skype)	Skype20160227	TN	20160227	0:51:40
audio(Skype)	Skype20160302	TN	20160332	0:55:57
audio(Skype)	Skype20160308	TN	20160308	0:50:13
audio(Skype)	Skype20160315	TN	20160315	0:48:57
audio(Skype)	Skype20160602	TN	20160602	0:32:58
audio(Skype)	Skype20160609	TN	20160609	0:40:56
audio(Skype)	Skype20160615	TN	20160615	0:22:53
audio(Skype)	Skype20160622	TN	20160622	0:37:16
audio(Skype)	Skype20160802	TN	20160802	0:48:25

表 1-12　Skype 調査のデータ（続き）

audio(Skype)	Skype20160817	TN	20160817	0:53:22
audio(Skype)	Skype20160901	TN	20160901	0:42:33
audio(Skype)	Skype20161006	TN	20161006	0:23:36
audio(Skype)	Skype20161021-1	TN	20161021	0:07:20
audio(Skype)	Skype20161021-2	TN	20161021	0:11:26
audio(Skype)	Skype20161025	TN	20161025	1:17:42
audio(Skype)	Skype20161101	TS	20161101	1:15:49
audio(Skype)	Skype20161111	TN	20161111	1:52:04
audio(Skype)	Skype20161117	TN	20161117	1:19:56
audio(Skype)	Skype20161201	TN	20161201	0:38:18
audio(Skype)	Skype20161208	TN	20161208	0:53:13
audio(Skype)	Skype20161215	TN	20161215	1:00:06
audio(Skype)	Skype20170112	TN	20170112	0:47:17
audio(Skype)	Skype20170126	TN	20170126	0:41:29
audio(Skype)	Skype20170206	TN	20170206	0:51:48
audio(Skype)	Skype20170222	TN	20170222	0:47:20

1.3　表記のルール

1.3.1　音韻表記

音素の認定については、3 章 1 節「音素」で述べる。表記に用いる音素は、以下の通りである。/a//i//u//e//o//j//w//p//b///t//d//n//k//g//ʔ//m//M//N//r//f//s//z//c//h/

1.3.2　例文表記

例文は、(1-2) で規定する内容を 4 段で示す。例文の表記は (1-3) にしめすルールに従う。このルールは Max Planck Institute (2015) The Leipzig Glossing Rules に準拠している。

(1-2)　例文の段

1 段目：表層形

2 段目：基底形

3 段目：グロス（内容語は日本語訳、機能語は文法カテゴリー）

4 段目：日本語訳

(1-3)　表記のルール

a. 語ごとにスペースを入れる。

b. 形態素を-で区切る。

c. 複合語は、複合要素を+で区切る。

d. 文法カテゴリーのラベルを英字大文字で振る。

e. 1 つの形態素に複数のラベルがある時は「.」で繋げる。

1.3.3　本文中の表記

本文で、動詞や形容詞に言及する時、特別の理由のない限り、基底形を用いてそれらを指し示す。その際、基底形の語根を「*X」と表示する。例えば、「書く」という動詞の基底形の語根は hak なので、*hak と記す。

1.3.4　略号一覧

例文のグロスで用いる略号は、表 1-13 の通りである。

表 1-13　略号一覧

略号	機能	日本語訳	略号	機能	日本語訳
ABL	ablative	奪格	IMP	imperative	命令
ACC	accusative	対格	IND	indicative	直説
ADD	additional	付加	INS	instrumental	具格
ADJ	adjective	形容詞	INT	intentional	意図
ADN	adnominal	連体	LIM	limitative	限界格
ALL	allative	向格	LOC	locative	場所格
APPR	approximant	近似	MRT	mirativity	意外性
CAUS	causative	使役	MSB	*kakari-musubi*	係り結び
CMP	comparative	比較格	NEG	negation	否定
CNC	concessive	逆接	NOM	nominative	主格
COMP	complementizer	補文標識	NPST	non-past tense	非過去
COM	comitative	共格	PASS	passive	受動
COND	conditional	条件	PL	plural	複数
CONF	confirmation	確認	POL	politeness	丁寧
CONT	continuous	継続相	POT	potential	可能
COP	copula	コピュラ	PST	past tense	過去
CSL	causal	原因	Q	question	疑問
DAT	dative	与格	QT	quotative	引用
DU	dual	双数	REFL	reflexive	再帰代名詞
EMPH	emphasis	強調	REP	reported	伝聞
ENU	enumerative	列挙	SEQ	sequential	継起
EPI	epistemic	認識	SFP	sentence final particle	終助詞
EVD	evidential	証拠	SG	single	単数
FIL	filler	フィラー	TERM	terminative	終局格
EXM	exemplative	例示	TOP	topic	主題
EXP	explanation	説明	YNQ	yes-no question	肯否疑問
FOC	focus	焦点	WHQ	wh-question	内容疑問
GEN	genitive	属格	1	first person	一人称
HON	honorative	尊敬	2	second person	二人称
			3	third person	三人称

2章　　言語の概要

2 章では、沖永良部語、及び国頭方言の言語の概要を述べる。2.1 節で地理・系統・文化、2.2 節で話者数と危機の度合いについて述べ、2.3 節で主要な先行文献をまとめる。

2.1　地理・系統・文化

2.1.1　地理

沖永良部島は奄美諸島の南西部に位置する面積 93.63 ㎢、人口約 14000 人の島である。行政は鹿児島県大島郡和泊町、知名町の 2 町からなり、島内には 42 の字（集落）がある。本稿で記述の対象とする国頭集落は島の最東部に位置する。国頭集落は人口約 1000 人、島内で第三の人口規模を誇る比較的大きな集落である。

図 2-1 沖永良部島の位置

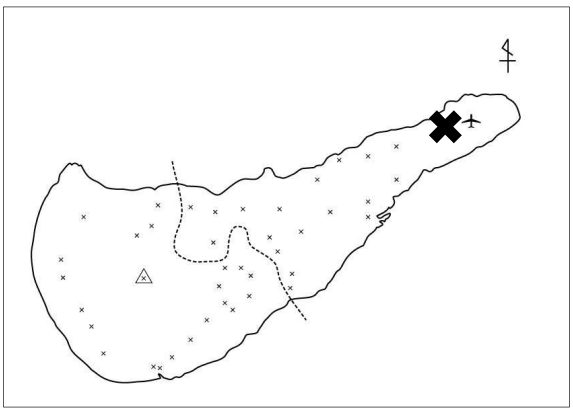


図 2-2 国頭集落の位置（×印）

2.1.2　系統

琉球諸語は日本語と系統関係が証明されている唯一の言語群である。日本祖語と琉球祖語は少なくとも 7 世紀以前に分岐したと考えられている (Pellard 2015) 。琉球諸語（方言） は大きく北琉球諸語と南琉球諸語に分類することが出来る（平山 1966、上村 1972, Pellard 2015 など多数)。沖永良部諸方言は北琉球諸語に属するが、北琉球諸語内部での位置づけについては、(a) 奄美語（方言）の一部とする立場（平山 1966, Pellard 2015, ローレンス 2006）と、(b) 沖縄北部・与論方言との連続性を主張する立場（上村 1972, 狩俣 2000, Mosely 2010）がある。以下、それぞれ代表的な論者と根拠について概略する。

2.1.2.1　奄美語（方言）の一部とする立場

奄美語（方言）の一部とする立場においては、北琉球諸語は、大きく奄美語（方言）と沖縄語（方言）に分類される。

(a) 平山（1966）

平山（1966）では奄美方言と沖縄方言の分類基準は明示されていない。ただ、奄美方言と沖縄方言の差異について、①母音体系の違い：奄美方言には中舌母音があるが沖縄方言にはない、②動詞終止形の違い：終止形末尾に ri, r, 'i（i 系）と mu, m, 'N（m 系）があり、奄美諸方言には i 系の形式があるが沖縄方言には m 系のみだけある、といった違いが述べられている。ここで注意が必要なのは、奄美方言の中でも沖永良部・与論方言は、中舌母音がなく、終止形末尾も m 系のみを持つ（つまり沖縄方言の特徴と変わらない）と指摘されていることである。

平山（1966）の議論の中心は、奄美方言を代表する奄美大島・徳之島方言と沖縄諸方言の差異であり、沖永良部島・与論島は、地理的に奄美群島に属することから、奄美方言群に分類されたと思われる。

(b) Pellard (2015)

Pellard (2015) は、共通の改新 (recursion) に基づいた、分岐学的な手法に基づく比較言語学の手法を用いて、Amamai（奄美語）と Okinawa（沖縄語）を分類している。

「改新」とは、共通の祖語が受けた新しい言語変化を指す。2 つの方言が同一の言語変化を被っているとき、以下の 3 つの可能性が考えられる。(a) 2 つの方言に、並行的、或いは偶然に複数の方言で同じ変化が起きた。(b) 一方の方言で変化が起こり、別の方言に借用された。(c) 祖語の段階で変化が起こり、その跡が各方言に残った。「系統」とは、共通の祖語を持つ言語（方言）間の関係性を表すものであり、従って系統による言語群の存在を裏付けるのは (c) の言語変化である。

系統による言語群を検討する時には、(a) の可能性を排除するために、「比較的珍しい変化（不規則変化)」を手掛かりにする。そのうえで、(b) の可能性を排除するために、地理

的分布を考慮する。ある方言から別の方言へと借用が広がった場合には、交通の便が悪い孤立集落のみ、その変化を受けていない可能性がある。しかし、孤立集落においても同じ言語変化が観察される場合には、借用によって広がった可能性は低く、その変化は祖語の段階で起きたものと考えられる（以上、ローレンス 2006: 101 を参照）。

Pellard (2015) によると、Amami（奄美語）を特徴づける改新として、①変則的な母音変化（*u>a, *kakozu「あご」> kʰaxadzɨ（大和浜）ka:dzɨ（和泊）など）、② 基礎語彙に見られる独特の語形（「ほこり」ɸuɸuŋ（大和浜）pu:mu:（与論）、沖縄諸方言は pʰukui など *pokori 系）がある。

また、Okinawa（沖縄語）を特徴づける改新として、①基礎語彙における変則的な母音の長音化（*kame「亀」 >ha:mi:（今帰仁）ka:mi:（首里））、②基礎語彙における変則的な母音変化（*a>o, *pato「はと」> po:tu:（今帰仁）ho:tu:（首里））、③基礎語彙における意味変化（*pago“不味い”>”汚い”）がある。

なお、後述する「南奄美－北沖縄グループ」、もしくは「国頭語」を想定する説は、母音体系と*k や p*の子音弱化を分類の根拠にしているが、それらは地域特性か各方言で並行的に発生した可能性があり、仮説を支える論拠にはならないとしている。

2.1.2.2 沖縄北部・与論方言との連続性を主張する立場

沖縄北部・与論方言との連続性を主張する立場では、北琉球諸語は、(a) 喜界島・奄美大島・徳之島、(b) 沖永良部島・与論島・沖縄北部、(c) 沖縄中部以南の沖縄島、に分類される。

(a) 上村（1972）

上村（1972：319-320）では、北グループ（北琉球方言）の下位区分として(1) 喜界島方言 (2) 奄美大島北部方言 (3) 奄美大島南部方言 (4) 徳之島方言 (5) 沖永良部島方言 (6) 与論島方言 (7) 沖縄北部方言 (8) 沖縄南部方言があるとした上で、2，3，4（奄美大島・徳之島）には共通の音韻体系があり「大きな方言圏とみなすこともできる」、5，6，7（沖永良部島・与論島・沖縄北部）は、中舌母音を持たず共通の子音特性を持つ（k>h への変化、ハ行音の唇音性の保持）から「ゆるやかな共通性をもったひとつの地域」としている。また 1（喜界島）については 5，6，7（沖永良部島・与論島・沖縄北部）と音韻的に類似しているとし、8（沖縄南部）は母音体系は 5，6，7 に似ているものの子音における特徴が大きく異なるとしている。

上村（1972）では北琉球方言の下位区分について明言しているわけではないが、記述の内容から、(a) 奄美大島北部・南部、徳之島 (b) 沖永良部島・与論島・沖縄北部・喜界島 (c) 沖縄南部　というグループ分けが可能であることを示唆している。

(b) Mosely (2010)

UNESCO の Atlas of the World's languages in danger「危機言語地図」では琉球諸語を奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の 6 つの言語に分けており、このうち「国頭語」に当たるのが沖永良部・与論・沖縄北部方言である。言語の分類基準については明示されていないが、上村（1972）等で指摘される沖永良部・与論・沖縄北部方言の類似性や、かつて北山王国[4]の支配圏であったという歴史的背景が考慮された可能性がある。UNESCO の「危機言語地図」発表以後、沖永良部方言を「国頭語」の一部として位置付ける報告が増えている（木部 2014 など）。

2.1.2.3　本稿の立場

先行研究における琉球諸方言の分類は、(a) 比較言語学的手法を用いた系統分類と（Pellard 2015, ローレンス 2006）と、(b) 共時的な言語特徴の類似性に基づく分類（平山 1966、上村 1972、狩俣 2000）の、異なる基準に基づく分類が混在している。

本稿では両者を区別し、通時的な「系統」の分析としては、Pellard (2015)、ローレンス（2006）の分析を採用する。すなわち、沖永良部語は系統的には奄美語の下位分類であると考える。但し、Pellard (2015), ローレンス（2006）に問題がない訳ではない。Pellard (2015) では、与論島以北では「亀」の第一音節を hami と伸ばさずに発音するが、沖縄島以南では ha:mi:と長音化することを「沖縄語グループ」を想定する根拠としている。しかし、国頭方言でも「亀」は ha:mi:と延ばすため、この基準からは「沖縄語グループ」の一部になってしまう。Pellard (2015) で挙げられた他の基準において、沖永良部語は「奄美語グループ」の特徴を有し、「沖縄語グループ」の特徴を有さない。このため、総合的に沖永良部語を奄美語グループの下位分類とする説は依然として妥当だと考えるが、Pellard (2015), ローレンス（2015）の基準には一部修正の余地がある。

一方で、こうした通時的な「系統」による分類とは別に、共時的な言語特徴としては、上村（1972）、狩俣（2000）等が指摘するように、沖永良部語は音韻的にも、形態的にも沖縄諸語（特に沖縄北部方言）と近い特徴を持っている（これらは、Pellard 2015, ローレンス 2006 によれば、祖語における古形を保持した結果か、あるいは並行的な変化の結果と解釈される）。この「共時的な言語特徴の近さ」と関連があると考えられるのが、近年言語と方言を区別する指標として用いられている「相互理解性（mutual intelligibility）」の概念である。

「相互理解性」とは、「2 つの異なる言語を話す話者が、どれほどお互いの言語を理解できるか」を基準に、相互理解性が高ければ「同一言語」、低ければ「別言語」と認定するものである。2016 年より、琉球諸方言の相互理解性を言語実験によって測る研究が進んで

[4] 14 世紀初頭から 15 世紀初頭まで、沖縄本島今帰仁村を中心に存在したとされる。1416 年に、中山王国の尚巴志王によって統一され、琉球王国が成立する。

いるが[5]、仮に沖縄北部～沖永良部までの諸方言が高い相互理解性を有している場合、沖永良部（および与論）の諸方言は、系統的には他の奄美諸島の諸方言とともにひとつの言語群（すなわち「奄美語」）を構成するにも関わらず、共時的には沖縄本島北部の諸方言とともにひとつの言語（すなわち「国頭語」）を構成する可能性がある。

2.1.3　文化・産業

沖永良部島の第一次産業：第二次産業：第三次産業の就業者数は 3:1:5 である。産業の中心は農業で、おもな農産物は花卉、サトウキビ、ジャガイモ、サトイモなどの根菜類である。農産物の生産には歴史的変遷があり、古くは米栽培が農業の中心であったが、17 世紀以降は薩摩藩に強制されサトウキビ栽培が中心となる。近代になってからは花卉栽培が興隆し、大正期にはユリ、昭和期にはフリージアの栽培が盛んであったが、現在ではより換金性の高いキク等の栽培に移行している。

特筆すべき文化として、島唄・踊りなどの伝統芸能と、祖先信仰に基づく年中行事の存在が挙げられる。年中行事のうち特に大きな行事として先祖の墓前で親戚が集まる墓正月、祖霊が祖神となって昇天する 33 年忌祭がある。33 年忌祭は奄美・沖縄の中でも沖永良部島独特の行事とされる（高橋 2006: 94）。また、沖永良部島は説話の宝庫とされ岩倉市朗（1940）『沖永良部島昔話』など昔話集があるほか、ユタの口伝である「島建てシンゴ」という創世神話が有名である。こうした昔話や島唄は言語を知るうえでも貴重な資料となる。

[5] トヨタ財団共同研究「多文化・多言語社会としての日本の理解－消滅危機言語の相互理解性と世代間継承度のための客観的尺度の創出―」代表：山田真寛氏。

2.2　話者数と危機の度合い

2.2 節では、沖永良部語の話者数と危機度の度合いについて論じる。言語の危機度を測定するために様々な指標が出されているが、ここでは UNESCO (2003) の Language Vitality and Endangerment （言語の体力測定）に従って、沖永良部語の危機度の判定を行う。Language Vitality and Endangerment では言語の危機度を測るための 9 基準が提示されており、それぞれ 6 段階の評価基準が設けられている。それぞれの項目についての訳（訳は筆者による）と、沖永良部語の判定を 2.2.1 以降に記す。なお判定にあたってアンケートなどの量的調査は取っておらず、あくまで筆者のフィールドワーク経験から概算した結果である。

2.2.1　9 項目による判定

2.2.1.1　言語の世代間継承 (Intergenerational language transmission)

項目 1 では言語が世代間でどのように継承されているかを問題とし、その基準として話者がどの世代であるかを答える内容となっている。

0．話者はいない
1．曹祖父母以上の、非常に限られた人に使用されている
2．祖父母の世代以上に使用されている
3．親以上の世代に使用されている
4．一部の子供たちに、全ての場面で使用されている。もしくは、全ての子供たちに一部の場面で使用されている。
5．全ての世代に使用されている。

沖永良部語の中でも、集落毎に多少の差があるが、国頭方言においては主に祖父母よりも上の世代が伝統言語を話している。このため、評価は 2（祖父母の世代以上に使用されている）とする。

2.2.1.2　母語話者数 (Absolute Number of Speakers)

項目 2 は話者数の概算を行う。沖永良部島の人口は 2010 年の時点で 13920 人、65 歳以上人口は約 4000 人である。筆者の調査経験では流暢な話者は 50 代後半～60 代以上であり[6]、島外からの移住者や個人差も考慮すると、沖永良部島語の話者人口は 5000 人ほどと思われる。なお、同時点の国頭集落の人口は 1049 人、55 歳以上[7]の人口は 535 人なので国頭

[6] 但し「流暢に地域言語を話すことはできないが、地域言語をほぼ完全に理解することが出来る」という「潜在話者（山田 2015）」は、40 代まで存在する。

[7] 資料上の制約により、沖永良部島の人口と、国頭集落の人口の比較年代が異なる。

方言の話者は 500～600 人ほどと推定できる。

2.2.1.3　人口に占める話者の割合 (Proportion of Speakers within the Total Population)

項目 3 は人口に占める話者の割合を評価する。

1. 話者がいない
2. 話者は少数派である
3. 話者は多数派である
4. 話者は大多数である
5. 全員が話者である

項目 2 の概算により話者人口は 5000 人ほどと推定しており、島の全人口は約 14000 人なので評価は 2（話者は少数派）である。

2.2.1.4　言語使用場面 (Trends in Existing Language Domain)

項目 4 では言語がどのような場面で使用され、どのような社会的機能を持っているかについて判定する。

0. 使用される場面はない。
1. 非常に限られた場面と目的のために用いられる。
2. 限られた場面と目的のために用いられる。
3. 家庭で使用されるが、支配言語が家庭でも使われ始めている。
4. 2 つ以上の言語がすべての場面で全ての目的のために使用される。
5. 全ての場面で全ての目的のために使用される。

沖永良部語が用いられている場面として、集落内での会話（ただし集落の方言が話せる 60 代以上に限る）、伝統芸能、島唄などの行事が挙げられる。このため評価は 2（限られた場面と目的の為に用いられる）とする。

2.2.1.5　新たな場面での言語使用 (Response to New Domains and Media)

項目 5 では学校、職場、メディアなど伝統的な生活場面以外で言語が使用される範囲を評価する。

0. 新しい場面では使用されない。
1. 限られた新しい場面で使用されている。
2. 幾つかの新しい場面で使用されている。

3．多くの新しい場面で使用されている。
4．殆どの新しい場面で使用されている。
5．全ての新しい場面で使用されている。

沖永良部語を新しい生活場面で使用する動きは非常に限られている。ただし、ラジオのコーナーや、「島ムニ大会」などの行事、LINE などのソーシャルネットワークで限定的ながら使われ始めているため、評価は 1（限られた新しい場面で使用されている）とする。

2.2.1.6　教育の為の言語資料と書記法 (Materials for Language Education and Literacy)

項目 6 は教育に利用できる言語資料の量と、書記法の存在（浸透度）を評価する。

0．書記法がない
1．可能な書記法が存在することは知られており、それによって書かれた言語資料が存在する。
2．言語資料は存在するが、コミュニティの非常に限られたメンバーしか使用できず、他の人々にとって日常的なものではない。読み書きの教育は学校のカリキュラムに組み込まれていない。
3．言語資料が存在し、子供たちは学校でそれらに触れる機会がある。文章における言語の使用は奨励されていない。
4．言語資料が存在し、子供たちは学校でその言語の読み書きを学ぶことが出来る。行政文章では使用されていない。
5．確立された書記法があり、辞書、文法書、テキスト、文学、メディアで伝統的に使用されてきた。行政や教育の場でその言語の書き言葉が使用されている。

沖永良部語の言語資料は、研究資料や、町誌に書かれた方言資料、島唄の歌詞など限られており、全てのメンバーに行き渡っているとは言えない。沖永良部語を特別に表記する書記法はないが、日本語かな表記で比較的多くの音声をカバーすることが出来る。評価は言語資料に焦点を当て、2（言語資料は限られたメンバーにしか使用できない）とする。

2.2.1.7　国の言語政策 (Government and Institutional Language Attitudes and Policies)

項目 7 では少数言語に対する国の政策を評価する。

0．少数言語は禁止されている
1．支配言語が唯一の公用語であり、それ以外は認知されていない。
2．支配言語への同化が推奨されており、少数言語を保護する政策はない。
3．少数言語に対する明確な言語政策はない。公的場面では支配言語が広く用いられてい

る。
4. 少数言語は私的な場面で保護されている。
5. 全ての言語が保護されている。

日本の公用語は日本語であり、公的場面では日本標準語が広く用いられている。国内には琉球諸語の他にアイヌ語といった少数言語も知られているが、今のところ少数言語に対する明確な言語政策は存在しない。かつては教育場面において方言の矯正が行われ、琉球諸島においても罰則を伴う標準語教育がなされたが、現在は標準語を使用する能力を持ちながら、地方の伝統的な言語にも親しむことが奨励されている。このため、評価は 3（少数言語に対する明確な言語政策はない）とする。

2.2.1.8 コミュニティメンバーの言語への態度 (Community Member's Attitudes toward Their Own Language)

項目 8 ではコミュニティ・メンバーの言語への態度を評価する。

0. 誰も言語の衰退に興味がない、もしくは全てのメンバーが支配言語をより好んでいる
1. 少数のメンバーだけが言語維持を支持しており、多くの人は無関心か言語が使用されなくなることを望んでいる
2. 言語維持を望んでいるメンバーもいるが、無関心、もしくは言語が使用されなくなることを望んでいるメンバーもいる
3. 多くのメンバーが言語維持を望んでいるが、他のメンバーは無関心か、言語が使用されなくなることを望んでいる
4. 殆どのメンバーが言語の維持を望んでいる
5. 全てのメンバーが言語の価値を認め、使用が推奨されることを望んでいる

これまでの現地調査では、沖永良部語へのコミュニティの意識は非常によく、多くの人が当該言語を大切に思い次世代に継承したいと考えているように見える。但し、言語の復興や継承を現実的だと考えている人は少ないため、評価は 3（多くのメンバーが言語維持を望んでいるが、他のメンバーは無関心）とする。

2.2.1.9 言語記録の質と量 (Amount and Quality of Documentation)

項目 9 は言語記録の質と量を評価する。

0. 使用可能な言語資料が存在しない
1. 少数の文法スケッチ、語彙リスト、わずかなテキストが存在する。音声・映像は存在しないか利用できない

2．限られた言語学的研究のための、幾つかの文法スケッチ、語彙リストが存在するが非包括的である。音声・映像は存在するが質にはばらつきがあり、注釈がないものもある
3．一定の質・量の文法記述、辞書、テキストが存在するが、日常的なメディアはない。音声・映像は存在するが、その質にはばらつきがある
4．質の良い文法記述 1 つの他に、良い文法記述、辞書、テキスト、文学作品、時折更新される日常的なメディアがあり、注釈つきの音声・映像資料が一定数存在する
5．包括的な文法記述、辞書、定期的に更新される十分な量のテキストが存在する。注釈付きの豊富な音声・映像が存在する

沖永良部語の研究は伝統的な琉球諸方言の研究で行われてきたが、その対象は音韻体系、動詞の活用など部分的なものであった。文法スケッチとして、Van der Lubbe and Tokunaga (2015) があるが、コミュニティメンバーに利用可能な状態とは言い難い。音声・映像は幾つかインターネット上で公開されている。このため、評価は 2（限られた言語学的研究のための、幾つかの文法スケッチ、語彙リスト、音声・映像が存在する）とする。

2.2.2 総評

9 項目の平均得点は 2.1 であり、沖永良部語の状態は「非常に危機的」と言える。特に得点が低いのは項目 5．新しい場面での言語使用であり、今後沖永良部語を再活性化するためには、言語使用場面の獲得が最も重要な点になると思われる。

なお、沖永良部方言の危機度合の判定は木部（2014）でも試みられており、その結果は平均 2.25-2.38 と筆者のものよりやや高い。木部（2014）では伝統的な言語の話者を 45 歳以上としていることから、この差が生まれたものと思われる。

2.3　主要な先行研究

2.3 節では、沖永良部語の主要な先行研究についてまとめる。琉球諸語の中でも、沖縄諸方言や先島諸島の言語が多くの研究者によって調査されて来たのに比べ、奄美諸島の言語の研究は蓄積が少ない。特に沖永良部語（方言）は他方言との比較の中で言及されることが中心で、沖永良部語自体が研究の中心になることは少なかった。

現在公開されている、沖永良部語の最も包括的な先行研究は、平山（1986）および Van der Lubbe and Tokunaga (2015) である[8]。平山（1986）は島内 4 地点（国頭、和泊、瀬利覚、田皆）の音韻・形態・統語論の一部（助詞の体系）について概説している。Van der Lubbe and Tokunaga (2015) では、島内 2 地点（国頭、正名）の音韻・形態・統語・語用論について概要を示している。また、国立国語研究所（2016）が沖永良部における合同調査の結果を報告しており、島内 4 地点（国頭、出花、瀬利覚、田皆）における基礎語彙リスト（544 語）と基礎的な文法体系が分かる文例（74 文）の方言訳を公開している。

上記の先行研究とは別に、音韻分野の研究は比較的進んでいる。音韻体系については中本（1976）、平山（1986）に琉球諸語（方言）と比較した記述があり、アクセントは上野 (1998a, 1998b, 1999, 2004a, 2004b, 2005, 2006a, 2006b, 2006c, 2007, 2008a, 2008b）で基礎語彙、動詞の活用形のアクセント資料が報告されている。また、松森（2000）が島内 4 地点（国頭、和泊、知名、田皆）のアクセント体系の解釈を行っている他、高山（2013）に国頭方言アクセントに関する詳細な記述がある。

形態分野の研究は内間（1984）に代名詞の体系、平山（1966）、平山（1986）に代名詞、動詞・形容詞のパラダイムについて記述がある。

統語分野については、格助詞やとりたて助詞についての記述はあるものの（平山 1986）統語構造全体を扱ったものは Van der Lubbe and Tokunaga (2015) に簡単な記述があるのみである。

沖永良部語（方言）において本格的な辞書はまだ編纂されていないが、最も包括的な語彙集として甲（2006）、Nishie (1968) がある。その他にも、語彙の分類別に方言を記した甲・先田（2011）や、永吉敏人（2005）、国頭集落の語彙に特化した方言集として福島（2010）がある。

島内の方言差については、沖縄国際大学高橋ゼミグループ編（1984）沖縄言語研究センター（1990）が、島内 42 集落における、基礎語彙の方言差を報告している。また、徳永（2012）が、島内 24 集落における基礎語彙とオノマトペの方言差を報告している。形態・統語レベルの地域差は、Van der Lubbe and Tokunaga (2015) で少しだけ触れられている。

[8] 本論文の執筆後に、沖永良部島最東部の正名集落の方言を対象とし Van der Lubbe, Gijs（2016）「琉球沖永良部語正名方言の記述文法研究」（琉球大学, 博士論文）が公表された。

3章　音韻論

3 章では、国頭方言の音韻について述べる。まず、3.1 節で音素を示し、3.2 節で音節・モーラ構造について述べる。3.3 節でアクセントの体系について述べ、3.4 節で疑問イントネーションの構造についてまとめる。

3.1　音素

3.1 節では、音素の体系について論じる。国頭方言の言語音は、(a) 声道の極端な狭めがあるか、(b) 単独でモーラを担えるか、といった基準により、① 母音、② 半母音、③ 子音に分類することが出来る（表 3-1)。

声道の極端な狭めがなく、単独でモーラを担えるものを「母音」、声道の極端な狭めがなく、単独でモーラを担えないものを「半母音」、声道の極端な狭めがあるものを「子音」とする。子音は単独でモーラを担えるものと担えないものとがある。単独でモーラを担える子音は、音節末に現れる鼻音（[n], [m], [ŋ], [ɴ]、これらは同一音素/N/の異音と考える）のみであり、それ以外の子音は単独でモーラを担えない。

表 3-1. 音素の分類と分類基準

	(a)　声道の極端な狭め	(b) 単独でモーラを担えるか
① 母音	－	＋
② 半母音	－	－
③ 子音	＋	＋／－

以下、3.1.1 で母音、3.1.2 で半母音、3.1.3 で子音について述べる。

3.1.1　母音

母音音素には、/a/ /i/ /u/ /e/ /o/ の 5 母音が認められる。まず 3.1.1.1 で音素の認定を行い、3.1.1.2 でそれぞれの母音を母音空間図に位置づける。3.1.1.3 で/u/ の音声的特徴について述べ、3.1.1.4 で、先行研究において音素として認められていた /i/ が、共時的には認められないことを示す。それらの分析を踏まえ、3.1.1.5 で母音音素表を提示する。

3.1.1.1　母音音素の認定

音素を認定するために、(a) ミニマル・ペア (minimal pair) と、(b) 準ミニマル・ペア (Quasi- minimal pairs) を用いる。ミニマル・ペアとは「1 つの言語音の違いによって、意味が弁別される語の対」を指す。

ミニマル・ペアをなし、かつ意味の異なる 2 語が存在する時、それらの語において異なっている言語音は、語の意味を区別する働きがある、すなわち「弁別的」であるとみなす

ことができる。このような場合、問題の 2 つの言語音は「対立する」と表現され、対立するそれぞれの言語音は、別音素に属すると考えることができる。

一方で、問題とする言語音によってのみ対立するミニマル・ペアがない時には、それぞれの言語音の分布環境を考察することによって音素を認定する。以降、2 つの言語音が同一環境に現れる言語対を「準ミニマル・ペア」と呼ぶ。ここで「同一環境」とは、語のペアにおいて、少なくとも、問題となる言語音に隣接する音環境が全く同一である環境を指す。準ミニマル・ペアが存在する場合には、両者を別音素として立てる。反対に、2 つの言語音の分布が重ならない（相補分布している）場合には、両者が同一音素である可能性を考察する。その際、相補分布した 2 つの言語音が音声的にも類似していれば「同一音素」とする。

なお、以下に提示するミニマル・ペアの一部の例は、アクセント型も互いに異なる可能性がある。ただし、それらも「準ミニマル・ペア」の資格は備えているため、2 つの言語音の弁別性を主張する根拠になる。

3.1.1.1.1　短母音

調査の結果、(3-1) - (3-9) のミニマル・ペア、および、(3-10) の準ミニマル・ペアが発見された。このため、5 つの母音 [a̲], [i], [ɯᵝ], [e], [o] は弁別的であると考えられる。これらの音素を、それぞれ/a//i//u//e//o/と表す。

なお、[a̲] は、[a] よりもやや後方に舌があることを表し、[ɯᵝ] は、唇を突き出さずに上唇と下唇との間の空間を狭める「圧縮円唇 (compressed rounding) 」であることを表す（/u/ [ɯᵝ] については、3.1.1.3 で述べる）。

(3-1)　[a̲] vs. [i]
[ha̲ma̲]「浜」vs. [ha̲mi]「甕」

(3-2)　[a̲] vs. [ɯᵝ]
[atɯᵝ]「後」vs. [ɯᵝtɯᵝ]「音」

(3-3)　[a̲] vs. [e]
[tɕira̲]「顔」vs. tɕire「同年、同輩」

(3-4)　[a̲] vs. [o]
[sa̲ta̲]「砂糖」vs. [sa̲to]「他集落」

(3-5)　[i] vs. [ɯᵝ]
[tɕimi]「爪」vs. [tɕimɯᵝ]「肝」

(3-6)　[i] vs. [e]
[gani]「蟹」vs.　[gane]「～後」

(3-7)　[i] vs. [o]
[tɕikijɯᵝŋ]「付ける」vs. [tɕikojɯᵝŋ]「使う」

(3-8)　[ɯᵝ] vs. [e]
[dɯᵝkat̲ɕaŋ]「どかした」vs. [dekat̲ɕaŋ]「でかした（喜んだ時に言う）」

(3-9)　[e] vs. [o]
[mukejuŋ]「迎える」vs. [mukojuŋ]「向かう」

(3-10)　[ɯᵝ] vs. [o]　（準ミニマルペア、環境 k_#）
[dɯᵝkɯᵝ]「毒」vs. [basaŋko]「ハイビスカス」

3.1.1.1.2　長母音

(3-11) ～(3-15) のミニマル・ペア、及び準ミニマル・ペアが存在することから、それぞれの母音において「短母音」と「長母音」は弁別的であると言える。ただし、(a) 長母音と短母音は音質が変わらず、また (b) 長母音は、音韻的に短母音の 2 倍の長さである（3.2 節「音節とモーラ」で明らかになる）ことから、短母音と長母音に別音素を立てるのではなく、長母音音素を「短母音音素の連続」と解釈する。すなわち、[a] と[a:] の対立は、/a/ と/aa/の対立として扱う。

(3-11)　[a] vs. [a:]
[hami]「紙」vs. [ha:mi]「亀」

(3-12)　[i] vs. [i:]
[itɕi]「いつ」　vs. [i:tɕi]「ふけ」

(3-13)　[ɯᵝ] vs. [ɯᵝ:]
[nɯᵝdi]「喉」　vs. [ɯᵝ:di]「なんで」

(3-14)　[e] vs. [e:]（準ミニマル・ペア）
[dekijɯᵝŋ]「出来る」vs. [de:kɯᵝni]「大根」

(3-15)　　[o] vs. [oː]　（準ミニマル・ペア）
[juᵝgobaɕa]「クワズイモ」vs. [goːbura]「南瓜」

3.1.1.2　母音空間図

それぞれの母音音素について、音響分析ソフト Praat (Boersma&Weeink 2015) で母音の音色を特徴づける第 1、第 2 フォルマントを計測し、その値を 2 次元に配置した母音空間図を、図 3-1 母音空間図に示す。図 3-1 の母音空間図は、各音素を含む語彙（表 3-2）から作成した。実際に測定した箇所に下線を記す。図から 5 つの母音は音響的に明瞭に区別できることが分かる。

表 3-2 母音空間図作成に用いた語彙リスト（表内は音素表記）

/i/	/u/	/e/	/o/	/a/
iihazji「西風」	fumuku「埃」	keemee「蘇鉄粥」	basaNko「ハイビスカス」	haami「亀」
iccjuu「糸」	gubu「おでこ」	jassee「野菜」	oo「泡」	kaazji「顎」
hjini「船」	kuruhee「霧」	kuruhee「霧」	hoojuN「這う」	toora「俵」
sjibi「シビ：魚」	umu「芋」	heehazji「南風」	tooraa「俵」	agari「東」
musji「虫」	tuzjiwutu「夫婦」	dee「竹」	oo「粟」	faatu「鳩」
kuribu「蜜柑」	uuhazji「台風」	seemagu「笊」	goo「穴」	azji「祖母」
sutumiti「朝」	sutumiti「朝」	deekuni「大根」	hoobu「おたまじゃくし」	hazjira「髪」
hjizjuru「火傷」	jiru「夜」	utuge「顎」	hookusu「ほくろ」	hatana「刀」

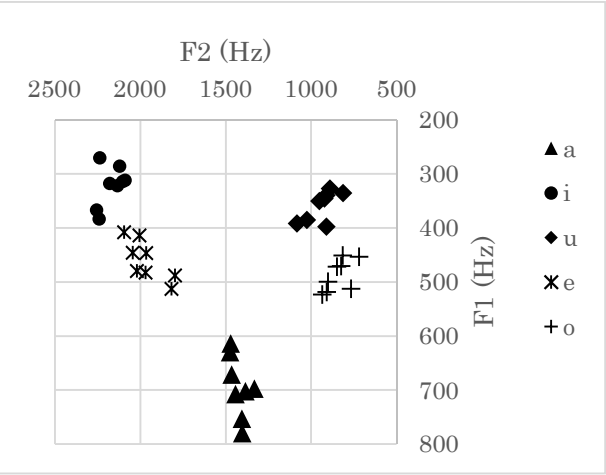


図 3-1 母音空間図

3.1.1.3　/u/について

国頭方言の/u/は、唇の形状が非円唇的に見える（図 3-2）。しかし、聴覚的・音響的には非円唇後舌母音[ɯ]に比べ、円唇後舌母音[u]に近い音声である。

母音の円唇 (roundness) には、(a) 突出 (protrusion)：唇を突出させる形状、(b) 圧縮 (compression)：唇を並行的に開き、突出させない形状、の 2 種類があるとされている (Ladefoged and Maddieson 1989: 93)。このうち圧縮円唇 (compressed rounding) は唇を突出させず、両唇摩擦音[β]に近い調音になる (Catford1977:173)。国頭方言の/u/は、唇の形状と音響特性から「圧縮円唇 (compressed rounding) 」である可能性がある[9]。このため、音声の表記を[ɯᵝ]とする。

図 3-2. /u/の発音（発音語彙：utu「弟」、話者 TN、2015 年 8 月 2 日）

3.1.1.4　/ɨ/ [ɪ]について

平山（1986）では、/a//i//u//e//o/の 5 母音に加え/ɨ/が音素として立てられている。しかし、現在の国頭方言のデータからはその立場が支持できず、母音音素は 5 つと考えられることを以下に示す。3.1.1.4.1 では「弁別性」という観点から、3.1.1.4.2 では、実際の音響分析による比較から、/ɨ/を音素として立てる必要がないことを述べる。

3.1.1.4.1　弁別性

平山（1986: 806）では/ɨ/は/s//c//z/の前に分布するとしており、/ɨ/と/i/が対立するミニマル・ペアとして[sɪsɪ]「煤」vs. [sisi]「肉」、[ʔusɪ]「臼」vs. [ʔusi]「牛」を挙げている（表記は平山 1986 に従っている）。このペアはさらにアクセントによっても弁別される（松森 2012）。

しかし、現在の体系においてはこの 2 つのミニマル・ペアは、アクセントのみが弁別的であり、母音の質は弁別性に関与していないと思われる（表 3-3）。表中の HL は聴覚的な

[9] 日本標準語の/u/も compressed rounding であるとの指摘がある(Pulleyblank1996)。但し国頭方言の/u/は、日本標準語と比べても、より円唇性と関連する音響特徴（F2 の低下など）が認められる。

音の高さを表し、H は相対的に高いピッチを、L は相対的に低いピッチを表す。

表 3-3.「煤」vs.「肉」、「臼」vs.「牛」

意味	語形	アクセント型	=nu 接続形のアクセント
煤	[ɕiɕi]	c	LH=L
肉	[ɕiɕi]	b	HL=H
臼	[ɯᵝɕi]	c	LH=L
牛	[ɯᵝɕi]	a	LL=H

3.1.1.4.2 音響分析に基づく比較

平山（1986）において、(a) /ɨ/を含むとされている音と、(b) /i/を含むとされている音[10]に、現在の国頭方言においても音響的な差異があるか検討を行った。調査項目には、平山（1986）において/sɨ//si//cɨ//ci//zɨ//zi/を含むとされる語を 5 つずつ選んだ（表 3-4）。調査語彙を、外住歴のない昭和 8 年生の男性（YK, 当時 82 歳）に発音してもらい、音響分析ソフト Praat によって母音の音色を特徴づける第 1 フォルマント周波数（F1）、第 2 フォルマント周波数（F2）の計測を行った。

結果を図 3-3 に示す。図から明らかなように、/i/と/ɨ/における F1 と F2 の分布はほぼ完全に重なっている。また、/i/と/ɨ/の F1, F2 値の差が統計的に有意であるかを確かめるために、有意水準 5%で *t* 検定（両側検定、等分散を仮定[11]）を行ったが、F1: $t(28) = 0.87$, $p = 0.39$、F2: $t(28) = 0.17$, $p = 0.87$ であり、/i/と/ɨ/の F1, F2 値に有意差は認められなかった。

したがって、/i/と/ɨ/が対立するとする平山の見解は、現在の体系に関する限り支持されない。両者の対立は、現在では失われているとみなして良いだろう。

[10] 平山（1986）では、国頭方言の具体的な語彙として/ɨ/を含むものしか挙げられていなかったが、共通語と国頭方言には si :: sɨ、su/se :: sɨ、ci :: cɨ、cu/ce :: cɨ、zi :: zɨ、zu/ze :: zɨ（共通語 :: 国頭方言）の対応があるとしている。この対応関係と、同著で和泊方言として挙げられている語彙を参考に/ɨ/の語彙リストを作成した。

[11] /i/と/ɨ/のデータには対応がないため、F 検定を行った。その結果 F1: $F = 0.60$, p = 0.17、F2: $F = 0.89$, $p = 0.41$ で分散に有意差は認められなかった。このため、等分散を仮定して *t* 検定を行った。

表 3-4. /i/と/ɨ/の語彙リスト

測定した箇所に下線を記す。音素表記は平山（1986）に従う

/i/	意味	/ɨ/	意味
azi	祖母	cizɨN	鼓
fazi	足	hazɨ	風
hoozi	麹	hazɨra	芋の蔓
tuzi	妻	mizɨ	水
zii	字	mukazɨ	百足
cii	血	icɨ	いつ
mucii	餅	icɨcɨ	五つ
cii	胸	cɨmi	爪
inuci	命	cɨra	顔
faci	蜂	cɨnu	角
sisi	肉	sɨsɨ	煤
usi	牛	usɨ	臼
fusi	星	sɨisaN	酸っぱい
sima	島	sɨi	巣
musi	虫	sɨni	脛

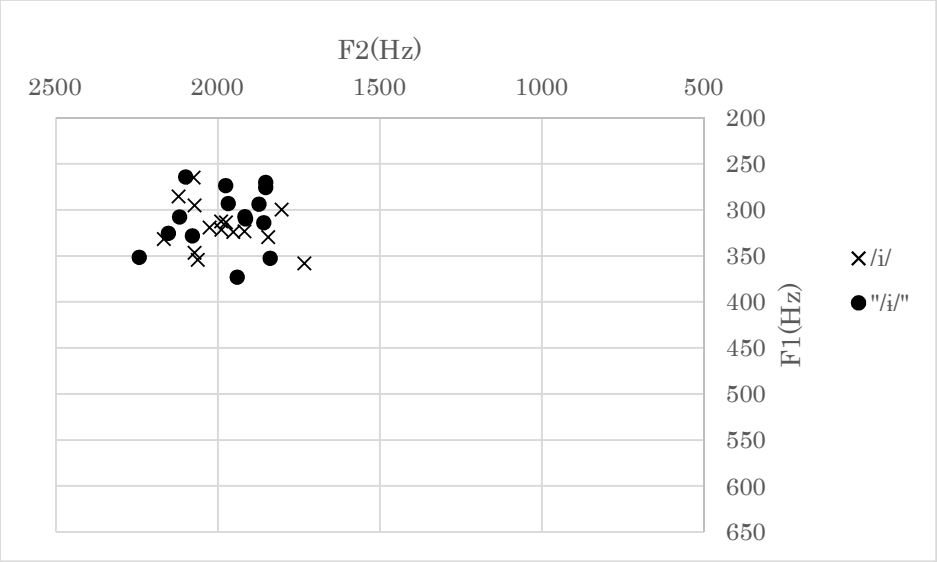


図 3-3. /i/と/ɨ/（平山 1986）の F1, F2 分布

3.1.1.5 母音音素表

以上の考察より、国頭方言の母音音素は表 3-5 のようにまとめられる。表中の横軸は舌の前後位置を、縦軸は舌の高さを表す。

なお、3.1.2「半母音」以降の音声表記においては、母音の表記を簡略化し、[a̲]を[a], [ɯᵝ]を[u]と表記している。

表 3-5. 母音音素

	前舌	中舌	後舌
高段	i [i]		u [ɯᵝ]
中段	e [e]		o [o]
下段		a [a̲]	

このように、国頭方言は 5 母音体系であると言えるが、言語音の出現には偏りもある。[e] [o] は長母音で現れることが多く、短母音で現れることは少ない。[e][o] が短母音で現れる例は、(3-16), (3-17) の通りである。

(3-16)　[e] が短母音として現れる語
/cjire/ [tɕiɾe]「同輩」、/heNnja/ [henʲnʲa]「腕」、/mugejuN/[mɯᵝgejɯᵝŋ]「動く」

(3-17)　[o] が短母音として現れる語
/saNpo/[sampo]「うずら」、/farozji/[ɸarodʑi]「親戚」、/jugobasja/[jɯᵝgobaɕa]「クワズイモ」、/warojuN/[waɾojɯᵝŋ]「笑う」、/murojuN/ [mɯᵝɾojuŋ]「貰う」

3.1.2　半母音

半母音音素には、/j/ [j] と /w/ [w] の 2 つが認められる。

3.1.2.1　半母音音素の認定

(3-18) のミニマル・ペアが存在するため、2 つの半母音 [j] と [w] は対立する。これらの音素を、それぞれ /j/, /w/ とする。

(3-18)　[j] vs. [w]
[ja:]「家」 vs. [wa:]「私」
[ju:]「湯」 vs. [wu:]「緒」

なお、日本標準語では[ji:]と[i:]、[wu:]と[u:] が区別されないが、国頭方言においては、(3-19), (3-20) のようなミニマル・ペアが見つかり、[ji] と [i] , [wu] と [u] がそれぞれ区別される。

(3-19)　[ji] vs. [i]

[ji:]「柄 /jii/」vs. [i:]「胃/ii/」

(3-20) [wu] vs. [u]
[wutu]「夫 /wutu/」vs. [utu]「弟 /utu/」

3.1.2.2 半母音の分布特徴

半母音[j]と[w]は、 (a) 前に声門閉鎖音[ʔ]を伴うことが出来る、(b) 子音と母音の間に位置することが出来るといった分布特徴がある。

(3-21) のミニマル・ペアから明らかなように、半母音の前の声門閉鎖音の有無は弁別的である。また、(3-22) のミニマル・ペアから明らかであるように、子音と母音の間に位置する声門閉鎖音の有無も弁別的である。

(3-21) 半母音前の声門閉鎖音
[ʔju:]「魚」vs. [ju:]「湯」
[ʔwa:]「豚」vs. [wa:]「私」

(3-22) 子音と母音の間に位置する半母音
[ma:]「ここ」vs. [mja:]「庭」
[gwa:]「子供（複合語の後部要素）」vs. [ga:]「~んだよ（終助詞）」

3.1.3 子音

次に、子音について、3.1.3.1 で音素を認定し、3.1.3.2 で異音についてまとめる。それらの分析を踏まえ、3.1.3.3 で子音音素表を提示する。

3.1.3.1 子音音素

子音音素として、/p//b///t//d//n//k//g//ʔ//m//M//N//r//f//s//z//c//h/ の 17 個を認める。まず、ミニマル・ペア及び準ミニマル・ペアから認定される音素について 3.1.3.1.1 で述べ、その他の理由から認定した音素について 3.1.3.1.2 に述べる。また音素を決定する上で留意が必要な言語音について 3.1.3.1.3 に述べる。

3.1.3.1.1 ミニマル・ペア

子音には、(3-23) - (3-44) のミニマル・ペアと、(3-45) - (3-49) の準ミニマル・ペアが存在することから、[b], [ɸ], [m], [mʲ], [t], [d], [n], [ɾ], [s], [ɕ], [z], [ʑ], [ts], [k], [g], [ç], [h], [ʔ] が弁別的である。

(3-23) [t] vs. [d] vs. [ts] vs. [k] vs. [m] vs. [n] vs. [ɸ] vs.[ɕ] vs. [z] vs. [tɕ] vs. [ç]

[tuː]「10」vs. [duː]「自分」vs. [ʦuː]「露」vs. [kuː]「粉」vs. [muː]「藻」vs. [nuː]「何」[ɸuː]「帆 vs. [ɕuː]「潮」、[zuː]「尻尾」vs. [tɕuː]「人」vs. [çuː]「今日」

(3-24) [b] vs. [t] vs. [n] vs. [m] vs. [mˀ] vs. [ɸ] vs. [tɕ] vs. [s] vs. [ɕ] vs. [ç]
[baː]「嫌だ」vs. [taː]「田」vs. [naː]「名」[maː]「ここ」vs. [mˀaː]「そこ」vs. [ɸaː]「葉」vs. [tɕaː]「茶」vs. [ɕaː]「下」vs. [saː]「差」vs.[çaː]「坂」

(3-25) [t] vs. [d] vs. [g] vs. [s] vs. [h] vs.[m] vs. [ç] vs. [ʑ]
[toː]「蛸」vs. [doː]「～よ」vs. [goː]「穴」vs. [soː]「竿」vs. [hoː]「川」vs. [moː]「～んだよ」vs. [çoː]「上平川集落」vs. [ʑoː]「門」

(3-26) [b] vs. [d] vs. [k] vs. [s]
[beː]「ばかり」vs. [deː]「竹」vs. [keː]「粥」[seː]「背」

(3-27) [m] vs. [t] vs. [n] vs. [ɕ] vs. [ʑ], vs. [ç]
[miː]「目」vs. [tiː]「手」vs. [niː]「胸」vs. [ɕiː]「巣」vs. [ʑiː]「字」vs. [çiː]「木」

(3-28) [b] vs. [d] vs. [g] vs. [m] vs. [mˀ] vs. [ʔ]
[bjaː]「韮」vs. [djaː]「~だよ」vs. [gjaː]「かや」vs. [mjaː]「庭」vs. [mˀjaː]「猫」vs. [ʔjaː]「ねえ（声掛け）」

(3-29) [b] vs. [z] vs. [m] vs. [n] vs. [g]
[ɕiba]「舌」vs. [ɕiza]「先輩」vs. [ɕima]「相撲」vs. [ɕina]「中国」vs. [ɕiga]「～だけど」

(3-30) [b] vs. [ɾ]
[suba]「そば」vs. [suɾa]「枝」

(3-31) [b] vs. [ʑ]
[habi]「紙」vs. [haʑi]「はず」

(3-32) [tɕ] vs. [ɾ] vs. [n]
[itɕu]「糸」vs. [iɾu]「色」vs. [inu]「犬」

(3-33) [d] vs. [ɾ] vs. [t]
[uɾa]「お前」vs. [uda]「どこ」vs. [uta]「歌」[uʑa]「おじ」

(3-34)　[k] vs. [mˀ]
[kuːjuɴ]「くわえる」vs. [mˀuːjuɴ]「思う」

(3-35)　[g] vs. [ɾ]
[agu]「友達」vs. [aɾu]「或る」

(3-36)　[ɾ] / vs. [n] vs. [m] vs. [ɕ]
[ɸuɾi]「これ」[ɸuni]「骨」[ɸumi]「米」[ɸuɕi]「星」

(3-37)　[n] vs. [h]
[noːʣi]「鋸」vs. [hoːʣi]「麹」

(3-38)　[h] vs. [ɸ]
[haʣi]「風」vs. [ɸaʣi]「足」

(3-39)　[z] vs. [s] vs. [d]
[ɸuzu]「去年」[ɸusu]「へそ」[ɸudu]「～ほど」

(3-40)　[ɾ] vs. [k]
[ɸaɾu]　「畑」vs. [ɸaku]「箱」

(3-41)　[g] vs. [k]
[hagama]「釜」vs. [hakama]「袴」

(3-42)　[z] vs. [k] vs. [s] vs. [t]
[haza]「匂い」vs. [haka]「墓」vs. [hasa]「傘」vs. [hata]「旗」

(3-43)　[ts] vs. [g] vs. [s] vs. [ɾ]
[atsaɴ]「暑い」vs. [agaɴ]　「あんな」vs. [asaɴ]「浅い」vs. [aɾaɴ]「～ではない」

(3-44)　[ʣ] vs. [z]
[ʣaːʣa]「お爺さん」vs. [zaːza]「ザーザー（雨が降る音）」

(3-45)　[b] vs. [ts] vs. [mˀ] vs. [z] vs. [ʣ]（準ミニマル・ペア、環境：#_u）
[buːɾi]「無礼」vs. [tsuː]「露」vs. [mˀuːju ɴ]「思う」vs. [zuː]「尾」vs. [ʣuːgatɕi]「10 月」vs. [kuː]「粉」vs. [ɸuː]「帆」

(3-46)　[tɕ] vs. [h] vs. [mʔ] vs. [ɕ]（準ミニマル・ペア、環境：#_o）
[tɕo:de:]「兄弟」vs. [ho:]「川」vs. [mʔo:juɴ]「いらっしゃる」[ɕo:gatɕi]「正月」

(3-47)　[s] vs. [ɾ]（準ミニマル・ペア、環境 u_u#）
[kusu]「糞」vs. [tɕibuɾu]「頭」[ɸuzu]「去年」

(3-48)　[ɾ] vs. [h]（準ミニマル・ペア、環境 a_o）
[ujaho]「先祖」vs. [faɾozi]「親戚」

(3-49)　[ɾ] vs. [ç]（準ミニマル・ペア、環境#_i）
[ɾintɕi]「嫉妬」vs. [çinto]「返事」

以上で弁別性が確認された[b], [ɸ], [m], [mʔ], [t], [d], [n], [ɾ], [s], [z], [ts], [k], [g], [h], [ʔ] を、それぞれ/b/, /f/, /m/, /M/, /t/, /d/, /n/, /r/, /s/, /z/, /c/, /k/, /g/, /h/, /ʔ/ とする。

3.1.3.1.2　その他の子音音素

ミニマル・ペアや準ミニマル・ペアがないものの、[p] は [sampo]「ウズラ」、[happui「二枚貝」[happi:]「これくらい」などの一部の語彙と、借用語やオノマトペに認められ、他の言語音に代替出来ないことから音素 /p/ として立てる。

また、音節末に現れる鼻音は、調音点が後の子音に同化するという特徴を持つ為、それ以外の位置で現れる鼻音とは別に音素/N/として立てる。

3.1.3.1.3　分析の留意

その他に、音素を立てる上で留意が必要な言語音について以下に述べる。

3.1.3.1.3.1 [ɸ] について

[ɸ] と [h] には、[ɸaʑi]「足」と [haʑi]「風」というミニマル・ペアがあることから、本稿では、/h/ とは別の音素として /f/ を立てる（/f/は[ɸ]として実現する）。

[ɸ] を/hw/ と解釈する立場もありうるが、本稿では採用しない。その根拠は[ɸ]と[w]の分布の違いにある。[ɸ] は_a, i, u の環境にあらわれるのに対し、[w] は_a, u の環境にしか現れない。すなわち前者は[i]の前に現れることができるが、後者はできなという分布の違いがある。[ɸa], [ɸi], [ɸu] をそれぞれ/hwa/, /hwi/, /hwu/と解釈すると、/h/が先行するばあいには/wi/の連続が許容されるのに対し、/h/が先行しない場合に/wi/の連続が禁止される理由を説明することができない。このことから、本稿では[ɸ]と実現する単独の音素/f/を立てる。但し、_i 環境で現れる[ɸ] には個人差があり、比較的若年層の話者では[ç] になってい

る。この変化が完遂すれば、[ɸ] の出現環境と[w] の出現環境が同じになるため、[ɸ] を /hw/と解釈し得る。

(3-50)　[ɸ] と[w] の分布

ɸa	wa
ɸi	*wi
ɸu	wu
*ɸe	*we
*ɸo	*wo

3.1.3.1.3.2 [h] について

[h] は分布に偏りがあり、_i, u の環境であらわれない (3-51) 。このため、_i, u の環境であらわれる類似の言語音 [ç] [ɸ] を条件異音と考えるという解釈が考えうるが、本稿ではその解釈を採用しない。 何故なら、[ɸ] と[h] にはミニマル・ペア[ɸaʑi]「足」と [haʑi]「風」が存在し、[h] と[ç] にはミニマル・ペア[ho:]「川」と[ço:]「上平川（集落)」があるため、それぞれ別音素として立てることが妥当だからである。このため、/h/ [h] は、_i, u の環境で現れないといった分布に偏りのある音素となる。

(3-51)　[ɸ] と[h] と[ç] の分布

ɸa	ha	ça
ɸi	*hi	çi
ɸu	*hu	çu
ɸe	he	*çe
ɸo	ho	ço

3.1.3.1.3.3 _i 環境の [ɕ] [ʑ] [ç] について

3.1.3.1.1 のミニマル・ペアで挙げた通り、[ɕu:]「潮」と[su:]「酢」というミニマル・ペアがあることから、[ɕ] と[s] は弁別的である。しかし、_i の環境を考えると、[ɕi] は存在するが[si] は存在しない。[ʑ]と[z] 、[tɕ]と[c] 、[ç]と[h]も同様の関係にある（表 3-6)。従って、[ɕ] と[s] 、[ʑ]と[z] 、[tɕ]と[c] 、[ç]と[h]の分布は並行的に捉えることができる。

表 3-6. _i 環境の [ɕ] [ʑ] [ç]

_i	*_i	ミニマル・ペア
[ɕ]	[s]	[ɕuː]「潮」 vs. [suː]「酢」
[ʑ]	[z]	[ʑaːʑa]「お爺さん」 vs. [zaːza]「ザーザー（雨が降る音）」
[tɕ]	[c]	[tɕuː]「人」 vs. [cuː]「露」
[ç]	[h]	[çoː]「上平川」 vs. [hoː]「川」

[ɕi]という連続に関しては、これを(a) /si/ と分析したうえで、s→ɕ / _i, j という規則を定める方針と、(b) /sji/ と分析し、sj→ɕ という規則をさだめる方針とがある。同様に、[ʑi] は /zi/ または/zji/、[tɕi] は/ci/ または/cji/、[çi]は/hi/ または/hji/ という分析があり得る。これらについて、音声の実現に関する規則の数は、両者にさほどの差がない。しかし、動詞形態論のルールを立てる際に、[ɕi] を/sji/, [ʑi] を/zji/, [ɕi] を/sji/、[tɕi] を/cji/、[çi] を/hji/ と立てた方が接辞の異形態が減る。したがって、それぞれ /sji/, /zji/, /cji/, /hji/と分析し、/sj/, /cj/, /zj/, /hj/ について以下の実現ルールを立てる。

(3-52) /sj/ → ɕ
(3-53) /cj/ → tɕ
(3-54) /zj/ → ʑ
(3-55) /hj/ → ç

3.1.3.1.3.4 [ʔ] について

[ʔ] は語頭の半母音の前にのみに現れる。半母音の前の[ʔ] の有無は、[ʔjuː]「魚」 vs. [juː]「湯」、[ʔwaː]「豚」 vs. [waː]「私」のように弁別的であるため、/ʔ/として音素を立てる。

3.1.3.1.3.5 [mˀ] について

[mˀ] は、(a) それ自体の音素/M/（喉頭化した両唇鼻音 mˀを意味する）を立てる方針と、(b) /ʔm/ （声門閉鎖音と両唇鼻音の連続）を立てる方針があり得る。(a) の分析では子音音素が 1 つ増える。(b) の分析では、頭子音に 3 つの子音の連続が許されることになり（例えば[mˀjaː]は/ʔmjaa/と分析される）、音節構造（2 章 2 節「音節構造」2−2（4）を参照）が複雑になる。 (a) の分析には、/ʔ / の出現環境が「半母音の前」と一般化できるという利点があるが、(b) の場合には一般化が難しくなる。こうした点を考え合わせると、/ʔm/ とするよりも/M/ とする分析の方が経済性に勝る。したがって本稿では/M/ と分析する[12]。

[12] 国頭方言の場合には、[n] の喉頭化と非喉頭化（または、n 前の喉頭化子音の有無）に区別

3.1.3.2　異音

ある音素に対する、異なる音声の実現形は「異音 (allophone) 」と呼ばれる。「異音」には、特定の条件下で相補的に用いられる「条件異音 (positional variation) 」と、条件に関係なく現れる「自由異音 (free variation) 」がある。

3.1.3.2.1　条件異音

特筆すべき条件異音が認められる音素は、/N/ と/k/ である。

3.1.3.2.1.1　/N/ [m~n~ŋ~ɴ]

/N/ は、後続する子音に調音点が同化する。後続する子音が唇音（p, b, m）の時は[m], 後続する子音が歯茎音（n, s, z, t, d, c）の時は[n], 後続する子音が軟口蓋音（g, k）の時は[ŋ], 語末では[ɴ]で現れる。これらの鼻音（[m, n, ŋ, ɴ]）はしたがって相補分布しており、同一の音素に属する条件異音であるとみなすことができる。条件異音の生起は(3-56) の音韻規則の形で表現することができる。

(3-56)　　N → m /_{p, b, m}
　　n /_{ n, s, z, t, d, c }
　　ŋ /_{g, k}
　　ɴ /_#

例：/saNpo/ [sampo]「うずら」/ciNtai/[cintai]「蝸牛」/jiNga/[jiŋga]「男」/muN/ [muɴ]「食べ物」

3.1.3.2.1.2　/k/ [k~ kˀ]

/k/ は o と w の前では [kˀ]、それ以外の環境では[k]で実現する。[kˀ] と[k] はしたがって相補分布しており、同一の音素の条件異音とみなすことができる。つまり、喉頭化の有無は、両唇鼻音[m] の場合には弁別的であるが、無声軟口蓋破裂音[k] の前では、弁別的ではない。条件異音の表れは(3-57)の規則の形で表現することができる。

(3-57)　　k → kˀ /_{o,w}
例：koi/[kˀoi]「鍬」/kwaa/[kˀwaa]「子供」/kuribu/[kuɾibu]「蜜柑」

がないが、上平川方言では、[n] の喉頭化／非喉頭化に対立が見つかっている。このような方言では、/ʔ /の出現環境が半母音・鼻音の前、と一般化出来るため、/ʔm//ʔn/ 等のように分析する方が妥当かもしれない。

3.1.3.2.2 自由異音

/z/, /fa/, /se/ には自由異音がある。

3.1.3.2.2.1 /z/

/z/は、[z]と[ʤ]の間で発音に揺れがある。例えば、/aza/「あざ」は[aza] または、[aʤa]と発音される。

3.1.3.2.2.2 /fa/

/fa/は、[ɸa]と[ha]の間で発音に揺れがある。例えば、/faa/「葉」は[ɸa:] または、[ha:] と発音される。

3.1.3.2.2.3 /se/

/se/は [se] と [ɕe] の間で発音に揺れがある。例えば、/seNsuu/「戦争」[sensu:] だけでなく、[ɕensu:] と発音されることがある。

3.1.3.3 子音音素表

以上の分析より、半母音および子音の音素表は表 3-7 のようにまとめられる。半母音には/j/, /w/の 2 つの音素が、子音には、/p//b///t//d//n//k//g//ʔ//m//M//N//r//f//s//z//c//h/の 17 個の音素がある。

表の横軸は調音位置、縦軸は調音方法を表す。同一セル内は発声(phonation)、すなわち声門の状態の違いを表している。具体的には、左から無声子音、有声子音、喉頭化子音を表す。

表 3-7. 半母音・子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p [p]　b [b]	t [t]　d [d]		k[k~ kˀ]　g [g]	ʔ[ʔ]
鼻音	m [m]　M [mˀ]	n [n]		N [m~n~ŋ~ɴ]	
弾き音		r [ɾ]			
摩擦音 破擦音	f [ɸ~h]	s [s]　z [(d)z]	c [ʦ]		h[h]
接近音	w [w]		j [j]		

3.2　音節とモーラ

3.2 節では、音節とモーラについて論じる。音声現象の中には、1 つ以上の分節音（母音および子音）からなる単位を領域とするものがある。音韻論研究では、そのような単位として様々なものが提唱されている。一般的に、分節音より大きく語より小さい単位としては、小さい順に（階層関係において下位から上位の順に）、モーラ (mora)、音節 (syllable)、フット (foot) などが提唱されている。本論文ではモーラと音節のみを扱う。

概して音節とは、聞こえ (sonority) の大きい 1 つの分節音（通常は母音）のみから構成されるか、あるいは、その分節音（通常は母音）と、それより聞こえの小さい隣接する分節音（通常は子音）とから構成される単位である。ここで「聞こえ」とは、聴覚的な音の大きさを表すが、調音音声学的には、声道における狭めの強さとおよそ相関する。母音は子音より狭めが弱くしたがって聞こえが大きい。音節において最も聞こえの大きい分節音は音節核と呼ばれるが、国頭方言ではもっぱら母音が音節核を担う。例えば ii「胃」では、1 つの長母音/ii/がそれのみからなる音節を形成する。taa「田」では、1 つの子音/t/と 1 つの長母音/aa/とからなるが、聞こえの大きい長母音/aa/が、それより聞こえの小さい隣接する子音/t/を伴って 1 音節/taa/を形成する。fuga「卵」では最初の母音/u/が先行する子音/f/とともに 1 音節を形成し、2 番目の母音/a/が先行する子音/g/とともに 1 音節を形成する。したがってこの語は 2 音節/fu.ga/（“ . ”は音節境界）から構成される。モーラは音節よりも小さく分節音より大きい単位である。

3.2.1　単位の認定

国頭方言の記述には「モーラ」と「音節」の 2 種類の単位が必要である。モーラの認定に対しては、語の長さに関する制約が裏付けとなり、音節の認定に対しては、アクセントの規則が裏付けとなる。

3.2.1.1　モーラの認定

3.2.1.1.1　モーラの定義

国頭方言の語は、必ず 1 つ以上の母音を持つ。母音は継続時間 (duration) によって、継続時間がより長い「長母音」と、より短い「短母音」に分類できる。語に含まれる母音が「1 つの短母音」である語は存在しない（i, ta などは存在しない）。一方で、語に含まれる母音が「1 つの長母音」である語は存在する（i:「胃」、ta:「田」など）。また「2 つの短母音」を持つ語（ama「母」、nabi「鍋」など）も存在することから、国頭方言には語の長さについて (3-58) の制約が存在すると考えられる。

(3-58)　語の長さに関する制約

語の母音が 1 つだけで、かつ、その母音が短母音である語は短すぎて存在しない。

ここで、語を成立させることが出来る「1 つの長母音」と「2 つの短母音」は、アクセントの振る舞いから、音韻的に「同じ長さ」であることを以下に述べる。

議論の前提として、表 3-8 は、CVCV 構造の nabi「鍋」と CVCVCV 構造の futabi「今年」を比較したものである。両者は同じ「c 型アクセント」を持つが、表から分かる通り、明らかにアクセントの振る舞いが異なる。このことから、語の長さの違い（ここでは CV1 つ分の長さの違い）によってアクセントの実現は異なると言える。

表 3-8. nabi「鍋」と futabi「今年」

表中の[は相対的にピッチが上昇することを、] は相対的にピッチが下降することを表す

	単独形	=nu	=kara	=kara=mu
鍋	na[bi	na[bi]=nu	na[bi]=kara	na[bi]=kara=mu
今年	[fu]ta[bi	[fu]ta[bi]=nu	[fu]ta[bi]=kara	[fu]ta[bi]=ka[ra]=mu

次に、表 3-9 は、CVCV 構造の nabi「鍋」と、VCV 構造の umi「海」のアクセントの振る舞いをまとめたものである。表から分かる通り、nabi「鍋」と umi「海」は全く同じアクセントの振る舞いを持つ。表 3-8 の結果と併せて考えると、nabi「鍋」と umi「海」は同じ語の長さを持つと考えられる。つまり、CV と V は音韻的には「同じ長さ」だと言える。ここでは C が音韻的長さには関与していない。このため、CV あるいは V が持つ語の長さを、以降統一して「短母音 1 つ分が持つ長さ」と表す。

表 3-9. nabi「鍋」と umi「海」

	単独形	=nu	=kara	=kara=mu
鍋	na[bi	na[bi]=nu	na[bi]=kara	na[bi]=kara=mu
海	u[mi	u[mi]=nu	u[mi]=kara	u[mi]=kara=mu

さて、表 3-10 は CVCV 構造の nabi「鍋」と、CV: 構造の na:「中」の振る舞いをまとめたものである。表 3-10 から分かる通り、nabi「鍋」、na:「中」はまったく同じピッチの変動を示している。このことから、CVCV と CV:は同じ長さ（短母音 2 つ分の長さ）であるということができる。同時に、短母音と、長母音の前半部と、長母音の後半部とが同じ長さ（短母音 1 つ分の長さ）を持つということができる。

表 3-10. na:「中」と nabi「鍋」（2 モーラ c 型）

	単独形	=nu	=kara	=kara=mu
鍋	na[bi	na[bi]=nu	na[bi]=kara	na[bi]=kara=mu
中	na[:	na[:]=nu	na[:]=kara	na[:]=kara=mu

このように、「短母音 1 つ分の長さ」は、国頭方言において音韻的に意味のある単位だと考えられる。このため、この長さを持つ単位を「モーラ」と定義する (3-59) 。「モーラ」という単位を用いて、(3-58) の「語の長さに関する制約」を書きなおすと、(3-60) のようになる。この、語の短さに関する制約は「最小語制約 (word minimality constraint: Ito1990) 」として知られている。

(3-59)　モーラ：
　短母音 1 つ分の長さを持つ単位

(3-60)　語の長さに関する制約：
　語は最小でも 2 モーラの長さを持つ。

3.2.1.1.2　モーラを担う要素

モーラを形成するのは、上に述べた(a) 短母音 1 つ、(b) 長母音の前半／後半の要素の他に、(c) 二重母音の前半／後半の要素、(d) 鼻音連続の前半部、または語末の鼻音、(e) 阻害子音連続の前半部がある。

3.2.1.1.2.1　二重母音

表 3-11 は、先に述べた「2 つの短母音」から成る nabi「鍋」と、「1 つの二重母音」から成る wui「桶」のアクセントの振る舞いをまとめたものである。表 3-11 から分かる通り、nabi「鍋」と wui「桶」は全く同じピッチ変動をしている。このため、「2 つの短母音」と「1 つの二重母音」は音韻的に同じ長さと言える。先に、「1 つの短母音」を 1 モーラと定めたことから、二重母音全体は 2 モーラであり、二重母音の半分の要素（前半／後半）は 1 モーラを担うと考えられる。

表 3-11. nabi「鍋」と wui「桶」(2 モーラ c 型)

	単独形	=nu	=kara	=kara=mu
鍋	na[bi	na[bi]=nu	na[bi]=kara	na[bi]=kara=mu
桶	wu[i	wu[i]=nu	wu[i]=kara	wu[i]=kara=mu

3.2.1.1.2.2　鼻音連続の前半部／語末の鼻音

表 3-12 は、「3 つの短母音」から成る hagami「鏡」と、「2 つの短母音と 1 つ鼻音連続」から成る jiŋŋa「男」のアクセントの振る舞いをまとめたものである。表 3-12 から分かる通り、hagami「鏡」の語頭にある 2 つの短母音と、jiŋŋa「男」の語頭にある「短母音＋鼻音連続の前半部」は全く同じピッチ変動を示している。このため、「1 つの短母音」と「鼻音連続の前半部」は音韻的に同じ長さと言える。先に、「1 つの短母音」を 1 モーラと定め

たことから、鼻音連続の前半部 1 モーラを担うと考えられる。

表 3-12. hagami「鏡」と jiŋŋa「男」（3 モーラ b 型）

	単独形	=nu	=kara	=kara=mu
鏡	[haga]mi	[haga]mi=[nu	[hagami]=ka[ra	[hagami]=ka[ra]=mu
男	[jiŋ]ŋa	[jiŋ]ŋa=[nu	[jiŋŋa]=ka[ra	[jiŋŋa]=ka[ra]mu

また、表 3-13 は「1 つの長母音と 1 つの二重母音」から成る ma:bui「幽霊」と、「3 つの短母音と 1 つの語末鼻音」から成る kamimuɴ「食べ物」のアクセントの振る舞いをまとめたものである。表から分かる通り、ma:bui「幽霊」の語末にある二重母音と、kamimuɴ「食べ物」の語末にある「短母音＋語末鼻音」は全く同じピッチ変動を示している。先に、「1 つの短母音」を 1 モーラと定め、また「1 つ二重母音」が 2 モーラであることを示したことから、語末の鼻音は 1 モーラを担うと考えられる。

表 3-13. ma:bui「幽霊」と kamimuɴ「食べ物」（4 モーラ b 型）

	単独形	=nu	=kara	=kara=mu
幽霊	[ma:]bu[i	[ma:]bui=[nu	[ma:bui]=ka[ra	[ma:bui]=ka[ra]=mu
食べ物	[kami]mu[ɴ	[kami]muɴ=[nu	[kami]muɴ=[mu	[kamimuɴ]=ka[ra

なお、モーラを担う鼻音連続の前半部と、語末の鼻音には、共通して /N/という音素を立てている。

3.2.1.1.2.3 阻害子音連続の前半部

表 3-14 は、「2 つの短母音と 1 つの長母音」から成る me:rabi「若い娘」と、「3 つの短母音と 1 つ子音連続」から成る mattibu「マッティブ」のアクセントの振る舞いをまとめたものである。表から分かる通り、me:ɾabi「若い娘」の語頭にある 1 つの長母音と、mattibu「マッティブ」の語頭にある「短母音＋阻害子音連続の前半部」は全く同じピッチ変動をしている。このため、「1 つの長母音」と「短母音＋阻害子音連続の前半部」は音韻的に同じ長さと言える。先に、「1 つの短母音」を 1 モーラ、「1 つの長母音を 2 モーラ」と定めたことから、阻害子音連続の前半部は 1 モーラを担うと考えられる。

表 3-14. me:rabi「若い娘」と mattibu「マッティブ（蛇の一種）」（4 モーラ c 型）

	単独形	=nu	=kara	=kara=mu
若い娘	[me:]ra[bi	[me:]ra[bi]=nu	[me:]ra[bi]=kara	[me:]ra[bi]=kara=mu
マッティブ	[mat]ti[bu	[mat]ti[bu]=nu	[mat]ti[bu]=kara	[mat]ti[bu]=kara=mu

3.2.1.2 音節の認定

国頭方言は 4 モーラ語の名詞アクセント（c 型、d 型）を記述する際に、音節という単位が必要になる（アクセントの詳細は 3.3 節を参照）。

国頭方言は上げ核 (raising kernel) の有無と位置が弁別的な体系である。上げ核は、核のある単位に後続する単位を上昇させる。また、上げ核を持つ語の語頭には、余剰的特徴として上昇が観察される。

4 モーラの名詞には a 型, b 型, c 型, d 型の 4 つのアクセント型がある（表 3-15）。a 型は核のない型、すなわち無核である。それ以外は核のある型であり、b 型は後ろから 1 モーラ目、c 型は後ろから 2 モーラ、d 型は後ろから 3 モーラ目に核がある。

このうち、c 型は核の後ろの 1 モーラを上昇させる他に、語頭を上昇させる。また、d 型は核の後ろを上昇させる。この時、c 型の語頭に観察される上昇と d 型の核の直後に観察される上昇が現れる単位を一般的に記述するために、音節という単位を導入する必要が生じる。

表 3-15. 4 モーラ語のアクセント:「解釈」の太字下線部は核の位置を表す。

型	意味	解釈	単独	nu	kara	kara=mu
a	額	/haraNcja/	haraN[cja	haraNcja=[nu	haraNcja=[kara	haraNcja=[kara]=mu
a	盃	/saazjicji/	saazji[cji	saazjicji=[nu	saazjicji=ka[ra	saazjicji=ka[ra]=mu
b	雷	/hamidu**ru**/	[hamidu]ru	[hamidu]ru=nu	[hamiduru]=ka[ra	[hamiduru]=ka[ra]mu
b	台所	/toogu**ra**/	[toogu]ra	[toogu]ra=nu	[toogura]=ka[ra	[toogura]=ka[ra]=mu
c	早朝	/sutu**mi**ti/	[su]tumi[ti	[su]tumi[ti]=nu	[su]tumi[ti]=kara	[su]tumi[ti]=kara=mu
c	若い娘	/mee**ra**bi/	[mee]ra[bi	[mee]ra[bi]=nu	[mee]ra[bi]=kara	[mee]ra[bi]=kara=mu
d	昨日	/ki**N**njuu/	[ki]N[njuu	[ki]N[njuu]=nu	[ki]N[njuu]=kara	[ki]N[njuu]=kara=mu
d	雀	/ju**mu**dui/	[ju]mu[dui	[ju]mu[dui]=nu	[ju]mu[dui]=kara	[ju]mu[dui]=kara=mu

問題の上昇は「モーラ」という単位を領域としていないことは明らかである。何故なら、例えば c 型の語頭で高くなっている sutumiti「早朝」の su は 1 モーラであるが、meerabi「若い娘」の mee は 2 モーラであり、モーラを用いるだけでは両者を統一的に説明できないからである。一方、問題の上昇が生じている要素の分節的構成に注目してみると、高いピッチが生じている要素が 1 モーラの場合は、その要素に含まれる母音が短母音 1 つであるのに対して、それが 2 モーラである場合は、その要素に含まれる母音が長母音 1 つあるいは二重母音 1 つであるか、あるいはその要素が短母音 1 つと直後の鼻音連続の前半部から構成されていることが明らかになる。したがって、問題の上昇を統一的に説明するためには、モーラより大きい単位、すなわち音節を定義する必要がある。次節で論じるように、長母音・二重母音の後半部あるいは子音連続の前半部は独立のモーラを構成できるが、独立の音節は形成できず、直前の要素（長母音・二重母音の場合はその前半部、

子音連続の場合は直前の母音）とともに 1 音節を形成する。問題の上昇は、この音節を単位として生じるということができる。

3.2.2　音節と音の並び

国頭方言の音節構造は、(3-61) のように表すことが出来る。C_1 の位置には、音節末に現れる鼻子音 /N/ を除くすべての子音が、 C_2 には半母音が入る。V_1, V_2 の位置にはすべての母音が入り得る（但し、組み合わせには制限がある）。C3 の位置には、N または、次の音節の C_1 と同じ子音が入る。

(3-61)　$(C_1)\ (C_2)\ V_1\ (V_2)\ (C_3)$

母音より前の子音を「頭子音（Onset）」、音節の中心となる母音を「核（Nucleus）」、母音より後の子音を「尾子音（Coda）」と呼び、それぞれの構造を以下に述べる。

3.2.2.1　頭子音の構造

頭子音には、最大で 2 つの子音が入る。C_1 の位置には、N を除くすべての子音が、 C_2 には半母音が入る。母音より前に子音が 2 つ並ぶ場合、C_1, C_2 に入る子音の組み合わせは (3-62) の通りである。

(3-62)　2 子音連続

C_1	C_2
ʔ,	半母音（j, w）
k, g, s, z, c, n, h, b, m, r, M	j
k, g	w

3.2.2.2　核の構造

音節は、核となる母音を必ず含む。核となる母音には (a) 短母音、(b) 長母音、 (b) 二重母音がある。このうち、(c) 二重母音には、前半部と後半部の組み合わせに制限がある。現時点で見つかっている、可能な組み合わせは(3-63) の通りである。

(3-63)　二重母音

ai, ui, oi, oe

3.2.2.3　尾子音の構造

尾子音に入ることが出来るのは、(a) N、または(b) 次の音節の頭子音と同じ阻害音である。(b) 子音連続が可能な子音は、(3-64) の通りである。

(3-64)　p, k, c, t, f, s, c

3.2.3　モーラの種類

モーラには、それ自体が音節を形成する「自立拍」（または Syllabic mora: Kubozono 1989）と、それ自体が音節を形成しない「特殊拍」（または Non- syllabic mora: Kubozono 1989）がある。

3.2.3.1　自立拍

それ自体が音節を担うモーラは「自立拍」と呼ばれる。2 つ以下の子音と、母音 1 つによって構成される。自立拍の構造は(3-65) のように表される。C_1, C_2, に入る子音は 3.2.2.1 で述べた通りである。

(3-65)　(C_1) (C_2) V

3.2.3.2　特殊拍

それ自体が音節を担わないモーラは「特殊拍」と呼ばれる。特殊拍には、(a) 長母音の後半部、(b) 二重母音の後半部、(c) 鼻音連続の前半部、または語末の鼻音、(d) 阻害子音連続の前半部がある。それぞれの例を(3-66) に挙げる（該当部分は太字で下線を付した）。

(3-66)　特殊拍の例

a. ni**i**「胸」、fa**a**「葉」、cji**i**「血」など
b. tu**i**「鳥」、ma**i**「尻」
c. ti**N**「空」、he**N**nja「腕」
d. mu**k**kwa「婿」、fa**t**tee「畑」

3.2.4　音節の重さ

音節の重さ (Syllable weight) によって、音節は「軽音節 (light syllable) 」「重音節 (heavy syllable) 」「超重音節 (super heavy syllable) 」に分類される。

3.2.4.1　軽音節

軽音節の構造は、(3-67) のように表すことが出来る。C_1, C_2, に入る子音は 3.2.2.1 で述べた通りである。

軽音節は、国頭方言において最もよくみられる音節である。

(3-67)　$(C_1)\ (C_2)\ V$

3.2.4.2　重音節

重音節の構造は、(3-68) のように表される。{ } は、/ で区切られたもののいずれかを選択するという意味を表す。$C_1, C_2,$ に入る子音は 3.2.2.1 に、$V_1\ V_2$ に入る母音は 3.2.2.2 に、C_3 に入る子音は 3.2.2.3 に述べた通りである。

(3-68)　$(C_1)\ (C_2)\ V_1\ \{V_2 / C_3\}$

3.2.4.3　超重音節

超重音節の構造は、(3-69) のように表される。$C_1, C_2,$ に入る子音は 3.2.2.1 に、$V_1\ V_2$ に入る母音は 3.2.2.2 に、C_3 に入る子音は 3.2.2.3 に述べた通りである。

(3-69)　$(C_1)\ (C_2)\ V_1\ V_2\ C_3$

超重音節は、借用語やオノマトペなどにしか現れず、一般語彙では禁止される。例えば、動詞の*sji「する」が非過去接辞-ju を接続すると、形態音韻規則 f「#Ci(j)V → #CjVV（語頭の CiV または CijV の連続は CjVV になる）」を被って sjuuN という超重音節の形式が予測される。しかし、実際の表層形は sjuN という重音節である。これは、超音節を避けた結果だと解する。

超重音節を避けて sjuN になったと考える根拠として、同じ動詞において、sjuunu「する」（重音節＋軽音節）は、長母音の短音化が起きにくく、そのまま sjuunu となることが挙げられる。

(3-70)	sji	+	-ju	-N	→	sjuuN	→	sjuN
	する		NPST	IND	規則 f		規則 h	する

(3-71)	sji	+	-ju	-nu	→	sjuunu
	する		NPST	ADN	規則 f	

同様のことは*mi「見る」や*ku「来る」の変化においても観察される。

3.3　アクセント

3.3 節では、アクセントの体系について論じる。国頭方言は、音の相対的な高低によって語を弁別するピッチ・アクセント (pitch accent) を持つ。国頭方言アクセントの先行研究には一定の蓄積がある。アクセント資料として上野（1997, 1998, 1999）、体系の解釈を行ったものに松森（2000a）、高山（2013）がある。また、近隣の和泊方言の体系を整理したものに平山（1986）がある。

日本語のアクセント研究は、大多数の日本本土諸方言が、語の特定の位置に 1 度だけ生じる、特定の形状（下降あるいは上昇）を有するピッチ変化が、弁別機能を持つ体系を持つことを明らかにしている。この局所的なピッチ変化は「アクセント核」あるいは単に「核」（kernel）と呼ばれる。国頭方言もまたアクセント核という概念を導入することで妥当に記述することができる体系を持つ。

アクセント核と呼ばれるピッチ変化は、個別方言において特定の形状を有する。例えば日本語東京方言のアクセント核はピッチ下降によって実現される。一方、日本語弘前方言でのアクセント核はピッチ上昇によって実現される。同一の方言内に、異なるピッチ形状を持つアクセント核が共存することは、一般的ではない。国頭方言のアクセント核はもっぱらピッチ上昇によって実現される。

ピッチ上昇によって実現されるアクセント核はさらに、上昇の生じるタイミングに基づいて「昇り核」 (ascending kernel) と「上げ核」 (raising kernel) とに下位分類される（Uwano 2012）。昇り核は、核のある韻律単位（音節あるいはモーラ）のピッチを高める働きを持つ核である。それに対して上げ核は、核のある韻律単位の直後の韻律単位のピッチを高める働きを持つ核である（Uwano 2012）。本節では、高山（2013）にならい、国頭方言は上げ核の有無と位置が弁別的な体系であると考える。

3.3.1　概論

前述のように、国頭方言は核の有無と位置が弁別的である体系を持つ。すなわち、国頭方言の語は、核を持つもの（hagami「鏡」、futabi「今年」、guzjija「鯨」など）と持たないもの（hjibusji「煙」など）とに分類することが可能である。核を持つ語にはさらに核の位置に基づいて下位分類することが可能である。例えば hagami「鏡」は後ろから 1 モーラ目に核がある語であり、futabi「今年」は後ろから 2 モーラ目に核がある語であり、guzjija「鯨」は後ろから 3 モーラ目に核がある語である。国頭方言における核の位置は、後ろから 1 モーラ目、後ろから 2 モーラ目、後ろから 3 モーラ目のいずれかである。したがって核の有無（あるかないか）と位置（後ろから 1 番目か 2 番目か 3 番目か）とに基づいて、4 種類のアクセント型が区別される。

以下、国頭方言の 4 種類のアクセント型をそれぞれ a 型、b 型、c 型、d 型と呼ぶことにする。a 型は核のない型、すなわち無核であり、b 型、c 型、d 型は核のある型、すなわち有核である。b 型は後ろから 1 モーラ目に核がある型、c 型は後ろから 2 モーラ目に核があ

る型、d 型は後ろから 3 モーラ目に核がある型である。

3.3.2　アクセントの表記法

アクセントの表記は、(3-72) で示した上野（2006：2）にならう。相対的なピッチの上昇を“[”相対的なピッチの下降を“]”で表す。例えば、日本標準語の「箸」のように「高低」のピッチを表す場合には[ha]sji と表す。

(3-72)　アクセントの表記法（上野（2006 d：2）より抜粋。○は韻律単位を表す。）

[拍間の上昇（[○○は「高高」）	[[拍内での上昇（[[○は 「昇」 ）
] 拍間の下降（[○]○は「高低」）	]] 拍内での下降（[○○]]は 「高降」 ）
! 拍間の小幅な下降（[○!○は「高中」）	!! 拍内での小幅な下降（[○!!は「高-中」 ）
% 拍間の小幅な上昇（○%○は「低中」）	○ 拍（音節かモーラかには立ち入らず）

3.3.3　名詞のアクセント

筆者の分析によると、国頭方言の名詞のアクセント型の実現は、以下のように概略的に記述できる。

(3-73)　アクセント型の実現

a. 核を担う韻律単位はモーラである。
b. a 型は核のない型であり、b 型は後ろから 1 モーラ目に、c 型は後ろから 2 モーラ目に、d 型は後ろから 3 モーラ目に核がある型である。ただし b 型は 2 モーラ以上の助詞が後接するとき、核の位置が 1 モーラ右側に移る。
c. 核は上げ核であり、核があるモーラの次の韻律単位を上昇させる。
d. 上げ核が上昇させる韻律単位は、語が 4 モーラ d 型の場合には 1 音節であるが、それ以外の時は 1 モーラである。
e. 核によって上昇させられた韻律単位の次の要素から、ピッチが下降する。
f. 弁別的な上げ核とは別に、非弁別的（余剰的）なピッチ変化が現れる。具体的には有核語（b 型、c 型、d 型）には「語頭隆起」、無核語（a 型）には「余剰的上昇」が現れる。
g. 有核語（b 型、c 型、d 型）には語頭隆起、すなわち、核があるモーラより前の要素に高いピッチが現れる。b 型は該当する全てのモーラが高くなる。c 型、d 型は語頭の 1 音節が高くなる。
h. 無核語（a 型）には余剰的上昇、すなわち弁別的でないピッチ上昇が、「語＋助詞 1 つ」の単位（「文節」と呼ぶ）の中で上昇する。（語頭は低く始まる。）上昇の位置は後続する助詞によって予測可能であり、したがって余剰的特徴である。

3.3.3.1　2 モーラ語

国頭語には最小語制約 (word minimality constraint: Ito1990) があり、語は 2 モーラ以上の長さを持つ。2 モーラの名詞は 3 種類の型（a 型、b 型、c 型）が対立する（d 型が欠如）。2 モーラ名詞の場合、単独形では 3 種類の型の区別が明瞭でないが、その名詞に助詞を接続することで a 型、b 型、c 型の 3 つの型を区別することが出来る（表 3-16）。

表中の「解釈」はアクセントの音韻論的解釈を示し、核の位置を下線・太字で示す。「系列」は、松森（2012）によって提案された「琉球語調査用系列別語彙」における系列を指す。「系列」とは琉球祖語に暫定的に再建される 3 種類のアクセント型によって区別される語のグループを指し、A 系列、B 系列、C 系列からなる。

a 型は無核で、当該の語を含む文節末に向けてピッチが上昇する。=[kara]=mu に見られる下降については、(3-73) では説明できず、どのような動機によってもたらされるのか明らかではない。また a 型の余剰的な高ピッチの出現に関して、上昇要素の長さや、語境界をまたぐことに対して何らかの制約がある可能性を考えているが、現時点では保留課題である。b 型は語の後ろから 1 モーラ目に核があり、従って核の次のモーラが上昇する。また核のあるモーラに先行する全てのモーラが高いピッチとなる。b 型に特徴的なのは、2 モーラ以上の助詞が後続した際に、核の位置が 1 モーラ右側に移ることである。c 型は後ろから 2 つ目のモーラに核があり、したがって核の次のモーラが上昇する。

表 3-16. 2 モーラ語のアクセント

型	意味	解釈	系列	単独	=nu	=kara	=kara=mu
a	血	/cjii/	A	cji[i	cjii=[nu	cjii=[kara	cjii=[kara]=mu
a	水	/mizji/	A	mi[zji	mizji=[nu	mizji=[kara	mizji=[kara]=mu
a	鳥	/tui/	A	tu[i	tui=[nu	tui=[kara	tui=[kara]=mu
b	目	/mi**i**/	B	mi[i	[mi]i=[nu	[mii]=ka[ra	[mii]=ka[ra]=mu
b	山	/ja**ma**/	B	[ja]ma~[jama	[ja]ma=[nu	[jama]=ka[ra	[jama]=ka[ra]=mu
b	麦	/mu**zji**/	B	[mu]zji	[mu]zji=[nu	[muzji]=ka[ra	[muzji]=ka[ra]=mu
c	中	/**na**a/	C	na[a	na[a]=nu	na[a]=kara	na[a]=kara=mu
c	鍋	/**na**bi/	C	na[bi	na[bi]=nu	na[bi]=kara	na[bi]=kara=mu
c	桶	/**wu**i/	C	wu[i	wu[i]=nu	wu[i]=kara	wu[i]=kara=mu

3.3.3.2　3 モーラ語

3 モーラ語は a 型、b 型、c 型、d 型の 4 つの型のいずれかに分類される（表 3-17）。a 型、b 型の体系は 2 モーラ語と同じである。

c 型の sjuuki「ご馳走」は 核が語頭 2 モーラ目にあり、核の前の 1 モーラのみが語頭隆起している。この語頭隆起は、(3-73) g の「c 型は語頭の 1 音節が高くなる」に厳密には反している。これは、語頭隆起されるはずの 1 音節内に核が含まれたことによるものであ

る。すなわち、核に関する(3-73) c「核は上げ核であり、核があるモーラの次の韻律単位を上昇させる」が、核の余剰特徴に関する(3-73) g に優先され、核を担うモーラが低いピッチに保たれた結果であると考える。

d 型は後ろから 3 モーラ目に核があり、従って核の次のモーラが上昇する。下がり目は、核の前と、核に押し上げられたモーラの後に起きる。

d 型の所属語彙は、後に述べる通り guzjija「鯨」kicjine「狐」nuzumi「鼠」など、非常に少数の語に限られている。しかしこのアクセント型は、3 モーラの人名（人の名前：ta[ka]ko「たかこ」fu[mi]e「ふみえ」など）に最も一般的であり、「外来語」（te[re]bi「テレビ」ka[me]ra「カメラ」）にもしばしばみられる。通説では、琉球祖語には 3 種類のアクセント型が再建されること（松森 2012）、4 種類以上の型を持つ体系は琉球語諸方言では一般的でないことを考慮すると、国頭方言に 4 種類の型が存在する事実は説明を要する。しかしながら、少なくとも共時的には、3 モーラ以上の語に 4 つのアクセント型を認めることが妥当である。

表 3-17. 3 モーラ語のアクセント

型	意味	解釈	系	単独	=nu	=kara	=kara=mu
a	煙	/hjibusji/	A	hjibu[sji	hjibusji=[nu	hjibusji=[kara	hjibusji=[kara]=mu
a	踊り	/wudui/	-	wudu[i	wudui=[nu	wudui=[kara	wudui=[kara]=mu
b	鏡	/haga**mi**/	B	[haga]mi	[haga]mi=[nu	[hagami]=ka[ra	[hagami]=ka[ra]=mu
b	豆	/maa**mi**/	B	[maa]mi	[maa]mi=[nu	[maami]=ka[ra	[maami]=ka[ra]=mu
c	今年	/fu**ta**bi/	C	[fu]ta[bi	[fu]ta[bi]=nu	[fu]ta[bi]=kara	[fu]ta[bi]=ka[ra]=mu
c	ご馳走	/sju**u**ki/	-	[sju]u[ki	[sju]u[ki]=nu	[sju]u[ki]=kara	[sju]u[ki]=ka[ra]=mu
d	鯨	/**gu**zjija/	-	gu[zji]ja	gu[zji]ja=nu	gu[zji]ja=kara	gu[zji]ja=ka[ra]=mu
d	狐	/**ki**cjini/	-	ki[cji]ni	ki[cji]ni=nu	ki[cji]ni=kara	ki[cji]ni=ka[ra]=mu

3.3.3.3 4 モーラ語

4 モーラには少なくとも a 型、b 型、c 型、d 型の 4 つの型がある（表 3-18）。a 型の体系は 3 モーラまでと同様である。b 型の語で、語末音節が重音節の場合には、表中の heNnjaa「二の腕」にみられるように、単独形のピッチの上昇位置が異なるなど、変則的なピッチ・パターンとなる。この変則性は「語末音節が重音節」という特殊な音韻構造に起因すると思われるが、どのように説明できるかは今後の課題である（他に kamimuN「食べ物」maabui「幽霊」taNnjaa「タニシ」がこの変化をする）。c 型は後ろから 2 モーラ目に核があり、従って次のモーラが上昇する。また、語頭の 1 音節が高いピッチとなる。d 型は後ろから 3 モーラ目に核があり、核の次の音節が上昇する。また、語頭の 1 音節も高いピッチとなる。

表 3-18. 4 モーラ語のアクセント

型	意味	解釈	系	単独	nu	kara	kara=mu
a	額	/haraNcja/	-	haraN[cja	haraNcja=[nu	haraNcja=[kara	haraNcja=[kara]=mu
a	盃	/saazjicji/	-	saazji[cji	saazjicji=[nu	saazjicji=ka[ra	saazjicji=ka[ra]=mu
b	雷	/hamidu**ru**/	B	[hamidu]ru	[hamidu]ru=[nu	[hamiduru]=ka[ra	[hamiduru]=ka[ra]mu
b	台所	/toogu**ra**/	B	[toogu]ra	[toogu]ra=[nu	[toogura]=ka[ra	[toogura]=ka[ra]=mu
b	二の腕	/heNnja**a**/	B	[heN]nja[a	[heN]njaa=[nu	[heNnjaa]=ka[ra	[heNnjaa]=ka[ra]=mu
c	早朝	/sutu**mi**ti/	C	[su]tumi[ti	[su]tumi[ti]=nu	[su]tumi[ti]=kara	[su]tumi[ti]=kara=mu
c	若い娘	/mee**ra**bi/	C	[mee]ra[bi	[mee]ra[bi]=nu	[mee]ra[bi]=kara	[mee]ra[bi]=kara=mu
d	昨日	/ki**N**njuu/	-	[ki]N[njuu	[ki]N[njuu]=nu	[ki]N[njuu]=kara	[ki]N[njuu]=kara=mu
d	雀	/ju**mu**dui/	-	[ju]mu[dui	[ju]mu[dui]=nu	[ju]mu[dui]=kara	[ju]mu[dui]=kara=mu

3.3.3.4 d 型の通時的解釈について

松森（1999、2000b）では琉球祖語に少なくとも 3 つのアクセント型があったとしている。一方、本稿で見た通り、国頭方言には 3 モーラ語に 4 つ、4 モーラ語に（少なくとも）4 つの型が認められる。松森の議論を前提にしたとき、国頭方言の 4 つ目の型（d 型）の通時的解釈には 2 つの可能性がある。

(3-74)　d 型の通時仮説

A. d 型は琉球祖語に遡る型であり、琉球祖語に少なくとも 4 種類のアクセント型を認める必要がある。
B. d 型は琉球祖語の崩壊後に新たに生じた型であり、琉球祖語に 4 以上のアクセント型を認める必要はない。

以下に論じるように、筆者による分析によると(B) が支持される。以下、国頭方言における d 型は、3 種類の型が対立する琉球祖語の体系から新たに発生した型である可能性が高く、琉球祖語における対立アクセント型の数は 3 であったとする松森（1999; 2000b）の仮説は保持されることを述べる。

3.3.3.4.1 d 型の所属語彙について

先行研究、および筆者の調査から、d 型の所属語彙（外来語、人名を除く）は 3 モーラ語に 6 語、4 モーラ語に 28 語が確認された。まず所属語彙の多い 4 モーラから述べる。

3.3.3.4.1.1 4 モーラ d 型

4 モーラ名詞のアクセント型は表 3-19 の通りである。表中のデータのうち、高山（2013）から引用したものには(T) と記した。また、訳の横に「系列語彙（松森 2012）」

における系列を示した。

表 3-19 のうち、d 型に属する語に着目すると、その全てが「最終音節が重音節」という音節構造を持つ。このため d 型は、特定のアクセント型から、特定の音韻構造を持った語が分裂して形成されたと考えられる。

この「特定のアクセント型」について、d 型の所属語彙を見ると「系列語彙（松森 2012）」で C 系列に分類された語が 7 語、B 系列に分類された語が 4 語、A 系列は皆無である。ただしこの B 系列に分類された語 4 語のうち 3 語は、松森（2012）の分析に議論の余地がある。hjiizjai「左」は琉球諸方言で B 系列対応の場合と、C 系列対応の場合があり、対応にばらつきがある。この語は、琉球祖語では C 系列に属していた可能性がある。oodaa も同様に、多良間方言や池間方言では C 系列対応である（松森 2010; 五十嵐他 2012）。また、fuumui「水溜り」は動詞由来の語である可能性がある。動詞由来の語の系列に関しては不明な点が多く、ある方言で B 系列対応の動詞由来の語が、別の方言では一貫して C 系列で現れることがあることがすでに五十嵐（2016）によって指摘されている。このため、現時点では「C 系列から、最終音節が重音節の語が分裂した」と推定することは合理的であると思われる。

表 3-19. 4 モーラ名詞のアクセント型

	所属語彙
a 型	mucjigumi「餅米」、mizjikumi「水汲み」haraNcja「額」maraNcja「まな板」saNsjiru「三線」
b 型	hamiduru「雷：B」niibicji (T)「結婚：B」toogura「台所：B」naabira (T)「へちま：B」sjaamii (T)「虱：C」damakasji「嘘」jaamisji「結納」niibicji「結婚式」heNnjaa「二の腕」taNnjaa「タニシ」maabui「幽霊」kamimuN「食べ物」
c 型	aatucji「暁：C」sutumiti「朝：C」iccjubi「苺：C」meerabi「若い娘：C」deekuni「大根：C」hjibugasji「蜘蛛の巣」naamicju「再来年」faNzjicji「刺青」mattibu「マッティブ」baNsjiru「グァバ」basaNko「ハイビスカス」」naasubi「茄」basjaumu「バナナ」miNbucji「念仏」tuNgusji「かんざし」waabicji「天気」sjiibui(T)「冬瓜」
d 型	jiizee (T)「鋤：B」fuumui (T)「水溜り：B」oodaa (T)「草を運ぶ網：B」hjiizjai「左：B」gazjamuN (T)「蚊：C」azjimuN (T)「杵：C」kiNnjuu「昨日：C」taamuN (T)「薪：C」iccjuu「糸：C」kussui「薬：C」fattee「畑：C」naacjaa (T)「明日[13]」jumudui「雀」cjizjikuN「拳」mimigui「きくらげ」cjiNtai「蝸牛」

[13] naacjaa は「また・もう」を表す naa と、*asjita「明日」の複合名詞であると考えられる。このため、松森（2012）の「系列語彙」で B 系列になっている*asjita「明日」と naacjaa は別語源と考えた。

表 3-20. 4 モーラ名詞のアクセント型（続き）

	所属語彙
d 型	juuzai「喧嘩」munumii「心配」ucjukui「手拭」miNzjiN「人参」cjoogoi「水肥え?」tamasjii「魂」sjiibai「小便」gujaguu「夜光貝」maNcjaa「サナギ」utugee「顎」
?	[hoo]kusu「あざ」

3.3.3.4.1.2 3 モーラ d 型

3 モーラ d 型に属する語は、(3-75) の通りである。

(3-75) に挙げた 6 語のうち、4 モーラ語で述べた仮説「琉球祖語 C 系列の語のうち、最終音節が重音節の語が d 型を形成した」によって説明できるのは、taree「盥」1 語のみであり、残りの 5 語は仮説の例外とみなしうる。しかしながら、この 5 のうち少なくとも 4 語は借用語の可能性が高い。これについては後述する。重要なことは、この仮説に反する「最終音節が重音節だが、c 型に属する」語が皆無であるということである。このため、引き続きこの仮説を保持する。

(3-75)　d 型を取る語
taNgu (T)「樽の浮き：C」、taree (T)「盥：C」、guzjija「鯨」、fukuru「袋」、kicjini「狐」
nuzumi「鼠」

3 モーラ d 型には、一般語彙の所属が非常に少ない一方で、(3-76)「人名」や、(3-77)「外来語」の所属が多い。また、これらの語彙の音韻構造に偏りはない。このため、ある時点で d 型は「借用語」の型として定着した可能性がある。

(3-76)　d 型を取る人名
akiko「あきこ」masako「まさこ」sawako「さわこ」 takajo「たかよ」misaki「みさき」
micjiko「みちこ」fumie「ふみえ」 jukie「ゆきえ」josjie「よしえ」kacumi「かつみ」
jasuka「やすか」secuko「せつこ」nobuko「のぶこ」sacjiko「さちこ」 akemi「あけみ」
takeko「たけこ」satomi「さとみ」

(3-77)　「外来語」で d 型を取るもの
terebi「テレビ」razjio「ラジオ」tomato「トマト」bideo「ビデオ」kjabecu「キャベツ」

ここで、再び (3-75)「d 型を取る語」に着目すると、fukuru「袋」、kicjini「狐」、nuzumi「鼠」、taNgu「水桶」、についても (3-77) で挙げた「外来語」と同様に、他方言から取り

入れられた借用語である可能性がある。

fukuru「袋」について言えば、琉球語諸方言間でアクセントおよび分節音の対応が不規則であることから、借用語である可能性が指摘されている（五十嵐 2016）。kicjini「狐」については、沖永良部島には狐がおらず、琉球諸方言（首里、金武、伊江島）間でもアクセントが規則的に対応しないことから[14]、借用語である可能性が高い。nuzumi「鼠」について、他の沖永良部諸方言では「鼠」を意味する語は jumunu あるいは oisja であり（徳永 2012）、国頭方言のみ日本本土諸方言に近い nuzumi という形式を用いていることから、比較的新しい時代に日本本土諸方言から取り入れられた可能性が高い。taNgu「水桶」については、琉球列島だけでなく日本本土にも同じ意味を持つ「タゴ」「タンゴ」といった形式が広く分布していることから（『日本語方言大辞典』）、日琉祖語に遡る可能性も直ちには否定できない。しかしながら、『日本国語大辞典』の記載する、この語が例証される文献のうち最も古いものが、室町時代の文献であることや、この語の少なくとも前部要素が漢語（「担」）である可能性があることから、日琉祖語に遡る可能性は低いと思われる。したがって、比較的新しい時代の借用語とみなし得る可能性がある。

以上のことから、fukuru, kicjini, nuzumi, taNgu は他方言から取り入れた借用語である可能性が高いと言える。

一方で、guzjija「鯨」については、他方言と比較する限り、規則的な音対応がみられることなどから琉球祖語に遡る可能性が高く、借用語とは考えにくい。このため、例外と考える必要がある。

3.3.3.4.2　d 型の通時的解釈

以上の分析から、d 型の通時的解釈を以下のよう行う。まず、第 1 段階として、C 系列の語のうち「最終音節が重音節である」という音韻構造を持つ語に分裂が生じ、新たな型（d 型）を生じる。この段階では c 型と d 型は相補分布しており、両者は条件異音とみなすことができる。第 2 段階として、この新たに生じた d 型は、人名や借用語のアクセント型として定着し、音韻構造とは関係なく人名・借用語がこの型に所属するようになる。この段階では、d 型の分布が音環境によって予測不可能となるため、c 型と d 型が対立することになる。このように解釈すれば、d 型は琉球祖語の崩壊後に、琉球祖語の 3 系列（のうち C 系列）から新たに生じた型であり、琉球祖語に 4 以上の系列を認める必要はない。

但し、この仮説に反する例外とみなさざるを得ない語が少なくとも、3 モーラに 1 語（B 系列とされている guzjija「鯨」）、4 モーラ語に 1 語（B 系列とされている jiizee (T)「鋤」）ある。また、4 モーラ語における「?」型（ho:kusu「ほくろ」）の位置づけも明らかではない。今後、諸方言での比較研究も含めて検討していく必要がある。

---

[14] 国立国語研究所編（2001）、松森（2008）、生塩（2009）

3.3.4　動詞のアクセント

動詞のアクセントについては、上野（1997）、高山（2013）のデータを用いて分析する（データは資料編に収録）。動詞のアクセントは a 型、b 型の 2 つの型がある（高山 2013）（表 3-21）。

a 型は無核だが、語末にかけてピッチが上昇する。上野（1997）のデータでは n モーラの動詞において、語末から数えて n-2 モーラ分のピッチが高くなっている。高山（2013）のデータでは、2 モーラ語は語頭から、3 モーラ以上では juN 以降から高いピッチとなる。b 型は語末から 2 モーラ目に核があり、次のモーラを上昇させる。また核より前のモーラすべてが高いピッチとなる。

表 3-21. 動詞のアクセント体系（データは上野 1997 より）

	2 モーラ		3 モーラ		4 モーラ		5 モーラ	
a	着る	kju[N	巻く	macju[N	買う	foo[juN	固まる	hata[majuN
b	切る	!kju][N	待つ	[ma]cju[N	這う	[foo]ju[N	流れる	[nagari]ju[N

3.3.5　形容詞のアクセント

形容詞のアクセントについても、上野（1997）、高山（2013）のデータを用いる（データは資料編に収録）。形容詞のアクセントは a 型、b 型、c 型の 3 つの型がある（高山 2013）（表 3-22）。形容詞は「形容詞語根＋形容詞接辞 sa/sja」が語幹を形成する。語幹のみで自立語となりうるが、多くの場合はコピュラ動詞*a が後続する。形容詞語幹とコピュラ動詞は 2 語として発音されることも、1 語化することもある（4 章 4 節「形容詞形態論」参照）。表 3-22 では 1 語化した場合のアクセントを示している。

a 型は無核だが、語幹末からピッチが高くなる。b 型は、形容詞接辞-sa を含まない、語根末から 1 モーラ前に核があり、その次のモーラを上昇させる。また核の前の全てのモーラも高いピッチとなる。c 型は語根末から 2 モーラ目に核があり、その次のモーラを上昇させる。このように、形容詞のアクセントのドメインには、形容詞接辞-sa が含まれない点が留意される。

形容詞の c 型は筆者の追加調査でも確認されたが、所属語彙が非常に少ないため、高山（2013）の述べる通り、何らかの条件で新たに生じた型だと思われる。

表 3-22. 形容詞のアクセント型（高山 2013：143）より）

型	3 モーラ	4 モーラ	5 モーラ
a	-	]asa[saN「浅い」	]mucjika[sjaN「うるさい」
b	Ma[sa]N「旨い」	[cju]ra[sa]N「綺麗」	[hjizju]ru[sa]N「冷たい」
c	-	i[ku]saN「小さい」	nuN[gi]saN「恐ろしい」

3.4　イントネーション

3.4 節では、疑問文のイントネーションについて述べる。Ladd (2008) の定義によると、イントネーションとは「ポストレキシカルな、あるいは文レベルの語用論的意味を、言語学的に構造化された方法で伝達する、超分節的な音声特徴の使用」を指す[15]。ここで言う「言語学的に構造化されている」とは、範疇的に区別できる要素（「上昇」や「低調」の有り／無しなど）や関係性（「より強い」「より弱い」など）の観点から構造化されているという意味である。

イントネーションが伝達する意味には、談話的意味（discoursal meaning：会話への勧誘など)、態度的意味（attitudinal meaning：謙遜の表現など)、文法的意味（grammatical meaning：文構造の標示など）などがある (Cruttenden 1986/1997: 8) 。

日琉諸方言の韻律研究は、アクセント研究に膨大な蓄積がある一方で、イントネーションの研究は発展中の分野である。近年、木部（2006）を始めとした日本本土諸方言でのデータ構築や、木部（2010)、Igarashi (2012) などの類型化の枠組みが提示されている。

琉球諸方言におけるイントネーションの研究は、首里方言について述べた永野・狩俣（2009)、永野（2010)、宮古島伊良部方言について述べた永野（2012）等の記述研究があるが、国頭方言および沖永良部語に関する報告は管見の限り無い。本節では、国頭方言のイントネーションに関する初期報告として、疑問文におけるイントネーションの体系を述べる。

3.4.1　枠組み

日本本土諸方言における疑問文の文末イントネーションについては、木部（2010）が類型化を試みている。木部（2010）によると、日本本土諸方言における疑問文の文末イントネーションは以下の 5 つのタイプに類型化出来る。

(a) 上昇調：疑問を表す語形式の有無に関わらず、文末が上昇調になる
(b) 下降調１：疑問を表す語形式の有無に関わらず、文末が下降調になる
(c) 下降調２：疑問を表す語形式が文中に必ず現れ、文末が下降調になる
(d) 相補タイプ：疑問を表す語形式が文中にあれば下降調、なければ上昇調になる
(e) 句末漸上昇：疑問詞から句末マーカーまで緩やかに上昇する

国頭方言のイントネーションは上記の類型に完全には当てはまらない。以下に述べる通り、国頭方言の疑問文は、「文末の音節を低くする」というイントネーションの特徴がある。ただし、疑問を表す語形式の他に、述語のアクセント型、平叙文と疑問文の弁別性と

[15] Intonation refers to the use of suprasegmental phonetic features to convey 'postlexical' or sentence-level pragmatic meanings in a linguistically structured way (Ladd2008: 4).

いった条件によってイントネーションに変動が見られる。

3.4.2　疑問文の構造

国頭方言の疑問文は、形態統語的に大きく 3 つに分けることが出来る（表 3-23）。文中に疑問詞を含み、相手に具体的な回答を要求する疑問文を「内容疑問文」、文中に疑問詞は用いないが、疑問の助詞や接辞形式を用い、相手に肯定か否定の回答を要求する疑問文を「肯否疑問文」、形態統語的な標示はなく、イントネーションのみで疑問を示す文を「無標示疑問文」と呼ぶ[16]。

表 3-23. 疑問文の形態統語的分類

	疑問詞	疑問の助詞・接辞形式
内容疑問文	＋	＋
肯否疑問文	－	＋
無標示疑問文	－	－

内容疑問文は、(3-78) A のように聞き手に具体的な回答を要求し、肯否疑問文と無標示疑問文は、(3-79) A, (3-80) A のように聞き手に肯定／否定の回答を要求する。

疑問文はなんらかの形態統語的標示を用いるのが普通だが、単純な構造の疑問文や、聞き返し（話し手が先行する発話の全て、もしくは一部を繰り返す：echo question (Brown, Currie and Kenworthy: 1980) 」において、(3-80) A のように無標示疑問文を用いることがある。

(3-78)　A:　*nuunu*　　*haritijoo?*
　　nuu=nu　　hari-Ø-i=joo
　　何=NOM　　腫れる-PST-Q=WHQ
　　何が腫れたの？

　　B:　*gubunudu*　　*haritarusjaa*
　　gubu=nu=du　　hari-a-ru=sjaa
　　おでこ=NOM=FOC　腫れる-PST-MSB=SFP
　　おでこが腫れたよ。

[16] 選択式の回答を要求する「選択疑問文」（6 章 3 節「モダリティ」を参照）は、形態統語的に「内容疑問文」と同じ振る舞いをする。また、イントネーションも「内容疑問文」と同じであるため、本稿では「内容疑問文」に含む。

(3-79) A: *jaani* *nooka* *wasjiritinaa?*
jaa=ni nuu=ka wasjiri-i=naa
家=LOC 何=か 忘れる-PST=YNQ
家に何か忘れたの？

B: *ai* *wana* *nuumu* *wasjiriti* *naNdoo*
ai wana nuu=mu wasjiri-i na-N=doo
いや 1SG 何=ADD 忘れる-SEQ ない-IND=SFP
いや、私は何も忘れていないよ。

(3-80) A: *ariwa* *hjibusjii?*
ari=wa hjibusji
あれ=TOP 煙
あれは煙？

B: *iN* *gaNdjaa*
iN gaN=djaa
うん そう=SFP
うん、そうだよ。

3.4.3 疑問文のイントネーション

3.4.3.1 で名詞述語の疑問文、3.4.3.2 で動詞述語の疑問文における、イントネーションの様相を述べる。

3.4.3.1 名詞述語の疑問文

ピッチ・アクセントを用いる言語においては、文末イントネーションを捉える為に、文中の語、特に述語のアクセントを考慮する必要がある。以下では、a 型、b 型、c 型、d 型のアクセント型を取る 3 拍名詞（表 3-24）を述語に取る場合の疑問文について述べる。

表 3-24. 3 モーラ名詞のアクセント型
太文字下線部はアクセント核を示す。=は形態素境界、μ は 1 モーラを指す

型	意味	解釈	単独	=μ
a	煙	/hjibusji/	hjibu[sji	hjibusji=[μ
b	鏡	/haga**mi**/	[haga]mi	[haga]mi=[μ
c	できもの	/ni**bu**tu/	[ni]bu[tu	[ni]bu[tu]= μ
d	鼠	/**nu**zumi/	nu[zu]mi	nu[zu]mi=μ

3.4.3.1.1　肯否疑問文

名詞述語の肯否疑問文は、肯否疑問助詞=naa を用いる。以下、左側の図は名詞述語に文末助詞=doo「～よ」を接続した平叙文、右側の図は名詞述語に肯否疑問助詞=naa「～か？」を接続した肯否疑問文である。

以下で確認する通り、肯否疑問文は「文末音節が低くなる」という特徴がある。

なお、a 型、b 型は平叙文と肯否疑問文とで異なる文末イントネーションを取るのに対し、c 型、d 型はイントネーション上の目立った差異がない。これは、a 型、b 型がアクセントの特徴として「文節末が下がらない」ために、「文末音節が低くなる」という疑問のイントネーションが顕在化するのに対し、c 型と d 型は「文節末が下がる」という特徴を持っているために、疑問イントネーションが顕在化しないためだと思われる。平叙文と肯否疑問文に必ずしもイントネーション上の区別が必要ないのは、肯否疑問文において平叙文／疑問の区別が形態統語的に標示されている為だと思われる。

① a 型アクセント：hjibusji「煙」

a 型名詞は無核のため、平叙文において、最終音節が高く平らに発音される（図 3-4）。一方肯否疑問文においては、次末音節でピッチが上昇したのち、最終音節に入る直前からピッチが下降する（図 3-5）。

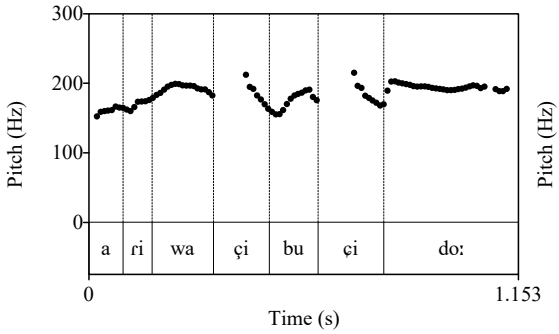


図 3-4. aɾi[wa] ɕibuɕi[do:「あれは煙だ」

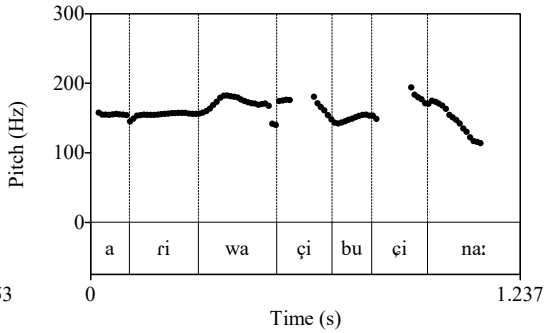


図 3-5. aɾi[wa] ɕibu[ɕi]na:「あれは煙か？」

② b 型アクセント：haga**mi**「鏡」

b 型は名詞の最終モーラに核があるため、平叙文においては、次末音節（名詞の最終モーラ）でピッチが下降したのち、最終音節は高く平らに発音される（図 3-6）。一方で肯否疑問文は、核の力によって次末音節から最終音節に向けてピッチが上昇したのち、最終音節内部で再び下降が生じる（図 3-7）。

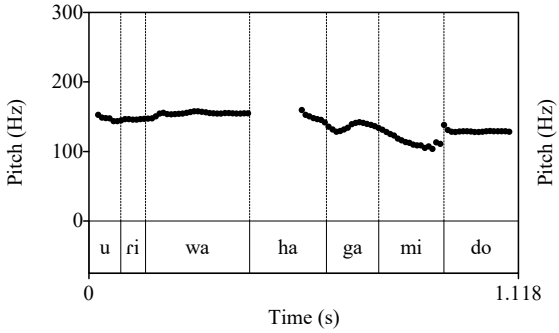


図 3-6. uɾi[wa haga]mi[do:「鏡だ」

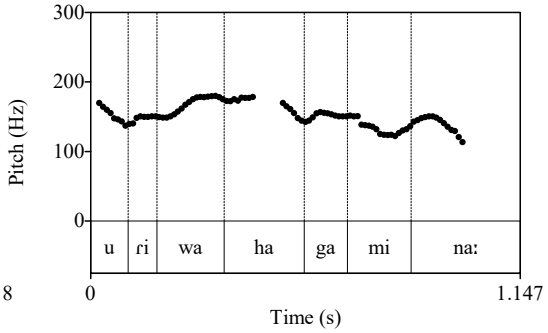


図 3-7. uɾi[wa haga]mi[na]a「鏡か？」

③ c 型アクセント：ni**bu**tu「腫れ物」

c 型は名詞の後ろから 2 モーラ目に核があるため、平叙文においては、次末音節（名詞の最終モーラ）が高くなった後、文末にかけて下降が生じる（図 3-8）。肯否疑問文においても同様で、核の力によって次末音節（名詞の最終モーラ）が高くなった後、文末にかけて下降が生じる（図 3-9）。平叙文と肯否疑問文にイントネーション上の目立った差異はない。

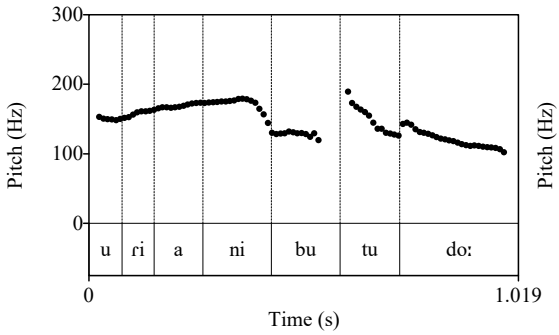


図 3-8. uɾi[a ni]bu[tu]do:「それは腫れ物だ」

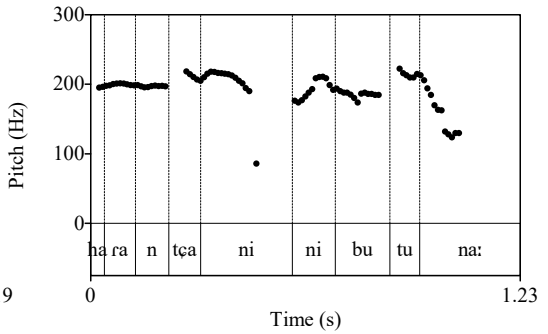


図 3-9. haɾantɕa[ni] [ni]bu[tu]na:「おでこに腫れ物か？」

④ d 型アクセント：**nu**zumi「ねずみ」

d 型アクセントは名詞の後ろから 3 モーラ目に核があるため、平叙文では、名詞の次末モーラ(zu)が高くなった後、文末にかけてピッチが徐々に下降する（図 3-10）。肯否疑問文においても同様で、核の力によって名詞の次末モーラが上昇した後、文末にかけてピッチが下降する（図 3-11）。平叙文と肯否疑問文にイントネーション上の目立った差異はない。

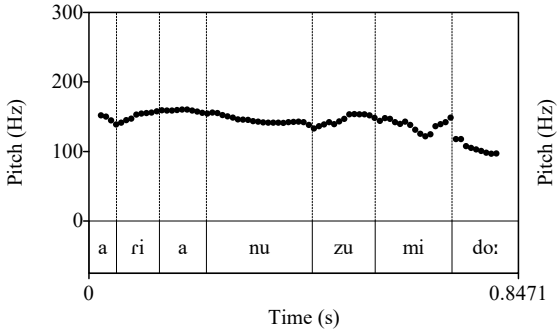


図 3-10. ari[a] nu [zu]mido:「あれはねずみだ」

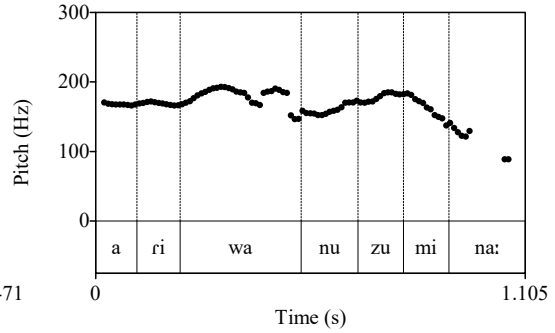


図 3-11. ari[wa] nu[zu]mina:「あれはねずみか？」

3.4.3.1.2 無標示疑問文

無標示疑問文は形態統語的な疑問の標示が無く、イントネーションのみで疑問文であることを示す。左図は単語を平叙文で発音した場合であり、右図は無標示疑問文で発音した場合である。なお「あれは煙？」のように文章を尋ねる形式も調査したが、聞き返しと同様のイントネーションだったので、ここでは 1 語の聞き返しの結果を提示する。

以下に述べる通り、a～c 型の 3 拍名詞を含む名詞疑問述語文では、肯否疑問文と同様に「文末音節が低くなる」のに対し、d 型の名詞のみ、文末音節が高くなる。

d 型のみ異なる動きを見せるのは、a, b, c 型が、アクセントの作用によって「文末が低くならない」平叙文と、イントネーションの作用によって「文末が低くなる」疑問文を対比出来るのに対し、3 拍 d 型名詞は、平叙文においても、アクセントの作用で文末音節が低くなり、疑問文と弁別出来ないからである。

肯否疑問文においては、「疑問助詞」という、疑問を明示する形式が他にあるため、イントネーションの弁別性が必ずしも必要ではなかったが、無標疑問文においては、イントネーションのみが弁別の手段になっているため、何らかのイントネーション上の差異で、平叙から疑問を区別する必要がある。こうしたことから、疑問文の文末に新たに上昇調を加えることになったと考えられる。

なお c 型は、肯否疑問文においては、d 型と同様に「平叙／疑問」のイントネーションの差がなかったが、「無標示疑問文」においては、イントネーション的に平叙と疑問が区別される。これは、肯否疑問文においては核の後に 2 モーラあるのに対し、無標示疑問文では、核の後に 1 モーラしかないという文節構造上の違いが影響している。

① a 型の名詞：hjibusji「煙」

a 型名詞はアクセント核がないため、平叙文では最終モーラのピッチが高くなる（図図 3-12）。一方で無標示疑問文の語末では、最終音節の内部（名詞の最終モーラと長音化した部分）でピッチの上昇し、その後下降が生じる（図 3-13）。

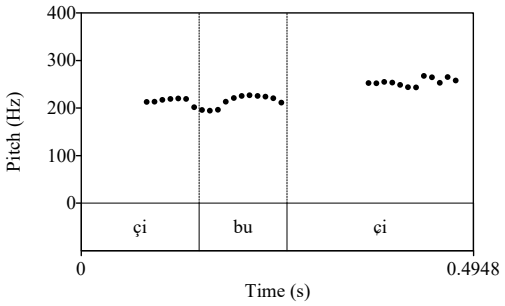


図 3-12. çibu[ɕi

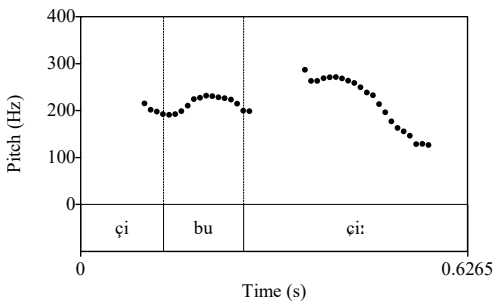


図 3-13. 平叙疑問 çibu[ɕi]i

② b 型の名詞：hagami「鏡」

b 型名詞は後ろから 1 モーラ目に核があるため、平叙文のとき最終音節の内部（名詞の最終モーラと長音化した部分）でピッチが上昇する（図 3-14）。一方で無標示疑問文の時には、最終音節の内部でピッチの上昇と下降が生じる（図 3-15）。

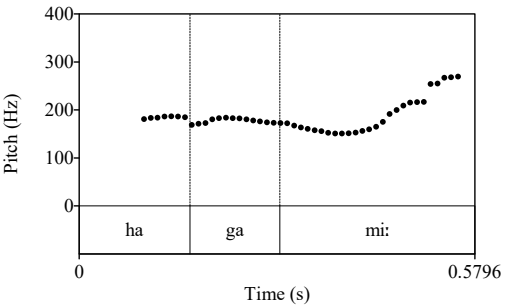


図 3-14. hagami[i

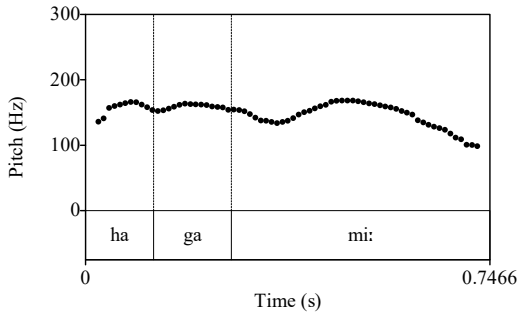


図 3-15. 平叙疑問 haga[mi]i

③ c 型：nibutu「できもの」

c 型名詞は後ろから 2 モーラ目に核があり、平叙文では最終モーラが高くなる（図 3-16）。一方無標示疑問文では、次末音節から最終音節にかけてピッチの上昇が起こり、最終音節の開始地点からピッチの下降が生じる（図 3-17）。

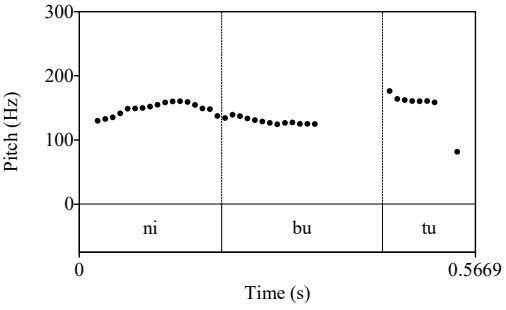


図 3-16. [ni]bu[tu

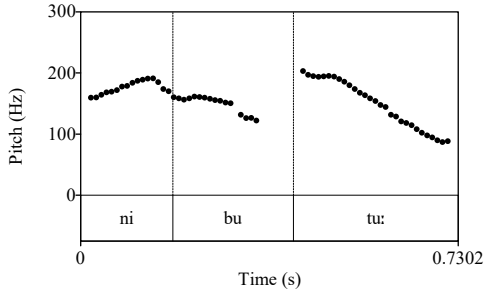


図 3-17.平叙疑問[ni]bu[tu]u

④　d 型：**nu**zumi「ねずみ」

d 型名詞は後ろから 3 モーラ目に核があるため、平叙文ではピッチが次末モーラで上昇し、最終モーラにかけて下降する（図 3-18）。一方で無標示疑問文では、平叙文と同様に次末モーラから最終モーラにかけてピッチの下降が起きたのち、語末で再びピッチが上昇する（図 3-19）。

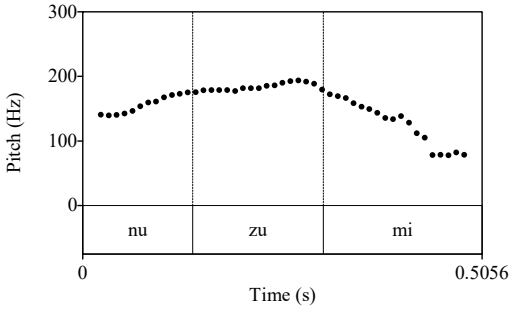


図 3-18. 平叙文 nu [zu]mi

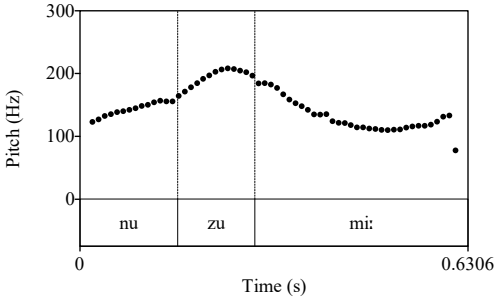


図 3-19. 平叙疑問 nu[zu]mi[i

3.4.3.2　動詞述語の疑問文

続いて、動詞述語の疑問文について述べる。動詞述語の疑問文は、疑問文の種類（肯否／無標示／内容）に関わらず、文末音節が低くなる。動詞のアクセント型は表表 3-25 の通りである。

表 3-25. 動詞のアクセント型

型	意味	アクセント解釈	形式
a	買う	/hoojuN/	hoo[juN
	忘れる	/wasjirijuN/	wasjiri[juN
b	這う	/hoo**ju**N/	[foo]ju[N
	流れる	/nagari**ju**N/	[nagari]ju[N

注）太文字下線部がアクセント核を示す

3.4.3.2.1　肯否疑問文

動詞の肯否疑問文は、動詞が肯否疑問の接辞-e を取る。以下、左図は平叙文のイントネーションを、右図は肯否疑問文のイントネーションを示す。

以下で示す通り、動詞の肯否疑問文は、最終音節が高く始まり、そこから大幅なピッチの下降が生じる。このため、名詞述語の疑問文と同様に、動詞の肯否疑問文のイントネーションは、「文末音節が低くなる」という特徴を持つと言える。

① a 型：hoojuN「買う」（hootaN「買った」）

a 型は無核であり、平叙文は最終音節がやや高くなる（図 3-20）。一方で肯否疑問文は、最終音節が高く始まり、そこから大幅なピッチの下降が生じる（図 3-21）。

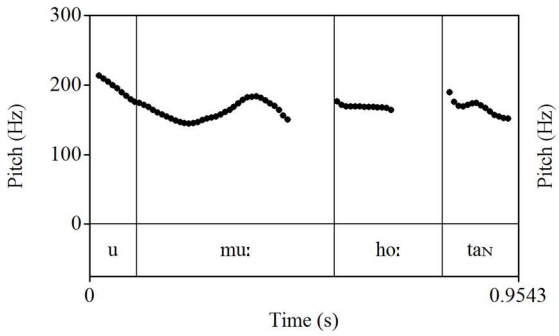


図 3-20. [u]mu[u] ho:[taN「芋を買った」

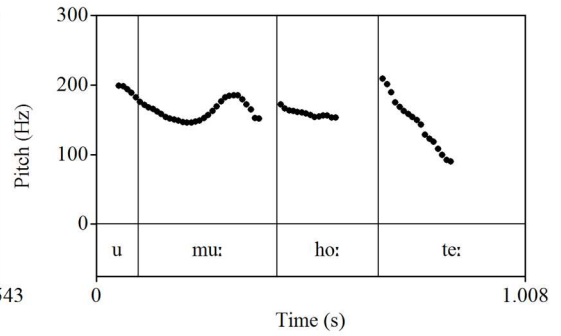


図 3-21. [u]mu[u] ho:[te]e「芋を買った？」

② b 型：hoo**ju**N「這う」（hoo**ta**N「這った」）

b 型は後ろから 2 モーラ目に核があり、平叙文において最終モーラが高くなる（図図 3-22）。一方肯否疑問文においては、最終音節が高く始まり、そこから大幅なピッチの下降が生じる（図 3-23）。

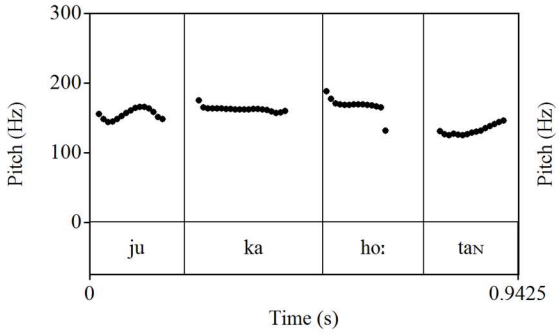


図 3-22. ju[ka ho:]ta[N「床を這った」

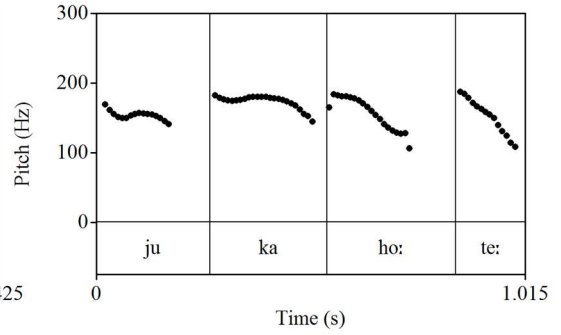


図 3-23. ju[ka ho]o[te]e「（床を）這った?」

3.4.3.2.2 無標示疑問文

次に無標示疑問文について述べる。動詞述語の疑問文は、通常形態統語的な標示を必要とするが、単純な構造の文では無標示疑問文も可能であることが分かった。左図は平叙文において単語を発音した場合、右図は聞き返しの際に単語を発音した場合である。

以下で示す通り、動詞の無標示疑問文は、無核アクセントの場合、最終音節が高く始まり、そこからピッチの下降が生じる。有核アクセントの場合、最終音節の内部において、ピッチが核の力で上昇した後、下降する。このため、動詞述語の無標示疑問文も、これまでと同様「文末音節が低くなる」と言える。

① a 型：wasjiritaN「忘れた」

a 型は無核であり、平叙文はほぼ平らか、最終音節がやや高いピッチを取る（図 3-24）。一方で無標示疑問文においては、最終音節が高く始まり、そこから文末にかけてピッチの下降が生じる（図 3-25）。

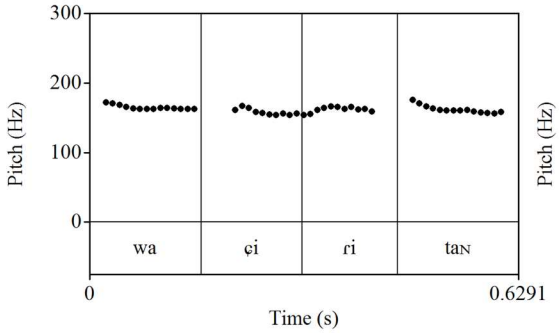


図 3-24. waɕiɾi[taN「忘れた」

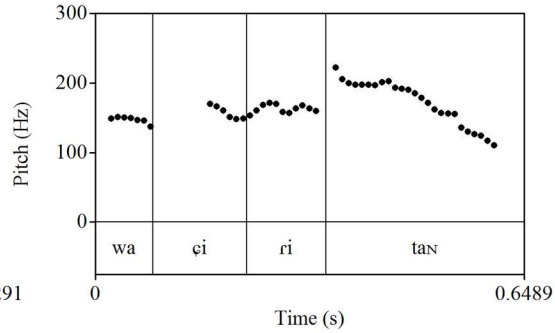


図 3-25. waɕiɾi[ta]N「忘れた？」

② b 型：nagari**ta**N「流れた」

b 型は後ろから 2 モーラ目に核があり、平叙文では最終モーラがやや上昇する（図 3-26）。一方で無標示疑問文においては、最終モーラの内部でピッチの上昇と下降が生じる（図 3-27）。

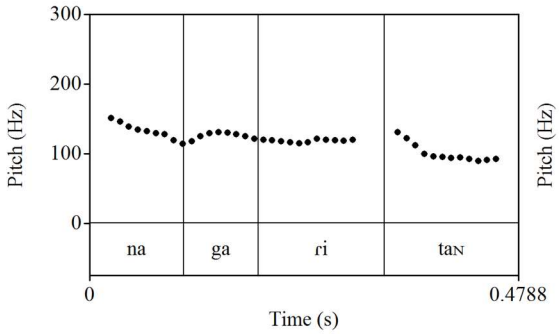


図 3-26. [nagaɾi]ta[N「流れた」

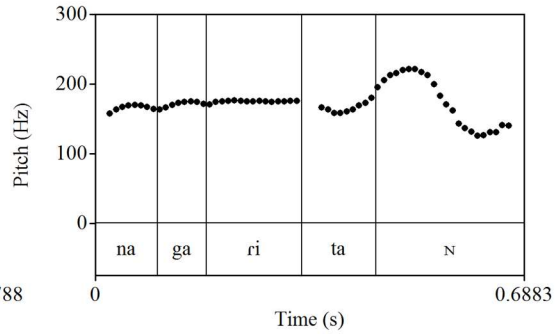


図 3-27. [nagaɾi]ta[N]「流れた？」

3.4.3.2.3 内容疑問文

内容疑問文は、疑問詞の他に、疑問の法接尾辞-i、WH 疑問の助詞=joo を用いる。以下では、疑問詞 nuu「何」（c 型アクセント）を用いた内容疑問文について述べる。

以下に述べる通り、内容疑問文は、文の焦点となる疑問詞のピッチのへの卯幅が拡大される一方で、後続する語のピッチの変動幅が縮小される post-focal reduction (Ishihara 2015: 599) ないし post-focal compression (Igarashi 2015: 562) と呼ばれる現象が観察される。文末の音調は、これまでと同様に「文末音節が低くなる」という特徴を持つ。

① a 型：hoojuN「買う」（hootaN「買った」）

a 型動詞の内容疑問文は、疑問詞のピッチ変動幅が拡大されるほか、次末音節が高く始まり、文末にかけてピッチが下降する（図 3-28）。疑問詞のピッチ変動に比べて、動詞述語のピッチ変動が小さいことが分かる。

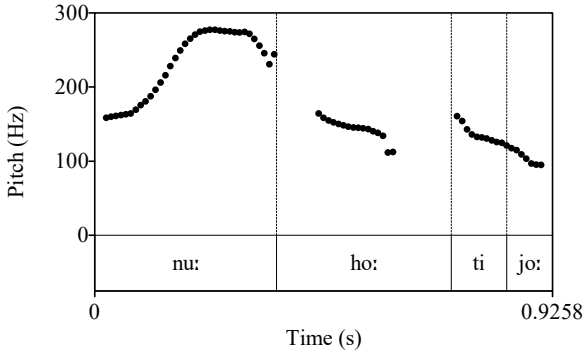


図 3-28. nu[u] ho: [ti]jo:「何を買ったの？」

② b 型：hoo**ju**N「這う」（hoo**ta**N「這った」）

b 型動詞の内容疑問文も、疑問詞のピッチ変動幅が拡大されるほか、次末音節が高く始まり、文末にかけてピッチが下降する（図 3-29）。図では判別し難いが、聴覚的には a 型と b 型の区別は可能であり、Mekawa (1994) が日本標準語において示したのと同様、内容疑問文においても述語の核は消去されていないと考えられる。a 型と同様、疑問詞のピッチ変動に比べて、動詞述語のピッチ変動が小さいことが分かる。

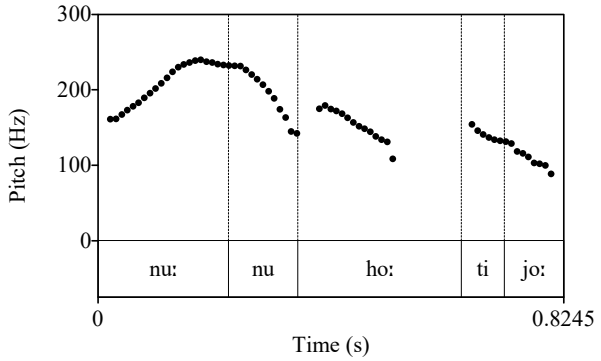


図 3-29. nu[u]nu [ho]o[ti]jo:「何が這ったの？」

3.4.4 まとめ

国頭方言の疑問文は、基本的に「文末音節が低くなる」という特徴を持つ。

しかし、実際のイントネーションは、平叙文との音韻（イントネーション）的、形態・統語的（疑問の語形式）弁別性の有無によって変化する。平叙文との弁別性がある場合、

文末イントネーションは低いままである。しかし、平叙文との弁別性が無い場合、文末にさらに上昇調が加わり、平叙文と対照される（図 3-30. 疑問文のイントネーション)。

こうしたことこから、国頭方言の疑問文イントネーションを考える上では、疑問の語形式の有無、述語のアクセント型、それらによる平叙文との弁別性という 3 つの要素を考慮する必要がある。

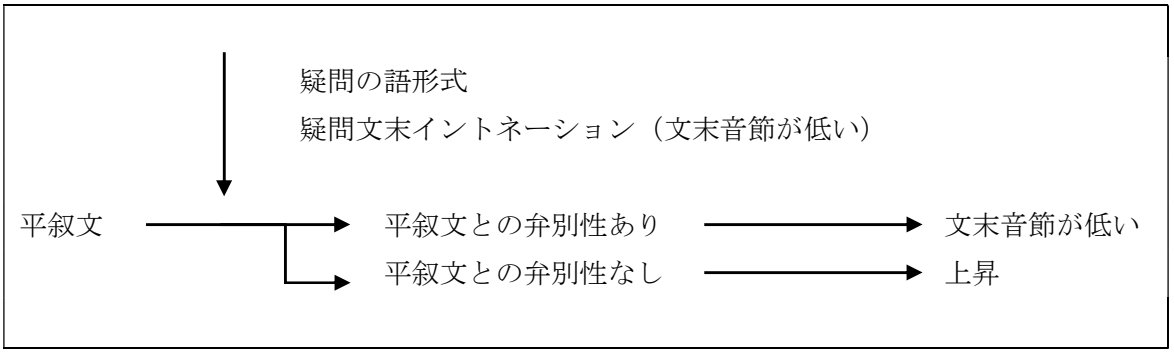


図 3-30. 疑問文のイントネーション

内容疑問文においては、上記に記した文末イントネーションの他、文焦点のある疑問詞以降の語において、ピッチ・レンジが縮小される現象が観察される。

4章　　形態論

4 章では、国頭方言の語の形態について論じる。まず、4.1 節で本章で用いる概念の導入を行い、4.2 節で名詞形態論、4.3 節で動詞形態論、4.4 節で形容詞形態論、4.5 節でその他の品詞の概説を述べる。4.6 節は機能からまとめた語類として、指示語、疑問詞の体系を記述する。

4.1　序論

4.1 節では、形態論の概説を行う。4.1.1 で、形態記述に用いる概念や単位を導入する。4.1.2 で国頭方言の語形成について、類型論的特徴を述べる。4.1.3 で品詞の分類と分類基準を提示する。4.1.4 では形態法の概観を行う。

4.1.1　単位の導入

まず、形態論の記述に必要な単位を導入する。

一般に、意味を担う最小単位は「形態素(morpheme)」と呼ばれる。形態素には、単独で語を形成することが出来る「自由形態素（free morpheme)」と、単独では語を形成出来ない「拘束形態素（bound morpheme)」がある。例えば、wunaguNcja「女たち」という形式は、「女」を表す wunagu と、「〜達」を表す Ncja に分析できるが、wunagu「女」はそれだけで語（後述）として機能するのに対して Ncja「〜達」は必ず他の語（名詞）に接続する必要がある。このため、前者は自由形態素、後者は拘束形態素である。

拘束形態素が接続する先は host（ホスト）と呼ばれる。先に述べた wunaguNcja の、Ncja のホストは wunagu である。

4.1.1.1　語、接語、接辞

語（word）とは、句（phrase）を構成する要素となる単位であり、音韻・形態・統語的に独立している。一方で、接辞（affix）は、語幹（後述）と共に語を構成する要素であり、音韻・形態・統語的に、他の要素に従属して、句の構成要素となる。

「語」と「接辞」の中間的な性質を持つものとして「接語（clitic)」がある。接語は音韻的には従属的だが、形態・統語的には一程度の独立性を持ち、句の中に組み込まれる。

以下では、まず「語」の認定基準を提示したのち、「接語」と「接辞」の区別に用いる基準を示す。

4.1.1.1.1　「語」の認定基準

「語」の認定基準として、(4-1) を導入する。

(4-1)　語の認定基準

(a) 単独でアクセントを担うか？（韻律的独立性）

(b) 単独で発話を構成し得るか？（形態／統語的独立性）

4.1.1.1.1.1 単独でアクセントを担うか？

語は単独でアクセントを担う単位となる。例えば、表 4-1 の naa「中」という形態素は、単独で発音すると LH、nu という主格を表す形態素を接続すると（naanu）LHL であり、1 番最初のモーラが、「次のモーラを高くする」というアクセント核を備えていることが分かる（アクセントの詳細は 3 章 3 節を参照）。このため、naa は単独でアクセントを担う「語」と認められる。

次に、nu「〜が」という主格を標示する形態素について考える。もし、nu がそれ自体アクセントを担うとすれば、前に接続する要素に関わらず、同じアクセント・パターンを持つはずである。しかし、表から明らかな通り、nu のピッチは前に接続する形態素（語、名詞）が持つアクセント型によって変動している。つまり、nu は単独でアクセントを担う単位ではない。従って nu は「語」とは認められない。

表 4-1. アクセント

表中の[はピッチの相対的な上昇、] は下降を表す。

アクセント型	意味	解釈（太字下線が核）	単独	nu を接続したとき
a	血	/cjii/	cji[i	cjii[nu
b	麦	/mu**zji**/	[mu]zji	[mu]zji[nu
c	中	/**na**a/	na[a	na[a]nu

4.1.1.1.1.2 単独で発話を構成し得るか？

「語」を認定するもう一つの基準として「単独で発話を構成し得るか？」を用いる。例えば、ai「いや」という形態素は、他の要素と接続しないため、それ自体がアクセントを担っているか、判断することが難しい。しかし「単独で発話を構成し得る」という形態・統語的な独立性を持つため「語」であると判断する。

(4-3) は、昔の遊びの話をしている最中に、遊びに使う石の名前が話題になった場面である。話者 TN が cjiNtai（実際の語義は「蝸牛」）と言ったのに対し、話者 YK がそれを否定して ai「いや（違う）」と言っている。話者 YK の発話は ai のみから成っている。

(4-2)　[TN] cjiNtai
cjiNtai
カタツムリ
カタツムリ…

(4-3)　[YK] ai
ai
いや
いや

名詞、動詞、形容詞、副詞は通常は他の語と共に発話を形成するが、例えば質問の返答においては単独で発話を形成し得る。(4-4) では、話者 A が「タバ（地名）の次は何か？」と聞いたのに対し、話者 B が「チチョー（地名）」と、名詞 1 語で返答している。

(4-4)　*(A)* *taba=nu* *cugi=wa* *nuu=joo?*
taba=nu cugi=wa nuu=joo
タバ=GEN 次=TOP 何=WHQ
タバの次は何か？

(4-5)　*(B)* *cjicjoo*
cjicjoo
チチョー

一方で、例えば過去を表す形態素 a などは、常に動詞の内部にあり、決して単独で発話を形成しない。また、主格を表す形態素 nu「〜が」も常にホストの名詞を必要とし、単独で発話に現れることはない。このため、これらは「語」ではないと判断できる。

4.1.1.1.2　接辞と接語

次に、語とはみなせない拘束形態素が「接辞」であるか「接語」であるかの分類基準を示す。接辞と接語の分類基準は様々なものがあるが、本論文では、通言語的に広く用いられている「ホスト選択（host selection）の自由度」を用いる。

語の内部要素である接辞は、特定の品詞の語基にしか接続出来ない。一方で、形態統語的に一定の独立性を持つ接語は、複数の品詞の語基や、句、節などにも接続が可能である。つまり、ホスト選択の自由度があるものは「接語」であり、ホスト選択の自由がないものは「接辞」と考える。

表 4-2　接辞と接語の分類基準

	接辞	接語
ホスト選択の自由	−	＋

4.1.1.1.2.1 ホスト選択の自由

ホストに、特定の品詞の語基しか取れないことを「ホスト選択の自由がない」、ホストに複数の品詞の語基や、句、節を取れるものを「ホスト選択の自由がある」とする。

4.1.1.1 の冒頭で述べた複数を表す形態素 Ncja は、ホストに名詞しか取ることが出来ない。また、過去を表す形態素 a もホストに動詞語幹しかとることができない。このように、この 2 つの形態素は、ホスト選択が非常に限定されているため「接辞」であると考えられる。

一方で、主格を表す形態素 nu「〜が」は、多くの場合ホストに名詞を取るものの、語ではなく句や節を取ることも可能である。

(4-6) の nu が接続しているのは、名詞 muzji「麦」である。一方で、(4-7) の nu が接続しているのは、語ではなく補文節である（[ ] で囲っている）。このように、nu はホストとしてとれる要素に自由度があるため「接語」と考える。

(4-6)
muzji=nu na-N
muzji=nu na-ran-N
麦=NOM ない-NEG-IND
麦がない。

(4-7)
[asa uijusji] nu *nii-sat-a-N=gi?*
asa ui-ju-sji=nu nii-sa-a-N=gi
朝 起きる-NPST-COMP=NOM 遅い-ADJ-PST-IND=EXM
朝起きるのが遅かったわけ？

4.1.1.1.2.2 判断が難しい例（補文標識 sji）

ここでは、接辞か接語の判断が難しい形態素として sji を取り上げ、分析の方針を述べる。

まず、sji は単独でアクセントを担わず、発話を形成することもないので「語」ではない。次に問題になるのは、ホスト選択の自由度である。sji は常に、動詞や形容詞の語尾接辞の位置を埋める(4-8) 点で接辞的である。しかし、sji が接続する動詞は、(4-9) のように他の語と共に補文節（名詞節）を作る。この場合、sji は語（や語幹）ではなく節に接続しているようにも見える。

(4-8)
abi-ju-sji
abi-ju-sji
呼ぶ-NPST-COMP
呼ぶの

(4-9)　*[kwaa=nu　daigaku=cji　ic-ju-sji] =wa　waN　tanosjimi=doo=jaa*
kwaa=nu　daigaku=cji　ik-ju-sji=wa　waN　tanosjimi=doo=jaa
子供=NOM　大学=ALL　行く-NPST-COMP=TOP　1SG　楽しみ=SFP=SFP
子供が大学へ行くのは、私の楽しみだよ。

(4-9) の sji のホストをどのように捉えるかは難しい問題だが、現時点ではあくまで(4-8)における sji のホストは動詞語幹であり、sji は動詞の内部にあると考える。

根拠の 1 つ目は、動詞の内部構造（4.3 節を参照）である。4.3 節で述べる通り、動詞の内部構造は、(4-10) のように表すことができ、語根と語尾接辞が必須の要素である。

sji は必ず時制接辞のあとに後接するため、もし sji を動詞の外側の要素と捉えると、時制接辞で終わる不完全な動詞となってしまう。

(4-10)　語根－（派生接辞－丁寧－アスペクト－極性－時制）－語尾

根拠の 2 つ目は、節に接続する他の接語との違いである。4.1.1.1.2.1 で節をホストにとるとした nu は、例え nu がなくても、前にある節自体が統語単位として成立している。言い換えれば、あくまで nu は、節の外側に接続している。一方で、(4-9) では、sji がなければ節自体が成立しない。つまり、sji は節の内側にある。

こうしたことから、sji は語と節を作る構成要素となり得るが、ホストは動詞語幹に限定されていると考えられる。このようにホストの選択が非常に限定的であるため、接語ではなく接辞であると判断する。

4.1.1.2　語の内部構造

語は 1 以上の形態素から構成される。一般に、語の中心的な意味を担う、それ以上分割できない形態素は「語根（root)」と呼ばれる。語根に接続して、語を構成する形態素は「接辞（affix)」と呼ばれる。

4.1.1.2.1　接辞の種類

接辞は、屈折接辞（inflectional affix）と派生接辞（derivational affix）に分類される。一般に、派生接辞は意味や品詞を変化させる接辞であり、屈折接辞は「時制」「性」など文法的なカテゴリーを表す接辞である。本論文では、(a) 品詞を転換する、(b) 構文を変化させる、(c) 語彙的な意味を変化させる接辞を「派生接辞」とする。これに対して、(d) 文法範疇を担うもの、(e) 語の成立に不可欠なものを「屈折接辞」とする。

4.1.1.2.2 語の内部の呼び方

語から接辞を除いた部分について、本論文では 2 つの用語を用いる。まず、語から屈折接辞を除いた部分は「語幹（stem)」と呼ぶ。これに対して、接辞側からみて、接辞が接続する先の要素全体を「語基（base)」と呼ぶ。

(4-11)　語幹（stem）：語から屈折接辞を取った部分
(4-12)　語基（base）：接辞が接続する先の要素全体

例えば、動詞 abirataN「呼ばれた」は、語の中心的な意味を担い、それ以上分割できない語根*abi「呼ぶ」に、結合価を増加させる派生接辞-ra（使役)、時制という文法範疇を表す屈折接辞-a（過去)、語尾を埋める屈折接辞の-N（直説）が接続して構成されている。

この動詞の語幹は、屈折接辞が接続する abi-ra である。一方で、語基は接辞ごとに指定され、-N に対する語基は abi-ra-a、-a（過去）に対する語基は abi-ra である。

(4-13)　*abi-rat-a-N*
abi-ra-a-N
呼ぶ-PASS-PST-IND
呼ばれた

4.1.2 形態類型論

国頭方言は、(a) 1 語が複数の形態素から構成される、(b) 1 つの形態素が 1 つの意味を表す、という 2 つの特徴から、膠着語的 (Agglutinating) な性格の言語だと言える （分類の基準は、Comrie1985:43 を参照） 。ただし、動詞や形容詞が複数の形態素から構成されるのに対し、助詞、感動詞、多くの名詞や副詞は 1 形態素で構成されており、孤立語的 (Isolating) な性質も持っている。

4.1.3 品詞分類

国頭方言の品詞を、「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」「連体詞」「感動詞」に分類する。

品詞を分類するにあたり、 (a) 名詞句の主要部になるか、(b) 名詞句の修飾部のみに現れるか、(c) コピュラ動詞*na の補部になるか、(d) 動詞を修飾するか、(e) 句や節に後接するか、(f) 命令接辞を取るか、の 6 つを指標として用いる。

表 4-3. 品詞の分類

	分布特徴				構造特徴	意味特徴
	名詞句主要部	名詞句修飾部のみ	コピュラ動詞 *na 補部	句や節に後接	継起接辞	動詞修飾

名詞	＋					
連体詞		＋				
形容詞			＋			＋
助詞				＋		
動詞					＋	
副詞						＋
感動詞						

4.1.3.1　名詞

名詞の分布特徴として、名詞句の主要部になること、節の主語や目的語になること（5章「統語論」を参照)、文の主題（6章2節「情報構造」を参照）になることが挙げられる。名詞は、さらに「名詞」「代名詞」「数詞」に分類される（4章2節を参照)。

4.1.3.2　動詞

動詞の分布特徴として、動詞句の主要部になること、節の述語になること、文の解説（comment：6章2節「情報構造」を参照）になることが挙げられる。動詞の構造特徴として、様々な屈折接辞を取ることが挙げられる。特に、継起接辞-iは動詞語幹のみが取り得る接辞である。

動詞は更に「動作動詞」「存在動詞」「コピュラ動詞」に分類される（4章3節を参照)。

4.1.3.3　形容詞

形容詞の分布特徴として、形容詞句の主要部になること、コピュラ動詞*na「～ない」の補部になること、動詞を修飾すること、節の述語になることが挙げられる。形容詞の構造特徴として、多くの形容詞は形容詞接辞-sa/sjaを取ることが挙げられる。

形容詞はコピュラ動詞*na「ない」の補部を埋める。名詞もコピュラ動詞の補部に入るが、*naの補部には入らない。否定文のときには、コピュラ動詞に*a「ある」の否定形を用いる。

(4-14)

ura	*harazji=wa*	*naga-sa*	*na-N*
ura	harazji=wa	naga-sa	na-N
2SG	髪の毛=TOP	長い-ADJ	ない-IND

あんたの髪の毛は長くない。

(4-15)

ari=wa	*<honojo=no>*	*niNgeN=wa*	*a-ra-N*
ari=wa	honojo=nu	niNgeN=wa	a-ran-N

3SG=TOP　この世=GEN　　人間=TOP　　ある-NEG-IND
あれはこの世の人間ではない。

4.1.3.4　副詞

副詞の分布特徴として、節の様々な位置に現れることが挙げられる。意味特徴として、動詞を修飾することが挙げられる。動詞を修飾する語のうち、形容詞としての資格を満たさないものを「副詞」とする。

(4-16) の*hee「早い」は動詞*mudu「戻る」を修飾し、*mudu「戻る」が表す動作の状態を表している。この*hee「早い」は、(4-17) のように、否定のコピュラ動詞*na「～ない」の補部に入ることが出来るため、形容詞であると考える。

(4-16)

hee-sa	*mudu-ri*
hee-sa	mudu-ri
早い-ADJ	戻る-IMP

早く帰れ。

(4-17)

aN	*cjuu=wa*	*fazji=nu*	*hee-sa*	*na-N*
aN	cjuu=wa	fazji=nu	hee-sa	na-N
あの	人=TOP	足=NOM	早い-ADJ	ない-IND

あの人は足が速くない。

次に、(4-18) の icjama「少し」は、動詞*mat「待つ」を修飾し*mat「待つ」が表す動作の程度を限定している。しかし、icjama「少し」は先に見た heesa「早い」の場合と異なり、コピュラ動詞*na「ない」の補部には入らない。このため「副詞」だと考えられる。

(4-18)

icjama	*macj-ut-i=joo*
icjama	mat-u-i=joo
少し	待つ-PROG-SEQ=SFP

少し待っていてね。

4.1.3.5　連体詞

連体詞の分布特徴として、名詞の修飾部のみに現れることが挙げられる。構造特徴として、いかなる接辞も接続しないことが挙げられる。

4.1.3.6　助詞

助詞の分布特徴として、常に句や節に後接することが挙げられる。なお、助詞は単独で

発話を構成しないことから、すべて接語と考えられる。

日琉語においては、名詞から終助詞へ文法化することが多いため、名詞と終助詞の中間的な性質を持つ語がある。(4-19) の daki「だけ」は一見助詞のように見えるが、前の動詞 ucjiuk「置いておく」が連体形を取っていることから、連体節をとる「名詞」と考える。(4-20)の hazji「はず」も同様の分析が出来る。

(4-19)	*soto=ni*	*ucj-i+cj-u-nu*	*daki=sji*	*koori=wa*	*tukit-a-N*
	soto=ni	uk-i+uk-u-nu	daki=sji	koori=wa	tuki-a-N
	外=LOC1	置く-SEQ+おく-PROG-ADN	だけ=INS	氷=TOP	溶ける-PST-IND
	外に置いておくだけで氷は溶けた。				

(4-20)	*tii=ni*	*cjic-ju-nu*	*hazji=djaa*
	tii=ni	cjik-ju-nu	hazji=djaa
	手=LOC1	付く-NPST-AND	筈=SFP
	手に付くはずよ。		

助詞は「格助詞」「接続助詞」「副助詞」「終助詞」に分類できる（4 章 5 節を参照)。

4.1.3.7　感動詞

以上に挙げたすべての指標に当てはまらないものを「感動詞」とする。感動詞は常に単独で発話単位となり、句を構成しないといった特徴がある。感動詞には、専ら感情の表出を行う「感情感動詞」と相手に働きかける機能を持つ「対人感動詞」がある（4 章 5 節を参照)。

4.1.4　語の機能分類

品詞とは別に、語の機能によって語を分類したものとして「指示語」と「疑問詞」という語類を認める。「指示語」は話し手が発話する時の場所や時、文脈を基準になにかを指し示すもので、形態的に一定の共通性を持っている。「疑問詞」は疑問文の焦点となるものや人を表す語である。いずれの語類も、名詞、副詞、形容詞など複数の品詞にまたがって分布している。

指示語、疑問詞の体系については 4 章 6 節で述べる。

4.1.5　形態法一覧

国頭方言は、語の形態法として「接辞付加」「複合」「重複」を持つ。以下で、それぞれの形態法の概略を述べたのち、4.1.5.4 で判断が難しいケースを取り上げる。

4.1.5.1　接辞付加　(affixiation)

一部の品詞は、意味の中核を担う語根に、意味を変化させる接辞（派生接辞）や文法機能を標示する接辞（屈折接辞）を接続することで語が形成される。

(4-21) の u-ように、語根より前に接続する接辞を「接頭辞」、(4-22) の-taa ように、語根より後に接続する接辞を「接尾辞」と呼ぶ。国頭方言には、接頭辞よりも接尾辞の方が数が多い。

(4-21)　*u-zjo*
u-zjoo
POL-門
御門

(4-22)　*azji-taa*
azji-taa
お爺さん-PL
お爺さんたち

4.1.5.2　複合 (compounding)

2 つ以上の語幹を組み合わせて、語を構成する形態法を複合という。複合によって形成された語（以下、複合語）と、複合語ではない語の連続（句）を区別する方法（Haspelmath 2010: 195 を参照）として、国頭方言では以下の指標が有効である。

4.1.5.2.1　アクセント

ある語連続が複合語でない場合、それぞれの語がアクセント単位となる。一方で、ある語連続が複合語を形成する場合、アクセント単位（accentual unit）が 1 つになる。

tuzji「妻」、wutu「夫」という 2 語の語連続を例に挙げる。2 モーラ語には 3 つのアクセント型が存在し、a 型：LH, LL=H, b 型：HL, HL=H, c 型：LH, LH=L である。tuzji「妻」、wutu「夫」は、いずれも a 型である。4 モーラ語には 4 つのアクセント型が存在し、a 型：LLLH, LLLL=H, b 型：HHHL, HHHL=H, c 型：HLLH, HLLH=L, d 型：HLHH, HLHH=L である（アクセントの詳細は、2 章 3 節を参照）。(4-23) では、tuzji「妻」と wutu「夫」がそれぞれに 2 モーラ a 型のアクセントを保持している（4 モーラ語に、LHLH となるアクセント型は存在しない）。一方で、(4-24) は tuzjiwutu の 4 モーラ全体がアクセント単位となっており、4 モーラ c 型のアクセント実現形となっている。こうしたことから、(4-23) の tuzjiwutu は複合語ではないが、(4-24) の tuzjiwutu は複合語であると判断される。

(4-23)　tu[zji]　wu[tu]

tuzji　　wutu
妻　　夫

(4-24)　[tu]zji+wu[tu]
tuzji+wutu
妻+夫

4.1.5.2.2　連濁

連濁とは、2 つの語が複合した際に、2 つ目の要素の最初の分節音が無声音から有声音になる現象を指す。語連続が 1 つの句を形成する場合には、形態素境界で音の変化が起きないが、複合語の場合には形態素境界におおいて、2 つ目の形態素の頭が無声音から有声音へと変化する。(4-25) mattibu=nu kwaa「マッティブの子供」では「子供」は kwaa であり連濁が生じていないので句であることが分かる。一方、(4-26) mattibugwaa では kwaa「子供」の語頭が有声化し gwaa となっている、すなわち連濁が生じていることから、複合語であると判断できる。

(4-25)　*mattibu=nu*　　*kwaa*
mattibu=nu　　kwaa
マッティブ（小型の蛇）=GEN　　子供
マッティブの子供

(4-26)　*mattibu+gwaa*
mattibu+kwaa
マッティブ（の）子供
マッティブの子供

但し、連濁は全てのケースで起こる訳ではない。(4-27) のように、名詞の語幹動詞の複合語においても、形態素の境界で連濁が起きていない例もある。

(4-27)　*uja+kwaa*
uja+kwaa
親＋子
結婚式／婚約

4.1.5.2.3　統語構造

複合語は”通常”と異なる統語構造を取ることがある。

例えば、名詞句 kami-u muN「食べるもの」の内部で、名詞を修飾する動詞*kam「食べる」は連体形 kam-i-nu を取っているが(4-28) 、複合語 kamimuN「食べ物」においては、前部要素の動詞*kam「食べる」が連体形ではなく連用形 kam-i の形態を取っている(4-29)。

(4-28) *kam-i-nu* *muN*
kam-ju-nu muN
食べる-NPST-ADN もの
食べるもの

(4-29) *kami+muN*
kam-i+muN
食べる-INF+もの
食べ物

更に、語順が異なることがある。例えば、(4-30) のように、国頭方言の基本語順は SOV である（5 章 2 節「語順」を参照)。しかし、(4-31) の複合語の内部では、動詞*kam「食べる」が、目的語 muN「もの」に先行する SVO 語順となっている。この通常とは異なる語順に基づいて、kamimuN は句ではなく複合語だと判断することができる。

(4-30) *utu=nu* *muN* *kam-i-N*
utu=nu muN kam-ju-N
弟=NOM もの 食べる-NPST-IND
弟が食べ物を食べる。

(4-31) *kami+muN*
kam-i+muN
食べる-INF+もの
食べ物

4.1.5.2.4 分割 (split)

句の中の語連続は、語連続の間に別の語を挿入することが可能だが、複合語の間に別の語を挿入することは出来ない。

語を挿入できるかを検証するには、強調助詞=du が便利である。(4-32) の fanagi-rat-i uN「捨てられている」は、2 つの動詞すなわち*fanagi「捨てる」と*u「いる」の間に=du を挿入することが可能である。したがって句であると判断できる。一方、(4-33) の*cjik「聞く」と*bu「欲しい」の間には=du を挿入することは出来ない。したがって、複合語である

と判断できる。

(4-32)　*muuru*　*fanagi-rat-i=du*　　*u-N=doo*
muuru　fanagi-ra-i=du　　u-N=doo
全部　捨てる-PASS-SEQ=FOC　いる-IND=SFP
全部捨てられているんだよ。

(4-33)　*girisja=nu*　*hanasji*　*cjicj-i (*=du) + bu-sja-N*
girisja=nu　hanasji　cjicj-i + bu-sja-N
ギリシャ=GEN　話　聞く-INF+欲しい-ADJ=IND
ギリシャの話を聞きたい。

4.1.5.3　重複 (reduplication)

最後に、「重複 (reduplication) 」という形態法がある。「重複」とは、語根を繰り返す形態法である。重複には「完全重複 (full reduplication) 」と「部分重複 (partial reduplication) 」がある。国頭方言においては、オノマトペに完全重複の形態がみられる (4-34) 。また、畳語に部分重複の形態が見られる (4-35) 。

(4-34)　完全重複
wazji　-wazji　→　wazjiiwazji
STEM　RED　いらいらすること

(4-35)　部分重複
aburi　kooburi　→　aburi-kooburi
STEM　RED　溢れそうであること

4.1.5.4　判断が難しいケース

4.5.5.1, 4.5.5.2 で接辞付加と複合について述べたが、語によっては、複合と接辞化のいずれの形態法を取っているのか、判断が難しいケースがある。以下では、wuu/mii と、gwaa という形態素について論じる。

4.1.5.4.1　wuu-/mii-

動物の性別を表す wuu「雄」, mii「雌」という形態素は、名詞に接続し wuujazji「雄山羊」miijazji「雌山羊」のように用いられる。この wuu, mii という形態素は、日本語の「雄」「雌」とは異なり、単独では成り立たない拘束形態素である。もし「雄」「雌」を表すときには、wuumuN「雄」miimuN「雌」にように、muN「もの」に接続する必要があ

る。

拘束形態素が語幹となり得るのは数詞、動詞のいずれかだが、wuu, mii はそのどちらとも言えない。このため、本稿では wuu, mii を名詞に接続して新しい意味を加える「派生接辞」であると考える。

しかしながら、wuu-, mii-は典型的な派生接辞とは異なる。例えば、cjiru「弦」に前接すると、wuu-zjiru「一弦」のように、後部要素の最初の分節音に連濁を引き起こす。「連濁」は普通、複合語の語幹境界で起きる現象であり、この点で wuu-zjiru は複合語的でもある。

このように、wuu-, mii-が派生接辞と複合要素の中間的な様相を見せるのは、もともと複合の前部要素であったものが、文法化（grammaticalization）を起こし、接頭辞へ変化したという歴史的経緯があるためだと考えられる。

4.1.5.4.2 -gwaa

もう 1 つ、派生と複合の判断が難しいものに gwaa「小さい〜」がある。ここで述べる gwaa は、miigwaa「次兄」、ajagwaa「次姉」など、名詞に接続し、「より小さい（「より小さい兄／姉」で、長男・長女以外の兄・姉を指す)」という意味を表す。

この gwaa は、名詞 kwaa「子供」を起源に持つと思われる。実際に、名詞 kwaa「子供」が複合語の後部要素になるときは、同じ形式になる。

(4-36) *cjura+gwaa*
cjura+kwaa
きれい+子
きれいな子供

このように、gwaa も形式からは派生接辞であるか、複合要素であるかの判断が難しい。しかし、gwaa の意味が、元々の名詞の意味「子供」から「小さい」という、より抽象的なものへと変化していることから、文法化の現象の一つである「意味の漂白化（bleaching)」が起きていると考える。「文法化」とは、語などの語彙的な要素が、接辞などの文法要素に変化することであり、こうしたプロセスが確かめられることから、-gwaa を派生接辞と考える。

4.2　名詞形態論

名詞は (a) 数の標示が義務的か、(b) 語根が自由形態素か、という 2 つの指標によって「普通名詞」「代名詞」「数詞」に分類することが出来る（表 4-4）。

語根が自由形態素で、数の標示が随意的な名詞を「普通名詞」とする。語根が自由形態素で、数の標示が義務的な名詞を「代名詞」とする。語根が拘束形態素の名詞を「数詞」とする。

表 4-4 名詞の分類

	語根が自由形態素	数の標示の義務性
普通名詞	＋	-
代名詞	＋	＋
数詞	-	△(※)

（※）数詞は複数性を標示する形態法を取らないが、それ自体が語彙的に数を標示するため、△とした。

4.2.1　普通名詞

普通名詞は、語根が自由形態素であり、数の標示が随意的な名詞である。普通名詞の形態法には「接辞化」「複合」「反復」がある。

4.2.1.1　接辞化

普通名詞は、随意的に接頭辞／接尾辞を接続する。

4.2.1.1.1　接頭辞

名詞に接続する接頭辞には、(a) 名詞を丁寧体にする u-「お~」(b) 動物の性別を表す wuu-「雄」、mii-「雌」がある。

4.2.1.1.1.1　u-

u- には日本標準語の「お～」と同様に、名詞を丁寧な表現にする機能がある。(4-37), (4-38), (4-39)のように用いる。

(4-37)　*u-miki*
　　u-miki
　　POL-神酒
　　お神酒

(4-38)　*u-zjo*

u-zjoo
POL-門
御門

(4-39) *u-cja*
u-cjaa
POL-茶
お茶

4.2.1.1.1.2 wuu- / mii-「雄／雌」

wuu-「雄（オス）～」、mii-「雌（メス）～」は名詞の性別や、性別から派生する意味を表す。wuu, mii は、(4-42) のように後部要素に連濁を引き起こすことから、複合語の前部要素（つまり語幹）とも考えられる。しかし、(4-40) 等で見る通り、wuu, mii はいずれも拘束形態素であり、単独で使うことは出来ない。また、特定の名詞語幹にしか接続できないことから、接辞と考える。

wuu, mii は単独では語を構成せず、「雄（オス）雌（メス）がいる」と言う時には (4-40) のように muN「もの」に接続して表す。

(4-40) *wuu-muN=tu* *mii-muN=nu* *u-N*
wuu-muN=tu mii-muN=nu u-N
雄-もの=COM 雌-もの=NOM いる-NPST
雄と雌がいる。

wuu-/mii-「雄／雌」は動物の性別を表す意味の他に、性別から派生する意味を表す。(4-41) は jazji「山羊」が雄であることを表しているが、(4-42) は、三線の一番低い音を出す弦（一番太い弦）を、wuu-zjiru「雄-弦」という言葉で表している。

(4-41) *wuu-jazji*
wuu-jazji
雄-山羊
雄山羊

(4-42) *wuu-zjiru*
wuu-cjiru
雄-弦
三線の一番低い音を出す弦

4.2.1.1.2 接尾辞

名詞の接尾辞には、(a) 指小辞-gwa「小さな～」と、(b) 複数接尾辞 -cja/-taa/-Ncja/-naa「～たち」がある。複数接尾辞は、前に付く名詞の意味によって形式が異なる。

4.2.1.1.2.1 指小辞 -gwa

接尾辞のひとつに指小辞 (diminutive) の-gwa がある。-gwa は「小さい」「年下である」などの意味を表す。

例えば、(4-43) の mi-gwa は、「小さな兄」つまり、「(長男ではない) 二番目以降の兄」を指す。-gwa は元々kwaa「子供」に由来すると思われ、連濁を起こした複合語の後部要素にも見える（mii+kwaa)。しかし、miigwaa の gwaa は、元々の「子供」という意味が漂白され、「小さい」という別の意味に転じていることから、kwaa から文法化した指小辞として扱う。

(4-43) *mii-gwaa*
mii-gwa
兄-DIM
「二番目以降の兄」

4.2.1.1.2.2 複数接辞-cja/-taa/-Ncja/-naa

普通名詞の数の標示は随意的である。複数性を標示する最も生産的な方法は、名詞に複数接尾辞を接続することである。なお、一部の名詞は 4.2.1.3 で述べるように反復によっても複数性を表す。

複数接尾辞は-cja, -taa, -Ncja, -naa, (-Ntaa[17])の 5 つの形式がある。5 つの形式とも有生物名詞に接続し、植物や無生物に接続することが出来ない[18]。どの複数接尾辞語形を使うかは名詞によって選択される（表 4-5)。

表 4-5. 複数接尾辞と名詞

接尾辞	名詞	例
-cja	1 人称、2 人称（非尊称）	wa「私」, ura「あんた」
-taa	2 人称（尊称)、指示代名詞、個人名、目上の親族、呼称に用いられる職	nata「あなた」, huri/uri/ari「これ、それ、あれ」, zjaazja「祖父」, ama

[17] Ntaa は自然談話中に現れないが、elicitation をすると-Ncja を取る名詞に接続可能な場合がある。

[18] 動物名詞への接続は人によって許容度が変わる。

	業	「母」, mii「兄」, seNsee「先生」
-Ncja	年下の親族、人に関するより抽象的な名詞	utu「弟」, kwaa「子供」, warabi「子供」, ujahoo「先祖」, tusiui「年寄り」, wunagu「女」, cjuu「人」
-naa	再帰代名詞	duu「自分」

名詞と選択する複数接尾辞の関係は、有生性の階層 (animacy hierarchy: Silverstein 1976, Dixon 1979) を用いることで、かなりの部分を説明できる。有生性の階層は、Silverstein が動作主へのなり易さを元に名詞句を分類したものである。この階層が、人間の認知の何を反映しているのかは明らかではないが、通言語的に、名詞が関わる様々な文法現象を説明することが出来る。国頭方言の文法においても、有生性の階層は非常に有効な概念である。

Dixon (1979: 85)は、Silverstein の原案に一部修正を加え、有生性の階層を (4-44) のようにした。

(4-44)　有生性の階層 (Dixon 1979)

1 人称代名詞 > 2 人称代名詞 > 3 人称代名詞 > 固有名詞 > 人間名詞 > 動物名詞 > 無生物名詞

Dixon (1979: 85) の階層を元に、国頭方言の複数接尾辞の選択を考慮すると、2 人称非尊称形 ura「あんた」は複数接辞に-cja を、2 人称尊称形 nata「あなた」は複数接辞に-taa を用いることから、上記階層の「2 人称」を、非尊称と尊称の別に基づいて、さらに 2 つに分ける必要がある。

また「人間名詞」にあたる名詞も、zjaazja「祖父」が-taa を取るのに対し、utu「弟」は-Ncja を取るなど、2 つに分ける必要がある。-taa を取る人間名詞は、zjaazja「祖父」や azji「父」など年上の親族のほか、seNsee「先生」cjoocjoo「町長」など一部の職業名詞を含む。一方で-Ncja を取る人間名詞は utu「弟」magwa「孫」など年下の親族に加え、cjuu「人」tusjiui「年より」wunagu「女」など抽象的な名詞を含む。現時点では、この 2 つのグループを分ける指標として「呼称として使えるかどうか」（新永 2013）が有効だと考える。このため、階層の「人間名詞」を「呼称として使えるか」の別に基づいて、さらに 2 つに分ける。

Dixon (1979) の有生性の階層に、2 人称の区別と、呼称の指標を加えた名詞句階層を (4-45) のように仮定する[19]。(4-45) の階層と複数接尾辞の形式の対応を示したものが図 4-1

[19] Silverstein (1976) , Dixon (1979)の animacy hierarchy は、「有生性（animacy）」と「定性性

である。■　は自然談話中に現れるか、elicitation で第一回答となる形式を示す。□は elicitation で許容される形式を示す。なお再帰代名詞 duu は例外的で、接尾辞-naa という形式を取る。

(4-45)　国頭方言における名詞句階層

1 人称 ＞2 人称非尊 ＞2 人称尊 ＞3 人称 ＞ 固有 ＞ 呼称 ＞ 人間 ＞ 動物 ＞　無生物

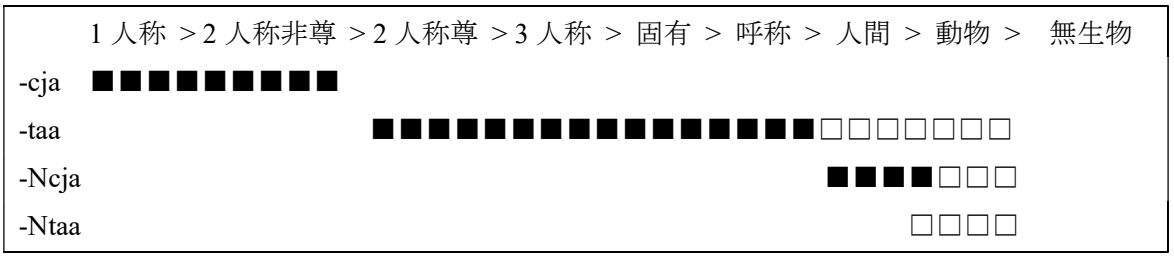


図 4-1. 名詞句階層と複数接尾辞の関係

図 4-1 を見て分かる通り、名詞句階層の上位から-cja, -taa, -Ncja を選択することが分かる。また、上位の階層が 1 つの形式しか許容しないのに対して、下位の階層に位置する名詞は複数の形式を許容しており、比較的制限が緩やかであることが分かる。このように、名詞句階層は複数接尾辞の形式に加え、複数接尾辞の選択制限の厳しさを説明することが出来る。この階層は、複数接尾辞の形式の他に、代名詞の数の体系や、格助詞の選択も説明することが可能である。

なお、多くの場合、複数接尾辞は 1 つのみ名詞の後に接続するが、-cja, -Ncja, -naa を取る名詞は更に後ろに-taa を接続し複数接尾辞を二重に取ることが出来る。その場合は「より多くの人がいる」「目の前にいる人だけでなく、背後にいる人も含む」イメージなどを伴い、複数性が更に増した表現となる。

(4-46)	*wacjataa*	*warabiNcjaataa*	*duunaataa*
	wa-cja-taa	warabi-Ncjaa-taa	duu-naa-taa
	1-PL-PL	子供-PL-PL	REFL-PL-PL
	私たち	子供たち	自分たち

（definiteness）」の 2 つの指標を表していると言われる。今回導入した「尊称／非尊称」の別はどのように位置付けられるか分からないが、「呼称として使えるか否か」は、「定性性」と関わる基準として、階層の中に位置付けることが出来る。

4.2.1.2　複合

普通名詞の 2 つ目の形態法として「複合」がある。4.1.5.2 節で述べた通り、2 つ以上の語幹を接続することで、複合語を形成する。

4.2.1.2.1　複合名詞の音韻形態

品詞の組合せに関わらず、複合名詞に起こる音韻形態的特徴として、第二要素の語頭が有声化する現象（連濁）がある (4-47) 。ただし、連濁は必ずしも起きる訳ではなく、(4-48) の jarabugee/ jarabukee「蘇鉄粥」ように無声音と有声音で揺れる場合もある。

(4-47)　*ufu+gutu*
　　ufu+kutu
　　大きい+こと
　　大きい

(4-48)　*jarabu+kee* / *jarabu+gee*
　　jarabu+kee　　jarabu+kee
　　蘇鉄+粥　　蘇鉄+粥
　　蘇鉄粥　　蘇鉄粥

4.2.1.2.2　複合名詞の構造

Scalise & Forza (2009) は、複合語を分類する基準として主要部の位置を提起した。Scalise & Forza (2009) によると主要部には、(a) 文法範疇の主要部 (categorical head)、(b) 意味の主要部 (semantic head)、(c) 形態の主要部 (morphological head) の 3 種類がある。国頭方言の場合、格や性による名詞の曲用が無く、数の標示も随意的であるため、形態的主要部を確かめるのが困難である。したがって、文法的主要部と意味的主要部のみを考察の対象にする。

N を名詞語幹、A を形容詞語幹とすると、複合名詞となる品詞の組合せには、(a) A+N, (b) N+N の 2 種類がある（動詞が派生して出来た派生名詞も、N とする）。A+N は文法的、意味的ともに「右側主要部型」、N+N は文法的、意味的に、全てのパターン（右側主要部、左側主要部、両側主要部、主要部なし）がある。以下、品詞の組合せ毎に用例を挙げる。

4.2.1.2.2.1　名詞＋名詞

最も多い複合語のパターンは「N+N（名詞＋名詞）」の組合せである。「名詞＋名詞」の意味的な主要部は次の 4 つに分類される。

(a) 右側主要部（従属部＋主要部）

(4-49), (4-50) は名詞の語幹が複合した名詞、(4-51) は動詞が派生して出来た名詞語幹と、名詞語幹が複合した例である。いずれも、右側の名詞が意味的な主要部である。

(4-49) *basja+umu*
basja+umu
芭蕉＋芋
バナナ（芭蕉の芋）

(4-50) *sjima+muni*
sjima+muni
島＋言葉
方言（島の言葉）

(4-51) *kam-i+muN*
kam-i+muN
食べる-INF1＋もの
食べ物

(b) 左側主要部（主要部＋従属部）

(4-52) は左側の名詞が意味的な主要部の語である。

(4-52) *kee+mee*
kee+mee
粥＋ご飯
米のお粥

(c) 両側主要部（主要部＋主要部）

(4-53) - (4-55) は両方の名詞が意味的な主要部の語である。

(4-53) *tuzji+wutu*
tuzji+wutu
妻＋夫
夫婦

(4-54) *mee+usju*
mee+usju
前＋後ろ
前後

(4-55) *hiizjai+mizji*
hjiizjai+mizji
左＋右
右左

(d) 主要部なし

(4-56) -(4-59) は、両方の名詞が主要部ではなく、名詞の組み合わせによって新しい意味が生まれている例である。(4-56)(4-57) は名詞語幹が複合しており、(4-58)(4-59) は名詞語幹と、動詞から派生した派生名詞語幹が複合している。

(4-56) *tusji+ui*
tusji+ui
年＋上
老人

(4-57) *uja+kwaa*
uja+kwaa
親＋子
結婚式／婚約

(4-58) *jaa+dacji*
jaa+tacj-i
家＋立つ-INF
家立ち（結婚）

(4-59) *kwaa+mui*
kwaa+mu-i
子＋守る-INF1
子守

このうち生産的なのは、(a) 右側主要部と、(c) 両側主要部であり、左側主要部の複合名

詞は 1 例しか見つかっていない。(d) の主要部なしは外心複合語 (exocentric compounds) と呼ばれ（影山 2010)、意味上の主要部が語の内部に現れないものである。例えば、(4-56) tusji+ui：年＋上「老人」の主要部は、言わば「年上の人」であり、複合語の内部には見出されない。こうした外心複合語は、言語類型論的に珍しい構造だと言われている（影山 2010)。

4.2.1.2.2.2 形容詞＋名詞

形容詞の語幹と名詞の語幹から、複合名詞が構成される。この場合は、意味的にも形態的にも右側主要型であり、左側の形容詞が右側の名詞を修飾する。

(4-60) - (4-62) は「形容詞＋名詞」の複合名詞である。

(4-60) *ufu+hazji*
ufu+hazji
大きい＋風
台風／大風

(4-61) *cjura+gwaa*
cjura+kwaa
綺麗な＋子供
美人

(4-62) *sjuu+mee*
sjuu+mee
白い＋飯
白米

4.2.1.3 重複

普通名詞が取る 3 つ目の形態法は「重複」である。接辞化や複合に比べて生産性は少ないが、一部の名詞が「複数性」を表すために重複を用いる。筆者のデータの範囲では、反復を取り得るのは無生物名詞と、人に関する疑問代名詞 taru/taN である。

重複を伴う無生物名詞を (4-63), (4-64)に、疑問代名詞を(4-65)(4-66) に挙げる。

(4-63) *jaa-jaa*
jaa-jaa
家-RED
家々

(4-64) *fana-bana*
fana-fana
花-RED
花々

(4-65) *kiNnjuu=wa* *taru-taru=tu* *izj-i=joo?*
kiNnjuu=wa taru=tu ik-i=joo
昨日=TOP 誰-RED=COM 行く-Q=WHQ
昨日は誰（複数）と出掛けたの？

(4-66) *uduru-uduru* *kam-iba* *ju-kwa* *a-i=joo?*
uduru-uduru kam-riba ju-kwa a-i=joo
どれ-RED 食べる-COND1 良い-ADJ COP-Q=WHQ
どれ（複数）を食べたら良いの？

4.2.2 代名詞

代名詞は、名詞や名詞句の代わりに、事物や人などを表す語である。語根が自由形態素で、数の標示が義務的であるといった特徴がある。

数の標示について、普通名詞は、(4-67) の cjuu「人」のように複数を明示しない形式でも、micjai「3 人」のように、複数を表す文脈で用いることが出来る。

(4-67) *cjuu=wa* *micjai* *u-N*
cjuu=wa micjai u-N
人=TOP 3 人 いる-IND
人は 3 人いる。

一方、代名詞は、*waN=wa micjai=djaa「私は 3 人だ」のように単数の形（waN「私」）を複数を表す文脈で用いることは出来ず、複数の表現を使う際には必ず複数を明示する形式 wacja「私達」を用いなければならない。以上のことから、代名詞は数の標示が義務的であると言える。

(4-68) *wacja=wa* *micjai=djaa*
wacja=wa Micjai=djaa
1PL=TOP 3 人=SFP
私達は 3 人だ。

代名詞は、それが代用する名詞によって、(a) 人称代名詞：話し手と聞き手に関する、人物の代わりに用いられる (personal pronouns)、(b) 指示代名詞：空間、時間、文脈の位置などを指す(demonstrative pronouns)、(c) 疑問代名詞：話し手が疑問とする事物を指す (interrogative pronouns)、(d) 再帰代名詞：主格の人物と同じ対象を指す (reflexive pronouns) の 4 つに分類することができる。

4.2.2.1 人称代名詞

人称代名詞の体系は、表 4-6 の通りである。1 人称は話し手を、2 人称は聞き手を、3 人称は話し手・聞き手以外の第三者を指す代名詞である。2 人称には目下や同輩に用いる「非尊称」の形式と、目上に用いる「尊称」の形式に区別がある。3 人称は指示代名詞 4.2.2.2 の形式をそのまま用いる。

表 4-6. 人称代名詞

人称	尊称	単数	双数	複数
1 人称		waN, waa, wana	watee	wacja
2 人称	非尊称	ura	utee	ucja
	尊称	nata		natataa
3 人称		furi/fuN, uri/uN, ari/aN		furitaa/fuNtaa, uritaa/uNtaa, aritaa/aNtaa
?			natee	

人称代名詞は数の区別が義務的で、1 人称、2 人称（非尊称形）には「単数／双数／複数」の区別があり、2 人称（尊称）と 3 人称には「単数／複数」の区別がある。また、natee「あの人たち二人」という語源不明の双数形がある。

1,2 人称単数・複数形式は、助詞の接続に関して、普通名詞とは異なる特徴がある。まず、(a) 属格助詞を用いずに名詞修飾する（表 4-7）。また、(b) 主題助詞を伴わずに、文の主題となる。

(a) について、普通名詞が名詞の修飾位置に立つには、属格の格助詞=ga/nu を接続する。しかし、1、2 人称代名詞の単数／複数形式は、単独で名詞修飾部を埋める (4-69)。

(b) について、普通名詞が文の主題になるときは、主題助詞=wa によって標示される。しかし、1、2 人称代名詞の単数／複数形式は、主題助詞なしで文の主題になることがある (4-70)。

表 4-7. 人称代名詞の名詞修飾

人称	単数	双数	複数
1 人称	Ø / (=ga)	=ga/nu	Ø

2 人称	非尊称	Ø / =ga	=ga/nu	Ø / =ga
	尊称	Ø / =ga	-	Ø / =ga
3 人称		=ga	-	=ga

(4-69)

waN	*jaa*
waN	jaa
1SG	家

私の家

(4-70)

ura	*jamatu=nu*	*kwaa*	*ja-sjiga*	*nuudi*	*asa*	*maa=cji*	*kicj-i=joo?*
ura	jamatu=nu	kwaa	ja-sjiga	nuudi	asa	maa=cji	ku-i=joo
2SG	大和=GEN	子供	COP-CNS	何故	朝	ここ=ALL	来る-SEQ=WHQ

あんたは大和（本土）の子だけど、何故朝にここへ来たの？

4.2.2.1.1 1 人称代名詞

1 人称代名詞は wa で始まる形態を持ち、単数／双数／複数の区別がある。

4.2.2.1.1.1 単数

単数には waN, waa, wana の 3 つの形式が存在する。最も生産的なのは waN であり、後ろに全ての助詞を取ることが出来る。他の形式は後接出来る助詞に制限がある。

表 4-8 の✔はそれぞれの形式が後接出来る助詞を、×は後接出来ない助詞を、? は自然度に疑問が残るが、elicitation で許容された助詞を表す。

表 4-8. 1 人称単数代名詞と助詞

	主格 =ga 「～が」	対格 Ø 「～を」	与格 =ni 「～に」	属格 =Ø 「～の」	共格 =tu 「～と」	主題 =wa 「～は」	付加 =mu 「～も」
waa	✔	×	✔	✔	×	×	✔
waN	✔	✔	✔	✔	✔	✔	✔
wana	×	?	×	×	?	✔	✔

なお、waa が主格助詞=ga を取るときには、(4-71) のように短音化し wa=ga となる。

(4-71)

wa=ga	*s-ju-N*
wa=ga	si-ju-N
1SG=NOM	する-NPST-IND

私がする。

waa と waN は属格助詞を取らずに名詞を修飾する (4-72) 。

(4-72)

waN/waa	*tuzji*	*nat-i*	*kuri-ri*
waN/waa	tujzi	na-i	kuri-ri
1SG	妻	なる-SEQ	くれる-IMP

私の妻になって下さい。

1 人称単数名詞が主題になる時は、wana を用いることが多い。

wana は、(4-73) のように主題助詞を伴わずに主題を表すことが多いが、(4-74) のように主題助詞を接続することも可能である。また、wana は他に、(4-75) のように付加を表す =mu を接続する（この場合は、助詞が省略されることはない)。

(4-73)

ura	*taru=joo?*	*wana*	*akiko=diro*
ura	taru=joo	wana	akiko=diro
2SG	誰=SFP	1SG	あきこ=POL

あんたは誰？　　私はあきこです。

(4-74)

wana=wa	*goneN*	*mae=mu*	*okinawa=cji*	*izj-a-N=djaa*
wana=wa	goneN	mae=mu	okinawa=cji	ik-a-N=djaa
1SG=TOP	5 年	前=ADD	沖縄=ALL	行く-PST-IND=SFP

私は 5 年前も沖縄へ行ったよ。

(4-75)

gaN	*sji-riba*	*wana=mu*	*ic-ju-N=doo*
gaN	sji-riba	wana=mu	ik-ju-N=doo
そう	する-COND	1SG=ADD	行く-NPST-IND=SFP

それなら、私も行くよ。

4.2.2.1.1.2 双数

1 人称には「2 つの数」を表す形式 watee が存在する (4-76) 。

watee は歴史的に wa「私」と tai「2 人」が融合して形成されたと思われる。watee は、(4-76) のように tai「2 人」という数詞を後置できるが、cjui「1 人」micjai「3 人」という数詞は後置出来ない。このため、単数や複数ではなく「双数」を特別に表している形式だと証明できる。

(4-76)

watee=ga	*micj-ut-a-N*	*tuki=ni*	*uN*	*Mjaa=wa*	*sizj-a-saa*
watee=ga	mi-u-a-nu	tuki=ni	uN	Mjaa=wa	sin-a-sa
2DU=NOM	見る-CONT-PST-ADN	時=LOC	その	猫=TOP	死ぬ-PST-MRT

私達（2 人）が見ていた時に、その猫は死んだよ。

(4-77)

taru=ga	*si-i=joo?*	*watee*	*tai=ga*	*sj-a-N*
taru=ga	si-i=joo?	watee	tai=ga	si-a-N
誰=NOM	する-SEQ=SFP	2DU	2 人=NOM	する-PST-IND
誰がしたの？		私達二人がした。		

watee は名詞修飾において、単数や複数と異なる振る舞いをする。単数や複数の 1 人称代名詞が単独で名詞修飾をするのに対して、双数が名詞修飾をする際には属格の助詞が必須である。双数の 1 人称代名詞が、単数や複数と異なる振る舞いをするのは、watee が歴史的に wa「私」と tai「2 人」という数詞から構成されており、tai「2 人」が名詞修飾に属格助詞を必要とするからだと思われる。

(4-78)

A	*are=wa*	*taru=ga*	*jaa=kaja?*
	ari=wa	taru=ga	jaa=kaja
	あれ=TOP	誰=GEN	家=Q
	あれは誰の家かな？		

B	*watee={ga/nu}*	*jaa=doo=jaa*
	watee={ga/nu}	jaa=doo=jaa
	2DU=GEN	家=SFP=SFP
	私達二人の家だよ。	

4.2.2.1.1.3 複数

1 人称複数は wacja「私達」という形式である。名詞を修飾する際には、属格の助詞を伴わず、単独で用いる(4-79)。また、文の主題になる時に、(4-80) のように主題助詞=wa を伴わないことがある。

(4-79)

ari=wa	*wacja*	*jaa=do=jaa*
ari=wa	wacja	jaa=doo=jaa
あれ=TOP	1SG.GEN	家=SFP=SFP
あれは私達の家ですよ。		

(4-80)

wacja	*taba=nu*	*umi=nu=jaa*	*ʔjoo=ni*	*ut-i*
wacja	taba=nu	umi=nu=jaa	ʔjoo=ni	u-i
1PL	タバ=GEN	海=GEN=SFP	洞窟=LOC1	いる-SEQ

私達はタバの海のね、洞窟にいて‥

4.2.2.1.2 2 人称（非尊称）

2 人称には、同輩や目下に用いられる非尊称と、目上に用いられる尊称の系列がある。2 人称非尊称は u から始まる形式を持ち、単数／双数／複数の区別がある。

4.2.2.1.2.1 単数

2 人称単数形は ura「あんた」である (4-81) 。ura が主題になる時、主題助詞は省略されることがある (4-81) 。ura は属格の格助詞を取らずに名詞の修飾をする (4-82) 。

(4-81)

ura	*nuudi*	*gaNsji*	*nacj-u-i=joo?*
ura	nuudi	gaNsji	nak-u-i=joo
2SG	なんで	そして	泣く-CONT-Q=WHQ

あんたはなんで、そうやって泣いているの？

(4-82)

ura	*mee=ni*	*a-nu*	*macji+gi=nu*	*faa=doo=jaa*
ura	mee=ni	a-nu	macji+hjii=nu	faa=doo=jaa
2SG	前=LOC	ある-ADN	松+木=GEN	葉=SFP=SFP

（フタバグサは）あんたの前にある松の木の葉だよ。

4.2.2.1.2.2 双数

2 人称双数形は utee「あんた達（二人）」である (4-83) 。

utee は watee と同様に、tai「2 人」という数詞を後置出来る一方で、cjui「1 人」や micjai「3 人」などの他の数詞を後置することは出来ない。このため、単数や複数ではなく「双数」を特別に表している形式だと証明できる。一人称単数や、一人称複数と異なり、名詞を修飾する際には属格の助詞 ga/nu を後置する必要がある (4-84) 。

(4-83)

akiko=wa	*utee=ni=du*	*mic-uu-ru*
akiko=wa	utee=ni=du	mi-u-ru
あきこ=TOP	2DU=DAT=FOC	似る-CONT-MSB

あきこはあんた達二人に似ている。

(4-84)

utee={ga/nu}	*gohaN=doo=jaa*
utee={ga/nu}	gohaN=doo=jaa
2DU=GEN	ご飯=SFP=SFP

あんた達二人のご飯だよ。

4.2.2.1.2.3 複数

2 人称複数形は ucja「あんた達」である (4-85) 。

ucja「あんた達」は、属格の助詞を取らず、単独で名詞修飾をする (4-86) 。

(4-85)

seNsee=ga	*ucja*	*abit-ut-a-N=doo*	
seNsee=ga	ucja	abi-u-a-N=doo	
先生=NOM	2PL	呼ぶ-CONT-PST-IND=SFP	

先生があんた達を呼んでいたよ。

(4-86)

ucja	*jaa=wa*	*juuzai*	*si-ra-noo*
ucja	jaa=wa	juuzai	si-ran-noo
2PL	家=TOP	喧嘩	する-NEG=?

あんた達の家は喧嘩をしないの？

4.2.2.1.3 2 人称（尊称）

二人称尊称には単数／複数の区別がある。

4.2.2.1.3.1 単数

目上や親しみの薄い相手などに使う、2 人称の尊称形は nata「あなた」である。nata は (4-87) のように主題助詞なしで主題となることがある。また、(4-88) のように属格の助詞を伴わず名詞修飾をする。

(4-87)

nata	*duku-sa*	*a-jabut-a-N=kaja?*	
nata	duku-sa	a-jabu-a-N=kaja	
2SG.HON	元気-ADJ	ある-POL-PST-IND=Q	

あなたはお元気でしたか？

(4-88)

nata	*kwa-Ncja=wa*	*uda=ni*	*u-i=joo?*	
nata	kwaa-Ncja=wa	uda=ni	u-i=joo	
2SG.HON	子-PL=TOP	どこ=LOC	いる-Q=WHQ	

あなたの子供たちはどこにいるの？

4.2.2.1.3.2 複数

2 人称尊称の複数形は natataa「あなた達」である (4-89) 。natataa も属格の助詞を伴わず名詞修飾をする (4-90) 。

(4-89)

natataa=ga	*sjima=cji*	*c-ju-N*	*kutu*	*macj-ut-a-N=doo*
natataa=ga	sjima=cji	c-ju-nu	kutu	mat-u-a-N=doo
2PL=NOM	島=ALL	来る-NPST-ADN	こと	待つ-CONT-PST-IND=SFP

あなた方が島へ来る事を待っていたよ。

(4-90)

natata	ni=wa	muuru	ju-kwa-nu	cjuu=be	at-i=du…
natataa	nii=wa	muuru	ju-kwa-nu	cjuu=bee	a-i=du
2PL	ところ=TOP	全部	良い-ADJ-ADN	人=ばかり	COP-SEQ=FOC

あなた方のところ（家）は皆良い人ばかりだから

4.2.2.1.4 3 人称（指示代名詞）

3 人称には、指示代名詞の furi/fuN, uri/uN, ari/aN が用いられる。3 人称には、単数／双数／複数の区別がある。

また、指示代名詞とは別に、語源不明の natee「（あの人たち）2 人」という形式がある。natee は形式的には 2 人称尊称に似ているが、話者たちの内省では、それとはまったく別のものである。このため、現時点では位置づけが明らかでないが、4.2.2.1.4.3 に用例を挙げる。

4.2.2.1.4.1 単数

指示代名詞の近称、中称、遠称には、それぞれ furi/fuN, uri/uN, ari/aN「これ、それ、 それ」があり、これらの形式がそのまま 3 人称代名詞として使用される。

1, 2 人称の単数は単独で名詞修飾が出来たが、3 人称単数が名詞修飾をする際には、属格の助詞=ga が必要である (4-92) 。

(4-91)

ari=wa	*dokusjiN*	*a-e=doo=jaa*	*naa*	*kekkoN*
ari=wa	dokusjiN	a-e=doo=jaa	naa	kekkoN
3SG=TOP	独身	ある-NEG?=SFP=SFP	もう	結婚

あの人は独身じゃないよ。もう結婚

sji-ju-N=doo=jaa

sji-ju-N=doo=jaa

する-CONT-IND=SFP=SFP
しているよ。

(4-92)

ari/aN=ga	*tuzji=wa*	*uda=cji*	*izj-i=joo?*
ari/aN=ga	tuzji=wa	uda=cji	ik-i=joo
3SG=GEN	妻=TOP	どこ=ALL	行く-Q=WHQ

あの人の奥さんはどこに行ったの？

4.2.2.1.4.2 複数

3 人称の複数形は、furitaa / fuNtaa, uritaa / uNtaa, aritaa / aNtaa「彼等」である。特に aNtaa を用いることが多い (4-93) 。名詞修飾には属格の助詞=ga が必要である (4-94) 。

(4-93)

aNtaa=cji	*cjicj-i*	*bu-sja-nu*	*kutu=ga*	*aa=sjiga*
aNtaa=cji	cjicj-i	hu-sja-nu	kutu=ga	a=sjiga
3PL=ALL	聞く-INF	欲しい-ADJ-ADN	事=NOM	ある=CEX

あの人達に聞きたい事があるけど

(4-94)

aNtaa=ga	*jaa*
aNtaa=ga	*jaa*
3PL=GEN	家

あの人たちの家

4.2.2.1.4.3 natee「（あの人たち）2 人」

3 人称には指示代名詞の形式を用いるが、それらは別に natee「二人」という双数の代名詞が見つかった。この形式は話し手でも聞き手でもない第三者の 2 人を指すため、人称の体系の中では三人称にあたると考えられる。形式的には、二人称尊称 nata と関連しているように見えるが、話者たちの内省では、それとは全く別のものである。語源や位置づけは今後の課題であるが、ここでは見つかった用例を記す。

(4-95) は昔話の一節である。「塩一升の運命を付けられた女の子と、竹 1 本の運命を付けられた男の子は…」と紹介してから、その二人を受けて（natee「二人」は結婚した、と述べている。

(4-95)

masju	*issjuu=nu*	*kuree*	*cjiki-rat-a-nu*	*ii=nu*	*oicju=nu*	*wunagu=nu*
masju	issjuu=nu	kuree	cjiki-ra-a-nu	ii=nu	oicju=nu	wunagu=nu
塩	一升=gen	運命	つける-pass-pst-and	西=gen	長者=gen	女=gen

塩一升の運命を付けられた西の長者の女の

kwaa=tu *dee* *tii-cji=nu* *kuree* *cjiki-rat-a-nu* *agari=nu* oicju=nu jiNga=nu
kwaa=tu dee tii-cji=nu kuree cjiki-rat-a-nu agari=nu oicju=nu jiNga=nu
子=COM 竹 1=個=GEN 運命 付ける-PASS-PST-AND 東=GEN 長者-GEN 男-GEN
子と竹 1 つの運命を付けられた東の長者の男の

kwaa=wa *nate=wa* *ufu+cjuu* *nat-i* *tuzji+wutu* *nat-a-N*
kwaa=wa natee=wa ufu+cjuu na-i tuzji+wutu na-a-N
子=TOP 2DU=TOP 大きい+人 なる-SEQ 妻+夫 なる-PST-IND
子は、2 人は大人になって夫婦になった。

この natee「二人」は、watee や utee と同様に、tai「二人」という数詞と共に用いることは出来るが(4-96) 、cjui「一人」や micjai「三人」など、それ以外の数詞とは用いることが出来ない。

(4-96) *natee* *tai=ga=du* *sj-a-maz-e?*
natee tai=ga=du sji-maz-e
3DU 二人=NOM=FOC する-CONF-YNQ
あの二人がしたんじゃない？

4.2.2.2 指示代名詞

指示語の体系は 4.6 節で述べるが、ここではそのうち代名詞として機能する語を取り上げる。

4.2.2.2.1 指示代名詞の体系

指示代名詞には、指示対象として人や物を指す代名詞 (4-97) と、場所を指す代名詞 (4-98) がある。指示対象を形態的に、自分の近くを指す「近称」、自分から少し遠くや相手の近くを指す「中称」、話者と相手のどちらからも遠い「遠称」の 3 つの区別がある。また、指示対象が疑問の対象でもある場合には、疑問の指示代名詞を用いる（表 4-9)。

表 4-9. 指示代名詞の体系

	近称	中称	遠称	疑問
人・物	furi/fuN「これ」	uri/uN「それ」	ari/aN「あれ」	uduru/uduN「どれ」
場所	maa「ここ」	ʔmaa「そこ」	ama「あそこ」	uda「どこ」

(4-97)

furi=wa	*taN=ga*	*kam-i-nu*	*muN=joo?*
furi=wa	*taN=ga*	*kam-ju-nu*	*muN=joo*
これ=TOP	誰=NOM	食べる-NPST-ADN	もの=WHQ

これは誰が食べるものか？（目の前にあるものを指して）

(4-98)

acja	*maa=cji*	*kicj-i*	*kuri-ri*
acja	maa=cji	ku-i	kuri-ri
父	ここ=ALL	来る-SEQ	下さい-IMP

お父さん、ここへ来てください。（自分の方に招く時）

4.2.2.2.2 指示代名詞の連体用法

疑問代名詞のうち、fuN, uN, aN, uduN は、代名詞としての用法の他に、連体詞のように、名詞を修飾する用法を持つ。

(4-99) の aN は三人称代名詞として用いられているのに対し、(4-100) は cjuu「人」を修飾している。

(4-99)

aN=wa	*furimuN=doo=jaa*	
aN=wa	furimuN=doo=jaa	
3SG=TOP	馬鹿者=SFP=SFP	

あれは馬鹿者ですよ。

(4-100)

aN	*cjuu=wa*	*cjura-sa-N*	
aN	cjuu=wa	cjura-sa-N	
あの	人=TOP	きれい-ADJ-IND	

あの人はきれいだ。

(4-101) は uduN が代名詞として用いられているが、(4-102) は uduN が omocja「おもちゃ」を修飾している。

(4-101)

uduN=ga	*jukwa*	*a-i=joo?*	
uduN=ga	jukwa	a-i=joo	
どれ=NOM	良い	COP-Q=WHQ	

どれが良い？

(4-102) *ura kwaa=wa uduN omocja=sji asjid-u-i=joo?*
ura kwaa=wa uduN omocja=sji asjib-u-i=joo
2SG 子供=TOP どの おもちゃ=INS 遊ぶ-CONT-Q=WHQ
あんたの子供は、どのおもちゃで遊んでいるの？

4.2.2.3 疑問代名詞

疑問詞の体系は 4.7 節で述べるが、ここではそのうち代名詞として機能する語を取り上げる。

4.2.2.3.1 疑問代名詞の体系

疑問代名詞には、人を尋ねる taru/taN「誰」、物を尋ねる nuu「何」、場所を尋ねる uda「どこ」、選択肢を尋ねる uduru/udunu/uduN「どれ」がある。人を指す taru, taN の複数形は tarutaa/taNtaa である。また、taru/taN と uduru/uduN は重複によって複数性を表すこともできる。

表 4-10. 疑問代名詞

疑問の対象	単数	複数
人間	taru/taN「誰」	tarutaa/taNtaa, tarutaru/taNtaN
物	nuu「何」	
場所	uda「どこ」	
選択肢	uduru/uduN「どれ」	uduruuduru
時間	icji	

(4-103) *ari=wa taru=nu muN=kaja?*
ari=wa taru=nu muN=kaja
あれ=TOP 誰=GEN もの=Q
あれは誰のものか？

(4-104) *futabagusa=di=nu munu nuu=kaja?*
futabagusa=di=nu munu nuu=kaja
フタバグサ=QT=ADN もの 何=Q
フタバグサというものは何かな？

(4-105) *uda=cji ic-ju-i=joo?*
uda=cji ik-ju-i=joo

どこ=ALL 行く-NPST-Q=WHQ
どこへ行くの？

(4-106)

uduru/uduN	*ma-sa*	*a-i=joo?*
uduru=nu	ma-sa	a-i=joo
どれ=NOM	美味しい-ADJ	COP-Q=WHQ

どれが美味しいの？

icji「いつ」には名詞と副詞の 2 つの用法があるが、(4-107) の icji「いつ」は格助詞 =kara を取ることから、名詞であり、修復が始まる時間を尋ねている。

(4-107)

icji=bee=kara	*hazjimat-i=joo*	*sjuufuku=wa?*
icji=bee=kara	hazjima-i=joo	sjuufuku=wa
いつ=くらい	始まる-Q=WHQ	修復=TOP

いつくらいから始まるの？修復は。

4.2.2.3.2 疑問代名詞の重複

疑問代名詞の一部は、複数を表す際に、重複の形態法をとることが出来る。疑問代名詞が重複した場合、(a) 不特定の単数を表す場合と、(b) 不特定の複数を表わす場合がある。

(a) 不特定の単数を表す用法 (4-108) は、日本標準語にも存在する。(b) 複数を表わす用法は、古典語には確認できるが、現代の日本標準語には存在しない。

例えば、(4-109) は、聞き手が複数の人と出掛けたことを知っている時に、「誰（複数）と出掛けたの？」のように使える表現である。(4-110) は選択肢を複数欲しい時に、「どれとどれを食べればいいの？」のように尋ねる表現である。いずれも、3 人／3 つ以上を尋ねる時にも使える。

(4-108)

nata=wa	*taru-taru=ga*	*uja=diro=kaja?*
nata=wa	taru-taru=ga	uja=diro=kaja
2SG.HON=TOP	誰-RED=GEN	親=POL=Q

あなたは誰々（個人）の親ですか？

(4-109)

kiNnjuu=wa	*taru-taru=tu*	*izj-i=joo?*
kiNnjuu=wa	taru=tu	ik-i=joo
昨日=TOP	誰-RED=COM	行く-Q=WHQ

昨日は誰（複数）と出掛けたの？

(4-110)

uduru-uduru	*kam-iba*	*ju-kwa*	*a-i=joo?*
uduru-uduru	kam-riba	ju-kwa	a-i=joo
どれ-RED	食べる-COND1	良い-ADJ	COP-Q=WHQ

どれ（複数）を食べたら良いの？

4.2.2.4 再帰代名詞

国頭方言の再帰代名詞は duu「自分」である。duu「自分」は節内の主語を照応対象とする。duu の複数形は、複数接辞-naa を取った duu-naa である。このように、複数を標示する接辞に-naa という形式を取るのは、再帰代名詞のみである（複数接辞については、4.2.1.1.2.2 を参照）。

(4-111) は、duu「自分」が、既出の主語 nira=nu kamisama「ニラの神様」を照応している（主語の認定については、5 章 1 節「統語論導入」を参照）。(4-112) は複数形の照応対象を指しており、duu が複数接辞-naa を取った duu-naa「自分たち」という形式になっている。

(4-111)

nira=nu	*kamisama=wa*	*duu*	*cjui=sji*	*izj-a-N*
nira=nu	kamisama=wa	duu	cjui=sji	ik-a-N
ニラ=GEN	神様=TOP	1REFL	1 人=INS	行く-PST-IND

ニラの神様は自分（＝ニラの神様）1 人で行った。

(4-112)

aN	*cju-Ncjaa=wa*	*duu-naa=ga*	*icibaN*	*kuroo*	*sji-a-N=di*
aN	cjuu-Ncja=wa	duu-naa=ga	icibaN	kuroo	sji-a-N=di
あの	人-PL=TOP	1REFL-PL=NOM	一番	苦労	する-PST=QT

あの人たちは自分たち（＝あの人達）が一番苦労したと

Muut-u-N=doo
Muu-u-N=doo
思う-CONT-IND=SFP
思っているよ。

4.2.3 数詞

数詞の構造は(4-113) のように、数を表す語幹に、類別詞（亀井ほか 1996：1396）となる屈折接尾辞（以下、類別接辞と呼ぶ）を接続して形成される。

(4-113) 語幹－類別接辞

国頭方言の数詞は日本標準語の基数（「ひい」「ふう」「みい」など）と異なり、語幹のみで使えるものがない。この点で、名詞の中では特殊な存在である。しかし、(4-114) の cjui「一人」のように、名詞句の主要部になることから、名詞の下位分類とした。

(4-114)

cju-i=wa	*sudi=ni*	*irit-i*	*mata*	*cju-i=wa*	*Maa=ni*	*irit-i*
cju-iwa	sudi=ni	iri-i	mata	cjui-wa	Maa=ni	iri-i
1-人=TOP	袖=LOC	入れる-SEQ	また	1-人=TOP	そこ=LOC	入れる-SEQ

1 人は袖に入れて、また 1 人はそこに入れて…（天女物語より）

国頭方言の数詞語幹は 10 の数までである。数詞の語幹は、後続する類別接辞によって変化し、5 以上の数で日本語の数詞が混入するなど、異形態が多い（表 4-11, 表 4-12）。類別接辞は、数詞が指す事物の形状や材質、機能などに基づいて一定の使い分けがある。

表 4-11. 数詞（1）

	形式	～つ（匹／個）	～回	～人[20]	～歩	～日
1	tii/cju	tii-cji	cju-kkee	cju-i	cju-mata	cjii
2	ta(a)	taa-cji	ta-kkee	ta-i	ta-mata	hucji-ka
3	mi(i)	mii-cji	mi-kkee	mi-cjai	mi-mata	mi-cjaa
4	ju(u)	juu-cji	ju-kkee	ju-tai	ju-mata	ju-waa/ju-faa
5	icji	icji-cji	icji-kee		icji-mata	icji-kaa
6	mu(u)	muu-cji	mu-kkee		mu-mata	mui-ka
7	nana	nana-cji	nana-kee		nana-mata	nanu-kaa/naN-kaa
8	ja(a)	jaa-cji	ja-kkee		ja-mata	jaa
9	ku(ku)nu	kukunu-cji	kunu-kee		kunu-mata	kukunu-kaa
10	tu(u)	tuu	tu-kkee		tu-mata	tu-kkaa/tuu

表 4-12. 数詞（2）

	語根	～ひら[21]	～方[22]	本（煙管）	口	羽	家族
1	tii/cju	cju-hjiru	cju-tukuru	cju-kisi	cju-kuci	cju-fani	cju-kine
2	ta(a)	ta-hjiru	ta-tukuru	ta-kisi	ta-kuci	ta-fani	ta-kine
3	mi(i)	mi-hjiru	mi-tukuru	mi-kisi	mi-kuci	mi-fami	mi-kine
4	ju(u)	ju-hjiru	ju-tukuru	ju-kisi	ju-kuci	ju-fami	

[20] 5 人以降は「ごにん、ろくにん…」と標準語と同形式になる。

[21] 天女が羽ばたく時のひとかきひとかきを指す。

[22] 目上など、尊敬の対象である人を数える。

5	icji	icji-hjiru		gu-kisi	ici-kuci	ici-fani	
6	mu(u)	mu-hjiru		mu-kisi	mu-kuci	mu-fani	
7	nana	nana-hjiru		nana-kisi	nana-kuci	nana-fani	
8	ja(a)	ja-hjiru		jaa-kisi	ja-kuci	ja-fani	
9	ku(ku)nu	kunu-hjiru		kunu-kisi	ku-kuci	ku-fani	
10	tu(u)	tu-hjiru		tu-kisi	tu-kuci	tu-fani	

類別接辞は、名詞を起源に持つものが多く、例えば表 4-12 の kucji「～くち」や fani「～羽」は、複合語にも見える。アクセントの調査が出来ていないため、結論は出せないが、現時点では形態素境界で連濁が起きていないことから、接辞と考える。

類別の仕方で日本標準語と異なる点として、「～つ（個）」にあたる-cji の用法が非常に広いことが挙げられる。-cji は「～つ（個）」と異なり、小さな物だけでなく、広く非生物名詞や動物名詞や指すことが出来る (4-115) (4-116) (4-117) 。

(4-115) *sjaagi=nu* *tii-cji* *nugat-a-N*
sjaagi=nu tii-cji nuga-a-N
白髪=NOM 1-つ 抜ける-PST-IND
白髪が 1 本抜けた。

(4-116) *ʔwaa* *mii-cji* *hoot-ut-a-N*
ʔwaa mii-cji hoo-u-a-N
豚 3-つ 飼う-CONT-PST-IND
豚を三匹飼っていた。

(4-117) *garasji=nu* *deNseN=ni* *icji-cji=mu* *tumat-ut-a-N*
garasji=nu deNseN=ni icji-cji=mu tuma-u-a-N
烏=NOM 電線=LOC 5-つ=ADD 止まる-CONT-PST-IND
烏が電線に 5 羽も止まっていた。

4.3　動詞形態論

4.3 節では動詞の形態について述べる。国頭方言の動詞の特徴は、その活用の複雑さにある。活用の複雑さは、(a) 語基（後述）の交替、(b) 屈折接辞の多さ、に起因する。

(a) について、例えば「来る」という動詞の語根には*fuu, *ku, *c, *kicj の 4 つの異形態があり、fuuraN「来ない」kuriba「来れば」cjuN「来る」kicjaN「来た」のように、後接する接辞によって語基（語根）が交替する。

(b) について、他方言で合流した複数の形式が共存したり、終助詞が担うモダリティを動詞の接辞が担うことがある。例えば、琉球諸方言で歴史的に mu→N へ合流が進んだ語尾接辞は、国頭方言では認識法（主に伝聞や引用内容を表す）に-mu、直説法に-N のように機能を異にして共存している。また、共通語で「〜か？」など終助詞が担う疑問のモダリティを、国頭方言では-i（疑問）、-e（肯否疑問）のように動詞の語尾が担っている。

以下では、4.3.1 で前提となる用語の整理と記述方針を述べ、4.3.2 で具体的な語形成のプロセス、4.3.3 で動詞の種類、4.3.4 で接辞の種類について述べる。

4.3.1　記述方針

まず、4.3.1.1 で記述のポイントとなる語の部分の呼び方について整理し、4.3.1.2 で動詞の分析に関する先行研究との差異を整理する。

4.3.1.1　語の部分の呼び方について

国頭方言は、接辞が接続する前の音が規則的に交替する。この交替規則を説明するにあたって、「語基」という単位を用いる。まず語の部分の呼び方について整理する。

4.3.1.1.1　語根

語の中心的な意味を担い、それ以上分析できない部分を「語根（root）」と呼ぶ[23]。語根は、動詞の活用に関わらず、固定的な概念である。

例えば、(4-118) abiraa「呼ぼう」においても (4-119)4-119) abijaburaa「呼びましょう」においても、語根は abi である。

(4-118)　*abi-raa*
　　abi-raa
　　呼ぶ-INT
　　呼ぼう

[23] a base that cannot be analyzed any further into constituent morphemes is called a root (p21)

(4-119) *abi-jabu-raa*
abi-jabu-raa
呼ぶ-POL-INT
呼びましょう

4.3.1.1.2 語幹

語の内部のうち、特に屈折接辞が接続する部分を「語幹（stem）」と呼ぶ[24]。

エラー! 参照元が見つかりません。 の abi-ras-raa は、語根*abi に、結合価を変化させる派生接辞-ras（使役）と、語尾を担う屈折接辞-raa が接続している。この時、語幹は abi-ras（基底形）の領域を指す。

(4-120) *abi-ras-aa*
abi-ras-raa
呼ぶ-CAUS-INT
呼ぼう

4.3.1.1.3 語基

語の内部のうち、接辞が接続する前部要素全体を「語基（base）」と呼ぶ[25]。「語基」は語幹と異なり、接辞側から定義される、相対的な領域である。

例えば、(4-121) abirasaa「呼ぼう」において、-ras（使役）の語基は abi であるが、-raa（意志）の語基は abiras である。また、(4-122) abi-jabu-raa「呼びましょう」において、-jabu（丁寧）の語基は abi であるが、-raa（意志）の語基は abijabu である。

「語基」の相対的性質は、国頭方言の動詞の活用を捉える上で非常に有効である。

(4-121) *abi-ras-aa*
abi-ras-raa
呼ぶ-CAUS-INT
呼ぼう

(4-122) *abi-jabu-raa*
abi-jabu-raa
呼ぶ-POL-INT
呼びましょう

[24] a base is also sometimes called a stem, especially if a inflectional affix attaches to it (p21)

[25] The part of word that an affix is attached to is called the base (Haspelmath 2010: 20)

4.3.1.2　先行研究との違い

北琉球諸方言においては、語基の音変化が盛んであり、これを説明する枠組みが記述の鍵となる。記述の方法として、大きく(a) 語基（語根、語幹）形式を複数立てて、その交替を説明する方法（平山 1986、Shimoji2012, 重野 2015 など）と、(b) 語基（語根、語幹）形式を 1 つ決め、ルールによって表層形を導き出す方法（有元 1993、白田 2015、新永 2015）がある。

本稿は、基底の語基を立てた上で、「語基の交替規則」と「形態音韻規則」によって表層形を導く。語基の音変化を「語基の交替」で説明する点で (a) を基本的な方針としつつも、形態音韻規則を用いる点では (b) の方法に通じる部分もあり、(a) (b)の中間的な方針と言える。

以下では、4.3.1.2.1 で語基の交替について、4.3.1.2.2 で語根と接辞の間の音について、先行研究との記述方法の違いを述べる。

4.3.1.2.1　語基の交替について

4.3.1.2.1.1　平山（1986）

沖永良部語の動詞形態論を論じた先行研究に平山（1986）がある。平山（1986）では、語に「不変化部」と呼ぶ語基を 4 つ立て、後接する接辞ごとに選択する語基を指定する記述方針を取っている。例えば、「書く」を例に挙げると、不変化部、即ち語基には hak, hacj, hac, hac(j)の 4 つがあるとされ、それぞれは第一不変化部‥第四不変化部と呼ばれる。そして、例えば「命令形」では、接辞は第一不変化部（hak）を選択するため、命令形は hak-i「書け」となると考える。この「語基を複数立て、後接する接辞によって選択される」という方針は、本稿でも採用するものである。

但し、平山（1986）の分析には幾つかの問題点がある。一番大きな問題点として、接辞の分析が不十分で、語中に現れる接辞が連続する場合を予測できないことが挙げられる。例えば、平山は「継続形（～している）」を作る接辞を-uN、「過去形（～た）」を作る接辞を-aN とし、これらの接辞は共に第四不変化部 (hacj) を選択するとしている。しかし、実際には継続のアスペクトと過去の時制は共存出来るものである。平山（1986）の記述では「書いていた（hacjutaN）」のように、継続アスペクトと過去時制の接辞が連続する形式を予測することが出来ない。この形式において、過去の時制接辞を-aN と分析する限り、継続のアスペクトは-uN ではなく-ut という形を取っていると分析せざるを得ないが、平山（1986）の枠組みでは、なぜそのような交替が生じるのかを説明することが出来ない。

このような形式を予測するためには、接辞をさらに詳細に分析した上で、接辞の相互承接順や語基の交替規則を明確に定義する必要がある。

4.3.1.2.1.2 Shimoji (2012)

沖縄首里方言を記述した Shimoji (2012) は、複数の語幹タイプを立てた上で、それぞれの語幹タイプに接続する前屈折接辞、屈折接辞を定義し、語幹の交替を記述している。平山（1986）と比べ、接辞の分析が詳細になり、接辞の相互承接順が明示されているほか、語幹の交替規則も定められている。本稿も同様の方針を取るが、Shimoji (2012) の枠組みとは、以下の点が異なる。

Shimoji (2012) では、交替の起きる領域を「語幹（stem）」とし、語幹を「語根（＋使役）（＋受動）（＋アスペクト）」という固定的な領域として指定する。一方で、本稿では交替が起きる領域を「語基」とし、語基を接辞側から規定される相対的な領域として指定する。

例えば、国頭方言の mucjuraze「持っていない？」について、Shimoji (2012) の枠組みを用いると、交替の起きる領域は語幹の mut-u（基底形）と考えられる。一方、本稿の枠組みを用いると、交替の起きる領域は、継続接辞-u に対しては mut、否定接辞-ran に対しては mut-u、肯否接辞-i に対しては mut-u-ran、というように、接辞毎に指定される。

交替が起きる領域を「語幹」に定めると、語根（mut）は後接する-u（不完了接辞、または継続接辞）[26]により muc（Stem-B）に交替するが、それ以降の接辞連続については、どのような交替が起きるか予測できない[27]。一方で、本稿のように交替が起きる領域（語基）を接辞側から指定される可変の領域とすれば、-u の前は語基 B（muc は mut となる）、否定接辞-ran の前は語基 A（-u は-u となる）、肯否疑問接辞-e の前は語基 C（-ran は-raz となる）のように、それぞれの語基の末尾音（つまり、それぞれの接辞の前の音）の交替を予測することが可能になる。

(4-123) *muc-u-raz-e*
mut-u-ran-e
持つ-CONT-NEG-YNQ
持っていない？（肯定否定疑問）

4.3.1.2.2 語根と接辞の間の音

前述の通り、本稿では「語基の交替規則」に加えて、「形態音韻規則」によって表層形を導き出す。このため、語根や接辞の基底形をどのように設定するかが重要な問題になる。ここでは、特に語根と接辞の間の分節音をどのように処理するかについて述べる。

---

[26] Shimoji (2012) では、首里方言の対応する形式を「不完了接辞」と呼び、本稿では「継続接辞」と呼んでいる。

[27] 否定接辞は語幹 A（stem-A）に接続するとされるが、語根に不完了のアスペクト接辞がついた mucu がどの語幹に属するかは指定されていない。

4.3.1.2.2.1 r 語根と母音語根

北琉球諸方言の記述では、本稿が「母音末尾語基」と分析する動詞語基を、(a) 母音末尾語幹[28]と r 末尾語幹に細分化して分析する枠組み（白田 2015）、(b) r 末尾語幹と分析する枠組み（新永 2015、Shimoji2012）、(c) 母音語幹と分析する枠組み（重野 2015）がある。r 末尾語幹を認める立場は、日琉諸語の歴史変化を反映した記述である。しかし、本稿は以下の理由から「r 末尾語基」を認めず、(c) 母音語幹と分析する枠組み、を選択する 。

まず、白田（2015）によると、喜界島上嘉鉄方言では活用が異なる「r 末尾語根」と、その他の母音末尾語根を認める必要がある。例えば、上嘉鉄方言において、r 語根の*thur「取る」の非過去形は thurii「取る」だが、i 語根の’abi「呼ぶ」の非過去形は’abii「呼ぶ」であり、異なる語根末尾を認める必要がある。しかし、国頭方言では、上嘉鉄方言で区別が必要な動詞に区別が必要ない（例えば、*tu「取る」は tujuN「取る」、*abi「呼ぶ」は abijuN「呼ぶ」になる）。つまり、記述の際には「r 語基」または「母音語基」のいずれかを認めればよい。

それでは「r 語基」とするか、「母音語基」とするかだが、本稿の記述方針の特徴として、先行研究が交替（もしくは形態音韻変化）が起きる領域を、絶対的な領域を持つ「語幹」としているのに対し、本稿は相対的な領域を持つ「語基（接辞側から決定される領域）」としている点がある。つまり、本稿でいう「語基」は、語根だけでなく「語根に接辞が接続した形式」も扱う必要がある。

語基が (a) 語根のみである場合と、(b) 接辞を含む場合を見てみよう。

(4-124) (4-125) は、語基が語根のみの例である。「呼ぶ」という動詞について「r 語基」を立てる方針と「母音語基」を立てる方針を比較すると、r 末尾語根を採用する分析(4-124) と、母音末尾語基を採用する分析 (4-125) の経済性にはさほど差がない。

(4-124)	abir	-ri	→	abi-ri
	呼ぶ	IMP	r 削除規則	呼べ

(4-125)	abi	-ri	→	abi-ri
	呼ぶ	IMP		呼べ

しかし、複数の屈折接辞が接続する場合には、「母音語基」を立てる方が、記述の経済性が高く、かつ正確である。

---

[28] 白田（2015）は 1 つの語幹から規則によって表層形を導き出す生成音韻的立場を取る。このため「母音末尾語根」「r 末尾語根」といったまとめ方をしている訳ではない。ただし、動詞の語根として、i, e, o, r で終わるそれぞれの語根を認めている。

例えば、「呼んでいた?（語根－継続接辞－過去接辞－肯否接辞）」という形式について考える。継続（進行）接辞は-tu または-u、過去接辞は-ta または-a、と考えられるため（t をどう扱うかは 4.3.1.2.2.2 で論じる）、これらの接辞を含む語基は「母音語基」と考えざるを得ない。もちろん、分析手法により、接辞の基底形を変えることも出来るが、もし継続接辞、過去接辞を r 末尾と分析すると、(4-126) のように、疑問接辞-i や肯否接辞-e などを接続する際に正しい形式を導けない。

こうした、「語根＋母音末尾の接辞」の語基も統一的に扱うために、「r 語基」ではなく「母音語基」を選択する。

(4-126)	abir	-tur	-tar	-e	→	*abitutare	
	呼ぶ	CONT	PST	YNQ	r 削除規則	呼んでいた	
(4-127)	abi	-u	-a	-e	→		abit-ut-ee
	呼ぶ	CONT	PST	YNQ	語基交替規則、母音調和規則		呼んでいた

4.3.1.2.2.2 t について

接辞の基底形について、もう一つの問題は「過去形」「継起形」「継続（進行）形」などに現れる語基－接辞境界の t を語基側につけて分析するか、接辞側につけて分析するかである。北琉球諸方言の先行研究では、歴史変化を考慮して接辞側につける分析が多いが、本稿では、以下の理由で語基側の要素として分析する。

語基側の要素として分析する第一の理由は、記述の経済性にある。表 4-13 は、母音、s, n, k, t, g, m, b, #Ci 語根動詞の「過去形」「継起形」「継続形」である。ここから分かる通り、t が語中に現れるのは、母音語根動詞の*abi「呼ぶ」だけである。このため、t を接辞側につけ、t を削除する形態音韻規則を設定するよりも、t を語基側の要素とし、母音語基の交替規則だけで処理する方が経済的である[29]。

[29] 白田（2015）新永（2015）は生成音韻論的立場から、t を接辞側に分析し、音韻規則によって他の末尾音を導いている。しかし、この手法は多くの規則を必要とする。例えば、新永（2015）は、t で始まる接辞に例外的に、挿入規則、口蓋化規則、有声化規則、削除規則、同化規則の 5 規則を適用することで、表層形を導いている。

表 4-13. 過去形、継起形、継続形

	abi 「呼ぶ」	nas 「産む」	sjin 「死ぬ」	cjik 「聞く」	mat 「待つ」
過去「～た」	abitaN	nacjaN	sjizjaN	cjicjaN	macjaN
継起「～て」	abiti	nacji	sjizji	cjicji	macji
継続「～ている」	abituN	nacjuN	sjizjuN	cjicjuN	macjuN

	uig 「泳ぐ」	kam 「食べる」	asjib 「遊ぶ」	mi 「見る」
過去「～た」	uizjaN	kadaN	asjidaN	micjaN
継起「～て」	uizji	kadi	asjidi	micji
継続「～ている」	uizjuN	kaduN	asjiduN	micjuN

第二の理由は、正確性にある。表 4-14 は不規則動詞の*sji「する」の過去形、継起形、継続形である。後で述べる通り、「する」は語根が*sji の 1 つであり、もし過去形、継起形、継続形の t を接辞側につけると正確な形式が導き出せない（sjitaN, sjiti, sjituN のようになる）。

もちろん t を接辞側に付けて、「する」の過去・継起・継続の語根を sj にする」という可能性もあるが、語根の異形態を増やすことになるので、経済的に優れた方針ではない。

以上の理由から、t は語基側の要素として分析し、母音語基の交替規則で扱う方針を採用する。

表 4-14. *sji「する」過去形、継起形、継続形

	sji「呼ぶ」
過去「～た」	sjaN
継起「～て」	sjii
継続「～ている」	sjuN

4.3.2 語形成

以下では、国頭方言の動詞の語形成について、4.3.2.1 動詞の内部構造、4.2.2.2 語基の交替規則、4.3.2.3 形態音韻規則、定めることで説明する。

4.3.2.1 動詞の内部構造

4.3.2.1.1 動詞の構造

動詞の構造は (4-128) のように表される。このうち、語根と語尾接辞が必須の要素であ

る。派生接辞には、-ras（使役）と-ra（受動）があり[30]、「使役－受動」の順で接続する。丁寧接辞は-jabu である。アスペクト接辞には、-u（継起接辞）がある。極性接辞には-ran（否定接辞 1）と、-radana（否定接辞 2）がある。「時制接辞」には-ju（非過去接辞）、-a（過去接辞）、-juta（過去 2 接辞）がある。語尾は、 (4-129) の接辞が埋める。個々の接辞については、4.3.4 で具体例を挙げながら述べる。

(4-128)　動詞の内部構造
語根（－派生接辞－丁寧接辞－アスペクト接辞－極性接辞－時制接辞）－語尾接辞

(4-129)　語尾接辞
-N（直説）、-mu（認識）、-ru（係り結び）、-nu（連体）、-e（肯否疑問）、-i（WH 疑問）、-sjiga（逆接）、-sa（意外性）, -sji（補文）、-maze（確認）、-riba（条件 1）、-rja（条件 2）、-ru（条件 3）、-raa（意図）、-ri（命令）、-runa（禁止）、-i（継起）、-i（連用 1）、-iN（連用 2）、-aja（並列）

4.3.2.1.2　共起制限

接辞には、互いに共起できないものがある。

4.3.2.1.2.1　語尾接辞と時制接辞

語尾接辞には、大きく(a) 時制接辞と共起するもの、(b) 時制接辞と共起出来ないもの、に分類できる。ただし、(a) 時制接辞と共起するものは、さらに (a1) 非過去接辞と共起できるものと、(a2) 過去接辞のみと共起できるものに分けられる（表 4-15）。

表 4-15. 語尾接辞と時制接辞の共起

	非過去接辞	過去接辞
(a1)	＋	＋
(a2)	－	＋
(b)	－	－

4.3.2.1.2.1.1　非過去接辞と共起出来る語尾接辞

非過去接辞と共起できる語尾接辞は、–N（直説）、-nu（連体）、-mu（認識）、-ru（係り結び）、-maze（確認）、-sjiga（逆接）、-e（肯否）、-sa（意外性）、-sji（補文）である。

これらの語尾接辞を取る動詞は、時制が過去の場合には過去接辞-a を取り、非過去の場

[30] 使役接辞-ras、受動接辞-ra は、項の数を増減させるという構文の変化を引き起こすため「派生接辞」と考える。

合には、非過去接辞-ju を取る。

-N（直説）を語尾に取る例について、(4-130) は非過去の文なので、*ak「歩く」が非過去接辞-ju を取り、acjuN「歩く」となる。一方 (4-131) は過去の文なので、*ak「歩く」は過去接辞-a を取り acj-a-N「歩いた」となる。

(4-130)

naacja	*wadomari=Ntabe*	*ac-ju-N=doo*
naacja	wadomari=Ntabe	ak-ju-N=doo
明日	和泊=TERM	歩く-NPST-IND=SFP

明日和泊まで歩くよ。

(4-131)

kiNnjuu	*wadomari=Ntabe*	*acj-a-N=doo*
kiNnjuu	wadomari=Ntabe	ak-ju-N=doo
昨日	和泊=TERM	歩く-PST-IND=SFP

昨日和泊まで歩いたよ。

4.3.2.1.2.1.2 過去接辞のみと共起出来る語尾接辞

過去接辞のみと共起できる語尾接辞は、-riba（条件 1）、-rja（条件 2）、-ru（条件 3）である。これらの語尾接辞を取る動詞は、(4-132) のように過去接辞と共起できるが、非過去接辞と共起できない。言い換えれば、非過去接辞を取らずに、非過去時制を表す (4-133)。

(4-132)

cju+kucji	*nud-a-riba*	*mii=nu*	*kurukuru*	*sj-i*
cju+kucji	num-a-riba	mii=nu	kurukuru	sji-i
1+口	飲む-PST-COND1	目=NOM	くるくる	する-SEQ

1 口飲んだら、目がくるくるして（回って）

(4-133)

icji=Ntabe	*mat-iba*	*ura*	*fuu-ra-ju-i=joo?*
icji=Ntabe	mat-riba	ura	fuu-ra-ju-i=joo
いつ=TERM	待つ-COND1	2SG	来る-POT-NPST-Q=WHQ

いつまで待てば、あんたは来られるの？

4.3.2.1.2.1.3 時制接辞と共起出来ない

時制接辞と共起できない語尾接辞は、-raa（意図）、-i（継起）、-ri（命令）、-i（連用）、-iN（連用 2）、-runa（禁止）、-aja（並列）である。これらの語尾接辞を取る動詞は、それ自体が時制を表すことが出来ない。

4.3.2.1.2.2 語尾接辞と否定接辞

語尾接辞のうち、-ri（命令）と-runa（禁止）は、否定接辞と共起することが出来ない。意味的に「否定の命令法」を表す場合には-runa 禁止形を用いる。

(4-134) は「酒を飲む」という行為を否定する命令だが、述語動詞*num「飲む」は禁止形-runa を取っている。

(4-134)	*wunagu*	*muN=nu*	*saki*	*num-una=joo*
	wunagu	muN=nu	saki	num-runa=joo
	女	もの=NOM	酒	飲む-PROH=SFP

女のくせに酒を飲むなよ。

4.3.2.1.2.3 非過去接辞と、他の屈折接辞

丁寧接辞、継続接辞、否定接辞は、非過去接辞と共起しない。これらが過去時制を表すときには、過去接辞をとるが、非過去時制を表す場合には、時制を非標示にする。

(4-135) は、動詞が丁寧接辞を伴う例である。現在（非過去）の状態について述べているが、waka-jabu-N「分かります」のように非過去接辞を含まない。

(4-135)	*ucja=ga*	*ʔju-nu*	*kutu=mu*	*waka-jabu-N*
	ucja=ga	ʔi-ju-nu	kutu=mu	waka-jabu-N
	2SG=NOM	言う-NPST-ADN	こと=ADD	分かる-POL-IND

あんたが言うことも分かります。

(4-136) は、動詞が継続接辞を伴う例である。現在（非過去）について述べているが、述語動詞は、izjit-u-N「出ている」のように、非過去接辞を伴っていない。

(4-136)	*aN*	*cjuu=wa*	*nama*	*cjimu*	*izjit-u-N=doo*
	aN	cjuu=wa	nama	cjimu	izji-u-N=doo
	あの	人=TOP	今	肝	出る-CONT-IND=SFP

あの人は、今怒っている（肝が出ている）よ。

(4-137) は、動詞が否定接辞を伴う例である。現在（非過去）の動作について述べているが、述語動詞は cjiko-ra-N「使わない」のように、非過去接辞を伴っていない。

(4-137)　*gaanu*　*muni=wa*　*cjiko-ra-N*
gaanu　muni=wa　cjiko-ran-N
そんな　言葉=TOP　使う-NEG-IND
そんな言葉は使わない。

4.3.2.2　語基交替規則

国頭方言の動詞は、接辞によって語基の末尾音が規則的に交替する。表 4-16「接辞の分類」において、A に分類される接辞は「語基タイプ A」、B に分類される接辞は「語基タイプ B」、C に分類される接辞は「語基タイプ C」に接続する。「その他」に属する接辞は、語基末尾音の交替に関与しない。

表 4-16 接辞の分類

接辞のグループ	形式	機能	グロス
A	-ras	使役	CAUS
	-ra	受動／可能	PASS/POT
	-ran	否定	NEG
	-radana	否定 2	NEG2
	-radana	否定継起	NEG.SEQ
	-raNko	否定継起 2	NEG.SEQ
	-ri	命令	IMP
	-raa	意志	INT
	-runa	禁止	PROH
	-riba	条件 1	COND1
	-rja	条件 2	COND2
	-ru	条件 3	COND3
B	-ju	非過去	NPST
	-juta	過去 2	PST2
	-i	連用	INF
	-iN	連用 2	INF2
	-jabu	丁寧	POL
C	-a	過去	PST
	-u	継続	CONT
	-i	継起	SEQ
	-aja	並列	SEL
その他	上記以外の接辞全て		

語基タイプによる語基末尾音の違いは表 4-17 の通りである。なお、語基 A を形成する語根や接辞を「基底形」と考える。語基 A を形成する形式を「基底形」とするのは、最も形式が対立が多く、歴史的に古い形式だと考えられるためである。

表 4-17. 語基末尾音の交替

語基のタイプ	語基の末尾音								
語基 A	V_1	s	n	k	t	g	m	b	#Ci
語基 B	V_1	s	n	c	c	z	m	b	#Ci
語基 C	V_1t	cj	zj	cj	cj	zj	d	d	#Cicj

例えば、母音語根*abi「呼ぶ」について、接辞グループ A の-ri（命令）に接続する語基は V_1（語基 A）で、語形は abiri「呼べ」となるが、グループ C の接辞-i（継起）に接続する語基は V_1t（語基 C）で、語形は abit-i「呼んで」となる。

k 語根*hak「書く」は、グループ A の接辞-ri（命令）に接続する語基は k（語基 A）で、語形は haki「書け」となるが、グループ B の接辞-i（連用）に接続する語基は c（語基 B）で、音韻規則 b) を経て、語形は hacji「書き」となる。グループ C の接辞-a（過去）に接続する語基は cj（語基 C）であるため、語形は hacj-a-N「書いた」となる。

それぞれの語基末尾音を持つ語根の交替について、具体例を表 4-18 に挙げる。

表 4-18. 語基交替（例）

語基末尾音	V_1	s	n	k	t
語根	*abi 「呼ぶ」	*nas 「産む」	*sjin 「死ぬ」	*cjik 「聞く」	*mat 「待つ」
A（命令-ri）	abi-ri	nas-i (→nasji)	sjin-i	cjik-i	mat-i
B（連用-i）	abi-i (→abi)	nas-i (→nasji)	sjin-i	cjic-i (→cjicji)	mac-i (→macji)
C（継起-i）	abit-i	nacj-i	sjizj-i	cjicj-i	macj-i

語基末尾音	g	m	b	#Ci
語根	*uig 「泳ぐ」	*kam 「食べる」	*asjib 「遊ぶ」	*mi 「見る」
A（命令-ri）	uig-i	kam-i	asjib-i	mi-ri (→mii)
B（連用-i）	uiz-i (→uizji)	kam-i	asjib-i	mi-i
C（継起-i）	uizj-i	kad-i	asjid-i	micj-i

注）( )内は、3－2－4 で述べる形態音韻規則を受けた後の形式

語根よりも大きい語基、例えば、語根に派生接辞が接続した語基 abi-ras（語根－使役：「呼ばす」）も、表 4-17 の語基交替規則に則って交替する。

すなわち、A グループの接辞の前では、abiras（語基 A）、B グループの接辞の前では abiras（語基 B）、C グループの接辞の前では abiracj（語基 C）という形式を取る。

4.3.2.3 形態音韻規則

基底形から表層形へ派生する際に、(4-138) のような音韻規則、(4-139) のような形態音韻規則が適用される。

(4-138)　音韻規則

動詞の屈折に関与する音韻規則は以下の通りである。

a) si --> sji：si は sji となる。

(ex) nas + -i → nasj-i
　　生む　INF　生む-INF

b) ci --> cji：ci は cji となる。

(ex) cjic + -i → cjicj-i
　　聞く　INF　聞く-INF

c) zi --> zji：zi は zji となる。

(ex) uiz + -i → uizj-i
　　泳ぐ　INF　泳ぐ-INF

(4-139)　形態音韻規則

a) r --> ∅ / C _：子音後の r は削除される。

(ex) hak + -ras + -ju + -N → hak-as-ju-N
　　書く　CAUS　NPST　IND　書く-CAUS-NPST-IND

b) ju --> i / {m , b} _ ：m,b の後の ju は i になる。

(ex) kam + -ju + -N → kam-i-N
食べる NPST IND 食べる-NPST-IND

(ex) asjib + -ju + -N → asjib-i-N
食べる NPST IND 遊ぶ-NPST-IND

c) n --> ∅ / _ C：子音前の n は削除される。

(ex) abi + -ran + -mu → abi-ra-mu
呼ぶ NEG IND 呼ぶ-NEG-EPI

d) ru --> N / _ n：ru は n の前で N となる

(ex) abi + -runa → abi-runa → abi-Nna
呼ぶ PROH 呼ぶ-PROH 呼ぶ-PROH

e) r →∅ / #Ci_：語幹が 1 モーラでかつ i で終わる時、後に続く r は削除される。

(ex) mi + -riba → mi-iba
見る COND 見る-COND

f) #Ci(j)V → #CjVV：語頭の CiV または CijV の連続は CjVV になる。

(ex) mi + -radana → mi-adana → mjaadana
見る NEG.SEQ 規則 a 見る-NEG.SEQ 規則 f 見なくて

(ex) mi + -jabu -N → mjaabuN
見る POL IND 見ます

(ex) mi + -ru → miu → mjuu
見る COND3 規則 a 見る-COND3 規則 f 見る（と）

(ex) mi + -ju + -nu → mjuunu
見る NPST ADN 見る-NPST-ADN

g) 語末から 2 つ目の母音は、後続する母音の開口度に同化する。

(ex) abi + -ju + -e → abi-jo-e
呼ぶ NPST YNQ 呼ぶ-NPST-YNQ

h) *(CC)VVN：超重音節は禁止される。

(ex) sji + -ju -N → sjuuN → sjuN
する NPST IND 規則 f 規則 h する

4.3.2.4 不規則変化

以上に述べた、語基交替規則・形態音韻規則では、活用が説明できないものを「不規則動詞」と呼ぶ。不規則動詞には「する」「行く」「来る」がある。

4.3.2.4.1 *sji「する」

*sji「する」の主な活用は表 4-19 の通りである。語根が 1 モーラで i で終わるが、同じタイプの動詞語根（例えば*mi「見る」）と異なり、語根は常に*sji である。また、形態音韻規則 e)に従わず、1 モーラの語根に接続する r はそのまま保たれる（sji-ri「しろ」等）。

表 4-19. *sji「する」の主な活用　※注）( ) 内は規則を受ける前の基底形

後接接辞			形式	語尾		形式
A	-ras	使役	sji-ras-ju-N	-N	直説	(sji-ju-N →) sjuN
	-ra	受動	sji-ra-ju-N	-mu	認識	(sji-ju-mu →) sjuumu
	-ran	否定	(sji-ran-N →) sjiraN	-ru	係り結び	(sji-ju-ru →) sjuuru
	-ri	命令	sji-ri	-nu	連体	(sji-ju-nu →) sjuunu
	-raa	意志	sji-raa	-e	肯否疑問	(sji-ju-e →) sjoe
	-runa	禁止	(sji-runa →) sjiNna	-i	WH 疑問	sji-ju-i
	-riba	条件 1	sji-riba			
B	-ju	非過去	(sji-ju-N →) sjuN			
	-i	連用	sji-i			
	-jabu	丁寧	(sji-jabu-N →) sjaabuN			
C	-a	過去	(sji-a-N →) sjaN			
	-u	継続	(sji-u-N →) sjuN			
	-i	継起	sji-i			

4.3.2.4.2 *ik「行く」

*ik「行く」の主な活用は表 4-20 の通りである。語根が-k で終わる他の規則動詞（例えば*cjik「聞く」）と、接辞グループ C の語根が異なり、icj ではなく izj となる[31]。

表 4-20. *ik「行く」の主な活用

	後接接辞		形式	語尾		形式
A	-ras	使役	(ik-ras-ju-N →) ikasjuN	-N	直説	ic-ju-N
	-ra	受動	(ik-ra-ju-N →) ikajuN	-mu	認識	ic-ju-mu
	-ran	否定	(ik-ran-N →) ikaN	-ru	係り結び	ic-ju-ru
	-ri	命令	(ik-ri →) iki	-nu	連体	ic-ju-nu
	-raa	意志	(ik-raa →) ikaa	-e	肯否疑問	(ic-ju-e →) icjoe
	-runa	禁止	(ik-runa →) ikuna	-i	WH 疑問	ic-ju-i
	-riba	条件 1	(ik-riba →) ikiba			
B	-ju	非過去	ic-ju-N			
	-i	連用	(ic-i →) icji			
	-jabu	丁寧	ic-jabu-N			
C	-a	過去	izj-a-N			
	-u	継続	izj-u-N			
	-i	継起	izj-i			

4.3.2.4.3 *ku「来る」

*ku「来る」の活用は表 4-21 の通りである。*ku「来る」は最も語根の形式が多い動詞で、接辞 A グループの中でも、使役、受動、否定、命令接辞には fuu、それ以外には ku、接辞 B グループには cji、接辞 C グループには kicj という語根の形式が接続する。

[31] 歴史的には、「行く」の活用の一部が消失し、別の動詞「往ぬ（いぬ）」の語根が補充されたと思われる。首里方言で「行く」の活用に「往ぬ」が補充された可能性については、服部（1955：328－353）で述べられている。

表 4-21. *fuu「来る」の活用

後接接辞			形式	語尾		形式
A	-ras	使役	fuu-ras-ju-N	-N	直説	(cji-ju-N →) cjuN
	-ra	受動	fuu-ra-ju-N	-mu	認識	(cji-ju-mu →) cjuumu
	-ran	否定	(fuu-N →) fuN	-ru	係り結び	(cji-ju-ru →) cjuuru
	-ri	命令	fuu	-nu	連体	(cji-ju-nu →) cjuunu
	-raa	意志	−	-e	肯否疑問	(cji-ju-e →) cjoe
	-runa	禁止	(ku-runa →) kuNna	-i	WH 疑問	(cji-ju-i →) cjui
	-riba	条件 1	ku-riba			
B	-ju	非過去	(cji-ju-N →) cjuN			
	-i	連用	cji-i			
	-jabu	丁寧	(cji-jabu-N →) cjaabuN			
C	-a	過去	kicj-a-N			
	-u	継続	kicj-u-N			
	-i	継起	kicj-i			

4.3.3 動詞の種類

動詞は形態統語的な差異から、(a) 動作動詞、(b) 存在動詞、(c) コピュラ動詞に分類される（表 4-22）。

構造的な差異として、動作動詞は継続接辞（CONTinuous とする）を取れるが、他の動詞はそれを取れない。統語的な差異として、コピュラ動詞は、名詞や形容詞とコピュラ述部を形成するが、他の動詞語根はそれができない（5 章 4 節述部構造を参照）。

表 4-22　動詞の分類

	-u（継続接辞）の接続	コピュラ述部の形成
(a) 動作動詞	＋	-
(b) 存在動詞	-	-
(c) コピュラ動詞	-	＋

4.3.3.1 動作動詞

主に動作や運動を表わし、形態的に継続接辞を取ることが出来る動詞を「動作動詞」とする。動作動詞の活用は、4.3.2「語形成」で述べた通りである。主な活用を、動詞形態論末（178 ページ）の、表 4-25、表 4-26、表 4-27 に挙げる。

4.3.3.2　存在動詞

生物やモノの存在・非存在を表す動詞を「存在動詞」と呼ぶ。形態的に、(a) アスペクトの接辞を取れない点、(b) 非過去時制が標示されない点が、動作動詞と大きく異なる。

人・動物の存在を表す動詞に*u「いる」、植物・モノの存在を表す動詞に*a「ある」、植物・モノの非存在を表す動詞に*na「ない」[32]がある。代表的な活用を表 4-23 に挙げる。

表 4-23 存在動詞の活用表

機能	形式	*a「ある」	*u「いる」	*na「ない」
使役	-ras	-	u-ras-ju-N	-
受動・可能	-ra	-	u-ra-ju-N	-
否定 1	-ran	(naN)	u-ra-N	(na-ran-N →) naN
否定 2	-radana	(naadanataN)	u-radanat-a-N	(na-radanat-a-N →) naadanataN
命令	-ri	-	u-ri	-
意志	-raa	-	u-raa	-
禁止	-runa	-	u-Nna	-
条件 1	-riba	a-riba	u-riba	-
条件 2	-rja	a-rjaa	u-rja	(na-ran-rja →) naNnja
条件 3	-ru	a-ru	u-ru	-
連用 1	-i	a-i	u-i	-[33]
丁寧	-jabu	a-jabu-N	u-jabu-N	(na-jabu-ra-N →) naaburaN
過去	-a	at-a-N	ut-a-N	(na-radanat-a-N →) naadanataN
継起	-i	at-i	ut-i	(na-razj-i →) naazji
否定継起	-radana	(naadana)	u-radana	(na-radana →) naadana
直説	-N	a-N	u-N	(na-ran-N →) naN
連体	-nu/N	a-nu	u-nu	(na-ran-nu →) naanu
認識	-mu	a-mu	u-mu	(na-ran-mu →) naamu
意外性	-sa	aa-saa	uu-saa	naa-saa
係り結び	-ru	a-ru	u-ru	-
肯否疑問	-e	a-e	o-e	(na-ran-e →) naaze
疑問	-i	a-i	u-i	-[34]

[32] 実際には、否定接辞-ran を取ることで「ない」という非存在の意味を表す形式である。

[33] 連用 1 の出現環境である「～そうだ」gisaN の文脈では、予想される n-a-i gi-sa-N「なさそう」とは言わず、a-i gi-sa n-a-N「ありそうでない」という表現をする。

[34] *na「ない」は常に否定接辞を内包するため、疑問詞疑問文を作る時には継起形となる。

4.3.3.2.1 *u「いる」

存在動詞*u「いる」の内部構造は (4-140) のように表すことが出来る。接辞の形式や、基底形から表層形への派生プロセスは 4.3.2「語形成」で説明した通りである。

(4-140) 語根 u -（使役-ras）-（受動・可能-ra）-（丁寧-jabu）-（否定-ran）-（過去-a）-語尾接辞

語根の基底形は*u だが、語基の交替規則により、他に ut の表層形がある。

(4-141) では、述語動詞*u「いる」が語末接辞に直接接続し、u-N という形式になっている。一方で、(4-142) は語根に過去接辞（接辞グループ C）が接続し、語基交替規則によりい、ut-a-N「いた」という形式になっている。

(4-141)

zjaazja=wa	*naacja*	*jaa=ni*	*u-N=doo*
zjaazja=wa	naacja	jaa=ni	u-N=doo
祖父=TOP	明日	家=LOC1	いる-IND=SFP

お爺ちゃんは明日家にいるよ。

(4-142)

zjaazja=wa	*kiNnjuu*	*jaa=ni*	*ut-a-N=djaa*
zjaazja=wa	kiNnjuu	jaa=ni	u-a-N=doo
祖父=TOP	昨日	家=LOC1	いる-PST-IND=SFP

お爺ちゃんは昨日家にいたよ。

また*u「いる」には、人の存在を表す本動詞としての機能の他に、動詞の継起形に後続し、継続のアスペクトを表す補助動詞としての機能がある（5.4.2「動詞述部」を参照）。

(4-143) は、言いたいことが残っている（残ると言う状態が続いている）ことを表し、*nuku「残る」の継起形に、*u「いる」が後続している。

(4-143)

ura=cji	*ʔjuu-nu*	*muni=nu*	*nukut-i*	*u-mu*
ura=cji	ʔi-ju-nu	muni=nu	nuku-i	u-mu
2SG=ALL	言う-NPST-ADN	言葉=NOM	残る-SEQ	いる-EPI

あんたに言う言葉が残っている。

4.3.3.2.2 *a「ある」

存在動詞*a「ある」は、4.3.3.2 冒頭で述べた存在動詞の形態的特徴に加え、(c) 否定形に補充形*na を用いる、(d) 意味的な制約から、接辞が限定される、という特徴がある。(d) について、具体的には使役接辞-ras、受動・可能接辞-ra、命令接辞-ri、禁止接辞-runa、

意思接辞-raa を取ることが出来ない。

*a「ある」の内部構造は、 (4-144) のように表せる。*a「ある」が取ることの出来る語尾接辞は (4-145) の通りである。

(4-144)　語根 a -（丁寧-jabu）-（過去-a）- 語尾接辞

(4-145)　-riba 条件 1／-rja 条件 2／-ru 条件 3／-i 連用 1／-i 継起／-radana 否定継起／-N 直説／-mu 認識／-sa 意外性／-nu 連体／ru 係り結び／-e 肯否疑問／-i 疑問

語根の基底形は*a だが、語基交替規則により、他に at という表層形がある。

(4-146) では、述語動詞*a「ある」が語尾接辞-N に接続し、a-N という形式になっている。一方で、 (4-147) では、述語動詞*a「ある」が、過去接辞（接辞グループ C）を取り、語基交替規則により、at-a-N「あった」という形式になる。

(4-146)

hookusu=nu	*madni*	*a-N*
hookusu=nu	madni	a-N
ほくろ=NOM	たくさん	ある-IND

ほくろがたくさんある。

(4-147)

fattee=ni=du	*jaa*	*at-a-mu*
fattee=ni=du	jaa	a-a-mu
畑=LOC=FOC	家	ある-COP-EPI

（昔は）畑に家があった。

否定接辞を取らない代わりに、植物・モノの非存在を表すには*na「ない」を補充形に用いる。(4-148) は「鍋が無い」という非存在を表す文だが、ここでは*a に否定接辞を接続した形式 a-ra-N ではなく、*na「ない」に否定接辞を接続した形式 naN を述語に取っている。

(4-148)

nabi=nu	*na-N*
nuu=nu	na-ran-N
鍋=NOM	ない-NEG-IND

鍋が無い。

また、*a「ある」には、人の存在を表す本動詞としての機能の他に、動詞の継起形に後続し、完成のアスペクトを表す補助動詞としての機能がある（5 章 4 節述部構造、6 章 2 節テンス・アスペクトを参照)。

(4-149) は、「沖縄に行く」という経験が過去にある（完成相：perfect）ことを表しており、*ik「行く」の継起形に*a「ある」が後続している。

(4-149)	*goneN*	*mae=mu*	*wana*	*okinawa=cji*	*izj-uut-i*	*a-ssaa*
	goneN	mae=mu	wana	okinawa=cji	ik-u-i	a-sa
	5 年	前=ADD	1SG	沖縄=ALL	行く-CONT-SEQ	ある-SFP

5 年前も私は沖縄へ行ってある（行っている）よ。

4.3.3.2.3 *na「ない」

存在動詞*na は 4.3.3.2 で述べた存在動詞の形態特徴に加え、(c) 否定接辞を必ず取る、(d) 意味的な制約から、接辞が限定される、(e) 特有の語基交替規則、形態音韻規則を持つ、という特徴がある。

*na は、実際には否定接辞-ran を伴うことで、非存在の「ない」という意味を表すため、語根の語彙的意味を「ない」とすることは正確ではない。ただし否定接辞を取らない形式は存在しないため、便宜的に*na を「ない」とする。

*na「ない」の内部構造は (4-150) 、語尾に取ることが出来る接辞は (4-151) の通りである。

(4-150)　語根*na （丁寧-jabu）-（否定-ran）-（過去-a）－語尾接辞

(4-151)　-radana 否定継起／-N 直説／-mu 認識／-sa 意外性／-nu 連体／-e 肯否疑問／-i 疑問}

4.3.3.2.3.1 *na「ない」の語基交替規則

*na「ない」は特別に以下の語基交替規則を被る。

i) *na「ない」に接続する-e（肯否疑問）は、接辞グループ C と同じ語基交替を引き起こす。

4.3.2.2「語基交替規則」で述べた通り、-e は本来語基の交替に関与しないが、*na「ない」に接続する場合には、接辞グループ C と同じ交替規則を引き起こす。

(4-152) の述語動詞 na-az-e は、語根、否定接辞-ran、肯否疑問接辞-e から形成されている。「語基交替規則」では、肯否疑問接辞は語基の交替に関与しないとされる。しかし、(4-152) では、naaz-e になっており、語基が naan→naaz と、語基 C の形式に交替していることが分かる。

(4-152)　*fumi=nu*　*na-az-e?*
fumi=nu　na-ran-e
米=NOM　ない-NEG-YNQ
米がない？

4.3.3.2.3.2 *na「ない」の形態音韻規則

*na「ない」は特別に以下の形態音韻規則を被る。

j)　{r/j} → ø / #na_ :「ない」語根に接続する r および j は削除される。

(4-153) の動詞述語は、語根*na「ない」、丁寧の接辞-jabu、否定の接辞-ran、直説法-N によって構成され、形態音韻規則 j) によって j が、形態音韻規則 c)によって n が削除されるため、na-abu-ra-N「ないです」という形式になっている。

(4-154) の動詞述語は、語根*na、否定接辞-ran、継起接辞-i から構成される（na-ran-i)。語基交替規則によって継起接辞の語基末は n→z に変化し、形態音韻規則 j) によって r が削除されるため、na-azj-i「無くて」という表層形が出力される。

(4-153)　*nabi=nu*　*na-abu-ra-N*
nuu=nu　na-jabu-ran-N
鍋=NOM　ない-POL-NEG-IND
鍋が無いです。

(4-154)　*kam-i+muN=wa*　*na-azj-i*
kam-i+muN=wa　na-ran-i
食べる-INF1+もの=TOP　ない-NEG-SEQ
食べるものは無くて‥

4.3.3.3　コピュラ動詞

名詞句や形容詞句を補部に取り、コピュラ述部を形成する（5 章 3 節述部構造を参照）動詞をコピュラ動詞とする。

4.3.3.3.1　名詞句を補部に取るコピュラ動詞

名詞句を補部に取るコピュラ動詞には、大きく(a) 活用変化があるものと、(b) 活用変化がないもの、がある。

4.3.3.3.1.1 活用変化がないコピュラ動詞

活用変化がないコピュラ動詞には ai「～ではない」がある[35]。ai は活用変化をしないため、時制が非過去で、待遇が普通（丁寧体ではない）時のみに用いられる。

(4-155) では、コピュラ動詞 ai「~でない」が名詞 fumi を補部に取り、「米でない」というコピュラ述部を形成している。

(4-155)	*fumi=wa*	*ai*	*muzji=du*	*na-N*
	fumi=wa	ai	muzji=du	na-ran-N
	米=TOP	COP.NEG	麦=FOC	ない-NEG-IND
	米ではない。麦が無い。			

4.3.3.3.1.2 活用変化があるコピュラ動詞

活用変化があるコピュラ動詞には*a、*ja がある。(a) アスペクトの接辞を取らない、(b) 非過去時制が標示されない、(c) 使役接辞、受動・可能接辞を取らない点が、形態的に動作動詞と大きく異なる。主な*ja, *a の活用は

[35] 同形式の感動詞に ai「いいえ」がある。本稿では、ai がコピュラ述部（4 章 3 節「述部構造」参照）の構造を持つ為、動詞に分類している。しかし、1 節「品詞分類」において述べた、動詞の特徴 (a) 連体接辞-nu (N) を伴い、名詞の修飾部に立つ、(b) 様々な派生／屈折接辞を生産的に取る、(c) 単独で発話を形成する、のうち、(a) (b) の要件を満たしておらず、今後、品詞の分類には検討の余地がある。

表 4-24 の通りである。

表 4-24. 名詞句を補部に取るコピュラ動詞の主な活用

機能	形式	ja「～だ」	a「～だ」
使役	-ras	-	-
受動・可能	-ra	-	-
否定 1	-ran	-	a-ra-N
否定 2	-radana	-	a-radanat-a-N
命令	-ri	-	-
意志	-raa	-	-
禁止	-runa	-	-
条件 1	-riba	ja-riba	a-riba
条件 2	-rja	ja-rja	a-rjaa
条件 3	-ru	ja-ru / ja-N	a-ru
連用 1	-i	ja-i	a-i
丁寧	-jabu	-	a-jabu-N
過去	-a	jat-a-N	at-a-N
継起 1	-i	jat-i	at-i
継起 2	-radana	-	a-radama
直説	-N	ja-N (=tuni)	a-N (=tuni)
連体	-nu/N	jaa-nu	a-nu
認識	-mu	-	a-mu
意外性	-sa	jaa-saa	aa-saa
係り結び	-ru	ja-ru	a-ru
肯否疑問	-e	(jat-e-e)	a-e
疑問	-i	-	a-i

4.3.3.3.1.2.1 ja

*ja「～だ」の内部構造は (4-156) のように表すことが出来る。また、語尾に取ることが出来る接辞は (4-157) の通りである。他のコピュラ動詞と比較して、(a) 否定接辞を取らない、(b) 丁寧接辞を取らない、といった形態的な特徴がある。

否定や丁寧の意味を表す時には、コピュラ動詞*a を用いる。

(4-156) 語根 -（過去-a）- 語尾接辞

(4-157) -riba（条件 1）／-rja（条件 2）／-ru（条件 3）／-i（連用 1）／-i（継起 1）／-N（直説）／-mu（認識）／-nu（連体）／-ru（係り結び）／-e（肯否疑問）／-i（疑問）

(4-158) では、コピュラ動詞*ja が名詞 akiko「あきこ」を補部に取り、「あきこだ」というコピュラ述部を形成している。語基の交替規則により、語根には他に jat という表層形がある(4-159) 。

(4-158)

akiko	*ja-N=tu=du*	*deki-ju-N=doo*
akiko	ja-N=tu=du	deki-ju-N=doo
あきこ	COP-IND=CSL=FOC	出来る-NPST-IND=SFP

あきこだから、出来るよ。

(4-159)

cjuu=wa	*taN*	*jat-i=mu*	*sjin-ju-N*
cjuu=wa	taN	ja-i=mu	sjin-ju-N
人=TOP	誰	COP-SEQ-ADD	死ぬ-NPST-IND

人は誰でも死ぬ。

4.3.3.3.1.2.2 a

コピュラ動詞*a の内部構造は、(4-160) のように表すことが出来る。また、語尾に取ることが出来る接辞は (4-163) の通りである。

(4-160) 語根 -（丁寧-jabu）-（否定-ran）-（過去-a）ー語尾接辞

(4-161) -riba（条件 1）, -rja（条件 2）, -ru（条件 3）, -i（連用 1）, -i（継起 1）, -radana（否定継起）, -N（直説）, -mu（認識）, -nu（連体）, -ru（係り結び）, -e（肯否疑問）, -i（疑問）

(4-162) では、コピュラ動詞*a が名詞 jumiko「ゆみこ」を補部に取り、「ゆみこだ」というコピュラ述部を形成している。語基交替規則により、語根には他に at という表層形がある (4-163) 。

(4-162)

ari=wa	*akiko*	*a-raNko*	*jumiko=du*	*a-N=doo=jaa*
ari=wa	akiko	a-raNko	jumiko=du	a-N=doo=jaa
あれ=TOP	あきこ	COP-NEG.SEQ	ゆみこ=FOC	COP-IND=SFP=SFP

あれはあきこではなく、ゆみこだよ。

(4-163)

aN	*cjuu=wa*	*seNsee*	*at-a-N*
aN	cjuu=wa	seNsee	a-a-N
あの	人=TOP	先生	COP-PST-IND

あの人は先生だったよ。

名詞を補部に取るコピュラ動詞*a は、語根*a に否定接辞を接続した形式を、否定形として用いる (4-164) 。

(4-164)

waN=wa	*seNsee*	*a-ra-N*	*doNbjakusjoo=doo*
waN=wa	seNsee	a-ran-N	doNbjakusjoo=doo
1SG=TOP	先生	COP-NEG-IND	百姓=SFP

私は先生ではない。ただの百姓だよ。

4.3.3.3.2 形容詞を補部に取るコピュラ動詞

形容詞を補部に取るコピュラ動詞には、*a, *na がある。活用は、4.3.3.2 節 存在動詞でとりあげた*a「ある」*na「ない」と全く同じである。

4.3.3.3.2.1 *a

形容詞を補部に取るコピュラ動詞*a の活用は、4.3.3.2.2 で取り上げた、存在動詞*a「ある」と同じである。

(4-165) では、コピュラ動詞*a が、形容詞*hamara「うるさい」を補部に取り、コピュラ述部を形成している。

(4-165)

aN	*cjuu=wa*	*hamara-sja*	*a-N=djaa*
aN	cjuu=wa	hamara-sja	a-N=djaa
あの	人=TOP	うるさい-ADJ	COP-IND=SFP

あの人はうるさいね。

形容詞を補部に取るコピュラ動詞*a は、名詞を補部に取るコピュラ動詞*a とは異なり、補充形の*na を否定形に用いる (4-166)。

(4-166)

aN	*cjuu=wa*	*fazji=nu*	*hee-sa*	*na-N*
aN	cjuu=wa	fazji=nu	hee-sa	na-ran-N
あの	人=TOP	足=NOM	早い-ADJ	COP-NEG-IND

あの人は足が速くない。

4.3.3.3.2.2 na

形容詞を補部に取るコピュラ動詞*na の活用は、4.3.3.2.3 存在動詞で取り上げた*na「ない」と全く同じである。

(4-167) では、コピュラ動詞*na が、形容詞*hjii「寒い」を補部に取り、「寒くない」と

いうコピュラ述部を形成している。

(4-167)

sjicunai=wa	*hjii-sa*	*na-N=jaa*
sjicunai=wa	hjii-sa	na-ran-N=jaa
室内=TOP	寒い-ADJ	COP-NEG-IND=SFP

室内は寒くないね。

4.3.4 接辞の種類

個々の動詞接辞について、基底形と、表層形のバリエーションを述べる。

機能のより詳細な議論は、使役、受動接辞、否定接辞については 5 章 5 節構文論、丁寧接辞については 6 章 4 節待遇表現、アスペクトや時制接辞については 6 章 3 節テンス・アスペクト・エビデンシャリティ、語尾接辞については 6 章 6 節複文、で取り上げる。

4.3.4.1 派生接辞

4.3.4.1.1 使役（接辞グループ A）

動詞語幹に使役接辞を接続することで、使役構文を作る。使役接辞の基底形は-ras である。語基の交替規則と形態音韻規則により、他に-as, -racj, -acj という表層形があり得る。

(4-168) では、母音語幹の*sji「する」に使役接辞-ras が接続し、sji-ras-ju-N「させる」という語形になる。同じ接辞承接順でも、使役接辞-ras が子音語基に接続する場合には、形態音韻規則 a) により使役接辞は-as となる (4-169)。

(4-170) では、母音語幹*u「いる」に使役接辞-ras が接続するが、過去接辞-a（グループ C）が接続するため、語基交替規則により u-racj-a-N「いさせた」という語形になる。同じ接辞承接順でも、使役接辞-ras が子音語基に接続する場合には、形態音韻規則 a) により使役接辞は-acj となる。

(4-168)

uN	*sjigutu=wa*	*takako=ni*	*sji-ras-ju-N=doo*
uN	sjigutu=wa	takako=ni	sji-ras-ju-N=doo
その	仕事=TOP	たかこ=DAT	する-CAUS-NPST-IND=SFP

その仕事はたかこにさせるよ。

(4-169)

Maa=ni	*kusa*	*kam-as-ju-N*
Maa=ni	kusa	kam-ras-ju-N
馬=LOC1	草	食べる-CAUS-NPST-IND

馬に草を食べさせる。

(4-170)

wana	*pasokoN*	*nara-i*	*bu-sja*	*a-N=tuni*	*nisaNnicji*
wana	pasokoN	nara-i	bu-sja	a-N=tuni	nisaNnicji
1SG	パソコン	習う-INF	欲しい-ADJ	COP-IND=CSL	2,3 日

私はパソコンを習いたいから、2，3 日

akiko	*u-racj-a-N=doo*
akiko	u-ras-a-N=doo
あきこ	いる-CAUS-PST-IND=SFP

あきこをいさせたよ。

(4-171)

uN	*hanasji=wa*	*tuzji=daki=ni*	*cjik-acj-a-N*
uN	hanasji=wa	tuzji=daki=ni	cjik-as-a-N
その	話=TOP	妻=LIM=DAT	聞く-CAUS-PST-IND

その話は妻だけに聞かせた。

4.3.4.1.2 受動／可能（接辞グループ A）

動詞語根に受動／可能接辞を接続することで、受動構文、可能構文を作る。受動／可能接辞の基底形は-ra である。語基交替規則と形態音韻規則 a) により、他に-a, -rat, -at という表層形があり得る。なお、受動と可能は全くの同形式であるが、例文のグロスは、受動の意味を表す時に PASS、可能の意味を表す時に POT と振る。

(4-172) では、母音語根の*ama「怒る」に受動接辞-ra が接続し、ama-ra-ju-N「怒られる」という形式になっている。同じ接辞承接順でも、受動接辞-ra が子音語根*hjik「轢く」に接続する場合は、形態音韻規則 a) によって-a という形式になる(4-173) 。

(4-174) では、母音語根の*abi「呼ぶ」に受動接辞-ra が接続するが、継続接辞-u（グループ C）が後接し、語基の交替 ra→rat が起きるため、abi-rat-i「呼ばれて」という形式になっている。同様に、子音語根*sjik「敷く」に接続するときは、形態音韻規則 a) によって sjik-at-u-mu「敷かれている」となる(4-175)。

(4-172)

hee-sa	*nibu-raN-nja*[36]	*ama=ni*	*ama-ra-ju-N=doo*
hee-sa	nibu-ran-rja	ama=ni	ama-ra-ju-N=doo
早い-ADJ	眠る-NEG-COND	母=DAT	怒る-PASS-NPST-IND=SFP

早く眠らないと、お母さんに怒られるよ。

[36] 規則を用いると nibu-ran-ja となるはずだが、否定接辞に条件 2 接辞が接続する場合は語幹が重音節化することがある。(8) も同様である。

(4-173)　*kii*　*cjiki-raN-nja*　*kuruma=ni*　*hjik-a-ju-N=doo*
kii　cjiki-ran-rja　kuruma=ni　hjik-ra-ju-N=doo
気　つける-NEG-COND　車=DAT　轢く-PASS-NPST-IND=SFP
気を付けないと、車に轢かれるよ。

(4-174)　*taru=ga*　*seNsee=ni*　*abi-rat-i=joo?* [37]
taru=ga　seNsee=ni　abi-ra-i=joo
誰=NOM　先生=DAT　呼ぶ-PASS-SEQ=WHQ
誰が先生に呼ばれたの？

(4-175)　*ama=ga*　*tub-i+isjoo=wa*　*kura=nu*　*awa=nu*　*sjaa=ni*
ama=ga　tub-i+isjoo=wa　kura=nu　awa=nu　sjaa=ni
母=GEN　飛ぶ-INF+衣装=TOP　蔵=GEN　粟=GEN　下=LOC
お母さんの飛び衣装は、蔵の粟の下に

sjik-at-u-mu
sjik-ra-u-mu
敷く-PASS-CONT-EPI
敷かれている（と）

なお、-ra という接辞形式は(4-176)-(4-179) のように可能の意味も持つ。

(4-176)　*bosutoN=niti*　*hoogeN=nu*　*cjiko-ra-ju-N=tu*　*<sugoi>=joo*
bosutoN=niti　hoogeN=nu　cjiko-ra-ju-N=tu　sugoi=joo
ボストン=LOC2　方言=NOM　使う-POT-NPST=CSL　すごい=SFP
ボストンで方言が使えるんだから、すごいよ。

(4-177)　*nama*　*hoogeN=sji=mu*　*hanas-a-ra-N=tu*　*cjikot-u-ra-nu*　*hazji*
nama　hoogeN=sji=mu　hanas-ra-ran-N=tu　cjiko-u-ra-nu　hazji
今　方言=INS=ADD　話す-PASS-NEG-IND=CSL　使う-CONT-NEG-ADN　はず
今は（若い人と）方言でも話せないから、（方言を）使っていないはずだ。

[37] 過去接辞には継起接辞を接続して疑問詞疑問文を形成する。3－3－5－4－1 継起接辞を参照。

(4-178)　*hjuu=wa*　*hee-sa*　*ui-rat-a-N=doo*
hjuu=wa　hee-sa　ui-ra-a-N=doo
今日=TOP　早い-ADJ　起きる-POT-PST-IND=SFP
今日は早く起きれたよ。

(4-179)　*kiNnjuu=wa*　*jukwa+hanasji*　*cjik-at-a-N*
kiNnjuu=wa　jukwa+hanasji　cjik-a-a-N
昨日=TOP　良い+話　聞く-POT-PST-IND
昨日は良い話が聞けた。

4.3.4.2　丁寧（接辞グループ B）

動詞語基に丁寧接辞を接続することで、聞き手に配慮する丁寧な待遇を表す。丁寧接辞の基底形は-jabu である。語基交替規則により、他に-jabut という表層形があり得る。

(4-180) は目上の人を勧誘する表現で、*ik「行く」に丁寧接辞-jabu が接続し、ic-jabu-raa「行きましょう」という語形になる。(4-181) は-jabu の後に過去接辞-a（グループ C）が接続するため、語基交替規則により a-jabut-a-N「でした」という語形になる。

(4-180)　*naacja*　*oNseN=cji*　*agu=sji*　*ic-jabu-raa*
naacja　oNseN=cji　agu=sji　ic-jabu-raa
明日　温泉=ALL　一緒=INS　行く-POL-INT
明日温泉へ一緒に行きましょう。

(4-181)　*nata*　*duku-sa*　*a-jabut-a-N=kaja?*
nata　duku-sa　a-jabu-a-N=kaja
2SG.HON　元気-ADJ　COP-POL-PST-IND=Q
あなたはお元気でしたか？

また、丁寧接辞が母音語基に接続するとき、(4-182) のように i が挿入されることがある。

(4-182)　*ama=ga*　*waN*　*ama-i-jabut-a-N*
ama=ga　waN　ama-i-jabut-a-N
母=NOM　1SG　怒る-繋ぎ母音-POL-PST-IND
母が私を怒りました。

4.3.4.3　継続（接辞グループ C）

動詞語幹に継続接辞を接続することで、ある時点において進行中の事態や継続中の状態を表す（アスペクトについては 6 章 2 節を参照）。継続接辞の基底形は-u である。語基交替規則により、他に-ut という表層形があり得る。

(4-183) は「今」という時点において「雨が降っている」という進行中の事態を表している。*fu「降る」に継続接辞-u が接続し、fut-u-N「降っている」となる。

(4-184) は「今」という時点において、「男性記者が島へ来た」という結果状態が継続していることを表す。*kicj「来る」に継続接辞-u が接続し、kicj-u-N「来ている」となる。

(4-185) は「昨日私が家に帰ったとき」という時点において「れい（人名）がボールで遊ぶ」という事態が進行していることを表している。-u に過去接辞 -a（グループ C）が接続し、語基の交替規則により asjid-ut-a-N「遊んでいた」という形式になる。

(4-183)

nama	*ami=nu*	*fut-u-N*
nama	ami=nu	fu-u-N
今	雨=NOM	降る-CONT -IND

今雨が降っている。

(4-184)

daNseekisja=nu	*nama*	*sjima=cji*	*kicj-u-N*
daNseekisja=nu	nama	sjima=cji	kicj-u-N
男性記者=NOM	今	島=ALL	来る-CONT-IND

男性記者が、今島へ来ている。

(4-185)

kiNnjuu	*wa=ga*	*mudut-a-N*	*tuki=ni*	*ree=wa*	*booru=sji*
kiNnjuu	wa=ga	mudu-a-nu	tuki=ni	ree=wa	booru=sji
昨日	1SG=NOM	戻る-PST-ADN	時=LOC1	れい=TOP	ボール=INS

昨日私が（家に）帰った時に、れい（人名）はボールで

asjid-ut-a-N
asjib-u-a-N
遊ぶ-CONT-PST-IND

遊んでいた。

4.3.4.4　否定（接辞グループ A）

動詞語幹に否定接辞を接続することで、否定文を作る。否定接辞には、非過去時制で用いられる-ran と、過去時制で用いられる-radana がある。

4.3.4.4.1 否定 –ran

否定接辞の基底形は-ran である。語基交替規則、形態音韻規則 a) により、他に-ra,-a, -raz, -az の表層形があり得る。

(4-186) は*cjiko「使う」に丁寧接辞-jabu が接続した母音語幹 cjikojabu に、否定接辞-ran と直説接辞-N が接続している。形態音韻規則 c) により子音前の n が削除されるため cjiko-ra-N「使わない」という形式になる。

(4-187) は子音語幹*ik「行く」に-ran が接続するが、形態音韻規則 a) により r が、形態音韻規則 c) により n が削除されるため ik-a-N「行かない」という形式になる。

(4-188) は-ran に継起接辞（グループ C）が後接するため、語基交替規則によって-ran→-raz となる。また、(4-138) 音韻規則 c) により zi→zji となるため、arazji「～ではなくて」という形式になる。

(4-189) は子音語幹*ik「行く」に-ran が接続するが、語基交替規則によって-ran→-raz となる。形態音韻規則により raz→az, (4-138) 音韻規則 c) により zi→zji となるため、ikazji「行かなくて」という形式になる。

(4-186)

gaanu	*muni=wa*	*cjiko-jabu-ra-N*
gaanu	muni=wa	cjiko-jabu-ran-N
そんな	言葉=TOP	使う-POL-NEG-IND

そんな言葉は使いません。

(4-187)

ai	*ai*	*nuu=mu*	*mucj-i*	*ik-a-N*
ai	ai	nuu=mu	muk-i	ik-ran-N
いや	いや	何=ADD	持つ-SEQ	行く-NEG-IND

いやいや、（結納には）何も持って行かない。

(4-188)

kurajami=ni	*ut-a=sji=wa*	*akiko*	*a-razj-i*	*takako*
kurajami=ni	u-a=sji=wa	akiko	a-ran-i	takako
暗闇=LOC	いる-PST=COMP=TOP	あきこ	COP-NEG-SEQ	たかこ

暗闇にいたのは、あきこではなくて、たかこ

at-a-N=doo=jaa
a-a-N=doo=jaa
COP-PST-IND=SFP=SFP
だったよ。

(4-189)

eekoopu=cji=wa	*ik-azj-i*	*sjimadasjooteN=cji=du*	*izj-a-N=doo*
eekoopu=cji=wa	ik-ran-i	sjimadasjooteN=cji=du	ik-a-N=doo
A コープ=ALL=TOP	行く-NEG-SEQ	島田商店=ALL=FOC	行く-PST-IND=SFP

A コープへは行かないで、島田商店へ行ったよ。

4.3.4.4.2 否定 2 -radana

否定 2 接辞の基底形は-radana である。語基交替規則、形態音韻規則 a) により、-radanat, -adanat の表層形があり得る。

否定 2 接辞は、後で述べる「否定継起接辞」と同形式であり、歴史的に「否定継起接辞」と「アスペクトを表す存在動詞」の連続（-radana ataN）が融合して出来た形だと考えられる。この融合は完遂されておらず、(4-190) の形式は常に (4-191) の語連続に分析可能である。

(4-192) は子音語幹*sjim「済む」に否定 2 接辞-radana が接続し、形態音韻規則 a) により r が削除されて、sjimadanataN「すまなかった」となる。

(4-190)

cjibu	*waka-radanat-a-N*
cjibu	waka-radanat-a-N
少しも	分かる-NEG-PST-IND

少しも分からなかった。

(4-191)

cjibu	*waka-radana*	*at-a-N*
cjibu	waka-radana	a-a-N
少しも	分かる-NEG.SEQ	ある-PST-IND

少しも分からなかった。

(4-192)

waro-sa	*a=sji=wa*	*waN=di=du*	*Muut-a-N=doo*
waro-sa	a=sji=wa	waN=di=du	Muu-a-N=doo
悪い-ADJ	COP=COMP=TOP	1SG=QT=FOC	思う-PST-IND=SFP

悪いのは私だと思ったよ。

sjim-adanat-a-N=jaa
sjim-radana-a-N=jaa
済む-NEG-PST-IND=SFP
すまなかったね。

4.3.4.5　時制

動詞語幹に時制接辞を接続することで、事態や状態の時制を表す。時制接辞には、非過去接辞の-ju、過去接辞の-a、過去 2 接辞の-juta がある。

過去 1 は過去におきた事態や状態全般に用いるのに対し、過去 2 は、(a) 動作を目撃している、(b) 昔の習慣、といったアスペクトやエヴィデンシャリティとも関連した時制として用いられる（6 章 2 節「テンス・アスペクト・エビデンシャリティー」を参照）。

4.3.4.5.1　非過去 –ju（接辞グループ B）

非過去接辞の基底形は-ju である。他に、形態音韻規則 b) により-i、形態音韻規則 g) により-jo の表層形があり得る。

(4-193) は*sjin「死ぬ」に非過去接辞-ju が接続し、sjin-ju-N「死ぬ」という形式になっている。

(4-194) は*kam「食べる」に非過去接辞-ju が接続するが、形態音韻規則 b) より ju→i の交替があるため、kam-i-N という形式になる。

(4-206) は*waka「分かる」に非過去接辞-ju と肯否疑問接辞-e が接続しているが、形態音韻規則 g) により、-ju の母音が後の母音の開口度に同化するので、表層形は waka-jo-e「分かる（か）？」となる。

(4-193)

cjuu=wa	*taN*	*jat-i=mu*	*sjin-ju-N*
cjuu=wa	taN	ja-i=mu	sjin-ju-N
人=TOP	誰	COP-SEQ=ADD	死ぬ-NPST-IND

人は誰でも死ぬ。

(4-194)

wana	*hjiizju*	*sjimezji=nu*	*sjiimuN*	*kam-i-N=doo=jaa.*
wana	hjiizju	sjimezji=nu	sjiimuN	kam-i-N=doo=jaa
1SG.TOP	ずっと	きのこ=GEN	吸い物	食べる-NPST-IND=SFP=SFP

私はずっと（これからも）きのこの吸い物を食べるんだよ。

(4-195)

ura	*furi*	*waka-jo-e?*
ura	furi	waka-ju-e
2SG	これ	分かる-NPST-YNQ

あんたはこれが分かるの？

なお、非過去接辞は丁寧、アスペクト、否定接辞とは共起しない。また、4.3.3「動詞の種類」で述べた通り、存在動詞やコピュラ動詞において、非過去時制は無標示である。

4.3.4.5.2　過去　-a（接辞グループ C）

過去接辞の基底形は-a である。形態音韻規則 g) により-e の表層形があり得る。

(4-196) は*wasjiri「忘れる」に過去時制-a が接続し、wasjirit-a-N「忘れた」という形式になっている。

(4-207) は*kam「食べる」に非過去接辞-a と肯否疑問接辞-e が接続している。形態音韻規則 g) により、-a の母音が後の母音の開口度に同化するので、表層形は kad-e-e「食べた（か）？」となる。

(4-196)

wana	*kiNnjuu*	*saifu*	*wasjirit-a-N*
wana	kiNnjuu	saifu	wasjiri-a-N
1SG	昨日	財布	忘れる-PST-IND

私は昨日財布を忘れた。

(4-197)

sjutumuti + muN	*kad-e-e?*
sjutumuti+muN	kam-a-e
朝＋食べ物	食べる-PST-YNQ

朝ごはんを食べた？

4.3.4.5.3　過去 2 -juta（接辞グループ B）

過去 2 接辞の基底形は-juta である。形態音韻規則 b) により、他に-ita の表層形があり得る。

(4-198) は「あきこがバタバタと A コープへ行く」様子を目撃していた際に用いる表現である。*ik「行く」に過去 2 接辞-juta が接続し、ic-juta-N「行く途中だった」という語形になる。

(4-199) は*tub「飛ぶ」に過去 2 接辞-juta が接続するが、形態音韻規則 b) により juta→ita となるため tub-ita=sjiga「飛んでいたけど」という形式になる。

(4-198)

akiko=wa	*batabata*	*sji-i*	*eekoopu=cji*	*ic-jut-a-N.*
akiko=wa	batabata	sji-i	eekoopu=cji	ik-juta-N
あきこ=TOP	バタバタ	する-SEQ	A コープ-ALL	行く-PST2-IND

あきこはバタバタして A コープへ向かっていた（行く途中を見た）。

(4-199)

mukasji=wa	*hjootui=ga*	*tub-ita=sjiga*	*nama=wa*	*mj-aa-ra-mu=jaa*
mukasji=wa	hjootui=ga	tub-jua=sjiga	nama=wa	mj-a-ran-mu=jaa
昔=TOP	鵯=NOM	飛ぶ-PST2=CEX	今=TOP	見る-POT-NEG-EPI=SFP

昔はヒヨドリが飛んでいたけど、今は見えないね。

4.3.4.6　語尾接辞

動詞の語尾にくる接辞は (4-200) の通りである。語尾接辞は、統語的に (a) 主節を形成する接辞、(b) 従属節を形成する接辞、(c) 複合語や動詞連続の要素を形成する接辞がある。(b) 従属節は、さらに連体節、副詞節、補文節、等位節、並列節に分類できる（節の種類については 5 章 6 節を参照）。

以下では、動詞が X という語尾接辞を取るとき、その形式を「X 形」と呼ぶ。

(4-200)　　語尾接辞

-N（直説）、-mu（認識）、-ru（係り結び）、-nu（連体）、-e（肯否疑問）、-i（WH 疑問）、-sjiga（逆接）、-sa（意外性）, -sji（補文）、-maze（確認）、-riba（条件 1）、-rja（条件 2）、-ru（条件 3）、-raa（意図）、-ri（命令）、-runa（禁止）、-i（継起）、-i（連用 1）、-iN（連用 2）、-aja（並列）

4.3.4.6.1　主節を形成する語尾接辞

主節を形成する語尾接辞は (4-201) の通りである。

(4-201)　　主節を形成する語尾接辞

-N（直説）、-ru（係り結び）、-e（肯否疑問）、-i（WH 疑問）、-sa（意外性）、-maze（確認）、-raa（意図）、-ri（命令）、-runa（禁止）

なお、-mu（認識）も主節に現れることがあるが、従属節を形成するのが主な用法なので、4.3.4.6.4「補文節」で扱う。また、-i（継起）も主節に現れることがあるが、等位節で用いられるのが主な用法なので、4.3.4.6.5「等位節」で扱う。

4.3.4.6.1.1　直説　-N（接辞グループ：その他）

直説法を表す接辞は-N である。

(4-202) では、動詞述語*mi「似る」が継起接辞-u と直接接辞-N を接続し、平叙文の主節を形成している。

(4-202)

aN	*warabi=wa*	*utee*	*micj-u-N=doo.*
aN	warabi=wa	utee	micj-u-N=doo
あの	子供=TOP	2DU	似る-CONT-IND=SFP

あの子どもはあんた達二人に似ているよ。

4.3.4.6.1.2 係り結び　-ru（接辞グループ：その他）

文中に焦点助詞=du が現れる時、動詞述語はそれに呼応して、語尾に係り結び接辞-ru を取る（4 章 5 節「その他の品詞」を参照）。

(4-203) は utee「あんた達」に焦点助詞=du が接続するため、動詞述語*mi「似る」は係り結び形の micjuuru「似ている」となる。

(4-203)	*akiko=wa*	*utee=ni=du*	*micj-uu-ru*
	akiko=wa	utee=ni=du	micj-u-ru
	あきこ=TOP	2DU=DAT=FOC	似る-CONT-MSB

あきこはあんた達二人に似ている。

4.3.4.6.1.3 意外性　-sa（接辞グループ：その他）

-sa は、自分が知覚したことを、驚きを持って伝えたり、臨場感を持って話す時に用いられる。この接辞を、意外性 (mirativity) の接辞と呼ぶ。

(4-204) はお爺さんが歩いてくる様子を見ながら言う発話で、動詞述語の*moos「いらっしゃる」が継続接辞-u と意外性接辞-sa を取り、moocj-u-saa「いらっしゃっているよ」という形式になる。直説形 moocj-u-N を使うよりも、より臨場感が出る表現である。

(4-204)	*mukoo=kara*	*zjaazja=ga*	*moocj-u-saa*
	mukoo=kara	zjaazja=ga	moos-u-sa
	向こう=ABL	お爺さん=NOM	来る.HON-CONT-MRT

向こうからお爺さんがいらっしゃっているよ。

4.3.4.6.1.4 確認　–maze（接辞グループ：その他）

-maze は、相手に何かを確認する時に用いられる。この接辞を「確認の接辞」と呼ぶ。

(4-205) は相手に確認を促す文で、動詞述語*kam「食べる」が、過去接辞-a と確認接辞-maze を接続し、kad-a-maze「食べたでしょ？」という形式になっている。

(4-205)	*ura=ga=du*	*kad-a-maze?*
	ura=ga=du	kam-a-maze
	1SG=NOM=FOC	食べる-PST-CONF

あんたが食べたんでしょ?

4.3.4.6.1.5 肯否疑問　-e（接辞グループ：その他）

肯否疑問を表す接辞は-e である。

(4-206) は相手に肯否を尋ねる文であり、動詞述語*waka「分かる」が非過去接辞-ju と肯

否接辞-e をとる。このとき-ju（非過去）は、形態音韻規則 g) により後の母音の開口度に同化して-jo になるため、wakajoe「分かる？」という形式になる。

(4-207) は過去時制の肯否疑問文であり、動詞述語*kam「食べる」が過去接辞-a と肯否接辞-e を取る。このとき-a（過去）は、形態音韻規則 g) により、後の母音の開口度に同化して-e になるため、kadee「食べた？」という形式になる。

(4-206)

ura	*furi*	*waka-jo-e?*
ura	furi	waka-ju-e
2SG	これ	分かる-NPST-YNQ

あんたはこれが分かるの？

(4-207)

sjutumuti + muN	*kad-e-e?*
sjutumuti+muN	kam-a-e
朝＋食べ物	食べる-PST-YNQ

朝ごはんを食べた？

4.3.4.6.1.6 疑問接辞　-i（接辞グループ：その他）

WH 疑問を表す接辞は-i である。

(4-208)　は疑問詞 nuu「何」と、文末に WH 疑問の終助詞=joo が現れる WH 疑問文である。動詞述語*kuri「くれる」は非過去接辞-ju と疑問接辞-i を取り、kurijui という形式になる。

(4-208)

ura	*nuu*	*kuri-ju-i=joo?*
ura	nuu	kuri-ju-i=joo
2SG	何	くれる-NPST-Q=WHQ

あなたは何をくれるの？

一方 WH 疑問文においても、時制が過去の場合や、極性が否定の場合は、疑問形ではなく、継起形を取る。4.3.4.6.5.2「継起」で述べる通り、継起形の疑問文は、時制の標示がなくても過去のことを表す点が着目される。(4-209) は過去の出来事を尋ねる文であり、動詞述語*ak「歩く」が継起形になっている。

(4-209)

iku-sa-nu	*tuki=wa*	*gakkoo=Ntabe*	*acj-i=naa?*
iku-sa-nu	tuki=wa	gakkoo=Ntabe	ak-i=naa
小さい-ADJ-ADN	時=TOP	学校=TERM	歩く-SEQ=YNQ

小さい時は、学校まで歩いたの？

4.3.4.6.1.7 意図 –raa（接辞グループ A）

-raa は、自分の意志を表したり、相手に動作を促す文の主節を形成する。この接辞を「意図の接辞」と呼ぶ。意図の接辞の基底形は-raa だが、形態音韻規則 a) により、他に-aa という表層形がある。

(4-210) は相手に動作を促す文であり、動詞述語*u「いる」が意図接辞-raa をとっている。

(4-211) も相手を動作を促す文であり、主節の動詞述語*mut「持つ」が使役接辞-ras と意図接辞-raa が接続している。形態音韻規則 a) により r が削除されるため、mutas-aa「持たそう」という形式になる。

(4-210)

agu=sji	*u-raa*
agu=sji	u-raa
一緒=INS	いる-INT

一緒にいよう。

(4-211)

akujuku	*duku+gussui*	*mut-i*	*mut-as-aa*
akujuku	duku+kusui	mut-i	mut-ras-raa
悪薬	毒＋薬	盛る-SEQ	持つ-CAUS-INT

悪薬、毒薬、盛って持たそう。

4.3.4.6.1.8 命令 –ri（接辞グループ A）

命令形は命令文の主節を形成する。命令接辞の基底形は-ri だが、形態音韻規則 a) により、他に-i という表層形がある。

(4-212) は相手にに命令する文であり、*koo「食べる（年少者に対する敬語）」に命令接辞-ri が接続し、koo-ri「お食べなさい」という形式になっている。

(4-213) は動詞述語*num「飲む」に使役接辞-ras、命令接辞-ri が接続するが、形態音韻規則 a) により r が削除されるため、num-asj-i「飲ませろ」という語形になる。

(4-212)

urja	*wa=ga*	*cukut-a-nu*	*sjuuki=du*	*ja=Ntu*
uri=ja	wa=ga	cuku-a-nu	sjuuki=du	ja=Ntu
3SG=TOP	1SG=NOM	作る-PST-ADN	料理=FOC	COP=CSL

それは私が作った料理だから、

koo-ri=joo
koo-ri=joo
食べる.HON-IMP=SFP
お食べなさいよ。

(4-213) *asa+cja* *juu+cja=ni* *iit-i* *num-asj-i*
asa+cjaa juu+cjaa=ni ii-i num-ras-i
朝+茶 夕+茶=LOC 入れる-SEQ 飲む-CAUS-IMP
（毒を）朝の茶、夜の茶に入れて飲ませろ。

4.3.4.6.1.9 禁止接辞 –runa（接辞グループ A）

禁止形は、禁止の命令文を形成する。禁止接辞の基底形は-runa だが、形態音韻規則 d) により、動詞が母音語基の場合は-Nna、形態音韻規則 a) により、子音語基の場合には-una という表層形になる。

(4-214) は動作を禁止する文であり、動詞述語の*u「いる」に禁止接辞-runa が接続している。形態音韻規則 d) により ru→N となるため u-Nna「いるな」という形式になる。

(4-215) は子音語根の*num「飲む」に-runa が接続している。形態音韻規則 a) により r が削除されるため num-una「飲むな」という形式になる。

(4-214) *maa=ni=wa* *u-Nna*
maa=ni=wa u-runa
ここ=LOC1=TOP いる-PROH
ここにはいるな。

(4-215) *wunagu=nu* *muN=nu* *saki* *num-una=joo*
wunagu=nu muN=nu saki num-runa=joo
女=GEN もの=NOM 酒 飲む-PROH=SFP
女のくせに、酒を飲むなよ。

但し、(4-216) のように、一部の母音語基では、形態音韻規則 d) が適用された形式（-Nna）の他に、基底形がそのまま表出した形式（-runa）も容認される。

(4-216) *aN* *cjuu=ni=wa* *nuu=mu* *{kuri-Nna/kuri-runa}=joo*
aN cjuu=ni=wa nuu=mu kuri-runa=joo
あの 人=LOC1=TOP 何=ADD あげる-PROH=SFP
あの人には何もあげるなよ。

4.3.4.6.2 連体節を形成する語尾接辞

連体節の動詞述語に現れる語尾は、-nu（連体：接辞グループその他）である。連体接辞の基底形は-nu であるが、自由変異で-N という形式を取ることもある。

(4-217) は*fu「降る」が連体接辞-nu を取り hjii「日」を修飾する連体節を形成している。

(4-217)	*ami=nu*	*fu-ju-nu*	*hjii=wa*	*jaa=ni*	*u-N*
	ami=nu	fu-ju-nu	hjii=wa	jaa=ni	u-N
	雨=NOM	降る-NPST-ADN	日=TOP	家=LOC1	いる-IND
	雨が降る日は家にいる。				

また、少数ながら連体形が主節の述語に現れる例もある。(4-218) は、*deki「出来る」が過去接辞-a と連体接辞-nu を接続し、文末に来ている。

(4-218)	*Maa=nu*	*hoo=nu*	*waabi=du*	*sjuuraku=nu*	*dekit-a-nu*
	Maa=nu	hoo=nu	waabi=du	sjuuraku=nu	deki-a-nu
	そこ=GEN	方=GEN	上=FOC	集落=NOM	出来る-PST-ADN
	そこの方の上で集落が出来たんだよ。				

これは、歴史的に連体節が接続する形式名詞 muN が省略されて出来た用法だと思われる。5 章 3 節名詞句構造で述べる通り、muN は文末で用いられることがあり、(4-219) のように理由を表したり、文を強調する。(4-219) は dekit-a-nu muN「出来たんだよ」と文末に muN を用いることも可能であり、文末 muN の省略が定型化してできた表現だと思われる。

(4-219)	*ari=mu*	*tookjoo=nu*	*cjuu=ni=wa*	*hjoozjuNgo=sji*	*hanas-aNnja*
	ari=mu	tookjoo=nu	cjuu=ni=wa	hjoozjuNgo=sji	hanas-raNnja
	3SG=ADD	東京=GEN	人=DAT=TOP	標準語=INS	話す-NEG.COND
	あの人も東京の人には、標準語で話さないと				

isjisocuu	*deki-ra-N*	*muN=jaa*
isjisocuu	deki-ran-N	muN=jaa
意志疎通	出来る-NEG-ADN	もの=SFP

意志疎通が出来ないからさ。

4.3.4.6.3　副詞節を形成する語尾接辞

副詞節を形成する語尾接辞は、-riba（条件 1）、-rja（条件 2）、-ru（条件 3）、である。なお、連用接辞 –i, -iN も目的の助詞=ga と共に目的の副詞節を形成するが、連用接辞については 4.3.4.6.7「複合語を形成する語尾接辞」で取り上げる。

4.3.4.6.3.1　条件 1 –riba（接辞グループ：その他）

条件形は条件の副詞節を形成する。条件接辞 1 の基底形は-riba であるが、形態音韻規則 a) により、他に-iba という表層形がありうる。

(4-220) は母音語基*nud-a「飲んだ（飲むー過去）」に条件接辞-riba が接続し、nud-a-riba「飲めば」という形式になっている。

(4-221) は*mat「待つ」という子音語基に条件接辞-riba が接続するが、形態音韻規則 a) により r が削除されるため、mat-iba「待てば」という形式になっている。

(4-220)	*cju=kucji*	*nud-a-riba*	*mii=nu*	*kuru-kuru*	*sj-ii*
	cju=kucji	num-a-riba	mii=nu	kuru-kuru	sj-i
	1=口	飲む-PST-COND	目=NOM	くる-RED	する-SEQ
	1 口飲めば、目がくるくるして‥				

(4-221)	*icji=Ntabe*	*mat-iba*	*ura*	*fuu-ra-ju-i=joo?*
	icji=Ntabe	mat-riba	ura	fuu-ra-ju-i=joo
	いつ=TERM	待つ-COND	2SG	来る-POT-NPST-Q=WHQ
	いつまで待てば、あんたは来られるの？			

4.3.4.6.3.2　条件 2 –rja

条件 2 接辞も条件 1 接辞と同様、条件の副詞節を形成する。条件 2 の基底形は-rja だが、形態音韻規則 a) により、他に-ja という異形態がある。

(4-222) は母音語基*na「なる」に条件 2 接辞-rja が接続し na-rja「なれば」という形式になる。

(4-223) は*ik「行く」に否定接辞-ran が接続した子音語基 ikan に条件 2 接辞-rja が接続するが、形態音韻規則 a) により r が削除されるため、ik-an-ja「行かないと」という形式になる[38]。

[38] 形態音韻規則 a) は形態音韻規則 c) に先行する為、ikarja とはならない。

(4-222)

hacjizji	*na-rja*	*naa*	*kura-sa*	*na-ju-N=kamu*
hacjizji	na-rja	naa	kura-sa	na-ju-N=kamu
8 時	なる-COND2	もう	暗い-ADJ	なる-NPST-IND=EPI

8 時になったら、もう暗くなるかも。

(4-223)

wana	*ik-an-ja*	*teN=ni*	*nubu-ran-ja*	*na-ra-sjiga*
wana	ik-ran-rja	teN=ni	nubu-ran-rja	na-ran-sjiga
1SG	行く-NEG-COND2	天=LOC	昇る-NEG-COND3	なる-NEG-CEX

私は行かないと、天に昇らないといけないけど‥

但し、否定接辞に条件 2 接辞が接続する場合は、ik-aNnja のように語基が重音節化することもある。(4-224) は*nibu「眠る」が否定接辞-ran と条件 2 接辞-rja を接続した形式で、niburanja となる筈であるが、実際には niburaNnja と否定接辞の末尾が重音節化している。

(4-224)

hee-sa	*nibu-raNnja*	*ama=ni*	*ama-ra-ju-N=doo*
hee-sa	nibu-ran-rja	ama=ni	ama-ra-ju-N=doo
早い-ADJ	眠る-NEG-COND2	母=LOC1	怒る-PASS-NPST-IND=SFP

早くねないと、お母さんに怒られるよ。

4.3.4.6.3.3 条件 3 –ru

条件 3 接辞の基底形は-ru だが、形態音韻規則 a) により、-u という表層形がありうる。なお、この形式は必ず原因の接続助詞=tu を後接する[39]。

(4-225) は*na「なる」が条件 3 接辞-ru を取り、na-ru「なる（と）」という語形になる。

(4-226) は*uus「積む」に条件接辞-ru が接続するが、形態音韻規則 a) によって r が削除されるため uus-u「積む（と）」という語形になる。

(4-225)

iku-sa	*na-ru=tu*	*taa=cji*	*oocj-i=du*	*wacja*
iku-sa	na-ru=tu	taa=cji	oos-i=du	wacja
小さい-ADJ	なる-COND3=CSL	2=つ	合わす-SEQ=FOC	2PL

（葉っぱが）小さくなると、2 つ合わせて、私達は

[39] 結果の助詞=tu は直説形に接続することもあるため、一形態素とせずに-ru=tu と分析する。

cjiko-juta-N
cjiko-juta-N
使う-PST2-IND
使っていたよ。

(4-226)

oo-sa-nu	*nii*	*uus-u=tu=wa=joo*	*Maa=wa*	*haNsji*
oo-sa-nu	nii	uus-ru=tu=wa=joo	Maa=wa	haNsji
多い-ADJ-ADN	荷	積む-COND3=CSL=TOP=SFP	馬=TOP	こうして

多い荷物を積むとね、馬はこうして

atu *micj-i=joo*
atu mi-i=joo
後 見る-SEQ=SFP
後を見てね‥

4.3.4.6.4 補文節を形成する語尾接辞

補文節を形成するのは、補文接辞-sji と、認識接辞-mu である。

4.3.4.6.4.1 補文 -sji（接辞グループ：その他）

-sji は節を名詞化し、主節の主語や目的語の名詞句を形成する（5.6.4「補文節」を参照）。

(4-227) は従属節の動詞述語*mi「見る」が継起接辞-u（接辞グループ C）、過去接辞-a（接辞グループ C）、補文接辞-sji を接続し、micjutasji「見ていたの」という形式になっている。そして wa=ga micj-ut-a-sji「私が見ていたの」は、補文節として主節 aN kwaa=wa kizuk-adanat-a-N「あの子は気付かなかった」の目的語になっている。

(4-227)

wa=ga	*micj-ut-a-sji*	*aN*	*kwaa=wa*	*kizuk-adanat-a-N*
wa=ga	mi-u-a-sji	aN	kwaa=wa	kizuk-radana-a-N
1SG=NOM	見る-CONT-PST-COMP	あの	子=TOP	気付く-NEG-PST-IND

私が見ていたのを、あの子は気付かなかった。

4.3.4.6.4.2 認識 –mu（接辞グループ：その他）

-mu は、主に助詞=di「～と」と共に引用の補文節を形成し、伝聞や引用の内容であることを表す。この接辞を「認識の接辞」と呼ぶ。

(4-228) は従属節の動詞述語*sji-ra-ra「出来ない（する - 可能 - 否定）」が認識形を取り、引用の助詞=di を接続することで、主節の動詞述語*i「言う」の内容を表している。

(4-228)　*sorobaN=wa*　*masuru-sja*　*sji-ra-ra-mu=di*　*icj-i=joo*
sorobaN=wa　masuru-sja　sji-ra-ran-mu=di　ʔi-i=joo
そろばん=TOP　面倒-ADJ　する-POT-NEG=QT　言う-SEQ=SFP
「そろばんは面倒で出来ない」と（その人は）言ってね

ただし、認識接辞は主節の述語になることもある (4-229)。この場合は、必ずしも伝聞や引用を意味せず、本人が何かしらの確信や強い意見を持っている時に用いられる。

(4-229)　*ari=wa*　*ume-ru=tu*　*zjiinumuN*　*na-ju-mu=djaa*
ari=wa　ume-ru=tu　zjiinumuN　na-ju-mu=djaa
3SG=TOP　埋める-COND3=CSL　地縛霊　なる-NPST-EPI=SFP
あれは埋めると、地縛霊になるよ。

4.3.4.6.5　等位節を形成する語尾接辞

等位節の述語に現れる接辞には、-sjiga（逆接）-i（継起）、-radana（否定継起）がある。

4.3.4.6.5.1　逆接　–sjiga

逆接形-sjiga は逆接の等位節を形成し、主節と反対の内容や、主節からは想定できない前提を表す。

(4-230) は従属節の動詞述語*asjib「遊ぶ」が過去 2 接辞-juta と逆接接辞-sjiga を接続し、asjib-it-a-sjiga「遊んだけど」という形式になっている。なお、過去 2 接辞は形態音韻規則 b) により juta→-ita となっている。この従属節は、現在のことを述べる後節と反対の内容になっている。

(4-230)　*mukasji=wa*　*biidama=sji*　*asjib-ita-sjiga*　*nama=wa*　*biidama=mu*
mukasji=wa　biidama=sji　asjib-juta-sjiga　nama=wa　biidama=mu
昔=TOP　ビー玉=INS　遊ぶ-PST2-CEX　今=TOP　ビー玉=ADD
昔はビー玉で遊んでいたけど、今はビー玉も

na-adana　*asjib-a-N*
na-radana　asjib-ran-N
ない-NEG.SEQ　遊ぶ-NEG-IND
なくて、遊ばない。

4.3.4.6.5.2 継起　–i（接辞グループ C）

継起形は、(a) 順接の等位節を形成する、(b) 過去時制の肯否疑問文を形成する、(c) 動詞連続の前部要素になる、という 3 つの機能がある。

(a) 等位節の形成

継起形-i の主な用法は順接の等位節を形成することである。

(4-231) はコピュラ動詞*a が継起接辞-i を取り、語基交替規則を経て at-i「～で」という形式になっている。前節と後節の内容に修飾関係はなく、順番を同等の節を 2 つ並べている。

(4-231)	*hoo=nu*	*mizji=wa*	*cjura-sa*	*at-i*	*hjizjuru-sa=mu*	*a-N*
	hoo=nu	mizji=wa	cjura-sa	a-i	hjizjuru-sa=mu	a-N
	川=GEN	水=TOP	きれい-ADJ	COP-SEQ	冷たい-ADJ=ADD	COP-IND
	川の水はきれいで冷たい。					

(b) 過去時制の肯否疑問文の形成

次に、継起形は、過去時制の肯否疑問文を形成する。

(4-232) は動詞述語である*ak「歩く」が継起形-i を取り、語基交替規則を経て acji「歩いて（ここでは、歩いた？の意味)」という形式になっている。

この時、時制や疑問の標示はないものの、文は過去時制の疑問文になる。この接辞を、同形の疑問接辞-i ではなく継起接辞-i と判断する根拠は、語基の交替が、継起接辞が属する接辞グループ C の交替に従うからである。

(4-232)	*iku-sa-nu*	*tuki=wa*	*gakkoo=Ntabe*	*acj-i=naa?*
	iku-sa-nu	tuki=wa	gakkoo=Ntabe	ak-i=naa
	小さい-ADJ-ADN	時=TOP	学校=TERM	歩く-SEQ=YNQ
	小さい時は学校まで歩いたの？			

(c) 動詞連続の形成

継起形は動詞連続の前部要素になることもある（動詞連続については、5 章 4 節述部構造を参照)。

(4-233) は*cjik「聞く」が継起接辞-i を接続し、尊敬の補助動詞を後ろに取ることで、cjicj-i tabo-ri「お聞きください」という動詞連続を形成している。

(4-233)　*hjuu=mu*　*unigee*　*cjicj-i*　*tabo-ri*
hjuu=mu　unigee　cjik-i　tabo-ri
今日=ADD　お願い　聞く-SEQ　HON-IMP
今日もお願いをお聞き下さい。

4.3.4.6.5.3 否定継起-radana（接辞グループ A）

否定継起接辞-radana は、順接の等位節を作る。否定継起接辞の基底形は-radana だが、形態音韻規則 a) により、他に-adana という表層形がありうる。

(4-234) は*waka「分かる」に否定継起接辞-radana が接続し、waka-radana「分からなくて」という形式になっている。(4-234) において、waka-radana を含む節は、 後の節の内容を引き起こす理由を表している。

(4-234)　*hjoocjuuhji=nu*　*zjii=ga*　*cjiit-i=jaa*　*waka-radana*　*wa=ga*
hjoocjuuhji=nu　zjii=ga　cjii-i=jaa　waka-radana　wa=ga
ヒョウチュウ碑=GEN　字=NOM　**消える**-SEQ=SFP　**分かる**-NEG.SEQ　1SG=NOM
ヒョウチュウ碑の字が消えてね、分からないから、私が

izj-i　*deNki*　*mucj-i*　*hoot-i*　*Maa*　*muuru*　*hacj-i=jaa*
ik-i　deNki　mut-i　hoo-i　Maa　muuru　hak-i=jaa
行く-SEQ　電気　持つ-SEQ　買う-SEQ　そこ　全部　書く-SEQ=SFP
行って電気を持て、買って、そこ（字）を全部書いてね‥

4.3.4.6.6 並列節を形成する語尾接辞

並列節を形成する語尾接辞は、-aja（並列）、 -raNko（否定継起）である。

4.3.4.6.6.1 並列-aja

並列形-aja は、並列節を作る。

(4-235) は従属節の waN osjime arot-aja「私のおしめをあらったり」、主節の kwaamui sj-aja「子守をしたり」が並列形-aja を取っており、動作を並べて述べている。

(4-235)　*waN*　*osjime*　*arot-aja*　*kwaamui*　*sji-aja*　*sj-a-N=dicji=joo*
waN　osjime　arot-aja　kwaamui　sji-aja　sji-a-N=dicji=joo
1SG　おしめ　洗う-SEL　子守　する-SEL　する-PST-IND=QUOT=SFP
（従妹は）私のおしめを洗ったり、子守をしたりしたってよ。

4.3.4.6.6.2 否定継起　-raNko

否定継起 2 接辞-raNko は、対比の並列節を作る。否定継起 2 接辞の基底形は-raNko だが、形態音韻規則 a) により、他に-aNko という表層形がありうる。

(4-236) は*misji「見せる」という母音語基に否定継起 2 接辞-raNko が接続し misji-raNko「見せないで」という形式になる。

(4-237) は子音語幹*ik に否定継起 2 接辞-raNko が接続し、形態音韻規則 a) により r が削除されるため、ikaNko「行かないで」という語形になる。(4-236)(4-237) 共に、否定継起 2 形を含む節は、主節と対比的な内容を述べている。

(4-236)	*terebi=wa*	*misji-raNko*	*icjimu=naa*	*niNgjoo=sji*
	terebi=wa	misji-raNko	icjimu=naa	niNgjoo=sji
	テレビ=TOP	見せる-NEG-SEQ	いつも=SFP	人形=INS
	（子供に）テレビは見せないで、いつもね、人形で			

asjib-acj-u-N
asjib-racj-u-N
遊ぶ-CAUS-CONT-IND
遊ばせている。

(4-237)	*eekoopu=cji=wa*	*ik-aNko*	*sjimadasjooteN=cji=du*	*izj-a-N=doo*
	eekoopu=cji=wa	ik-raNko	sjimadasjooteN=cji=du	ik-a-N=doo
	A コープ=ALL=TOP	行く-NEG.SEQ	島田商店=ALL=FOC	行く-PST-IND=SFP
	A コープへは行かないで、島田商店へ行ったよ。			

4.3.4.6.7　複合語を形成する語尾接辞

複合語や動詞連続の前部要素を形成する接辞として、連用接辞-i, -iN がある。

4.3.4.6.7.1 連用　-i

連用形-i は、複合語の前部要素を形成したり、目的の接続助詞=ga を接続して、動作の目的を表す副詞節を形成する。

(4-238) は*cjik「聞く」が連用接辞-i を取り、*fu「欲しい」と複合形容詞 cjicj-i+bu-sja-N「聞きたい」を形成している[40]。

(4-239) は*tu「取る」が連用接辞-i を取り、目的を表す助詞=ga に接続することで、*ik

[40] 複合語と判断する理由は、(a) 後部要素が連濁を起こしている、(b) 間に助詞（焦点助詞など）を入れることが出来ないためである。

「行く」という動作の目的を表す副詞節を形成している。

(4-238)

girisja=nu	*hanasji*	*cjicj-i+bu-sja-N*
girisja=nu	hanasji	cjik-i+fu-sja-N
ギリシャ=GEN	話	聞く-INF+欲しい-ADJ-IND

ギリシャの話が聞きたい。

(4-239)

zjaazja=ga	*takigi*	*tu-i=ga*	*izj-i*
zjaazja=ga	takigi	tu-i=ga	ik-i
祖父=NOM	薪	取る-INF=PUR	行く-SEQ

祖父が薪を取りに行って‥

4.3.4.6.7.2 連用 2 -iN

連用 2 接辞-iN は限られた統語環境で観察される。現時点では、(a) 尊敬を表す動詞 sjoori[41]「して下さい」と複合動詞を形成する、(b) 知覚接辞-saa と共に主節を形成する、(c) 目的の接続助詞=ga を取り、目的の副詞節を形成する、という 3 つの用法がある。

(4-240) は*oisji「召しあがる」が連用 2 接辞-iN を取り、尊敬を表す動詞 sjoori「～して下さい」と共に複合動詞 oisj-iN+sjoo-ri「召し上がって下さい」を形成している。

(4-241) は主節の述語*sji「する」が連用 2 接辞-iN と近く接辞 -saa を接続し「～してみて」と、動作を促す表現になっている。

(4-242) は*kwaas「食べさせる」が-iN を取り、目的の助詞=ga を接続し、*ik「行く」という動作の目的を表す副詞節を形成している。

(4-240)

madni	*oisj-iN+sjoo-ri=joo*
madni	oisji-iN+sjoo-ri=joo
たくさん	食べる-INF2+くれる.HON-IMP=SFP

たくさん召しあがってくださいね。（目上の人に）

(4-241)

naa	*cji=kkee*	*hacuoN*	*sj-iN=saa*
naa	cji=kkee	hacuoN	sji-iN=saa
もう	1=回	発音	する-INF2=SFP

もう 1 回発音してみて。

[41] sjoo-ri に分析できると思われるが、命令形式以外が確認されていない。

(4-242)	*haNsji*	*koNdo=wa*	*unu*	*ʔjuu*	*kwaasj-iN=ga*	*izj-i*
	haNsji	koNdo=wa	unu	*ʔjuu*	kwaas-iN=ga	iz-i
	こうして	今度=TOP	その	魚	食べさせる-INF2=PUR	行く-SEQ

こうして今度は、その魚を食べさせに行って‥

表 4-25. 動作動詞の活用表 (1)

		語根末	-V	-s	-n
		意味	**呼**ぶ	**消**す	**死**ぬ
		語根	abi	cjaas	sjin
使役	CAUS	-ras	abi-racj-a-N	cjaas-acj-a-N	sjin-asacj-a-N
受動・可能	PASS	-ra	abi-ra-ju-N	cjaas-a-ju-N	sjin-a-ju-N
否定 1	NEG1	-ran	abi-ra-N	cjaas-a-N	sjin-a-N
否定 2	NEG2	-radana	abi-radanat-a-N	cjaas-adanat-a-N	sjin-adanat-a-N
否定継起	SEQ2	-radana	abi-radana	cjaas-adana	sjin-adana
否定継起 2	NEG.SEQ2	-raNko	abi-raNko	cjaas-aNko	sjin-aNko
命令	IMP	-ri	abi-ri	cjaas-i	sjin-i
意志	INT	-raa	abi-raa	cjaas-aa	sjin-aa/sjinj-aa
禁止	PROH	-runa	abi-Nna	cjaas-una	sjin-una
条件 1	COND1	-riba	abi-riba	cjaas-iba/cjaasiriba	sjin-iba
条件 2	COND2	-rja	abi-rja	cjaasi-rja	sjin-ja
条件 3	RU	-ru	abi-ru	cjaas-u	sjin-u
非過去	NPST	-ju	abi-ju-N	cjaas-ju-N	sjin-ju-N
過去 2	PST2	-juta	abi-juta-N	cjaas-juta-N	sjin-juta-N
連用 1	INF1	-i	ab-i	cjaas-i	sjin-i
連用 2	INF2	-iN	ab-iN	cjaas-iN	sjin-iN
丁寧	POL	-jabu	abi-jabu-N	cjaas-jabu-N	sjin-(i) jabu-N
過去	PST	-a	abit-a-N	cjaacj-a-N	sjizj-a-N
継続	PROG	-u	abit-u-N	cjaacj-u-N	sjizj-u-N
継起	SEQ1	-i	abit-i	cjaacj-i	sjizj-i
直説	IND	-N	abi-ju-N	cjaas-ju-N	sjin-ju-N
連体	ADN	-nu/N	abi-ju-nu	cjaas-ju-N/nu	sjin-ju-N/nu
証拠	EMPH	-mu	abi-ju-mu	cjaas-ju-mu	sjin-ju-mu
係り結び	MSB	-ru	abi-ju-ru	cjaas-ju-ru	sjin-ju-ru
肯否疑問	YNQ	-e	abi-jo-e	cjaas-jo-e	sjin-jo-e
疑問	Q	-i	abi-ju-i	cjaas-ju-i	sjin-ju-i
確認	CONF	-maze	abi-ju-maze	cjaas-ju-mazee	sjin-ju-maze

表 4-26 動作動詞の活用表 (2)

語根末	-k	-t	-g	-m
意味	書く	待つ	漕ぐ	食べる
語根	hak	mat	fuug	kam
使役	hak-as-ju-N	mat-as-ju-N	fuug-as-ju-N	kam-as-ju-N
受動・可能	hak-a-ju-N	mat-a-ju-N	fug-a-ju-N	kam-a-ju-N
否定 1	hak-a-N	mat-a-N	fug-a-N	kam-a-N
否定 2	hak-adanat-a-N	mat-adanat-a-N	fug-adanat-a-N	kam-adanat-a-N
否定継起	hak-adana	mat-adana	fuug-adana	kam-adana
否定継起 2	hak-aNko	mat-aNko	fuug-aNko	kam-aNko
命令	hak-i	mat-i	fug-i	kam-i
意志	hak-aa	mat-aa	fug-aa	kam-aa
禁止	hak-una	mat-una	fug-una	kam-una
条件 1	hak-iba	mat-iba	fug-iba	kam-iba
条件 2	hak-ja	mat-ja	fuug-ja	kam-ja
条件 3	hak-u	mat-u	fuug-u	kam-u
非過去	hac-ju-N	mac-ju-N	fuz-ju-N	kam-i-N
過去 2	hac-juta-N	mac-juta-N	fuz-juta-N	kam-ita-N
連用 1	hac-i	mac-i	fuzj-i	kam-i
連用 2	hac-iN	mac-iN	fuuzj-iN	kam-iN
丁寧	hac-i-jabu-N	mac-jabu-N	fuuz-jabu-N	kam-jaabu-N kamijabuN
過去	hacj-a-N	macj-a-N	fuuzj-a-N	kad-a-N
継続	hacj-u-N	macj-u-N	fuuzj-u-N	kad-u-N
継起	hacj-i	macj-i	fuuzj-i	kad-i
直説	hac-ju-N	mac-ju-N	fuz-ju-N	kam-i-N
連体	hac-ju-N/nu	mac-ju-N/nu	fuz-ju-N/nu	kam-i-N/nu
証拠	hac-ju-mu	mac-ju-mu	fuuz-ju-mu	kam-mu
係り結び	hac-ju-ru	mac-ju-ru	fuuz-ju-ru	kam-ru
肯否疑問	hac-jo-e	mac-jo-e	fuuz-jo-e	kam-e-e
疑問	hac-ju-i	mac-ju-i	fuuz-ju-i	kam-i
確認	hac-ju-maze	mac-ju-maze	fuuz-ju-maze	kam-i-mazee

表 4-27 動作動詞の活用表 (3)

語根末	-m	-b	#Ci
意味	食べる	遊ぶ	見る
語根	kam	asjib	mi
使役	kam-as-ju-N	asjib-as-ju-N	mj-aas-ju-N
受動・可能	kam-a-ju-N	asjib-a-ju-N	mj-aa-ju-N
否定 1	kam-a-N	asjib-a-N	mj-a-N
否定 2	kam-adanat-a-N	ajib-adanat-a-N	mj-aadanat-a-N
否定継起	kam-adana	asjib-adana	mj-aadana
否定継起 2	kam-aNko	ajib-aNko	mj-aaNko
命令	kam-i	asjib-i	mj-ii
意志	kam-aa	asjib-aa	mj-aa
禁止	kam-una	asjib-una	mi-runa
条件 1	kam-iba	asjib-iba	m-iiba
条件 2	kam-ja	asjib-ja	mi-rjaa
条件 3	kam-u	asjib-u	mi-ru
非過去	kam-i-N	asjib-i-N	m-ju-N
過去 2	kam-ita-N	asjib-ita-N	m-juuta-N
連用 1	kam-i	asjib-i	m-ii
連用 2	kam-iN	ajib-iN	m-iN
丁寧	kam-jaabu-N kam-i-jabu-N	asjib-jaabu-N	m-jaabu-N
過去	kad-a-N	asjid-a-N	micj-a-N
継続	kad-u-N	asjid-u-N	micj-u-N
継起	kad-i	asjid-i	micj-i
直説	kam-i-N	asjib-i-N	m-ju-N
連体	kam-i-N/nu	asjib-i-N/nu	m-ju-N/nu
証拠	kam-mu	asjib-i-mu	m-juu-mu
係り結び	kam-ru	?	m-juu-ru
肯否疑問	kam-e-e	asjib-e-e	m-joo-e
疑問	kam-i	asjib-i	m-ju-i
確認	kam-i-mazee	asjib-i-mazee	m-ju-mazee

4.4　形容詞形態論

4.4 節では、形容詞形態論について述べる。まず、4.4.1 で形容詞の認定基準を定義し、4.4.2 で形容詞の「2 つの形式」を述べる。4.4.3 で接辞による形容詞の分類を示し、4.4.4 で派生の方法を述べる。最後に複合形容詞を挙げる。

4.4.1　形容詞の認定

通言語的に、形容詞は名詞や動詞ほど明瞭な文法カテゴリーではないと言われる。何故なら多くの言語において、形容詞は動詞的な側面と名詞的な側面を持ち、形容詞のみに認められる文法機能は存在しないからである（Hajak 2016）。こうしたなか、Dixon (2016) はすべての言語において形容詞を動詞や名詞から区別できるとし、以下の 4 つを類型的な形容詞の特徴として挙げた。Dixon によると(4-243) a, b は殆どの言語、c, d は一部の言語に当てはまる。

(4-243)　Dixon (2016) による形容詞の類型的特徴[42]

a. 形容詞は一項文の述語 (intransitive predicate) として機能するか、コピュラの補部 (copula complement) となる。
b. 形容詞は名詞句の修飾部に立つ。
c. 形容詞は比較構文を形成する。
d. 形容詞はそのままの形、または派生して動詞を修飾する。

このうち、国頭方言の形容詞は(4-243) a, b, d の特徴を有する。国頭方言において、(4-243) a の「一項文の述語として機能する」は自動詞な特徴であり、「コピュラの補部となる」は名詞的な特徴である。(4-243) b の名詞句の修飾部にたつ特徴は動詞にも当てはまり、 (4-243) d の動詞を修飾する特徴は副詞にも当てはまる。しかし、これら全ての特徴を 1 つの語彙に持ち得る性質は他の文法カテゴリーには存在しない。このため、(4-243) a, b, d の全ての特徴を持つことを基準に、形容詞を他の文法カテゴリーから区別することが出来る。改めて、国頭方言の形容詞の認定基準を(4-244) のように定める。

[42] (a) The adjective functions as intransitive predicate or as copula complement. (b) The adjective functions as a modifier within an NP. (c) Some languages have a comparative construction. Adjectives may always function as the “parameter of comparison”. (d) In some languages adjectives may also modify verbs, either in plain form or via a derivational processes.

(4-244)　国頭方言における形容詞の認定基準

a. 一項文の述語となるか、コピュラの補部となる。

b. 名詞句の修飾部に立つ。

c. そのままの形で動詞を修飾する。

4.4.2　形容詞の 2 つの形式

国頭方言の形容詞は、一つの語彙に対して(a), (b) の 2 つの形式がありうる。

(a) 単独形式：語根－形容詞接辞　（例：cjura-sa「きれい」）

(b) 融合形式：語根－形容詞接辞－語尾接辞　（例：cjura-sa-N「きれい」）

(b) 融合形式は、歴史的に単独形式と存在のコピュラ動詞*a が融合して出来た形式である。但し、この融合は完遂していない。(4-245) の融合形式は、常に(4-246) の「単独形式とコピュラ動詞」の句に言いなおすことが可能である。

(4-245)　*cjurasaN*
cjura-sa-N
きれい-ADJ-IND
きれい

(4-246)　*cjurasa*　*aN*
cjura-sa　a-N
きれい-ADJ　COP-IND
きれい

2 つの形式が現れる統語環境は、表 4-28 のようにまとめられる。

表 4-28. 形容詞の 3 形式と統語的位置

	一項文の述語	コピュラ補部	名詞句修飾部	動詞修飾
(a) 単独形式	✓	✓	-	✓
(b) 融合形式	✓	-	✓	-

4.4.2.1　単独形式

単独形式は、語根と形容詞接辞（例：cjura-sa「きれい」）で構成される。形容詞接辞には-sa と-sja の二形式があり（4.4.3「形容詞の分類」を参照）、語彙ごとに選択される。単独形式は、統語的に、(a) 一項文の述語、(b)コピュラ動詞の補部、(c) 動詞の修飾部、にた

つ。言い換えれば、名詞句修飾部には立つことがない。

4.4.2.1.1　一項文の述語

単独形式は一項文の述語となる。(4-247) の文において、形容詞*waro「悪い」は述語として機能しており、項は wa「私」という主語 1 つである。単独形式の形容詞は、屈折を担う要素がないために、非過去時制で断定のムードしか表しえない。

(4-247)　*wa=ga*　*waro-sa*
wa=ga　waro-sa
1SG=NOM　悪い-ADJ
私が悪い。

4.4.2.1.2　コピュラ動詞の補部

単独形式は、状態を表すコピュラ動詞*a の補部にたつ。(4-248) は形容詞*naga「長い」がコピュラ動詞*a の補語として機能している。否定文において、コピュラ動詞は*na「ない」である (4-249)[43]。これは、補語に名詞をとるコピュラ動詞*a「ある」とは区別される (4-250)。

(4-248)　*waN*　*harazji=wa*　*naga-sa*　*a-N*
waN　harazji=wa　naga-sa　a-N
1SG　髪の毛=TOP　長い-ADJ　COP-IND
私の髪の毛は長い。

(4-249)　*ura*　*harazji=wa*　*naga-sa*　*na-N*
ura　harazji=wa　naga-sa　na-N
2SG　髪の毛=TOP　長い-ADJ　ない-IND
あんたの髪の毛は長くない。

(4-250)　*ari=wa*　*<honojo=no>*　*niNgeN=wa*　*a-ra-N*
ari=wa　honojo=nu　niNgeN=wa　a-ran-N
3SG=TOP　この世=GEN　人間=TOP　ある-NEG-IND
あれはこの世の人間ではない。

---

[43] 沖縄・与論方言では否定文を作る際に形容詞の語幹部分も派生変化を起こすが（かりまた 2007、仲間 2007 等）、語幹部分が変化せず、コピュラの異同のみで否定文を形成する点は須山（2007）に紹介される奄美大島の方言と類似している。

4.4.2.1.3　動詞の修飾部

単独形式は動詞を修飾する。派生せずに動詞や形容詞を修飾できる、即ち副詞的に振る舞えることは、国頭方言の形容詞の特徴である。

(4-251) は cjura-sa「きれい」が派生することなく、動詞 sji-i「して」を修飾している。(4-252) は uturu-sja「大変な」が形容詞 aa-sa「赤い」を修飾している。

(4-251)	*nama=nu*	*tukuru=ni*	*burokku*	*cjizj-i*	*cjura-sa*	*sji-i*
	nama=nu	tukuru=ni	burokku	cjig-i	cjura-sa	sji-i
	今=GEN	ところ=LOC1	ブロック	積む-SEQ	綺麗-ADJ	する-SEQ
	今のところにブロックを積んで、きれいにして‥					

(4-252)	*aN*	*fana=wa*	*uturu-sja*	*aa-sa=sa=jaa*
	aN	fana=wa	uturu-sja	aa-sa=sa=jaa
	あの	花=TOP	大変-ADJ	赤い-ADJ=SFP=SFP
	あの花はすごく赤いね。			

なお、形容詞が副詞的に機能する方法として、形容詞の語幹に派生接辞-ku を接続する形態プロセスも存在する（4.4.4.1「派生」を参照）。ただし、自然談話資料において、派生副詞化は非常に数が少ない。殆どの文において、単独形式がそのまま副詞的に機能する。

4.4.2.2　融合形式

融合形式は、語根－形容詞接辞－屈折接辞で構成される（例：cjura-sa-N「きれい」）。統語的には、(a) 一項文の述語、(b) 名詞句の修飾部、にたつ。先に述べた通り、融合形式は、歴史的に単独形式と存在のコピュラ動詞*a が融合して出来た形式であり、(4-253) の融合形式は常に(4-254) の 2 語に分析することが出来る。

(4-253)	*cjurasaN*	
	cjura-sa-N	
	きれい-ADJ-IND	
	きれい	

(4-254)	*cjurasa*	*aN*
	cjura-sa	a-N
	きれい-ADJ	COP-IND
	きれい	

こうした歴史プロセスがあるため、融合形式が取る屈折接辞は、コピュラ動詞*a が取る屈折接辞と同じである（4 章 3 節「動詞形態論」を参照)。ただし、形容詞がとる屈折接辞は、コピュラ動詞*a が取る屈折接辞よりも限定されている。現時点で明らかな、形容詞が取る屈折接辞は (4-255) の通りである。

(4-255)　形容詞が取りうる屈折接辞
-a（過去)、-N（直説法)、-mu（認識法)、-i（疑問法)、-e（肯否疑問法)、-nu（連体形）

4.4.2.2.1　一項文の述語

融合形式は一項文の述語位置に来る。このとき屈折接辞は、-a（過去時制)、-N（直説法)、-mu（認識法)、-i（疑問法)、-e（肯否疑問法）を取ることが出来る。

(4-256) は融合形式の waa-sja-N「おかしい：語根-ADJ-IND」が、warabi「子供」を唯一の項とする、一項文の述語として機能している。

(4-257) は融合形式 taka-sa-e「高い：語根-ADJ-YNQ」が、idu「緯度」を唯一の項とする肯否疑問文の述語として機能している。

(4-256)

aN	*warabi=wa*	*waa-sja-N=jaa*
aN	warabi=wa	waa-sja-N=jaa
あの	子供=TOP	おかしい-ADJ-IND=SFP

あの子供はおかしいね。

(4-257)

tookjoo=jooka	*bosutoN=wa*	*ido=nu*	*taka-sa-e?*
tookjoo=jooka	bosutoN=wa	ido=nu	taka-sa-e
東京=COM	ボストン=TOP	緯度=NOM	高い-ADJ-YNQ

東京よりボストンは緯度が高い？

4.4.2.2.2　名詞句の修飾部

融合形式は、語末に連体形-nu を取り、名詞句の修飾部に立つ。

(4-258) は形容詞 waro-sa「悪い」が、連体形-nu をとって、名詞 muN-cja「者たち」を修飾している。

(4-258)

wacja	*jaa=wa*	*muuru*	*waro-sa-nu*	*muN-cja=be*	*ut-i=joo*
wacja	jaa=wa	muuru	waro-sa-nu	muN-Ncja=bee	u-i=joo
1PL	家=TOP	皆	悪い-ADJ-ADN	者-PL=ばかり	いる-SEQ=SFP

私たちの家は、皆悪い人達ばかりいてね‥

4.4.3　形容詞の分類

殆どの形容詞は、形容詞に特有の接辞を内部に持つ。この形容詞を「形容詞接辞」と呼ぶ。形容詞接辞は-sa と-sja の 2 つの形式がある。

4.4.3.1　形容詞接辞の 2 つの形式

形容詞接辞には-sa と-sja の 2 つの形式があり、語彙ごとに選択される（表 4-29）所属語彙が多いのは-sa を取る形容詞（以下では、-sa 形容詞と呼ぶ）である。意味の傾向として、sa 形容詞には「事物の性質や状態」を表現する語彙が多く、-sja を取る形容詞（以下、sja 形容詞と呼ぶ）には「人の感情や状態」を表すものが多い[44]。但し、sa 形容詞に nizjosa「かわいそうだ」nuNgisa「恐ろしい」があるなど、反例もある。

表 4-29. 形容詞接辞と主な所属語彙（語幹形式を表示）

	所属語彙
-sa	amasa「甘い」、harasa「塩辛い」nizjosa「苦い」masa「美味しい」ususa「薄い」kujusa「濃い」kurusa「苦しい」nizjosa「かわいそうだ」nuNgisa「恐ろしい」hjicjarasa「眩しい」hajosa「かゆい・くすぐったい」acjisa「暑い・熱い」sjidasa「涼しい」hjiisa「寒い・冷たい」nurusa「ぬるい」kurasa「暗い」akarusa「明るい」uhjisa「大きい」ikusa「小さい」marusa「丸い」futosa「太い」hososa「細い」nagasa「長い」mizjikasa「短い」fukasa「深い」asasa「浅い」takasa「高い」hjaasa「低い」semasa「狭い」tuusa「遠い」ufusa「重い」harusa「軽い」arasa「粗い」fuwasa「固い」birasa「柔らかい」furusa「古い」miisa「新しい」wakasa「若い」cjuusa「強い」jowasa「弱い」takasa「高い」jasa「安い」ufusa「大きい」icjasa「少ない」warosa「悪い」heesa「早い・速い」nurusa「のろい」nisa「遅い」arasa「荒い」utunasa「大人しい」kusasa「臭い」kitanasa「汚い」cjurasa「きれい」kurusa「黒い」sjuusa「白い」aasa「赤い」oosa「青い」kujusa「濃い」usasa「薄い」
-sja	hazjikasja「恥ずかしい」isugasja「忙しい」nacjikasja「懐かしい」hoorasja「楽しい・嬉しい」waasja「おかしい」mizjirasja「面白い・珍しい」hamarasja「うるさい」atarasja「勿体ない」agumasja「だるい」oosja「危ない」muzjikasja「難しい」

[44] 歴史的には、沖縄方言の-sa 形式が日本古語のク活用に、-sja 形式はシク活用に対応することが指摘されており（上村 1981、名嘉真 1986)、国頭方言も同様の傾向を持つと考えられる。

4.4.3.2　-sa / -sja 接辞の違い

-sa と-sja は、いずれも形容詞を構成する接辞であるが、前者が屈折接辞であるのに対して、後者は派生接辞であると考えられる。その根拠は、それぞれの接辞を取る形容詞の、派生に関する振る舞いの違いである。

まず、-ku という接辞の接続の仕方についてみる。-ku は形容詞を副詞化する派生接辞である。sa 形容詞が-ku を接続するときには、(4-259) のように、-sa より前の要素に-ku が接続する。これに対して、sja 形容詞が-ku を接続するときには、(4-260) のように-sja の後に-ku が接続する（接辞-ku については 4.4.4.1 を参照）[45]。

(4-259)　taka-sa　>　taka-ku
　　高い-ADJ　高い-ADVL
　　高い　高く

(4-260)　hamara-sja　>　hamara-sja-ku
　　うるさい-ADJ　うるさい-ADJ-ADVL
　　うるさい　うるさく

次に、派生の自由度も異なる。sa 形容詞は、-sa より前の要素に、派生接辞 –taama を接続したり、その要素を重複する形態法をとることが出来るのに対し、sja 形容詞は接辞-taama も重複形式も取ることが出来ない（重複については 4.4.4.2、接辞-taama については 4.4.4.3、を参照）。

(4-261)　iku-sa　>　iku-taama
　　小さい-ADJ　小さい-EMPH
　　小さい　とても小さい

(4-262)　taka-sa　>　takaa-taka
　　高い-ADJ　高い-RED
　　高い　高く

[45]原田（2014）は、他の琉球諸語においても-ku を接続した際に、形容詞の振る舞い上の違いが出ることを指摘している。特に奄美大島湯湾方言では、-sa 形容詞においては、sa よりも前の要素に-ku が接続するのに対し、-sja 形容詞においては、-sja の後に-ku が接続するという、国頭方言と同じプロセスが観察される（原田 2014：13）。

最後に、複合語の形成についても両者は振る舞いが異なる。sa 形容詞は、-sa 以前の要素と名詞が複合することが出来るが、sja 形容詞はこのような複合語を形成することは出来ない。

(4-263) cjura+gwaa
cjura+kwaa
きれい+子
きれいな子

以上のことから、-sa は語幹の外側にある一方で、-sja は語幹の内側にあるものだと考えられる。従って、前者は屈折接辞であるが、後者は派生接辞であると考える。

4.4.3.3 -sa, -sja を取らない形容詞

形容詞の多くは、-sa または-sja の形容詞接辞を接続するが、*aca「暑い」*jukwa「良い」は例外的に-sa, -sja を取らない。但し、4.1.3「品詞分類」述べた分類の基準や、4.4.1「形容詞の認定基準」を満たすことから、形容詞であると考える。

4.1.3 節では、形容詞の分類基準として「コピュラ動詞*na の補部を埋めること」を挙げた。(4-264)(4-265) はいずれもその要件を満たしている。

(4-264) *cjoosji=nu* *jukwa* *na-N=jaa*
cjoosji=nu jukwa na-N=jaa
調子=NOM 良い ない-IND=SFP
調子が良くないね。

(4-265) *hjuu=wa* *aNmai* *aca* *na-N=jaa*
hjuu=wa aNmai aca na-N=jaa
今日=TOP あんまり 暑い ない-IND=SFP
今日はあんまり暑くないね。

4.4.4 派生・重複

形容詞は、派生接辞を取ったり、重複を起こす。

4.4.4.1 副詞化接辞-ku

国頭方言の形容詞は、屈折のない単独形式（cjura-sa「きれい」）で動詞を修飾することが出来る。一方で、接辞-ku を接続し（cjura-ku「きれいに」）動詞を修飾する形式もある。複数の統語機能を持つ単独形式に比べ、-ku を接続した形式は副詞的な機能しか持たな

い。このため、-ku は形容詞を副詞に品詞転換する、派生接辞であると考えられる。

接辞-ku が接続する要素は、形容詞の種類によって異なる。sa 形容詞は、-sa よりも前の要素に-ku を接続するが (4-266)、sja 形容詞は-sja の後に-ku を接続する (4-267)。

(4-266)

	jaa=nu	*cjura-ku*	*nat-u-N=jaa*
	jaa=nu	cjura-ku	na-u-N=jaa
	家=NOM	きれい-ADVL	なる-CONT-IND=SFP

家がきれいになっているね。

(4-267)

	unu	*attai=mu*	*hamara-sja-ku*	*nat-a-N*
	unu	attai=mu	hamara-sja-ku	na-a-N
	この	あたり=ADD	うるさい-ADJ-ADVL	なる-PST-IND

この辺りもうるさくなった。

4.4.4.2 重複

sa 形容詞のうち、語根が 2 モーラの形容詞[46]は、語根の重複という形態プロセスによって、副詞または名詞化されると共に、「大きい」「多い」等の意味が強められる。重複が起きる時、音声的には (4-268)の現象が、統語的には (4-269) の現象が観察される。

(4-268)　形容詞の重複にみられる音声現象

a. 重複された形態素の末母音は長音化する。
　例）naga-sa「長い」> naga-nagaa=tu「とても長く」

b. 重複された形態素は連濁現象を起こす。
　例）kuru-sa「黒い」> kuru-guruu=tu「とても黒く」

(4-269)　形容詞の重複に見られる統語現象

c. 重複の後に必ず引用の助詞の=tu「～と」を伴う(4-270)。

d. 連体節で用いる場合、=tu の後に属格助詞=nu を伴う (4-271)。

(4-270) は kuru-sa「黒い」の語根が重複し、kuru-guruu=tu「黒々と」と意味を強めている。(4-271) は ufu-sa「大きい」の語根が重複し、ufu-ufuu=tu「とても大きい」と意味を強めている。

[46] 但し*ni「遅い」という形容詞において、重複形 nisa-nisaa=tu が確認された。語根が 2 モーラ未満の場合、このように形容詞接辞を含めた語幹を繰り返すことで、リズムを確保する可能性がある。

(4-270)

hada=wa	*kuru-guruu=tu*	*hjikat-i=gadi*	*u-N*
hada=wa	kuru-kuru=tu	hjikat-i=gadi	u-N
肌=TOP	黒い-RED=QT	光る-SEQ=TERM	いる-IND

肌は黒々と光ってさえいる。

(4-271)

wana	*ufu-ufuu=tu=nu*	*suika*	*cukut-a-N=jaa*
wana	ufu-ufu=tu=nu	suika	cuku-a-N=jaa
1SG	大きい-RED=QT=GEN	西瓜	作る-PST-IND=SFP

私はとても大きな西瓜を作ったよ。

重複法を取ることが出来る形容詞には、意味に一定の傾向がある。表 4-30 は、重複法を取る形容詞の意味カテゴリーと所属語彙をまとめたものである。典型的に「大きい」「多い」などの「程度が大きい」ことを表す形容詞のほか、物理的性質、色、速さ、味、肯定的な評価を表す形容詞が重複法を取る。

表 4-30. 重複法を取る形容詞

意味カテゴリ	語彙
程度が大きい¥	ufusa「大きい」takasa「高い」nagasa「長い」kujusa「濃い」fukasa「深い」
物理的性質	hwaasa「固い¥」birasa「柔らかい」ubusa「重い¥」harusa「軽い」
色¥	kurusa「黒い」sjuusa「白い」aasa「赤い」oosa「青い」
速さ¥	heesa「速い」nisa「遅い」
味	amasa「甘い」harasa「辛い」
肯定評価	jukwa「良い」cjurasa「綺麗」

注）¥で記すカテゴリ・及び語は、形容詞の強調に重複法のみを取り、-taama（4－4－3）を取らないものである。

4.4.4.3 -taama

接辞-taama は、sa 形容詞の語幹に接続し、形容詞を名詞化すると共に、「小さい」「少ない」等の形容詞の意味を強める。

(4-272) は形容詞 asa-sa「浅い」に-taama が接続し、asa-taama「とても浅い」と意味を強めている。(4-273) は cjurasa「きれい」に-taama が接続し、cjura-taama「とてもきれい」と意味を強めている。

(4-272)

asa-taama=nu	*nii=niti*	*ubukurit-a-N*
asa-taama=nu	nii=niti	ubukuri-a-N
浅い-EMPH=GEN	場所=LOC2	溺れる-PST-IND

とても浅い場所で溺れた。

(4-273)

akacjaN=nu	*tuki=wa*	*cjura-taama*	*jat-a=sjiga=ja*
akacjaN=nu	tuki=wa	cjura-taama	ja-a=sjiga=jaa
赤ちゃん=GEN	時=TOP	きれい-EMPH	COP-PST=CEX=SFP

赤ちゃんの時はとても綺麗だったけどね

接辞-taama を取ることが出来る形容詞は、意味に一定の傾向がある。表 4-31 は、接辞-taama を取ることが出来る形容詞の意味カテゴリーと所属語彙をまとめたものである。典型的に「小さい」「少ない」など「程度が小さい」ことを表す形容詞のほか、「柔らかい」「軽い」など程度が小さい物理的性質、味、肯定的評価を表す形容詞が-taama を取る。

表 4-31 接辞-taama を取る形容詞

意味カテゴリ	語彙
程度が小さい¥	ikusa「小さい」mizjikasa「短い」ususa「薄い」asasa「浅い」
物理的性質	jawarakasa「柔らかい」birasa「柔らかい」harusa「軽い」
人の性質¥	utunasjisa「大人しい」furusa「大人しい」
味	amasa「甘い」harasa「辛い」
肯定評価	jukwa「良い」cjurasa「綺麗」

注）¥で記すカテゴリ・及び語は、形容詞の強調に接辞-taama のみを取り、重複法を取らないものである。

4.4.5 複合形容詞

形容詞の中には、動詞の連用形と複合するものがある。補助形容詞は典型的な形容詞とは異なり、4.4.1 で示した「形容詞の認定」の「c) そのままの形で動詞を修飾する」以外の条件を満たす。

動詞と形容詞の連続が句であるか複合であるかの認定は、4.1.5.2「形態法」の 4.1.5.2.4「分割」によって行った。すなわち、焦点助詞=du によって分割できるものは「句（すなわち二語）」であり、分割できないものは「語（複合語）」と判断した。

4.4.5.1 gisa「～そうだ」

形容詞*gi(i)「～そうだ」は、動詞の連用形と複合し、動作や事態が起こる可能性が高いという判断を示す。(4-274) は*sjin「死ぬ」の連用形と複合することで、話者が「金魚が死

ぬ」という事態が起こることを予測していたことを表す。

否定文を作る際には、通常 gi-sa na-N のようにコピュラ部分のみを否定形式に変更する。ただし、語幹に-ku を接続し、gi-ku na-N となる場合もある(4-275)。

(4-274)	*unu*	*kuru=wa*	*kiNgjo=wa*	*sjin-i+gi-sa*	*at-a-N*
	unu	kuru=wa	kiNgjo=wa	sjin-i+gii-sa	a-a-N
	その	頃=TOP	金魚=TOP	死ぬ-INF+そうだ-ADJ	ある-PST-IND
	その頃は、金魚は死にそうだった。				

(4-275)	*mada*	*ami=wa*	*harit-i*	*a-i+gi-ku*	*na-N*
	mada	ami=wa	hari-i	a-i+gii-ku	na-N
	まだ	雨=TOP	晴れる-SEQ	ある-INF1+そうだ-ADVL	ない-IND
	まだ雨は晴れそうにない。				

4.4.5.2 gurusja「～苦しい、出来ない」

形容詞*guru「～苦しい」は、動詞の連用形と複合し、動作や事態が起こることが難しいことを表す。

(4-276) は*mi「見る」の連用形と複合し、「見る」という動作が難しい状態である（＝見苦しい）ことを示している。

(4-276)	*hookusu=tu*	*hjizjuru=tu*	*taa=cji*	*m-ii+guru-sja-nu*	*hada=ni*
	hookusu=tu	hjizjuru=tu	taa=cji	m-i+guru-sja-nu	hada=ni
	あざ=COM	火傷=COM	2=個	見る-INF+苦しい-ADJ-ADN	肌=LOC1
	あざと火傷と 2 個あって、見苦しい肌に				

nat-u-N
na-u-N
なる-CONT-IND
肌になっている。

4.4.5.3 busja「～したい」

形容詞*bu「～したい」は、動詞の連用形と複合し、動作や事態を希望していることを表す。(4-277) は*cjik「聞く」の連用形と複合することで、話者が「ギリシャの話を聞く」という動作を希望していることを示す。

(4-277)　*girisja=nu*　*hanasji*　*cjicj-i+bu-sja-N*
girisja=nu　hanasji　cjik-i+bu-sja-N
ギリシャ=GEN　話　聞く-INF1+欲しい-ADJ-IND
ギリシャの話を聞きたい。

4.4.5.4　jasa「～やすい」

形容詞*ja「～易い」は、動詞の連用形と複合し、動作が容易であることを表す。

(4-278) は、*mi「見る」の連用形と複合することで、「見る」という動作が容易になることを表している。

(4-278)　*ozoNcjirjoo*　*sji-riba*　*mii=nu*　*m-ii+ja-sa*　*na-ju-N*
ozoNcjirjoo　sji-riba　mii=nu　m-i+ja-sa　na-ju-N
オゾン治療　する-COND1　目=NOM　見る-INF+易い-ADJ　なる-NPST-IND
オゾン治療をすれば、目が見やすくなる。

4.6　その他の品詞

4.5 節では、連体詞、感動詞、助詞、副詞について述べる。

4.6.1　連体詞

連体詞は名詞の修飾部のみにたち、いかなる屈折変化もしない。連体詞に分類されるのは、funu「この」unu「その」anu「あの」、icjanu「どんな」の 4 語である[47]。なお、fuN, uN, aN, uduN も連体詞的用法を持つが、これらの形式は名詞としても機能するため、連体詞ではなく名詞（代名詞）と分類した（4.2.2.2 節「指示代名詞」を参照）。

funu, unu, anu は指示の対象を表す語類（指示語 4.6.1 節も参照）の一部であり、icjanu「どんな」は疑問の対象を表す語類（疑問詞 4.7.2 節も参照）の一部である。

4.6.1.1　指示語

指示語の用法として、話し手の眼前にあるものを指す「現場指示」と、眼前にないもの（話題として登場したものや、記憶にあるもの）を指す「文脈指示」の用法がある。「現場指示」の場合、話者から近い物・人の名詞を修飾する場合には funu, 聞き手から近い物・人の名詞を修飾する場合には unu, 話し手からも聞き手からも遠い物・人の名詞を修飾する場合には anu が用いられる。一方、「文脈指示」の場合、unu は話題になっている時や、話題として既に言及されている物・人を、anu は話者の記憶の中や、聞き手と共有された知識の中にある物・人を指す。指示対象が分からない場合には、uduN「どれ／どの」（4.2.2.2「指示代名詞」を参照）を用いる。

funu, unu, anu は、日本共通語の「この」「その」「あの」に対応するもので、用法もほぼ同じだが、後に述べるように、時間の指示については、日本標準語とは少し異なる用例も見つかった。それぞれの用例を以下に示す。

4.6.1.1.1　funu「この」

funu は、話者から近い物・人の名詞を修飾する現場指示の用法を持つ。

(4-279) では、funu「この」が話者の近くにある beNcji「ベンチ」を指している。

(4-279)	*wana*	*icjama*	*funu*	*beNcji=niti*	*jurari-raa=ja*
	wana	icjama	funu	beNcji=niti	jurari-raa=jaa
	1SG	少し	この	ベンチ=LOC2	休憩する-INT=SFP

私は少しこのベンチで、休憩するね。

[47] fuN「これ／この」、uN「それ／その」、aN「あれ／あの」も uduN「どれ／どの」も連体詞的用法を持つが、名詞としても機能するため、連体詞ではなく名詞（代名詞）に分類する。

4.6.1.1.2 unu「その」

unu は、聞き手から近い物・人の名詞を修飾する現場指示の用法と、話題になっている時や、話題として既に言及されている物・人を指す文脈指示の用法を持つ。

(4-280) では、unu「その」が話題になっている時を、(4-281) では談話中で既に言及されている cjura-sa-nu wunagu=nu kwaa「綺麗な女の子」を指している。

(4-280)

unu	*kuru=nu*	*wunagu=nu*	*uja-Ncja=wa*	*kibisji-sa*
unu	kuru=nu	wunagu=nu	uja-Ncja=wa	kibisji-sa
その	頃=GEN2	女=GEN2	親-PL=TOP	厳しい-ADJ

その頃の女の親たちは厳しかったからね。

at-a-N=tu=jaa
a-a-N=tu=jaa
COP-PST-IND=CSL=SFP

(4-281)

aru	*tuki=wa*	*wana*	*asa*	*izj-u-riba*	*cjura-sa-nu*	*wunagu=nu*
aru	tuki=wa	wana	asa	izj-u-riba	cjura-sa-nu	wunagu=nu
ある	時=TOP	1SG	朝	行く-CONT-COND	綺麗-ADJ-ADN	女=GEN

ある時は‥私は朝（神社に）行っていたら‥綺麗な女の

kwaa=nu	*kicj-i…*	*gaNsji*	*unu*	*kwaa=cji*	*omedetoogozaimasu*	*sji-i*
kwaa=nu	ku-i	gaNsji	unu	kwaa=cji	omedetoogozaimasu	sji-i
子=NOM	来る-SEQ	そして	その	子=ALL	おめでとうございます	する-SEQ

子が来て‥その子に「おめでとうございます」をして‥

4.6.1.1.3 anu「あの」

anu は、(a) 話し手からも聞き手からも遠い物・人の名詞を修飾する現場指示の用法と、(b) 話者の記憶の中や、聞き手と共有された知識を指す文脈指示の用法を持つ。

(4-282) では、anu「あの」が話し手の記憶の中にある「子供」を、(4-283) では聞き手と認識を共有している特定の「人」を指している。

(4-282)

anu	*kwaa=tu*	*mata*	*asjib-a-ju-N=kaja?*
anu	kwaa=tu	mata	asjib-ra-ju-N=kaja
あの	子供=COM	また	遊ぶ-POT-NPST-IND=Q

あの子とまた遊べるかな？

(4-283)

anu	*cjuu=nu*	*anuu*	*secumee=wa*	*wana*	*cjibu*
anu	cjuu=nu	anuu	secumee=wa	wana	cjibu
あの	人=GEN2	FIL	説明=TOP	1SG	少しも

あの人の説明は、私は少しも分からなかった。

waka-radanat-a-N
waka-radana-a-N
分かる-NEG-PST-IND
分からなかった。

4.6.1.1.4 時間の指示に関して

funu, unu, anu の体系については、日本標準語の「この」「その」「あの」と対応しているが、時間の指示に関して、日本標準語とは少し異なる用例がある。

(4-284) (4-285) は、日本標準語では「その」で指すと思われるが anu「あの」が用いられている。

(4-284) は、話者が「早く行かないと法事が始まる四時に間に合わないよ」と作例した後、次の文で「四時」を anu zjikaN「あの時間」で指している。

(4-284)

hee-sa	*ik-a-N=nja*	*hoozji*	*hazjima-ju-nu*	*jozji=ni*
hee-sa	ik-ran-N=nja	hoozji	hazjima-ju-nu	jozji=ni
早い-ADJ	行く-NEG-IND=COND	法事	始まる-NPST-ADN	四時=LOC

早く行かないと、法事が始まる 4 時に間に

ma=ni	*oo-ra-N=do=jaa*	*hoozji=wa=sja*	*anu*	*zjikaN=ni*
ma=ni	oo-ran-N=doo=jaa	hoozji=wa=sja	anu	zjikaN=ni
間=LOC	合う-NEG-IND=SFP=SFP	法事=TOP	あの	時間=LOC

合わないよ。法事はあの時間（4 時）に合わすみたい

oos-ju-N=gi	*ja-N=tu=ja*	*ma=ni*	*oo-ra-N=doo=jaa*
oos-ju-N=gi	ja-N=tu=jaa	ma=ni	oo-ran-N=doo=jaa
合わす-NPST-IND=EXP	COP-IND=COND=SFP	間=LOC	合う-NEG-IND=SFP=SFP

だから、間に合わないですよ。

(4-285) は、昔話を語る途中で「七夕があるでしょ」とコメントを挿入した後、anu tuki「あの時」で言及済みの「七夕」を指している。

(4-285) *<tanabataga aru desjo> anu tuki=ni gaNsji sji-i*
<tanabataga aru desjo> anu tuki=ni gaNsji sji-i
<七夕が ある でしょ> あの 時=LOC1 そして する-SEQ
七夕があるでしょ。あの時（七夕）に、「夏の

nacji=nu nacjiguri=wa ama=ga namida=di Muu-ri=joo=dicji
nacji=nu nacji+furi=wa ama=ga namida=di Muu-ri=joo=dicji
夏=GEN2 夏+降る.INF1 母=GEN1 涙=QT 思う-IMP=SFP=QT
夏の雨は、母の涙と思いなさいよ」と言って

こうした用法がどのような意味範囲を持つのかについては、今後調べる必要がある。

4.6.1.2 icjanu「どんな」

icjanu「どんな」は疑問文の中の名詞修飾部のみに現れる。uduN「どの」とは異なり、修飾する名詞の様子や状態などを尋ねる。

(4-286) では、icjanu「どんな」が cjuu「人」を修飾し、クラスにいる人の様子や人柄などを尋ねている。

(4-286) *ura kurasu=ni=wa icjanu cjuu=nu u-i=joo?*
ura kurasu=ni=wa icjanu cjuu=nu u-i=joo
2SG クラス=LOC1=TOP どんな 人=NOM いる-Q=WHQ
あんたのクラスには、どんな人がいるの？

4.6.2 感動詞

感動詞は単独で発話を形成し、いかなる修飾関係を持たず、屈折変化もしない。

感動詞は、それが発せられる場面における、話し手と聞き手の関係に着目すると、大きく 2 つのグループに分類することが出来る（『言語学大辞典第六巻』）。すなわち、相手を必要とせず、もっぱら感情表出の機能を持つ感情感動詞 (emotional interjection) と、相手を必要とし、相手に働きかける機能を担う対人的感動詞である。前者は独り言にも用いられる形式である一方、後者は相手が存在することを前提に使用される形式である。

4.6.2.1 感情感動詞

感情感動詞には、喜怒哀楽などの感情を表出するものと、言い淀むときに表出するものがある（表 4-32）。特に言い淀みの感動詞は、自然談話で用いられる頻度が高い。

表 4-32. 感情感動詞

機能	形式	訳	場面
感情の表出	*abee*	あら！	驚いた時
	hasee	ああ‥	驚いた時、安心した時
言い淀み	*anuu*	あのー	言い淀む時
	nuNgura / nuugura	何だっけ	言い淀む時

abee は何か失敗した時や、失敗に気付いた時に咄嗟に口をつく言葉である (4-287) 。hasee は驚いた後、胸をなでおろす時などに用いる (4-288) 。

(4-287)

abee	*wana*	*saifu*	*wasjirit-a-N*
abee	wana	saifu	wasjiri-a-N
あら	1SG	財布	忘れる-PST-IND

あら！私は財布を忘れた。

(4-288)

hasee	*udurucj-a-N*
hasee	uduruk-a-N
ああ	驚く-PST-IND

ああ、驚いた。

会話中で言い淀み、次の言葉を発するまでに用いるのが anuu「あのー‥」や nuNgura「何だっけ」である (4-289) 。このうち nuNgura は、「何か」のように指示内容が定まっていない名詞の代わりに用いることもある (4-290) 。

(4-289)

koobe	*izj-i=kara=joo*	*anuu*	*nuNgura*	*koobe=nu*	*minatu=nu=joo*
koobe	ik-i=kara=joo	anuu	nuNgura	koobe=nu	minatu=nu=joo
神戸	行く-SEQ=ABL=SFP	FIL	FIL	神戸=GEN	港=GEN=SFP

神戸に行ってからね、あのー‥何だっけ、神戸の港のね‥

(4-290)

tada=nu	*nuNgura=wa*	*a-ra-N=gara=mu*	*waka-ra-N=doo=dicji*
tada=nu	nuNgura=wa	a-ran-N=gara=mu	waka-ran-N=doo=dicji
ただ=GEN	FIL=TOP	COP-NEG-IND=Q=ADD	分かる-NEG-IND=SFP=QT

（その人は）只の何やらではない（只者ではない）かもしれないよ、と言って

4.6.2.2　対人的感動詞

対人感動詞には、相手の発話に応答するときに用いるものと、相手に働きかけるものがある（表 4-33）。

表 4-33. 対人感動詞

機能	形式	訳	場面
応答	*iN*	うん（目下・同輩に）	相手の言ったことを肯定する時
	oo	はい（目上に）	相手の言ったことを肯定する時
	ai	いや、いいえ	相手の言ったことを否定する時
働きかけ	*ʔjaa*	ねえ	相手の注意を喚起する時、相槌
	saa	さあ	相手に何か行動を促す時
	sattimu	さてさて	相手に次の展開を予想させる時
	uNnja	ほら	相手の注意を喚起する時

iN, oo は相手の発話を肯定する時に発する言葉であり、相手が敬意の対象である場合には oo「はい」を、敬意の対象でない場合には iN「うん」を用いる。相手の発話を否定する時には、敬意の有無に関わらず ai「いや・いいえ」が用いられる (4-291) 。

(4-291)

ura	*jiNga=naa?*	/	*ai*	*wana*	*jiNga=wa*	*a-jabu-ra-N=doo*
ura	jiNga=naa		ai	wana	jiNga=wa	a-jabu-ran-N=doo
2SG	男=YNQ		いや	1SG	男=TOP	COP-POL-NEG-IND=SFP
あんたは男か？			いや、私は男ではないですよ。			

相手に何らかの働きかけをする感動詞にはʔjaa, saa, sattimu, uNnja などがある。(4-292) は、綺麗な虹が出ていることを他の人に知らせる文であり、ʔjaa と呼びかけることで相手の注意を喚起している。

(4-292)

ʔjaa	*cjura-sa-nu*	*nizji*
ʔjaa	cjura-sa-nu	nizji
ねえ	きれい-ADJ-ADN	虹
ねえ、きれいな虹		

4.6.3　助詞

助詞は単独で発話を形成せず、いかなる語とも修飾関係を持たず、また屈折変化をしない。助詞は常にホストとなる名詞句や述部に後節する。

助詞はその機能により、以下の 4 つに分類することが出来る。

a. 格助詞：名詞句に接続し、名詞句と文の主要部との統語的関係や、名詞句と他の語との意味的関係を示す。
b. 接続助詞：従属節末に接続し、主節に対する従属節の役割を決定する。
c. 副助詞：名詞、副詞、節などの様々な要素に接続し、接続先に特別な意味を加える。
d. 終助詞：文末に接続し、文のモダリティ（文に対する話し手の認識や、聞き手に対する話し手の態度）を示す。

4.6.3.1 格助詞

格助詞は名詞句に接続し、名詞句と文の主要部との統語的関係（文法関係）や、名詞句と他の語との意味的関係を示す。

格助詞と、その標示内容は表 4-34 の通りである。それぞれの格助詞の機能については、5 章 2 節「名詞句構造」で詳述する。

表 4-34. 格助詞一覧

形式	訳	格	グロス	標示内容
=ga / =nu	「～が」	主格	NOM	自動詞・他動詞文の主語（動作の主体など）
=ga / =nu	「～の」	属格	GEN	名詞を修飾する名詞
=ni	「～に」	与格	DAT	間接目的語（動作の対象など）
=sji	「～で」	具格	INS	a. 手段・道具、b. 材料、c. 原因・理由、d. 数量、e. 動作の主体、f. 事態の成立領域、h. 動作主の状態
=tu	「～と」	共格	COM	a. 共同・相互行為の相手、b. 比較の基準、c. 名詞の並列
=jooka	「～より」	比較格	CMP	比較の基準
=ni	「～に」	場所格	LOC1	a. 状態の場所、b. 事態が生じる時、c. 変化の結果
=niti	「～で」	場所格	LOC2	出来事の場所
=cji	「～へ」	向格	ALL	a. 移動の方向、b. 動作の対象
=kara	「～から」	奪格	ABL	a. 範囲の起点、b. 物や情報の与え手、c. 移動の経路
=Ntani	「～まで」	終局格	TERM	事態の成立範囲の終点
=Ntabe				
=madi				

4.6.3.2　接続助詞

接続助詞は従属節末に接続し、主節に対する従属節の役割を決定する。

接続助詞の一覧は表 4-35 の通りである。それぞれの形式の、具体的な機能は 5 章 6 節「複文構造」に詳述する。

表 4-35. 接続助詞

形式	訳	グロス	従属節の種類（意味）
=tu	「～と」「～から」	CSL	副詞節（条件・理由）
=tuni	「～から」	CSL	副詞節（理由）
=di	「～と」	QT	引用節
=dicji	「～と（言って）」	QT	引用節
=cji	「～と」	QT	引用節
=gacjana	「～ながら」		副詞節（時）
=gena	「～後」		副詞節（時）
=sjiga	「～けど」	CNC	逆接

4.6.3.3　副助詞

副助詞は、名詞句、副詞、形容詞など、様々な文の要素に接続し、接続先に様々な意味を加える。副助詞の一覧は、表 4-36 の通りである。以下、助詞毎に機能の説明を行う。

表 4-36. 副助詞

形式	訳	グロス	標示内容
=wa	「～は」	TOP	文の主題、対比
=mu	「～も」	ADD	付加
=du	「～こそ（ぞ）」	FOC	焦点
=ga	「～こそ（ぞ）」	FOC	焦点
=daki	「～だけ」	LIM	限定
=bee	「～くらい」「～ばかり」		a. 近似値、b. 頻度の多いもの
=naga	「～なんか」	EXM	曖昧
=tuka	「～とか」	EXM	例示・列挙
=fudu	「～ほど」		基準
=kamu	「～かも」	EPI	可能性
=gara	「～か」	①EXM ②EPI	①例示、②可能性

4.6.3.3.1 =wa（主題／対比）

=wa は、名詞句、副詞、形容詞に接続し、 (a) 文の主題を標示したり、(b) 対比対象を標示する機能がある。=wa および主題については、6 章 1 節「情報構造」で述べる。

(4-293) は、=wa が wana「私」に接続し、wana「私」が文の叙述の対象（主題）であることを表している。

一方で、(4-294) では=wa が sjoocjuu「焼酎」に接続しているが、文の叙述対象は zjaazja「お爺さん」と考えられ、sjoocjuu「焼酎」は主題ではない。この文は「焼酎は飲まないが、他のものは飲む」という意味を含意しており、=wa が接続する sjoocjuu「焼酎」は「対比の対象」を標示している。

(4-293)

wana=wa	*goneNmae=mu*	*okinawa=cji*	*izj-a-N=djaa*
wana=wa	goneNmae=mu	okinawa=cji	ik-a-N=djaa
1SG=TOP	5 年前=ADD	沖縄=ALL	行く-PST-IND=SFP

私は 5 年前も沖縄へ行ったよ。

(4-294)

zjaazja=wa	*sjoocjuu=wa*	*num-i-jabu-ra-N*
zjaazja=wa	sjoocjuu=wa	num-i-jabu-ran-N
お爺さん=TOP	焼酎=TOP	飲む-POL-NEG-IND

お爺さんは焼酎は飲まない。

4.6.3.3.2 =mu（付加）

=mu は名詞、形容詞、動詞、副詞など様々な語に接続し、接続先の語が表す指示対象や動作などが、命題で述べる内容に加える対象（や動作等）であることを表す。

(4-295) では、=mu が wacja「私たち」に接続し、wacja「私達」が「お祈りをする」動作主に加わることを意味している。

(4-295)

zjaazja-ta=mu	*sjiimuN*	*ois-ju-N=tuni*	*wacja=mu*	*tooto*
zjaazja-taa=mu	sjiimuN	ois-ju-N=tuni	wacja=mu	tooto
祖父-PL=ADD	吸い物	食べる.HON-NPST-IND=CSL	1PL=ADD	祈り

お爺さんたちも吸い物を召し上がっているから、私たちもいただこう。

sji-raa
sji-raa
する-INT
しよう

4.6.3.3.3 =du（焦点）

=du は「焦点」を担う要素を標示する。「焦点」とは、聞き手が知らない（と話し手が考える）新しい情報を指す（6 章 1 節「情報構造」を参照）。=du は平叙文、肯否疑問文における、名詞句、形容詞句、動詞句、副詞の様々な要素に接続する。また、文中に=du が現れると、述語が係り結び形-ru になるという「呼応 (concord) 」現象が見られることがある。この「焦点呼応」は、日本古典語において「係り結び」と呼ばれる現象で、琉球諸方言において観察される。先行研究（平山 1986 等）においては、呼応の頻度についての言及はないが、筆者の手元のデータにおいて、呼応現象が見られるのは、=du が出現するうちの 10 分の 1 ほどである[48]。呼応が起きている文例は、焦点の種類が「対比焦点 (contrastive focus) 」である場合が多いように見える。しかし、どのような条件において呼応が起きるのかは、言語内的要因に加え、年代差などの言語外的要因も関連している可能性があり、今後検討していく必要がある。

(4-296) は「先生は誰を怒ったの？」という質問に対し、「私たちが、怒られた」と回答した文である。=du は、新情報（情報焦点）を担う項 wacja「私達」を標示している。

(4-297) では「この世の人間」という言及済みの情報に対して、「何か（この世の人間以外のもの」という対比的な情報を述べている。この対比的な情報（焦点）を担う nooka「何か」は=du を取り、コピュラ述語*a は係り結び形 a-ru をとっている。

(4-296)	*seNsee=wa*	*taru*	*amat-i=joo?*	//	*wacja=ga=du*	*ama-rat-a-N*
	seNsee=wa	taru	ama-i=joo		wacja=ga=du	ama-ra-a-N
	先生=TOP	誰	怒る-Q=WHQ		1PL=NOM=FOC	怒る-PASS-PST-IND
	先生は誰を怒ったの？				私たちが怒られた。	

(4-297)	*ari=wa*	*honojo=nu*	*niNgeN=wa*	*a-ra-N*	*nooka=du*	*a-ru*
	ari=wa	honojo=nu	niNgeN=wa	a-ran-N	nooka=du	a-ru
	3SG=TOP	この世=GEN	人間=TOP	COP-NEG-IND	何か=FOC	COP-MSB
	あれはこの世の人間ではない。何か（別のもの）だ。					

4.6.3.3.4 =ga（焦点）

焦点を標示する助詞には、=du の他に=ga という形式がある。=du が平叙文や単純疑問文内部に現れるのに対して、=ga は疑問詞疑問文に現れる（表 4-37）。

『おもろそうし』の研究から、12 世紀～13 世紀の琉球語には=ga, =du, =su の係り助詞が存在し、=ga と=du はそれぞれ異なる動詞の形式と呼応していたとされている (Shinzato

[48] 焦点助詞=du の出現が 511 例に対し、係り結び形の出現は 65 件。但し、焦点助詞=ga に呼応するものや、焦点助詞なしで現れるものなど、対応は 1 対 1 ではない。

2015) 。沖永良部語においても、西部方言の正名方言では、=du に対して-ru が、=ga に対して-ra 呼応し、形式が区別されている (Van der Lubbe and Tokunaga 2015) 。しかし、国頭方言においては、少なくとも共時的には=ga, =du ともに同一の形式-ru で結ばれる。

表 4-37. 焦点助詞の形式と焦点呼応

	焦点助詞	焦点呼応形式
内容疑問文	=ga	-ru
単純疑問文	=du	? （調査の範囲では現れず）
平叙文・否定文	=du	-ru

(4-298) は内容疑問文であり、焦点助詞に=ga を取っている。内容疑問文の述語動詞は、非焦点文においては疑問形-i を取るが、ここでは文の一部が焦点化されているために、述語動詞*ʔi「言う」が係り結び形-ru を取りʔjuta-ru「言っていた」という形式になっている。

(4-298)

biNboo=wa	*nuu=di=ga*	*ʔjuta-ru*
biNboo=wa	nuu=di=ga	i-ju-a-ru
貧乏=TOP	何=QUOT=FOC	言う-PST2-MSB

「貧乏」はなんと言っていた？

4.6.3.3.5 =daki（限定）

=daki は、名詞や動詞に接続し、接続先が意味する指示対象や動作が、唯一のもの（こと）であることを意味する。

(4-299) は、話し手の母親が首が回らなくなったという話の一節である。限定を表す=daki が mee「前」に接続し、述語*mi「見る」が表す動作が出来る範囲が、唯一「前」に限定されていることを表している。

(4-299)

wacja	*ama=ga*	*cjibu*	*kubi=mu*	*moo-radana*	*tada*	*mee=daki*
wacja	ama=ga	cjibu	kubi=nu	moo-radana	tada	mee=daki
1PL	母=NOM	少しも	首=NOM	回る-NEG.SEQ	ただ	前=LIM

私達の母親が、少しも首が回らなくて、ただ前だけ

m-juu-nu	*gutu*	*nat-i*
mi-ju-nu	gutu	na-i
見る-NPST-ADN	こと	なる-SEQ

見ることになって

4.6.3.3.6 =bee「～くらい、ばかり」

=bee は、(a) 数や時間を表す名詞に接続し、値の近似値を表す、(b) 名詞や副詞、動詞に接続し、接続先が表す指示対象や動作の数や頻度が多いことを表す。なお、=bee には適当なグロスが見つからなかったため、グロスには日本標準語を記す。

(4-300) では=bee「～くらい」が sjicjizjihaN「7 時半」という時間を表す名詞に接続し、*akaru「明るい」という事態が、7 時半近くまで続くことを表している。

(4-300)

sjicjizjihaN=be=Ntani=wa	*akaru-sa-N*
sjicjizjihaN=bee=Ntani=wa	akaru-sa-N
7 時半=くらい=TERM=TOP	明るい-ADJ-IND

7 時半くらいまでは明るい。

(4-301) では=bee「ばかり」が juuzai「喧嘩」に接続し、喧嘩が起こる数が非常に多いことを表している。

(4-301)

asa=kara	*baN=tani*	*juuzai=bee*	*sj-uut-i=jaa*
asa=kara	baN=Ntani	juuzai=bee	sji-u-i=jaa
朝=ABL	晩=TERM	喧嘩=ばかり	する-CONT-SEQ=SFP

朝から晩まで喧嘩ばかりしてね。

4.6.3.3.7 =naga（例示）

=naga は名詞に接続し、接続先の名詞が表す指示対象を例示する。

(4-302) では、=naga が icja「烏賊」に接続し、「薄く切らないと、食べられない」集合の 1 つとして icja「烏賊」を標示している。

(4-302)

icja=naga=wa	*usu-usu=tu*	*k-jaN=nja*
icja=naga=wa	usu-usu=tu	ki-ran-rja
烏賊=EXM=ADD	薄い-RED=CSL	切る-NEG-COND2

烏賊なんかも薄く切らないと、食べられないよ。

kam-a-ra-N=doo=jaa
kam-a-ran-N=doo=jaa
食べる-POT-NEG-IND=SFP=SFP
食べられないよ。

4.6.3.3.8 =tuka（例示）

=tuka は名詞や動詞に接続し、接続先の語が表す指示対象や動作を例示する。

(4-303) では=tuka が接続する動詞*ukitatas「浮き立たす」が、主節で示される「工夫」の例として示されている。

(4-303)	*neebe*	*ukitatas-ju-N=tuka=jaa*	*neebe*	*kufuu*
	neebe	ukitatas-ju-N=tuka=jaa	neebe	kufuu
	少し	浮き立たす-NPST-IND=EXM=SFP	少し	工夫
	少し（字を）浮き立たすとか、少し工夫を			

sjuukjaN=du…
sj-i uk-a-N=du
する-SEQ おく-NEG-IND=FOC
しておかないと‥

4.6.3.3.9 =fudu「〜ほど」

=fudu は副詞や節に接続し、接続先が表す様態や事態が、命題で述べる内容の基準になっていることを表す。なお、=fudu には適当なグロスが見つからなかったため、グロスには日本標準語を記す。

(4-304) では=fudu が副詞 gassaa「それだけ」に接続し、gassaa「それだけ」が指す文脈が、「値打ちがある」と判断する基準適当なグロスが見つからなかったため、日本語訳を記す。

(4-304)	*gassaa=fudu*	*neucji=nu*	*u-N*	*kamisama*
	gassaa=fudu	neucji=nu	u-nu	kamisama
	それだけ=ほど	値打ち=NOM	ある-ADN	神様
	烏賊なんかも薄く切らないと、食べられないよ。			

4.6.3.4 終助詞

終助詞は文末に接続し、モダリティ（文に対する話し手の認識や、聞き手に対する話し手の態度）を表す。

終助詞の一覧は表 4-38 の通りである。それぞれの終助詞の機能については、6 章 3 節「モダリティ」で詳述する。

表 4-38. 終助詞

形式	訳	グロス	モダリティ（意味）
=naa	「〜か？」	YNQ	疑問
=joo	「〜か？」	WHQ	疑問
=kaja	「〜かな？」	Q	疑問
=moo	「〜だよ」	EXM	説明
=gi	「〜よ」	EXM	説明
=jaa	「〜ね」	SFP	伝達態度（確認）
=doo	「〜よ」	SFP	伝達態度（伝達）
=djaa	「〜よ」	SFP	伝達態度（伝達）
=diro	「〜です」	POL	伝達態度（丁寧）
=sja	「〜さ」等	EMPH	伝達態度（自明性）
=gaa	「〜んだよ」等	EMPH	伝達態度（自明性）

4.6.4 副詞

副詞は動詞や形容詞を修飾し、屈折変化しない。副詞は共通の形態特徴を持たないが、一部の副詞は重複 (reduplication) を形態法に持つ。

4.6.4.1 副詞の統語位置

副詞は文の様々な位置に現れ、文全体、動詞、形容詞の要素を修飾する。典型的な副詞は、他の品詞のホストになることはない。ただし一部の副詞は、名詞のように属格の助詞 =nu を取ることが出来る。それぞれの用法は以下の通りである。

(4-305) は、疑問を表す副詞 nuudi「なぜ」が「学校へ行かない」という文全体を修飾し、文全体に疑問の意味を付与している。(4-306) は、量を表す副詞 maNdi「たくさん」が、「(人が) いる」という動詞を修飾している。(4-307) は、程度を表す副詞 sjittai「とても」が「きれい」という形容詞を修飾している。

(4-305)

nuudi	*gakkoo=cji*	*ik-azj-i=joo?*
nuudi	gakkoo=cji	ik-ran-i=joo
なんで	学校=ALL	行く-NEG-Q=WHQ

なんで学校へ行かないの？

(4-306)

zjikoku=nu	*cjuu=wa*	*sjigarit-u-nu*	*cju-Ncja*	*maNdi*	*ut-i*
zjikoku=nu	cjuu=wa	sjigari-u-nu	cjuu-Ncja	maNdi	u-i
地獄=GEN2	人=TOP	痩せる-CONT-ADN	人-PL	たくさん	いる-SEQ

地獄の人は、痩せている人がたくさんいて‥

(4-307)

sjittai	*cjura-sa-nu*	*kwaa=djaa*
sjittai	cjura-sa-nu	kwaa=djaa
とても	きれい-ADJ-ADN	子供=SFP

とても綺麗な子だね。

前述の通り、典型的な副詞は他の品詞のホストにならない。ただし、(4-308) のように量やを表す一部の副詞は、名詞のように属格の助詞=nu を取ることが可能である。

(4-308)

Maa=niti	*maNdi=nu*	*cjuu=nu*	*ugad-a-N*
Maa=niti	maNdi=nu	cjuu=nu	ugam-a-N
そこ=LOC1	たくさん=GEN	人=NOM2	拝む-PST-IND

その場所でたくさんの人が拝んだ。

4.6.4.2 重複

重複形を取る副詞には、（A）オノマトペ（擬音語・擬態語）と（B）形容詞由来の副詞がある。両者には以下の違いがある。まず、語幹を重複した際に、オノマトペは連濁を起こさないが、形容詞由来の副詞は連濁を起こす。また、オノマトペは単独で副詞として機能するが、形容詞由来の副詞は助詞の=tu を伴う。

4.6.4.2.1 オノマトペ

音象徴 (sound symbolism) を用いて音を模写したり、様態を表す語はオノマトペと呼ばれる。オノマトペは典型的に 2 モーラの語基を持ち、それを重複することで語が形成される。撥音を N、長音（同母音の連続）を R、促音（同子音の連続）を Q、N・Q 以外の子音を C、母音を V とすると、主なオノマトペの語基は表 4-39 のように表すことができる。なお、拗音（j）を伴う子音も C で表す。

表 4-39. オノマトペの語幹

語幹	例
CVCV	bira（柔らかい様子）wazji（怒っている様子）
CVN	toN（胸が高鳴る様子）gaN（頭が痛む様子）
CVR	goo（豚の鳴き声）soo（動作が速い様子）
CVQ	cjuc（ヤモリの鳴き声）(※)

（※）cjuccju「チュッチュ」のように実現。

重複法には、(4-309) のように語基全体を繰り返す完全重複 (full reduplication) と、(4-

310) のように一部を繰り返す部分重複 (part reduplication) がある。部分重複は、語基が CVR, CVQ のオノマトペに観察され、部分重複の場合には、zaaza「ザーザー」のように、語基の最初の 1 モーラのみが繰り返される。

(4-309)　完全重複
birabira「柔らかい様子」、wazjiwazji「怒っている様子」、toNtoN「胸が高鳴る様子」、gaNgaN「頭が痛い様子」、googoo「(豚の鳴き声)」、など

(4-310)　部分重複
sooso「動作が速い様子」、hjuuhju「(風の音)」、cjuccju「(ヤモリの鳴き声)」など

なお、語基の最終音節を重音節にすることで、オノマトペを強調することがある。

(4-311)　birabira「柔らかい様子」 > biraabira「とても柔らかい様子」
(4-312)　goNgoN「(咳の音)」> gooNgoN「(激しい咳の音)」

4.6.4.2.2　形容詞由来の副詞

4 章 4 節形容詞形態論で述べた通り、一部の形容詞は語幹を繰り返すことで意味を強調し、副詞的に用いることがある。その際、形態的には (a) 重複された形態素の末母音は長音化する (4-313) (4-313)、(b) 重複された形態素は連濁現象を起こす (4-314) (4-313)、といった特徴が観察される。

(4-313)　naga-sa「長い」> naga-nagaa=tu「とても長く」

(4-314)　kuru-sa「黒い」> kuru-guruu=tu「とても黒く」

(4-315)

hada=wa	*kuru-guruu=tu*	*hjikat-i=gadi*	*u-N*
hada=wa	kuru-kuru=tu	hjikat-i=gadi	u-N
肌=TOP	黒い-RED=QT	光る-SEQ=TERM	いる-IND

肌は黒々と光ってまでいる。

4.7　語類

語を機能類からまとめた分類として「指示語」と「疑問詞」をまとめる。

4.7.1　指示語

人や物、文脈等を指し示す機能を持つ語を「指示語（demonstrative）」と呼ぶ。指示語は、話し手がいる場所や時間、発話文脈点によって指示する内容が異なる点で、直示的（deictic）な性質を持つ。指示語は、形態・意味的に「近称」「中称」「遠称」に分類できる。また、指示対象が疑問の対象である場合は、疑問を表す指示語を用いる（これらについては、4.6.2 節「疑問詞」で述べる）。指示語は、名詞、形容詞、副詞といった品詞をまたいで存在する（表 4-40）。

国頭方言の指示語の体系は、日本語の「コソアド」（佐久間 1936：これ、それ、あれ、等の体系）とほぼ対応している。ただし、中称に u-系統と ga-系統があるなど、コソアドほど形態的規則性があるわけではない。

表 4-40. 指示語の体系

	近称	中称	遠称	疑問
名詞	furi「これ」 fuN「これ／この」	uri「それ」 uN「それ／その」	ari「あれ」 aN「あれ／あの」	uduru「どれ」 uduN「どれ／どの」
連体詞	funu「この」	unu「その」	anu「あの」	
形容詞	haNsja「こんな」	gaNsja「そんな」	agaNsja「あんな」	icjanu「どんな」
副詞	haN「こう」	gaN「そう」	agaN「ああ」	icja「どう」
	haNsji「こうして」	gaNsji「そうして」	agaNsji「ああして」	icjasji「どうして」

4.7.1.1　指示代名詞・指示連体詞

指示代名詞、疑問連体詞が指し示すものは、一般に「現場指示：眼前にあるもの」と「文脈指示：眼前にないもの」に分けられるとされる（久野 1973 等）。

4.7.1.1.1　現場指示用法

現場指示の体系は、現代日本語の体系と対応する。

(a) 話し手に近いものには「近称」（fu-形）を用いる。
(b) 話し手よりも、聞き手に近いものには「中称」（u-形）を用いる。
(c) 話し手からも、聞き手からも遠いものには「遠称」（a-形）を用いる。

話し手が、話し手自身の手元にあるものを指すとき（図 4-2 ）、近称 funu「この」が用いられる (4-316) 。

(4-316)

funu	*koppu*	*fu-sja-N=jaa*
funu	koppu	fu-sja-N=jaa
この	コップ	欲しい-ADJ-IND=SFP

このコップ欲しいなぁ。

図 4-2 話し手の手元にあるものを指すとき

これに対して、話し手が聞き手（撮影者）の持つカメラを指すとき（図 4-3）は、中称 unu「その」が用いられる。

(4-317)

uN	*kamera*	*fu-sja-N=jaa*
uN	kamera	fu-sja-N=jaa
その	カメラ	欲しい-ADJ-IND=SFP

そのカメラ欲しいなぁ。

図 4-3. 聞き手の持つものを指すとき

さらに、話し手からも聞き手からも距離があるものを指すとき（図 4-4）には、遠称 ari「あれ」が用いられる。

(4-318)

ari=du	*jukwa*	*a-e?*
ari=du	jukwa	a-e
あれ=FOC	良い	COP-YNQ

あれが良い？

図 4-4. 話し手からも聞き手からも遠いものを指すとき

4.7.1.1.2　文脈指示用法

文脈指示に関しては、明らかに出来ていない点も多い。現時点では、以下のようにまとめられる。

(a) furi/fuN「これ」, funu「この」は、話し手がそれまでに話した情報を指す。
(b) uri/uN「それ」, unu「その」は、それまでに話に出てきた情報を指す。
(c) ari/aN「あれ」, anu「あの」は、聞き手と話し手が共有している情報を指す。また、話し手が言いにくいことや、言いたいことを忘れてしまったときにも用いる。

(4-319) の談話では、「国盗り」という遊びを説明したのち、それまで話し手が話した内容全体を furi「これ」で指している。

(4-319)	*akikosaN*	*furi=du*	*kunitori*
	akikosaN	furi=du	kunitori
	あきこさん	これ=FOC	国盗り

あきこさん。これ（話した内容）が「国盗り」だよ。

(4-320) (4-321) は、昔のトイレの話をしている最中である。昔は葉っぱでお尻を拭いていた、という話のあと、(4-320) では、話者 TN が、話題になっている葉っぱのことを unu「その」で指している。また、(4-321) では、話者 YK が話し手と聞き手の間で共有された mainugui+gii「尻拭い木」という指示物について ari「あれ」で指している。

(4-320)	*TN*	*unu*	*mainugui+gii=wa*	*hjoozjuNgo=sji*	*nuu=di*	*Ju-N=kaja?*
		unu	mainugui+hjii=wa	hjoozjuNgo=sji	nuu=di	i-ju-N=kaja
		その	尻拭い+木	標準語=INS	何=QT	言う-NPST-IND=Q

その尻拭い木は、標準語で何と言うかな？

(4-321)	*YK*	*ari=wa*	*anuu*	*hamabiwa=dja*	*hamabiwa*	*a-ra-N=kaja?*
		ari=wa	anu	hamabiwa=djaa	hamabiwa	a-ran-N=kaja
		あれ=TOP	FIL	ハマビワ=SFP	ハマビワ	COP-NEG-IND=Q

あれは、あの…ハマビワじゃないかな？

また、ari は言いにくいことや、咄嗟に名前が思い出せないものも指す。(4-322) では、「昔（話題になっている時）には医者も悪かった」という意味で、医者が ari「あれ」だった、という表現をしている。また「手術が出来なくて…」と内容を ari dekiradana「あれが出来なくて」と述べている。これは、手術という単語が咄嗟に出てこなかったために用い

たと考えられる。

(4-322)
~~*unu*~~	*tuki=ni=wa*	*maa=nu*	*sjima=nu*	*isja=nu*	*ari=niti*
~~unu~~	tuki=ni=wa	maa=nu	sjima=nu	isja=nu	ari=niti
~~その~~	時=LOC1=TOP	そこ=GEN	島=GEN	医者=NOM	あれ=LOC2

その時には、ここの島の医者が、あれで（悪くて）

ari	*deki-radana=jaa*	*gaNsji=du*	*koobe=cji*	*izj-a-mu*
ari	deki-radana=jaa	gaNsji=du	koobe=cji	ik-a-mu
あれ	出来る-NEG2	そして=FOC	神戸=ALL	行く-PST-EPI

あれ（手術）出来なくて、だから神戸へ行ったんだよ。

4.7.1.2 指示形容詞

haNsja, gaNsja, agaNsja は連体形で名詞を修飾し (4-323) 、名詞が表すものや人の様子を指示する。指示形容詞は殆ど名詞修飾の位置に現れるため、haNsjanu, gaNsjanu, agaNsjanu という連体詞と捉える可能性もあったが、(a) 一項文の述語になること(4-324), (b) 形容詞に特徴的な-sja を接辞に取っていることから、「形容詞」に分類した[49]。

(4-323)
taru=ga	*haNsja-nu*	*kutu*	*sji-i=joo?*	
taru=ga	haNsja-nu	kutu	sji-i=joo	
誰=NOM	こんな-ADN	事	する-SEQ=WHQ	

誰がこんなことをしたの？

(4-324)
wana	*icjimu*	*haNsja=djaa*
wana	icjimu	haNsja=djaa
1SG	いつも	こんな=SFP

私はいつもこんなだ。

haNsja, gaNsja, agaNsja の使い分けはまだ整理出来ていないが、眼前にあるものの指示(4-323) や話し手自身の描写を haNsja (4-324) 、既に話し手や聞き手が話した内容の指示を gaNsja (4-325) , 第三者の様子の指示や描写を agaNsja (4-326) でするなど、4.6.1 の指示代名詞・指示連体詞の使い分けと関連していると考えられる。また、日本標準語の「こんな」「そんな」「あんな」と同様に、同じく名詞修飾をする funu, unu, anu などと比べて、否

[49] 但し、4.1.3「品詞分類」で形容詞の要件とした、コピュラ動詞*na「～ない」の補語になるかどうかは確かめられていないため、今後の課題である。

定的な感情・評価を伴う用例が多い（(4-323), (4-324), (4-326) など）。

(4-325)　*jarabu=nu*　*<okaju>*　*gaNsja-nu*　*muN*　*kad-i*
jarabu=nu　<okaju>　gaNsja-nu　muN　kam-i
蘇鉄=GEN　お粥　そんな-ADN　もの　食べる-SEQ
蘇鉄のお粥、そんなものを食べて

(4-326)　*ari=wa*　*agaNsja-nu*　*cjuu=du*　*ja-N=tuni*　*<cjikajottewa>*
ari=wa　agaNsja-nu　cjuu=du　ja-N=tuni　<cjikajottewa>
3SG=TOP　あんな-ADN　人=FOC　COP-IND=CSL　近寄っては
あれはあんな人だから、近寄ってはだめだよ。

na-ra-N=doo=jaa
na-ran-N=doo=jaa
なる-NEG-IND=SFP=SFP
ならないよ。

4.7.1.3　指示副詞

指示副詞には、動作の様子を表す haN「こう」, gaN「そう」、agaN「ああ」と、動作の程度を表す haNsji「こんなに」、gaNsji「そんなに」、agaNsji「あんなに」がある。

4.7.1.3.1　様子

haN, gaN, agaN は動詞を修飾し、動作の様子・内容を表す。

(4-327) は、「麦が不作だった」という話の後に、「粟も同様に不作だった」ということを表す文である。haN「こう」が、動詞*na「なる」を修飾し、*na「なる」が表す動作の様子（内容）を表している。

(4-327)　*mata*　*oo=mu*　*haN*　*na-ju-mu=naa=dicji*
mata　oo=mu　haN　na-ju-mu=naa=dicji
また　粟=ADD　こう　なる-NPST-EPI=YNQ=QT
また粟もこうなるのか、と言って…

(4-328) は、会うたびに言うことが変わる人に対する台詞である。gaN「そう」が動詞*i「言う」を修飾し、*i「言う」が表す動作の内容を表している。

(4-328)　*kiNnjuu=wa*　*gaN*　*Juut-a-maz-e?*
kiNnjuu=wa　gaN　i-juta-maz-e
昨日=TOP　そう　言う-PST2-CONF-YNQ
昨日はそう言ったでしょ？

(4-329) は、物が壊れているのを見て言う台詞である。agaN「ああ」が動詞*sji「する」を修飾し、*sji「する」が表す動作の内容を表している。

(4-329)　*taN=ga*　*kicj-i*　*agaN*　*sj-a-N=kaja?*
taN=ga　fu-i　agaN　sji-a-N=kaja
誰=NOM　来る-SEQ　ああ　する-PST-IND=Q
誰が来て、ああしたかな？

4.7.1.3.2　程度

haNsji, gaNsji, agaNsji は、動詞や形容詞を修飾し、動作・状態の程度が甚だしいを表す。

(4-330) は、青年が毎夜娘の元に通ったことを、娘の祖母が評する台詞である。haNsji「こんなに」が動詞*sji「する」を修飾し、*sji「する」が表す動作の程度が甚だしいことを表している。

(4-330)　*haNsji*　*sji-i*　*kuri-ju-nu*　*cjuu=wa*　*u-ra-N=jaa*
haNsji　sji-i　kuri-ju-nu　cjuu=wa　u-ran-N=jaa
こんなに　する-SEQ　くれる-NPST-ADN　人=TOP　いる-NEG-IND=SFP
こんなにしてくれる人はいないね。

(4-331) は、泣いている子供を見て母親が言う台詞である。gaNsji「そんなに」が動詞*nak「泣く」を修飾し、*nak「泣く」が表す動作の程度が甚だしいことを表している。

(4-331)　*umi+gwaa*　*nuudi*　*ura*　*gaNsji*　*nacj-u-i=joo?*
um-i+kwaa　nuudi　ura　gaNsji　nak-u-i=joo
生む-INF+子　なぜ　2SG　そんなに　泣く-CONT-Q=WHQ
我が子よ、なんでそんなに泣いているの？

(4-332) は、自分がかつて見た家について述べた文である。agaNsji「あんなに」が形容詞*kitana「汚い」を修飾し、*kitana「汚い」が表す状態の程度が甚だしいことを表している。

(4-332)

agaNsji	*kitana-sa-nu*	*jaa*	*<hazjimiti>*	*micj-a-N*
agaNsji	kitana-sa-nu	jaa	<hazjimiti>	mi-a-N
あんなに	汚い-ADJ-AND	家	初めて	見る-PST-IND

あんなに汚い家、初めて見た。

なお、haNsji, gaNsji はこうした指示副詞の用法の他に、文頭に現れて文を繋いだり、理由を表すこともある。これらを独立の品詞（いわゆる「接続詞」）として認めるかどうかは、今後検討する必要がある。

4.7.2 疑問詞

疑問文に用いられ、疑問の対象となるもの、人、場所などを表す語を「疑問詞」と呼ぶ。疑問詞も、指示語と同様に名詞、形容詞、副詞といった品詞をまたいで存在する。疑問詞には表 4-41 がある（疑問文について 6.3.1.1.2「疑問のモダリティ」も参照）。

表 4-41. 疑問詞

	疑問詞	疑問の対象
名詞	nuu「何」	物
名詞	taru/taN「誰」	人
名詞	uda「どこ」	場所
名詞	uduru/uduN「どれ」	選択肢
連体詞	icjanu「どんな」	人／もの
名詞／副詞	icji「いつ」	時
副詞	icja「どう」	方法
副詞	nuudi「なぜ」	理由
副詞	icjasji「どうして」	理由

4.7.2.1 疑問代名詞

nuu「何」, taru/taN「誰」, uda「どこ」, uduru「どれ」は、ものや出来事、人、場所、選択肢を疑問の対象として指す時にそれぞれ用いる（4.2.2.3「疑問代名詞」も参照）。

(4-333) では、nuu「何」が名詞述語となり、主語の uri「それ」が指定する内容を尋ねている。

(4-333)

uri=wa	*nuu=jo?*
uri=wa	nuu=joo
それ=TOP	何=WHQ

それは何か？

(4-334) では、taru「誰」が主語となり、*u「いる」が表す動作の主体（人）を尋ねている。

(4-334)

taru=ga	*u-i=joo?*
taru=ga	u-i=joo
誰=NOM	いる-Q=WHQ

誰がいるの？

(4-335) では、uda「どこ」が方向格となり、*ik「行く」が表す動作の行き先（場所）を尋ねている。

(4-335)

uda=cji	*ic-ju-i=joo?*
uda=cji	ik-ju-i=joo
どこ=ALL	行く-NPST-Q=WHQ

どこへ行くの？

uduru/uduN「どれ」は、複数の選択肢がある中で、該当する対象を尋ねる表現である。(4-336) では、uduru/uduN「どれ」が主語となり、*masa「美味しい」が表す状態の経験者（もの）を尋ねている。

(4-336)

uduru/udunu	*ma-sa*	*a-i=joo?*
uduru=nu	ma-sa	a-i=joo
どれ=NOM	美味しい-ADJ	COP-Q=WHQ

どれが美味しいの？

4.7.2.2 疑問連体詞

連体詞の疑問詞には icjanu「どんな」がある。icjanu「どんな」は、修飾先の名詞が表す、ものや人の様子を尋ねる。

(4-337) では、icjanu「どんな」が名詞 sjigutu「仕事」を修飾し、「仕事」（もの）の内容を尋ねている。

(4-337)

naacja	*icjanu*	*sjigutu*	*s-jaabu-N=joo?*
naacja	icjanu	sjigutu	sji-jabu-N=joo
明日	どんな	仕事	する-POL-IND=WHQ

明日はどんな仕事をしますか？

4.7.2.3　疑問副詞

疑問副詞には、時を尋ねる icji「いつ」と、方法を尋ねる icja「どう」、理由を尋ねる nuudi「なぜ」icjasji「どうして」がある。

4.7.2.3.1　時

icji「いつ」は名詞、もしくは副詞として動詞や文全体を修飾し、出来事の時間を尋ねる。(4-338) の icji「いつ」は、格助詞=kara を取っていることから、名詞であることが分かる。一方で、(4-339) の icji「いつ」は文全体を修飾し、「和泊に行く」時間を尋ねている。

(4-338)

icji=bee=kara	*hazjimat-i=joo*	*sjuufuku=wa?*
icji=bee=kara	hazjima-i=joo	sjuufuku=wa
いつ=くらい	始まる-Q=WHQ	修復=TOP

いつくらいから始まるの？修復は。

(4-339)

icji	*wadomari=cji*	*ic-ju-i=joo?*
icji	wadomari=cji	ik-ju-i=joo
いつ	和泊=ALL	行く-NPST-Q=WHQ

いつ和泊へ行くの？

4.7.2.3.2　方法

icja「どう」は動詞を修飾し、方法を尋ねる副詞である。(4-340) では、icja「どう」が動詞*sji「する」を修飾し、*sji「する」が表す動作をどのようにするのか、その方法を尋ねている。

(4-340)

duduku	*s-ju-N*	*tuki=ni=wa*	*icja*	*s-ju-i=joo?*
duduku	sji-ju-nu	tuki=ni=wa	icja	sji-ju-i=joo
ぐずること	する-NPST-AND	時=LOC1=TOP	どう	する-NPST-Q=WHQ

（馬が）嫌がる時にはどうするの？

4.7.2.3.3　理由

nuudi「なぜ」icjasji「どうして」は、動詞や文全体を修飾し、理由を尋ねる副詞である。(4-341) および、(4-342) では、nuudi, icjasji が文全体を修飾し「今日酒を飲もうとする」理由を尋ねている。

(4-341)

nuudi	*gaNsji*	*hjuu=wa*	*saki*	*num-aa=di*	*s-ju-i=joo?*
nuudi	gaNsji	hjuu=wa	saki	num-raa=di	sji-ju-i=joo
なぜ	そうして	今日=TOP	酒	飲む-INT=QT	する-NPST-Q=WHQ

なんで、そうやって今日は、酒を飲もうとするの？

(4-342)

icjasji	*hjuu=wa*	*saki*	*num-aa=di*	*Muut-i=kaja?*
icjasji	hjuu=wa	saki	num-aa=di	Muu-i=kaja
どうして	今日=TOP	酒	飲む-INT=QT	思う-SEQ=Q

どうして今日は、酒を飲もうと思ったの？

5章　統語論

5 章では、国頭方言の文の構造について述べる。まず、5.1 節の導入で概念の整理を行い、5.2 節で語順について述べる。5.3 節で節の主語となる名詞句の構造を示し、5.4 節で述部の構造を述べる。5.5 節で単文の構造について述べ、5.6 節で複文の構造を論じる。

5.1　導入

5.1 節では、本章で用いる基本的な概念について整理する。

まず、5.1.1 で語より大きな統語論上の構成素として「句」「節」「文」を認める。次いで、5.1.2 で、文法関係を定義する上で必要な「動作主」「経験者」「受取人」「被動者」という意味役割を導入し、5.1.3 において「主語」「目的語」「間接目的語」という文法関係のカテゴリーを定義する。5.1.4 では節の内部構造について「項」「述部」「述語句」を定義し、5.1.5 において句の内部構造として「主要部」「補部」「付加部」を定義する。

5.1.1　統語上の単位

1 つ以上の語がまとまり、統語上の単位を成しているものは「構成素（constituent)」と呼ばれる。ある語のまとまりが、構成素を成しているかどうかは「置換テスト（replacement test)」によって確かめられる。すなわち、ある語の連続を一語で置き換えることが出来れば、その語連続は構成素である。

(5-1) の文は、aN cjura-sa-nu cjuu「あの綺麗な人」を、(5-2) のように ari「あれ（彼女)」に代用することが出来る。このため aN cjura-sa-nu cjuu は構成素であると言える。一方で、cjuu=wa takasji=ga という語の連続は、いかなる 1 語にも置き換えられない。このため、この連続は構成素を成していないと考えられる。

(5-1)

aN	*cjura-sa-nu*	*cjuu=wa*	*takasji=ga*	*tuzji=doo=jaa*
aN	cjura-sa-nu	cjuu=wa	takasji=ga	tuzji=doo=jaa
あの	綺麗-ADJ-ADN	人=TOP	たかし=GEN	妻=SFP=SFP

あの綺麗な人は、たかしの奥さんだよ。

(5-2)

ari=wa	*takasji=ga*	*tuzji=doo=jaa*
ari=wa	takasji=ga	tuzji=doo=jaa
あれ=TOP	たかし=GEN	妻=SFP=SFP

あれ（彼女）は、たかしの奥さんだよ。

5.1.1.1 句 (phrase)

一般に「句（phrase)」とは、構成素のうち、主語述語構造を含まないものを指す[50]。例えば、先ほどの aN cjura-sa-nu cjuu という構成素は、述語がない（主語と述部に分化していない）ため、句である。また、この構成素は、ari「あれ」という名詞に置換することが可能なことから、名詞として働く句、すなわち名詞句だと考えられる。

(5-3)
[aN	*cjura-sa-nu*	*cjuu]=wa*	*takasji=ga*	*tuzji=doo=jaa*
aN	cjura-sa-nu	cjuu=wa	takasji=ga	tuzji=doo=jaa
あの	綺麗-ADJ-ADN	人=TOP	たかし=GEN	妻=SFP=SFP

あの綺麗な人は、たかしの奥さんだよ。

(5-4)
[ari]=wa	*takasji=ga*	*tuzji=doo=jaa*
ari=wa	takasji=ga	tuzji=doo=jaa
あれ=TOP	たかし=GEN	妻=SFP=SFP

あれ（彼女）は、たかしの奥さんだよ。

「主語述語構造を含まない」ことが句の要件であるが、名詞句の一部は、節構造を内部に埋め込むため、注意が必要である。

(5-5) の cjimu izji-ju-nu cjuu は、ari「あれ（彼)」などに置換出来ることから、名詞として働く構成素である（これを構成素 A と呼ぶ)。更に cjimu izji-ju-nu は anu「あの」などに置換出来ることから、連体詞として働く構成素である（これを構成素 B と呼ぶ)。このうち、構成素 B は、主語 cjimu「肝」、述語*izji「出る」を含むことから「節」である。そして、この節が、構成素 A の残りの要素 cjuu「人」を修飾している。

構成素 A は、平面的には主語と述語を含むように見えるが、階層構造を考慮すると、主語・述語を含む構成素 B は、あくまで構成素 A の修飾部になっていることが分かる。このため、構成素 A が、主語と述語に分化しているとは考えられない。従って、構成素 A は「名詞節」ではなく「名詞句」と考える。

(5-5)
[[cjimu	*izji-ju-nu]*	*cjuu]=wa*	*jaa=ni=wa*	*u-razj-i=naa?*
cjimu	izji-ju-nu	cjuu=wa	jaa=ni=wa	u-ran-i=naa
肝	出る-NPST-ADN	人=TOP	家=LOC1=TOP	いる-NEG-Q=YNQ

腹が立つ人は、家にはいないの？

[50] A phrase is a syntactic structure that consists of more than one word but lacks the subject-predicate organization of a clause (SIL 2003 http://www-01.sil.org/linguistics/glossaryoflinguisticterms/whatisasemanticrole.htm)

5.1.1.2　節 (clause)

一般に「節（clause）」とは、最低限「述部（predicate）」と、明示的／非明示的な主語を含む語のまとまりを指す[51]。

(5-6) の wacja=ga iku-saat-a-N「私が小さかった」は、主語 wacja「私達」と、述部 ikusaataN「小さかった」を含む節である。この節は、anu「あの」などの連体詞と置換できることから、連体詞として機能する節（連体節）だといえる。

これに対して、kunigami=nu mura「国頭の村」は、語のまとまりではあるものの、述部がない（主語と述部に分化していない）ため、節ではなく句であると言える。

(5-6)	*wacja=ga*	*iku-saat-a-N*	*tuki=wa=joo*	*kunigami=nu*	*mura=wa*
	wacja=ga	iku-sat-a-nu	tuki=wa=joo	kunigami=nu	mura=wa
	1PL=NOM	小さい-ADJ-PST-ADN	時=TOP=SFP	国頭=GEN	集落=TOP
	私達が小さかった時はね、国頭の集落は				

biNboo	*jat-i=joo*
biNboo	ja-i=joo
貧乏	COP-SEQ=SFP
貧乏でね	

5.1.1.3　文 (sentence)

1 つ以上の節から成る発話の単位を「文」と呼ぶ。節を 1 つ含む文を「単文（simple sentence）」、節を 2 つ以上含む文を「複文（complex sentence）」と呼ぶ。

(5-7) の juki=nu tuki-riba「雪が溶ければ」は、主語 juki「雪」、述語*tuki「溶ける」を含む節である。残りの wacja=mu sutu=niti asjib-a-ju-N=doo「私たちも外で遊べるよ」は、wacja「私達」が主語、*asjib「遊ぶ」が述語の節である。前の節は後ろの節の条件を表しており、意味的に従属している。このような 1 以上の節によって形成される発話単位全体を「文」と呼ぶ。

(5-7)	*juki=nu*	*tuki-riba*	*wacja=mu*	*sutu=niti*	*asjib-a-ju-N=doo*
	juki=nu	tuki-riba	wacja=mu	sutu=niti	asjib-ra-ju-N=doo
	雪=NOM	溶ける-COND	1PL=ADD	外=LOC	遊ぶ-POT-NPST-IND=SFP
	雪が溶けたら、私達も外で遊べる。				

[51] A clause is a grammatical unit that: includes, at minimum, a predicate and an explicit or implied subject, and expresses a proposition. (SIL 2003, http://www-01.sil.org/linguistics/glossaryoflinguisticterms/WhatIsAClause.htm)

5.1.2　意味役割 (semantic role)

次に、「文法関係」を定義する上で必要な「意味役割 (semantic role) 」を導入する。「意味役割」とは、述語の動詞と、名詞句によって表される参与者 (participant) の意味的な関係性を指す[52]。意味役割を幾つ定めるかは研究者によって諸説あるが、本稿では、Payne (1997) で「広く受け入れられている意味役割」とされている「動作主 (agent) 」「経験者 (experiencer) 」「受取人 (recipient) 」「被動者 (patient) 」を導入する。

5.1.2.1　動作主 (agent)

典型的な「動作主」とは、「動作を引き起こす有生物」と定義される (Fillmore 1968) [53]。こうした「典型的」な意味に加え、本稿では動作を引き起こす「無生物」も「動作主」と考える。

(5-8) において、述語動詞の*num「飲む」が意味する動作を引き起こしている有生物はʔwaa「豚」である。このため、ʔwaa「豚」の意味役割は「動作主」であると考えられる。

(5-8)

ʔwaa=nu	*mizji*	*nud-u-N*
ʔwaa=nu	mizji	num-u-N
豚=NOM	水	飲む-CONT-IND

豚が水を飲んでいる。

(5-9) の ufu+nami「大波」は無生物であり、意志や意図がない存在である。しかし「大波」は、述語動詞*izji「出る」が意味する動作を引き起こしている指示対象であることから「動作主」と考える。

(5-9)

ufu+nami=nu	*izjit-u-sa*
ufu+nami=nu	izji-u-sa
大きい+波=NOM	出る-CONT-MRT

大波が出ているよ。

5.1.2.2　経験者 (experiencer)

「経験者」は感覚的な印象を受けたり、意図性や状態の変化を伴わない出来事の「場

[52] A semantic role is the underlying relationship that a participant has with the main verb in a clause. (SIL http://www-01.sil.org/linguistics/glossaryoflinguisticterms/WhatIsASemanticRole.htm)

[53] “the typically animate perceived instigator of the action” (49)

(locus)」となる指示対象である[54]。

(5-10) において、述語動詞*jam「痛む」が表す状態が起きている場は cjiburu「頭」である。このため、cjiburu「頭」の意味役割は「経験者」であると考えられる。

(5-10)

cjiburu=nu	*jam-i-N*
cjiburu=nu	jam-i-N
頭=NOM	痛む-NPST-IND

頭が痛む。

5.1.2.3 受取人 (recipient)

典型的な「受取人」とは、「物の移動先となる有生物」である[55]。

(5-11) においては、zjiN「金」という物が sabu「サブ」から akiko「あきこ」に移動している。このため、akiko の意味役割は「受取人」だと考えられる。

(5-11)

sabu=ga	*akiko=ni*	*zjiN*	*kurit-a-N*
sabu=ga	akiko=ni	zjiN	kuri-a-N
サブ=NOM	あきこ=DAT	金	あげる-PST-IND

サブがあきこにお金をあげた。

5.1.2.4 被動者 (patient)

典型的な「被動者」とは、「(動作によって) 物理的、視覚的な変化を被る指示対象」である[56]。しかし、「見る」や「聞く」のように、動作の対象に物理的・視覚的な変化を生じさせない動作も存在する。こうした動作の対象についても「被動者」と考える。

(5-12) においては、述語動詞*furus「殺す」が表す動作によって、micjai=nu cjuu「3 人の人」は物理的な変化（死ぬ）を被っている。このため、micjai=nu cjuu「3 人の人」の意味役割は「被動者」であると考えられる。

(5-12)

nusudu=nu	*micjai=nu*	*cjuu*	*furucj-a-N*
nusudu=nu	micjai=nu	cjuu	furus-a-N
盗人=NOM	3 人=GEN	人	殺す-PST-IND

盗人が 3 人の人を殺した。

---

[54] Normally an EXPERIENCER is an entity that receives a sensory impression, or in some other way is the locus of some event or activity that involves neither volition nor a change of state (50)

[55] A RECIPIENT is the typically animate destination of some moving object (50)

[56] A prototypical PATIENT undergoes a physical, visible change in state (51).

(5-13) の ura「お前」は、(5-12) の例と異なり、動作によって物理的な変化を被っている訳ではないが、述語動詞*mi「見る」が表す動作の客体になっていることから「被動者」と考える。

(5-13)	*taroo=ga*	*juu*	*ura*	*micj-u-N=doo*
	taroo=ga	juu	ura	mi-u-N=doo
	太郎=NOM	じっと	2SG	見る-CONT-IND=SFP

太郎がじっとお前を見ているよ。

5.1.3 文法関係 (Grammatical relations)

「文法関係」とは、名詞句が述語との関係性において担う、統語的な機能を指す。国頭方言は、文法関係として「主語」と「直接目的語」というカテゴリーが認められる。また、形態・意味的基準から「間接目的語」というカテゴリーを定義する。

5.1.3.1 主語 (subject)

節の中には、(a) 尊敬形式の出現をコントロールする、 (b) 再帰代名詞の照応対象になる、という統語的性質を持つ語句が存在する。そのような語句の統語的な性質を「主語」呼ぶ。

5.1.3.1.1.1 尊敬形式の出現をコントロール

尊敬形式の出現をコントロールすることが出来るのは、統語的に「主語」である語句のみである。

(5-14) では、述語動詞*Mee「いらっしゃる」が尊敬体である（普通体は*u「いる」)。尊敬体が現れたのは、文中の名詞句 zjaazja=tu azji「お爺さんとお婆さん」が敬意の対象であるためである。もし、この名詞句の代わりに、敬意の対象ではない名詞句（例えば、utu「弟」など）が用いられた場合、述語動詞に*Mee「いらっしゃる」を用いることは出来ない。このように、尊敬語の出現をコントロールする名詞句を「主語」と呼ぶ。

(5-14)	*awari*	*s-ju-nu*	*zjaazja=tu*	*azji=tu=ga*	*Meet-i*
	awari	sji-ju-nu	zjaazja=tu	azji=tu=ga	Mee-i
	貧乏	する-NPST-ADN	お爺さん=COM	お婆さん=COM=NOM	いる.HON-SEQ

貧乏なお爺さんとお婆さんがいらっしゃって

(5-15) は名詞句が複数登場する文の場合である。(5-15) では、述語動詞が*oisji「召しあがる」という尊敬体を取っている。尊敬体が現れたのは zjaazja「お爺さん」が敬意の対象

（年上）であるためである。この文には zjaazja「お爺さん」と okaju「お粥」の 2 つの名詞句があるが、尊敬体の出現をコントロールしている（つまり主語）のは zjaazja「お爺さん」だと言える。

(5-15)

kiNnjuu	*zjaazja=ga*	*okaju=du*	*ois-juta-N*
kiNnjuu	zjaazja=ga	okaju=du	oisji-juta-N
昨日	お爺さん=NOM	お粥=FOC	食べる.HON-PST2-IND

昨日お爺さんがお粥を召し上がった。

5.1.3.1.1.2 再帰代名詞の照応対象になる

再帰代名詞の照応対象になるのは、統語的に「主語」である語句のみである。

(5-16) には、再帰代名詞 duu「自分」があるが、この duu は nira=nu kamisama「ニラの神様」を指している。このように、再帰代名詞の照応対象になる名詞句を「主語」と呼ぶ。

(5-16)

nira=nu	*kamisama=wa*	*duu*	*cjui=sji*	*izj-a-N*
nira=nu	*kamisama=wa*	*duu*	*cjui=sji*	*ik-a-N*
ニラ=GEN	神様=TOP	REFL	1 人=INS	行く-PST-IND

ニラの神様は自分一人で行った。

(5-17) は他動詞文の場合である。(5-17) には再帰代名詞 duu「自分」がある。文中には、taroo「太郎」と hanako「花子」という名詞句があるが、duu「自分」が指すのは taroo「太郎」である。このため、この文には 2 つの名詞句 taroo「太郎」hanako「花子」が現れているが、再帰代名詞の照応対象になっている（つまり主語）のは、taroo「太郎」だと言える。

(5-17)

taroo=ga	*hanako*	*duu=sji*	*furucj-a-N*
taroo=ga	*hanako*	*duu=sji*	*furus-a-N*
太郎=NOM	花子	REFL=INS	殴る-PST-IND

太郎が花子を自分（＝太郎）で殴った。

5.1.3.1.2 主語の原型

以上のように、(a) 尊敬語の出現をコントールする、(b) 再帰代名詞の照応対象になる、という 2 つの統語的性質から、文法関係として「主語」というカテゴリーを認めることが妥当であると考えられる。角田（1991：第 8 章）等で指摘されている通り、文法関係は、格や意味役割といった形態的・意味的カテゴリーとは明確に区別する必要がある。

例えば、(5-18) では再帰代名詞 duu「自分」の照応対象が taroo「太郎」であることか

ら、taroo「太郎」が主語である。先に述べた(5-14)(5-15)(5-17) の例より、主語には主格助詞=ga/nu が接続しやすい。しかし、(5-18) において主格助詞=nu が接続する rjoori「料理」は、再帰代名詞の照応対象になっていないことからも主語とは認められない。こうしたことから、文法関係と格が必ずしも一致しないことが分かる。

(5-18) *taroo=wa* *rjoori=nu* *duu=sji* *deki-ju-N*
taroo=wa *rjoori=nu* *duu=sji* *deki-ju-N*
太郎=TOP 料理=NOM REFL=INS 出来る-NPST-IND
太郎は料理が自分（＝太郎）で出来る。

また、(5-19) においては、zjaazja「お爺さん」と utu「弟」という 2 つの名詞句が登場するが、主語は尊敬語の出現をコントロールしている zjaazja「お爺さん」である。一方で、同じ文における「意味役割（後述）」を考えた時、述語動詞の zjaazja「お爺さん」と utu「弟」はいずれも「動作主」である。こうしたことから、文法関係と意味役割は必ずしも一致しないことが分かる。

(5-19) *kiNnjuu* *zjaazja=ga* *utu=tu* *okaju=du* *ois-juta-N*
kiNnjuu zjaazja=ga utu=tu okaju=du ois-juta-N
昨日 お爺さん=NOM 弟=COM お粥=FOC 食べる.HON-PST2-IND
昨日お爺さんが弟とお粥を召し上がった。

しかしながら、談話テキストを分析する際に、ある名詞句が主語としての統語的性質を持つかどうかを、常に確認できるとは限らない。主語の統語的性質を直接確認するためには、述語を尊敬形式に変えたり、再帰代名詞を含む述部に入れ替えたりして、文の適正や意味解釈を話者に尋ねる必要があるが、すべてのテキストに対してそれを行うことは不可能である。

このため、テキストの分析においては、典型的な主語（「主語の原型 (prototype) 」）が取る「格」・「意味役割」・「語順」から「主語」を認定する。国頭方言の「主語の原型」は、a, b, c のような性質を持つ。

複数の名詞句がある場合、a, b, c の基準をより満たす名詞句を「主語」であると考える。

(5-20)　主語の原型[57]

a. 主格助詞=ga/=nu を取る
b. 意味役割が「動作主」か「経験者」である
c. 他の名詞句よりも語順が前に来る

(5-21) においては、ʔwaa「豚」と mizji「水」という 2 つの名詞句がある。(5-20)「主語の原型」の基準を用いた時、ʔwaa「豚」は a, b, c の全ての基準を満たしているが、mizji「水」は a, b, c のいずれも満たしていない。このため、この文の主語はʔwaa「豚」であると考えられる。

(5-21)

ʔwaa=nu	*mizji*	*nud-a-N*
ʔwaa=nu	mizji	num-a-N
豚=NOM	水	飲む-PST-IND

豚が水を飲んだ。

5.1.3.2　直接目的語 (direct object)

能動文から受動文へ派生する際に、受動文の主語になるという統語的性質を「直接目的語」とする（以下、単に「目的語」と呼ぶ)。

5.1.3.2.1　受動文の主語

能動文から受動文へ派生する際に、受動文の主語になるというのは「目的語」という統語的性質を持つ語句のみである。

(5-22) は、述語動詞*ama「怒る」が受動接辞を接続していない能動文である。(5-20) の「主語の原型」より seNsee「先生」が主語であると考えられる。一方、同じ命題を表す(5-23) は*ama「怒る」が受動接辞を接続している受動文である。

(5-23) は、「主語の原型」より sabu「サブ」が主語であると考えられる。(5-22)(5-23) を比較すると、能動文 (5-22) において、主語ではなかった名詞句 sabu「サブ」が、受動文 (5-23) で主語になっている。このように、受動文において主語になるような、能動文の名詞句を「目的語」と考える。

[57] 但し、a について、主語が主題化されると、主題助詞=wa が主格助詞に取って代わることに注意が必要である。また c について、主題文は「主題が文頭に来る」という性質があるため（5 章 1 節「情報構造」参照)、主語以外の語句が主題化された場合にはこの基準が使えない。

(5-22)

seNsee=ga	*sabu*	*amat-a-N*
seNsee=ga	sabu	ama-a-N
先生=NOM	サブ	怒る-PST-IND

先生がサブを怒った。

(5-23)

sabu=ga	*seNsee=ni*	*ama-rat-a-N*
sabu=ga	seNsee=ni	ama-ra-a-N
サブ=NOM	先生=DAT	怒る-PASS-PST-IND

サブが先生に怒られた。

5.1.3.2.2 目的語の原型

ここでは「主語の原型」を定めたことと同じ理由から、「典型的な目的語（「目的語の原型」）の性質を整理する。典型的な目的語は、a, b, c のような性質を持つ。談話テキストの分析においては、a, b, c の基準をより満たす名詞句を「目的語」と考える。

(5-24) 目的語の原型

a. 対格（形式的に無標示）を取る
b. 意味役割が「被動者」である
c. 主語よりも後に来る

(5-25) においては、ʔwaa「豚」と mizji「水」という 2 つの名詞句がある。(5-24)「目的語の原型」の基準を用いた時、は a, b, c の全ての基準を満たしているが、ʔwaa「豚」は a, b, c のいずれも満たしていない。この為、この文の目的語は mizji「水」であると考える。

(5-25)

ʔwaa=nu	*mizji*	*nud-a-N*
ʔwaa=nu	mizji	num-a-N
豚=NOM	水	飲む-PST-IND

豚が水を飲んだ。

5.1.3.3 間接目的語 (direct object)

間接目的語というカテゴリーは、統語的な基準のみから定義することが難しい。したがって厳密には、間接目的語という概念は「文法関係」に位置づけられるものではない。しかしながら、間接目的語は、結合価操作（5.5 節「構文論」を参照）の記述に有用な概念であるため、本稿では文法関係に準ずるものとして扱う。

間接目的語は、格関係と文法関係との関連から定義する。(5-26) の通り、(a) 与格助詞 =ni を取り、かつ、(b) 「主語」ではない名詞句を「間接目的語」とする。

(5-26)　間接目的語の定義

a. 与格助詞=ni を取る。

b. 「主語」ではない。

(5-27) には、sabu「サブ」、akiko「あきこ」、zjiN「金」という 3 つの名詞句があるが、このうち、与格助詞（与格の認定については後述）を取っているのは akiko「あきこ」である。また、(5-20)「主格の原型」より sabu「さぶ」が主語だと考えられ、akiko「あきこ」は主語ではない。このため、akiko「あきこ」が間接目的語だと考えられる。

(5-27)	*sabu=ga*	*akiko=ni*	*zjiN*	*kurit-a-N*
	sabu=ga	akiko=ni	zjiN	kuri-a-N
	サブ=NOM	あきこ=DAT	金	あげる-PST-IND

サブがあきこに金をあげた。

一方で、(5-28) は、juta「ユタ」が与格助詞=ni を取っているが、(5-20)「主語の原型」の基準を考慮すると、b「意味役割が動作主か経験者である」、c「語順が前に来る」を満たしていることから「主語」であると考えられる。このため、juta「ユタ」は間接目的語ではない。なお、wunagu=nu cjuu=nu fui「女の人の声」は、主格助詞=nu を取っているものの、(5-24) 「目的語の原型」の基準 (b) 意味役割が「被動者」である、(c) 主語よりも後に来る、から「目的語」であると考えられる。

(5-28)	*juta=ni=wa*	*wunagu=nu*	*cjuu=nu*	*fui=nu*	*cjikat-a-mu=di=doo*
	juta=ni=wa	wunagu=nu	cjuu=nu	fui=nu	cjika-a-mu=di=doo
	ユタ=DAT=TOP	女=GEN	人=GEN	声=NOM	聞こえる-PST-EVD=QUOT=SFP

ユタには女の人の声が聞こえるってよ。

間接目的語の認定において困難なのは、与格と場所格の区別である。通言語的に、与格は「受取人 (receipient) 」を、場所格は指示対象における「位置 (location) 」を表すことが多い。しかし=ni が接続する名詞句には、(5-29) の utee「あんた達」のように、いずれの意味にも取れない例がある。

(5-29)	*akiko=wa*	*utee=ni=du*	*micj-uu-ru*
	akiko=wa	utee=ni=du	mi-u-ru
	あきこ=TOP	2DU=?=FOC	似る-CONT-MSB

あきこはあんた達二人に似ている。

このため、本稿では与格の認定基準として、(5-30) を用いる。

(5-30)　与格の認定基準[58]

a. =ni を取る

b. 名詞句が「場所」や「時」を表さない

(5-29) の例に戻ると、utee「あんた達二人」は、=ni を取り、かつ「場所や時」を表す語でないことから、与格であるとみなす。反対に、(5-31) は jaa「家」が=ni を接続し「場所を表す語であることから、与格ではなく場所格であるとみなす。

(5-31)

akiko=wa	*jaa=ni*	*u-N*
akiko=wa	jaa=ni	u-N
あきこ=TOP	家=LOC	いる-IND

あきこは家にいる。

5.1.4　節の内部構造

5.1.4.1　項 (argument)

節の名詞句のうち、文法関係（主語、目的語、間接目的語）を担うものを「項」と呼ぶ。

(5-32) においては、(5-20)「主語の原型」(5-24)「目的語の原型」より、seNsee「先生」が主語、sabu「サブ」が目的語とみなされる。このため、seNsee「先生」と sabu「サブ」がこの文の「項」である。

(5-32)

seNsee=ga	*sabu*	*amat-a-N*
seNsee=ga	sabu	ama-a-N
先生=NOM	サブ	怒る-PST-IND

先生がサブを怒った。

5.1.4.2　述部 (predicate)

節内の、主語以外の要素を「述部」と呼ぶ。「述部」の中でも、節内に現れる項の数や格関係を決定している語句を「述語句」と呼ぶ。

5.1.3.1 で述べた通り、(5-33) においては seNsee「先生」が主語、sabu「サブ」が目的語である。このため、seNsee「先生」以外の要素 (sabu amat-a-N) は「述部」であると考えら

[58] 日本標準語においては、向格との区別も必要になるが、国頭方言においては、向格は=cji の形式を持つ為、形式的に区別できる。

れる。また、「述部」のうち、項の数を決定しているのは sabu「サブ」ではなく*ama「怒る」なので、amat-a-N が「述語」である。

(5-33)　*seNsee=ga　sabu　amat-a-N*
seNsee=ga　sabu　ama-a-N
先生=NOM　サブ　怒る-PST-IND
先生がサブを怒った。

5.1.5　句の内部構造

句の内部構造を指す語として「主要部」「補部」「付加部」を定義する。

5.1.5.1　主要部 (head)

句の文法範疇や、文法的振る舞いを決定する要素を「主要部 (head) 」と呼ぶ。

(5-34) の aN nacju-nu cjura-sa-nu cjuu「あの泣いている綺麗な人」は、ari「あれ（彼女）」という名詞で代用できるため、名詞句だと考えられる。この句のうち、名詞は cjuu「人」のみなので、この句の主要部は cjuu「人」であると分かる。

(5-34)　*aN　nacj-u-nu　cjura-sa-nu　cjuu=wa　takasji=ga　tuzji=doo=jaa*
aN　nak-u-nu　cjura-sa-nu　cjuu=wa　takasji=ga　tuzji=doo=jaa
あの　泣く-PROG-AND　綺麗-ADJ-AND　人=TOP　たかし=GEN　妻=SFP=SFP
あの泣いている綺麗な人は、たかしの奥さんだよ。

ただし、句の中には同じ品詞の語が連続する場合など、文法範疇だけで主要部を判断することが難しいものもある。その場合は、(a) 主語との呼応関係を担う、(b) 他の構成素の出現や、格関係をコントロールすることを、「主要部」の基準とする[59]。

(a) 主語との呼応関係を担う

主要部を決定するのが難しい例として、名詞（形容詞）とコピュラ動詞から成る句があ

[59] 主要部の定義は以下のようにされ、通言語的に名詞句との数や性などの一致、項の出現のコントロール、呼応 (concord) や統率 (government) といった関係性を決定するとされる。
A head is a constituent of an endocentric construction that, if standing alone, could perform the syntactic function of the whole construction. It may govern the agreement of grammatical categories, such as person and number, or occurrence of other constituents (SIL 2016) . / Headedness also determiners any relationships of concord or government in other parts of the phrase or sentence. (Crystal 2009) / A complement is a phrasal or clausal category which is selected by the head of a phrase. (SIL 2016)

る。コピュラ動詞を含む述部を、名詞（形容詞）述部の一部とするか、動詞述部の一部とするかには議論があるが、国頭方言では主語が焦点助詞を担う時にコピュラ動詞が呼応形式を取ることから、コピュラ動詞を主要部と考え、コピュラ動詞述部文を認める。

(5-35) はの cjuu「人」が主語であり、焦点助詞=du を取っている。述部は形容詞*hamara「うるさい」とコピュラ動詞*a から構成されるが、主語と呼応して係り結び形-ru を取っているのは、コピュラ動詞*a である。このため、述部の主要部はコピュラ動詞だと考える。

(5-35)	*aN*	*cjuu=nu=du*	*hamara-sja*	*a-ru*
	aN	cjuu=nu=du	hamara-sja	a-ru
	あの	人=NOM=FOC	うるさい-ADJ	COP-MSB
	あの人がうるさい。			

(b) 他の構成素の出現を決める

主要部を決定するのが難しいもう一つの例として、2 つの動詞、すなわち動詞連続（serial verb）によって形成される述部がある。この場合には、項の出没をコントロールする要素を主要部と考える。動詞連続には、(a) 1 つ目の動詞が主要部である場合と、(b) 2 つ目の動詞が主要部である場合がある。

(5-36) の文において、kad-i ut-a-N は「食べていた」は動詞句を形成している。文には zjaazja「お爺さん」と kee「粥」という名詞句があるが、(5-20)「主語の原型」、(5-24)「目的語の原型」より zjaazja「おじいさん」が主語、kee「粥」が目的語であると言える。*kam「食べる」*u「いる」の 2 つの動詞のうち、目的語を取ることが出来るのは*kam「食べる」なので、動詞句の主要部は*kam「食べる」だと考える。

(5-36)	*zjaazja=ga*	*kee*	*[kad-i*	*[ut-a-N]$_{VP}$]$_{VP}$*
	zjaazja=ga	kee	kam-i	u-a-N
	お爺さん=NOM	粥	食べる-SEQ	いる-PST-IND
	お爺さんが粥を食べていた。			

一方で、(5-37) では、izj-i muro-ju-N=gi=joo「行ってもらうんだよ」が動詞句を形成している。直前の名詞句 nakaudo「仲人」は、(5-30)「与格の認定基準」(5-26)「間接目的語」の定義より、間接目的語だと考えられる。述部には*ik「行く」と*muro「もらう」の 2 つの動詞があるが、このうち間接目的語を取ることが出来るのは*muro「もらう」である。このため、動詞句の主要部は*muro「もらう」であると考える。

(5-37)　*unu*　*mae=ni*　*[nakaudo=ni*　*izj-i*　*muro-ju-N=gi=joo]*
unu　mee=ni　nakaudo=ni　ik-i　muro-ju-N=gi=joo
その　前=LOC　仲人=DAT　行く-SEQ　もらう-NPST-IND=SFP=SFP
その（ヤーミシの）前に、仲人に行ってもらうんだよ。

5.1.5.2　補部 (complement)

句の主要部ではない部分のうち、句に必須の要素を「補部 (complement) 」と呼ぶ。「補部」には、先に述べた「項」にあたるものと、コピュラ動詞などと用いられる「補語」がある。

5.1.5.2.1　項

5.1.4.1 で述べた通り、文法関係を担う名詞句を「項 (argument) 」と呼ぶ。

(5-38) の述語動詞は*mi「見る」であり、その語彙的意味から、動作主である主語と、動作の被動者である目的語を必要とする。これを担う agu「友達」と、ura「あんた」は項である。

(5-38)　*waN*　*agu=nu*　*juu*　*ura*　*micj-u-N*
waN　agu=nu　juu　ura　mi-u-N
1SG　友達=NOM　よく　2SG　見る-PROG-IND
私の友達が、じっとあんたを見ている。

5.1.5.2.2　補語

述語の主要部を補助し、述語を完成させる語を「補語」と呼ぶ。

本稿においては、具体的に (a) コピュラ動詞の前にくる名詞や形容詞、(b) 動詞連続における主要部ではない動詞を「補語」と呼ぶ。

(5-39) では、hamara-sja a-ru「うるさい」が述語である。主語 anu cjuu「あの人」は焦点助詞を伴っている。*hamara「うるさい」と*a のうち、焦点助詞に呼応して、係り結び形-ru を取っているのはコピュラ動詞*a なので、hamara-sja a-ru の主要部は*a であり、*hamara「うるさい」はコピュラ動詞を補助する補語である。コピュラ述部については 5.4.2.2.2 節「コピュラ述部」で述べる。

(5-39)　*aN*　*cjuu=nu=du*　*hamara-sja*　*a-ru*
aN　cjuu=nu=du　hamara-sja　a-ru
あの　人=NOM=FOC　うるさい-ADJ　COP-MSB
あの人がうるさい。

(5-40) では、kiNnjuu=mu kanozjo=cji deNwa sji-i ut-a-N「昨日も彼女に電話していた」が述部であり、sji-i ut-a-N「していた」が述語句にあたる。直前の deNwa「電話」は、(5-24)「目的語の原型」より目的語であると考えられる。述語句を構成する 2 つの動詞*sji「する」、*u「いる」のうち、目的語を取ることが出来るのは*sji「する」なので、sji-i ut-a-N の主要部は*sji「する」であり、*u「いる」は*sji「する」を補助する補語であると考える。

(5-40)	*waN*	*utu=wa*	*kiNnjuu=mu*	*kanozjo=cji*	*deNwa*	*sji-i*	*ut-a-N*
	waN	utu=wa	kiNnjuu=mu	kanozjo=cji	deNwa	sji-i	u-a-N
	1SG	弟=TOP	昨日=ADD	彼女=DIR	電話	する-SEQ	いる-PST-IND
	私の弟は、昨日も彼女に電話をしていた。						

5.1.5.3 付加部 (adjunct)

句の主要部・補部以外の部分、即ち句に必須ではない要素を「付加部 (adjunct) 」と呼ぶ。

(5-41) では、*kam「食べる」が二項動詞述語であり、動作の主体を担う主語と、動作の被動者である目的語を必要とする。これに対し、kiNnjuu「昨日」という副詞は、動詞句に必須の要素ではなく、省略可能である。このように、節の省略可能な要素を「付加部」と考える。

(5-41)	*kiNnjuu*	*zjaazja=ga*	*kee*	*kad-a-N*
	kiNnjuu	zjaazja=ga	kee	kam-a-N
	昨日	お爺さん=NOM	お粥	食べる-PST-IND
	昨日お爺さんがお粥を食べた。			

5.2　語順

5.2 節では、語、句、節の並ぶ順について述べる。語順は情報構造（6 章 1 節「情報構造」で論じる）によって変わることが知られているが、ここでは「基本語順」、つまり特別な情報構造を被らない場合の語順について述べる。

主語を S, 目的語を O, 動詞を V としたとき、世界の言語の基本語順は 6 つのタイプ（SOV, SVO, VSO, VOS, OVS, OSV）が存在し、中でも SOV, または SVO 言語が全体の殆どを占める[60]。国頭方言は他の日琉諸語と同様、SOV 語順である。

この基本語順は、他の要素の語順もある程度予測することが知られている (word order correlates) 。Greenburg (1963) は、主節の語順と、表 5-1 に示すパラメーターの語順に一定の相関性があることを指摘している。国頭方言における問題の 9 つのパラメーターの語順は、Greenburg (1963) が SOV 言語に分類する言語が示す語順と同じであり、Greenburg (1963) の指摘する相関性が認められる。したがって国頭方言は典型的な SOV 言語だと言える。

表 5-1. 国頭方言の語順（Payne1997:72 を元に作成）

Greenburg (1963)	パラメーター	国頭方言の語順
1	主節	主語－目的語－動詞
3,4	助詞	ホストに後続
2	属格名詞と主要部名詞	属格名詞－主要部名詞
17	主要部名詞と修飾部	修飾部－主要部名詞
24	従属節と主節	従属節－主節
22	比較構文	比較対象－比較標識－形容詞
16	補助動詞	動詞－補助動詞
9	疑問マーカー	文末
12	疑問詞	文頭またはその他
7	接辞	接尾辞優勢

5.2.1　主節の語順

主語を S, 目的語を O, 動詞を V としたとき、国頭方言の基本語順は SOV と表現できる。

自動詞文における語順は SV である。(5-42) は唯一の項である zjaazja「お爺さん」が、動詞*waro「笑う」に先行している。

[60] Tomlin（1986）によると、世界の言語の 44.8%が SOV, 41.76%が SVO, 9.2%が VSO 言語である。

(5-42) *zjaazja=ga* *warot-a-N*
zjaazja=ga waro-a-N
お爺さん=NOM 笑う-PST-IND
お爺さんが笑った。

他動詞文における語順は SOV である。(5-43) は 2 つの項のうち、主語である zjaazja「お爺さん」が、目的語の sjiimuN「吸い物」と他動詞*oisji「召しあがる」に先行している。

(5-43) *zjaazja=ga* *siimuN* *oisj-a-N*
zjaazja=ga siimuN oisji-a-N
お爺さん=NOM 吸い物(ACC) 食べる.HON-PST-IND
お爺さんが吸い物を召し上がった。

5.2.2 助詞の位置

助詞はホストとなる語や節に後続する。(5-44) から、主格の助詞=nu、与格の助詞=ni が、ホストとなる名詞（inu「犬」、akiko「あきこ」）に後続していることが分かる。

(5-44) *inu=nu* *akiko=ni* *hoet-a-N*
inu=nu akiko=ni hoe-a-N
犬=NOM あきこ=DAT 吠える-PST-IND
犬があきこに吠えた。

5.2.3 属格名詞と主要部名詞

属格名詞は主要部名詞に先行する。(5-45) では、属格の助詞=ga が接続する名詞 wacja「私たち」が、主要部の名詞 jaa「家」に先行している。

(5-45) *wacja=ga* *jaa*
wacja=ga jaa
1PL=GEN 家
私たち二人の家

5.2.4 主要部名詞と修飾部

修飾部は主要部名詞に先行する。(5-46) では*u「いる」が連体形をとっているため、Maa=ni unu「そこにいる」が名詞を修飾する従属節だと分かる。修飾部である Maa=ni un-u「そこにいる」は、主要部名詞 Maa「馬」に先行している。

(5-46) *Maa=ni* *u-nu* *Maa*
Maa=ni u-nu Maa
そこ=LOC1 いる-ADN 馬
そこにいる馬

5.2.5 従属節と主節

従属節は主節に先行する。従属節には、連体節、副詞節、補文節、等位節、並列節があるが（5 章 6 節複文構造を参照)、名詞句として主節に埋め込まれる補文節を除いて、従属節は主節に先行する[61]。

(5-47) では、理由の副詞節を形成する助詞=tuni「〜から」以前が従属節であるがるが、この従属節は主節に先行している。

(5-48) は逆接の等位節を形成する動詞語尾-sjiga「〜けど」以前が従属節であるが、この従属節も主節に先行している。

(5-47) *[ucja=wa* *waN* *soot-i* *ik-a-ra-N=tuni]$_{ADV}$*
ucja=wa waN soo-i ik-a-ran-N=tuni
2PL=TOP 1SG 連れる-SEQ 行く-POT-NEG-IND=CSL
あんたたちは私が連れていけないから、

ucja *micjai* *acja=tu* *fudi-ri=jo=jaa*
ucja micjai acja=tu fudi-ri=joo=jaa
2PL 三人 父=COM 育つ-IMP=SFP=SFP
あんたたち三人は、お父さんのところで育つんだよ

(5-48) *[mukasji=wa* *jarabu+gee* *kam-ita-sjiga]* *nama=wa* *zeetaku*
mukasji=wa jarabu+kee kam-juta-sjiga nama=wa zeetaku
昔=TOP 蘇鉄+粥 食べる-PST2-CEX 今=TOP 贅沢
昔は蘇鉄粥を食べていたけれど、今は贅沢に

[61] 補文節は主節の主語位置や目的語位置、動詞の補語位置に、名詞句として埋め込まれる節であるため、主節全体との前後関係について論じることは出来ない。

nat-i *jarabu+gee=wa* *kam-a-N*
na-i jarabu+kee=wa kam-ran-N
なる-SEQ 蘇鉄+粥=TOP 食べる-NEG-IND
なって、蘇鉄粥は食べない。

5.2.6 比較構文

比較構文は、(a) 叙述対象、(b) 比較対象、(c) 比較マーカー（助詞=jooka）、(d) 比較の内容を表す形容詞、によって形成される。比較構文の基本語順は (5-49) の通りである。

(5-49) 叙述対象 比較対象=jooka 形容詞

(5-50) は、waN okaN「私の母」が叙述の対象であり、ottoo「父」が比較対象、=jooka「〜より」が比較のマーカー、duku-sa「元気（だ）」は比較の内容を表す形容詞である。

(5-50) *waN* *okaN=wa* *ottoo=joka* *duku-sa*
waN okaN=wa ottoo=jooka duku-sa
1SG 母=TOP 父=CMP 元気-ADJ
私の母は父よりも元気だ。

5.2.7 補助動詞

補助動詞は本動詞に後続する。

(5-51) は、語彙の意味を担う本動詞*kam と文法的な意味を担う存在動詞*u「いる」の動詞連続で、進行中のアスペクトを表す。本動詞*kam「食べる」が、補助動詞*u「いる」に先行している。

(5-51) *zjaazja=ga* *kee* *kad-i* *ut-a-N*
zjaazja=ga kee kam-i u-a-N
祖父=NOM 粥 食べる-SEQ いる-PST-IND
祖父が粥を食べていた。

5.2.8 疑問マーカー

国頭方言の疑問マーカーは、文末に現れる。(5-52) は、名詞述語の疑問文であり、疑問のマーカーは疑問助詞=naa「か」が担う。=naa は文末に位置している。

(5-52)

uri=wa	*sjoowa*	*saNzjuuneN=be=nu*	*sjasjiN=naa?*
uri=wa	sjoowa	saNzjuuneN=bee=nu	sjasjiN=naa
それ=TOP	昭和	三十年=APPR=GEN	写真=YNQ

それは昭和三十年くらいの写真か？

5.2.9 疑問詞

疑問文は平叙文と語順が変わらない。このため、疑問詞は疑問の対象によって、文頭に立つことも、文中の位置に立つことも可能である。

(5-53) では、文の主語が疑問の対象になっているため、疑問詞 taN「誰」が文頭に立っている。(5-54) では、文の目的語が疑問の対象になっているので、疑問詞 nuu「何」は目的語の位置である文中に現れている。

(5-53)

taN=ga	*u-i=joo?*
taN=ga	u-i=joo
誰=NOM	いる-Q=WHQ

誰がいるの？

(5-54)

akira=ga	*nuu*	*kad-i=joo?*
akira=ga	nuu	kam-i=joo
あきら=NOM	何	食べる-SEQ=WHQ

アキラが何を食べたの？

5.2.10 接辞

接辞には、語根の前に接続する接頭辞、語根の内側に接続する接中辞、語根の後ろに接続する接尾辞がある。国頭方言には、少数の接頭辞が存在するものの、大部分の接辞が接尾辞である。接中辞は存在しない。したがって接尾辞優勢の言語である。接尾辞は動詞に特によく見られ、時制やムードなど様々な文法範疇の標示を担う。

(5-55) の kam-acj-ut-a-N「食べさせていた」は、動詞*kam「食べる」が使役の接辞-ras、進行の接辞-u、過去の接辞-a、直説法の接辞-N を接続している。

(5-55)

Maa=ni	*kusa*	*kam-acj-ut-a-N*
Maa=ni	kusa	kam-ras-u-a-N
馬=DAT	草	食べる-CAUS-CONT-PST-IND

馬に草を食べさせていた。

5.3　名詞句構造

5.3 節では、文の項や主題、格になる名詞句の構造について述べる。5.3.1 で名詞句の基本構造について述べた後、5.3.2 で名詞句の格を標示する格助詞の機能についてまとめる。

なお、文の述語となる名詞句については、5.4 節「述部構造」において取り上げる。

5.3.1　名詞句の基本構造

名詞句（NP）の構造は、(5-56) のように表すことが出来る。修飾部は、連体詞（And)、形容詞（Adj)、拡大名詞句（$_{E}$NP)、連体節（C_{Adn}）が埋める。主要部は名詞が埋める。

(5-57) 格助詞までを含むまとまりを「拡大名詞句」と呼ぶ。

(5-56)　（＋修飾部）主要部
(5-57)　（＋修飾部）主要部＝格助詞

5.3.1.1.1　NP → Adn N

名詞句は、連体詞と名詞から成る。

(5-58) では、修飾部を連体詞 anu「あの」が埋め、主要部の名詞 cjuu「人」を修飾している。

(5-58)

anu	*cjuu*
anu	cjuu
あの	人

あの人

5.3.1.1.2　NP → Adj N

名詞句は、形容詞と名詞から成る。この時形容詞は、融合形式の連体形をとる。

(5-59) では、修飾部を形容詞の連体形 cjura-nu が埋め、主要部の名詞 cjuu「人」を修飾している。

(5-59)

cjura-sa-nu	*cjuu*
cjura-sa-nu	cjuu
きれい	人

きれいな人

5.3.1.1.3　NP → $_{E}$NP N

名詞句は、名詞句と名詞から成る。この時、修飾部を埋める名詞句は、名詞と属格助詞

=ga/nu または共格助詞=tu から成る。

属格助詞=ga/nu が接続する場合には、先行する名詞が後行する名詞を修飾する。(5-60) では、名詞 takasji「タカシ」が、属格助詞=ga「〜の」を伴うことによって、後続する名詞 jaa「家」を修飾し、1 つの名詞句を形成している。

(5-60)

	ama=ni=wa	*[takasji=ga*	*jaa]$_{NP}$=nu*	*a-N*
	ama=ni=wa	takasji=ga	jaa=nu	a-N
	あそこ=LOC1=TOP	たかし=GEN	家=NOM	ある-IND

あそこにはタカシの家がある。

共格助詞=tu が接続する場合には、先行する名詞と後行する名詞が対等に接続される。

(5-61) は、名詞 zjaazja「祖父」が共格助詞=tu「〜と」を伴うことによって、後続する名詞 azji「祖母」と対等に接続され、1 つの名詞句を形成している。なお、共格助詞の場合には、後続する名詞にも等しく=tu が接続することが多い。

(5-61)

	agari=nu	*hoo=ni=wa*	*[zjaazja=tu*	*azji =tu]$_{NP}$=ga*	*Meet-i*
	agari=nu	hoo=ni=wa	zjaazja=tu	azji=tu=ga	Mee-i
	東=GEN	方=LOC1=TOP	祖父=COM	祖母=COM=NOM	いる.HON-SEQ

東の方には、お爺さんとお婆さんがいらっしゃって‥

5.3.1.1.4 NP → C_{Adn} N

名詞句は、連体節と名詞から成り、連体節は名詞に先行する。このとき、連体節の述語動詞は連体形を取る。

(5-62) は連体節の述語動詞*u「いる」が連体形を取り、連体節 Maa=ni u-nu「そこにいる」が、後続する名詞 Maa「馬」を修飾している。

(5-62)

	[Maa=ni	*u-nu]$_{NP}$*	*Maa*
	Maa=ni	u-nu	Maa
	そこ=LOC1	いる-ADN	馬

そこにいる馬

5.3.2 格の種類と機能

「格」はもともと名詞の屈折に関する文法範疇であり、名詞句と文の主要部（述部）との関係を標示する。しかし、国頭方言（または他の日琉諸方言も同様）において名詞句と述部の関係は名詞の屈折ではなく、名詞に後続する助詞によって標示される。このため、本稿では「格」を名詞句と述部の関係性自体を表す用語として用い、以下に格を表す助詞（格助詞）

の記述を行う。

格は、大きく文法格 (grammatical case) と意味格 (semantic case) に分類することが出来る。文法格は、統語関係を表すことを主要な機能とし、意味格はそれ以外の意味的役割を表す (Blake1994:32)。

5.3.2.1 文法格

国頭方言の文法格は表 5-2 の通りである。

主に主語を標示する形式を「主格」、目的語を標示する形式を「対格」、名詞句の修飾を標示する形式を「属格」、間接目的語を標示する形式を「与格」とする。ただし、5.1 節「導入」で述べた通り、主語と主格、目的語と対格は必ずしも 1 対 1 対応ではない。例えば、主格は「動作（能力）の対象」を表すこともある。この場合、「主語の原型」「目的語の原型」から判断すると、その名詞句はむしろ「目的語」に認定される。

表 5-2. 国頭方言の文法格

格	グロス	形式	統語機能	意味機能
主格	NOM	=ga/=nu	主語の標示	(a) 動作主や経験者 (b) 動作（能力）の対象
対格	-	ø	目的語の標示	(a) 被動者
属格	GEN	=ga/=nu	名詞を修飾する名詞の標示	(a) 所有・所属、(b) 場所、位置、(c) 内容、(d) 同格
与格	DAT	=ni	間接目的語の標示	(a) 受取主、(b) 動作を共同で行う相手、(c) 使役文・受動文における動作主、(d) 状態の主体、(e) 比較の基準

5.3.2.1.1 文法格の特徴

まず、類型的な格体系の特徴を述べ、次いで主格と属格の形式選択がどのように説明できるかを述べる。

5.3.2.1.1.1 主格対格型

国頭方言は自動詞文の主語 (S) と他動詞文の動作主 (A) が主格の格助詞=ga/nu を取り、他動詞文の被動作主 (P) はいかなる格助詞も取らない。このため、類型的には、S と A が同じ格標示を取り、P がそれとは異なる格標示（形態的には無標示）を取る「主格対格型言語 (Nominative-Accusative) 」言語だと言える。

典型的な主格対格型言語では、意味的に有標な対格に標示があり、主格が無標示である (Mallinson & Blake 1984) 。しかし、国頭方言はそれとは異なり、主格に標示があり対格

が無標示である。この点において同方言は言語類型的に珍しい特徴を持つ（5 章 5 節「構文論」も参照）。

(5-63) では、自動詞文の主語である wa「私」が、助詞=ga で標示されている。同様に(5-64) の他動詞文の主語 wa「私」も、助詞=ga で標示されている（S=A）。一方、(5-64) の taroo「太郎」は、他動詞文の被動作主だが、形態的に標示されていない。

(5-63)

fattee=cji=wa	*wa=ga*	*ic-ju-N*
fattee=cji=wa	wa=ga	ik-ju-N
畑=ALL=TOP	1SG=NOM	行く-NPST-IND

畑へは私が行く。

(5-64)

wa=ga	*taroo*	*abit-a-N*
wa=ga	taroo	abi-a-N
1SG=NOM	太郎	呼ぶ-PST-IND

私が太郎を呼んだ。

5.3.2.1.1.2 主格と属格の形式選択

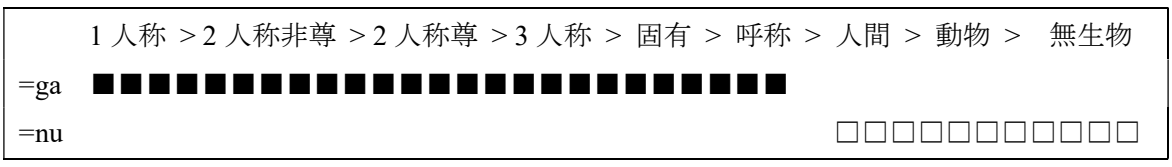
国頭方言の文法格に関するもう一つの特徴として、主格と属格を表す助詞の形式が名詞の意味的特徴によって選択されることがある。主格助詞、および属格助詞の形式には=ga と=nu の 2 つの形式がある。いずれの形式を取るかは、接続先の名詞の意味による。名詞の意味と、主格助詞の形式の対応関係は、4 章 2 節「名詞形態論」4.2.1.1.2.2「複数接辞」で取り上げた「名詞句階層」によって説明することが出来る。

4 章 2 節と同様に、国頭方言の名詞句階層を (5-65) のように仮定すると、=ga を取る名詞は「呼称」以上の階層にある名詞であり、=nu を取る名詞は「人間」以下の階層にある名詞だと説明できる（図 5-1）。ただし、代名詞の中でも双数形（watee「私たち 2 人」など）は例外的で、=ga より=nu を取ることが多い。

(5-65) 国頭方言における名詞句階層

1 人称代名詞 ＞2 人称非尊称代名詞 ＞2 人称尊称代名詞 ＞3 人称代名詞 ＞ 固有名詞 ＞ 呼称名詞 ＞ 人間名詞 ＞ 動物名詞 ＞ 無生物名詞

図 5-1 名詞と主格助詞の形式



まず、主格助詞について、(5-66) では koocjooseNsee「校長先生」という「呼称になり得る名詞」が主語になっており、主格助詞は=ga を取っている。一方で(5-67) では、cjuu「人」という呼称になり得ない人間名詞が主語になっており、主格助詞は=nu を取っている。

(5-66)

kiNnjuu	*koocjooseNsee=ga*	*moocj-a-N=djaa*
kiNnjuu	koocjooseNsee=ga	moo-a-N=djaa
昨日	校長先生=NOM	来る.HON-PST-IND=SFP

昨日、校長先生がいらっしゃったよ。

(5-67)

aru	*cjuu=nu*	*uN*	*isji*	*mucj-i*	*izj-i*	*faNgit-a-N=gi=joo*
aru	cjuu=nu	uN	isji	mut-i	ik-i	faNgi-a-N=gi=joo
ある	人=NOM	その	石	持つ-SEQ	いく-SEQ	捨てる-PST-IND=EVD=SFP

ある人がその石を持って行って捨てたんだよ。

次に属格助詞について、(5-68) では「あきこさん」という固有名詞（呼称になり得る名詞）が修飾名詞であり、属格助詞は=ga を取っている。一方、(5-69) では「人」という抽象的な人間名詞であり、属格助詞は=nu を取っている。

(5-68)

akikosaN=ga	*harazji=wa*	*busabusa=djaa*
akikosaN=ga	harazji=wa	busabusa=djaa
あきこさん=GEN	髪=TOP	ぼさぼさ=SFP

あきこさんの髪はぼさぼさだ。

(5-69)

anu	*cjuu=nu*	*secumee=wa*	*wana*	*cjibu*	*waka-radanat-a-N*
anu	cjuu=nu	secumee=wa	wana	cjibu	waka-radana-a-N
あの	人=GEN	説明=TOP	1SG	少しも	分かる-NEG-PST-IND

あの人の説明は、私は少しも分からなかった。

5.3.2.1.2 主格 =ga/=nu

主格=ga/=nu は、主に主語を標示し、(a) 述語が表す動作の主体 (agent) や状態の経験者 (experiencer)、を表す。更に (b) 述語が表す動作（能力）の被動者 (patient) を表すこともある。日本標準語の「が」の用法と一致する。

(a) 主語の標示

主格の主な機能は、主語を標示し、動作の主体や状態の経験者を表すことである。

(5-70) では、主格=ga が wa「私」に接続している。wa「私」は述語*cjiki「つける」が表す動作（段取りを付ける）の主体である。

(5-71) では、主格=ga が kwaasji「菓子」に接続している。kwaasji「菓子」は述語*a「ある」が表す状態（那覇にある）の経験者である。

(5-70)

wa=ga	*daNdori*	*cjiki-ju-N*
wa=ga	daNdori	cjiki-ju-N
1SG=NOM	段取り	つける-NPST-IND

私が段取りをつける。

(5-71)

nafa=ni=wa	*mizjira-sja=nu*	*kwaasji=nu*	*a-N*
nafa=ni=wa	mizjira-sja=nu	kwaasji=nu	a-N
沖縄=LOC1=TOP	珍しい-ADJ-ADN	菓子=NOM	ある-IND

沖縄には珍しいお菓子がある。

(b) 動作の被動者

上記の機能の他に、主格は述語が表す動作（能力）の被動者を表すことがある。

(5-72) は主格=nu が hoN「本」に接続している。この文の主語は utuzja「いとこ」であり、hoN「本」は述語*jum「読む」が表す動作の被動者を表している

(5-72)

utuzja=wa	*eego=nu*	*hoN=nu*	*jum-a-ju-N*
utuzja=wa	eego=nu	hoN=nu	jum-ra-ju-N
いとこ=TOP	英語=GEN	本=NOM	読む-POT-NPST-IND

いとこは英語の本が読める。

5.3.2.1.3 属格 =ga/=nu

属格=ga/=nu は名詞を修飾する名詞を標示し、(a) 所有・所属 (possessor)、(b) 場所、位置、(c) 内容、(d) 同格等の意味を表す。日本標準語の「の」と用法が一致する。

(a) 所有、所属

ものや身体の一部の所有者や所属先を表す。

(5-73) では、属格=ga が taroo「太郎」に接続し、taroo「太郎」が、それに後続する muN「もの」の所有者であることを表している。

(5-73)　*fuN*　*hama=wa*　*taroo=ga*　*muN=kaja*
fuN　hama=wa　taroo=ga　muN=kaja
この　鎌=TOP　太郎=GEN　もの=Q
この鎌は太郎のものかな？

(b) 場所・位置

場所や位置の基準を表す。

(5-74) では、属格=nu が faku「箱」に接続し、faku「箱」が、それに後続する「中」の基準となる位置であることを表している。

(5-74)　*faku=nu*　*naa=ni*　*maNzjuu=wa*　*ikucji*　*a-N=kaja*
faku=nu　naa=ni　maNzjuu=wa　ikucji　a-N=kaja
箱=GEN　中=LOC1　饅頭=TOP　いくつ　ある-IND=Q
箱の中に饅頭はいくつあるかな？

(c) 内容

内容を表す。

(5-75) では、属格=nuがeego「英語」に接続し、eego「英語」が、それに後続するhoN「本」の内容であることを表している。

(5-75)　*utuzja=wa*　*eego=nu*　*hoN=nu*　*jum-a-ju-N*
utuzja=wa　eego=nu　hoN=nu　jum-ra-ju-N
いとこ=TOP　英語=GEN　本=NOM　読む-POT-NPST-IND
いとこは英語の本が読める。

(d) 同格の相手

同格（同じ指示対象を言い換えた）の相手を表す。

(5-76) では、属格=nu が utu「弟」に接続し、utu「弟」が、それに後続する saburoo「三郎」と同じ指示対象であることを表している。

(5-76)　*zjiroo=wa*　*utu=nu*　*saburoo=tu*　*juuzai*　*sj-a-N*
ziroo=wa　utu=nu　saburoo=tu　juuzai　sj-a-N
次郎=TOP　弟=GEN　三郎=COM　喧嘩　する-PST-IND
次郎は弟の三郎と喧嘩した。

5.3.2.1.4 与格 =ni

与格=ni は、間接目的語を標示し、(a) 物や情報の受取主 (recipient)、(b) 動作を共同で行う相手、(c) 使役文・受動文における動作主、(d) 状態の主体、(e) 比較の基準、を表す。日本標準語の与格の「に」と用法が一致する。

(a) 受取主

「くれる／あげる」など授受を表す動詞や、「教える」「話す」「言う」など情報のやり取りを表す動詞を述語とする文において、物や情報の受取主を表す。

(5-77) では、=ni が waN「私」に接続し、sabacji「櫛」の受取主であることを表している。(5-78) は=ni が ura「あんた」に接続し、wa=ga sasakisaN=kara cjicj-a-nu muN「私が佐々木さんから聞いたもの」という情報の受取主であることを表している。

(5-77)	*zjaazja=ga*	*sabacji*	*waN=ni*	*kurit-a-N*
	zjaazja=ga	sabacji	waN=ni	kuri-a-N
	祖父=NOM	櫛	1SG=DAT	くれる-PST-IND
	祖父が櫛を私にくれた。			

(5-78)	*wa=ga*	*sasakisaN=kara*	*cjicj-a-nu*	*muN*	*ura=ni*
	wa=ga	sasakisaN=kara	cjik-a-nu	muN	ura=ni
	1PL=NOM	佐々木さん=ABL	聞く-PST-ADN	もの	2SG=DAT
	私が佐々木さんから聞いたものを、あんたに				

hata-ju-N=tu	*macj-u-ri=joo*
hata-ju-N=tu	macj-u-ri=joo
教える-NPST-IND=CSL	待つ-PROG-IMP=SFP
教えるから待っていてね。	

(b) 共同動作の相手

「会う」「相談する」など、複数の人によって成立する動作を表す述語動詞と用いて、共同で動作を行う相手を表す。

(5-79) では、=ni が sasakisaN「佐々木さん」に接続し、sasakisaN「佐々木さん」が述語 *oo「会う」が表す動作の相手であることを表している。

(5-79)　*tookjoo=niti*　*sasakisaN=ni*　*oo-ju-nu*　*baa=naa*　*?*
tookjoo=niti　sasakisaN=ni　oo-ju-nu　baa=naa
東京=LOC2　佐々木さん=DAT　会う-NPST-ADN　こと=YNQ
東京で佐々木さんに会うということか？

(c) 使役文、受動文おける動作主

使役文、受動文における動作主を表す。

(5-80) は、述語動詞*cuku「作る」が使役接辞-ras を取る使役文である。=ni が tuzji「妻」に接続し、tuzji「妻」が、述語動詞*cuku「作る」が表す動作の動作主であることを表している。なお、「妻が夕飯を作る」という動作全体を引き起こす使役主は、主格で標示される wa「私」である。

(5-81) の連体節（[ ] で標示）は、述語動詞*kam「食べる」が受動接辞-ra を取る受動文である。この文では、=ni が ucja「あんた達」に接続し、ucja「あんた達」が、述語動詞*kam「食べる」が表す動作の動作主であることを表している。

(5-80)　*wa=ga*　*tuzji=ni*　*jumugee*　*cuku-racj-a-N*
wa=ga　tuzji=ni　jumugee　cuku-ras-a-N
1SG=NOM　妻=DAT　夕飯　作る-CAUS-PST-IND
私が妻に夕飯を作らせた。

(5-81)　*[muzji=mu*　*umu=mu*　*ucja=ni*　*kam-a-ju-nu]*　*tame=du*
muzji=mu　umu=mu　ucja=ni　kam-ra-ju-nu　tame=du
麦=ADD　芋=ADD　2PL=DAT　食べる-POT-NPST-ADN　ため=FOC
麦も芋も、あんた達に食べられるために、

uudoo　*nat-i*　*ic-ju-N=doo=jaa*
uudoo　na-i　ik-ju-N=doo=jaa
大きく　なる-SEQ　いく-NPST-IND=SFP=SFP
大きくなっていくんだよ。

(d) 能力の主体

能力を表す述語動詞と共に用いて、能力を持つ主体を表す。

(5-82) では=ni が ura「あんた」に接続し、ura「あんた」が、述語動詞*deki「（理解）できない」という能力の主体であることを表している。

(5-82)　*cjibu*　*ura=ni=wa*　*rikai*　*dekit-u-ra-N*
cjibu　ura=ni=wa　rikai　deki-u-ran-N
ちっとも　2SG=DAT=TOP　理解　出来る-PROG-NEG-IND
ちっともあんたには理解出来ていない。

(e) 比較の基準

比較や異同の基準を表す。

(5-83) では、=ni が ama「母」に接続し、ama「母」が、述語動詞*mi「似ている」が表す状態の比較の基準になっていることを表している。

(5-83)　*hanako=wa*　*cjira=nu*　*ama=ni*　*juu*　*micj-u-N*
hanako=wa　cjira=nu　ama=ni　juu　mic-u-N
花子=TOP　顔=NOM　母=DAT　よく　似る-CONT-IND
花子は顔が母によく似ている。

(f) 変化の結果

変化の結果を表す。但し、国頭方言では無標示（対格）で変化の結果を表すことの方が多い。

(5-84) では、=ni が seNsee「先生」に接続し、述語動詞*na「なる」が表す変化であることを表している。但し、前述の通り、*na「なる」は無標示の名詞を取ることの方が多い。(5-85) は述語動詞が、変化を表す*na「なる」であるが、名詞は無標示（対格）形である。

(5-84)　*fuzu*　*utuzja=nu*　*cjuugakkoo=nu*　*seNsee=ni*　*nat-a-N*
fuzu　utuzja=nu　cjuugakkoo=nu　seNsee=ni　na-a-N
去年　いとこ=NOM　中学校=GEN　先生=LOC1　なる-PST-IND
去年、いとこが中学校の先生になった。

(5-85)　*waN*　*tuzji*　*nat-i*　*kuri-ri*
waN　tuzji　na-i　kuri-ri
1SG　妻　なる-SEQ　くれる-IMP
私の妻になって下さい。

5.3.2.2　意味格

次に、他の語との意味的な関係を示す意味格について述べる。意味格の形式は表 5-3 の通りである。

日本標準語と比較した時、具格の=sji、場所格の=niti、向格の=cji、奪格の=kara が持つ

意味範囲に違いが見られる。

表 5-3. 意味格の形式

格	グロス	形式	訳	意味機能
具格	INS	=sji	～で	(a) 手段・道具、(b) 材料、(c) 原因・理由、(d) 数量・部分量、(e) 動作の主体、(f) 事態の成立領域、(g) 時間、(h) 動作主の状態
共格	COM	=tu	～と	(a) 行為を一緒に行う相手、(b) 比較の基準、(c) 名詞の接続
比較格	CMP	=jooka	～より	比較の基準
場所格 1	LOC1	=ni	～に	(a) 状態の場所、(b) 事態が生じる時
場所格 2	LOC2	=niti	～で	動作の場所
向格	ALL	=cji	～へ	(a) 移動の方向、(b) 行為の方向
奪格	ABL	=kara	～から	(a) 動作の起点、(b) 範囲や期間の起点、(c) 物や情報の発信元、(d) 移動の経路
終局格	TERM	=Ntani/=Ntabe/=madi	～まで	時間や場所の終点

5.3.2.2.1 具格 =sji

具格助詞=sjiは、(a) 手段・道具、(b) 材料、(c) 原因・理由、(d) 数量、部分量、(e) 動作の主体、(f) 事態の成立にかかる時間、(g) 事態が成立する領域、(h) 動作主の状態、の意味を表す。

日本標準語の「で」と用法が近いが、日本標準語の「で」が持つ「動作の場所（例：公園で遊んだ)」という用法は、=sjiではなく=nitiが担う。それぞれの用法の具体例を以下に挙げる。

(a) 手段・道具

移動の手段や、動作に用いる道具を標示する。ここで言う「道具」は、言語などの抽象的な道具も含む。

(5-86) では、=sjiがhjini「船」に接続し、hjini「船」が述語動詞*tabi+tat「旅立つ」が表す動作の手段であることを表している。

(5-87) では、=sjiがeNpicu「鉛筆」に接続し、eNpicu「鉛筆」が述語動詞*hak「(字を）書く」が表す動作の道具であることを表している。

(5-86)

hjini=sji=du	*erabu=kara*	*tabi+dacj-a-N*
hjini=sji=du	erabu=kara	tabi+tat-a-N
船=INS=FOC	沖永良部=ABL	旅+立つ-PST-IND

船で沖永良部から旅立った。

(5-87)

eNpicu=sji	*zjii*	*hac-ju-N*
eNpicu=sji	zjii	hak-ju-N
鉛筆=INS	字	書く-NPS-IND

鉛筆で字を書く。

(b) 材料

材料を表す。

(5-88) では、=sjiがhabi「紙」に接続し、habi「紙」が述語動詞*cuku「(家を) 作る」が表す動作の材料であることを表している。

(5-88)

habi=sji	*jaa*	*cuku-ju-N*
habi=sji	jaa	cuku-ju-N
紙=INS	家	作る-NPST-IND

紙で家を作った。

(c) 原因・理由

原因や理由を表す。

(5-89) では、=sjiがbjooki「病気」に接続し、bjooki「病気」が述語動詞*jasum「(学校を) 休む」が表す動作の原因であることを表している。

(5-89)

bjooki=sji	*gakkoo*	*jasud-a-N*
bjooki=sji	gakkoo	jasum-a-N
病気=INS	学校	休む-PST-IND

病気で学校を休んだ。

(d) 動作主の人数

動作主の人数を表す。(5-90) では、=sjiがcjui「1人」に接続し、cjui「1人」が、述語動詞*sji「(畑仕事を) する」が表す動作の、動作主の人数を表している。

(5-90)

cjui=sji	*fattee+sjigutu*	*sj-a-N*
cjui=sji	fattee + sjigutu	sji-a-N
1 人=INS	畑+仕事	する-PST-IND

1 人で畑仕事をした。

(e) 動作主

動作の主体を表す。(5-91) では、=sjiがduu「自分」に接続し、duu「自分」が述語動詞*oisji「（お粥を）召し上がる」の動作主であることを表している。

(5-91)

zjaazja=wa	*duu=sji*	*o-kaju*	*oisj-a-N=doo*
zjaazja=wa	duu=sji	o-kaju	ois-a-N=doo
祖父=TOP	REFL=INS	HON-粥	食べる.HON-PST-IND=SFP

祖父は自分でお粥を召し上がった。

(f) 事態の成立にかかる量

事態が成立するのにかかる量を表す。(5-92) では、=sjiがicjineN「1年」に接続し、述部が表す事態「英語が話せる」が成立するにあたってかかる時間量を表している。

(5-92)

icjineN=sji	*eegp*	*hanas-a-ju-N=djaa*	
icjineN=sji	eego	hanas-ra-ju-N=djaa	
1 年=INS	英語	話す-POT-NPST-IND=SFP	

1 年で英語を話せるよ。

(5-93) の副詞節（[ ]で標示）では、=sjiがgassaa「それだけ」に接続し、gassaa「それだけ」が、述部が表す事態「（私が）足りる」が成立するのにかかる量であることを表している。

(5-93)

[gassaa=sji	*ta-ju-N=tuni]*	*naa*	*abasaba*	*waN=ni*	
gassaa=sji	ta-ju-N=tuni	naa	abasaba	waN=ni	
それだけ=INS	足りる-NPST	もう	たくさん	1SG=DAT	

それだけで足りるから、もうたくさん私に

kuri+gurinaN=doo
kuri+gurinaN=doo
くれる+必要ない=SFP
くれる必要はないよ。

(g) 事態が成立する領域

事態が成立するの領域を表す。

(5-94) では、=sjiがnihoN「日本」に接続し、nihoN「日本」が、事態「一番高い山が富士山である」という事態が成立する場所領域であることを表している。

(5-95) では、=sjiがnaacjaa「明日」に接続し、asjita「明日」が、事態「電話をするのが良い」を成立させる時間領域であることを表している。

(5-94)

nihoN=sji	*icjibaN*	*taka-sa-nu*	*jama=wa*	*huzjisaN=djaa*
nihoN=sji	icjibaN	taka-sa-nu	jama=wa	huzjisaN=djaa
日本=INS	一番	高い-ADJ-ADN	山=TOP	富士山=SFP

日本で一番高い山は富士山だ。

(5-95)

deNwa=wa	*naacjaa=sji*	*jukwa-N=djaa*
deNwa=wa	naacja=sji	jukwa-N=djaa
電話=TOP	明日=INS	良い-IND=SFP

電話は明日で良いよ。

(h) 動作主の状態

動作主の状態を表す。

(5-96) では、=sjiがfadasji「裸足」に接続し、fadasji「裸足」が、述語動詞*sji「(駆けっこを）する」が表す動作をしている際の、動作主の状態であったことを表している。

(5-96)

fadasji=sji	*saiuduja*	*sj-a-N*
fadasji=sji	saiuduja	sj-a-N
裸足=INS	走ること	する-PST-IND

裸足で走った。

5.3.2.2.2 共格 =tu

共格助詞=tu は、(a) 行為を一緒に行う相手、(b) 比較判断の基準、を表す。また、(c) 2つ以上の名詞を接続するという文法機能も持つ。日本標準語の「と」と用法が一致する。

(a) 行為を一緒に行う相手

行為を一緒に行う相手を表す。(5-97) では=tu が kwaa「子供」に接続し、kwaa「子供」が、述語動詞*ik「(会いに）行く」という動作を共に行う人であることを表している。

(5-97)　*akemi=wa*　*utee=tu*　*uta-i+bu-sja-mu=di=doo*
akemi=wa　utee=tu　uto-i+bu-sja-mu=di=doo
あけみ=TOP　2SG=COM　歌う-INF+したい-ADJ-REP=QT=SFP
あけみはあんた達二人と歌いたいってよ。

(b) 比較の基準

異同や比較を判断する基準を表す。(5-98) では=tuはinu+ʔmjaa「犬猫」に接続し、inu+ʔmjaa「犬猫」が、述語jii=nu muN「同じ」が表す比較の基準であることを表している。

(5-98)　*kad-i*　*nibu-ju-nu*　*daki*　*ja-riba*　*inu+ʔmjaa=tu*
kam-i　nibu-ju-nu　daki　ja-riba　inu+ʔmjaa=tu
食べる-SEQ　眠る-NPST-ADN　だけ　COP-COND1　犬+猫=COM
食べて眠るだけなら、犬や猫と

jii=nu　*muN*
jii=nu　muN
同じ=GEN　もの
と同じだ。

(c) 名詞の接続

=tuは上記のような意味を表すほかに、2つ以上の名詞を接続する統語的な機能がある。

(5-99) では、=tuがkazuko「かずこ」に接続し、kazuko「かずこ」と、後続するhanako「花子」を接続し、1つの名詞句を形成している。

(5-99)　*[kazuko=tu*　*hanako]=wa*　*agu=djaa*
kazuko=tu　hanako=wa　agu=djaa
和子=COM　花子=TOP　友達=SFP
和子と花子は友達だ。

5.3.2.2.3　比較格 =jooka

比較格=jooka は比較の基準を表す。日本標準語の「より」と用法が一致する。

(5-100) では、=jooka が hjuu「今日」に接続し、hjuu「今日」が、述語句 cjuu-sa at-a-N「(昨日は風が) 強かった」があらわす事態の、比較の基準を表している。

(5-100)

kiNnjuu=wa	*hjuu=joka*	*hazji=nu*	*cjuu-sa*	*at-a-N*
kiNnjuu=wa	hjuu=jooka	hazji=nu	cjuu-sa	a-a-N
昨日=TOP	今日=CMP	風=NOM	強い-ADJ	ある-PST-IND

昨日は今日より風が強かった。

5.3.2.2.4 場所格 =ni

場所格=ni は、(a) 状態の場所、(b) 事態が生じる時、を表す。

日本標準語の「に」の一部と用法が重なるが、「に」が担う幾つかの意味を=ni は持たない。まず、「に」が担う「移動の着点（例：沖縄に行く）」「動作の対象（例：犬が子供に吠える）」は、向格=cji が担う。次に「に」が担う「動作の目的（例：買い物に行く）」は、主格=ga が担う。最後に、「に」が担う「物や情報の発信元」（例：このニュースは花子に聞いた）は奪格=kara が担う。

(a) 状態の場所

人や物、動物の、状態が成立している場所を表す。

(5-101) では=ni が jama「山」に接続し、jama「山」が、述語動詞*u「（猪が）いる」が表す状態が成立している場所であることを表している。

(5-101)

anu	*jama=ni=wa*	*inusisi=nu*	*u-mu=di*	*jussaa*
anu	jama=ni=wa	inusisi=nu	u-mu=di	i-ju-saa
あの	山=LOC1=TOP	猪=NOM	いる-EMPH=QUOT	言う-NPST-EVD

あの山には猪がいると言うよ。

(b) 事態が起きる時

事態が起きる時を表す。

(5-102) では、=niがtuki「（祝いの）時」に接続し、tuki「（祝いの）時」が、事態「お婆さんまで踊った」という事態が起きた時であることを表している。

(5-102)

jee=nu	*tuki=ni=wa*	*azji=gadi*	*wudut-a-N*
jee=nu	tuki=ni=wa	azji=gadi	wudu-a-N
祝い=GEN	時=LOC1=TOP	お婆さん=まで	踊る-PST-IND

祝いの時には、おばあさんまで踊った。

5.3.2.2.5 場所格 =niti

場所格=niti は、動作の場所を表す。

(5-103) では、=niti が micji「道」に接続し、micji「道」が、述語動詞*oo「（学校の先生

に）会う」という動作が行われた場所であることを表している。

(5-103)

micji=niti	*gakkoo=nu*	*seNsee=ni*	*oot-a-N*
micji=niti	gakkoo=nu	seNsee=ni	oo-a-N
道=LOC2	学校=GEN	先生=DAT	会う-PST-IND

道で学校の先生に会った。

5.3.2.2.6 向格 =cji

向格=cji は、(a) 移動の方向、(b) 行為の方向を表す。

(a) 移動の方向

移動の方向を表す。

(5-104) では、=cji が fattee「畑」に接続し、fattee「畑」が、述語動詞*ik「行く」が表す動作（移動）の方向であることを表している。

(5-104)

ura	*fattee=cji*	*ik-i*
ura	fattee=cji	ik-ri
2SG	畑=ALL	行く-IMP

あんたは畑に行け。

(b) 行為の方向

行為の方向を表す。

(5-105) では、=cjiがhanako「花子」に接続し、hanako「花子」が、述語動詞*fui「(犬が)吠える」という動作が向かう方向であることを表している。

(5-105)

inu=ga	*hanako=cji*	*fuit-a-N*
inu=ga	hanako=cji	fui-a-N
犬=NOM	花子=ALL	吠える-PST-IND

犬が花子に吠えた。

5.3.2.2.7 奪格 =kara

奪格=karaは、(a) 動作の起点、(b) 範囲や期間の起点、(c) 物や情報の発信元、(d) 移動の経路、を表す。(a), (b), (c) は日本標準語の「から」とも重なる用法であるが、(d) は日本標準語の「を」が担う用法である。

(a) 動作の起点

動作の起点を表す。

(5-106) では、=karaがtookjoo「東京」に接続し、tookjoo「東京」が、述語動詞*ku「(戻って）来る」が表す動作の起点であることを表している。

(5-106)

maga=wa	*icji*	*tookjoo=kara*	*mudut-i*	*c-ju-i=joo*
maga=wa	icji	tookjoo=kara	mudu-i	c-ju-i=joo
孫=TOP	いつ	東京=ABL	帰る-SEQ	来る-NPST-Q=Q

孫はいつ東京から帰ってくるの？

(b) 範囲や期間の起点

範囲や期間の起点を表す。

(5-107) では、=karaがfuzu「去年」に接続し、fuzu「去年」が、事態「東京にいる」が成立する期間の起点であることを表している。

(5-107)

maga=nu	*fuzu=kara*	*tookjoo=ni*	*uN*
maga=nu	fuzu=kara	tookjoo=ni	u-N
孫=NOM	去年=ABL	東京=LOC1	いる-IND

孫は去年から東京にいる。

(c) 物や情報の発信元

物や情報の発信元を表す。

(5-108) では、=karaがsasakisaN「佐々木さん」に接続し、sasakisaN「佐々木さん」が、述語動詞*cjik「聞く」が表す動作の、情報の発信元であることを表している。

(5-108)

wa=ga	*sasakisaN=kara*	*cjicj-a-nu*	*muN*	*ura=ni*
wa=ga	sasakisaN=kara	cjik-a-nu	muN	ura=ni
1PL=NOM	佐々木さん=ABL	聞く-PST-ADN	もの	2SG=DAT

私が佐々木さんから聞いたことを、あんたに

hata-ju-N=tu	*macj-u-ri=joo*
hata-ju-N=tu	macj-u-ri=joo
教える-NPST-IND=CSL	待つ-CONT-IMP=SFP

教えるから待っていてね。

(d) 移動の経路

移動の経路を表す。(5-109) では、=karaがmaNnaka「真ん中」に接続し、maNnaka「真ん中」が、述語動詞*ak「歩く」が表す動作（移動）の経路であることを表している。

(5-109)

micji=nu	*maNnaka=kara*	*ak-una=joo*
micji=nu	maNnaka=kara	ak-runa=joo
道=GEN	真ん中=ABL	歩く-PROH=SFP

道の真ん中を歩くなよ。

5.3.2.2.8 終局格 =Ntani / =Ntabe / =madi

動作を行う、時間や場所の終点を表す。日本標準語の「まで」の用法と一致する。

(5-110) では、=Ntabe が jozji「4 時」に接続し、jozji「4 時」が、述語動詞*mat「（駅で）待つ」が表す動作を行う、時間の終点であることを表している。

(5-111) では、=Ntabe が jaa「家」に接続し、jaa「家」が、述語動詞*ik「（荷物を担いで）行く」が表す動作を行う、場所の終点であることを表している。

(5-110)

jozji=Ntabe/Ntani	*eki=niti*	*macj-u-ri=joo*
jozji=Ntane/Ntani	eki=niti	mat-u-ri=joo
4 時=TERM	駅=LOC2	待つ-CONT-IMP=SFP

4 時まで駅で待っていてね。

(5-111)

zjiroo	*fuN*	*nimucu*	*ja=Ntabe*	*hatamit-i*	*ik-i=joo*
zjiroo	fuN	nimucu	ja=Ntabe	hatami-i	ik-i=joo
次郎	この	荷物	家=TERM	担ぐ-SEQ	行く-IMP=SFP

次郎、この荷物を家まで担いで行けよ。

5.4　述部構造

5.4 節では、述部の構造について述べる。述部は、名詞述部、動詞述部、形容詞述部の 3 種類に分類できる。

5.4.1　名詞述部

主要部が名詞である述部を、名詞述部と呼ぶ。名詞述部の構造は (5-112) のように表すことが出来る。主要部の名詞句には随意的に終助詞が後接する。

(5-112)　名詞句（＋終助詞）

主語の名詞句を A、述語の名詞句を B とした時、文は、(a) A と B が一致すること（指定）、(b) A の属性が B であること（措定）のいずれかを表す。

(5-113) は指定の一例であり、主語である furi「これ」と、述語の megane「眼鏡」が同じものである（一致する）ことを表している。
(5-114) は措定の一例であり、主語である aN cjuu「あの人」が、述語の seNsee「先生」というカテゴリーに属することを表している。

(5-113)

furi＝wa	*megane=djaa*
furi=wa	megane=djaa
これ=TOP	眼鏡=SFP

これは眼鏡（だ）よ。

(5-114)

aN	*cjuu=wa*	*seNsee=doo*
aN	cjuu=wa	seNsee=doo
あの	人=TOP	先生=SFP

あの人は先生だよ。

5.4.2　動詞述部

動詞述部の構造は、(5-115) のように表すことが出来る。項の数は、述語の動詞によって決定される。

(5-115)　（＋項）（＋付加部）述語

5.4.2.1　項の数

動詞には、1 つの項を取る一項動詞、2 つの項を取る二項動詞、3 つの項を取る三項動詞

がある。一項動詞には、存在動詞*u「いる」*a「ある」や、*ak「歩く」*ik「行く」などの動詞がある。二項動詞には、*ama「怒る」*mi「見る」*furus「殺す／殴る」*kam「食べる」などがある。三項動詞には、*kuri「くれる／あげる」*muro「もらう」の授受動詞がある。

5.4.2.1.1 一項動詞

一項動詞は、主語項 1 つを取る。

(5-116) では、述語の*a「ある」が 1 項を取る動詞である。節内には、主語の hookusu「ほくろ」がある。

(5-116)

hookusu=nu	*maNdi*	*a-N*
hookusu=nu	maNdi	a-N
ほくろ=NOM	たくさん	ある-IND

ほくろがたくさんある。

5.4.2.1.2 二項動詞

二項動詞は、(a) 主語項と、目的語項、または、(b) 主語項と、間接目的語項、の 2 つの項を取る。

(5-117) では、述語*ama「怒る」が、主語項と目的語項の 2 項を取る動詞である。節内には、主語の ama「お母さん」と、目的語の waN「私」がある。

(5-118) の補文節では、述語*mi「似る」が、主語項と間接目的語項の 2 項を取る動詞である。節内には、主語の kwaa「子供」と、間接目的語の uja「親」がある。

(5-117)

ama=ga	*waN*	*ama-i-jabut-a-N*
ama=ga	waN	ama-繋ぎ-jabu-a-N
母=NOM	1SG	怒る-POL-PST-IND

母が私を怒りました。

(5-118)

kwaa=nu	*uja=ni*	*m-juu-sji=wa*	*attaimee=djaa*
kwaa=nu	uja=ni	mi-ju-sji=wa	attaimee=djaa
子供=NOM	親=DAT	似る-NPST-COMP=TOP	当たり前=SFP

子供が親に似るのは当たり前だ。

5.4.2.1.3 三項動詞

三項動詞は、主語項、目的語項、間接目的語項の 3 項を取る。

(5-119) では、述語*kuri「くれる」が主語項、目的語項、間接目的語項の 3 項を取る動

詞である。節内には、主語の zjaazja「祖父」、目的語の sabacji「櫛」、間接目的語の waN「私」がある。

(5-119)

zjaazja=ga	*sabacji*	*waN=ni*	*kurit-a-N*
zjaazja=ga	sabacji	waN=ni	kuri-a-N
祖父=NOM	櫛	1SG=DAT	くれる-PST-IND

お爺さんが櫛を、私にくれた。

5.4.2.2 述語句

述語句には、(a) 動詞 1 つによって構成されるもの、(b) 動詞 2 つ（動詞連続）によって構成されるもの、(c) 補語の名詞／形容詞と、コピュラ動詞によって構成されるもの、の 3 種類がある。以下では、(b) 動詞連続によって構成される述語句と、(c) コピュラ動詞と補語によって構成される述語句の構造を述べる。

5.4.2.2.1 動詞連続

動詞連続の構造は、(5-120) のように表される。1 つ目の動詞が継起形を取る。V_2 に入る動詞には、確認している範囲で (5-121) の動詞がある。

(5-120) 動詞連続の構造

V_1 の継起形　V_2

(5-121) 動詞連続を構成する動詞

*kuri「～くれる／あげる」、*muro「～もらう」、*a「ある」、*u「いる」、*na「ない」*uk「～おく」、*ku「～くる」、*ik「～いく」、*mi「～みる」、*tabo「～給う」、*sjimo「～しまう」*cjaas「～消す」がある。

動詞連続には、(a) 前の動詞が主要部になり、項の出没を決定するものと、(b) 後ろの動詞が主要部になり、項の出没を決定するものがある。

5.4.2.2.1.1 前の動詞が主要部

動詞連続のうち、V_2 が*muro「～もらう」）以外の時は、前の動詞が主要部になる。

(5-122) では、述語句が*ee「開ける」と*u「いる」の動詞連続によって構成されている。節内には、主語を担う wa「私」と目的語を担う jaa「家」という 2 つの項がある。

ここで、*ee「開ける」と*u「いる」の動詞を比べると、述語句が*ee「開ける」1 語から成る (5-123) の文は、節内に、主語を担う wa「私」と、目的語を担う madu「窓」という 2 つの項がある。一方で、述語句が*u「いる」1 語から成る (5-124) の文は、節内に主

語を担う zjaazja「祖父」という 1 つの項がある。

(5-123) (5-124) の文から、*ee「開ける」は項を 2 つ、*u「いる」は項を 1 つ取ることが分かる。(5-122) では項が 2 つあるため、この述語句の主要部は*ee「開ける」であると分かる。

(5-122)

wa=ga	*jaa*	*eet-i*	*u-N=tu…*
wa=ga	jaa	eei-i	u-N=tu…
1SG=NOM	家	開ける-SEQ	いる-IND=CSL

私が家を開けているから‥

(5-123)

wa=ga	*maiasa*	*madu*	*eet-u-N=doo*
wa=ga	maiasa	madu	ee-u-N=doo
1SG=NOM	毎朝	窓	開ける-CONT-IND=SFP

私が毎朝窓を開けているよ。

(5-124)

zjaazja=ga	*jaa=ni*	*u-N*
zjaazja=ga	jaa=ni	u-N
祖父=NOM	家=LOC1	いる-IND

祖父が家にいる。

5.4.2.2.1.2 主要部が後ろの動詞

V_2 が*muro「～もらう」の時、動詞連続の主要部は後ろの動詞になる。

(5-125) では、述語句が*ku「来る」と*muro「もらう」によって構成されている。節内には、主語を担う wa「私」と間接目的語を担う sabu「サブ」という 2 つの項がある。

ここで、*ku「来る」と*muro「もらう」の動詞を比べると、述語句が*ku「来る」1 語から成るの文 (5-126) は、節内に、主語を担う cjura+jiNga「美男子」という 1 つの項がある。一方で、述語句が*muro「もらう」1 語から成る (5-127) の文は、節内に主語を担う jama「ヤマ」と 間接目的語を担う sabu「サブ」という 2 つの項がある。

(5-126) (5-127)の文から、*ku「来る」は主語項を、*muro「もらう」は主語項と間接目的語項を取れることが分かる。(5-125) には間接目的語項があるので、この述語句の主要部は*muro「もらう」であると分かる。

(5-125)

wa=ga	*sabu=ni*	*kicj-i*	*murot-a-N=doo*
wa=ga	sabu=ni	ku-i	muro-a-N=doo
1SG=NOM	サブ=DAT	来る-SEQ	もらう-PST-IND=SFP

私がサブに来てもらったよ。

(5-126)

cjura+jiNga=nu	*jaa=cji*	*kicj-a-N*
cjura+jiNga=nu	jaa=cji	ku-a-N
きれい+男=NOM	家=ALL	来る-PST-IND

美男子が家に来た。

(5-127)

jama=ga	*sabu=ni*	*zjiN*	*murot-a-N*
jama=ga	sabu=ni	zjiN	muro-a-N
ヤマ=NOM	サブ=DAT	金	もらう-PST-IND

ヤマがサブに金をもらった。

5.4.2.2.2 コピュラ述部

コピュラ動詞と補語によって構成される述部の構造は(5-128)(5-129)のように表せる。

(5-128) NP {*ai / *a / *ja}

(5-129) AdjP {*a/ *na}

5.4.2.2.2.1 名詞を補部とするコピュラ述部

名詞を補部とするコピュラ動詞には、活用変化のない ai「～ではない」と、活用変化がある*a「～だ」*ja「～だ」がある。ai は、補語の名詞を否定する際に用いる。(5-130) では、述語句が名詞 dokusjiN「独身」と否定のコピュラ動詞 ai によって構成されている。

(5-130)

arja	*dokusjiN*	*ai=doo=jaa*	*kekkoN*	*sjuN*
ari=wa	dokusjiN	ai=doo=jaa	kekkoN	sji-u-N
3SG=TOP	独身	COP.NEG=SFP=SFP	結婚	する-CONT-IND

あの人は独身ではないよ。結婚している。

*a と*ja は基本的に代替可能だが、*ja は、否定接辞と丁寧接辞を取ることが出来ないため、否定の極性を取る時や、待遇表現が丁寧体の時には、コピュラ動詞に*a を用いる。

(5-131) では、述語句が名詞 seNsee「先生」と、コピュラ動詞*a によって構成されている。この文のコピュラ動詞*a は*ja にも代替可能である (5-132)。

(5-131)

aN	*cjuu=wa*	*seNsee*	*at-a-N*
aN	cjuu=wa	seNsee	a-a-N
あの	人=TOP	先生	COP-PST-IND

あの人は先生だった。

(5-132)　*aN*　*cjuu=wa*　*seNsee*　*jat-a-N*
aN　cjuu=wa　seNsee　ja-a-N
あの　人=TOP　先生　COP-PST-IND
あの人は先生だった。

一方で、丁寧体の文 (5-133) の述語句は、名詞 fattee「畑」と、コピュラ動詞*a によって構成され、*a が丁寧接辞-jabu を取っている。このコピュラ動詞を、*ja に変えることは出来ない。また、否定の極性を表す (5-134) の述語句は、名詞 faru「畑」と、コピュラ動詞*a によって構成され、*a が否定接辞-ran を取っている。このコピュラ動詞も、*ja に変えることは出来ない。

(5-133)　*Maa=wa*　*fattee*　*a-jabut-a-N=doo*
Maa=wa　fattee　a-jabu-a-N=doo
そこ=TOP　畑　COP-POL-PST-IND=SFP
そこは畑でしたよ。

(5-134)　*nama=du*　*faru*　*a-raz-ee?*
nama=du　faru　a-ran-e
今=FOC　畑　COP-NEG-YNQ
（そこは）今は畑じゃない？

5.4.2.2.2.2 形容詞を補部とするコピュラ述部

形容詞を補部とするコピュラ動詞には、*a、*na がある。コピュラ動詞*a は、名詞を補部に取る時は否定接辞を取るが、形容詞を補部とするときはこれを取らない。このため、形容詞をコピュラの補部とする否定文では、*a ではなく*na がコピュラの位置を埋める。なお、*na は否定接辞を必ず取るコピュラ動詞である（4 章 3 節動詞形態論を参照）。

(5-135) は肯定文で、述語句を形容詞とコピュラ動詞*a が埋めている。一方 0 は否定文で、述語句を形容詞とコピュラの位置*na が埋めている。

(5-135)　*waN*　*harazji=wa*　*naga-sa*　*a-N*
waN　harazji=wa　naga-sa　a-N
1SG　髪の毛=TOP　長い-ADJ　COP-IND
私の髪の毛は長い。

(5-136)　*ura*　*harazji=wa*　*naga-sa*　*n-a-N*
ura　harazji=wa　naga-sa　na-ran-N
2SG　髪の毛=TOP　長い-ADJ　ない-NEG-IND
あんたの髪の毛は長くない。

5.4.3　形容詞述部

形容詞述部の構造は (5-137) のように表せる。形容詞述部に現れる形容詞は、(a) 語幹形式（例：cjura-sa「きれい」）または、(b) 屈折形式（例：cjura-sa-N「きれい」）である。形容詞述部は、主語の性質や様態を叙述する。

(5-137)　形容詞句（＋終助詞）

(5-138) では、主語である utee「あんた達」の性質を、語幹形式の形容詞 warosa「悪い」が叙述している。

(5-139) では、主語である aN warabi「あの子ども」の性質を、屈折形式の形容詞 waa-sja-N「可笑しい」が叙述している。

(5-138)　*utee=ga=du*　*waro-sa*
utee=ga=du　waro-sa
2DU=NOM=FOC　悪い-ADJ
あんた達（二人）が悪い。

(5-139)　*aN*　*warabi=wa*　*waa-sja-N=jaa*
aN　warabi=wa　waa-sja-N=jaa
あの　子供=TOP　可笑しい-ADJ-IND=SFP
あの子は可笑しいね。

5.5　構文論

5.5 節では、単文（節）の構成について述べる。まず、5.5.1 では文法関係の表現方法（アライメント）を記述し、5.5.2 では、項の数（結合価）よる述語句の分類を行う。5.5.3 で結合価の増減操作について述べ、5.5.4 では有対動詞の形態的特徴をまとめる。最後に、5.5.5 で文のタイプの分類を行う。

5.5.1　アライメント (alignment)

アライメントとは、文法関係の表現方法を表す。文法関係を表すには、伝統的に「主語」「目的語」などの用語が使われていたが、能格型 (ergative) 言語の存在が明らかになったことで、アライメントの類型を捉えるための新しい概念が Dixon (1994) 等によって提案されている。Dixon が定義する文法関係とそれを表す記号は(5-140) の通りである。

(5-140)　文法関係を表す記号 (Dixon 1994)

S: 自動詞文の唯一項

A: 他動詞文の項のうち、意味役割が動作主により近い項

P: 他動詞文の項のうち、意味役割が被動者により近い項

アライメントの標示方法として、類型的に(a) 格、(b) 語順、(c) 動詞の一致、が知られている。このため、以下それぞれについて検討する。

5.5.1.1　格

国頭方言は自動詞文の唯一項 (S) と他動詞文において動作主を表す項 (A) が主格の格助詞=ga/nu[62]を取り、他動詞文において被動作主を表す項 (P) はいかなる格助詞も取らない。このため、類型的には、S, A が同じ格標示を取り、P が異なる格標示を取る「主格対格型 (Nominative-Accusative) 」の格体系をもつ言語だと言える。

(5-141) は自動詞*ik「行く」の唯一項 (S) wa「私」が=ga を取っている。(5-64) は他動詞*abi「呼ぶ」の項のうち、動作主を表す項 (A) wa「私」が=ga を取り、動作の対象を表す項 (P) taroo「太郎」が=ø を取っている。これらの例文から、国頭方言は S, A が主格=ga を、P が対格 ø を取る体系だと分かる。

(5-141)

fattee=cji=wa	*wa=ga*	*ic-ju-N*
fattee=cji=wa	wa=ga	ik-ju-N
畑=ALL=TOP	1SG=NOM	行く-NPST-IND

畑へは私が行く。

[62] 有生性が高い名詞ほど=ga を低い名詞ほど=nu を取る。詳細は 4 章 2 節名詞句構造を参照。

(5-142)

wa=ga	*taroo*	*abit-a-N*
wa=ga	taroo	abi-a-N
1SG=NOM	太郎=ACC	呼ぶ-PST-IND

私が太郎を呼んだ。

この体系は、A より P の方が有生性が高い場合など、非典型的な時にも保持される[63][64]。

(5-143) は他動詞文*mi「見る」の動作主項 (A) が inu「犬」で、もう一つの項 (P) が ura「あんた」である。ここで、有生性は A<P であるが、格体系は変わらず、A が主格を、P が無標の対格を取っている。

(5-143)

inu=nu	*ura*	*hjiizju*	*micj-u=sjiga*	*joo-sja*	*nat-i=kaja=jaa?*
inu=nu	ura	hjiizju	mi-u=sjiga	joo-sja	na-i=kaja=jaa
犬=NOM	2SG	ずっと	見る-CONT=CNC	空腹-ADJ	なる-SEQ=Q=SFP

犬があんたをずっと見ているけど、お腹が減ったのかな？

主格対格型の多くは、日本共通語の「が」や「を」のように、主格・対格のいずれもが有形の標識を取る体系か、対格のみが有形の標識を取る体系である。しかし、国頭方言は主格が有形の標識を取り、対格が形式的に無標の「主格有標型 (Nominative marked) 」である。この「主格有標型」は、言語類型的に珍しい現象だとされ (Mallinson & Blake 1984) 、WALS の言語地図 (Feature 98A: Alignment of Case Marking of Full Noun Phrases) においては、52 の主格対格型言語のうち、有標主格型は 6 言語のみである（図 5-2. 有標主格型言語の分布)。

---

63 通言語的に有生性階層の左側の名詞ほど動作主になりやすく、右側の名詞ほど被動作主になりやすいとされる（Dixon 1994: 85)。この前提に従うと、AP の有生性は A>P となるのが普通である。基本的に A が有標・P が無標の言語でも、A, P の有生性が逆行する場合（P>A）には、P を有標にするシステム（Differential Object Marking: Bossong 1985, Aissen 2003）がロシア語などで知られており、日本でも、下地（2016）によって、宮崎県椎葉村尾前方言の事例が報告されている。

64 ただし、自然談話中で有生性が逆行する例はほとんど見られない。有生性が逆行する例は elicitation で得られたデータである。

図 5-2. 有標主格型言語の分布

5.5.1.2 語順

国頭方言は、典型的に A が P に先行する。自然談話資料 40 分の他動詞節を検証したところ、A, P が現れる節は 27 例[65]あり、そのうち 25 例で A が P に先行していた。

(5-144) は名詞句が 2 つあるが、*utus「落とす」の動作主は hagoromo「天女」(A)、対象は naada「涙」(P) である。節をみて分かるように、A が P に先行している。

(5-144)	*uN*	*hagoromo=nu*	*haccjii*	*naada*	*utucj-i*
	uN	hagoromo=nu	haccjii	naada	utus-i
	その	天女=NOM	勢いよく	涙	落とす-SEQ
	その天女が、勢いよく涙を落とし‥				

なお、P が A に先行した 2 例は、いずれも P が主題化された場合であった（主題の語順については 6 章 1 節「情報構造」も参照)。

0 は述語*hakas「隠す」の動作主が acja「父」(A)、対象が uri「それ（羽衣)」(P) であり、P が A に先行している。

[65] 40 分のデータで A, P が揃う節が 27 例しかないように、国頭方言は項が省略されやすい言語である。特に A が非常に省略されやすく、A/P いずれかでも登場する 143 例文中、A が出没するのは 33 例のみであった。

(5-145)

uri=wa	*acja=ga*	*Maa=ni*	*muuru*	*hakacj-a-mu=di*
uri=wa	acja=ga	Maa=ni	muuru	hakas-a-mu=di
それ=TOP	父=NOM	そこ=LOC	全部	隠す-PST-EVD=QUOT

それ（羽衣）は、お父さんがそこに全部隠したよ（と言って）

5.5.1.3 動詞の一致

S または A と述語動詞が一致する現象として「敬語（尊敬語）」がある。これは、5 章 1 節「導入」において述べた通り、主語を定義する要件の 1 つになっている。

(5-146) は唯一項が zjaazja=tu azji「お爺さんとお婆さん」（S）であるが、S が敬意の対象（年上）であるために、述語動詞が*Mee「いらっしゃる」という尊敬の語形になっている。仮に S の位置に敬意の対象でない人物（utu「弟」など）が来た場合、*Mee「いらっしゃる」と使うことは、語用論的に許容されない。

(5-15) には 2 つの項があるが、*oisji「召しあがる」の動作主は zjaazja「祖父」（A）、動作の対象は okaju「お粥」（P）である。この時、*oisji「召しあがる」という尊敬形式を用いているのは、P ではなく A が敬意の対象であるためである。

(5-146)

awari	*s-ju-nu*	*zjaazja=tu*	*azji=tu=ga*	*Meet-i*
awari	sji-ju-nu	zjaazja=tu	azji=tu=ga	Mee-i
貧乏	する-NPST-ADN	祖父=COM	祖母=COM=NOM	いる.HON-SEQ

貧乏なお爺さんとお婆さんがいらっしゃって

(5-147)

kiNnjuu	*zjaazja=wa*	*okaju=du*	*ois-juta-N*
kiNnjuu	zjaazja=wa	okaju=du	oisji-juta-N
昨日	お爺さん=TOP	お粥=FOC	食べる.HON-PST2-IND

昨日お爺さんはお粥を召し上がっていた。

日本諸方言では、P と述語動詞が一致する現象として「敬語（謙譲語）」が知られているが、筆者の調査の範囲では、国頭方言において謙譲語の体系は確認できていない。

5.5.2 結合価

述語の種類により、節の内部に出現する項の数が異なる。以下では、項の数による節の分類を行う。なお、使役や受動によって結合価が変化する構文については、5.5.3「結合価操作」で扱う。

5.5.2.1 一項節 (intransitive clause)

述語句の主要部が、(a) 名詞、(b) 形容詞、(c) コピュラ動詞、(d) 一項動詞、の時、節

の内部には、項が 1 つだけ現れる。

5.5.2.1.1　名詞述部

述語が名詞の時、節の内部に現れる項は、主語項のみである。

(5-148) の述語は nisjimurasaN「西村さん」という名詞であり、節内の項は、主語の ura「あんた」ひとつだけである。

(5-148)

ura=ga=du	*nisjimurasaN=naa?*
ura=ga=du	nisjimurasaN=naa
2SG=NOM=FOC	西村さん=YNQ

あんたが西村さんか？

5.5.2.1.2　形容詞述部

述語が形容詞の時、節の内部には、節の内部に現れる項は、主語項のみである。

(5-149) の述語は*waro「悪い」という形容詞であり、節内の項は、主語の wa「私」ひとつだけである。

(5-149)

wa=ga	*waro-sa-N*
wa=ga	waro-sa-N
1SG=NOM	悪い-ADJ-IND

私が悪い。

5.5.2.1.3　コピュラ述部

述語句の主要部がコピュラ動詞の時、節の内部に現れる項は、主語項のみである。

(5-150) の連体節の述語句は、コピュラ動詞*a と、その補語である名詞 seNsee「先生」によって構成されている。この時、節内に現れる項は、主語の wa「私」ひとつだけである。

(5-151) の述語句は、コピュラ動詞*a と、その補語である形容詞*hamara「うるさい」によって構成されている。この時、節内に現れる項は、主語の taN「誰」ひとつだけである。

(5-150)

wa=ga	*seNsee*	*at-a-nu*	*tuki=wa*	*kwaa=nu*	*maNdi*
wa=ga	seNsee	a-a-nu	tuki=wa	kwaa=nu	maNdi
1SG=NOM	先生	COP-PST-ADN	時=TOP	子=NOM	沢山

私が先生だった時は、子供がたくさんいた。

ut-a-N
u-a-N
いる-PST-IND
いた。

(5-151)

taN=ga	*hamara-sja*	*a-i=joo?*
taN=ga	hamara-sja	a-i=joo
誰=NOM	うるさい-ADJ	COP-Q-WHQ

誰がうるさいの?

5.5.2.1.4 一項動詞述部

述語句の主要部が一項動詞の時、節の内部に現れる項は、主語項のみである。

(5-152) の述語は一項動詞*Maari「産まれる」であり、節内の項は、主語の jiNga=nu kwaa「男の子」ひとつだけである。

(5-152)

jiNga=nu	*kwaa=nu*	*Maarit-ut-a-N*
jiNga=nu	kwaa=nu	Maari-u-a-N
男=GEN	子=NOM	生まれる-CONT-PST-IND

男の子が産まれていた。

5.5.2.2 二項節 (transitive clause)

述語句の主要部が二項動詞の時、節の内部には、項が 2 つ現れる。
2 つの項は典型的に、A が主格を、P が対格を取る「主格－対格」の格フレームを取るが、「与格 - 主格」「主格－与格」「主格－主格」の格フレームを取る動詞もある。こうした格フレームの違いは、述語動詞の「他動性の高さ」によってある程度説明が出来る。

Hopper & Thompson (1980) によると、他動性の意味特徴は 10 個あり（表 5-4. 他動性の高さ)、表中の「高い」特徴が多いほど、他動性が高い動詞だと言える。

表 5-4. 他動性の高さ

	高い	低い
参加者（participant）	2 人以上	1 人
動作様態（kinesis）	動作	非動作
アスペクト（aspect）	動作の終局点あり	動作の終局点なし
瞬間性（punctuality）	瞬間	非瞬間
意図性（volitionally）	意図的	非意図的
肯定（affirmation）	肯定	否定
現実性（mode）	現実	非現実
動作主性（agency）	高い	低い
被動主への影響（affectedness）	全体に影響	部分的に影響
被動主の個別性（individuation）	高い	低い

角田（2007）によると、主格対格言語においては、類型的に他動性の高い現象ほど「主格－対格」の格フレームを用いやすく、他動性の低い現象ほど「与格＋主格」等のフレームが現れやすい。国頭方言の特徴は「主格－対格」の格フレームが、他動性が低いとされる「能力」や「変化」を表す動詞にも用いられることである。

5.5.2.2.1 主格－対格

他動性の高い文から、他動性の低い文まで、広く「主格－対格」の格フレームを取ることが出来る。

(5-153) の述語の*num「飲む」は、動作主が対象に直接影響を与える動詞で、他動性の高い動詞である。2 つの項に着目すると、ʔwaa「豚」が主格を、mizji「水」が対格を取っており「主格－対格」型の格フレームを持っていることが分かる。

(5-153)

ʔwaa=nu	*mizji*	*nud-u-N*
ʔwaa=nu	mizji	num-u-N
豚=NOM	水	飲む-CONT-IND

豚が水を飲んでいる。

一方で、(5-154) の述語は*deki「出来る」という「能力」を表す動詞である。共通語で「出来る」という動詞は「タカシに英語が出来る（こと）」「タカシが英語が出来る（こと）」のように「与格 - 主格」または「主格－主格」の格フレームを取る。一方で国頭方言では、(5-154) において takasji「タカシ」が主格、eego「英語」が対格を取っているように、「主格－対格」の格フレームを用いている。

(5-154)

takasji=ga	*eego*	*deki-ju-mu=di*	*ʔjuu-sji=wa*	*muuru*
takasji=ga	eego	deki-ju-mu=di	ʔi-ju-sji=wa	muuru
タカシ=NOM	英語	出来る-NPST-EPI=QUOT	言う-NPST-COMP=TOP	皆

タカシが英語が出来るという事は、みんな

at-i	*a-N*
a-i	a-N
知る-SEQ	ある-IND

知っている。

「変化」を表す動詞*na「なる」においても、「主格－対格」フレームが使われる。

(5-155) の動詞述語は*na「なる」で、主節には 2 つの名詞句（「涙」「菜の花」）がある。共通語で「なる」は「女の人の涙が菜の花になる」のように、「主格－与格」フレームを取るが、国頭方言では naada「涙」が主格を、nanohana「菜の花」が対格を取っており、「主格－対格」フレームを使っていることが分かる。

(5-155)

wunagu=nu	*cjuu=nu*	*utucj-a-nu*	*naada=nu*	*nanohana*
wunagu=nu	cjuu=nu	utus-a-nu	naada=nu	nanohana
女=GEN	人=NOM	落とす-PST-ADN	涙=NOM	菜の花

タカシが英語が出来るという事は、みんな菜の花に

nat-a-mu=di
na-a-mu=di
なる-PST-EPI=QUOT

なったって。

こうしたことから、国頭方言の「主格－対格」フレームは、典型的な他動性の高い文から、他動性の低い文にまで用いられると言える。

5.5.2.2.2 主格－与格

「主格－与格」の格フレームを用いるのは*mi「似る」という動詞である。

(5-118) の*mi「似る」が述語となる補文節の中で、一つ目の名詞 kwaa「子供」は主格を、二つ目の名詞 uja「親」は与格を取っている。

(5-156)

kwaa=nu	*uja=ni*	*m-juu-sji=wa*	*attaimee=djaa*
kwaa=nu	uja=ni	mi-ju-sji=wa	attaimee=djaa
子供=NOM	親=DAT	似る-NPST-COMP=TOP	当たり前=SFP

子供が親に似るのは当たり前だ。

5.5.2.2.3 与格－主格

*mjaa「見える」*cjika「聞こえる」などの、知覚が可能であることを表す動詞は「与格‐主格」の格フレームを取り得る。

(5-28) の述語動詞は*cjika「聞こえる」であり、一つ目の名詞句 juta「ユタ」が与格を、二つ目の名詞句 wunagu=nu cjuu=nu fui「女の人の声」が主格を取っている。

(5-157)

juta=ni	*wunagu=nu*	*cjuu=nu*	*fui=nu*	*cjikat-a-nu*
juta=ni	wunagu=nu	cjuu=nu	fui=nu	cjika-a-nu
ユタ=DAT=TOP	女=GEN	人=GEN	声=NOM	聞こえる-PST-ADN

ユタに女の人の声が聞こえた（こと）

5.5.2.2.4 主格－主格

他動性の低い「能力」を表す動詞は「主格－主格」の格フレームを取り得る。ただし、5.5.2.2.1 に述べた通り「主格－対格」の方がより自然な表現とされる。

(5-158) の述語動詞は*deki「出来る」であり、2 つの項、takasji「たかし」と eego「英語」は、共に主格を取っている。

(5-158)

takasji=ga	*eego=nu*	*deki-ju-nu*	*kutu*
takasji=ga	eego=nu	deki-ju-nu	kutu
タカシ=NOM	英語=NOM	出来る-NPST-ADN	事

タカシが英語が出来ること

5.5.2.3 三項節 (ditransitive clause)

項が 3 つ節の中に現れるのは、述語が三項動詞である場合である。三項動詞には授受動詞の*kuri「くれる／あげる」、*muro「もらう」がある。三項は主語、目的語、間接目的語であり、主格、対格、与格で表される。

(5-159) の動詞述語は*kuri「くれる」であり、zjaazja「祖父」が主格、sabacji「櫛」が対格、waN「私」が与格を取っている。

(5-159)

zjaazja=ga	*sabacji*	*waN=ni*	*kurit-a-N*
zjaazja=ga	sabacji	waN=ni	kuri-a-N
祖父=NOM	櫛	1SG=DAT	くれる-PST-IND

祖父が櫛を私にくれた。

5.5.3　結合価操作

項の数やアライメントを変更する操作は「結合価操作 (valence changing operation) 」と呼ばれる。結合価操作には、結合価（項）の数を増やす「結合価増加操作」と、結合価の数を減らす「結合価減少操作」がある。

5.5.3.1　結合価増加操作

結合価を増加させる作用として「使役 (causative) 」がある。使役には、類型的に (a) 語彙的使役 (lexical causative)、(b) 形態的使役 (morphological causative)、(c) 分析的使役 (analytic causative) がある (Payne 1997: 175) 。このうち国頭方言は (a) 語彙的使役と、(b) 形態的使役を生産的に用いる。語彙的使役については 5.5.4「有対動詞」で取り上げ、ここでは形態的使役について述べる。

述語動詞が使役接辞-ras を取る文を「使役文」、使役接辞を取らない文を「能動文」と呼ぶ。使役文は能動文に比べて項が 1 つ多く、その項は、出来事を引き起こす使役主を表す。使役接辞を取れるかどうかは語彙の意味で決まっており、コピュラ動詞や無生物の存在動詞は使役接辞を取ることが出来ない。

5.5.3.1.1　一項動詞の使役化

項を 1 つ取る動詞（以下、一項動詞とする）は使役接辞-ras を接続することで 2 つの項を取る動詞に派生する。能動文において、動作主を表す項は主格を取るが、使役文において、動作主を表す項は対格を取る。また、使役文は能動文に比べて項が 1 つ多く、その項は、主格を取り、出来事を引き起こす使役主を表す。能動文と使役文の、格の対応関係は図 5-3 の通りである。

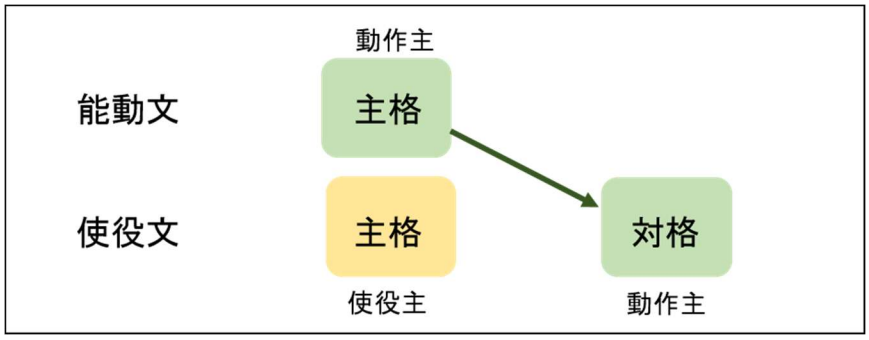


図 5-3. 一項動詞の使役化

*u「いる」は一項動詞であるが、使役接辞-ras を接続することで、2 つの項を取る動詞に派生する。(5-160) の能動文において、動作主の zjaazja「祖父」は主格を取っているが、(5-161) の使役文において、動作主の zjaazja「祖父」は対格を取っている。また、使役文は能動文に比べて項が 1 つ多く、その項 azji「祖母」は主格を取り、使役主を表している。

(5-160)

zjaazja=ga	*kiNnjuu*	*wadomari=cji*	*izj-a-N*
zjaazja=ga	kiNnjuu	wadomari=cji	ik-a-N
祖父=NOM	昨日	和泊=DIR	行く-PST-IND

祖父が昨日和泊へ行った。

(5-161)

azji=ga	*zjaazja*	*wadomari=cji*	*ik-acj-a-N*
azji=ga	zjaazja	wadomari=cji	ik-as-a-N
祖母=NOM	祖父	和泊=DIR	行く-CAUS-PST-IND

祖母が祖父を和泊へ行かせた。

5.5.3.1.2　二項動詞の使役化

2 つの項を取る動詞（以下、二項動詞とする）は使役接辞-ras を取ることで、3 つの項を取るようになる。使役文は、能動文に比べて項が 1 つ多く、その項は出来事を引き起こす使役主を表す。能動文において動作主は主格を取るが、使役文において動作主は与格を取る。能動文と使役文の格の対応は、図 5-4 の通りである。

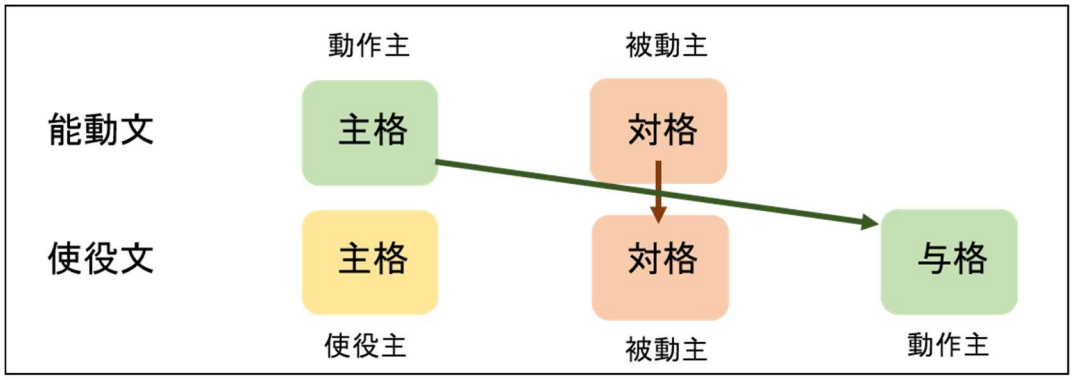


図 5-4. 二項動詞の使役化

*kam「食べる」は二項動詞であるが、使役接辞-ras を取ることで、3 つの項を取る動詞に派生する。(5-162) は能動文で、動作主 Maa「馬」が主格を、被動主 kusa「草」が対格を取っている。一方、(5-163) は使役文で、使役主 wa「私」が主格、動作主 Maa「馬」が与格、被動主 kusa「草」が対格を取っている。

(5-162)

Maa=ga	*kusa*	*kad-a-N*
Maa=ga	kusa	kam-a-N
馬=NOM	草	食べる-PST-IND

馬が草を食べた。

(5-163)

wa=ga	*Maa=ni*	*kusa*	*kam-acj-a-N*
wa=ga	Maa=ni	kusa	kam-as-a-N
1SG=NOM	馬=DAT	草	食べる-CAUS-PST-IND

私が馬に草を食べさせた。

5.5.3.2 結合価減少操作

結合価を減少させる操作として「passive（受動）」がある。受動には、類型的に (a) 語彙的受動 (lexical passive) 、(b) 形態的受動 (morphological passive)、(c) 分析的受動 (analytic passive) があるとされる (Payne 1997: 175)。このうち国頭方言は (b) 形態的受動を用いる。

5.1 節で述べたように「文法関係」を担う名詞句を「項（＝結合価）」と定義すると、国頭方言の「受動」はいずれも 2 つの項を取るので、「結合価減少操作」と言えない。しかし、項がより中心的な統語機能を果たす「主語と目的語」から、「主語と間接目的語」に変化するということから、広い意味での「結合価減少操作」と捉える。

述語動詞が受動接辞-ra を取る文を「受動文」、受動接辞を取らない文を「能動文」と呼ぶ。受動文と能動文は格体系が異なる。能動文において動作主を表す項は主格を取るが、受動文において、動作主を表す項は与格を取る。一方、能動文において被動主を表す項は対格を取るが、受動文において主格を取る。受動接辞を取れるかどうかは語彙の意味で決まっており、コピュラ動詞や無生物の存在動詞は受動接辞を取ることが出来ない。

5.5.3.2.1 二項動詞の受動化

二項動詞は受動接辞-ra を接続することで、動作主を表す項が与格に、被動主を表す項が主格になる。能動文と受動文の格の対応は図 5-5 の通りである。

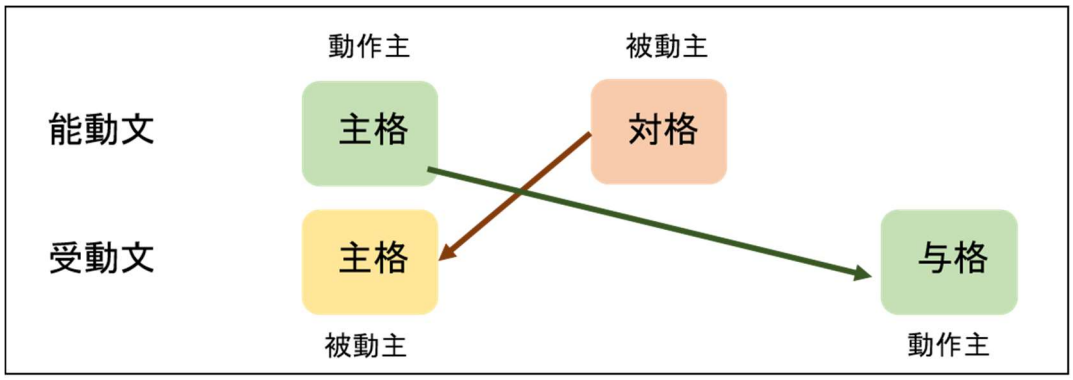


図 5-5. 二項動詞の受動化

*kam「食べる」は、主格と対格で標示される項を取る動詞であるが、受動接辞-ras を接続することで、主格と与格で標示される項を取る動詞に派生する。(5-22) は能動文であり、動作主 seNsee「先生」が主格を取り、被動主 sabu「サブ」が対格を取っている。一方で、(5-23) は受動文であり、動作主 seNsee「先生」が与格を取り、被動主 sabu「サブ」が主格を取っている。

(5-164)

seNsee=ga	*sabu*	*amat-a-N*
seNsee=ga	sabu	ama-a-N
先生=NOM	サブ	怒る-PST-IND

先生がサブを怒った。

(5-165)

sabu=ga	*(seNsee=ni)*	*ama-rat-a-N*
sabu=ga	seNsee=ni	ama-ra-a-N
サブ=NOM	先生=DAT	怒る-PASS-PST-IND

サブが先生に怒られた。

5.5.3.2.2 特殊な受け身

国頭方言は、能動文よりも受動文の方が項が多い「特殊な受動文（いわゆる「間接受動文」）」が存在する。受動文は能動文に比べて項が 1 つ多く、その項は、出来事を経験する経験者を表す。

(5-166) は能動文で、動作主 sabu「サブ」が主格を取っている。一方、(5-167) は受動文で、動作主 sabu「サブ」が与格を取り、出来事「サブが家に来る」を経験する経験者 wana「私」が新しい項として出現している。

(5-166)

sabu=ga	*jaa=cji*	*c-ju-N*
sabu=ga	jaa=cji	ku-ju-N
サブ=NOM	家=DIR	来る-NPST-IND

サブが家に来る。

(5-167)

wana	*sabu=ni*	*jaa=cji*	*ku-ra-ru=tu*	*baa=djaa*
wana	sabu=ni	jaa=ni	ku-ra-ru=tu	baa=djaa
1SG	サブ=DAT	家=LOC1	来る-PASS-COND3=CSL	嫌=SFP

私は、サブに家に来られると嫌だ。

5.5.4 有対動詞

基本的に同じ出来事を指しながらも、一方の動詞の項構造には出来事を引き起こす使役主が含まれるが、もう一方の動詞の項構造には出来事を引き起こす使役主が含まれない動詞対が様々な言語で存在する（ナロック他 2016）。

例えば、(5-168) と(5-169) はどちらも「テレビが壊れた」という出来事について述べている。しかし、(5-169) の動詞述語*jabu「壊した」が「テレビを壊した」使役主の utu「弟」を主格で取るのに対し、(5-168) の動詞述語*jaburi「壊れた」は、唯一項が terebi「テレビ」であり、使役主を項構造に組み込むことが出来ない。

(5-168)

terabi=nu	*jaburit-a-N*
terebi=nu	jaburi-a-N
テレビ=NOM	壊れる-PST-IND

テレビが壊れた。

(5-169)

utu=nu	*terebi*	*jabut-a-N*
utu=nu	terebi	jabu-a-N
弟=NOM	テレビ	壊す-PST-IND

弟がテレビを壊した。

この*jaburi「壊れる」と*jabu「壊す」のような動詞の関係は「自他交替 (transitivity alternation) 」と呼ばれ、このような対が存在する動詞は「有対動詞」と呼ばれる。ここでは、国頭方言の有対動詞の形態的対応と、その類型的傾向についてまとめる。

5.5.4.1 有対動詞の形態的対応

現時点で分かっている、国頭方言の有対動詞の形態的対応は表 5-5 のようにまとめられる。α は自動詞、他動詞において語根の共通する部分を指し、例えば、表 5-5, a の例は、

α=ak であり、自動詞の語根は*ak、他動詞の語根は*aki となる。h, i は後に述べる「補充形」であり、（少なくとも共時的には）自動詞と他動詞に形態的対応が見られない。

表 5-5. 自他交替の形態的対応

	形態的対応		語例	
	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
a	α	α-i	*ak「開く」	*aki「開ける」
b	α	α-sji	*mi「見る」	*misji「見せる」
c	α	α-s	*naro「習う」	*naros「教える」
d	α	α-mi	*sjizu「沈める」	*sjizumi「沈める」
e	α-ri	α	*jaburi「壊れる」	*jabu「壊す」
f	α-a	α-i	*hjuuga「広がる」	*hjuugi「広げる」
g	α-i	α-as	*tuki「溶ける」	*tukas「溶かす」
h			*sjin「死ぬ」	*furus「殺す」
i			*kawa「変わる」	*hee「変える」

5.5.4.2 自他交替の類型的傾向

有対動詞において、自動詞と他動詞の派生の方向や、形態的有標性が言語ごとにどのように異なるかは、諸言語の類型論的研究において活発に研究されており（Haspelmath 1993, Nicholas et al. 2004, パルデシ他 2016 など）、そこでは例えば、ヨーロッパの諸言語に「非他動詞化（自動詞化）」が多いことなどが指摘されている。佐々木・當山（2016）は、北海道方言・標準語・首里方言を比較し、北海道方言で「非他動詞化」が、首里方言で「他動詞化」が多く、標準語はその中間に位置することを明らかにした。この結果は、日本国内の諸方言でも自他交替の傾向に地域差があることを示唆している。

以下では、Haspelmath (1993) で提示された 31 対の動詞を元に、国頭方言の自他交替の傾向についてまとめる。

5.5.4.2.1 方法

Haspelmath (1993) の提示する 31 の動詞対に該当する、国頭方言の動詞対を対象とする。これらの動詞を、ナロック他（2016）の 5 分類に「生産的な使役接辞による派生」を加えた 6 つに分類する (5-170)。

「生産的な使役接辞」とは、5.3.3.1「結合価増加操作」で取り上げた使役接辞-ras を伴う派生である。先行研究では、生産的な使役接辞を接続したものも「他動詞化の対」に含めるものが多い（ナロック他 2016、佐々木・當山 2016 など）。しかし、例えば日本標準語においては、有対動詞の自動詞が生産的な使役接辞を接続した形式と、有対動詞の他動詞とは、意味が異なることが指摘されている（Shibatani 1973,「起こさせる」と「起こす」な

ど)。国頭方言において、生産的な使役接辞を接続した形式と、有対動詞の他動詞の異同は現時点で不明であるため、判断を保留する為に、有対動詞とは区別する。

(5-170)　分類パターン（a-e: ナロック他 2016：2）

a. 他動詞化の対
形態的に単純な自動詞から他動詞が派生され、他動詞がより複雑に見える

b. 非他動詞化の対
形態的に単純な他動詞から自動詞が派生され、自動詞がより複雑に見える

c. 中立（両極）対
両方の動詞が同等に同じ語根から派生されているように見える
（筆者注：共通の語根を持ち、どちらも同じくらいの複雑さを持つ）

d. 不安定動詞
同じ語形の動詞に自他両方の用法がある

e. 補充形
同じ出来事を表しながら語根を共有しない

f. 生産的な使役接辞
生産的な使役接辞-ras により他動化している。

自他交替の傾向を捉えることを目的とした動詞の分類に用いる指標として、様々なものが提案されているが、ここでは共時的な比較が容易な當山・佐々木（2016）の「形態的有標性」を用いる。すなわち、語幹の長さが長いものを「より複雑」であり、「派生したもの」であるとみなす[66]。

5.5.4.2.2　結果

Haspelmath（1993）の 31 対の動詞に対応する国頭方言は表 5-6 の通りである。他動詞化＝14 対、非他動詞化＝6 対、中立＝6 対、補充＝1 対（生産的な使役接辞＝4 対）で、国頭方言は他動詞化が優勢の言語だと予想される[67]。

佐々木・當山（2016）では、北海道方言、日本標準語、首里方言を比べた上で、日本国内の諸方言について、北の方言に「非他動詞化」が多く、南の方言に「他動詞化」が多い

---

[66] 「形態的に複雑なものを派生したものとみなす」という方法には限界があり、佐々木・當山（2016）でも歴史的に逆派生した語彙を正しく分析できないなどの指摘がされている。しかし、歴史的研究が進んでいない言語において、共時態のデータのみから傾向を判断するためには有効な指標であり、採用することにした。

[67] 保留にしている「生産的な使役接辞による他動化」を「他動詞化」に含めても、この傾向は変わらない。

という観察をしている。本稿では一般的な使役接辞による他動詞化を「他動詞化」として数えないなど、先行研究とは異なる点数化をしており、点数の比較については慎重になる必要があるが、現在の分析の範囲においては、国頭方言の結果も佐々木・當山（2016）の暫定仮説を支持するものである。

表 5-6.　31 の有対動詞と分類

	自動詞		他動詞		分類
1	起きる	ui	起こす	uus	他動詞化
2	割れる	wari	割る	wa	非他動詞化
3	焼ける	jaki	焼く	jak	非他動詞化
4	死ぬ	sjin	殺す	furu	補充
5	開く	ak	開ける	aki	他動詞化
6	閉まる	sjima	閉める	sjimi	両極
7	始まる	hazjima	始める	hazjimi	両極
8	教わる	naro	教える	naros	他動詞化
9	集まる	acuma	集める	acjimi	両極
10	広がる	hjuuga	広げる	hjuugi	両極
11	沈む	sjizu	沈める	sjizumi	他動詞化
12	変わる	kawa	変える	hee	非他動詞化
13	溶ける	tuki	溶かす	tukas	他動詞化
14	壊れる	jaburi	壊す	jabu	非他動詞化
15	無くなる	naani najuN	無くす	naani nasjuN	他動詞化
16	発達する	nubi	発達させる	nubas	他動詞化
17	繋がる	cjinaga	繋ぐ	cjinag	非他動詞化
18	沸く	wak	沸かす	wakas	生産的な使役接辞
19	揺れる	juri	揺らす	juras	他動詞化
20	消える	cjii	消す	cjaas	他動詞化
21	上がる	aga	上げる	agi	両極
22	終わる	owa	終える	owaras	生産的な使役接辞
23	回る	moo	回す	moos	他動詞化
24	転がる	koroga	転がす	kurugas	他動詞化
25	凍る	koo	凍らせる	kooras	生産的な使役接辞
26	溶ける	tuki	溶かす	tukas	他動詞化
27	満ちる	micji	満たす	mitas	他動詞化
28	直る	noo	直す	noos	他動詞化
29	乾く	kawak	乾かす	kawakas	生産的な使役接辞
30-1	裂ける	jaburi	裂く	jabu	非他動詞化
30-2		jari		ja	非他動詞化
31	止まる	tuma	止める	tumi	両極

5.5.5　文のタイプ

文のタイプは主節の述語によって表される。文は「平叙文」「疑問文」「命令文」「詠嘆文」に分類できる。

5.5.5.1　平叙文

平叙文の名詞述語は、終助詞を伴わないか、疑問助詞以外の終助詞 (5-171) を伴う。平叙文の動詞・形容詞述語は (5-172) の語尾接辞を取る。

(5-171)　　平叙文の名詞述語に接続する終助詞
=moo（説明）, =gi（説明）, =jaa（確認）, =doo（伝達）, =djaa（伝達）, =sja（自明性）, =gaa（自明性）

(5-172)　　平叙文の動詞／形容詞述語の語尾
-N（直説）、-mu（認識）、-ru（係り結び）、-sa（感覚）

5.5.5.2　疑問文

疑問文の名詞述語は、疑問文のイントネーション（下降調）を取り、基本的に、疑問助詞 (5-173) を伴う。疑問助詞を伴わない場合には、肯定文と反対のイントネーションを伴うことで疑問を標示する（疑問文のイントネーションについては、3 章 4 節「イントネーション」を参照）。

疑問文の動詞述語は (5-174)・形容詞述語は (5-175) に挙げる疑問の語尾接辞、または疑問助詞と共に用いる直説接辞を接続する。

(5-173)　疑問文の名詞述語に接続する終助詞
=joo（WH 疑問）、=naa（肯否疑問）、=kaja（自問）

(5-174)　疑問文の動詞述語の語尾
-e（肯否疑問）、-i（WH 疑問）、-i（継起：過去時制の時に疑問を標示する）、-maze（確認）、-N（直説：=kaja と共に）

(5-175)　疑問文の形容詞述語の語尾
-e（肯否疑問）、-i（WH 疑問）、-N（直説：=kaja と共に）

疑問文の具体的な形式については、6 章 3 節「モダリティ」6.3.1.1.2「疑問のモダリティ」で詳述する。

5.5.5.3　命令文

命令文は必ず動詞述語文であり、述語動詞は、命令接辞-ri、または禁止接辞-runa を取る。

(5-176) では、述語動詞*u「いる」が命令接辞-ri を取ることで、*u「いる」が表す動作を聞き手に強制する文となっている。

(5-176)　*Maa=ni*　*u-ri*
Maa=ni　u-ri
そこ=LOC　いる-IMP
そこにいろ。

(5-177) は*u「いる」が禁止接辞-runa を取ることで「そこにいる」という動作を聞き手に禁止する文となっている。

(5-177)　*Maa=ni=wa*　*u-Nna*
Maa=ni=wa　u-runa
そこ=LOC=TOP　いる-PROH
そこにはいるな。

5.5.5.4　詠嘆文

詠嘆を表す文は、述語が意外性を表す接辞-sa を取り、文中に疑問詞や程度を表す副詞が用いられる。

(5-178) は人の美しさに感動した文で、述語形容詞が-sa を取り、文中には甚だしい程度を表す副詞 gaccjanaa「なんて」を用いている。

(5-179)は子どもの小ささを感動しながら述べる文で、述語形容詞が-sa を取り、自問助詞=kaja を接続している。また、文中には疑問詞 nuudi「なんで」が用いられている。疑問詞 nuudi と自問助詞=kaja は、典型的に疑問文で用いられる形式である。しかし 0 は「内容について話し手の判断が効かない」疑問文ではなく、内容について話し手が感動している詠嘆文である。

(5-178)　*aN*　*cjuu=wa*　*gaccjanaa*　*cjura-sa-sa=jaa*
aN　cjuu=wa　gaccjanaa　cjura-sa-sa=jaa
あの　人=TOP　なんて　綺麗-ADJ-MRT=SFP
あの人はなんて綺麗なんだろう！

(5-179)

warabi=wa	*nuudi*	*iku-sa-sa=kajaa*
warabi=wa	nuudi	iku-sa-sa=kaja
子供=TOP	なんて	小さい-ADJ-MRT=Q

子供はなんて小さいんだろう!

5.6　複文構造

5.6 節では複数の節から成る文（複文）の構造について述べる。節には、単独で発話が成立する主節 (independent clause) と、他の節と共に用いて発話が成立する従属節 (dependent clause) がある。従属節は主節に先行する。

従属節は更に、連体節 (adnominal clause)、副詞節 (adverb clause)、補文節 (complement clause)、等位節 (coordinate clause) に分類できる。

以下の例文では、言及している節を [ ] で示す。

5.6.1　主節

主節を形成するのは、名詞述語、形容詞述語と、以下の語尾接辞を持つ動詞述語である。主節の構造については、5.5.5「文の種類」で述べている。

(5-180)　主節を形成する動詞の語尾接辞
-N（直説）、-mu（伝聞）、-ru（係り結び）、-e（肯否疑問）、-i（WH 疑問）、-sa（意外性）, -raa（意図）、-ri（命令）、-runa（禁止）、-maze（確認）

5.6.2　連体節

名詞を修飾する節を「連体節」と呼ぶ。連体節を形成するのは、連体接辞-nu を取る動詞述語／形容詞述語である。

(5-181) は cjimu izji-ju-nu「肝が出る（＝腹が立つ）」の動詞述語*izji「出る」が連体形であり、連体節として cjuu「人」を修飾している。

(5-182) は uN Maa nidu-sa-nu「その馬が可哀想」の形容詞述語*nidu「可哀想」が連体形であり、連体節として cjuu「人」を修飾している。

(5-181)	*[cjimu*	*izji-ju-nu]*	*cjuu=wa*	*jaa=ni=wa*	*u-razj-i=naa?*
	cjimu	izji-ju-nu	cjuu=wa	jaa=ni=wa	u-ran-i=naa
	肝	出る-NPST-ADN	人=TOP	家=LOC1=TOP	いる-NEG-Q=YNQ
	腹が立つ人は、家にはいないの？				

(5-182)	*[uN*	*Maa*	*nidu-sa-nu]*	*cjuu=wa*	*miNzj-i=naa*
	uN	Maa	nidu-sa-nu	cjuu=wa	miNg-i=naa
	その	馬	可哀想-ADJ-ADN	人=TOP	持つ-SEQ=SFP
	その馬が可哀想な人は（綱を）持ってね。				

5.6.3　副詞節

動詞や主節全体を、修飾する節を「副詞節」と呼ぶ。副詞節は主節の「条件」「理由」

「時」を表す。

5.6.3.1 条件

条件の副詞節を形成するのは、(a) -riba（条件 1）、(b) -rja（条件 2）を取る動詞述語と、(c) -ru（条件 3）と原因の接続助詞=tu を取る動詞述語である。条件の副詞節は、(a) 主節の命題が成立するための条件、(b) 主節の命題が成立するに至った原因、を表す。

5.6.3.1.1 -riba

条件の副詞節を形成する 1 つ目の形式は、条件接辞-riba を取る動詞述語である。

(5-183) は、mikka ugam-iba「3 日拝めば」の動詞述語*ugam「拝む」が条件形であり、条件の副詞節として、主節 uN isji=wa kamisama na-ju-mu「その石は神様になる」を修飾している。意味的には、主節の命題が成立するための条件を表している。

(5-184) は ta=kucji nud-a-riba「2 口飲むと」の動詞述語*num「飲む」が過去の条件形であり、条件節として、主節 biNta farafara sji-i「額がファラファラ痛くて」を修飾している。意味的には、主節の命題が成立するに至った原因を表している。

(5-183)

[mikka	*ugam-iba]*	*uN*	*isji=wa*	*kamisama*	*na-ju-mu*
mikka	ugam-riba	uN	isji=wa	kamisama	na-ju-mu
3 日	拝む-COND1	その	石=TOP	神様	なる-NPST-EVD

「3 日拝めば、その石は神様になる」

(5-184)

[ta=kucji	*nud-a-riba]*	*biNta*	*farafara*	*sji-i*
ta=kucji	num-a-riba	biNta	farafara	sji-i
2=口	飲む-PST-COND1	額	ONM	する-SEQ

2 口飲むと、額がファラファラして（痛くなって）

5.6.3.1.2 -rja

条件の副詞節を形成する 2 つ目の形式は、条件接辞-rja を取る動詞述語である。

(5-185) は akiko=ga u-rja「あきこがいれば」の動詞述語*u「いる」が条件形であり、条件の副詞節として、主節 aNsjiN deki-ju-N「安心できる」を修飾している。意味的には、主節の命題が成立するための条件を表している。

(5-185)

[akiko=ga	*u-rjaa]*	*aNsjiN*	*deki-ju-N*
akiko=ga	u-rja	aNsjiN	deki-ju-N
あきこ=NOM	いる-COND2	安心	出来る-NPST-IND

あきこがいれば、安心できる。

5.6.3.1.3　-ru=tu

条件の副詞節を形成する 3 つ目の形式は、条件接辞-ru と原因の接続助詞=tu を取る動詞述語である。

(5-186) では、jiru na-ru=tu=wa「夜になると」の動詞述語が、条件接辞-ru と接続助詞=tu を取っており、この節の主節である gazjamuN=nu ii-nu muN jat-i「蚊が入るものだから」を修飾している。意味的には、主節の命題が成立する条件を表している。なお、国頭方言の主題助詞=wa は、日本標準語とは異なり、(5-186) のように条件節にも接続できる。

(5-186)	*[jiru*	*na-ru=tu=wa]*	*gazjamuN=nu*	*ii-nu*	*muN*
	jiru	na-ru=tu=wa	gazjamuN=nu	ʔi-ju-nu	muN
	夜	なる-COND3=CSL=TOP	蚊=NOM	入る-NPST-ADN	もの
	夜になると、蚊が（家の中へ）入るものだから				

jat-i
ja-i
COP-SEQ
だから‥

5.6.3.2　理由

理由の副詞節を形成するのは、原因の接続助詞=tu、=tuni を取る動詞／形容詞述語である。理由の副詞節は、主節の命題を主張する理由を表す。また、5.6.5.1 で取り上げる順接の等位節も、後ろに続く節の理由を表す。

5.6.3.2.1　=tu

理由の副詞節を作る 1 つ目の形は、原因の接続助詞=tu を取る動詞／形容詞述語である。

(5-187) では、nabi=nu na-N=tu「鍋がないから」の動詞述語*na「ない」が接続助詞=tu を取っており、主節 masa+muN cuku-ra-ra-N「料理を作れない」を修飾している。意味的には、主節の命題に対する理由を表している。

名詞句が理由の副詞節として機能する場合には、(5-188) のように、従属節がコピュラ述部構造を取り、コピュラ述語が終助詞=tu を取る。

(5-187) *[nabi=nu n-a-N=tu] masa+muN cuku-ra-ra-N*
nabi=nu na-ran-N=tu masa+muN cuku-ra-ran-N
鍋=NOM ない-NEG-CSL 美味しい+食料 作る-POT-NEG-IND
鍋がないから、料理を作れない。

(5-188) *[akiko ja-N=tu=du] deki-ju-N=doo*
akiko ja-N=tu=du deki-ju-N=doo
あきこ COP-IND=CSL=FOC 出来る-NPST-IND=SFP
あきこだから出来るよ。

5.6.3.2.2 =tuni

理由の副詞節を作る 2 つ目の形は、原因の接続助詞=tuni を取る動詞または形容詞述語である。

(5-189) では、oo-sja-N=tuni「危ないから」のように、従属節の形容詞述語が接続助詞=tuni を取っており、主節 Maa=niti=wa kuruma mat-u-Nna=joo「そこでは車を待つなよ」を修飾している。意味的には、主節で述べる要求の理由を表している。

(5-189) *[oo-sja-N=tuni] Maa=niti=wa kuruma mat-u-Nna=joo*
oo-sja-N=tuni Maa=niti=wa kuruma mat-u-runa=joo
危ない-ADJ-IND=CSL そこ=LOC2=TOP 車 待つ-PROG-PROH=SFP
危ないから、そこでは車を待っているなよ。

5.6.3.3 時

時の副詞節を形成するのは、名詞 tuki「時」を主要部とする名詞句である。時の副詞節は、主節の命題が成立する時を表す。

(5-190) では、wacja=ga iku-saat-a-N tuki=wa=joo「私が小さかった時は」が tuki「時」を主要部とする名詞句となっており、kunigami=nu mura=wa biNboo jat-i「国頭の集落は貧乏で」という主節の命題が成立した時を表している。

(5-190) *[wacja=ga iku-saat-a-N tuki=wa=joo] kunigami=nu*
wacja=ga iku-sat-a-nu tuki=wa=joo kunigami=nu
1PL=NOM 小さい-ADJ-PST-ADN 時=TOP=SFP 国頭=GEN
私達が小さかった時はね、国頭の

mura=wa *biNboo* *jat-i=joo*
mura=wa biNboo ja-i=joo
集落=TOP 貧乏 COP-SEQ=SFP
集落は貧乏でね

5.6.4 補文節

主節の項や、補語になる節を「補文節」と呼ぶ。補文節には、(a) 名詞化され、主節の主語や目的語になる節、(b) 引用の内容を表す節、(c) 疑問の内容を表す節、がある。

5.6.4.1 名詞化

名詞化され、主語や目的語として働く補文節を形成するのは、補文接辞-sji を取る動詞述語である。

(5-191) では、asa ui-ju-sji「朝起きるの」の動詞*ui「起きる」が補文接辞-sji を取っており、補文節として主節 nii-sa at-a-N=gi「遅かったの？」の主語になっている。

(5-192) では、wa=ga mic-jut-a-sji「私がみていたの」の動詞述語*mi「見る」が補文接辞を取っており、補文節として主節 aN kwaa=wa kizuk-adanat-a-N「あの子は気付かなかった」の目的語になっている。

(5-191) *[asa* *ui-ju-sji]=nu* *nii-sa* *at-a-N=gi?*
asa ui-ju-sji=nu nii-sa a-a-N=gii
朝 起きる-NPST-COMP=NOM 遅い-ADJ COP-PST-IND=EVD
朝起きるのが、遅かったの？

(5-192) *[wa=ga* *micj-ut-a-sji]* *aN* *kwaa=wa* *<kizuk>-adanat-a-N*
wa=ga mi-u-a-sji aN kwaa=wa kizuk-radana-a-N
1SG=NOM 見る-CONT-PST-COMP あの 子=TOP 気付く-NEG-PST-IND
私が見ていたのを、あの子は気付かなかった。

5.6.4.2 引用

引用の補文節を形成するのは、引用の助詞=di である。引用の補文節は、*ʔi「言う」, Muu「思う」などの動詞の補語となり、動詞が表す動作の内容を表す。

(5-193) では、引用の助詞=di が、節 jaa=nu sjigutu=wa cjui=sji s-ju-mu「家の仕事は一人でする」に接続し、動詞*Muu「思う」の内容を表している。

(5-193) *[jaa=nu sjigutu=wa cjui=sji s-ju-mu=di]* *Muut-i*
jaa=nu sjigutu=wa cjui=sji sji-ju-mu=di Muu-i
家=GEN 仕事=TOP 一人=INS する-NPST-REP=QT 思う-SEQ
家の仕事は一人ですると思って働けよ。

hatarak-i=joo
hatarak-ri=joo
働く-IMP=SFP
働けよ。

また、引用の助詞=di と、*ʔi「言う」が文法化したと思われる形式に、=dicji、=cji「~と言って」がある。これらの助詞を用いた節は、発言や思考の動詞述語なしに、それ自体が発言や意図の内容であることを表す。

(5-194) では、wacja=mu jaa=niti ugam-aa「私たちも家で（神石を）拝もう」が引用の助詞=dicji を伴うことで、引用の補文節として機能している。主節に「言う」などの発言を表す動詞はないが、主節の主語 wacja ama「私達の母」の意図または発言を表す内容になっている。

(5-195) でも、jaa=niti=mu ugam-aa「家でも（神石を）拝もう」が引用の助詞=cji を伴い、引用の補文節として機能している。主節に「言う」などの発言を表す動詞はないが、主節の主語 wacja ama「私達の母」の意図または発言を表す内容になっている。

(5-194) *wacja ama=ga [wacja=mu jaa=niti ugam-aa]=dicji uN isji*
wacja ama=ga wacja=mu jaa=niti ugam-raa=dicji uN isji
1PL 母=NOM 1PL=ADD 家=LOC2 拝む-INT=QUOT その 石
私達の母が「私たちも（神石を）家で拝もう」と

mukoo=kara mucj-i kicj-i jaa=ni kazat-i
mukoo=kara mut-i ku-i jaa=ni kaza-i
向こう=ABL 持つ-SEQ 来る-SEQ 家=LOC1 飾る-SEQ
向こうから持ってきて、家に飾ってあったんだよ。

at-a-N=gi=joo
a-a-N=gi=joo
ある-PST-IND=EVD=SFP
あったんだよ。

(5-195) *wacja ama=ga… [jaa=niti=mu ugam-aa]=cji.. bisji=nu sacji=nu*
wacja ama=ga jaa=niti=mu ugam-raa=cji bisji=nu sacji=nu
1PL 母=NOM 家=LOC2=ADD 拝むʔ-INT=QUOT ビシ=GEN 先=GEN
私達の母が「家でも（神石を）拝もう」と、ビシ（地名）の先の

nii=kara isji mucj-i ku-ru=tu
nii=kara isji mut-i ku-ru=tu
場所=ABL 石 持つ-SEQ 来る-COND3=CSL
ところから、石を持ってくると‥

5.6.4.3 疑問

疑問の補文節を形成するのは、疑問の助詞=ka である。疑問の補文節は、*waka「分かる」*wasjiri「忘れる」など、知識を表す動詞の補語となり、知識の内容を表す。

(5-196) では、nuudi ʔju-N「何と言う」が疑問助詞=ka を伴い、疑問の補文節として、動詞述語*waka「分かる」の補語になっている。

(5-196) *“mottainai”=di=wa [nuu=di ʔju-N]=ka waka-ra-N=tu=jaa*
<mottainai>=di=wa nuu=di ʔi-ju-N=ka waka-ran-N=tu=jaa
勿体ない=QUOT=TOP 何=QUOT 言う-NPST=Q 分かる-NEG-IND=CSL=SFP
「勿体ない」とは、（方言で）なんと言うか分からないからね。

5.6.5 等位節

単独では完全な発話にならないが、前後の節と修飾関係がなく、主節と対等に近い関係を持つ節を「等位節」と呼ぶ。等位節には、(a) 前の節と後ろの節を順接で繋ぐ節、(b) 前の節と後ろの節を逆接で繋ぐ節がある。

5.6.5.1 順接

順接の等位節を形成するのは、継起接辞-i を取る動詞述語である。順接の等位節は、(a) 後の節の内容に先駆けて起きた出来事、 (b) 後の節の内容を引き起こす原因や理由、を表す。順接の等位節を伴う文では、最初の節で述べられた主語が一文を通じて保持されるのが典型的である[68]。

(5-197) では、tuzji=wa hazjimiti=nu muzji=sji muzji+mee tacj-i「妻は初めての麦で麦ご飯を炊き」kamisama=ni sjiit-i「神様に供え」の動詞述語が継起形であり、動作が順番に起きて

[68] これに対し、条件節などでは主節と従属節で主語が異なることが多い。したがって条件節などは、スイッチリファレンス（switch reference）のシステムを持っているとも考えられる。

いることを表している。この例文では、最初の節は等位節であり、その主語は tuzji「妻」であるので、主節の主語も同じく tuzji「妻」となる。

(5-197) *[tuzji=wa* *hazjimiti=nu* *muzji=sji* *muzji+mee* *tacj-i]*
tuzji=wa hazjimiti=nu muzji=sji muzji+mee tat-i
妻=TOP 初めて=GEN 麦=INS 麦+ご飯 炊く-SEQ
妻は初めての麦で麦ご飯を炊き、

kamisam=ni *sjiit-i* *wutu=ni=mu* *izjacj-a-N*
kamisama=ni sjii-i wutu=ni=mu izjas-a-N
神様=LOC1 供える-SEQ 夫=LOC1=ADD 出す-PST-IND
神様に供えて、夫にも出した。

順接の等位節の 2 つ目の機能として、後の節の内容を引き起こす原因や理由の提示がある。

(5-198) では、引用節 cjicjoo=niti Maarit-i=du「チチョー（岩場の地名）で生まれて」の動詞述語が継起接辞を取っており、順接の等位節として、iwao=dicji cjikit-a-mu「いわおと（名を）付けた」の理由を表している。

(5-199) では、nicjijoobi jat-i「日曜日だから」のコピュラ動詞*ja が継起形であり、順接の等位節として、主節 gakkoo=cji moo-ra-N「学校にいらっしゃらない」の理由を表している。

(5-198) *[cjicjoo=niti* *Maarit-i=du]* *iwao=dicji*
cjicjoo=niti Maari-i=du iwao=dicji
チチョー=LOC2 生まれる-SEQ=FOC いわお=QUOT
チチョー（地名）で生まれたから「いわお」と

cjikit-a-mu=di *ʔjuu-nu* *taikeNki* *wana* *micj-a-N*
cjiki-a-mu=di ʔi-ju-nu taikeNki wana mi-a-N
付ける-PST-EVD=QUOT 言う-NPST-ADN 体験記 1SG 見る-PST-IND
付けたという体験記を私は見た。

(5-199) *[nicjijoobi* *jat-i]* *gakkoo=cji* *moo-ra-N=doo*
nicjijoobi ja-i gakkoo=cji moo-ran-N=doo
日曜日 COP-SEQ 学校=DIR 行く.HON-NEG-IND=SFP
日曜日だから、（校長先生は）学校へいらっしゃらないよ。

なお muN jati という、形式名詞 muN とコピュラ述語の継起形を用いる形式も「理由」を表す等位節としてよく現れる。

(5-200) では、*koi「太る」が形式名詞 muN を修飾し、コピュラ述語*ja「だ」が継起接辞を取っている。このことで、従属節 koit-a-nu muN jat-i「太ったもので」は、主節 ojacu jamit-a-N「おやつをやめた」の理由を表している。

(5-200) *[koit-a-nu* *muN* *jat-i]* *<ojacu>* *jamit-a-N*
koi-a-nu muN ja-i ojacu jami-a-N
太る-PST-ADN もの COP-SEQ おやつ やめる-PST-IND
太ったから、おやつをやめた。

5.6.5.2 逆接

逆接の等位節は、主節と反対の内容や、主節からは想定できない前提を表す。逆接の等位節を形成するのは、逆接接辞-sjiga を取る動詞述語である。

(5-201) では、mukasji=wa jarabu+gee kam-ita-sjiga「昔は蘇鉄粥を食べたけど」の動詞述語*kam「食べる」が逆接形であり、主節 nama=wa zeetaku nat-i jarabu+gee=wa kam-a-N「今は贅沢になって蘇鉄粥は食べない」と反対の内容を表している。

(5-201) *[mukasji=wa* *jarabu+gee* *kam-ita-sjiga]* *nama=wa* *zeetaku*
mukasji=wa jarabu+kee kam-juta-sjiga nama=wa zeetaku
昔=TOP 蘇鉄+粥 食べる-PST2-CEX 今=TOP 贅沢
昔は蘇鉄粥を食べていたけれど、今は贅沢に

nat-i *jarabu+gee=wa* *kam-a-N*
na-i jarabu+kee=wa kam-ran-N
なる-SEQ 蘇鉄+粥=TOP 食べる-NEG-IND
なって蘇鉄粥は食べない。

5.6.6 並列節

節が表す命題全体ではなく、述部が述べる動作や状態を並列に並べる節を「並列節」と呼ぶ。並列節には、述部が表す内容を同等に並べる「並列」と、述部が表す内容を、主節に対して対比的に提示する「対比」がある。

5.6.6.1 並列

並列接辞-taja を取る動詞接辞は、述部が表す内容を並列的に並べる。

(5-202) では、waN osjime arot-aja「私のおしめをあらったり」、kwaamui sj-aja「子守をしたり」の動詞述語がそれぞれ並列接辞-taja を取っており、動作を並べて述べている。

(5-202) *[waN osjime aro-taja] [kwaamui sj-aja] sj-a-N=dicji=joo*
waN osjime aro-taja kwaamui sji-taja sji-a-N=dicji=joo
1SG おしめ 洗う-SEL 子守 する-SEL する-PST-IND=QUOT=SFP
（従妹は）私のおしめを洗ったり、子守をしたりしたってよ。

5.6.6.2 対比

否定の継起接辞-razji, -raNko を取る動詞述語は、述部が表す内容を、対比的に並べる。

5.6.6.2.1 -razji

対比の並列節を形成する 1 つ目の形は、否定の継起接辞-razji を取る動詞述語である。(5-203) では、コピュラ動詞*a が否定の継起接辞を取っており、節 zjaazja a-razj-i「（家にいたのは）祖父ではない」が表す内容を、主節 azji=du jataN「（家にいたのは）祖母である」と対比させる形で提示している。

(5-203) *jaa=ni ut-a-sji=wa [zjaazja a-razj-i] azji=du*
jaa=ni ut-a-sji=wa zjaazja a-ran-i azji=du
家=LOC1 いる-PST-COMP=TOP 祖父 COP-NEG-SEQ 祖母
家にいたのは、祖父ではなくて、祖母だったよ。

jat-a-N=doo
ja-a-N=doo
COP-PST-IND=SFP

5.6.6.2.2 -raNko

対比の並列節を形成する 2 つ目の形は、否定の継起接辞-raNko を取る動詞述語である。(5-204) では、動詞*misji「見せる」が否定の継起接辞を取っており、節 terebi=wa misji-raNko「テレビは見せないで」が表す内容を、主節 icji=mu niNgjoo=sji asjib-acj-a-N「いつも人形で遊ばせた」が表す内容と対比的に提示している。

(5-204) *[terebi=wa misji-raNko] icjimu=naa niNgjoo=sji*
terebi=wa misji-raNko icjimu=naa niNgjoo=sji
テレビ=TOP 見せる-NEG.SEQ いつも=SFP 人形=INS
テレビは見せないで、いつも人形で

asjib-acj-a-N

asjb-as-a-N

遊ぶ-CAUS-PST-IND

遊ばせた。

6章　語用論・機能面からの記述

6 章では、国頭方言の語用論的側面の記述を行う。また、5 章までで扱った形態統語論の幾つかのトピックについて、機能面から記述を行う。6.1 節では情報構造を扱い、6.2 節ではテンス・アスペクトについて述べる。6.3 節でモダリティの記述を行い、6.4 節で待遇表現の体系についてまとめる。

6.1　情報構造

6.1 節では、文の情報構造について、特に主題 (topic) と焦点 (focus) に着目して論じる。文の情報構造とは、談話における語用論的な構造が、文の中で形式的に表わされたものである[69]。通言語的に、情報構造は、(a) イントネーション、(b) 特別な文法標識、(c) 構成素の統語的形式、(d) 語順、によって表される。国頭方言においては、このうち (a) 韻律（イントネーション）と、(b) 文法標識（主題助詞・焦点助詞）が情報構造の主要な標識となるが、語順が関わる現象も観察される。

6.1.1　情報構造の 4 つのタイプ

Lambrecht (1994) によると、文の情報構造には 4 つの種類がある。1 つ目は Topic-comment type である。そこでは、文で提示される主張 (assertion) の目的は、談話上すでに確立されている指示対象について叙述することにある[70]。2 つ目は Identificational type である。そこにおける主張の目的は、新たな項と、既に登場している「項を欠いた命題 (open proposition) 」の関係を設定することにある[71]。3 つ目は event-reporting type である。そこにおける主張の目的は、既に述べられている主題や open proposition とは関係のない命題を述べることにある[72]。4 つ目は、background establishing type である。そこでは、他の命題の背景となる命題が述べられる[73]。(6-1) に、Lambrecht (1994) で挙げられているそれぞれの文例を挙げる。

---

[69] The information structure of sentence is the formal expression of the pragmatic structuring of a proposition in a discourse (Lambrecht 1994: 5)

[70] the purpose of the assertion is to pragmatically predicate some property of an already established discourse referent (Lambrecht 1994: 126)

[71] the assertion has the purpose of establishing a relation between an argument and a previously evoked open proposition (Lambrecht 1994: 126)

[72] the prurpose of the assertion is to express a proposition which is linked neither to an already established topic nor to a presupposed open proposition. (Lambrecht 1994: 126)

[73] a pragmatically presupposed proposition serves as a scene-setting topic for another proposition, which may itself be of any of the other three types. (Lambrecht 1994: 126)

(6-1)　情報構造のタイプ

a. Topic-comment type

What did the children do next? ／ The children went to school.

b. Identificational type

Who went to school? ／ The children went to school.

c. Event-reporting type

What happened? ／ The children went to school!

d. Background establishing type

After the children went to school, he had to clean the house and go shopping for the party.

このうち a, b, c は、後で述べる焦点 (focus) の構造から定義し直すとすれば、それぞれ「述語焦点 (predicate focus) 」「項焦点 (argument focus) 」「文焦点 (sentence focus) 」にあたる。

6.1.2　主題 (topic)

6.1.2.1　主題の定義

主題とは、文が「何について述べているか」と言う、その叙述の対象を指す。Lambrecht (1994) によると、ある指示対象 (referent) が、ある命題の「主題」と解釈されるのは、ある状況下で、その命題がその指示対象に関すると解釈できる場合、すなわち聞き手の持つその指示対象の知識に関連し、かつその知識を増やす情報を表すと解釈される場合である[74]。なお、主題の叙述をする部分は「解説 (comment) 」と呼ばれる。

6.1.2.2　主題標識

国頭方言は、主題を標示する手段として、副助詞=wa（以下では、「主題助詞」と呼ぶ）と語順を用いる。

6.1.2.3　主題助詞= wa

国頭方言は、主題を=wa によって形態的に標示する。ただし、=wa には主題を標示する機能の他に、対比対象を標示するという機能もある。対比を標示する機能については、5 章 2 節「名詞句構造」で述べている。

---

[74] A referent is interpreted as the topic of a proposition if in a given situation the proposition is construed as being about this referent, i.e. as expressing information which is relevant to and which increases the addressee's knowledge of this referent (Lambrecht 1994: p131)

(6-2) では、A が B の mjaa「猫」の近況を尋ねたのに対し、B がその猫に関する説明をしている。このとき、B の発話は waN mjaa「私の猫」という、A と B の間で既に共有された指示対象に関して、A の知識を増やすものである。したがって、B の発話は waN mjaa「私の猫」が主題となる文であると言える。この時、主題である waN mjaa「私の猫」は主題助詞=wa を接続している。

(6-2) *A)* *ura* *mjaa* *icja* *sji-i=joo?*
ura mjaa icja sji-i=joo
2SG 猫 どう する-SEQ=WHQ
あんたの猫、どうしたの？

B) *waN* *mjaa=wa* *sjizj-a-N=doo*
waN mjaa=wa sjin-a-N=doo
1SG 猫=TOP 死ぬ-PST-IND=SFP
私の猫は死んだよ。

ここで主題が表示されている事実は、他の情報構造タイプの文と対照すると明瞭になる。例えば、(6-3) は (6-1) c の情報構造のタイプである。この文では、A が「どうしたの？」と尋ねたのに対し、B が「猫が死んだ」という出来事全体を回答している。この時、B の発話より前に、話し手と聞き手が共有していた指示対象や命題はないので、B の発話は新しい命題を述べていると言える。このため (6-3) B は「主題」がない無題文だと考えられる。この時、waN mjaa「私の猫」は、主格助詞=nu を接続している。

(6-3) *A)* *icja* *sji-i=joo?*
icja sji-i=joo
どう する-SEQ=WHQ
どうしたの？

B) *waN* *mjaa=nu* *sjizj-uut-i=djaa*
waN mjaa=nu sjin-u-i=djaa
1SG 猫=NOM 死ぬ-CONT-SEQ=SFP
私の猫が死んだんだよ。

6.1.2.4 語順

主題は、主題助詞=wa によって形態的に標示される他に、文頭に来るという語順の性質がある。

(6-4) (6-5) は、昔ばなしの一節である。(6-4) に続く (6-5) は、(6-4) で述べられた命題を受け、その命題と関係づけられた項を提示している。ここでは、hanasji sj-uut-a-sji「話をしていたの」が主題であり、juigi=nu kamisama=tu nira=nu kamisama「寄り木の神様とニラの神様」が主題について説明する解説である。無題文における基本語順は SOV であるので、もしこの文が無題文であるならば、主語項である juigi=nu kamisama=tu nira=nu kamisama「寄り木の神様とニラの神様」が述部 hanasji sj-uut-a-N「話をしていた」に先行する。しかしながら、ここでは述部が主題であるため、語順が変わり、主語項が文頭に移動している。

(6-4)

amaku	*sjaa-tu*	*hanasji+gui=nu*	*cjik-at-i*	*kicj-a-N*
amaku	sji-a-tu	hanasji+fui=nu	cjik-ra-i	ku-a-N
しばらく	する-PST-COND	話+声=NOM	聞く-POT-SEQ	くる-PST-IND

しばらくすると、話し声が聞こえてきた。

(6-5)

hanasji	*s-juuta-sji=wa*	*juigi=nu*	*kamisama=tu*	*nira=nu*
hanasji	sji-juta-sji=wa	juigi=nu	kamisama=tu	nira=nu
話	する-PST2-COMP=TOP	寄り木=GEN	神様=COM	ニラ=GEN

話をしていたのは、寄り木の神様とニラの

kamisama=du	*at-a-N*
kamisama=du	a-a-N
神様=FOC	COP-PST-IND

神様だった。

6.1.3 焦点 (focus)

話し手が伝える、聞き手の前提にない新情報を「焦点」と呼ぶ[75]。ここでいう「新情報」とは、「話し手が発話によって、聞き手に新たな知識を加えようと思っている情報」を指す[76]。

[75] The semantic component of a pragmatically structured proposition whereby the assertion differs from the presupposition (Lambrecht 1994: 212)

[76] Old information is the sum of "knowledge" evoked in a sentence which a speaker assumes to be already available in the hearer's mind at the time of utterance. "new information" is the information added to that knowledge by the utterance itself. (Lambrecht 1994: 50)

6.1.3.1 焦点の分類

焦点は、(a) 焦点が担う情報のタイプと、(b) 焦点を担う領域（ドメイン）の違い、によって、幾つかの分類が出来る。国頭方言は、(a) (b) の種類によって焦点標識の現れ方が異なるため、まず、それぞれの分類について確認する。

6.1.3.1.1 焦点のタイプ

焦点は、焦点が担う情報の違いにより、「情報焦点」と「対比焦点 (contrastive focus) 」に分類される。焦点は「聞き手の前提にない新情報」を担うが、この「新情報」が聞き手の前提を覆すものとして提示されるとき、その焦点を「対比焦点」という。一方で、「新情報」が単に聞き手の前提にない情報として提示されるとき、その焦点を「情報焦点」と呼ぶ。

6.1.3.1.1.1 情報焦点

焦点によって担われる新情報、聞き手の前提にない情報として提示されるとき、その焦点を「情報焦点」と呼ぶ。

(6-6) では、A が「誰が泣いているのか？」と動作主を聞いているのに対し、B が「アキラ」という動作主を、新しい情報として与えている。この時、A には特定の前提がないことが質問から伺えるため、akira「アキラ」は情報焦点を表していると言える。

(6-6) *A)* *taN=ga* *nacj-u-i=joo?*
taN=ga nak-u-i=joo
誰=NOM 泣く-CONT-Q=WHQ
誰が泣いているの？

B) *akira=ga=du* *nacj-u-N=djaa*
akira=ga=du nak-u-N=djaa
あきら=NOM=FOC 泣く-CONT-IND=SFP
あきらが泣いているよ。

6.1.3.1.1.2 対比焦点

焦点によって担われる新情報が、聞き手の前提を覆すものとして提示されるとき、その焦点を「対比焦点」という。

(6-7) では A が「米が無い」ということを想定しているのに対し、B がその前提を覆し、「麦が無い」と述べている。このため、B の発話において、A の想定を覆す muzji

「麦」は対比焦点であると言える[77]。

(6-7) *A)* *fumi=nu* *na-N=gi=naa?*
fumi=nu na-ran-N=gi=naa
米=NOM ない-NEG-IND=YNQ
米がないの？

B) *fumi=wa* *ai* *muzji=du* *na-N=djaa*
fumi=wa ai muzji=du na-ran-N=djaa
米=TOP COP.NEG 麦=FOC ない-NEG=IND=SFP
米ではない。麦がないよ。

6.1.3.1.2 焦点ドメイン

焦点を領域（ドメイン）の観点から分類したものには、大きく(a) 項焦点 (argument focus) 、(b) 述部焦点 (predicate focus)、(c) 文焦点 (sentence focus) がある (Lambrecht 1994) 。このうち(a) 項焦点とは、主語項のことを指すため、本稿ではより明示的に「主語項焦点」と呼ぶ。

なお、以下に挙げる例文においては、焦点ドメインを[ ] で標示する。

6.1.3.1.2.1 主語項焦点

主語項が焦点を担う焦点ドメインを「主語項焦点」と呼ぶ。

(6-8) では、A が「誰が泣いているの？」と動作主を尋ねているのに対し、B が utu「弟」という動作主を新情報として与えている。この新情報は主語項によって表されているため、この焦点は「主語項焦点」であると考えられる。

(6-8) *A)* *taN=ga* *nacj-u-i=joo?*
taN=ga nak-u-i=joo
誰=NOM 泣く-CONT-Q=WHQ
誰が泣いているの？

[77] なお、こでは muzji「麦」が主格助詞=nu/=ga を取っていないが、これは述語が「状態」を表す動詞であるためだと考えられる。述語が状態を表す場合に、主格助詞がしばしば省略される傾向がある。

B) *[utu=nu=du]* *nacj-u-N=djaa*
utu=nu=du nak-u-N=djaa
弟=NOM=FOC 泣く-CONT-IND=SFP
弟が泣いているよ。

6.1.3.1.2.2 述部焦点

述部が焦点を担う焦点ドメインを「述部焦点」と呼ぶ。

(6-9) では、A が「お爺さんは何をしているの？」と動作を尋ねているのに対し、B が「お爺さんは酒を飲んでいる」という動作を新情報として与えている。この新情報は述部によって表されているため、この焦点は「述部焦点」であると考えられる。

(6-9) *A)* *zjaazja=wa* *nuu* *sj-u-i=joo?*
zjaazja=wa nuu sj-u-i=joo
祖父=TOP 何 する-CONT-Q=WHQ
お爺さんは何をしているの？

B) *zjaazja=wa* *[saki=du* *nud-u-N=djaa]*
zjaazja=wa saki=du num-u-N=djaa
祖父=TOP 酒=FOC 飲む-CONT-IND=SFP
お爺さんは酒を飲んでいるよ。

6.1.3.1.3 文焦点

文全体が焦点を担う焦点ドメインを「文焦点」と呼ぶ。

(6-10) では、A が「さっきから外を見ているけどどうしたの？」と出来事を尋ねているのに対し、B が「弟が泣いている」という出来事全体（動作主と動作の両方を含む）を新情報として与えている。この新情報は文全体によって表されているため、この焦点は「文焦点」であると言える。後で述べる通り、文焦点においては=du が出現せず、焦点が形態的に標示されない。

(6-10) *A)* *sakki=kara* *sutu* *micj-u-sjiga* *nuudi=kaja?*
sakki=kara sutu mi-u-sjiga nuudi=kaja
さっき=ABL 外 見る-CONT-CNC 何故=Q
さっきから外を見ているけど、どうしたの？

B) *[utu=nu* *nac-uut-i=djaa]*
utu=nu nak-u-i=djaa
弟=NOM 泣く-CONT-SEQ=SFP
弟が泣いているんだよ（泣いていてね）

6.1.3.2 焦点標識

国頭方言の焦点標識には、(a) イントネーション、(b) 焦点助詞、(c) 焦点呼応、が確認されている。

(a) イントネーションについては、疑問文において、焦点の疑問詞でピッチ・レンジが拡大し、その後でピッチ・レンジが縮小する現象が観察される（3 章 4 節「イントネーション」を参照）。

(b) 焦点助詞については、=ga と=du の二つの形式があり、=ga は内容疑問文の中で、=du はそれ以外の文の中で現れる（5 章 2 節「名詞句構造」を参照）。

(c) 焦点呼応については、節内に焦点助詞=du が現れる場合に、述語句が係り結び形-ru を取る場合がある（5 章 2 節「名詞句構造」を参照）。

このうち、最も典型的に用いられるのは、(b) 焦点助詞=du による標示である。ただし、全ての焦点環境において=du が出現する訳ではない。このため=du の出没を決定する要因について、6.1.3.3 で検討する。

6.1.3.3 =du の出没

国頭方言は焦点を焦点助詞=du, =ga によって標示するが、談話上焦点があっても、必ずしも焦点助詞が現れる訳ではない。

下地（2015）, Shimoji (2017) では、琉球諸語の=du の出現のしやすさが、(a) 焦点タイプ、(b) 焦点ドメイン、(c) 述語タイプ、によって(6-11) のような傾向を持つと述べている。

(6-11) 焦点助詞=du の出現のしやすさ（下地 2015, Shimoji 2017）
a. 焦点タイプ： 対比 ＞WH 応答 ＞WH
b. 焦点ドメイン： 主語項焦点 ＞ 述部焦点 ＞ 文焦点
c. 述語タイプ： 動詞述語 ＞ 形容詞述語

これに基づき本稿では、(a) 焦点タイプ、(b) 焦点ドメイン、(c) 述語句の意味、が焦点助詞の出没をコントロールする変数であると仮定し、質問調査を元に、どのような場合において焦点助詞が現れやすいかを検討した。その結果、国頭方言においても、この 3 つの変数により焦点助詞=du の出没が予測できることを以下に述べる。

6.1.3.3.1 調査方法

70 代の話者 (TN) を対象に、テレビ電話 (Skype) を通じて質問調査を行った。質問票は、焦点タイプ、焦点ドメイン、述語句を変数とした質問票（下地理則氏から提供）と、著者の追加質問票を用いた。2 回の調査においては、焦点助詞=ga、および係り結び形は現れなかったが、これらの形式は著者の自然談話データベース上に一定数存在しており、こうした形式がどのような条件下で出現し得るのかは今後の課題である。焦点助詞=ga, および係り結び形についての、自然談話資料のデータは 4 章 5 節「その他の品詞」で記述している。

6.1.3.3.2 焦点タイプ

まず「焦点タイプ」による=du の出没を検討する。焦点タイプに関して言えば、「情報焦点」と「対比焦点」に分類することが妥当である。両者で振る舞いに違いが現れるのは、焦点ドメインが「主語項」で、述語句が「状態を表す動詞」である場合である。

(6-12), (6-13) は焦点ドメイン（主語項）と述語句の意味（状態）を固定し、焦点タイプのみを変えた文である。(6-12) B は「情報焦点」の文で、焦点の項に=du が接続しないが、(6-13) B は対比焦点の文で、焦点の項に=du が接続している。

(6-12) *A)* *nuu=nu* *na-azj-i=joo?*
nuu=nu na-ran-i=joo
何=NOM ない-NEG-Q=WHQ
何がないの？

B) *[muzji]=nu* *na-N*
muji=nu na-ran-N
麦=NOM ない-NEG-IND
麦がない。

(6-13) *A)* *fumi=nu* *na-N=gi=naa?*
fumi=nu na-ran-N=gi=naa
米=NOM ない-NEG-IND=YNQ
米がないの？

B) *fumi=wa* *ai* *[muzji]=du* *na-N=djaa*
fumi=wa ai muzji=du na-ran-N=djaa
米=TOP COP.NEG 麦=FOC ない-NEG=IND=SFP
米ではない。麦がないよ。

6.1.3.3.3 焦点ドメイン

次に「焦点ドメイン」による=du の出没を検討する。焦点ドメインに関して言えば、「主語項／述部焦点」と「文焦点」とに分類することが妥当である。両者に振る舞いの違いが現れるのは、焦点タイプが「情報」で、述語句が「動作を表す動詞」の時である。

(6-14), (6-15), (6-16) は、焦点タイプ（情報）と述語句の意味（動作）を固定し、焦点ドメインのみ変えた文である。

(6-14) B は焦点ドメインが主語項、(6-15) B は焦点ドメインが述部であり、いずれも焦点ドメインの中に=du が出現している。一方で、(6-16) B は焦点ドメインが文であり、=du が出現しない。

(6-14) *A)* *taN=ga* *nacj-u-i=joo?*
taN=ga nak-u-i=joo
誰=NOM 泣く-CONT-Q=WHQ
誰が泣いているの？

B) *[utu]=nu=du* *nacj-u-N=djaa*
utu=nu=du nak-u-N=djaa
弟=NOM=FOC 泣く-CONT-IND=SFP
弟が泣いているよ。

(6-15) *A)* *utu=wa* *nuu* *sj-u-i=joo?*
utu=wa nuu sj-u-i=joo
弟=TOP 何 する-CONT-Q=WHQ
弟は何をしているの？

B) *utu=wa* *[nacj-i=du* *u-N]*
utu=wa nibcj-i=du u-N
弟=TOP 泣く-SEQ=FOC いる-IND
弟は泣いている。

(6-16) *A)* *sakki=kara* *sutu* *micj-u-sjiga* *nuudi=kaja?*
sakki=kara sutu mi-u-sjiga nuudi=kaja
さっき=ABL 外 見る-CONT-CEX 何故=Q
さっきから外を見ているけど、どうしたの？

B) *[utu=nu* *nac-uut-i=djaa]*
utu=nu nak-u-i=djaa
弟=NOM 泣く-CONT-SEQ=SFP
弟が泣いているんだよ（泣いていてね）

6.1.3.3.4 述語タイプ

最後に「述語タイプ」による=du の出没を検討する。下地（2015）, Shimoji (2017) では「述語タイプ」を動詞述語と形容詞述語に分けて検証を行っているが、筆者の調査の範囲では、品詞の違いというよりも、「述語句の意味」によって=du の出没に違いがみられるというデータを得た。このため、ここでは「述語句の意味」による違いを述べる。

「述語句の意味」に関して言えば、「語彙的に動作を表す動詞」と「語彙的に状態を表す動詞」に分類することが妥当である。両者に振る舞いの違いが見られるのは、焦点タイプが「情報焦点」で、焦点ドメインが「主語項」の時である。

(6-17), (6-18)は焦点タイプ（情報焦点）と焦点ドメイン（主語項）を固定し、述語句の意味のみ変えた文である。(6-17) B は述語句*nak「泣く」が動作を表す動詞であり、焦点の主語項に=du が接続している。一方で、(6-18) B は述語句*na「ない」が状態を表す動詞であり、焦点の主語項に=du が接続していない。

(6-17) *A)* *taN=ga* *nacj-u-i=joo?*
taN=ga nak-u-i=joo
誰=NOM 泣く-CONT-Q=WHQ
誰が泣いているの？

B) *[utu]=nu=du* *nacj-u-N=djaa*
utu=nu=du nak-u-N=djaa
弟=NOM=FOC 泣く-CONT-IND=SFP
弟が泣いているよ。

(6-18) *A)* *nuu=nu* *na-azj-i=joo?*
nuu=nu na-ran-i=joo
何=NOM ない-NEG-Q=WHQ
何がないの？

B)	*[nabi]=nu*	*na-N*
	nabi=nu	na-ran-N
	鍋=NOM	ない-NEG-IND

鍋がない。

6.1.3.3.5　3 変数の検証

焦点助詞=du の出没に影響を与える変数として、(a) 焦点タイプ、(b) 焦点ドメイン、(c) 述語句の意味を挙げたが、ここでは、これらのうちどの変数がより=du の出没に影響を与えるのかを論じる。結論を先取りすると、=du が現れ得る条件[78]とは、(a) 焦点ドメインが「主語項／述部焦点」であり、かつ、(b) 焦点タイプが「対比焦点」であるか、述語句の意味が「動作」である場合である。

=du の出現に関して、(a) 焦点タイプは「対比焦点」「情報焦点」、(b) 焦点ドメインは「主語項焦点／述部焦点」[79]「文焦点」、(c) 述語句の意味は「動作」「状態」とそれぞれ 2 分類ずつに分けられる。従って、3 変数の組み合わせは 8 通りある。

夫々の組み合わせにおける、=du の出没状況は表 6-1 のようにまとめられる。既出の例文については例文番号を記した。1, 6, 7, 8 の例文は初出であるため、表に続き説明する。

[78] 本稿では詳しく検討出来なかったが、焦点ドメインが「項を含まない述部」で、かつ述語句が 1 語でしか表現できない構造（例えば「過去形」）の場合、特に「情報焦点」において、=du が出現しにくいことを確認している。それ以外の「主語項／述部焦点」においては、上で述べた条件が揃えば、=du が出現すると考えて良い。

[79] 焦点ドメインとしては、「主語項焦点」と「述部焦点」が分けられるが、6.1.1.3 の結果より、主語項焦点・述部焦点はいずれも=du が出現するのに対し、文焦点は=du が出現しないという結果が得られたことから、=du の出現に関しては「主語項焦点／述部焦点」と「文焦点」の 2 分類に出来ると考える。

表 6-1 ３変数の組み合わせと=du の出現

	ドメイン	タイプ	意味	du	例
1	主語項・述部	対比	動作	＋	(6-19) waN utu=wa arazji akira=ga=du nacjuN=doo 「私の弟ではなくて、あきらが泣いているよ」
2	主語項・述部	対比	状態	＋	(6-7) fumi=wa ai muzji=du naN=djaa. 「米ではない、麦がないよ」
3	主語項・述部	情報	動作	＋	(6-14) utu=nu=du nacjuN=doo 「弟が泣いているよ」
4	主語項・述部	情報	状態	－	(6-12) muzji=nu naN 「麦がない」
5	文	情報	動作	－	(6-16) utu=nu nacjuuti=djaa 「弟が泣いているんだよ」
6	文	情報	状態	－	0 tunari=nu jaa=nu hanarasja ati 「隣の家がうるさくて」
7	文	対比	動作	－	(6-21) inago=nu tuduti=djaa 「イナゴが飛んでいてね」
8	文	対比	状態	－	(6-22) ai jaa=nu uhjaasa uti=gaa 「いや、家が大きくてね」

表 6-1 の (6-19) では、等位節で聞き手の前提を形成する情報を提供しており、これを覆す主節の主語項が対比焦点になっている。また、述語句*nak「泣く」は動作を表す動詞である。

(6-19)	*waN*	*utu=wa*	*a-razj-i*	*[akira]=ga=du*	*nac-u-N=doo*
	waN	utu=wa	a-ran-i	akira=ga=du	nak-u-N=doo
	1SG	弟=TOP	COP-NEG-SEQ	あきら=NOM=FOC	泣く-CONT-IND=SFP
	私の弟ではなくて、あきらが泣いているよ。				

表 6-1 の (6-20) では、A が怒っている理由を尋ねているのに対し、B が「隣の家がうるさい」という理由を述べており、文全体が情報焦点になっている。また、述語句は*hamara「うるさい」で状態を表している。

(6-20) *A)* *nuudi* *gaNsji* *amat-u-i=joo?*
nuudi gaNsji ama-u-i=joo
なぜ そんなに 怒る-CONT-Q=WHQ
なんでそんなに怒っているの？

B) *[tonari=nu* *jaa=nu* *hamara-sja* *at-i]*
tonari=nu jaa=nu hamara-sja a-i
隣=GEN 家=NOM うるさい-ADJ COP-SEQ
隣の家がうるさくて。

表 6-1 の (6-21) では、外がうるさい理由について A が「カラスが鳴いている？」と聞いているのに対し、B が「いなごが飛んでいる」という別の理由を述べており、文全体が対比焦点になっている。また、述語句は*nak「鳴く」という動作を表している。

(6-21) *A)* *asa=Ntani* *hamara-sja* *aa-sjiga* *garasji=nu* *nacj-ut-i=naa?*
asa=Ntani hamara-sja a-sjiga garasji=nu nak-u-i=naa
朝=TERM うるさい-ADJ COP-CNC カラス=NOM 鳴く-CONT-Q=YNQ
朝からうるさいけど、カラスが鳴いているの？

B) *ai* *[inago=nu* *tud-ut-i=djaa]*
ai inago=nu tub-u-i=djaa
いや いなご=NOM 飛ぶ-CONT-SEQ=SFP
いや、いなごが飛んでいてね。

表 6-1 の (6-22) は、友人がある人のことを羨ましがっているのを聞いて「なぜ羨ましいのか」を尋ねる文である。A が「奥さんが綺麗なの？」と尋ねるのに対し、B は「家が大きい」という別の理由を述べており、文全体が対比焦点になっている。また、述語句は*uhja「大きい」という状態を表している。

(6-22) *A)* *tuzji=nu* *cjura-sa* *at-i=naa?*
tuzji=nu cjura-sa a-i=naa
妻=NOM 綺麗-ADJ COP-SEQ=YNQ
奥さんが綺麗なの？

B) *ai* *[jaa=nu* *ujhaa-sa* *at-i=gaa]*
ai jaa=nu uhja-sa a-i=gaa
いや 家=NOM 大きい-ADJ COP-SEQ=EMPH
いえ、家が大きくてね。

以上の分析より、国頭方言において=du が出現する条件とは、(a) 焦点ドメインが「項／述部焦点」であり、かつ、(b) 焦点タイプが「対比焦点」であるか、述語句の意味が「動作」である場合であると結論付けられる。

6.1.3.4 焦点助詞の位置

焦点助詞が出現する環境において、焦点助詞=du がどの位置に現れるかを論じる。=du の位置は「焦点ドメインが項を含む場合」とそれ以外で異なる。

6.1.3.4.1 焦点ドメインが項を含む場合

焦点ドメインが項を含む時、=du は項の後に接続する。

主語項が焦点ドメインである (6-23) B においては、主語項である akira=ga「あきら」の後に=du が接続している。

(6-23) *A)* *taN=ga* *isu* *jabut-i=joo?*
taN=ga isu jabu-i=joo
誰=NOM 椅子 壊す-SEQ=WHQ
誰が椅子を壊したの？

B) *[akira]=ga=du* *jabut-a-N*
akira=ga=du jabu-a-N
あきら=NOM=FOC 壊す-PST-IND
あきらが壊した。

同様に、(6-24) B のように、焦点ドメインが目的語項の時は、目的語項の後ろに=du が接続する。

(6-24) *A)* *zjaazja=wa* *nuu* *nud-u-i=joo?*
zjaazja=wa nuu num-u-i=joo
祖父=TOP 何 飲む-CONT-Q=WHQ
お爺さんは何を飲んでいるの？

B) *zjaazja=wa* *[cjaa]=du* *nud-u-N=djaa*
zjaazja=wa cjaa=du num-u-N=djaa
祖父=TOP 茶=FOC 飲む-CONT-IND=SFP
お爺さんはお茶を飲んでいるよ。

更に、焦点ドメインが項だけではなく、項を含む述部全体である場合にも、=du は目的語項の後ろに接続する。

(6-25) *A)* *zjaazja=wa* *nuu* *sj-u-i=joo?*
zjaazja=wa nuu sj-u-i=joo
祖父=TOP 何 する-CONT-Q=WHQ
お爺さんは何をしているの？

B) *zjaazja=wa* *[saki=du* *nud-u-N=djaa]*
zjaazja=wa saki=du num-u-N=djaa
祖父=TOP 酒=FOC 飲む-CONT-IND=SFP
お爺さんは酒を飲んでいるよ。

6.1.3.4.2 焦点ドメインが項を含まない場合

調査の範囲で「焦点ドメインが項を含まない場合」とは、焦点ドメインが述語句である場合である。述語句は、「継起形／連用形＋補助動詞」または「形容詞＋コピュラ動詞」といった動詞連続となり、前部要素の後に焦点助詞が接続する。

(6-26) B は焦点ドメインが述語句の文である。述語句*nak「泣く」の継続相「泣いている」は*nak「泣く」の継起形と*u「いる」の動詞連続によって表され、=du は前部要素である*nak「泣く」の継起形に後続する。

(6-26) *A)* *utu=wa* *nuu* *sj-u-i=joo?*
utu=wa nuu sj-u-i=joo
弟=TOP 何 する-CONT-Q=WHQ
弟は何をしているの？

B) *utu=wa* *[nacj-i=du* *u-N]*
utu=wa nibcj-i=du u-N
弟=TOP 泣く-SEQ=FOC いる-IND
弟は泣いている。

(6-27) B は焦点ドメインが述語句の文である。述語句*waro「笑う」の過去時制「笑った」は、*waro「笑う」の連用形と*sji「する」の動詞連続によって表され、=du は前部要素である*waro「笑う」の連用形に後続する[80]。

(6-27) *A)* *seNsee=ni* *ama-rat-i* *akira=wa* *nacj-i=naa*
seNsee=ni ama-ra-i akira=wa nak-i=naa
先生=DAT 怒る-PASS-SEQ あきら=TOP 泣く-SEQ=YNQ
先生に怒られて、あきらは泣いたの？

B) *ai* *akira=wa* *nak-azji* *[waroi=du* *sji-a-ru]*
ai akira=wa nak-razji waroi=du sji-a-ru
いや あきら=TOP 泣く-NEG.SEQ 笑う-INF=FOC する-PST-MSB
いや、あきらは泣かないで、笑った。

(6-28) B は焦点ドメインが形容詞述語句の文である。この時、=du は述語句の全部要素である*usu「薄い」の後ろに接続している。

(6-28) *A)* *fuN* *cjaa=wa* *kuju-sa-e?*
fuN cjaa=wa kuju-sa-e
その 茶=TOP 濃い-ADJ-YNQ
そのお茶は濃い？

B) *ai* *uN* *cjaa=wa* *[usu-sa=du* *a-N]*
ai uN cjaa=wa usu-sa=du a-N
いや この 茶=TOP 薄い-ADJ=FOC COP-IND
いや、このお茶は薄いよ。

[80] 但し、過去時制のように通常動詞連続で表さない述語句の場合、特に情報焦点において=du が出現しない例も見られた。こうした事例については 6.1.3.3「=du の出没」においても今後検討に入れる必要がある。

6.2　テンス・アスペクト

6.2 節では、時間に関する文法範疇（テンス、アスペクト）の体系を、話者の認識の情報源（エビデンシャリティー）と関連させながら論じる。北琉球諸方言においては、テンス・アスペクトを表す形式が、二次的にエビデンシャリティーを表すといった特徴があり（島袋・かりまた 2009、工藤・高江洲・八亀 2007、工藤 2004 ほか）、国頭方言もこの特徴を有する。

国頭方言のテンスは、基本的に非過去と過去の 2 項対立であり、アスペクトは完結相と非完結相の 2 項対立である。テンスについて、非過去は標示されないか-ju で表され、過去は-a で表される。アスペクトについて、完結相は標示されないが、非完結相は「動詞の屈折接辞-u」、または「動詞の継起形＋*u「いる」」の動詞連続で表される。

しかし、以上のテンス・アスペクトの枠組みに単純には当てはまらない形式が 2 つ存在する。1 つ目は動詞屈折接辞の-juta という形式である。-juta は (a) 過去の習慣、或いは、(b) 話し手が目撃した、過去の時点において進行中の動作、を表す。(a) はテンス・アスペクトに関わる意味であり、(b) はテンス・アスペクト・エビデンシャリティーに関わる意味である。

もう 1 つの形式は「動詞の継起形＋存在動詞*a」の動詞連続である。この動詞連続は、(a) 完成のアスペクト、或いは、(b) 痕跡から推量した事態、を表す。(a) はアスペクトのみに関わる意味だが、(b) はエビデンシャリティーに関わる意味である。

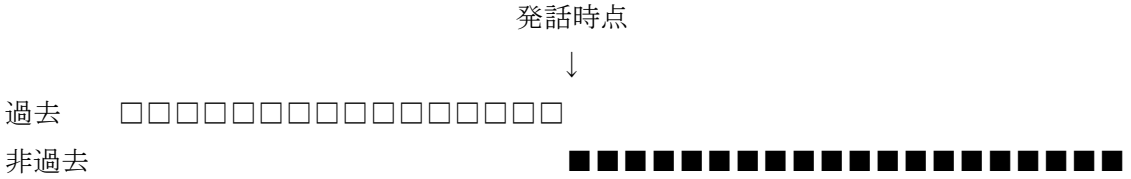
本節では、6.2.1 でテンス、6.2.2 でアスペクトの体系をまとめたのち、6.2.3、6.2.4 でテンス・アスペクト・エビデンシャリティーにまたがる意味を持つ-juta、「動詞継起形＋存在動詞*a」の機能を個別に取り上げる。

6.2.1　テンス

国頭方言のテンスは、非過去と過去に大別される。しかし、非過去時制と過去時制の境界や、それぞれの時制を表す形式は、動作動詞と、非動作動詞によって異なる。ここでいう「非動作動詞」とは、4 章 4 節動詞形態論の「存在動詞」「コピュラ動詞」に該当する。以下では、動作動詞と非動作動詞に分けて記述を行う。

6.2.1.1　非動作動詞

非動作動詞において、過去時制は発話時点より前の時間を、非過去時制は発話時点を含む現在より後の時間を表す。



6.2.1.1.1 過去時制

非動作動詞の過去時制は-a（過去接辞）で標示される。

(6-29) は kiNnjuu「昨日」という過去の状態について述べた文である。このとき、述語動詞*u「いる」は過去接辞-a を取り、ut-a-N「いた」という形式になっている。

(6-29)

zjaazja=wa	*kiNnjuu*	*jaa=ni*	*ut-a-N=djaa*
zjaazja=wa	kiNnjuu	jaa=ni	u-a-N=doo
祖父=TOP	昨日	家=LOC1	いる-PST-IND=SFP

お爺ちゃんは昨日家にいたよ。

6.2.1.1.2 非過去時制

非動作動詞の非過去時制は標示されない。

(6-30) は nama「今」という現在の状態について述べた文である。このとき、述語動詞は uN「いる」という形式であり、形式的な時制の標示がない[81]。

(6-30)

zjaazja=wa	*nama*	*jaa=ni*	*u-N=doo*
zjaazja=wa	nama	jaa=ni	u-N=doo
祖父=TOP	今	家=LOC1	いる-IND=SFP

お爺ちゃんは今家にいるよ。

非過去時制は「未来」も含む。(6-31) は naacja「明日」という未来の状態について述べた文である。このとき、述語動詞は uN「いる」という形式であり、現在時制と同じ形式を用いている。

(6-31)

zjaazja=wa	*naacja*	*jaa=ni*	*u-N=doo*
zjaazja=wa	naacja	jaa=ni	u-N=doo
祖父=TOP	明日	家=LOC1	いる-IND=SFP

お爺ちゃんは明日家にいるよ。

こうしたことから、非動作動詞のテンスは表 6-2 のようにまとめられる。

[81] ただし、語基が派生接辞（使役接辞／受動接辞）を含むときには、u-ras-ju-N「いさせる」、u-ra-ju-N「いられる」のように、非過去時制の標示として-ju がつく。

表 6-2. 非動作動詞の時制と形式

	形式	例
過去	-a	ut-a-N「いた」
非過去（現在・未来）	標示なし	u-N「いる」

6.2.1.2 動作動詞

動作動詞において、過去時制は過去時制は現在より前の時間を表し、非過去時制は発話時点より後の時間を表す。非動作動詞の場合と異なり、現在進行中の動作は、時制ではなく「アスペクト」（非完結相）で表される。

発話時点
↓
過去　□□□□□□□□□□□□□□□
非過去　■■■■■■■■■■■■■■■■■

6.2.1.2.1 過去時制

動作動詞の過去時制を表す接辞には-a（過去接辞）と-juta（過去 2 接辞）がある。このうち、-a は単純に過去の時制を表すが、-juta はアスペクトやエビデンシャリティーが関係する意味を持つ。このため、-juta については 6.2「アスペクト」以降で取り上げることとし、ここでは-a のみを取り上げる。

(6-32) は kiNnjuu「昨日」という過去の出来事について述べた文である。このとき、述語動詞*fu「降る」は過去接辞-a を取り、fut-a-N「降った」という形式になっている。

(6-32)
kiNnjuu *ami=nu* *fut-a-N*
kiNnjuu ami=nu fu-a-N
昨日 雨=NOM 降る-PST-IND
昨日雨が降った。

6.2.1.2.2 非過去時制

動作動詞において注意が必要なのは、非過去の時制である。(6-33) は「雨が降る」という出来事が現在起きていることを描写する文であり、(6-34) は「雨が降る」という出来事が未来に起きることを描写する文である。

まず、(6-33) は nama「今」という現在に「雨が降っている」ことを表しており、述語動詞は fut-u-N「降っている」という形式になっている。一方で、(6-34) は naacja「明日」という未来において「雨が降る」ことを表しており、述語動詞は fu-ju-N「降る」という形式になっている。

(6-33)　*nama*　*ami=nu*　*fut-u-N*
nama　ami=nu　fu-u-N
今　雨=NOM　降る-PROG-IND
今雨が降っている。

(6-34)　*naacja*　*ami=nu*　*fu-ju-N=doo*
naacja　ami=nu　fu-ju-N=doo
明日　雨=NOM　降る-NPST-IND=SFP
明日雨が降るよ。

(6-33), (6-34) の文では、述語動詞の形式が異なり、「-u が現在時制で-ju が未来時制」と考えることも出来そうである。しかし、(6-35) の例から-u は時制接辞ではなくてアスペクトを表す接辞であると考えられる。

(6-35) は wa=ga jaa izjit-a-N tuki「私が家を出た時」という過去の時点の出来事を表す文で、主節の動詞述語は、fut-ut-a-N「降っていた」という形式を取っている。fut-ut-a-N（基底形は fu-u-a-N「降っていた」）のうち、-a はこれまでの観察より過去時制を表す接辞であると考えられる。ここで、仮に-u を「現在時制」と考えると、異なる時制（現在時制と過去時制）が共存して矛盾するため、-u は時制以外の範疇であると判断される。

再度、動詞が-u を取る(6-33), (6-35) に着目すると、両文は、いずれも一時点において継続した動作について述べている。このため、-u は継続のアスペクトを表す接辞だと考えられる。

(6-35)　*wa=ga*　*jaa*　*izjit-a-N*　*tuki=ni=wa*　*ami=nu*　*fut-ut-a-N*
wa=ga　jaa　ik-a-N　tuki=ni=wa　ami=nu　fu-u-a-N
1SG=NOM　家　出る-PST-ADN　時=LOC1=TOP　雨=NOM　降る-PROG-PST-IND
私が家を出た時には、雨が降っていた。

以上のことから、動作動詞の時制と形式の関係は表 6-3 のように表される。

表 6-3. 動作動詞の時制

	形式	例
過去	-a	fut-a-N「降った」
非過去	-ju	fu-ju-N「降る」

6.2.2　アスペクト

次に、国頭方言のアスペクトの体系について述べる。まず、6.2.2.1 で記述に用いる枠組みと概念を紹介し、6.2.2.2 以降でそれぞれのアスペクトについて記述する。

6.2.2.1　導入

国頭方言のアスペクトを記述する上で用いる枠組みと概念について整理する。6.2.2.1.1 で Comrie (1976) によるアスペクトの分類を導入し、6.2.2.1.2 で、工藤（2004）による動詞の分類を導入する。

6.2.2.1.1　アスペクトの分類

Comrie (1976) はアスペクトを図 6-1 のように分類した。

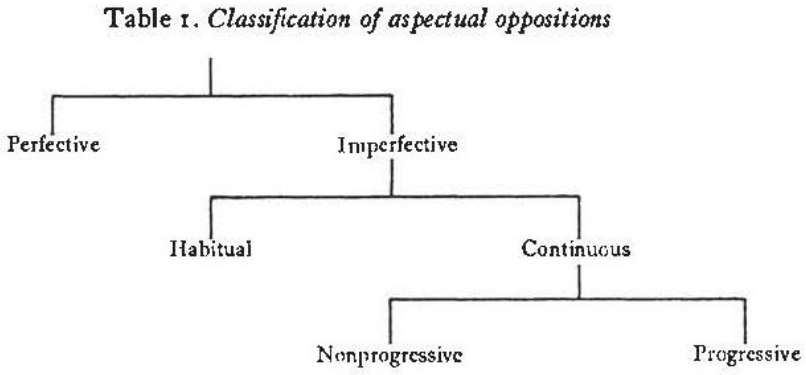


図 6-1. アスペクトの分類 (Comrie 1976: 25)

Comrie (1976) によると、まずアスペクトは「完結相 (perfective aspect) 」と「非完結相 (imperfective aspect) 」に大別される。「完結相」は、事象全体を分割不可能な 1 つのまとまりとして示す一方で、「非完結相」は、事象の内的時間の特定の段階に言及する[82]ものである。例えば、英語の動詞原形（run, walk など）は動作を 1 つのまとまりとして表し、内的時間には言及しない表現（完結相）であるのに対し、about to do, -ing などの形式は、動作が特定の段階にあることを示す表現（非完結相）である。

また「非完結相」は、さらに「習慣相（Habitual)」と「継続相 (Continuous) 」に分類される。「習慣相」は、一定の期間に渡って繰り返し生じる動作や運動を表し、「継続相」

[82] “Perfectivity indicates the view of a situation as a single whole, without distinction of the various separate phrases that make up that situation; while the imperfective pays essential attention to the internal structure of the situation” (Comrie 1976: 16).

は、ある時点における動作の進行を表す「進行相 (Progressive aspect) 」と、状態の継続を表す「非進行相 (Non-progressive aspect) 」に分類される。

また、これらの対立とは別に「完成 (perfect) 」というアスペクトがある。これは、英語の現在完了・過去完了などのように、既に完了したが、現在に影響が続いている過去の事象を示す。以上の定義を(6-36) にまとめる。

(6-36)　Comrie（1976）による定義

a. 完結相 (perfective aspect)：事象全体を分割不可能な 1 つのまとまりとして示す。
b. 非完結相 (imperfective aspect) ：事象の内的時間の特定の段階に言及する。
c. 習慣相 (habitual aspect) ：一定の期間に繰り返し生じる事態を表す。事態は一時の偶発的な出来事ではなく、期間全体に通じる性質として語られる[83]。
d. 継続相 (continuous aspect) ：非完結相の、習慣相以外を指す[84]。
e. 進行相 (progressive aspect) ：状態以外の、継続的な事態を指す[85]
f. 完成 (perfect)：過去の出来事の現在への結果など、現在に影響のある過去の事態を表す[86]。

6.2.2.1.2　動詞の分類

同一のアスペクト形式を用いても、動詞の語彙的意味によって、異なるアスペクトを表す場合がある。こうした「アスペクトに影響を与える」動詞の分類として、工藤（2004）の動詞分類 (6-37) を用いる。工藤（2004）では、日琉諸方言のテンス・アスペクト体系を元に動詞を分類しており、この枠組みは国頭方言の記述においても有用である。

(6-37)　動詞の分類（工藤 2004：28, 29、下線は筆者）

a. **主体変化動詞**：日本標準語の「死ぬ、来る、座る、開く」のような、自動詞の内的限界動詞（そこに至れば必然的に運動が終了し、主体または客体に必然的結果が生じる内的終了限界を持つ動詞グループ）で、主体の観点から変化を捉えている動

[83] “Habitual aspects describe a situation which is characteristic of an extended period of time, so extended in fact that the situation referred to is viewed not as an incidental property of the moment but, precisely, as a characteristic feature of a whole period” (Comrie 1976: 28).

[84] “continuousness, which is definable as imperfectivity that is not occasioned by habituality” (Comrie 1976: 33).

[85] “We can give the general definition of progressiveness as the combination of progressive meaning and non-stative meaning” (Comrie 1976: 35).

[86] “The term 'perfect' refers to a past situation which has present relevance, for instance the present result of a past event” (Comrie 1976: 12).

詞。

b. **主体動作客体変化動詞**：日本標準語の「殺す、開ける、壊す」のような、他動詞の内的限界動詞で、客体の側に変化をもたらす主体の動作を捉えている動詞。

c. **主体動作動詞**：非内的限界動詞（どこで終わっても、運動が成立したと言える、必然的結果を生じないタイプの動詞グループ）で、「歩く、遊ぶ」のような自動詞の場合も、「飲む、叩く」のような他動詞の場合もある。

6.2.2.2 完結相

完結相とは、動作をひとまとまりのものとして捉えるアスペクトである。完結相は形態的に標示されない。

(6-38) は述語動詞が fu-ju-N「降る」という形式で、特定のアスペクトを明示する形式は含まれていない。この文は特定の段階（降り始めなのか、降っている途中なのか、降り終わるところなのか等）に言及する表現ではなく「雨が降る」という事態をひとまとまりのものとして表している。

(6-38)

naacja	*ami=nu*	*fu-ju-N*
naacja	ami=nu	fu-ju-N
明日	雨=NOM	降る-NPST-IND

明日雨が降る。

6.2.2.3 習慣相

習慣相とは、一定期間に渡って繰り返し生じる事態を表す。習慣相は、非過去時制において、語彙的に表される。過去時制においては、語彙的な表現の他に、過去 2 接辞-juta による形態的な標示がある。

6.2.2.3.1 非過去時制

非過去時制における習慣相は、副詞 icjimu「いつも」などによって語彙的に表される。この時、述語動詞は、無標形（完結相形式）を取る場合も、継続形（継続相形式）を取る場合もあり得る。

(6-39) では、icjimu「いつも」という副詞から、事態「先生が 9 時に家を出る」が、一定期間繰り返し生じている事態であることを表している。この時、述語動詞*izji「出る」は、アスペクト的に無標な izji-ju-N という形式を取っている。

(6-39)　*seNsee=wa*　*icjimu*　*kuzji=ni*　*jaa*　*izji-ju-N*
seNsee=wa　icjimu　kuzji=ni　jaa　izji-ju-N
先生=TOP　いつも　九時=LOC1　家　出る-NPST-IND
先生はいつも、9 時に家を出る。

(6-40) では、maisjuu「毎週」という副詞から、事態「私がタラソに行く」が、一定期間繰り返し生じている事態であることを表している。この文においては、述語動詞*ik「行く」が、非完結相を表す継続形 izj-u-N を取っている。

すなわち、非過去時制においては、動詞のアスペクト形式に関わらず、語彙的な要素が習慣相を表すと言える。

(6-40)　*wana*　*maisjuu*　*taraso=cji*　*izj-u-N=doo*
wana　maisjuu　taraso=cji　ik-u-N=doo
1SG　毎週　タラソ=ALL　行く-CONT-IND=SFP
私は毎週タラソに行っているよ。

6.2.2.3.2　過去時制

習慣相は、過去時制において、語彙的に表される他に、動詞接辞-juta によって形態的に標示される。

例えば、(6-41) の述語動詞は*asjib「遊ぶ」が継続接辞-u を取った継続形である。この文は、特に習慣相を表す語彙（例えば、juu「よく」など）を加えない限り、「ある時点において、私がビー玉で遊んでいた」という、過去の進行相を表す。

一方、述語動詞*asjib「遊ぶ」が過去 2 接辞-juta を取る(6-42) の文においては、過去の進行相や、過去の完結相ではなく、過去の一定期間において「私がビー玉で遊ぶ」という事が習慣的に繰り返された、ということを表している。

(6-41)　*wana*　*biidama=sji*　*asjid-ut-a-N*
wana　biidama=sji　asjib-u-a-N
1SG　ビー玉=INS　遊ぶ-CONT-PST-IND
私はビー玉で遊んでいた。

(6-42)　*wana*　*biidama=sji*　*asjib-ita-N*
wana　biidama=sji　asjib-juta-N
1SG　ビー玉=INS　遊ぶ-PST2-IND
私は（昔）ビー玉で遊んだものだった。

6.2.2.4　継続相

継続相とは、ある時点における動作や状態の継続を表す。「継続相」は、ある時点における動作の進行を表す「進行相」と、状態の継続を表す「非進行相」に分類される。

継続相の標示は、(6-37)「動詞の分類」によって異なる。このため、以下では動詞の分類毎に記述を行う。

6.2.2.4.1　主体変化動詞

主体変化動詞とは、その語彙的意味に「動作の終了点」を含む動詞で、かつ、主体自身が変化するような動作を表す動詞である。日本標準語の「行く、来る、死ぬ」などがこれに該当する。主体変化動詞のアスペクト体系は、動詞分類の中でも最も複雑である。

非過去時制において、進行相は、継続接辞-u と形式名詞 tukuru「ところ」によって、形態・語彙的に標示される。非進行相は、継続接辞-u によって形態的に標示される。一方、過去時制においては、非過去時制と同じ標示に加えて、過去 2 接辞-juta が進行相を表す。但し、この-juta は「話者がその動作を目撃していた」という意味を含意する。

表 6-4. 主体変化動詞のアスペクト標示

	進行相	非進行相
非過去時制	-u＋語彙（tukuru「ところ」等）	-u
過去時制	(a) -u＋語彙 (b) –juta　（目撃性と伴う）	-u

6.2.2.4.1.1　非過去時制

非過去時制において「ある動作が進行中である」という進行相を表す時は、継続形-u と、tukuru「ところ」という形式名詞を用いる。

(6-43) は、発話時点において、「あきこが和泊へ行く」という動作が進行中である（まだ着いていない）ことを表す文である。述語句は*ik「行く」の継続形 izju-と tukuru「ところ」によって形成されている。

(6-43)	*akiko=wa*	*wadomari=cji*	*izj-u-nu*	*tukuru=djaa*
	akiko=wa	wadomari=cji	ik-u-nu	tukuru=djaa
	あきこ=TOP	和泊=ALL	行く-CONT-ADN	ところ=SFP

あきこは和泊へ行っているところだ（和泊へ向かっている途中）。

一方で、(6-44) は、「あきこが和泊へ行く」という動作の結果状態が継続している（すでに着いている）ことを表す文である。この時、述語動詞*ik「行く」は、継続接辞-u を取っている。動詞の形式は (6-43) と変わらないが、形式名詞 tukuru の有無によって、表す

アスペクトが異なっている。

(6-44)　*akiko=wa*　*wadomari=cji*　*izj-u-N*
akiko=wa　wadomari=cji　iz-u-N
あきこ=TOP　和泊=ALL　行く-CONT-IND
あきこは和泊へ行っている（既に和泊にいる）。

以上のことより、主体変化動詞は、非過去時制において、進行相を継続接辞-u と tukuru「ところ」によって形態・語彙的に表し、非進行相を継続接辞-u によって形態的に表すと言える。

6.2.2.4.1.2 過去時制

過去時制においては、非過去時制で取り上げた標示に加えて、過去 2 接辞-juta が進行相を標示する。しかし、この形式は、それ自体が「話者がその動作を目撃した」という目撃性を含意する。このため、主語の人称に制限があり、一人称が主語の文に用いることは出来ない。

(6-45) は、話者が「あきこがバタバタして A コープに向かっているのを目撃した」ことを述べた文である。この時、述語動詞*ik「行く」は過去 2 形-juta をとっている[87]。

---

[87] このように、「主体変化動作が進行中であることを表す接辞」が過去時制のみに現れるのは、北琉球諸語における歴史変化が関係していると思われる。北琉球祖語においては、もともと「連用形＋ヲル（居る）の融合形式（＝西日本諸方言の「ヨル」形式に相当）」が進行相を表し、「継起形＋ヲル（居る）の融合形式が非進行（結果）相を表していた（高橋 1991: 17）（下表）。しかし、非過去時制において、完結相を専門に表していた形式が消滅した結果、「連用形＋ヲル融合形式」が完結相を表すようになり「継起形＋ヲル融合形式」が進行・非進行相を表すようになった。一方で、過去時制においてはこうした統合が進まず、①ヲル非融合形式 (-a) が完結相、②連用形＋ヲル融合形式（～ヨッタ相当形式）が進行相（※実際には、進行相を表すのは「主体変化動詞」に限られる）、③継起形＋ヲル融合形式（～トル相当形式）が進行・結果相を表すという 3 項対立として維持された（かりまた 2004 も参照）。

	非過去	過去	日本標準語	西日本諸方言
完結相	*	-a	～ル	～ル
非完結相（進行相）	連用形＋uN（ヲル）	連用形＋utaN	～テイル	～ヨル
非完結相（進行・非進行相）	継起形＋uN（ヲル）	継起形＋utaN		～トル

(6-45)

	akiko=wa	*batabata*	*sji-i*	*eekoopu=cji*	*ic-juta-N.*
	akiko=wa	batabata	sji-i	eekoopu=cji	ik-juta-N
	あきこ=TOP	バタバタ	する-SEQ	A コープ-ALL	行く-PST2-IND

あきこはバタバタして A コープへ向かっていた。

なお、この文の主語を 1 人称にした(6-46) の文は、「進行相」の意味を表すことは出来ず、6.2.2.3 で述べた、「過去の習慣相」を表す意味となる。

(6-46)

	wana	*batabata*	*sji-i*	*eekoopu=cji*	*ic-juta-N.*
	wana	batabata	sji-i	eekoopu=cji	ik-juta-N
	1SG	バタバタ	する-SEQ	A コープ-ALL	行く-PST2-IND

（昔は）私はバタバタして A コープへ行ったものだ。

6.2.2.4.2 客体変化動詞

客体変化動詞とは、その語彙的意味に「動作の終了点」を含む動詞で、かつ、客体（動作の被動作主）が変化するような動作を表す動詞である。日本標準語の「開ける、殺す、切る」などがこれに該当する。

客体変化動詞は、時制に関わらず、進行相は継続接辞-u によって形態的に表される。非進行相は「動詞の継起形＋状態動詞*a」の動詞連続によって、形態統語的に表される。

表 6-5. 客体変化動詞のアスペクト標示

進行相	非進行相
-u	継起形＋*a「ある」

(6-47) B は、「今何をしているのか？」という質問に対する回答で、「缶詰を開ける」という動作が進行中であることを表している。この時、述語の客体変化動詞*aki「開ける」は継続接辞-u を取り、akit-u-N「開けている」という形式になっている。

(6-47)

A)	*nuu*	*sj-u-i=joo?*	
	nuu	sji-u-i=joo	
	何	する-CONT-Q=WHQ	

何しているの？

B) *nama* *kaNzume* *akit-u-N*
nama kaNzume aki-u-N
今 缶詰 開ける-CONT-IND
今、缶詰を開けている。

(6-48) は、窓が開いているのを見て、「誰かが窓を開ける」という動作の結果状態が、継続していることを述べた文である。この時、述語句は、客体変化動詞*ee「開ける」の継続形と、状態動詞*a の動詞連続によって形成されている。

(6-48) *taNka=ga* *madu* *eet-i* *a-N*
taNka=ga madu ee-i a-N
誰か=NOM 窓 開ける-SEQ ある-IND
誰かが窓を開けている（結果状態の意味で）。

6.2.2.4.3 主体動作動詞

主体動作動詞とは、その語彙的意味に「動作の終了点」を含まない動詞である。日本標準語の「歩く、食べる、叩く」などがこれに該当する。

主体動作動詞は、進行相を、継続接辞-u によって標示する。一方、その語彙的な意味から「状態の継続」を表す「非進行相」は存在しない。

(6-49) B は、「今何をしているの？」という質問に対する回答で、「酒を飲む」という動作が進行中であることを表している。この時、述語の主体動作動詞*num「飲む」は、継続接辞-u を取り、nud-u-N「飲んでいる」という形式になっている。

(6-49) *A)* *nama* *nuu* *sj-u-i=joo?*
nama nuu sji-u-i=joo
今 何 する-CONT-Q=WHQ
今、何しているの？

B) *nama* *saki=du* *nud-u-N=djaa*
nama saki=du num-u-N=djaa
今 酒=FOC 飲む-CONT-IND=SFP
今、酒を飲んでいるんだよ。

6.2.2.5 完成

「完成」とは、ある時点において、その前に行われた動作が既に終了していることを明

示するアスペクトである。「完成」のアスペクトは、動詞の種類に関わらず「動詞の継起形＋存在動詞*a」の動詞連続によって表すことが出来る。

(6-50) は、主節の述語句が、主体変化動詞*ik「行く」の継起形と存在動詞*a「ある」によって形成されており、主節が表す動作が、副詞節 wa=ga izjaN tuki「私が行ったとき」が表す時点において、既に完了していたことを表している。

(6-50)	*wa=ga*	*izj-a-N*	*tuki=ni=wa*	*takasji=wa*	*duu*	*cjui=sji*
	wa=ga	ik-a-nu	tuki=ni=wa	takasji=wa	duu	cjui=sji
	1SG=NOM	行く-PST-ADN	時=LOC=TOP	たかし=TOP	REFL	一人=INS

私が（たかしの家に）行った時には、たかしは自分一人で

cjina=cji	*izj-i*	*at-a-N=doo*
cjina=cji	ik-i	a-a-N=doo
知名=ALL	行く-SEQ	ある-PST-IND=SFP

知名へ行っていた。

(6-51) は、主節の述語句が、客体変化動詞*ee「開ける」の継起形と存在動詞*a「ある」によって形成されており、主節が表す動作が、副詞節 wa=ga jaa=cji iicjaN tuki「私が家に入ったとき」が表す時点において、既に完了していたことを表している。

(6-51)	*wa=ga*	*jaa=cji*	*iicj-a-N*	*tuki=ni=wa*	*taNka=ga*	*madu*
	wa=ga	jaa=cji	ʔi-a-nu	tuki=ni=wa	taNka=ga	madu
	1SG=NOM	家=ALL	入る-PST-ADN	時=LOC=TOP	誰か=NOM	窓

私が家に入ったときには、誰かが（既に）窓を開けて

eet-i	*at-a-N=doo*
ee-i	a-a-N=doo
開ける-SEQ	ある-PST-IND=SFP

eet-i いたよ。

(6-52) は、副詞節の述語句が、主体動作動詞*kam「食べる」の継起形と存在動詞*a「ある」によって形成されており、副詞節が表す動作が、発話時点において、既に完了していたことを表している。

(6-52)

wana	*gohaN*	*kad-i*	*a-N=tuni*	*icji*	*jat-i=mu*	*kicj-i*
wana	gohaN	kam-i	a-N=tuni	icji	ja-i=mu	ku-i
1SG	ご飯	食べる-SEQ	ある-IND=CSL	いつ	COP-SEQ=ADD	来る-SEQ
私はご飯を食べてあるから、いつでも来て						

jukwa-N=doo
jukwa-N=doo
良い-IND=SFP
良いよ。

6.2.3 テンス・アスペクト・エビデンシャリティー

次に、テンス・アスペクトだけでなく、エビデンシャリティーを表す形式を扱う。まず、エビデンシャリティーの分類について簡単に述べたのち、(a) 過去 2 接辞-juta、(b) 動詞の継起形＋存在動詞*a「ある」について、個別に機能を整理する。

6.2.3.1 エビデンシャリティーの分類

Aikhenvald (2006: 63) によると、エビデンシャリティーは、意味的に、以下の 5 に分類される[88]。

(a) 視覚的（visual）：目撃によって得られた情報
(b) 非視覚的（non-visual）：視覚以外の、聴覚、嗅覚、触覚によって得られた情報
(c) 推測（inference）：視覚的、または明白な証拠や結果に基づく
(d) 仮説（assumption）：視覚以外の証拠や思考に基づく
(e) 噂（hearsay）：特定されない他者からの伝聞情報
(f) 伝聞（quotative）：特定される他者からの伝聞情報

[88] (a) visual: covers information acquired through seeing
(b) non-visual sensory: covers information acquired through hearing, and is typically extended to smell and taste, and sometimes also to touch.
(c) inference: based on visible or tangible evidence, or result.
(d) assumption: based on evidence other than visible results: this may include logical reasoning, assumption, or simply general knowledge.
(e) hearsay: for reported information with no reference to those it was reported by.
(f) quotative: for reported information with an overt reference to the quoted source.

このうち、国頭方言のテンス・アスペクト形式と関連のある意味は (a) 視覚的エビデンシャリティーと、(c) 推測、である。国頭方言における用法に合わせて「推測」をより厳密に定義すると、「視覚的な証拠に限らず、何らかの五感によって捉えられる証拠に基づいて、過去に起きた事態を推測すること」と定義できる。

以下に述べる、過去 2 接辞-juta は、二次的に「視覚的エビデンシャリティー」を表し、「動詞の継起形＋存在動詞*a」の動詞連続は、二次的に「推測エビデンシャリティー」を表す。

6.2.3.2 過去 2 接辞-juta

過去 2 接辞-juta は、(a) 過去の習慣（過去の習慣相）と、(b) 話者が目撃した、過去のある時点において、進行中であった動作（過去の進行相）、を表す。ただし、(b) の用法は、「主体変化動詞」だけが持つ[89]。

表 6-6. -juta（過去 2）の表す意味

	主体変化動詞	客体変化動詞	主体動作動詞
(a) 過去の習慣	✔	✔	✔
(b) 目撃性を伴う過去進行	✔	?	

6.2.3.2.1 過去の習慣

-juta は、動詞の分類に関わらず「過去の習慣」を表す。

(6-53) では、主節の主体変化動詞*ik「行く」が過去 2 形-juta を取り、主節が表す動作「A コープに行く」が、過去の一定期間において繰り返し行われていたことを表している。

(6-53)

naa	*nama=wa*	*kuruma=nu*	*uNteN*	*deki-radana*	*ik-a-sjiga*
naa	nama=wa	kuruma=nu	uNteN	deki-radana	ik-ran-sjiga
もう	今=TOP	車=GEN	運転	出来る-NEG.SEQ	行く-NEG-CNC

もう今は車の運転が出来なくて行かないけど、

mukasji=wa	*kuruma=nu*	*at-a-nu*	*muN*	*jat-i*	*eekoopu=cji*
mukasji=wa	kuruma=nu	a-a-nu	muN	ja-i	eekoopu=cji
昔=TOP	車=NOM	ある-PST-ADN	もの	COP-SEQ	A コープ=ALL

昔は車があったから、A コープへ

[89] 客体変化動詞も、目撃性を伴う例文において-juta 形を用いることがある。ただし、主体変化動詞と比べて、他の形式との差が明瞭に現れなかったため、本稿では考察しなかった。

ic-juta-N
ik-juta-N
行く-PST2-IND
行っていた。

(6-54) では、主節の客体変化動詞*aki「開ける」が過去 2 形-juta を取り、主節が表す動作「あきこが窓を開ける」が、過去の一定期間に渡り繰り返し行われたことを表している。

(6-54)	*mado*	*aki-ju-sji=wa*	*akiko=ga*	*sjigutu*	*jat-i*	*zuutto*	*fuN*
	mado	aki-ju-sji=wa	akiko=ga	sjigutu	ja-i	zuutto	fuN
	窓	開ける-NPST-COMP=TOP	あきこ=GEN	仕事	COP-SEQ	ずっと	この

窓を開けるのはあきこの仕事だから、ずっとこの

ikkagecu=be=wa	*akiko=ga=du*	*madu*	*aki-juta-N=djaa*
ikkagecu=bee=wa	akiko=ga=du	madu	aki-juta-N=djaa
1 ヶ月=APPR=TOP	あきこ=NOM=FOC	窓	開ける-PST2-IND=SFP

1 ヶ月くらいは、あきこが窓を開けていたよ。

(6-55) では、等位節の主体動作動詞*kam「食べる」が過去 2 形-juta を取り、等位節が表す動作「蘇鉄粥を食べる」が、過去の一定期間に渡り繰り返し行われていたことを表している。

(6-55)	*mukasji=wa*	*jarabu+gee*	*kam-ita-sjiga*	*nama=wa*	*zeetaku*	*nat-i*
	mukasji=wa	jarabu+kee	kam-juta-sjiga	nama=wa	zeetaku	na-i
	昔=TOP	蘇鉄実+粥	食べる-PST2-CSN	今=TOP	贅沢	なる-SEQ

昔は蘇鉄粥を食べたけど、今は贅沢になって

jarabu+gee=wa	*kam-a-N*
jarabu+kee=wa	kam-ran-N
蘇鉄実+粥=TOP	食べる-NEG-IND

蘇鉄粥は食べない。

6.2.3.2.2 目撃を伴う過去の動作進行

-juta は、主体変化動詞に接続し、過去のある時点において、話者が目撃した進行中の動

作を表す。この用法は「目撃性を伴う」という特徴の為に、主語の人称に制限があり、一人称が主語となる文においては用いられない。

(6-56) では、主体変化動詞*ik「行く」が過去 2 接辞-juta を取っているおり、「あきこがバタバタと A コープへ行く」途中の様子を、話者が目撃したことを表している。すなわち-juta は、過去時制の進行相と、視覚的エビデンシャリティーを表している。

(6-56)	*akiko=wa*	*batabata*	*sji-i*	*eekoopu=cji*	*ic-juta-N.*
	akiko=wa	batabata	sji-i	eekoopu=cji	ik-juta-N
	あきこ=TOP	バタバタ	する-SEQ	A コープ-ALL	行く-PST2-IND

あきこはバタバタして A コープへ向かっている途中だった。

一方(6-57) では、連体節の主体変化動詞*ik「行く」が継続接辞-u と過去接辞-a を取り、「あきこが A コープへ行く」という動作が達成され、その結果状態が継続していることを表している。この形式が「結果の継続 (non-progressive) 」を表していることは、主節 wana=mu eekoopu=niti aisacu dekit-a-N「私も（あきこに）A コープで挨拶できた」からも明らかである。

(6-57)	*kiNnjuu*	*akiko=wa*	*eekoopu=ni*	*izj-uut-a-nu*	*munu*	*jat-i*
	kiNnjuu	akiko=wa	eekoopu=ni	ik-ut-a-nu	munu	ja-i
	昨日	あきこ=TOP	A コープ=LOC1	行く-CONT-PST-AND	もの	COP-SEQ

昨日あきこは A コープに行っていたから、

wana=mu	*eecoopu=niti*	*aisacu*	*dekit-a-N*
wana=mu	eecoopu=niti	aisacu	deki-a-N
1SG=ADD	A コープ=LOC2	挨拶	出来る-PST-IND

私も A コープで挨拶できた。

6.2.3.3 動詞の継起形＋存在動詞*a

「動詞の継起形＋存在動詞*a」の動詞連続は、(a) ある 1 時点において既に完了している動作、或いは b) 痕跡からの推量された事態、を表す。

6.2.3.3.1 完成

6.2.2.5「完成」で述べた通り、「継起形＋存在動詞*a」は、動詞の分類に関わらず「ある時点において既に完了している動作を表す。

(6-58) では、主節の述語動詞*ik「行く」が継起形と存在動詞*a「ある」の動詞連続になっており、「私が 8 時にたかしを迎えに行った」という過去の 1 時点において、たかしは

既に「一人で知名へ行く」という動作を完了していたことを表している。

(6-58)

wa=ga	*hacjizji=ni*	*takasji*	*mukee=ga*	*izj-a-N*	*tuki=ni=wa*
wa=ga	hacjizji=ni	takasji	mukee=ga	ik-a-N	tuki=ni=wa
1SG=NOM	8 時=LOC1	たかし	迎える=PUR	行く-PST-AND	時=LOC1=TOP

私が 8 時にタカシを迎えに行った時には、

du+ccjui=sji	*cjina=cji*	*izj-i*	*at-a-N*
duu+cjui=sji	cjina=cji	ik-i	a-a-N
REF+1 人=INS	知名=ALL	行く-SEQ	ある-PST-IND

自分 1 人で知名へ行った後だった。

6.2.3.3.2 痕跡からの推量

さらに「継起形＋存在動詞*a」は、直接目撃したのではなく「何らかの痕跡を元に事態を推量した」ことを表す用法がある。この時、動詞の語尾は意外性 (mirativity) を表す-sa「～よ」を用いることが多い。

(6-59) では、述語句が、主体変化動詞*mudu「帰る」の継起形と存在動詞*a「ある」で構成されており、「荷物が無い」という証拠から、「あきこが帰った」ことを推測していることを表している。仮に、「あきこが帰った」ことを目撃した場合には、mudut-a-N「戻った」のように、過去接辞を用いた形式を用いる。

(6-60) では、述語句が客体変化動詞*ee「開ける」の継起形と存在動詞*a「ある」であり、「風が入ってくる」という証拠から「誰かが窓を開けた」ことを推測していることを表している。

(6-61) では、述語句が、主体動作動詞*fu「降る」の継起形と存在動詞*a「ある」であり、「道が濡れている」という証拠から、「雨が降った」ことを推測していることを表している。

(6-59)

akiko=wa	*naa*	*mudut-i*	*{a-ssa / a-N}*
akiko=wa	naa	mudu-i	{a-sa / a-N}
あきこ=TOP	もう	帰る-SEQ	ある-MRT/-IND

（荷物が無いのを見て）あきこはもう帰ったみたいだ。

(6-60)

taNka=ga	*madu*	*eet-i*	*{a-ssa / a-N}*
taNka=ga	madu	ee-i	{a-sa / a-N}
誰か=NOM	窓	開ける-SEQ	ある-MRT/-IND

（風が入ってくるのを感じて）誰かが窓を開けたみたいだ。

(6-61)	*ami=nu*	*fut-i*	*{a-ssa / a-N}*
	ami=nu	fu-i	{a-sa / a-N}
	雨=NOM	降る-SEQ	ある-MRT/-IND

（道が濡れているのを見て）雨が降ったみたいだ。

6.3　モダリティ

6.3 節では、文のモダリティについて記述する。現在広く用いられているモダリティの定義には、大きく「事実未定、あるいは非現実としてのモダリティ」と、「話し手の態度、あるいは主観性としてのモダリティ」の 2 つがある（ナロック 2014）。本稿は、様々な文末表現を包括的に記述するために、後者の立場、すなわちモダリティを「話し手の態度、あるいは主観性としてのモダリティ」とする立場の枠組みを用いる。以下では、特に日本語記述文法研究会（2003=2014）が、現代日本標準語を元に分類した枠組みに基づいて記述を行う。

日本語記述文法研究会によると、モダリティは以下の 4 つに分類できる。

a. 文の伝達的な表し分けを表すもの（表現類型のモダリティ）
b. 命題が表す事態のとらえ方を表すもの（認識・評価のモダリティ）
c. 文と先行文脈との関係づけを表すもの（説明のモダリティ）
d. 聞き手に対する伝え方を表すもの（伝達態度のモダリティ）

6.3.1　表現類型のモダリティ

「表現類型のモダリティ」とは「文の伝達的な表し分けを表すもの」である（日本語記述文法研究会 2003）。

日本語記述文法研究会（2003）において、表現類型のモダリティは、(a) 情報系：話し手と聞き手との情報のやりとりに関わるモダリティ、(b) 行為系：話し手や聞き手が実行する行為の発動に関わるモダリティ、(c) 感嘆のモダリティ：驚きを伴った感動を表すモダリティに分類される。

6.3.1.1　情報系

日本語記述文法研究会（2003）によると、情報系の表現類型モダリティは、(a) 叙述：文が表す内容や話し手の判断を聞き手に伝えるモダリティと、(b) 疑問：文の命題に対して話し手の判断が成り立たないことを表すモダリティに分類することが出来る。

6.3.1.1.1　叙述のモダリティ

文が表す内容や話し手の判断を聞き手に伝えるモダリティを「叙述のモダリティ」と呼ぶ。叙述のモダリティを表す文は「平叙文」と呼ばれ、表現類型以外の様々なモダリティ形式と共起し得る。国頭方言における叙述のモダリティは、名詞述語文、形容詞述語文、述語動詞が直説形の動詞述語文によって表される。

(6-62) は「小さい時は学校まで歩いた」という話者の体験を聞き手に伝える文である。述語動詞は直説形-N を取り、終助詞は相手に内容を伝達する時に用いる=doo「～よ」を接続している。

(6-62)　*iku-sa-nu*　*tuki=wa*　*gakkoo=Ntabe*　*acj-a-N=doo*
iku-sa-nu　tuki=wa　gakkoo=Ntabe　ak-a-N=doo
小さい-ADJ-ADN　時=TOP　学校=TERM　歩く-PST-IND=SFP
小さい時は学校まで歩いたよ。

(6-63) は「これ（指示対象）が眼鏡である」という内容を話者に伝える文である。名詞述語文であり、伝達を表す終助詞=djaa「～よ」を接続している。

(6-63)　*furja*　*megane=djaa*
furi=wa　megane=djaa
これ=TOP　眼鏡=SFP
これは眼鏡だよ。

(6-64) は「お父さんよりお母さんの方が元気だ」という判断を話者に伝える文である。形容詞述語文の構造を取っている。

(6-64)　*ottoo=joka*　*okaN=ga=du*　*duku-sa*
ottoo=jooka　okaN=ga=du　duku-sa
お父さん=CMP　お母さん=NOM=FOC　元気-ADJ
お父さんよりお母さんが元気だ。

6.3.1.1.2　疑問のモダリティ

文の内容について、話し手の判断がきかないものは「疑問のモダリティ」と呼ばれる。日本語記述文法研究会（2003）によると、疑問のモダリティには(a) 話し手に不明な情報があるため判断ができない、(b) 聞き手に問いかける、という 2 つの性質がある。

以下、筆者は疑問のモダリティを表 1 のように「質問」、「確認」、「自問」の 3 つに下位分類する。それぞれは以下のように定義される。すなわち、(a), (b) どちらの性質もある疑問のモダリティを「質問」、(b) の性質を持つ疑問のモダリティを「確認」、(a) の性質を持つ疑問のモダリティを「自問」と定義する。

表 6-7. 疑問のモダリティの下位分類

	(a) 話し手の判断がきかない	(b) 聞き手に尋ねる
質問	✔	✔
確認		✔
自問	✔	

6.3.1.1.2.1 質問

話し手の判断がきかず、聞き手に尋ねる疑問を「質問のモダリティ」と呼ぶ。質問のモダリティは、(a) 具体的な回答を聞き手に要求する「内容疑問」、(b) 選択式の回答を聞き手に要求する「選択疑問」、(c) 肯定／否定の回答を聞き手に要求する「肯否疑問」に分類することが出来る。

6.3.1.1.2.1.1 内容疑問

内容疑問を表す文には、文中に表 6-8 の疑問詞が現れる。

表 6-8. 疑問詞

疑問詞	共通語訳	疑問の対象
nuu	「何」	物
taru/taN	「誰」	人
uda	「どこ」	場所
nuudi	「なぜ」	理由
icjasji	「どうして」	理由

内容疑問においては、述部の品詞によって述部の形式が異なる（表 6-9）。

表 6-9. 内容疑問の述部形式

述語		屈折接辞	疑問助詞
名詞		ー	=joo / =kaja
動詞／形容詞（※）	現在時制	-i（疑問）	(=joo)
	過去時制	-i（継起）	(=joo)
	現在／過去時制	-N（直説）	=kaja

※形容詞述語の内容疑問文は、現在時制のみ存在する。

6.3.1.1.2.1.1.1 名詞述語

名詞述語の内容疑問文は、名詞述語に疑問助詞=joo または=kaja が接続する。

(6-65), (6-66) はいずれも聞き手に具体的な回答を求める疑問文であり、(6-65) では名詞述語 nuu「何」に疑問助詞=joo が、(6-66) では名詞述語 muN「もの」に疑問助詞=kaja が接続している。

(6-65)　*uri=wa*　*nuu=joo?*
uri=wa　nuu=joo
それ=TOP　何=WHQ
それは何か？

(6-66)　*ari=wa*　*taru=nu*　*muN=kaja?*
ari=wa　taru=nu　muN=kaja
あれ=TOP　誰=GEN　もの=Q
あれは誰のものかな？

なお、疑問助詞=joo は内容疑問に特化した形式であるが、=kaja は「話し手の判断が聞かない」こと、それ自体を表す形式であり、6.3.1.2.1.3 以降に述べる「肯否疑問」や「自問」の疑問文にも用いることが出来る。

6.3.1.1.2.1.1.2 動詞述語

動詞述語の内容疑問文は、(a) 動詞の屈折が内容疑問のモダリティを表す場合と、(b) 後に接続する助詞が疑問のモダリティを表す場合がある。(a) について、現在時制の場合、述語動詞は疑問形-i を取り、疑問助詞=joo が接続する。過去時制の場合、述語動詞は継起形-i を取り、疑問助詞=joo が接続する[90]。基本的に疑問助詞=joo を接続することが多いが、動詞自体が疑問を表すため、疑問助詞を接続しなくても成立する。(b) について、述語動詞は直説形-N を取り、疑問助詞=kaja が接続する。

(6-67) は非過去時制において内容疑問を表す文であり、述語動詞*hak「書く」は疑問形-i を取り、疑問助詞=joo を接続している。(6-68) は過去時制において内容疑問を表す文であり、述語動詞*hak「書く」は継起形-i を取り、疑問助詞=joo を接続している。

---

[90] 内容疑問文を作る動詞の形式は、非過去と過去で非対称的である。例えば、*hak「書く」という動詞が内容疑問文の述語になる場合、非過去時制の文では hacjui であるが、過去時制の文では hacji となる。分析の方針として以下の 2 つがあり得る。1 つは、(a) 非過去時制は疑問形を取るが（hac-ju-i: ROOT-NPST-Q）、過去時制は継起形を取っている（hacj-i: ROOT-SEQ）と考える方針である。もう 1 つは、(b) 過去時制に現れる接辞-i を継起ではなく疑問の接辞ととらえ、非過去時制、過去時制のいずれにおいても動詞が疑問形をとっているとみなしたうえで、通常-a である過去接辞が疑問文においてのみゼロ形式となる（hacj-ø-i: ROOT-PST-Q）と考える方針である。本稿では接辞の異形態を増やさないために(a) の方針を取っている。なお、このような非対称性を表すようになったのは、歴史的に平叙文の主節で用いられていた継起形が、等位節に特化した形式へと移行したものの、従来の用法が疑問文にのみ残った経緯があると思われる。

(6-67)　*taN=ni*　*tegami*　*hac-ju-i=joo?*
taN=ni　tegami　hak-ju-i=joo
誰=LOC1　手紙　書く-NPST-Q=WHQ
誰に手紙を書くの？

(6-68)　*taN=ga*　*tegami*　*hacj-i=joo?*
taN=ga　tegami　hak-i=joo
誰=NOM　手紙　書く-SEQ=WHQ
誰が手紙を書いたの？

(6-67), (6-68) は、(6-69), (6-70) のように、述語動詞が直説形-N を取り、疑問助詞=kaja を接続する形式で表すことも可能である。

(6-69)　*taN=ni*　*tegami*　*hac-ju-N=kaja?*
taN=ni　tegami　hak-ju-N=kaja
誰=LOC1　手紙　書く-NPST-IND=Q
誰に手紙を書くのかな？

(6-70)　*taN=ga*　*tegami*　*hacj-a-N=kaja?*
taN=ga　tegami　hak-a-N=kaja
誰=NOM　手紙　書く-PST-IND=Q
誰が手紙を書いたかな？

6.3.1.1.2.1.1.3 形容詞述語

形容詞述語の内容疑問文も、動詞述語の場合と同様に、(a) 形容詞の屈折によって疑問を表す場合と、(b) 疑問助詞によって疑問を表す場合がある。(a) の場合、形容詞は疑問形-i を取り、疑問助詞=joo を接続する。(b) の場合、形容詞は直説形-N を取り、疑問助詞=kaja を接続する。なお、述語の意味的な主要部が形容詞であっても、過去時制など、屈折が必要な文法範疇を表す時には、文構造においてはコピュラ述語文を取る。

(6-71), (6-72) は共に聞き手に具体的な回答を求める内容疑問文であるが (6-71) では、述語形容詞*hamara「うるさい」が疑問形-i を取り、疑問助詞=joo を接続している。(6-72) では、述語形容詞*hamara「うるさい」が直説形-N を取り、疑問助詞=kaja を接続している。

(6-71)　*taN=ga*　*hamara-sja-i=joo?*
taN=ga　hamara-sja-i=joo
誰=NOM　うるさい-ADJ-Q=WHQ
誰がうるさいの？

(6-72)　*nuudi*　*hamara-sja-N=kaja?*
taN=ga　hamara-sja-N=kaja
誰=NOM　うるさい-ADJ-IND=Q
なぜうるさいの？

6.3.1.1.2.1.2 選択疑問

限定された選択肢から、聞き手に回答を求める疑問を「選択疑問」と呼ぶ。選択疑問を表す疑問詞は、選択するものが人である場合 taN／taru「誰」であり、それ以外の時は uduN／uduru「どれ」である。述語の形式は、6.3.1.2.1.1「内容疑問」と同じである。

(6-73) は taroo「太郎」と hanako「花子」という二人の選択肢を選択させる疑問文であり、疑問詞 taN「誰」が使われている。(6-74) は inu「犬」と Mjaa「猫」という 2 つの動物を選択させる疑問文であり、疑問詞 uduN「どれ」が使われている。いずれの文も、述語は内容疑問文と同じ形式を取っている。

(6-73)　*taroo=tu*　*hanako=tu*　*taN=ga*　*fazji*　*hee-sa-N=kaja?*
taroo=tu　hanako=tu　taN=ga　fazji　hee-sa-N=kaja
誰=COM　花子=COM　誰=NOM　足　早い-ADJ-IND=Q
太郎と花子と、どちらが足が速いの？

(6-74)　*inu=tu*　*Mjaa=tu*　*uduN*　*jukwa*　*a-i=joo?*
inu=tu　Mjaa=tu　uduN　jukwa　a-i=joo
犬=COM　猫=COM　どちら　良い　COP-Q=WHQ
犬と猫とどっちが良いの？

6.3.1.1.2.1.3 肯否疑問

聞き手に肯定または否定の回答を要求する疑問を「肯否疑問」と呼ぶ。肯否疑問は、終助詞=naa、または動詞接辞-e（肯否疑問接辞）で表される。

表 6-10. 肯否疑問の述部形式

述語	屈折接辞	疑問助詞
名詞	―	=naa / =kaja
動詞／形容詞	-e	―
	-i	=naa
	-N	=kaja

6.3.1.1.2.1.3.1 名詞述語

名詞述語の肯否疑問文は、名詞述語に疑問助詞=naa か=kaja を接続する。

(6-75), (6-76) はいずれも肯定か否定の回答を要求する疑問文であり、(6-75) では名詞述語 akikosaN「あきこさん」に疑問助詞=naa が接続している。(6-76) では名詞述語 erabu=nu cjuu「沖永良部の人」に疑問助詞=kaja が接続している。

(6-75) *ura* *akikosaN=naa?*
ura akikosaN=naa
2SG あきこさん=YNQ
あんたはあきこさんか？

(6-76) *aN* *cjuu=wa* *erabu=nu* *cjuu=kaja?*
aN cjuu=wa erabu=nu cjuu=kaja
あの 人=TOP 沖永良部=GEN 人=Q
あの人は沖永良部の人かな？

6.3.1.1.2.1.3.2 動詞述語

動詞述語の肯否疑問文は、(a) 動詞の屈折によって肯否疑問を表す形式と、(b) 疑問助詞によって肯否疑問を表す形式がある。(a) について、述語動詞は肯否疑問形-e になる。(b) について、述語が内容疑問文と同じ形式を取り疑問助詞=naa が接続する形式と、述語が直説形を取り、疑問助詞=kaja を接続する形式がある。

(6-77) -(6-79) はいずれも、聞き手に肯定／否定の回答を要求する疑問文である。0 は述語動詞*mi「見る」が肯否形-e を取り、micj-e-e「見たの？」という形式になっている（形態音韻規則により過去接辞は a→e になっている）。(6-78) は述語動詞が継起形-i を取り、疑問助詞=naa を接続している。(6-79) は述語動詞が直説形-N を取り、疑問助詞=kaja を接続している。

(6-77)　*ura*　*hjiinumuN*　*micj-e-e?*
ura　hjiinumuN　mi-a-e
2SG　ヒーヌムン　見る-PST-YNQ
あんたはヒーヌムンを見たの？

(6-78)　*ura*　*hjiinumuN*　*micj-i=naa?*
ura　hjiinumuN　mi-i=naa
2SG　ヒーヌムン　見る-SEQ=YNQ
あんたはヒーヌムンを見たの？

(6-79)　*ura*　*hjiinumuN*　*micj-a-N=kaja?*
ura　hjiinumuN　mi-a-N=kaja
2SG　ヒーヌムン　見る-PST-IND=Q
あんたはヒーヌムンを見たの？

6.3.1.1.2.1.3.3 形容詞述語

形容詞述語の肯否疑問文も、動詞述語と同様に、(a) 形容詞の屈折によって肯否疑問を表す形式と、(b) 疑問助詞によって肯否疑問を表す形式がある。(a) について、述語形容詞は肯否疑問形-e を取る。(b) について、述語形容詞は直説形-N を取り、疑問助詞=kaja が接続する。

(6-80), (6-81) は聞き手に肯定／否定を尋ねる疑問文である。(6-80) は述語形容詞*hjii「寒い」が肯否疑問形-e を取り hjiisae という形式になっている。(6-81) は述語形容詞*hjii「寒い」が直説形-N を取り、疑問助詞=kaja を接続している。

(6-80)　*tookjoo=wa*　*hjii-sa-e?*
tookjoo=wa　hjii-sa-e
東京=TOP　寒い-ADJ-YNQ
東京は寒い?

(6-81)　*tookjoo=wa*　*hjii-sa-N=kaja?*
tookjoo=wa　hjii-sa-N=kaja
東京=TOP　寒い-ADJ-Q
東京は寒いかな？

6.3.1.1.2.2 確認

話し手に一定の情報がある上で、聞き手に尋ねる疑問を「確認のモダリティ」と呼ぶ。

「確認のモダリティ」は、(a) 動詞の確認形-maze「～よね？」、または (b) 動詞の否定疑問形-raz-e「～じゃない？」で表される。

(6-82) は、昔ばなしの中で、母親が子供に食べ物を大事にするよう咎めたところ、子供が発する発話である。子供は「蔵に米、麦、粟がたくさんある」ことを知っていて食べ物を粗雑に扱っており、「話し手に情報がある上で聞き手に尋ねる」疑問文だと言える。この時、述語動詞は確認形-maze を取り、a-maze という形式になっている。

(6-82)	*kura=ni*	*fumi=mu*	*muzji=mu*	*awa=mu*	*muuru*	*gaaba*	*a-maze=joo?*
	kura=ni	fumi=mu	muzji=mu	awa=mu	muuru	gaaba	a-maze=joo
	蔵=LOC1	米=ADD	麦=ADD	粟=ADD	全部	沢山	ある-CONF=SFP
	蔵に米も麦も粟も、全部たくさんあるでしょ？						

(6-83) は「野菜を切るものは方言で何と言うか？」という質問に対して、話者が答えた回答である。話者は方言の知識がある上で、回答が的確なものか聞き手に尋ねている。この時、述語動詞*a は否定接辞、肯否疑問接辞を取り a-raz-e という形式になっている。

(6-83)	*jassee*	*k-juu-sji=wa*	*hatana*	*a-raz-e?*
	jassee	ki-ju-sji=wa	hatana	a-ran-e
	野菜	切る-NPST-COMP=TOP	刀	COP-NEG-YNQ
	野菜を切るのは hatana「刀」じゃない？			

6.3.1.1.2.3 自問

話し手に判断が効かないが、聞き手に尋ねない疑問を「自問のモダリティ」と呼ぶ。「自問のモダリティ」は、終助詞=kaja で表される。

(6-84) は、昔ばなしにおいて、継母に「フタバグサを取って来い」と言われた継子が、フタバグサが何であるかが分からずに森を彷徨う場面を描いている。=di で導かれる引用の副詞節 futabagusa=di=wa nuu ʔju-nu imi=kaja「フタバグサとは何と言う意味かな？」は継子の台詞であるが、この場面に登場しているのは継子のみであるため、聞き手に尋ねているのではなく、話し手に情報が無いこと自体を表明した文と言える。

(6-84)	*futabagusa=di=wa*	*nuu*	*ʔju-nu*	*imi=kajaa=di*	*kaNgeet-i=mu*
	futabagusa=di=wa		i-ju-nu	imi=kaja=di	kaNgeet-i=mu
	双葉草=QUOT=TOP	何	言う-NPST-ADN	意味=Q=QUOT	考える-SEQ=ADD
	フタバグサというのは、何という意味だろうと、考えても				

kaNgae *ki-radana*
kaNgee ki-radana
考える 切る-SEQ2
分からなくて

(6-85) は独話の中で、話者が昔神社に行った際に非常に美しい女性を目撃し、本物の人間か疑ったことを述べている箇所である。ここでは、主節の動詞が*Muu「思う」であることから、聞き手に尋ねた文ではないことが分かる。

(6-85)	*ari=wa*	*hoNto=nu*	*cjuu=kaja*	*kamisama*	*a-naN=kaja=di*
	ari=wa	hoNto=nu	cjuu=kaja	kamisama	a-ran-N=kaja=di
	あれ=TOP	本当=GEN	人=Q	神様	COP-NEG-IND=Q=QT
	あれは本当の人かな？神様じゃないかな？と				

Muut-i
Muu-i
思う-SEQ
思って

6.3.1.2 行為系

「行為の実行に関わる」行為系の表現類型モダリティには、(a) 話し手が行為を実行する意志を表す、(b) 聞き手へ行為を実行するよう要求する、という 2 つの性質がある。以下、筆者は行為系の表現類型のモダリティを表 6-11 のように「勧誘」、「意志」、「行為要求」の 3 つに下位分類する。それぞれは以下のように定義される。すなわち、(a), (b) どちらの性質もある行為系の表現類型モダリティを「勧誘」、(a) の性質を持つ行為系の表現類型モダリティを「意志」、(b) の性質を持つ行為系の表現類型モダリティを「行為要求」と定義する。

表 6-11. 行為系モダリティの分類

	(a) 話し手の実行意志	(b) 聞き手への要求
勧誘	✔	✔
意志	✔	
行為要求		✔

6.3.1.2.1 勧誘

「勧誘」のモダリティは、動詞の意志形-raa で表される。

(6-86) では主節の述語動詞*kam「食べる」が意志形-raa を取っている。主語が wacja「私達」となっているように、話し手に行為をする意思があり、かつ聞き手にも行為を要求する文だと分かる。

(6-86)

naa	*zjaazja-ta=mu*	*sjiimuN*	*ois-ju-N=tuni*
naa	zjaazja-taa=mu	sjiimuN	oisji-ju-N=tuni
もう	お爺さん-PL=ADD	吸い物	食べる.HON-NPST-IND=CSL

もう、お爺さん達も吸い物を食べているから、

wacja=mu	*sjiimuN*	*kam-aa*
wacja=mu	sjiimuN	kam-raa
1PL=ADD	吸い物	食べる-INT

私たちも吸い物を食べよう

6.3.1.2.2 意志

「意志」のモダリティも、述語動詞の意志形-raa によって表される。

(6-87) では主節の述語動詞*sji「する」が意志形 sji-raa「しよう」を取っている。主語が wa「私」であることから、話し手の行為実行の意志を表す文であることが分かる。

(6-87)

ura	*isjiga-sja-N=tu*	*wa=ga*	*sji-raa*
ura	isjiga-sja-N=tu	wa=ga	sji-raa
2SG	忙しい-ADJ-IND=CSL	1SG=NOM	する-INT

あんたは忙しいから、私がしよう。

6.3.1.2.3 行為要求

「行為要求」のモダリティには、(a) 相手に行為の実行を要求するものと、(b) 相手に行為の不実行を要求するものがある。(a) は、動詞の命令形-ri によって表される。(b) は、動詞の禁止形-runa によって表される。

6.3.1.2.3.1 行為の実行を要求する

聞き手に行為の実行を要求するモダリティは、(a) 行為を表す動詞自体が命令形を取る場合と、(b) 動詞連続における補助動詞が命令形を取る形式がある。

6.3.1.2.3.1.1 動詞（命令形）

相手に行為の実行を要求する、最も単純な形式は、行為を表す動詞が命令形を取る形式である。

(6-88) は相手にもう少し待つよう頼む表現であり、述語動詞*mat「待つ」が命令形を取っている。国頭方言における命令形は、目下に言う威圧的なニュアンスは弱く、相手に依頼したり、お願いする意味でも用いることが出来る。

(6-88)

naa	*amaku*	*macj-u-ri=jaa*
naa	amaku	mat-u-ri=jaa
もう	少し	待つ-CONT-IMP=SFP

もう少し待っていてね。

6.3.1.2.3.1.2 動詞（継起形）kuriri「～下さい」

動詞を命令形にするよりも丁寧な表現として、動詞の継起形と*kuri「くれる」の命令形 kuri-ri の動詞連続がある。

(6-89) は相手に教えを乞う表現として作例して貰ったもので、述部が*hata「教える」と kuri-ri「～下さい」の動詞連続によって形成されている。

(6-89)

waN=ni	*hatat-i*	*kuri-ri*
waN=ni	hata-i	kuri-ri
私=DAT	教える-SEQ	くれる-IMP

私に教えてください。

6.3.1.2.3.1.3 動詞（継起形）tabori「～下さい」

更に丁寧な表現として、動詞の継起形と*tabo「給う」の命令形 tabo-ri の動詞連続がある。

(6-90) は、昔ばなしにおいて、男親が女親に子どもをいい名付けにするよう頼む場面である。この時、主節の述部は、*kuri「くれる」の継起形と tabo-ri「～下さい」の動詞連続によって形成されている。

(6-90)

nuuka=nu	*jeN*	*jat-i=du*	*wunagu=nu*	*kwaa*	*kurit-i*
nuuka=nu	jeN	ja-i=du	wunagu=nu	kwaa	kuri-i
何か=GEN	縁	COP-SEQ=FOC	女=GEN	子	くれる-SEQ

何かの縁だから、女の子を

tabo-ri
tabo-ri
くれる.HON-IMP

ください。

6.3.1.2.3.2 行為の不実行を要求する

聞き手に行為の不実行を要求するモダリティは、動詞の禁止形-runa によって表される。(6-91) は聞き手に「言う」という行為をしないように頼む文であり、述語動詞*ʔi「言う」が禁止形-runa を取っている。

(6-91)

nuu=mu	*i-Nna=joo*
nuu=mu	ʔi-runa=joo
何=ADD	言う-PROH=SFP

何も言うなよ。

6.3.1.3 感嘆のモダリティ

感嘆のモダリティは「何らかの誘因によって引き起こされる、驚きを伴った感動を表す」ものとして定義される（日本語記述文法研究会 2003: 82）。

感嘆のモダリティは、節が (a1) 理由を導く疑問詞 nuudi「なぜ」、icjasji「どうして」、または (a2) 程度が甚だしいことを表す副詞 gaccja=gadi「そんなにまで」, gaccjanaa「なんて」を含み、述語が(b1) 疑問助詞=kaja を接続するか、(b2) 話者の驚きなどを表す語尾接辞-sa（意外性）を取ることによって表される。

(a1) の理由を表す疑問詞は、状態の主体を表す名詞句よりも前に現れる場合は「疑問」を表すが、状態の主体を表す名詞句よりも後、すなわち形容詞の直前に現れる場合は「感嘆」を表す。

例えば、(6-92) は nuudi が状態の主体を表す名詞句 warabi「子供」よりも前になる為、「なぜ子供が小さいのか？」という理由を尋ねる疑問文になるが、(6-93) は nuudi が warabi「子供」の後にあるため、「子供はなんて小さいんだ！」という感嘆文になる。

(6-92)

nuudi	*warabi=wa*	*iku-sa-N=kaja*
nuudi	warabi=wa	iku-sa-N=kaja
なぜ	子供=TOP	小さい-ADJ-IND=Q

なぜ子供は小さいの？

(6-93)

warabi=wa	*nuudi*	*iku-sa-N=kaja*
warabi=wa	nuudi	iku-sa-N=kaja
子供=TOP	なぜ	小さい-ADJ-IND=Q

子供はなんて小さいの！

(6-94) では、形容詞の直前に icjasji「なぜ」が現れ、述語形容詞が意外形-sa を取ってい

る。(6-95) は、程度が甚だしいことを表す副詞 gaccjanaa「なんて」が現れ、述語形容詞が意外形-sa を取っている。

(6-94)

warabi=wa	*icjasji*	*iku-sa-sa=jaa*
warabi=wa	icjasji	iku-sa-sa=jaa
子供=TOP	なぜ	小さい-ADJ-MRT=SFP

子供はなんて小さいの！

(6-95)

aN	*cjuu=wa*	*gaccjanaa*	*cjura-sa-sa=jaa*
aN	cjuu=wa	gaccjanaa	cjura-sa-sa=jaa
あの	人=TOP	なんて	綺麗-ADJ-MRT=SFP

あの人はなんて綺麗なの！

6.3.2 認識・評価のモダリティ

文の命題内容に対する、話者自身の判断を表すものは「認識・評価のモダリティ」と呼ぶ。日本語記述文法研究会（2003）に従い、判断のなかでも、真偽判断に関わることは「認識のモダリティ」、評価に関わることは「評価のモダリティ」と呼ぶ。

6.3.2.1 認識のモダリティ

筆者は認識のモダリティを「断定」、「推量」、「可能性」、「蓋然性」に下位分類する。それぞれは、以下に定義される、話者の認識における (a) 確定性、(b) 判断の主観性、(c) 確信度の高さという指標の有無よって表 6 のように定義される。

(a) の「確定性」は、話者が事態を確定的なものと捉えているかを表す。具体的には、「過去時制において該当表現を用いた時に、その事態が実際に起きた出来事である」場合を「確定性がある」と判断する。

(b) の「判断の主観性」は、話者が事態を主観的に判断しているかを表す。具体的には、自問のモダリティ（=kaja）と共起出来ない場合を「判断の主観性がある」と判断する。なぜなら、自問のモダリティは「話し手の判断が効かない」ことを表すため、「話し手の主観的判断に基づく」ことを表すモダリティは、これと共起出来ないと考えられるからである。

(c) の「確信度の高さ」は、話し手がその事態が成立する／している可能性が高いと考えているかを表す。この指標は、副詞との共起関係などに基づくことによって、より客観的に定義することができると思われるが、データ不足のため、現時点では十分な検討をすることができない。したがって本稿では、話者の提供した日本標準語訳から確信度の高低を判断した。

表 6-12. 認識モダリティの分類

	確定性	判断の主観性	確信度の高さ
断定	✔		✔
推量			
可能性		✔	
蓋然性		✔	✔

6.3.2.1.1 断定

話者が直接経験したことや、自身の知識を持って、命題に対して確信を持つモダリティのあり方を「断定」と呼ぶ。断定のモダリティは、形式的に標示されない。

(6-96) は「昨日雨が降ったことを自分自身で目撃した」という文脈で作例して貰った文である。述語動詞は fut-a-N「降った」と直説形を用いており、特別なモダリティを表す形式は接続していない。

(6-96) *ami=nu* *fut-a-N*
ami=nu fu-a-N
雨=NOM 降る-PST-IND
雨が降った。

6.3.2.1.2 推量

話者が、事態が成立することを客観的に推測するモダリティを「推量」と呼ぶ。「推量」のモダリティは、終助詞=daru によって表される。

=daru は、可能性や蓋然性のモダリティを表す形式と異なり、自問のモダリティ=kaja と共起することが出来る。自問のモダリティが「話し手の判断が効かない」意味を表すことを考えると、「話し手の判断が効く」ことを表すモダリティは、=kaja と共起することが出来ない。反対に、話し手の判断と離れた認識のあり方は=kaja と共起し得る。

すなわち、=kaja と共起出来る=daru は、話し手が「客観的に事態の成立を予想している」ということを表すモダリティ形式だと考えられる。

(6-97) は nama=kara nisaNzjikaN sji-rja erabu=cji c-ju-N「今からあと 2、3 時間すれば沖永良部へ来る」が事態を表しており、終助詞=daru が接続することで、話者がこの事態が成立を予想していることを表している。

(6-97) *nama=kara* *atu* *nisaNzjikaN* *sji-rja* *erabu=cji*
nama=kara atu nisaNzjikaN sji-rja erabu=cji
今=ABL あと 2, 3 時間 する-COND2 沖永良部=ALL
今からあと 2，3 時間すれば、沖永良部へ

c-ju-N=daru
ku-ju-N=daru
来る-NPST-IND=EPI
来るだろう。

(6-98) は自然談話において、ある人があまりに美しいので神様かと思った、という趣旨を述べる一節である。事態を表す ari hoNto=nu cjuu「あれは本当の人（普通の人）」に=daru が接続して事態が不確定であることを表し、さらに=kaja が接続して自分自身では判断できないことを表している。

(6-98)	*ari*	*hoNto=nu*	*cjuu=daru=kaja?*	*kamisama*	*a-ra-N=kaja?*
	ari	hoNto=nu	cjuu=daru=kaja	kamisama	a-ran-N=kaja
	あれ	本当=GEN	人=EPI=Q	神様	COP-NEG-IND=Q
	あれは普通の人だろうか？神様じゃないかな？				

6.3.2.1.3 可能性

話者の主観的な判断から、事態が成立する／成立している可能性を表すモダリティを「可能性のモダリティ」と呼ぶ。可能性のモダリティは、後の「蓋然性のモダリティ」に比べ、確信度が低い。可能性のモダリティは、助詞=kamu、または=gara によって表される。

6.3.2.1.3.1 =kamu

可能性のモダリティを表す 1 つ目の形式は=kamu である。

(6-99) では、話者が知っている情報「金魚は弱っている」を根拠に、naacja=wa sjin-ju-N「明日は（金魚が）死ぬ」という事態が起こる可能性を述べており、話者の主観的な判断に基づく可能性の提示をしていると言える。

(6-99)	*kiNgjo=wa*	*jowat-u-N=tu*	*naacja=wa*	*sjin-ju-N=kamu=jaa*	
	kiNgjo=wa	jowa-u-N=tu	naacja=wa	sjin-ju-N-kamu=jaa	
	金魚=TOP	弱る-CONT-IND=CSL	明日=TOP	死ぬ-NPST-IND=EPI=SFP	
	金魚は弱っているから、明日は死ぬかもね。				

(6-100) では、話者が「天気が良い」という状況や、自分自身の体感温度を根拠に、zjuudo=wa fuit-u-N「10 度は超えている」という事態が成立している可能性を述べている。

(6-100)　*hjuu=wa*　*teNki=nu*　*jukwa-N=djaa*　*naa*　*zjuudo=wa*
hjuu=wa　teNki=nu　jukwa-N=djaa　naa　zjuudo=wa
今日=TOP　天気=NOM　良い-IND=SFP　もう　10 度=TOP
今日は天気が良いよ。もう 10 度は

fuit-u-N=kamu
fui-u-N=kamu
超る-CONT-IND-EPI
超えているかも。

6.3.2.1.3.2 =gara

=kamu と同じ意味を表す形式として=gara がある。

(6-101) は昔ばなしの一節で、米・麦・粟の神様を怒らせた家の女主人が、「来年は麦が食べられない」という可能性を述べる場面である。事態を表す節 muzji=mu muuru kama-ra-N「麦も全部食べられない」に助詞=gara が接続し、その事態が成立する可能性について述べている。

(6-101)　*muzji=mu*　*muuru*　*kam-a-ra-N=gara*　*waka-ra-N=jaa*
muzji=mu　muuru　kam-ra-ran-N=gara　waka-ran-N=jaa
麦=ADD　全部　食べる-POT-NEG-IND=EPI　分かる-NEG-IND=SFP
麦も全部食べられないかもしれないね。

この=gara は終助詞の位置でも使うことが出来る。(6-102) は事態を表す節 nooka naNzji=cji s-ju-N「何か焦げている」に助詞=gara が接続し、事態が成立する可能性について述べている。

(6-102)　*noo=ka*　*anuu*　*naNzjicji*　*sj-u-N=gara=jaa*
nuu=ka　anu　naNzjicji　sji-u-N=gara=jaa
何=Q　FIL　お焦げ　する-CONT-IND=EPI=SFP
何か焦げているかもね。

6.3.2.1.4 蓋然性

話者の主観的な判断から、事態が成立する／成立している可能性が高いことを表すモダリティを「蓋然性のモダリティ」と呼ぶ。蓋然性を表す形式として、形式名詞 hazji「はず」と、動詞連続「継起形=du aru」がある。

6.3.2.1.4.1 hazji

蓋然性のモダリティを表す 1 つ目の形式として、形式名詞 hazji がある。

(6-103) は事態を表す naacja Maa=ni kusa kamacj-i mizji num-asj-i=du Maa=wa geNki na-ju-N「明日馬に草を食べさせ、水を飲ますと馬は元気になる」が連体節として形式名詞の hazji「はず」を修飾し、その事態が成立する可能性が高いと、話者が考えていることを表している。

(6-103)

[naacja	*Maa=ni*	*kusa*	*kam-acj-i*	*uri=ga*	*atu*	*mizji*
naacja	Maa=ni	kusa	kam-as-i	uri=ga	atu	mizji
明日	馬=LOC	草	食べる-CAUS-SEQ	それ=GEN	後	水

明日、馬に草を食べさせて、その後に、水を

num-as-ju-sji=du	*Maa=wa*	*geNki*	*na-ju-nu]*
num-ras-ju-sji=du	Maa=wa	geNki	na-ju-nu
飲む-CAUS-NPST-COMP=FOC	馬=TOP	元気	なる-NPST-ADN

飲ませたら、馬は元気になる

hazji=doo
hazji=doo
はず=SFP
はずだよ。

6.3.2.1.4.2 連用形=du sjuru

蓋然性を表すもう一つの形式として、動詞の連用形に焦点助詞が接続し、*sji の係り結び形で閉じる、という形式がある。

(6-104) は昔ばなしの一節で、貧乏なのに喧嘩が少ない家族に「なぜ喧嘩が少ないのか？」と尋ねたところ、「悪い人ばかりいるからだよ」と答えられたのに対し、「なぜ悪い人ばかりなら喧嘩をしないのか？」と述べる場面である。

述語句の最初の動詞*sji「する」は連用形を取り焦点助詞=du を接続している。また、二つ目の動詞は、*sji「する」の係り結び形になっている。この動詞連続を hazji に代え、juuzai s-juu-nu hazji「喧嘩をするだろう」と言い換えることも可能である。

(6-104)

waro-sa-nu	*cjuu*	*a-riba*	*juuzai*	*sji-i=du*	*s-ju-ru*
waro-sa-nu	cjuu	a-riba	juuzai	sji-i=du	sji-ju-ru
悪い-ADJ-ADN	人	COP-COND1	喧嘩	する-SEQ=FOC	する-NPST-MSB

悪い人であれば、喧嘩をするだろう。

6.3.2.2　評価のモダリティ

評価のモダリティは、事態の必要性を表す「必要」、事態の実現を認める「許可・許容」、事態が実現されないことを許容する「不必要」、事態の実現を認めない「不許可・非許容」に大別できる。

6.3.2.2.1　必要

必要のモダリティは、動詞の否定条件形 (-ranja) と*na「なる」の否定形の連続によって表される。

(6-105) は、「国頭には肉（を売っている店）がないから、和泊まで買いに行く必要がある」という文で、述語句は*ik「行く」の否定条件形 ikanja「行かないと」と*na「なる」の否定形である na-ra-N の連続によって表されている。

(6-105)	*kuNzee=ni=wa*	*sjisji=nu*	*na-adana*	*wadomari=Ntabe*
	kuNzee=ni=wa	sjisji=nu	na-radana	wadomari=Ntabe
	国頭=LOC=TOP	肉=NOM	ない-NEG.SEQ	和泊=TERM
	国頭には肉がないから、和泊まで行かないと			

ik-an-ja	*na-ra-N*
ik-ran-rja	na-ran-N
行く-NEG-SEQ	ない-NEG-IND
ik-an-ja	ならない。

6.3.2.2.2　許可・許容

許可・許容のモダリティは、動詞の継起形と、形容詞の*jukwa「良い」の連続によって形成される。

(6-106) は「(家）にいる」ことを許容することを表しており、述語句は動詞*u「いる」の継起形 uti と、形容詞 jukwaN によって形成されている。

(6-106)	*icji=Ntabe=mu*	*ut-i*	*jukwa-N=doo=jaa*	
	icji=Ntabe=mu	u-i	jukwa-N=doo=jaa	
	いつ=TERM=ADD	いる-SEQ	良い-IND=SFP=SFP	
	いつまでもいて良いよ。			

6.3.2.2.3 不必要

不必要のモダリティは、動詞の連用形と gurinaN[91]「～必要がない」の複合語によって表される。

(6-107) は島に U ターンした話者が、「最初は敬語が使えなくて方言を話せなかったが、敬語を使う必要がないと思い始めてから方言が使えるようになった」と話す一節である。ここでは、動詞*cjiko「使う」の連用形と gurinaN「～必要がない」が複合語を形成している。データ不足により、gurinaN をこれ以上分析することが出来ないため、暫定的に日本標準語訳をグロスに振る。

(6-107)	*daNdaN*	*oohoo*	*cjiko-i+gurinaN=jaa=di*		*isjiki*	*sji-i*
	daNdaN	oohoo	cjiko-i+gurinaN=jaa=di		isjiki	sji-i
	だんだん	敬語	使う-INF1+必要がない=SFP=QT		意識	する-SEQ
	だんだん「敬語を使う必要ないんだ」と意識し					

hazjimit-a-tu	*doNdoN*	*hoogeN*	*izjit-i*	*kicj-a-nu…*
hazjimi-a-tu	doNdoN	hoogeN	izji-i	ku-a-nu
始める-PST-CSL	どんどん	方言	出る-SEQ	来る-PST-ADN
始めたから、どんどん方言が出て来た‥				

6.3.2.2.4 不許可・非許容

不許可・不許容のモダリティは、動詞の継起形に主題助詞が接続したものと、(a) *sjim「すむ」もしくは、(b) *na「なる」の否定形とによって表される。

(6-108) は昔ばなしの一節で「天女が裸になっているから、行って（見て）は行けない」と男が思う箇所である。ここでは、許容されない動作*ik「行く」の継起形に主題助詞=wa が接続したものと、*sjim「すむ」の否定形が用いられている。

(6-108)	*hadaka*	*nat-u-N=tuni*	*izj-i=wa*	*sjim-a-N*
	hadaka	na-u-N=Ntuni	ik-i=wa	sjim-ran-N
	裸	なる-CONT-IND=CSL	行く-SEQ=TOP	すむ-NEG-IND
	裸になっているから、行ってはいけない。			

(6-109) は「あの人はあんな人（怖い人）だから、近寄ってはいけない」と子供に言う発話である。ここでは、許容されない動作 cjikajotte（標準語「近寄って」）に主題助詞=wa

[91] 鹿児島方言辞典に「連用形＋グレ（位）ワ＋イラン（いらない）」で「～必要ない」という意味を表す語句（橋口 1987）があり、元々薩摩から借用した表現の可能性がある。

が接続したものと、*na「なる」の否定形 naraN が用いられている。

(6-109)

aN	*cjuu=wa*	*agaNsjanu*	*cjuu*	*ja-N=tu*	*<cjikajotte>=wa*
aN	cjuu-wa	agaNsjanu	cjuu	ja-N=tu	cjikajotte=wa
あの	人=TOP	あんな	人	COP-IND=CSL	近寄って=TOP

あの人はあんな人だから、近寄っては

na-ra-N=doo=jaa
na-ran-N=doo=jaa
なる-NEG-IND=SFP=SFP

いけないよ。

6.3.2.3 証拠のモダリティ

証拠のモダリティは、話し手の情報源を表す。情報源が他者から聞いた内容である場合を「伝聞」とする。自分自身が目撃した事態である場合を「直接知覚」、事態の痕跡である場合を「痕跡からの推量」と呼ぶ。「直接知覚」「痕跡からの推量」は、推量のモダリティとも関連を持つ。

6.3.2.3.1 伝聞

情報源が他者から聞いた内容である証拠のモダリティを「伝聞」と呼ぶ。「伝聞」は、他の証拠のモダリティと異なり、推量と関連がない。

「伝聞」を表す形式として、まず「聞く」という動詞が、伝聞内容を表す節を、引用の助詞=di によって、補部に取る表現がある。

(6-110) は「金魚が死ぬ」という事態が成立する可能性を、他者から聞いたときの表現である。「隣の家の金魚はもう死にそうだ」という意味を表す節に、引用の助詞=di が接続し、*cjik「聞く」の補部になっている。

(6-110)

[tonari=nu	*jaa=nu*	*kiNgjo=wa*	*naa*	*sjin-i+gi-sa*
tonari=nu	jaa=nu	kiNgjo=wa	naa	sjin-i+gi-sa
隣=GEN	家=GEN	金魚=TOP	もう	死ぬ-INF1+EPI-ADJ

隣の家の金魚は、もう死にそうだと

aa-mu]=di	*cjicj-a-N*
a-mu=di	cjik-a-N
COP-EVD=QT	聞く-PST-IND
aa-mu]=di	聞いた。

但し、述語動詞は必ずしも必要ない。=di は終助詞の位置でも使うことができ、その節の表す意味が伝聞された内容であることを表せる。

(6-111) は「昨日の集まりに自分は行かなかったが、人からその時の様子を聞いた」という文脈で作例してもらった文である。この文は、[ ]で囲んだ「昨日は集まりは誰も来なかった」という意味を表す箇所に、引用の助詞=di と終助詞=doo が接続している。この時、「聞いた」などの動詞はなくても、[ ]で囲んだ内容が伝聞によって知り得た情報であることを示している。

(6-111)	*[kiNnjuu=wa*	*acjimai=wa*	*taN=mu*	*fuu-danat-a-mu]=di=doo*
	kiNnjuu=wa	acjimai=wa	taN=mu	ku-radana-a-mu=di=doo
	昨日=TOP	集まり=TOP	誰=ADD	来る-NEG-PST-EVD=QT=SFP
	昨日は、集まりは誰も来なかったんだって。			

6.3.2.3.2 直接知覚

情報源が、話者が直接認識した事態であることを表すモダリティを「直接知覚」と呼ぶ。直接知覚のモダリティは、文が断定的な内容である場合（断定のモダリティの場合）には基本的に無標だが、主体変化動詞は過去 2 形 (-juta) を取ることで、それが「目撃した動作」であることを含意する（6 章 2 節「テンス・アスペクト・エビデンシャリティー」を参照）。

文が推量的な内容である場合、直接知覚は動詞の連用形と形容詞*gi「～そうだ」の複合形容詞によって表される。

6.3.2.3.2.1 -juta

主体変化動詞は、過去 2 形（-juta）を取ることで、それが「目撃した動作」であることを表す。-juta はテンス・アスペクトを表す形式であるが、二次的にエビデンシャルな意味を表していると考えられる。

(6-56) は、「あきこが A コープに向かっている様子を目撃した」ことを表しており、*ik「行く」という動詞が過去 2 形-juta を取っている。

(6-112)	*akiko=wa*	*batabata*	*sji-i*	*eekoopu=cji*	*ic-juta-N.*
	akiko=wa	batabata	sji-i	eekoopu=cji	ik-juta-N
	あきこ=TOP	バタバタ	する-SEQ	A コープ-ALL	行く-PST2-IND
	あきこはバタバタして A コープへ行っている途中だった。				

6.3.2.3.2.2 *gi「～そうだ」

直接知覚を表す形式として、動詞の連用形と形容詞*gi「～そうだ」の複合形容詞があ

る。*gi「〜そうだ」は、(a) 話し手が観察したことを表す場合と、(b) 話し手が観察したことを元に、何かを推量する用法がある。

(6-113) は「夫婦の仲が良い」という観察した内容を述べており、述語句はコピュラ動詞*a の連用形と*gi「〜そうだ」の形容詞によって形成されている。

(6-113)
anu	*fuufu=wa*	*naka=nu*	*jukwa*	*a-i+gi-sa-N*
anu	fuufu=wa	naka=nu	jukwa	a-i+gi-sa-N
あの	夫婦=TOP	仲=NOM	良い	COP-INF+EVI-ADJ-IND

この金魚はもう死にそうだ。

(6-114) は、話者が直接見た様子から、「金魚が死ぬ」という事態が成立する可能性を述た文である。「金魚が死ぬ」という命題の述語動詞*sjin「死ぬ」が、形容詞*gi「〜そうだ」と複合形容詞を形成している。

(6-114)
fuN	*kiNgjo=wa*	*naa*	*sjin-i+gi-sa-N*
fuN	kiNgjo=wa	naa	sjin-i+gi-sa-N
この	金魚=TOP	もう	死ぬ-INF1+EVI-ADJ-IND

この金魚はもう死にそうだ。

6.3.2.3.3 痕跡からの推量

事態の痕跡を情報源に、事態が成立したことを推量するモダリティを「痕跡からの推量」と呼ぶ。「痕跡からの推量」は、動詞の継起形と存在動詞*a の動詞連続で表される。

(6-115) は、道が濡れている様子を見て「雨が降った」ことを推量する文である。述部は、*fu「降る」の継起形と、*a「ある」の動詞連続によって形成されている。これに対し、「雨が降った」ことを実際に目撃して、事実として知っている場合には、(6-116) のように「断定」のモダリティを用いる。

(6-115)
ami=nu	*fut-i*	*a-ssaa*
ami=nu	fu-i	a-sa
雨=NOM	降る-SEQ	ある-MRT

雨が降ったみたいだ。

(6-116)
ami=nu	*fut-a-N*
ami=nu	fu-a-N
雨=NOM	降る-PST-IND

雨が降った。

6.3.3　説明のモダリティ

日本記述文法研究会（2003: 189）によると、説明のモダリティとは「文と先行文脈との関係づけを表すもの」であり、先行文脈で示された内容の事情や帰結を提示する。共通語の「〜のだ」「〜わけだ」「〜ものだ」にあたる。

6.3.3.1　baa

説明のモダリティを表す 1 つ目の形式として、形式名詞の baa「こと」がある。

(6-117) は、昔のサトウキビ産業の話をしている一節である。A が「帝国物産まで砂糖黍を持って行くと、そこ（奄美糖業）の 2 倍貰える」と言ったのに対し、B が A の発言の帰結として「2 万円」という具体的な金額を述べている[92]。この時、述語は形式名詞=baa となっている。

(6-117)　*A)*　*teekokubussaN=tani*　*mucj-i*　*ik-iba*　*Maa=nu*　*nibai*
teekokubussaN=Ntani　mut-i　ik-riba　Maa=nu　nibai
帝国物産=TERM　持つ-SEQ　いく-COND1　そこ=GEN　二倍
帝国物産まで持って行けば、そこの 2 倍

muro-ju-N=gi=joo
muro-ju-N=gi=joo
もらう-NPST-IND=EPI=SFP
貰うんだよ。

B)　*nimaNeN=di*　*ʔjuu-nu*　*baa=na?*
nimaNeN=di　ʔi-ju-nu　baa=naa
2 万円=QT　言う-NPST-ADN　こと=YNQ
2 万円という事か？

6.3.3.2　=gi

説明のモダリティを表す 2 つ目の形式として、終助詞=gi がある。

(6-118) は、「話者 TN と別の話者 TS が Skype で良く話す」ということを話した文脈で発話された文であり、先行文脈で述べられた内容の「事情」を説明している。この時、述語動詞は終助詞=gi を接続している。

[92] 実際には、B の勘違いで「2000 円」であったことがその後の談話で判明する。

(6-118)　*TS=wa=jaa*　*tookjoo=niti*　*hoogeN*　*hanasj-i+bu-sja*
TS=wa=jaa　tookjoo=niti　hoogeN　hanas-i+bu-sja
TS=TOP=SFP　東京=LOC1　方言　話す-INF+欲しい-ADJ
TS さんは、東京で方言を話したいから、

a-N=tu=jaa	*waN=tu*	*hanasji*	*sji-ju-N=gi=joo*
a-N=tu=jaa	waN=tu	hanasji	sji-ju-N=gi=joo
COP-IND=CSL=SFP	1SG=COM	話	する-NPST-IND=EXP=SFP
a-N=tu=jaa	私とど話をするんだよ。		

6.3.3.3　=moo

説明のモダリティを表す 3 つ目の形式として、終助詞=moo がある。=moo は、(a) 先行文脈の帰結を表す、(b) 先行文脈に情報を付けたす、(c) 先行文脈を言い換える、など何らかの先行文脈との関係を提示する機能を持っている。

(6-119) は談話の一部で、方言を子供たちに教える手法について話した後に発話された文である。この文は終助詞=moo を接続しており、先行文脈の帰結を提示する内容になっている。

(6-119)　*haN*　*sji-ru=tu=ja*　*wara-Ncja=mu*　*kjoomi*　*muc-ju-N=moo*
haN　sji-ru=tu=ja　wara-Ncja=mu　kjoomi　muc-ju-N=moo
こう　する-INF3=CSL=SFP　子供-PL=ADD　興味　持つ-NPST-IND=SFP
そうするとね、子供たちも興味を持つんだよ。

(6-120) は質問者が「「何時」を“ヌードゥキ”と言ったりしないか？」と尋ねたのに対する回答である。発話者は「「何時」は方言でもナンジだ」と、質問者の問いを否定した上で、「ヌードゥキ」という言葉は使わない、と先行する文脈に情報を付けたしている。

(6-120)　*naNzji=wa*　*naNzji=djaa*　*“nuuduki”=tuka*　*aNmai*　*cjiko-ra-N=moo*
naNzji=wa　naNzji=djaa　nuuduki=tuka　aNmai　cjiko-ran-N=moo
何時=TOP　何時=SFP　ヌードゥキ=とか　あんまり　使う-NEG-IND=SFP
「何時」は「ナンジ」だよ。「ヌードゥキ」とかあんまり使わないもん。

(6-121) は昔ばなしの一節で、登場人物の 1 人が自分の正しさを主張する場面である。=moo が接続する文は、先行する文を言い換える内容になっている。

(6-121)　*wana*　*icja=mu*　*na-N*　*wana*　*jukwa-N=moo*
wana　icja=mu　na-N　wana　jukwa-N=moo
1SG　どう=ADD　ない-IND　1SG　良い-IND=SFP
私はどうもない（悪くない）。私はいいもん。

6.3.4　伝達態度のモダリティ

日本記述文法研究会（2003）にならい、文の内容を話し手に伝える「伝え方」に関わるモダリティを「伝達態度のモダリティ」と呼ぶ。伝達態度のモダリティには、丁寧体／普通体の選択により表される「丁寧のモダリティ」と、終助詞で表される「伝達態度のモダリティ」に分類できる。

6.3.4.1　丁寧さのモダリティ

聞き手や発話状況に応じた発話スタイルの選択に関するモダリティを「丁寧さのモダリティ」と呼ぶ（日本記述文法研究会 2003: 230）。丁寧さのモダリティは、無標の普通体と、有標の丁寧体の対立により表される。

丁寧体はコピュラ動詞 diro か、丁寧接辞-jabu によって表される（5 章 4 節「待遇表現」参照）。

6.3.4.1.1　diro

丁寧さを表す 1 つ目の形式として、コピュラ動詞 diro がある。diro は補部に名詞を取る。

(6-122) は聞き手が同等以下の普通体の文、(6-123) は聞き手が目上や親しみが薄い人の、丁寧体の文である。(6-122) では、名詞 erabu=nu cjuu「沖永良部の人」が述語になっているのに対し、(6-123) は名詞 erabu=nu cjuu「沖永良部の人」の後に、丁寧を表すコピュラ動詞が接続している。

(6-122)　*ura*　*erabu=nu*　*cjuu=kaja?*
ura　erabu=nu　cjuu=kaja
2SG　沖永良部=GEN　人=Q
あんたは沖永良部の人か？

(6-123)　*nata*　*erabu=nu*　*cjuu*　*diro=kaja?*
ura　erabu=nu　cjuu　diro=kaja
2SG.HON　沖永良部=GEN　人　COP.POL=Q
あの人は沖永良部の人ですか？

6.3.4.1.2 -jabu

丁寧さを表す 2 つ目の形式として、丁寧を表す動詞の屈折接辞-jabu がある。

(6-124) は聞き手が同等以下の普通体の文であり、(6-125) は聞き手が目上や親しみの薄い人の、丁寧体の文である。(6-124) では*u「いる」が待遇に関する接辞を取っていないのに対し、(6-125) では*u「いる」が丁寧接辞-jabu を取っている。

(6-124)

naacja	*jaa=ni*	*u-N=kaja?*
naacja	jaa=ni	u-N=kaja
明日	家=LOC1	いる-IND=Q

明日は家にいるの？

(6-125)

naacja	*jaa=ni*	*u-jabu-N=kaja?*
naacja	jaa=ni	u-jabu-N=kaja
明日	家=LOC1	いる-POL-IND=Q

明日は家にいますか？

6.3.4.2 伝達態度

話し手が発話内容を聞き手に示す方法を「伝達態度のモダリティ」と呼ぶ。

筆者の定義に基づき、伝達態度のモダリティを、(a) 発話内容を聞き手に伝達する「伝達」、(b) 発話内容を聞き手に確認する「確認」、(c) 聞き手と関係なく、発話者が自分自身の感情を表出する「詠嘆」、(d) 話し手が発話内容を自明だと考えている「自明性」、(e) 発話者が、聞き手を意識していることを表す「配慮（聞き手への意識）」に分類する。

以下で説明する終助詞は、複数の伝達態度のモダリティを併せ持つものも多い。各形式がどのようなモダリティを持つかを表 6-13 にまとめる。なお「詠嘆」「配慮」のモダリティについては、各形式の用法の中で説明する。

表 6-13. 伝達態度のモダリティ形式と意味の対応

	伝達	確認	詠嘆	自明性	配慮
=doo	✔				
=djaa	✔				
=doojaa	✔				✔
=jaa		✔	✔		✔
=gaa	✔			✔	
=sja				✔	✔

6.3.4.2.1 伝達

発話内容を聞き手に伝達する文末表現を「伝達モダリティ」と呼ぶ。「伝達」は、=doo, =djaa, =doojaa「～よ」によって表される。=doo と=djaa に大きな用法の違いはないが、同一環境における入れ替えが可能である為、別語彙と考える。=doojaa は、他の 2 形式と比べて丁寧な表現として話者に意識されている。

6.3.4.2.1.1 =doo

「伝達」を表す 1 つ目の形式として=doo「～よ」がある。

=doo は共通語の「よ」に対応する形式であり、聞き手が気付いていない事態に注意を向けさせたり、聞き手が知らない事態を報告したりする。

(6-126) は手拭いを落としたことに気が付かない人に対して注意喚起する文であり、終助詞には=doo「～よ」が用いられている。仮に、=doo の位置に「確認」のモダリティを表す=jaa「～ね」が接続すると、話し手が「手拭いが落ちたことを聞き手も知っている」と認識している文になる。

(6-126)
tinugui=nu *uti-jabut-a-N=doo*
tinugui=nu uti-jabu-a-N=doo
手拭い=NOM 落ちる-POL-PST-IND=SFP
手拭いが落ちましたよ。

(6-127) は、聞き手に話し手自身の動作を報告する発話であり、終助詞には=doo が使われている。(6-128) のように、=doo の位置に「確認」のモダリティを表す=jaa「～ね」が接続すると、「早く起きられた」という動作の主体が聞き手であり、話し手がその事態を聞き手に確認する文として解釈される。

(6-127)
hjuu=wa *hee-sa* *ui-rat-a-N=doo*
hjuu=wa hee-sa ui-ra-a-N=doo
今日=TOP 早い-ADJ 起きる-POT-PST-IND=SFP
今日は早く起きられたよ。

(6-128)
hjuu=wa *hee-sa* *ui-rat-a-N=jaa*
hjuu=wa hee-sa ui-ra-a-N=jaa
今日=TOP 早い-ADJ 起きる-POT-PST-IND=SFP
今日は早く起きられたね。

6.3.4.2.1.2 =djaa

=doo と同じく「伝達」のモダリティを表す終助詞として=djaa がある。=djaa と=doo の違いは明らかになっていない。

(6-129) は(6-127) と同様に、手拭いを落としたことに気が付かない人に対して注意喚起する文であり、終助詞には=djaa「～よ」が用いられている。

(6-129)

tinugui=nu	*uti-jabut-a-N=djaa*
tinugui=nu	uti-jabu-a-N=djaa
手拭い=NOM	落ちる-POL-PST-IND=SFP

手拭いが落ちましたよ。

(6-130) は「あんたは沖永良部の人か？」と尋ねられた時の応答文で、話し手自身に関わる事柄を聞き手に伝える文になっており、終助詞には=djaa「～よ」が用いられている。

(6-130)

wana	*erabu+cjuu=wa*	*a-jabu-ra-N=djaa*
wana	erabu+cjuu=wa	a-jabu-ran-N=djaa
1SG	沖永良部の人=TOP	COP-POL-NEG-IND=SFP

私は沖永良部の人ではありませんよ。

6.3.4.2.1.3 =doojaa

伝達のモダリティを表す 3 つ目の表現に=doojaa「～ですよ」がある。=doojaa の jaa は、確認の=jaa と関連があると思われるが、=doojaa には確認の意味がない。話者が、=doo と比べて=doojaa の方が「丁寧な感じがする」としていることから、=doojaa は、「伝達」の=doo と、=jaa の 3 つ目の「配慮（聞き手への意識）」の機能が合わさった表現ではないかと考えられる。=doojaa は分析可能な場合もあるが、=dojaa のように=doo が短音化し、1 つの終助詞ととして発話されることも多い。

(6-131) は昔話の一節で、母親が子供に言い聞かせる場面である。母親自身の考えを子供に伝達する発話であり、終助詞には=doo=jaa が用いられている。

(6-131)

muzji=mu	*awa-mu*	*ucja=ni*	*kam-a-ju-nu*	*tame=du*
muzji=mu	awa=mu	ucja=ni	kam-ra-ju-nu	tame=du
麦=ADD	粟=ADD	2PL=LOC1	食べる-PASS-NPST-ADN	ため=FOC

麦も粟もあんた達に食べられるために

cju=kkee	*cju=kkee*	*fusji*	*fusji*	*uudoo*	*nat-i*	*icj-u-N=doo=jaa*
cju=kkee	cju=kkee	fusji	fusji	uudoo	na-i	ik-u-N=doo=jaa
1=回	1=回	節	節	大きく	なる-SEQ	いく-CONT-IND=SFP=SFP

1 回 1 回、節々、大きくなっていくんだよ。

6.3.4.2.2 確認

話し手が、発話内容を聞き手に確認したり、共感を求めるモダリティを「確認のモダリティ」と呼ぶ。確認のモダリティは終助詞=jaa「〜ね」によって表される。

6.3.4.2.2.1 =jaa

=jaa は共通語の「ね」に対応する形式である。=jaa には、(a) 確認、(b) 詠嘆、(c) 配慮、の意味がある。また、=jaa には文末で用いる文末詞的用法の他に、文中で用いる間投詞的用法がある。

6.3.4.2.2.1.1 確認

=jaa の 1 つ目の意味は、発話内容を相手に確認する「確認」の意味である。

(6-132) は、話し手が、聞き手に「川上さんの親戚ではない」ことを確認する文であり、終助詞に=jaa が用いられている。仮に=jaa ではなく、伝達の=doo を用いると、話し手が聞き手に、聞き手が「川上さんの親戚ではない」ことを通達する文になる。

(6-132)

ura	*kawakamisaN=ga*	*sjiNseki=wa*	*a-ra-N=jaa*
ura	kawakamisaN=ga	sjiNseki=wa	a-ran-N=jaa
2SG	川上さん=GEN	親戚=TOP	COP-NEG-IND=SFP

あんたは川上さんの親戚ではないね。

6.3.4.2.2.1.2 詠嘆

=jaa の 2 つ目の意味として、聞き手と関係なく、話し手が自分自身の感情を表出する「詠嘆」の意味がある。 (6-133) は昔話の中で、竹売りの男がある屋敷を訪ねた際、女主人が竹細工を全て買い取ったことに対して、帰り際に男が発する台詞である。この台詞は女に伝達することを意図しておらず、話し手が独り言として呟いた文である。このことから、=jaa が詠嘆の意味を持つことが分かる。

(6-133)

waa-sja-nu	*wunagu=jaa*	*zjiNmucji=wa*	*cjigo-ju-N=jaa.*
waa-sja-nu	wunagu=jaa	zjiNmucji=wa	cjigo-ju-N=jaa
おかしい-ADJ-ADN	女=SFP	金持ち=TOP	違う-NPST-IND=SFP

おかしな女だ。金持ちは違うな。

6.3.4.2.2.1.3 配慮

=jaa の 3 つ目の機能として、話し手が、聞き手に配慮していることを伝える用法がある。聞き手のに配慮していることを伝えることは、一方的な伝達の意味を薄め、結果として丁寧な表現と受け取られる。

(6-134) は相手に行為を要求する禁止形 ikuNna「行くな」に=jaa が接続している。相手に配慮していることを示す=jaa が接続することで、相手への禁止という強い行為要求を和らげ、丁寧な表現になる。

(6-134)	*uda=cji=mu*	*ik-uNna=jaa*
	uda=cji=mu	ik-runa=jaa
	どこ=ALL=ADD	行く-PROH=SFP

どこにも行くなよ。

6.3.4.2.2.1.4 間投詞的用法

=jaa には、文末詞的な用法の他に、文中で用いる間投詞的な用法がある。

(6-135) は文末の名詞述語 hjii=nu faa「木の葉」だけでなく、mai nugu-ju=sji=mu「尻を拭うのも」という名詞句、kami a-raNko「紙ではなくて」という等位節にも=jaa が接続している。これは、話者が発話する区切り毎に、相手への確認や注意を喚起する効果があると考えられる。

(6-135)	*gaNsji*	*mai*	*nugu-ju-sji=mu=jaa*	*kami*	*a-raNko=jaa*
	gaNsji	mai	nugu-ju-sji=mu=jaa	kami	a-raNko=jaa
	だから	尻	拭う-NPST-COMP=ADD=SFP	紙	COP-NEG.SEQ=SFP

だから、尻を拭うのもね、紙ではなくてね、木の

hjii=nu	*faa=jaa*
hjii=nu	faa=jaa
木=GEN	葉=SFP

葉ね。

6.3.4.2.3 自明性

話し手が、発話内容を当然だと思っていることを表明するモダリティを、本稿では「自明性」と呼ぶ。自明性を表す形式には=gaa, =sja がある。自明性を持つ形式は、話し手が発話内容に自信を持っているため、表現としては「強い表現」となる。

6.3.4.2.3.1 =gaa

=gaa の機能は明らかになっていない部分もあるが、(a) 聞き手に行為働きかけるモダリティと共起し、その働きかけを強める、 (b) 話し手にとって自明の内容を聞き手に示す、といった用法が見られる。

(a) 働きかけを強める

=gaa は動詞の勧誘文や命令文に接続し、相手に対する働きかけを強める。同じく行為要求のモダリティでも、行為の不実行を要求する禁止文とは接続しない。

(6-136) は相手を勧誘する文であり、勧誘形 ika-aa「行こう」だけでも文が成り立つが、更に=gaa を接続することで、より働きかけの強い文となる。

(6-136)

naacja	*oNseN=cji*	*ik-a=gaa*
naacja	oNseN=cji	ik-raa=gaa
明日	温泉=ALL	行く-INT=EMPH

明日温泉へ行こうよ。

(b) 自明な内容の提示

聞き手の質問に対し、話し手にとって自明であることを表す時にも=gaa が用いられる。

(6-138) は、談話中で「ムジとは何か？」と尋ねたのに対する回答である。「ムジ」というのはそれまでも話し手と聞き手の会話で登場した単語であり、話し手が、聞き手が当然知っているはずだと考えている。「伝達」の=doo ではなく =gaa を用いることで、話し手が当然だと思っていることを聞き手に示している。

(6-137)

muzji=wa=sja	*anuu*	*taimu=nu*	*kuki=gaa*
muzji=wa=sja	anu	taimu=nu	kuki=gaa
ムジ=TOP=EMPH	FIL	タイモ=GEN2	茎=EMPH

「ムジ」はタイモの茎だよ！

(6-138) B は談話の中で、B が苦労話をした後に、A が「大変じゃない？」と当然のことを尋ねたのに対し、返された発話である。この文においても、=gaa は話し手にとっては自明であることを聞き手に提示していると考えられる。

(6-138)

A	*taiheN*	*a-raz-ee?*	/
	taiheN	a-ran-e	
	大変	COP-NEG-YNQ	

大変じゃない？

B *taiheN=gaa*
taiheN=gaa
大変=EMPH
大変だよ！

6.3.4.2.3.2 =sja

=sja の機能は明らかになっていない点も多いが、基本的には共通語の「さ」と対応する形式だと考えられる。文中で用いられる間投詞的用法と、文末で用いられる文末詞的用法があるが、間投詞的に用いられることが圧倒的に多い。

間投詞的な用法では、「聞き手を意識していること」を前面に出し、聞き手の相手の注意を喚起する機能を持つ。これに対し、文末詞的な用法では、発話内容を当然のこととして提示し、発話内容を強める機能がある。

(6-139) は、談話の一部で、聞き手が「ムジとは何か？」と聞いたのに対する応答である。=sja を用いることで、聞き手の注意を引きつけていると思われる。同じく聞き手への意識を表す=jaa は、相手に寄り添うことで注意を引きつけるような働きをするが、=sja は聞き手の注意を強制的ひきつけるような働きをし、表現全体が「強い」もしくは「荒い」ものとして受け止められる。

(6-139)

muzji=wa=sja	*anuu*	*taimu=nu*	*kuki=gaa*
muzji=wa=sja	anu	taimu=nu	kuki=gaa
ムジ=TOP=EMPH	FIL	タイモ=GEN2	茎=EMPH

「ムジ」はさ、タイモの茎だよ！

(6-140) は、質問者が「早くお経が終われば良いのに」は方言で何と言うか？と尋ねたのに対する応答である。発話者にとっては、方言に直した回答は自明の内容であり、述語動詞は確認形を取ったうえで=sja「～さ」を終助詞に接続している。

(6-140)

hee-sa	*okjoo=nu*	*sjim-iba*	*jukwa-nu*	*muN=jaa=di*	*gaN*
hee-sa	okjoo=nu	sjim-riba	jukwa-nu	muN=jaa=di	gaN
早い-ADJ	御経=NOM	済む-COND1	良い-ADN	もの=SFP=QT	そう

「早くお経が済めばよいのに」と、そう

ʔjuu-maze=sja?
ʔi-ju-maze=sja
言う-NPST-CONF=EMPH

言うんじゃない？

6.4　待遇表現

6.4 節では、待遇表現について記述する。「待遇表現」とは、基本的に同じ意味[93]のことを述べる際に、話題の人物／聞き手／場面などを顧慮し、それに応じて複数の表現を使い分ける表現を指す（菊池 1994: 21）。待遇表現には上向きの表現と、中立・下向きの表現があり、日本語において上向きの表現には、(a) 専用の形式である「敬語」を用いる方法と、(b) 「自発」や「断定の回避」など他の文法形式を用いて間接的に敬意を表す方法とがある。中立的な表現は「普通体」（無敬語）によって表され、下向きの表現は多くの場合語彙的なものである。

発話の際にどのような待遇表現を用いるかどうかは、通常「対人関係」と「場面」に影響される。対人関係には上下関係、親疎関係、立場関係などがあり、場面は改まり度（フォーマルであるかインフォーマルであるか）が問題となる。一般に上下・立場が上の相手、親しみの薄い相手、場面が改まっているほど、敬語を使う傾向にあるが、それらが相反する組み合わせとなった場合（例えば、年齢は下であるが初対面の相手など）どの要素を優先させるかはより複雑な様相を見せる。

待遇表現の種類として、話題の人物に対する待遇表現（素材待遇）と聞き手に対する待遇表現（対者待遇）がある。素材待遇には話題の人物を高める「尊敬語」、話題の人物に対して自分を低める「謙譲語」があり、対者待遇には表現を丁寧にすることで聞き手に配慮する「丁寧語」がある。

本節は国頭方言の待遇表現に関する初期報告として、待遇表現のうち上向きの表現、その中でも敬意を表す専用の表現としての「敬語」を扱う。敬語は一般に尊敬語、謙譲語、丁寧語に分けられるが、調査が不十分で、謙譲語にあたる表現を見出すことが出来なかったため、尊敬語、丁寧語に限って記述を行う。対人関係、場面による複合的な敬語選択の様相については、データが十分ではないため今後の分析課題としたい。

6.4.1　データ

敬語形式については自然談話資料のみで十分な形式を得ることが出来なかったため、質問調査によってデータを大幅に補った。質問調査におけるインフォーマントは国頭集落で言語形成期を過ごし、現在国頭集落在住の TN 氏である（1947 年生）。質問には「待遇表現調査票」（方言研究ゼミナール編 1997）の一部を用いたほか、筆者が状況を設定し発話を作例してしもらう方式、日本共通語を国頭方言に訳してもらう翻訳式を用いた。調査はテレビ電話（Skype）を通じて 2015 年 4 月 26 日、5 月 10 日、5 月 17 日、6 月 1 日に約 1 時間ずつ行った。インフォーマントは方言話者の中では比較的若年であり、伝統的な敬語体系の一部を保持していない可能性がある。このため本格的な敬語体系の把握には、今後さらに高齢の話者を含む調査が必要である。

---

[93] 菊池（1994:21）は〈基本的意味〉を「伝達内容の真偽」と定義している。

6.4.2　敬語体系

国頭方言の敬語は、形態的に尊敬語と丁寧語に分類することが出来る。尊敬語は話題の人物が敬意の対象である場合に用いられ、丁寧語は聞き手が敬意の対象である場合や、より丁寧な発話を配慮した際に用いられる。ただし、実際の使用場面で尊敬語・丁寧語を区別する意識は希薄で、両者は共に「敬い語」として意識されている。敬い語を使う条件として、話題の対象／聞き手が、(a) 自分よりも年上であること（上下関係）、(b) 初めて会うなど親しみの低いこと（親疎関係）が挙げられる。なお、例え聞き手が身内以外の人物であっても、身内内の敬語（例えば祖父への尊敬表現）を使うことができ、聞き手との関係で話題の人物への待遇が変化する相対敬語[94]的な性質は、日本標準語に比べ低いと思われる。

以下に記す通り、尊敬語には名詞の尊敬用法、動詞述語の尊敬用法があり、動詞述語の尊敬用法は、(a) 動詞語根自体が尊敬を表す「自立形式」、(b) 尊敬の補助動詞を用いる形式、の 2 種類がある。丁寧語には、(a) 動詞語根自体が丁寧を表す自立形式と、(b) 丁寧接辞を用いる形式がある。以下、具体的な形式について記述する。

6.4.3　尊敬語

6.4.3.1　名詞

名詞における非尊敬語（以下、普通語と呼ぶ）と尊敬語の対立は、2 人称代名詞に見られる。2 人称代名詞には、非尊称形（普通語）ura「あんた」と、尊称形（尊敬語）nata「あんた」の区別があり、nata は自分より目上の人物か、親疎関係の希薄な人物に用いられる。ura の複数形式は ucja「あんた達」、nata の複数形式は natataa「あなた達」である（代名詞の体系は 3 章 4 節を参照）。

(6-141) は自分の弟に対して「元気だったか？」と聞く表現で、二人称には非尊称形の ura「あんた」が用いられている。一方、(6-142) は祖父に対して元気であったか尋ねる表現で、二人称に尊称形の nata「あなた」が用いられている。

---

[94] 金田一（1941）では、第三者と聞き手の関係によって左右される敬語体系を「相対敬語」とし、同一の対象について人称・場面の如何にかかわらず、常に一定の敬語を用いる敬語体系を「絶対敬語」とした。日本の中央語の歴史においては、絶対敬語から相対敬語への変化があったことが知られている（辻村 1971）。現代日本共通語の場合、身内内部で敬語対象であっても、外の人物が聞き手である場合は尊敬語を控えるなど（例えば取引先との会話の中で、上司を非敬称で呼ぶなど）相対敬語的な傾向が強いと言える。

(6-141) *ura geNki at-e-e?*
ura geNki a-a-e?
2SG 元気 COP-PST-YNQ
元気だった？（弟に聞く）

(6-142) *nata duku-sa a-jabut-a-N=kaja?*
nata duku-sa a-jabu-a-N=kaja
2SG.HON 元気 COP-POL-PST-IND=Q
お元気でしたか？（祖父に聞く）

6.4.3.2 動詞

動詞の尊敬形式として、(a) 動詞語根が尊敬を表す自立形式、(b) 尊敬の補助動詞を用いる形式がある。(a) は*moo「行く」「来る」「言う」、*moo / *Mee「いる」、*mois「死ぬ」、*oisji「飲む」「食べる」の限られた語彙に見られる。(b) は、動詞の連用形 2 に後接する補助動詞 sjoo-ri「下さい」、動詞の継起形に接続する補助動詞 tabo-ri「下さい」があるが、いずれも命令形の用法のみ使われている。sjoori は s-iN sjoo-ri「してください」ois-iN sjoo-ri「召し上がって下さい」など限られた語彙にだけ接続するのに対して、tabo-ri にはこうした制限が無く、生産的な形式である。

6.4.3.2.1 自立形式

6.4.3.2.1.1 *moo-「行く」「来る」

*moo は「行く」「来る」の広い意味で用いられる尊敬体である。

(6-143) は集落の目上の人物に対して、近所の神社へ行く日取りを聞く内容で、普通体の*ik「行く」の代わりに、尊敬体の*moo「いらっしゃる」が用いられている。

(6-144) は自分の祖父に対して、明日家に来るかを聞く表現で、普通体の*ku「来る」の代わりに尊敬体の*moo「いらっしゃる」が用いられている。

(6-143) *icji misakiziNzja=cji=wa moo-ju-i=joo?*
icji misakiziNzja=cji=wa moo-ju-i=joo
いつ 岬神社=ALL=TOP 行く.HON-NPST-Q=WHQ
いつ岬神社へはいらっしゃる（行く）のですか？

(6-144) *naacja waN jaa=cji moo-ju-N=kaja?*
naacja waN jaa=ci moo-ju-N=kaja
明日 私 家 来る.HON-NPST-IND=Q
明日私の家にいらっしゃいますか？（来る）

6.4.3.2.1.2 moo- / Mee-「いる」

「いる」の普通体は*u、尊敬体には*moo と*Mee の 2 形式がある。

(6-145) は民話の中で、老夫婦が存在した様子を語っており、普通体の*u「いる」ではなく尊敬体の*Mee「いらっしゃる」が用いられている。

(6-146) は自分の祖父母が東京にいたが現在はいないという内容で、普通体の*u「いる」ではなく尊敬体*moo「いらっしゃる」が用いられている。なお、(6-146) の*moo の代わりに、*Mee 語根の形式も使用も可能で、現時点で*moo、*Mee の意味的な差異は見出されない。

(6-145)

awari	*s-ju-nu*	*zjaazja=tu*	*azji=tu=ga*
awari	sji-ju-nu	zjaazja=tu	azji=tu=ga
貧乏	する-NPST-ADN	お爺さん=COM	お婆さん=COM=NOM

貧乏なお爺さんとお婆さんが

Meet-i
Mee-i
いる.HON-SEQ
いらっしゃって

(6-146)

mae=wa	*zjaazja*	*azji=wa*	*tookjoo=ni*	*moo-juta=sjiga*
mae=wa	zjaazja	azi=wa	tookjoo=ni	moo-juta=sjiga
前=TOP	お爺さん	お婆さん=TOP	東京=LOC1	いる.HON-PST2=CNC

前は、お爺さんとお婆さんは東京にいらっしゃったが、

nisaNneN	*mae=ni*	*moisj-i*	*nama=wa*	*moo-ra-N=doo=jaa*
nisaNneN	mae=ni	moisji-i	nama=wa	moo-ra-N=doo=jaa
2,3 年	前=LOC1	死ぬ.HON-SEQ	今=TOP	いる.HON-NEG-IND=SFP=SFP

2,3 年前に亡くなって、今はいらっしゃらないよ。

6.4.3.2.1.3 *mois「死ぬ」

「死ぬ」の普通体は*sjin「死ぬ」、尊敬体は*mois「亡くなる」である。話題が動物等の非人間である場合には*sjin が用いられるが、話題が人間である場合には*mois が用いられる。

(6-147)(6-148) は共に祖父の病態を話題にしており、普通体の*sjin「死ぬ」の代わりに、尊敬体の*mois「亡くなる」が用いられている。

(6-147) *karada=nu* *jowat-u-N=tuni* *naacja=be=wa*
karada=nu jowa-u-N=Ntuni naacja=bee=wa
体=NOM 弱る-PROG-IND=CSL 明日=AMBG=TOP
（祖父は）体が弱っているから、明日あたりは

mois-ju-N=kamu=jaa
mois-ju-N=kamu=jaa
死ぬ.HON-NPST-IND=かも=SFP
亡くなるかもね。

(6-148) *(zjaazja=wa)* *kiNnjuu* *moisj-a-N=doo*
(zjaazja=wa) kiNnjuu mois-ja-N=doo
（祖父=TOP） 昨日 死ぬ.HON-PST-IND=SFP
祖父は昨日亡くなりました。

6.4.3.2.1.4 *oisji「食べる」「飲む」

「食べる」「飲む」の普通体はそれぞれ*kam、*num であるが、尊敬体は双方とも*oisji である。相手に食を勧める用法（活用は命令形にあたる）には細かい待遇表現があり、子供などに「食べろ」と言う時には kam-i、目下ではあるが敬って言う場合には koo-ri、同輩や気の置けない人に「召しあがれ」と言う時には oisji-ri、さらに丁寧に言う場合には oisj-i tabo-ri「お召し上がり下さい」または oisj-iN sjoo-ri と後ろに補助動詞を用いて敬意を高める。

(6-149) は、「前日に祖父が粥を食べた」という状況を説明しており、動詞は普通体の*kam「食べる」ではなく、尊敬体の*oisji「召しあがる」を用いている。

0 は祖父が酒を「飲まない」という内容を述べており、普通体の*num「飲む」ではなく尊敬体の*oisji「召しあがる」を用いている。また、尊敬体の動詞に接辞-jabu を接続し、更に丁寧な表現 ois-jabu-ra-N になっている。

(6-149) *kiNnjuu* *zjaazja=wa* *okaju=du* *ois-juta-N*
kiNnjuu zjaazja=wa o-kaju=du oisji-juta-N
昨日 お爺さん=TOP お粥=FOC 食べる.HON-PST2-IND
昨日お爺さんはお粥を召し上がった。

(6-150)　*zjaazja=wa*　*saki=wa*　*ois-jabu-ra-N*
zjaazja=wa　saki=wa　oisji-jabu-ran-N
お爺さん=TOP　酒=TOP　飲む.HON-POL-NEG-IND
お爺さんは酒は召しあがりません（飲まない）。

6.4.3.2.2　補助動詞を用いた形式

尊敬の補助動詞には tabo-ri, sjoo-ri「～下さい」の 2 形式があり、それぞれ動詞の継起形、連用 2 形に接続する。

(6-151) は目上・または親しくない人に別れ際に言う言葉で、普通体では duku-sa sji-ri=joo「元気しろよ（逐語訳）」となるところを、tabo-ri を接続することで敬語体になっている。

(6-152) は目上の人に食を勧める言い方であり、oisji-ri「召し上がれ」だけでも尊敬体であるが、更に sjoo-ri を接続することでより敬い度の高い表現となっている。筆者の調査範囲では、いずれの形式も本動詞としての用法はなく、相手に依頼をする用法（命令形）の形式でのみ使用されている。

(6-151)　*duku-sa*　*sj-ii*　*tabo-ri=joo*
duku-sa　sji-i　tabo-ri=joo
元気-ADJ　する-SEQ　くれる.HON-IMP=SFP
お元気でいらっしゃってください（お年寄りに）

(6-152)　*maNdi*　*oisj-iN*　*sjoorijoo*
maNdi　ois-iN　sjoo-ri=joo
たくさん　食べる.HON-INF2　くれる.HON-IMP=SFP
たくさん召しあがってくださいね。（目上の人に）

6.4.4　丁寧語

動詞の丁寧形式として(a) 語根が丁寧の自立形式、(b)丁寧の派生接辞を用いる形式がある。(a) はコピュラ動詞 diro のみがそれに該当する。(b) は丁寧接辞-jabu であり、動詞の語根、または使役、受動（可能）接辞の後に後接する。

6.4.4.1　自立形式

丁寧の自立形式としてコピュラ動詞 diro「です」がある。

(6-153) は相手が誰か尋ねる普通体の表現であり、名詞 taru「誰」の後に、直接疑問助詞 =joo が接続している。

一方、(6-154) は丁寧体の表現であり、taru の後に diro という丁寧のコピュラ動詞が接続

している。

(6-153)　*ura*　*taru=joo?*　　*wana*　*akiko=doo*
ura　taru=joo　　wana　akiko=doo
2SG　誰=Q　　1SG　あきこ=SFP
あんた誰？　　私はあきこだよ。

(6-154)　*nata*　*taru*　*diro=joo?*　　*wana*　*akiko*　*diro*
nata　taru　diro=joo　　wana　akiko　diro
2SG.HON　誰　COP.HON=Q　　1SG　あきこ　COP.HON
あなたは誰ですか？　　私はあきこです。

6.4.4.2　接辞形式

動詞の語幹に丁寧の接辞-jabu を接続することで、動詞を丁寧体にする。-jabu を用いた屈折の詳細については、4 章 3 節「動詞形態論」に述べている。

(6-155) では、*ik「行く」が丁寧接辞-jabu を接続し、目上にも用いることが出来る丁寧体の表現になっている。丁寧接辞は非過去接辞-ju と共起しないため、非過去時制においては、icjabuN という形式になる。

(6-156) では、*ik「行く」が丁寧接辞-jabu と、過去接辞-a を接続し、ic-jabut-a-N「行きました」という形式になっている。

(6-155)　*naacja*　*fattee=cji*　*ic-jabu-N=kaja?*
naacja　fattee=cji　ic-jabu-N=kaja
明日　畑=ALL　行く-POL-IND=Q
明日畑へ行きますか？（自分→お爺さんへ）

(6-156)　*kiNnjuu*　*seNsee=wa*　*nicijoobi*　*ja=sjiga*　*gakkoo=cji*　*ic-jabut-a-N*
kiNnjuu　seNsee=wa　nicijoobi　ja=sjiga　gakkoo=cji　ik-jabu-a-N
昨日　先生=TOP　日曜日　COP=CNC　学校=ALL　行く-POL-PST-IND
昨日、先生は日曜日だけど学校へ行きました。

7章　結論

本論文では、琉球沖永良部国頭方言の音韻・形態・統語・語用・機能における包括的な記述を行った。本論文は各節で個別の言語現象について論じているため、各章で述べたことをまとめた上で、現時点で明らかとなった国頭方言の類型的な特徴とを述べる。

2 章「言語の概要」では、国頭方言の基礎的な情報をまとめた。2.1 節では、国頭方言が話されている地域の地理、文化的背景を述べたうえで、方言分類に関する先行研究の整理を行った。先行研究の「方言分類」は、歴史言語学的手法に基づく系統分類と、共時的な言語の類似性に基づく分類が混在しており、両者を峻別する必要がある。本稿では、論拠に一部問題があるものの、「系統」の分析としては、沖永良部語を「奄美語（方言）」の下位分類と考える Pellard (2015)、ローレンス（2006）等の説を支持した。2.2 節では、沖永良部語の「消滅危機度」について、UNESCO (2003) の「言語の体力測定 (Language Vitality and Endangerment) 」を用いて評価した。その結果、沖永良部語の評点は 5 点中 2.1 と低く、深刻な消滅の危機にあることが分かった。特に点数が低かったのは「新しい言語使用場面の創出」であり、今後、言語を次世代に継承していく為には、伝統言語を使用できる場面を増やしていくことが必要である。

3 章「音韻論」では、国頭方言の音韻体系を明らかにした。3.1 節では音素の認定を行い、母音 5 つ/a/ /i/ /u/ /e/ /o/、半母音 2 つ/j/ /w/、子音 17 つ/p/ /b/ / /t/ /d/ /n/ /k/ /g/ /ʔ/ /m/ /M/ /N/ /r/ /f/ /s/ /z/ /c/ /h/ を音素として認めた。特に、先行研究において独立音素とされていた中舌母音音素/ɨ/は、弁別的観点からも、音響的観点からも、認める必要がないことを明らかにした。3.2 節では音節構造、3.3 節ではアクセントの記述を行った。国頭方言は琉球諸方言では珍しく、3 モーラ語以上に 4 つのアクセント型が報告されている。琉球諸方言では、2 型ないしは 3 型のアクセント体系を持つ方言が多いため、国頭方言に確認される「4 つ目のアクセント型」の通時的解釈は、琉球祖語のアクセント体系を考察する上で重要である。本稿では、国頭方言の「4 つ目のアクセント型」は、琉球祖語に再建される 3 つのアクセント型から派生した可能性が高く、琉球祖語が 3 つのアクセント型対立を持っていたとする松森（2012 等）の仮説が保持されることを述べた。3.4 節では、イントネーションの初期報告として「疑問文のイントネーション」を記述した。国頭方言は、類型的には珍しく、疑問文に下降イントネーションを取る。しかし、述語のアクセント型や疑問助詞の有無によって、弁別性を担保するために上昇調も取り得る。このことは、木部（2012）の日本諸方言の疑問イントネーションの類型化理論を修正するものである。

4 章形態論では、国頭方言の語の形態を明らかにした。4.1 節では、語の記述に用いる単位の導入と、語の形態に関する類型的な特徴、品詞分類、形態法の記述を行った。品詞には、分布的特徴、構造的特徴、意味的特徴に基づき「名詞」「動詞」「形容詞」「連体詞」「副詞」「感動詞」「助詞」の 7 つの品詞を認めた。また、品詞とは別に、機能による語の分類として「指示語」と「疑問詞」を立てた。4.2 節 名詞形態論では、名詞を「普通

名詞」「代名詞」「数詞」に分類し、その構造を述べた。4.2.1 節 普通名詞においては、特に複数性を表す接辞の選択が、有生性の階層（Silverstein 1976, Dixon 1994 等）によって説明できることを述べた。4.2.2 節 代名詞においては、(a) 一人称、二人称と、語源の分からない三人称形式に「双数」という 2 つの数を専門に表す形式があること、(b) 二人称に尊称と非尊称の区別があること、(c) 三人称に、指示代名詞が用いられることを述べた。4.2.3 節 数詞では、数詞が拘束形態素である語幹と、類別詞となる屈折接辞を接続することで、成立することを述べた。4.3 動詞形態論では、動詞を「動作動詞」「存在動詞」「コピュラ動詞」に分類し、記述を行った。国頭方言の動詞活用は非常に複雑であるが、先行研究で用いられる「語幹」の他に、「語基」という概念を導入し、語基の交替規則と形態音韻規則を組み合わせることによって、様々な活用を予測できることを述べた。4.4 節 形容詞形態論では、まず、形容詞という品詞を認める妥当性を論じた。国頭方言の形容詞は、(a) 一項文の述語となるか、コピュラの補語となる、(b) 名詞修飾部を埋める、(c) 派生せずに動詞を修飾する、という特徴において、他の品詞から区別することが出来る。4.4.2 節では、国頭方言の形容詞が、形容詞とコピュラ動詞の融合の過程にあり、(a) 単独形式（cjura-sa「きれい」など）と、(b) 融合形式（cjura-sa-N「きれい」）の 2 形式が併存することを述べた。4.4.3 節、4.4.4 節では、形容詞に-sa を含む形容詞と、-sja を含む形容詞があり、その形態法や派生のプロセスが異なることを述べた。4.5 節 その他の品詞形態論では、連体詞、感動詞、助詞、副詞の記述を行った。特に 4.5.3 節 では、助詞に「格助詞」「接続助詞」「副助詞」「終助詞」を認め、その一覧を示した。4.5 節では、「指示語」と「疑問詞」という、品詞をまたがる語類の体系を記述した。

5 章「統語論」では、国頭方言の文の構造を明らかにした。5.1 節では、統語論の記述に用いる単位や概念の導入を行った。5.2 節では構成素の語順を検証し、国頭方言が語順に関して Greenburg(1963) のいう「典型的な SOV 言語」であることを述べた。5.3 節では、名詞句の構造を明らかにした。名詞句の構造は[修飾部[主要部]]=格助詞、のように表され、修飾部には、形容詞、連体詞、名詞句、連体節が入る。格助詞には、=ga/nu（主格）、=ga/nu（属格）、=ni（与格）、=tu（共格）、=cji（向格）、=sji（具格）、=ni（場所格 1）、=niti（場所格 2）、=kara（奪格）、=Ntani/=Ntabe/=madi（終局格）、=jooka（比較格）があり、このうち、主格と属格の=ga/=nu 交替は、有生性の階層によって説明できることを示した。5.4 節では、述部構造を記述した。述部には「名詞述部」「動詞述部」「形容詞述部」がある。特に、コピュラ動詞を含む述部に関して、主語との呼応を担うことから、コピュラ動詞を主要部と考え「コピュラ動詞述部」を認めた。コピュラ動詞には、名詞を補語に取るもの（*ja, *a, *ai）と形容詞を補語に取るもの（*a, *na）があり、特に否定文において、補語に名詞を取る場合は*a「～ある」の否定形、補語に形容詞を取る場合は*na「～ない」が用いられる。5.5 節では構文構造（節構造）として、アライメント、結合価、結合価操作、有対動詞、文のタイプを述べた。5.5.1 節 アライメントについて、国頭方言は、自動詞の主語と他動詞の主語が同じ格標識を取り、他動詞の目的語の格標識と対立す

る「主格対格型言語」である。主格対格型言語は、通常、主格と対格の両方か、対格のみを形式的に標示する。しかし、国頭方言は主格のみを標示する点で、類型的に珍しい体系を持つ。5.5.2 節 結合価では、述部の構造を項の数ごとにまとめた。特に二項動詞について「主格－対格」のフレームが、他動性の高い動詞から低い動詞まで、広く用いられていることを述べた。5.5.3 節では、結合価増加操作として使役を、結合価減少操作として受動を記述した。5.6 節では、節の種類として「主節」」「連体節」「副詞節」「補文節」「等位節」「並列節」を認め、複文の構造を記述した。

6 章では、語用論と言語の機能面からの記述を行った。6.1 節「情報構造」では、特に、焦点助詞=du がどのような環境において現れやすいかを検証した。(a) 焦点ドメイン、(b 焦点タイプ、(c) 述語句の意味、という 3 変数を検証した結果、焦点ドメインが「主語項／述部焦点」であり、かつ、焦点タイプが「対比焦点」であるか、述語句の意味が「動作」である場合に、焦点助詞=du が現れやすいことを述べた。6.2 節では、テンス・アスペクトの体系を明らかにした。国頭方言のテンスは、基本的に「非過去」と「過去」の 2 項対立であり、アスペクトは「完結相」と「非完結相」の 2 項対立である。しかし、動詞屈折接辞の-juta と、「継起形＋状態動詞*a」という語連続は、テンス・アスペクトだけでなく、エビデンシャリティーに関わる意味を持つことを述べた。6.3 節「モダリティ」では、「表現類型のモダリティ」「認識・評価のモダリティ」「説明のモダリティ」「伝達態度のモダリティ」に分けて、それぞれのモダリティを表す形式について記述した。6.4 節では、敬語に関して、データが得られた尊敬語と丁寧語の体系を記述した。現代の国頭方言においては、尊敬語・丁寧語はともに「敬い語」として意識され、それらを区別する意識は希薄である。また、聞き手が身内以外の人でも、身内に対して敬語を使うことが出来るという、絶対敬語的な性質を持つ。尊敬語には、尊敬の意味を、語根自体が表す「自立形式」と補助動詞が表す「補助形式」があり、丁寧語には、丁寧の意味を、語根自体が表す「自立形式」と、接辞が表す「接辞形式」があることを述べた。

全体を通じて、国頭方言が持つ、類型的に珍しい言語特徴として、(a) 疑問文のイントネーションが下降調であること（3 章 4 節）、(b) 格が有標主格型であること（5 章 5 節）が指摘できる。(a) について、疑問文のうち、特に肯否疑問文のイントネーションについては「肯否疑問文が上昇調を取ることは、殆ど言語普遍的である（Ohala 1984, Bollinger 1978)」と言われていた。これに対し、国頭方言は特別な条件が加わらない限り、疑問文は下降イントネーションであり、これは珍しい特徴であるといえる。(b) について、主格対格型言語は、多くの言語で主格と対格の両方を形態的に標示するか、または、対格のみを標示する (Mallinson & Blake 1984)。しかし、国頭方言は主格と対格がどのような名詞であれ、主格のみを標示する体系を持つ。こうした言語は、言語データベースの WALS においても、6 言語しか報告されていない。

日本語との比較において際立つのは、(c) 代名詞に「双数」の体系を持つこと（4 章 2 節）、(d)「主格－対格」フレームを他動性の低い動詞が用いること（5 章 5 節）、(e) 焦点

呼応（focus concord）があること（6 章 1 節）、(f) テンス・アスペクト形式がエビデンシャリティの意味を持つこと（6 章 2 節）が挙げられる。(c) について、「双数」は、印欧祖語やアラビア語等に知られるが、日本語の諸方言では、国頭を含む琉球諸方言（特に奄美諸方言）でしか見つかっていない。国頭方言を含む、奄美諸方言において、どのように双数が生まれたかの究明は今後の課題である。(d) について、日本語においては、他動性が高い二項動詞が「主格－対格」フレームを使うのに対し、他動性の低い動詞は「主格－与格」など、別の格フレームを用いる。これに対し、国頭方言は「〜になる」などの他動性が低い動詞においても「主格－対格」のフレームを用いることが分かった。(e) について、焦点呼応は、日本語研究では「係り結び」と呼ばれてきた。係り結びは、中央日本語では平安時代以降失われていったが、沖永良部語をはじめ、琉球諸語においては現代の方言でも用いられてる。係り結びを引き起こす係助詞（焦点助詞）は、これまで「強調」を表するとされてきたが、文の情報構造を考慮すると、出現環境をより正確に記述できることが分かった。一方、呼応が起きる条件については、本稿で明らかにすることが出来なかったため、今後解明を進めたい。(f) について、テンス・アスペクト形式がエビデンシャリティの意味を二次的に担う現象は、伝統言語のみならず、ウチナーヤマトゥグチなどの中間言語でも観察されている。沖永良部語においても、こうした用法が、若い世代にどのように継承されているかは今後の課題である。

琉球諸語との比較において着目されるのは、国頭方言が、3 モーラ以上に少なくとも 4 つ以上のアクセント型を持つことである（3 章 3 節）。琉球祖語におけるアクセント型は、3 つの型の対立があったとする立場と、多型であったとする立場があり、4 以上のアクセント型を持つ方言の解釈は、琉球祖語のアクセント型を再建する上で重要な意味をもつ。本稿では、国頭方言の 4 つのアクセント型は、祖語に仮定されている 3 つのアクセント系列（松森 2012）から派生した可能性が高く、祖語が 3 系列であるという仮説が保持されることを述べた。

本論文の記述を通じて、琉球諸方言における言語類型研究・歴史研究に対する、一定の資料を提供することが出来たと考えている。対象言語が危機言語であることから、出来る限り包括な記述を試みたが、力が及ばず、十分な記述を行えなかった言語現象もある。特に、言語の機能面の記述に関しては、分析枠組みの検討が不十分なものや、機能が明らかでない語も多数あった。今後は、国頭方言の文法記述を充実させるとともに、周辺方言との比較を通じて、地域の言語史の解明に努めたい。また、本論文の記述を元に、地域で活性化している言語継承運動に利用できる、言語資料や言語教材などを作成していきたいと考えている。

引用文献

Aissen, Judith. 2003. Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy. *Natural Language & Linguistic Theory21* (3) 435-483. New York: Springer Publishing.

Alan Cruttenden. 1997. *Intonation.* Cambridge: Cambridge University Press.

Alexandra Y. Aikhenvald. 2006. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

Blake, Barry. 1994. *Case*. Cambridge: Cambridge University Press.

Boersma, Paul & Weenink, David .2015. Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 5.4.17, retrieved 20 August 2015 from http://www.praat.org/

Catford, John Cunnison. 1977. Fundamental problems in phonetics. Bloomington: Indiana University Press.

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge: Cambridge University Press.

Comrie, Bernard. 1985. *Language universals adn linguistic Typology* 2nd edition. Chicago. The University of Chicago Press.

Crystal, David 2000. *Language Death*. Cambridge: Cambridge University Press.

Crystal, David. 2009. *Dictionary of Linguistics and Phonetics, 6th Edition*. Hoboken: Wiley-Blackwell.

D. Robert Ladd. 2009. *Intonational Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dixon, R. M. W. 1979. Ergativity. *Language* 55:59–138. Linguistic Society of America.

Dixon, Robert M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dixon, R. M. W. 2006. Adjective Classes in Typological Perspective. In Dixon, R. M. W., adn Aikhenvald, Alexadnra Y. (eds.) *Adjective Classes : A Cross-Linguistic Typology.* Oxford, GBR: Oxford University Press.

Ekkehard König, Peter Siemund (with Stephan Töpper). 2013. Intensifiers adn Reflexive Pronouns. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) The World Atlas of Language StructuresOnline. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at http://wals.info/chapter/47, Accessed on 2015-10-26.)

Gillian Brown, Karen. L. Currie and Joanne Kenworthy. 1980. *Questions of Intonation*. London: Croom helm London.

Givon, T. 1984. *Syntax: a Typological Functional Introduction*, vol.1. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Graham Mallinson, Barry John Blake. 1981. *Language Typology: Cross-Linguistic Studies in Syntax.* Amsterdam: North-Holland Publishing.

Greenberg, Joseph H. 1963. Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In Greenberg, Joseph H. (ed.), *Universals of Human Language*, 73-

113. Cambridge, Mass: MIT Press.

Hajek, John. 2006. Adjective Classes: what can we Conclude? In Dixon, R. M. W., adn Aikhenvald, Alexadnra Y. (eds.) *Adjective Classes : A Cross-Linguistic Typology.* Oxford, GBR: Oxford University Press.

Haspelmath, Martin. 1993. More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In Bernard Comrie & Maria Polinsky (eds.), *Causatives and transitivity*. Amsterdam: Benjamins. 87-120.

Haspelmath, Martin. 2010. *Understadning Morphology* 2nd edition. Abington: Routledge.

Heinrich, Patrick, Shimoji, Michinori and Shinsho Miyara (eds.) *Handbook of Ryukyuan Languages*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Hopper, Paul and Thompson, Sandra A. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56. 251-299. Linguistic Society of America.

Ian Maddieson. 2013. Glottalized Consonants. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) The World Atlas of Language Structures Online. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at http://wals.info/chapter/7, Accessed on 2015-09-05.)

Igarashi, Yosuke. 2012. Typology of intonational phrasing in Japanese dialects. In: Jun, Sun-ah (ed.) *Prosodic Typology2*. 464-492. Oxford: Oxford University Press.

Igarashi, Yosuke. 2015. Intonation. In: H. Kubozono (ed.) *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*. Berlin: Walter de Gruyter, 525-568.

Ishihara, Shinichiro. 2015. Syntax-prosody interface. *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*. Berlin: Walter de Gruyter, 569-618.

Ito, Junko. 1990. Prosodic minimality in Japanese. In K. Deaton et al. (ed.), *Papers from the Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*. Chicago Linguistics Society 26: Part Ⅱ. 213-39. Chicago: Chicago Linguistics Society, University of Chicago.

Kubozono, Haruo. 1989. The mora and syllable structure in Japanese: Evidence from speech errors. *Language and Speech*. 32 (3). 249-278. California: Sage Publications.

Ladefoged, Peter, and Maddieson, Ian. 1989. Vowels of the world's languages. *Journal of Phonetics* 18:93-122. Amsterdam: Elsevier.

Ladefoged, Peter, and Maddieson, Ian. 1996. The sounds of the world's languages. Oxford: Blackwell.

Lambrecht, Knud. 1994. *Information structure and sentence form: Topic, focus, and the mental representation of discourse referents*. In Cambridge Studies in Linguistics 71. Cambridge: Cambridge University Press.

Lewis, M. Paul, Gary F. Simons & Charles D. Fennig (eds.) 2013. *Ethnologue: Languages of the World, 17th edition*. Dallars: SIL International.

Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. 2015. Leipzig Glossing Rules https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/Glossing-Rules.pdf

Moseley, Christopher. 2010. Atlas of the World's Languages in Danger, 3rd edition. Paris: UNESCO Publishing.

Nettle, Daniel and Suzanne Romaine 2000. Vanishing Voices: The Extinction of the World's Languages. Oxford: Oxford University Press.

Nichols, Johanna, David A. Peterson and Jonathan Barnes. 2004. Transitivizing and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8:2: 149-211. Berlin: De Gruyter Mouton.

Nishie, Ann Sarah.1968. *Dictionary of Okinoerabu dialect*. http://innowayf.net/download.html#okinoerabu.

Niinaga, Yuto. 2014. *A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language*. Unpublished. Ph D dissertation.

Payne, Thomas E. 1997. *Describing Morphosyntax: A Guide For Field Linguists*. Cambridge: Cambridge University Press.

Pellard, Thomas. 2009. *Ōgami. Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū.* Unpublished. Ph D dissertation.

Pellard, Thomas. 2015. The linguistic archaeology of Ryukyu Islands. Handbook of the Ryukyuan Languages. In Heinrich, Patrick, Shimoji, Michinori and Shinsho Miyara(eds.) *Handbook of Ryukyuan Languages*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Scalise, Sergio, Antonio Fábregas adn Francesta Forza. 2009. Exocentricity in Compounding. *Gengo Kenkyu* 135:49-84. The Linguistic Society of Japan.

Shibatani, Masayoshi. 1973. Semantics of Japanese causativization. *Foundation of Language* 9: 323-373. Oxford: Oxford University Press.

Shilverstein, Michael. 1976. Hierarchy of features adn ergativity. In Dixon, R.M.W. (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171, Camberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

Shimoji, Michinori. 2012. Northern Ryukyuan. In Nicolas Tranter (eds.) *Languages of Japan and Korea*. Abington: Routledge.

Shimoji, Michinori. 2008. *A Grammar of Irabu: A Southern Ryukyuan Languages*. Unpublished. Ph D dissertation.

Shimoji, Michinori& Thomas Pellard.2012. *An Introduction to Ryukyuan Langauges*. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Trudgill, Peter. 1974. *Sociolinguistics*. Penguin Books.

Van der Lubbe, Gijs and Tokunaga, Akiko. 2015. Okinoerabu grammar. In Heinrich, Patrick, Shimoji, Michinori and Shinsho Miyara(eds.) *Handbook of Ryukyuan Languages*. Berlin: De Gruyter Mouton.

UNESCO. Language Vitality and Endangerment, http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/pdf/Language_vitality_and_endangerment_EN.pdf

Uwano, Zendo. 2012. Three types of accent kernels in Japanese. *Lingua.* 122(13): 1415-1440. Amsterdam: Elsevier.

有元光彦（1993）「沖縄・首里方言の規則動詞の形態音韻論：試論」『日本文学研究』29: 1-12. 山口：梅光学院大学.

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラールトマ・久保智之（2012）「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1), 134-148. 日本音声学会.

五十嵐陽介（2016）「名詞の意味が関わるアクセントの合流－南琉球宮古語池間方言の事例－」『音声研究』20: 3. 1-20. 日本音声学会.

岩倉市郎（1940）『沖永良部島昔話』東京：民間伝承の会.

ウェイン・ローレンス（2006）「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』40 (2): 87-101. 沖縄：沖縄文化協会.

上野善道（1997）「沖永良部島諸方言の用言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』26: 123-233. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

上野善道（1998a）「沖永良部島諸方言の活用形のアクセント資料(1)」『琉球の方言』23:1-34. 東京：法政大学沖縄文化研究所.

上野善道（1998b）「沖永良部島諸方言の体言のアクセント資料」『アジアアフリカの言語と文化』27:131-262. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

上野善道（1999）「沖永良部島諸方言の活用形のアクセント資料(2)」『琉球の方言』24:1-36. 東京：法政大学沖縄文化研究所.

上野善道（2004a）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(1)」『琉球の方言』30:1-49. 東京：法政大学沖縄文化研究所.

上野善道（2004b）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(2)」『アジアアフリカ文法研究』33:155-204. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

上野善道（2005）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(3)」『琉球の方言』30:1-49. 東京：法政大学沖縄文化研究所.

上野善道（2006a）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(4)」『アジアアフリカ文法研究』1: 129‐157. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

上野善道（2006b）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(5)」『東京大学言語学論集』25: 249‐297. 東京：東京大学文学部言語学研究室.

上野善道（2006c）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(6)」『琉球の方言』31:1-38. 東京：法政大学沖縄文化研究所.

上野善道（2006d）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130. 1-42. 日本言語学会.

上野善道（2007a）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(7)」『琉球の方言』32: 1-40. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
上野善道（2008a）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(8)」『東京大学言語学論集』27: 267-307. 東京：東京大学文学部言語学研究室.
上野善道（2008b）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(9)」『琉球の方言』33: 99-123. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
上村幸雄（1961）「沖縄本島」東条操監修『方言学講座 第四巻』東京：東京堂
上村幸雄（1997）「琉球列島の言語（総説）」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『日本列島の言語』東京：三省堂, 311-354.
内間直仁（1984）『琉球方言文法の研究』東京：笠間書院.
沖縄言語研究センター（1990）『奄美諸島方言の言語地理学的研究: 徳之島沖永良部島に関する言語地理学的調査の報告』沖縄：沖縄言語研究センター.
沖縄国際大学高橋ゼミグループ編（1984）『沖永良部方言調査報告―言語地理学的研究―』沖縄：沖縄言語研究センター.
影山太郎（2010）「複合語のタイポロジーと日本語の特質－「日本語は特殊でない」というけれどー」『国語研プロジェクトレビュー』1: 5-27. 東京：国立国語研究所.
狩俣繁久（2000）「奄美沖縄方言群における沖永良部方言の位置づけ」『日本東洋文化論集（6）』: 43-69. 沖縄：琉球大学文学部.
亀井孝・河野六郎・千野栄一編（1988-2001）『言語学大辞典』東京： 三省堂.
かりまたしげひさ（2007）「沖縄県うるま市安慶名方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法ー標準語研究を超えてー』225-240. 東京：ひつじ書房.
甲東哲（2006）『島のことば』東京：三笠出版.
甲東哲・先田光演（2011）『分類沖永良部島民族語彙集』鹿児島：和泊町歴史民俗資料館.
木部暢子（2006=2008）日本語諸方言イントネーションのデータベース構築と音調記述に関する研究（科学研究費助成事業）
木部暢子（2010）「日本語諸方言の疑問文イントネーション」『日本語の研究』7(2)：75－80「日本語学会 2010 年度秋期大会シンポジウム報告：イントネーション研究の現在」日本語学会.
木部暢子（2014）「鹿児島県沖永良部島方言」『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究　報告書』p15-27. 東京：人間文化研究機構国立国語研究所.
金田一京助（1941）「女性語と敬語」『婦人公論』東京：中央公論社.
工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美（2007）「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47: 151-183. 大阪：大阪大学大学院文学研究科.
工藤真由美編（2004）『日本語におけるアスペクト、テンス、モダリティー標準語研究を超えて』東京：ひつじ書房.

佐々木冠・當山奈那（2016）「日本語族における他動性交替の地域差」）『有対動詞の通言語的研究 ―日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京：くろしお出版.
重野裕美（2015）「北琉球奄美大島浦方言の動詞形態論」『琉球の方言』39: 33-47. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
島袋幸子・かりまたしげひさ「沖縄県今帰仁村謝名方言のアスペクト・テンス・ムード」『日本東洋文化論集』15: 243 -295. 沖縄：琉球大学法文学部.
下地理則（2016）「宮崎県椎葉村尾前方言の Differential Object Marking」琉球諸語記述研究会発表資料. 琉球大学 50 周年記念館. 2016/03.
白田理人（2015）「喜界島上嘉鉄方言の動詞形態論」『琉球の方言』39: 11-31. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
白田理人（2016）『琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法』京都大学博士論文.
角田太作（2009）『世界の言語と日本語 改訂版―言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版.
須山名保子（2007）「鹿児島県大島郡大和村大和浜方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法ー標準語研究を超えてー』183-204. 東京：ひつじ書房.
高橋孝代（2006）『境界性の人類学―重層する沖永良部島民のアイデンティティ』東京：弘文堂.
高山林太郎（2013）「系列語彙を用いたアクセント調査―沖永良部国頭方言を例に―」『JLVC2013 発表原稿集』141-150. 東京：国立国語研究所.
辻村敏樹（1971）「敬語史の方法と問題」『講座国語史五　敬語史』東京：大修館書店.
徳永晶子（2012）『奄美沖永良部島におけるオノマトペの言語地理学的研究』一橋大学社会学研究科修士論文.
永野マドセン泰子、狩俣繁久（2009）「首里方言のイントネーション」法政大学沖縄文化研究所（編）『琉球の方言』34：175-191. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
永野マドセン泰子（2010）「首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション」法政大学沖縄文化研究所（編）『琉球の方言』35：1-16. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
永野マドセン泰子（2012）「南琉球・宮古伊良部島にみる無アクセント方言のイントネーション」『琉球の方言』37：25-43. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
仲間恵子（2007）「鹿児島県大島郡与論町麦屋方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法ー標準語研究を超えてー』205-224. 東京：ひつじ書房.
名嘉真三成（1986）「琉球方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要 第一部』29.
※名嘉真光成（1992）『琉球方言の古層』602～637. 東京：第一書房　所収.
永吉敏人（2005）『いらぶぬくとぅば』私家出版.
中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』東京：法政大学出版.
ナロック・ハイコ、パルデシ・プラシャント、赤瀬川 史朗（2015）「日本語自他動詞対のコード化の頻度論的動機付け：大規模コーパスによる検証」パルデシ、桐生ナロ

ック編『有対動詞の通言語的研究 ―日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京：くろしお出版.
新永悠人（2013）「北琉球湯湾方言の複数を表す形態素と名詞句階層」『第 96 回方言研究会発表予稿集』41-48. 日本方言研究会.
新永悠人（2015）「北琉球奄美大島湯湾方言の動詞形態論」『琉球の方言』39: 49-74. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法〈4〉第 8 部モダリティ』東京：くろしお出版.
日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法〈7〉談話・待遇表現』東京：くろしお出版.
服部四郎、金城朝永（1955）「琉球語」『世界言語概説』下巻. 東京：研究社.
原田走一郎（2014）「南琉球八重山黒島方言における形容詞のサブグループ－接辞 ku が続く形式に注目して－」『阪大日本語研究』26: 71-85. 大阪大学日本語学講座.
原田走一郎（2015）『南琉球八重山黒島方言の文法』大阪大学博士論文.
林由華（2013）『南琉球宮古語池間方言の文法』京都大学博士論文.
パルデシ・プラシャント、桐生和幸、ナロック・ハイコ他（2015）『有対動詞の通言語的研究 ―日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京：くろしお出版.
平山輝男・大島一郎・中本正智（1966）『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院.
平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院.
平山輝男（1986）『奄美方言基礎語彙の研究』821-827. 東京：角川書店.
広島大学教育学部国語教育学研究室方言研究ゼミナール（1997）『方言資料叢刊 7 巻』http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/HU_journals/AA11460132/7/--
ファン・デル・ルベ, ハイス（2016）『琉球沖永良部語正名方言の記述文法研究』琉球大学博士論文.
福島光義（2010）『なちかしや国頭の方言（しまヌムニ)』私家出版.
松森晶子（2000a）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発 : 沖永良部島の調査から」『音声研究』 4(1) : 61-71. 日本音声学会.
松森晶子（2000b）「琉球の多型アクセント体系についての一考案－琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方－」『国語学』第 51 巻 1 号. 93－109.
松森晶子（2010）「多良間島の 3 型アクセントと『系列別語彙』」上野善道（監）『日本語研究の 12 章』490‐503，東京：明治書院.
松森晶子（2012）「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16(1) : 30-40. 日本音声学会.

資料編

資料編では、アクセントの資料と、自然談話の資料を掲載する。

1. アクセント資料

先行研究と調査によって得られた名詞、動詞、形容詞のアクセント型を以下に示す（総語数 468）。表中の「型」は本論文（3 章 3 節「アクセント」）中で示した型、「データ元」は、Y=筆者の調査データ、U=上野（1997）、T=高山（2013）とする。

筆者の名詞データについては単独形と助詞 nu が後続した形を記す。引用データの表記は引用元に従う。高山（2013）のデータの一部はアクセント表記がないため、音韻表記と型のみ提示する。「系列」は松森（2012）の「系列別語彙」の素案における分類を示す。

資料 1 名詞のアクセント

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
1	2	a	T	蟻	ani	A
2	2	a	T	尾	zuR	A
3	2	a	T	夫	wutu	A
4	2	a	T	紙	habi	A
5	2	a	T	北	nisji	A
6	2	a	T	鍬	koi	A
7	2	a	T	子	kwaR	A
8	2	a	T	坂	hjaR	A
9	2	a	T	草履	saba	A
10	2	c	Y	尻	[mai, ma[i]nu	A
11	2	a	T	妻	tuzji	A
12	2	a	T	洞窟	gama	A
13	2	a	T	匂い	haza	A
14	2	a	T	西	iR	A
15	2	a	T	にんにく	hiru	A
16	2	a	T	臍	Fusu	A
17	2	a	T	ほくろ	aza	A
18	2	a	T	右	mizji	A
19	2	a	Y	血	cji[i, cjii[nu	A
20	2	a	Y	葉	faa, faa[nu	A
21	2	a	T	帆	FuR	A
22	2	a	T	烏賊	icja	A
23	2	a	T	石	isji	A
24	2	a	T	上	ui	A
25	2	a	T	魚	ʔjuR	A

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
26	2	a	T	牛	usji	A
27	2	a	T	音	utu	A
28	2	a	T	風	hazji	A
29	2	a	T	傷	kizji	A
30	2	a	T	牙	kiba	A
31	2	a	T	釘	kuzji	A
32	2	a	T	口	kucji	A
33	2	a	T	腰	Fusji	A
34	2	a	Y	酒	sa[ki, saki[nu	A
35	2	a	T	下	sjaR	A
36	2	a	T	袖	sudi	A
37	2	a	T	竹	deR	A
38	2	a	Y	鳥	tu[I, tui[nu	A
39	2	a	T	橋	hasji	A
40	2	a	Y	鼻	fa[na, fana[nu	A
41	2	a	T	羽	Fani	A
42	2	a	T	人	cjuR	A
43	2	a	T	筆	Fude	A
44	2	a	T	星	Fusji	A
45	2	a	Y	水	mi[zji, mizji[nu	A
46	2	b	Y	家	ja[a, [ja]a[nu	B
47	2	b	T	櫂	joR	B
48	2	b	T	亀	hamiR	B
49	2	b	T	かや	gjaR	B
50	2	d	T	去年	FuzuR	B
51	2	b	T	潮・海水	usjuR	B
52	2	b	T	舌	sjaR	B
53	2	c	T	尻	mai	B
54	2	b	T	蛸	toR	B
55	2	b	Y	肉	[sji]sji[i, [sji]sji[nu	B
56	2	b	T	韮	bjaR	B
57	2	b	T	畠	FaruR	B
58	2	b	T	腹	wataR	B
59	2	b	T	南	heR	B

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
60	2	c	T	門	zjoR	B
61	2	b	Y	木	hi[i, [hi]i[nu	B
62	2	b	T	手	tiR	B
63	2	b	T	歯	FaR	B
64	2	b	T	火	hjiR	B
65	2	a	T	穂	FuR	B
66	2	b	Y	目	mi[i, [mi]i[nu	B
67	2	b	T	湯	juR	B
68	2	b	T	雨	amiR	B
69	2	b	T	犬	inuR	B
70	2	b	T	色	iruR	B
71	2	b	T	傘・笠	hsaR	B
72	2	b	T	肩	hata	B
73	2	b	T	鎌	hamaR	B
74	2	b	T	草	kusaR	B
75	2	b	T	雲	kumuR	B
76	2	b	T	米	FumiR	B
77	2	b	Y	島・集落	[sji]ma, [sji]ma[nu	B
78	2	b	T	汁	sjiruR	B
79	2	b	T	脛・膝	sjiniR	B
80	2	b	T	角	cjinuR	B
81	2	b	T	顔	cjiraR	B
82	2	b	T	波	namiR	B
83	2	b	T	糠	nukaR	B
84	2	b	T	耳	mimiR	B
85	2	b	Y	麦	[mu]zji, [mu]zji[nu	B
86	2	b	Y	山	[ja]ma, [ja]ma[nu	B
87	2	b	T	夜	jiRruR	B
88	2	b	T	藁	waraR	B
89	2	c	T	魚を捕る籠	tiru	C
90	2	c	T	梢・砂糖黍の先	sura	C
91	2	c	T	煤	sjisji	C
92	2	c	T	蝉	asa	C
93	2	c	Y	太陽	ti[da, ti[da]nu	C

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
94	2	c	T	卵	Fuga	C
95	2	c	T	たんこぶ	gubu	C
96	2	c	T	バッタ	gata	C
97	2	c	T	豚	ʔwaR	C
98	2	c	T	蓬	Fucji	C
99	2	c	T	来年	jani	C
100	2	c	T	息	icji	C
101	2	c	T	臼	uQsji	C
102	2	c	Y	海	u[mi, u[mi]nu	C
103	2	c	Y	桶	wu[i, wu[i]nu	C
104	2	c	T	陰	hagi	C
105	2	c	T	影	haga	C
106	2	c	T	甕	hami	C
107	2	c	T	声	Fui	C
108	2	c	T	猿	saru	C
109	2	c	Y	鍋	na[bi], na[bi]nu	C
110	2	c	T	中	naR	C
111	2	c	T	蚕	numi	C
112	2	c	T	浜	hama	C
113	2	c	T	針	Fai	C
114	2	c	Y	舟	hji[ni, hji[ni]nu	C
115	2	c	T	骨	Funi	C
116	2	c	T	前	meR	C
117	2	c	T	柱	Faja	C
118	2	a	T	飴	ami	
119	2	a	T	箱	Faku	
120	2	b	T	花	FanaR	
121	3	a	T	鍋の煤	hjiguru	A（垢・煤・体の汚れ）
122	3	a	T	釜	hagama	A
123	3	a	T	かまど	hamadu	A
124	3	a	T	着物	cjibara	A
125	3	a	Y	煙	hjibu[sji, hjibusji[nu	A

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
126	3	a	T	空	nizjiR	A
127	3	b	T	種	taniR	A
128	3	a	T	棘	nizjiR	A
129	3	a	T	虹	noRzji	A
130	3	a	T	東	agari	A
131	3	a	T	くるぶし	cjiNsji	A（膝小僧）
132	3	a	T	麹	hoRzji	A
133	3	a	T	畳	tatami	A
134	3	a	T	鼻血	Fanazji	A
135	3	a	T	二つ	TaRcji	A
136	3	a	T	三つ	miRcji	A
137	3	a	T	六つ	muRcji	A
138	3	a	T	八つ	jaRcji	A
139	3	a	T	四つ	juRcji	A
140	3	a	T	涎	judari	A
141	3	b	T	体の頂上	kamacjiR	B（頭・顔）
142	3	c	T	腕	heNnja	B
143	3	b	T	鱗	iRcjiR	B
144	3	b	T	男	jiNgaR	B
145	3	b	T	女	wunaguR	B
146	3	b	T	かかと	aRduR	B
147	3	b	T	くし	sabacjiR	B
148	3	b	T	下駄	asjizjaR	B
149	3	c	T	さとうきび	wuRzjiR	B
150	3	b	T	青年	niQseR	B
151	3	b	T	蝶	habiraR	B
152	3	b	T	土	miQcjaR	B
153	3	b	Y	南京豆	[maa]mi, [maa]mi[nu	B
154	3	b	T	鋸	noRzjiR	B
155	3	b	T	ふくら脛	cjiQtuR（膝）	B
156	3	b	T	目下の人・弟	uQtuR	B
157	3	b	T	網	aRmiR	B

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
158	3	b	T	板	iRcjaR	B
159	3	b	T	油	aburaR	B
160	3	b	T	五つ	icjicjiR	B
161	3	b	T	命	inucjiR	B
162	3	b	Y	鏡	[haga]mi, [haga]mi[nu	B
163	3	b	Y	暦	[kuju]mi, [kuju]mi[nu	B
164	3	b	Y	俵	[too]ra, [too]ra[nu	B
165	3	b	T	七つ	nanacjiR	B
166	3	b	T	涙	naRdaR	B
167	3		Y	鋏	-	B
168	3	b	T	枕	makuraR	B
169	3	c	T	あおさ	oRsa	C
170	3	c	T	顎	utuge	C
171	3	c	T	頭	cjiburu	C
172	3	c	T	刺青	hazjicji	C
173	3	c	T	ウニ	hacjicji	C
174	3	c	T	おでき	nibutu	C
175	3	c	T	髪	harazji	C
176	3	c	T	カラス	garasji	C
177	3	c	T	灸	jaNcju	C
178	3	c	Y	腰回り	[ga]ma[ku, [ga]ma[ku]nu	C
179	3	c	T	ごちそう	sjuRki	C
180	3	c	Y	今年	[hu]ta[bi, [hu]ta[bi]nu	C
181	3	c	T	子供	warabi	C
182	3	c	T	白髪	sjaRga	C
183	3	c	T	しゃもじ	misjige	C
184	3	c	T	とんぼ	jamada	C
185	3	c	T	ひしゃく	nibutu	C
186	3	c	T	布団	Futunu	C
187	3	c	T	ふんどし	sanazji	C
188	3	d	T	樽の浮き	taNgu	C（水桶・汲み桶）
189	3	c	T	やどかり・踝	amamu	C

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
190	3	c	T	兎	usagi	C
191	3	c	T	鰻	unazji	C
192	3	c	T	扇	oRzji	C
193	3	c	Y	刀・包丁	[ha]ta[na, [ha]ta[na]nu	C
194	3	d	T	盥	tareR	C
195	3	c	T	情け	nasaki	C
196	3	c	T	一つ	tiRcji	C
197	3	c	T	箒	hoRcji	C
198	3	c	T	むしろ	muQsju	C
199	3	d	Y	鯨	gu[zji]ja, gu[zji]janu	-
200	3	d	T	袋	Fukuru	-
201	3	d	Y	狐	ki[cji]ni, ki[cji]ninu	-
202	3	d	Y	キャベツ	kja[be]cu	
203	3	d	Y	鼠	nu[zu]mi	
204	3	a	T	湾	tumai	
205	3	a	T	黄金の稲	Fugami	
206	3	c	T	芋を運ぶ籠	hjaRgi	
207	3	c	T	あばら骨	soRki	
208	3	c	T	火	maQcji	
209	4	d	T	明日	naRcjaR	B
210	4	b	Y	雷	[hamidu]ru, [hamidu]ru[nu	B
211	4	b	T	結婚	niRbicji	B
212	4	d	T	鋤	jiRzeR	B
213	4	b	Y	台所がある離れ	[toogu]ra, [toogu]ra[nu	B
214	4	b	T	へちま	naRbiraR	B
215	4	d	T	水溜り・池	FuRmui	B
216	4	d	T	草を運ぶ網	oRdaR	B（モッコ）
217	4	d	Y	左	[hji]i[zjai, [hji]i[zjai]nu	B
218	4	c	Y	暁	[aa]tu[cji, [aa]tu[cji]nu	C
219	4	c	Y	朝	[su]tumi[ti, [su]tumi[ti]nu	C
220	4	c	T	苺	iQcjubi	C
221	4	d	T	蚊	gazjamuN	C

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
222	4	d	T	カマキリ	isjatuR	C
223	4	d	T	杵	azjimuN	C
224	4	d	Y	昨日	[ki]N[njuu, [ki]N[njuu]nu	C
225	4	d	T	薪	taRmuN	C
226	4	d	T	みかん	kuribuR	C
227	4	c	Y	若い娘	[mee]ra[bi, [mee]ra[bi]nu	C
228	4	d	T	糸	iQcjuR	C
229	4	d	T	朝露	asacuju	C（露）
230	4	d	T	薬	kuQsui	C
231	4	b	T	虱	sjaRmiR	C
232	4	d	Y	畑	fat[tee, fat[tee]nu	C
233	4	d	Y	雀	[ju]mu[dui, [ju]mu[dui]nu	
234	4	a	Y	額	haraN[cja, haraNcja[nu	
235	4	d	Y	拳	[cji]zji[kuN, [cji]zji[kuN]nu	
236	4	c	Y	大根	[dee]ku[ni, [dee]ku[ni]nu	
237	4	d	Y	きくらげ	[mi]mi[gui, [mi]mi[gui]nu	
238	4	d	Y	蝸牛	cjiN[tai, cjiN[tai]nu	
239	4	c	Y	蜘蛛の巣	[hji]buga[sji, [hji]buga[sji]nu	
240	4	c	Y	再来年	[naa]mi[cju	
241	4	c	Y	クワズイモ	[ju]goba[sja, [ju]goba[sja]nu	
242	4	a	Y	まな板	maraN[cja, maraNcja[nu	
243	4	a	Y	三味線	saN[sjiru, saNsjiru[nu	
244	4	c	Y	ザル	[see]ma[gu, [see]ma[gu]nu	
245	4	c	Y	夫婦	[tu]zjiwu[tu, [tu]zjiwu[tu]nu	
246	4	c	Y	老人	[tu]sjiu[i, [tusji]ui[nu	
247	4	d	Y	喧嘩	[ju]u[zai, [ju]u[zai]nu	
248	4	c	Y	相互扶助	[jii]ta[ba, [jii]ta[ba]nu	
249	4	c	Y	刺青	[faN]zji[cji, [faN]zji[cji]nu	
250	4	b	Y	嘘	[damaka]sji, [damaka]sji[nu	
251	4	?	Y	あざ	[hoo]kusu, [hoo]kusunu	
252	4	b	Y	結納	[jaami]sji, [jaami]sji[nu	
253	4	c	Y	タニシ	[taN]nja[a, [taN]njaa[nu	

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
254	4	c	Y	食べ物	[kami]mu[N, [kami]muN[nu	
255	4	c	Y	子守	[Kwaa]mu[i, [Kwaa]mui[nu	
256	4	c	Y	マッティブ	matti[bu, matti[bu]nu	
257	4	d	Y	心配	[mu]nu[mii, [mu]nu[mii]nu	
258	4	a	Y	吸い物	[siimuN, siimuN[nu	
259	4	d	Y	手拭い	[u]cju[kui, [u]cju[kui]nu	
260	4	c	Y	グヮバ	[baN]sji[ru, [baN]sji[ru]nu	
261	4	c	Y	ハイビスカス	[ba]saN[ko, [ba]saN[ko]nu	
262	4	c	Y	二の腕	[heN]nja[a, [heN]njaa[nu	
263	4	b	Y	結婚式	[nii]bi[cji, niibicji[nu	
264	4	c	Y	幽霊	[maa]bu[i, [maa]bui[nu	
265	4	d	Y	人参	[mi]N[zjiN, [mi]N[zjiN]nu	
266	4	c	Y	なすび	[naa]su[bi, [naa]su[bi]nu	
267	4	c	Y	バナナ	[ba]sjau[mu, [ba]sjau[mu]nu	
268	4	c	Y	念仏	[miN]bu[cji, [miN]bu[cji]nu	
269	4	d	Y	水肥え？	[cjo]o[goi, [cjo]o[goi]nu	
270	4	c	Y	かんざし	[tuN]gu[sji, [tuN]gu[sji]nu	
271	4	d	Y	魂	[ta]ma[sjii	
272	4	d	Y	小便	[sji]i[bai	
273	4	d	Y	夜光貝の殻	[gu]ja[guu, [gu]ja[guu]nu	
274	4	d	Y	サナギ	[ma]N[cjaa	
275	4	c	Y	天気	[Waa]bi[cji, [ʔwaa]bi[cji]nu	
276	4	c	T	冬瓜	sjiRbai	
277	4	d	Y	下顎	[u]tu[gee, [u]tu[gee]nu	
278	5	d	T	親子	ujaQkwaR	C
279	5	c	T	杖	guQsjaRni	C
280	5	d	T	松	maQcjigi	C
281	5		Y	蘇鉄粥	[jarabu]ge[e	
282	5	d	Y	洗面器	[biN]da[ree, [biN]da[ree]nu	
283	6	d	Y	物語	[muN]gat[tai, [muN]gat[tai]nu	

資料 2 動詞のアクセント

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
284	4	a	T	動く	mugejuN	A
285	4	a	T	教える・知らせる	hatajuN	A
286	4	a	T	溺れる	uburijuN	A
287	4	a	T	頑張る	cjibajuN	A
288	5	a	T	くすぐる	gazjagujuN	A
289	3	a	T	配る	FazjuN	A
290	4	a	U	消す	Cja:[sjuN	A
291	-	a	T	しびれる（かじかむ）	hjirukudi（テ形）	A
292	2	a	T	座る	juN	A
293	4	a	T	育つ・大きくなる	FudijuN	A
294	4	a	T	たたむ	takubiN	A
295	4	a	T	つぶす	hjisjizjuN	A
296	4	a	T	閉じる・閉める	kuRjuN	A
297	4	a	U	握る	miN[zjuN	A
298	4	a	U	寝る	nIbu[juN	A
299	4	a	U	走る	wudu[juN	A
300	4	a	U	拾う	Fi:[juN	A
301	4	a	T	減る	hjinajuN	A
302	4	a	T	結ぶ	kuijuN	A
303	4	a	T	燃やす	maRsjuN	A
304	5	a?	U	忘れる	wasji[ri]juN	A
305	3	a	U	開く	a[cjuN	A
306	4	a	U	開ける	`e:[juN	A
307	4	a	U	遊ぶ	asji[biN	A
308	4	a	U	当たる	ata[juN	A
309	4	a	U	洗う	aro[juN	A
310	2	a?	U	言う	['juN	A
311	3	a	U	行く	i[cjuN	A
312	4	a?	U	入れる	i:[ju]N	A
313	3	a	U	売る	u[juN	A
314	3	a	U	置く	u[cjuN	A
315	3	a	U	押す	u[suN	A

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
316	4	b	U	帰る	[mudu]ju[N	A
317	4	a	U	買う	Fo:[juN	A
318	4	a	U	枯れる	hari[juN	A
319	3	a	U	聞く	cju[CjuN	A
320	2	a	U	着る	kju[N	A
321	4	a	T	殺す	FurusjuN	A
322	3	a	U	咲く	sa[cjuN	A
323	3	a	U	死ぬ	sji[njuN	A
324	2	a	U	する	sju[N	A
325	3	a	U	飛ぶ	tu[biN	A
326	3	a	U	鳴く・泣く	na[CjuN	A
327	3	a	U	鳴る	na[juN	A
328	2	a	U	煮る	nju[N	A
329	3	a	U	乗る	nu[juN	A
330	4	a	U	腫れる	Fari[juN	A
331	3	a?	U	振る	Fu[ju]N	A
332	3	a	U	巻く	macju[N	A
333	4	a	U	負ける	me:[juN	A
334	4	a	T	回る	moRjuN	A
335	4	a	T	燃やす	muijuN	A
336	4	a	U	沸かす	waka[sjuN	A
337	4	a	U	笑う	waro[juN	A
338	3	b	U	痛む	[ja]mi[N	B
339	4	b	T	教える	narojuN	B
340	5	b	T	驚く	udurucjuN	B
341	3	b	T	数える、計算する	jumiN	B
342	4	b	T	かたづける、しまう	noRsjuN	B
343	5	b	T	かつぐ	hatamijuN	B
344	4	b	T	借りる	FuRjuN	B
345	6	b	T	こぼす	FaNkarasjuN	B
346	4	b	T	壊す	jubujuN	B
347	4	b	T	探す・尋ねる	tomijuN	B

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
348	4	b	T	叱る	amajuN	B
349	5	b	T	捨てる	FaNgijuN	B
350	5	b	T	背負う	hasjigijuN	B
351	5	b	T	倒れる	doNgejuN	B
352	4	b	T	出す	izjasjuN	B
353	3	b	U	食べる	[ka]mi[N	B
354	4	b	T	捕まえる、握る	cjikamiN	B
355	4	b	T	疲れる	darijuN	B
356	4	b	U	出る	['izji]ju[N	B
357	4	b	U	習う	[naro]ju[N	B
358	5	b	T	逃げる	hjiNzjijuN	B
359	3	b	U	脱ぐ	[nu]ju[N	B
360	4	b	T	生える	mujuN	B
361	-	b	T	ひっくりかえす	-	B
362	5	b	T	ひっくりかえる	maNgejuN	B
363	4	b	U	酔う	[ju:]ju[N	B
364	4	b	U	呼ぶ、叫ぶ、招く	['abi]ju[N	B
365	4	b	U	会う	[`o:]ju[N	B
366	3	b	U	編む	[a`]mi[N	B
367	3	b	U	歩く	[a']Cju[N	B
368	3	b	U	打つ	[u']cju[N	B
369	4	b	U	起きる	['ui]ju[N	B
370	4	b	U	起す	['u:]sju[N	B
371	4	b	U	落ちる	['uti]ju[N	B
372	4	b	U	覚える	['ubi]ju[N	B
373	4	b	U	思う	['umu]ju[N	B
374	4	b	U	泳ぐ	['ui]zju[N	B
375	3	b	U	書く	[ha]cju[N	B
376	4	b	U	掛ける	[ke:]ju[N	B
377	3	b	U	勝つ	[ha]cju[N	B
378	4	b	U	かぶる	[habu]ju[N	B
379	2	b?	U	切る	!kju][N	B

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
380	2	a?	U	来る	Cju[N	B
381	3	b	U	蹴る	[Fi]ju[N	B
382	3	b	U	刺す	[sa]sju[N	B
383	3	b	U	剃る	[su]ju[N	B
384	4	b	U	倒す	[to:]sju[N	B
385	3	b	T	倒れる	tujuN	B
386	3	b	T	搗く	cjicjuN	B
387	4	b	T	照る	tijuN	B
388	3	b	U	取る	[tu]ju[N	B
389	4	b	U	通る	[tu:]ju[N	B
390	4	b	U	投げる	[nagi]ju[N	B
391	3	b	T	成る	najuN	B
392	4	b	U	縫う	[no:]ju[N	B
393	3	b	U	脱ぐ	[nu]ju[N	B
394	3	b	U	飲む	[nu]mi[N	B
395	4	b	T	話す	hanasjuN	B
396	4	b	U	晴れる	[Fari]ju[N	B
397	3	b	T	引っ掻く	hacjuN	B
398	3	b	U	吹く	[Fu]cju[N	B
399	3	b	U	降る	[Fu]ju[N	B
400	3	b	U	待つ	[ma]cju[N	B
401	2	b	U	見る	!mju][N	B
402	4	b	U	見える	[mja:]ju[N	B
403	3	b	U	待つ、運ぶ	[ma]cju[N	B
404	3	b	U	読む	[ju]mi[N	B
405	4	b	U	分ける	['oi]ju[N	B

資料 3 形容詞のアクセント

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
406	4	a	T	新しい	miRsaN	A
407	4	a	T	薄い	hjisjisaN	A
408	5	a	T	うるさい	hamarasjaN	A

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
409	5	a	T	嬉しい、楽しい	hoRrasja	A
410	5	c	T	恐ろしい	nuNgisaN	A
411	4	a	U	重い	ubu[saN	A
412	4	a	T	悲しい	sjiNsaN	A
413	4	a	T	汚い	ʔjaRsjaN	A
414	4	a	T	匂いがいい	habasjaN	A
415	5	a	T	難しい	mucjikasjaN	A
416	5	a	T	もったいない	atarasjaN	A
417	4	a	U	赤い	asa[saN	A
418	4	a	U	浅い	asa[saN	A
419	4	a	U	厚い	acji[sa]N, 'ac[cjaN	A
420	4	a	U	甘い	ama[saN	A
421	4	a	U	軽い	haru[saN	A
422	4	a	U	遠い	tu:[saN	A
423	4	a	T	丸い	marusaN	A
424	4	c	T	温かい	nukusaN	B
425	3	b	T	おいしい	MasaN	B
426	4	b	U	多い	['u]Fu[sa]N	B
427	4	b	T	大きい 1	oRsaN	B
428	4	b	T	大きい 2	uFisaN	B
429	4	b	T	遅い	nisaN	B
430	5	b	T	恐ろしい、大変だ	uturusjaN	B
431	5	b	T	面白い、楽しい	mizjirasjaN	B
432	4	b	U	固い	[Fu]Fa[sa]N	B
433	4	b	T	痒い	hajosaN	B
434	4	b	T	きれいだ	cjurasaN	B
435	-	b	T	くすぐったい	-	B
436	4	b	T	濃い	kujusaN	B
437	4	b	T	寒い	hjiRsaN	B
438	4	c	T	少ない	icjasaN	B
439	4	b	T	涼しい	sjidasaN	B
440	4	b	T	すっぱい	sjiRsaN	B

番号	モーラ	型	データ元	意味	データ	系列
441	4	b	T	狭い	ibasaN	B
442	5	b	T	だるい、疲れた	agumasjaN	B
443	4	b	T	小さい 1	icjasaN	B
444	4	b	T	小さい 2	gumasaN	B
445	5	b	T	冷たい	hjizjurusaN	B
446	5	b	T	なつかしい	nacjikasjaN	B
447	4	b	T	憎い、きらいだ	hagosaN	B
448	4	b	T	眠い	jaRsaN	B
449	4	b	T	ひもじい	joRsjaN	B
450	5	b	T	短い	icjikasjaN	B
451	4	b	T	柔らかい	birasaN	B
452	3	b	U	良い	ju[Ka]N	B
453	4	b	U	悪い	[wa]ro[sa]N	B
454	4	b	U	青い	['o]:[sa, ['o]:[sa]N	B
455	3	b?	U	熱い、暑い	a[ca]N	B
456	4	b	U	辛い	[ha]ra[sa]N	B
457	4	b	U	白い	[sju]:[sa, [sju]:[sa]N	B
458	4	b	U	高い	[ta]ka[sa]N	B
459	4	b	U	近い	[cji]ka[sa]N	B
460	4	b	U	強い	[Cju]:[sa]N	B
461	4	b	U	長い	[na]ga[sa]N	B
462	4	b	U	苦い	[nji]zja[sa	B
463	4	b	U	早い	[Fe]:[sa]N	B
464	4	b	U	広い	[Fju]:[sa]N	B
465	4	b	U	深い	[Fu]ka[sa]N	B
466	5	b	T	柔らかい	joRrasaN	B
467	4	b	T	弱い	juwasaN	B
468	4	b	U	若い	wakasaN	B

2. 自然談話資料

自然談話資料の一部を、FLEX（Field Language Explorer）でデータベース化した形式で、以下に収録する（資料 4)。談話に特有の略号は、(1) の通りである。

なお、日本標準語にコード・スイッチしたと思われる箇所[95]には<>を記し、<> で囲んだ箇所と、日本標準語からの借用と思われる語には、形態素分析を行わなかった。

(1) 談話の略号

<> ：日本標準語にコード・スイッチした箇所

XX ：聞き取りが出来なかった箇所

@@：笑っている箇所

… ：言い淀み

（??）：意味の分析が出来ていない箇所

資料 4 自然談話資料

	内容	ジャンル	時間	データ名	コンサルタント
1	自己紹介	独話	0:02:28	20130125-1.wav	TK
2	昔の話	独話	0:02:25	20130125-2.wav,	TK
3	トイレの話	会話	0:01:17	20150113.wav	YK, TN, SK
4	サトウキビ業の話	会話	0:03:41	20150113.wav	YK, TN, SK
5	岬神社の話－1	独話	0:12:00	20140422-7.wav	YK
6	米と麦と粟の姉妹	昔話	0:08:48	IMGA0152.mp4	TT
7	東の家と西の家	昔話	0:02:27	20140623-3.wav	MF

[95] 方言に該当表現が他にあるにも関わらず、標準語形を用いている箇所を「コードスイッチした箇所」と認定した。

20130125-1

TKさん自己紹介

1	**Word**	wanawajoo			erabuzjimano					
	Morphemes	wana	=wa	=joo	erabu	+	zjima	=nu		
	Lex. Entries	wa	=wa	=joo$_1$	erabu	***	sjima	=nu$_2$		
	Lex. Gloss	1SG	TOP	SFP	沖永良部島	***	島	GEN2		

kunigaminiti		umaritijoo				
kunigami	=niti	*umarit	-i	=joo		
kunigami	=niti	*Maari+fr. var.	-i$_1$	=joo$_1$		
国頭集落	LOC2	産まれる	SEQ	SFP		

Free 私はね、エラブ島の国頭で生まれてね

2	**Word**	gaNsji	ano	<	seNsoono	>	naaniti					
	Morphemes	gaNsji	anu		seNsoono		naa	=niti				
	Lex. Entries	gaNsji	anu$_1$		***		naa$_3$	=niti				
	Lex. Gloss	そして	FIL		***		中	LOC2				

Free 戦争中に生まれて 昭和十八年に生まれたTKと言いますよ。

3	**Word**	<	sjoowazjuuhacjineN	>	ni	umaritanu								<
	Morphemes		***		=ni	*umarit	-a	-nu						
	Lex. Entries		***		=ni$_1$	*Maari+fr. var.	-a	-nu						
	Lex. Gloss		***		LOC1	産まれる	PST	ADN						

TK	>	didu			ʔjuNdojaa									
***		=di	=du		*ʔi	-ju	-N	=do		=jaa				
***		=di	=du		*ʔi$_1$	-ju$_1$	-N	=doo+fr. var.		=jaa				
***		QT	FOC		言う	NPST	IND	SFP		SFP				

Free

4	**Word**	gaNsjijoo			anoo	nageesa			sjimani					
	Morphemes	gaNsji	=joo		anu	*nagee	-sa		sjima	=ni				
	Lex. Entries	gaNsji	=joo$_1$		anu$_1$	*nagee	-sa$_1$		sjima	=ni$_1$				
	Lex. Gloss	そして	SFP		FIL	長い	ADJ		島	LOC1				

kuracjutasjiga														
*kuracj	-ut	-a	-sjiga											
*kuras	-u	-a	-sjiga											
暮らす	CONT	PST	CNC											

Free そしてね、長い間島で暮らしていたけど

5	**Word**	<	kekkoN	>	sjii		sjatuwa				anoo	<
	Morphemes		***		*sji	-i	*sji	-a	-tu	=wa	anu	
	Lex. Entries		***		*sji$_2$	-i$_1$	*sji$_2$	-a	-tu	=wa	anu$_1$	
	Lex. Gloss		***		する	SEQ	する	PST	COND	TOP	FIL	

cjoozjono	>	ano
cjoozjono		anu
***		anu$_1$
***		FIL

Free 結婚して、したら長女の‥ 女の子を産んだだときに妻が病気をして

6	**Word**	wunaguno		kwaa	nacjaN			tokini	
	Morphemes	wunagu	=nu	kwaa	*nacj	-a	-N	tuki	=ni
	Lex. Entries	wunagu	=nu$_1$	kwaa$_1$	*nas$_1$	-a	-nu	tuki	=ni$_1$
	Lex. Gloss	女	NOM2	子	産む	PST	ADN	時	LOC1

tuzjinu	<	bjooki	>	sjii	
tuzji	=nu	***		*sji	-i
tuzji	=nu$_1$	***		*sji$_2$	-i$_1$
妻	NOM2	***		する	SEQ

Free

7	**Word**	gaNsji	koobecji		izjiti		izjii	
	Morphemes	gaNsji	koobe	=cji	*izjit	-i	*izj	-i
	Lex. Entries	gaNsji	koobe	=cji$_2$	*izji	-i$_1$	*ik$_2$	-i$_1$
	Lex. Gloss	そして	神戸	ALL	出る	SEQ	行く	SEQ

Free そうして神戸へ出て行って

8	**Word**	gaNsji	oosakatoka		koobeniti		<	zjuuneN	>	
	Morphemes	gaNsji	oosaka	=tuka	koobe	=niti		***		
	Lex. Entries	gaNsji	oosaka	=tuka	koobe	=niti		***		
	Lex. Gloss	そして	大阪	ENU	神戸	LOC2		***		

be		kuracji	
=be		*kuracj	-i
=bee+fr. var.		*kuras	-i$_1$
APPR		暮らす	SEQ

Free そして大阪とか神戸で十年くらい暮らして

9	**Word**	gaNsji	sjiikara			ano	sjimacji		muduti	
	Morphemes	gaNsji	*sji	-i	=kara	anu	sjima	=cji	*mudut	-i
	Lex. Entries	gaNsji	*sji$_2$	-i$_1$	=kara	anu$_1$	sjima	=cji$_2$	*mudu$_1$	-i$_1$
	Lex. Gloss	そして	する	SEQ	ABL	FIL	島	ALL	戻る	SEQ

kicjii
*kicj -i
*kicj -i_1
来る SEQ

Free そうしてから、島へ戻ってきて

10 **Word** < noogjoo > sjiigacjanaja <
Morphemes *** *sji -i =gacjana =ja
Lex. Entries *** *sji_2 -i_1 =gacjana =jaa+fr. var.
Lex. Gloss *** する SEQ ながら SFP

sjiNbuNhaNbaiteN > du sjuNdoojaa
*** =du *sji -u -N =doo =jaa
*** =du *sji_2 -u -N =doo =jaa
*** FOC する CONT IND SFP SFP

Free 農業しながらね、新聞販売店をしているんだよ。

11 **Word** (doNna bjooki ...?)
Morphemes *** ***
Lex. Entries *** ***
Lex. Gloss *** ***

Free （質問者）どんな病気を‥？

12 **Word** < bjooki > wajoo < cugino > ano <
Morphemes *** =wa =joo cugino anu
Lex. Entries *** =wa =joo_1 *** anu_1
Lex. Gloss *** TOP SFP *** FIL

nibaNmeno > kwaa ano tuzjino
nibaNmeno kwaa anu tuzji =nu
*** $kwaa_1$ anu_1 tuzji =nu_1
*** 子 FIL 妻 NOM2

Free 病気はね、次の、二番目の子供を妻が

13 **Word** haradaN tukini < cjoono > ano <
Morphemes *harad -a -N tuki =ni cjoono anu
Lex. Entries *haram -a -nu tuki =ni_1 *** anu_1
Lex. Gloss 孕む PST ADN 時 LOC1 *** FIL

daccjoo > dinu muN sjiijo
*** =di =nu muN *sji -i =jo
*** =di =nu_1 muN *sji_2 -i_1 =jo
*** QT NOM2 もの する SEQ SFP

Free 孕んだ時に、腸の‥脱腸というものをしてね

14	**Word**	gaNsji	unu	tukiniwa			maanu			sjimanu			
	Morphemes	gaNsji	unu	tuki	=ni	=wa	maa	=nu		sjima	=nu		
	Lex. Entries	gaNsji	uN_1	tuki	$=ni_1$	=wa	maa_1	$=nu_1$		sjima	$=nu_2$		
	Lex. Gloss	そして	その	時	LOC1	TOP	ここ	NOM2		島	GEN2		

isjanu
isja =nu
isja $=nu_1$
医者 NOM2

Free そして、その時には、ここの島の医者が

15	**Word**	ariniti	ari	dekiradanaja				
	Morphemes	ari =niti	ari	*deki	-ran	-radana	=ja	
	Lex. Entries	ari =niti	ari	*deki	-ran	$-radana_1$	=jaa+fr. var.	
	Lex. Gloss	3SG LOC2	あれ	出来る	NEG	SEQ	SFP	

gaNsjidu		ano	koobecji		izjamu				
gaNsji	=du	anu	koobe	=cji	*izj	-a	-mu		
gaNsji	=du	anu_1	koobe	$=cji_2$	$*ik_2$	-a	-mu		
だから	FOC	FIL	神戸	ALL	行く	PST	EPI		

Free あれで、あれ（手術）を出来なくて、だからた神戸へ行った

16	**Word**	(koobeni	ita	tokiwa	doNna	sjigotowo	?)
	Morphemes	***	ita	tokiwa	***	***	
	Lex. Entries	***	***	***	***	***	
	Lex. Gloss	***	***	***	***	***	

Free （質問者）神戸にいた時はどんな仕事を‥？

17	**Word**	koobe	izjikarajo				anoo	nuNgura	koobeno				
	Morphemes	koobe	*izj	-i	=kara	=jo	anu	nuNgura	koobe	=nu			
	Lex. Entries	koobe	$*ik_2$	$-i_1$	=kara	=jo	anu_1	nuNgura	koobe	$=nu_2$			
	Lex. Gloss	神戸	行く	SEQ	ABL	SFP	FIL	FIL	神戸	GEN2			

<	minatono	>	jo										
	***		=jo										
	***		=jo										
	***		SFP										

Free 神戸に行ってからね、神戸の港のね

18	**Word**	<	micubisjisooko	>	dinu		naanitijo			ano			
	Morphemes		***		=di	=nu	naa	=niti	=jo	anu			
	Lex. Entries		***		=di	$=nu_2$	naa_3	=niti	=jo	anu_1			
	Lex. Gloss		***		QT	GEN2	中	LOC2	SFP	FIL			

nuNgura	<	irooNna	nakasji	>	sjaja	
nuNgura		iroNna	nakasji		*sji	-aja
nuNgura		***	***		*sji$_{2}$	-aja
FIL		***	***		する	SEL

Free 三菱倉庫という中で、いろんな仲卸をしたり

19	**Word**	wanawa		anuu	<	kurumano	uNteNtoka	zjuukino
	Morphemes	wana	=wa	anu		kurumano	uNteNtoka	zjuukino
	Lex. Entries	wa	=wa	anu$_{1}$		***	***	***
	Lex. Gloss	1SG	TOP	FIL		***	***	***

uNteN	>	
uNteN		
***		
***		

Free 私は車の運転とか重機の運転が

20	**Word**	dekijutanu			munu	jati		<	sookono
	Morphemes	*deki	-juta	-nu	munu	*jat	-i		sookono
	Lex. Entries	*deki	-juta	-nu	***	*ja$_{4}$	-i$_{1}$		***
	Lex. Gloss	出来る	PST2	ADN	***	COP	SEQ		***

micubisjisookono	>	naaniti	
micubisjisookono		naa	=niti
***		naa$_{3}$	=niti
***		中	LOC2

Free 出来たものだから、倉庫の‥三菱倉庫の中で

21	**Word**	<	kookurifuto	>	nutaja		<	irooNna	>	muN	nuti	
	Morphemes		***		*nu	-aja		iroNna		muN	*nut	-i
	Lex. Entries		***		*nu	-aja		***		***	*nu	-i$_{1}$
	Lex. Gloss		***		乗る	SEL		***		***	乗る	SEQ

haNsji
haNsji
haNsji
こうして

Free コーフリクトに乗ったりいろんなものに乗って、こうして

22	**Word**	<	nimocu	>	nu	<	orosjiageja	>	gaNsjanu	muN
	Morphemes		***		=nu		orosjiageja		gaNsjanu	muN
	Lex. Entries		***		=nu$_{2}$		***		gaNsjanu	muN
	Lex. Gloss		***		GEN2		***		そんな	もの

sjii		ano
*sji	-i	anu
*sji$_2$	-i$_1$	anu$_1$
する	SEQ	FIL

Free 荷物の卸しあげや、そんなものをして

23	**Word**	zjiN	muukete		utaN			gaN	sjiidu		
	Morphemes	zjiN	*muuket	-i	*u	-a	-N	gaN	*sji	-i	=du
	Lex. Entries	zjiN	*muuke	-i$_1$	*u	-a	-N	gaN	*sji$_2$	-i$_1$	=du
	Lex. Gloss	金	儲ける	SEQ	いる	PST	IND	そう	する	SEQ	FOC

<	maa	>	tuzjinu	<	bjooki	>
	maa		tuzji =nu		***	
	***		tuzji =nu$_2$		***	
	***		妻 GEN2		***	

Free 金を稼いでいた。そうして妻の病気を

24	**Word**	noocjijo			gaNsji	<	iroiro	>	sjii		mata
	Morphemes	*noocj	-i	=jo	gaNsji		iroiro		*sji	-i	mata
	Lex. Entries	*noos	-i$_1$	=jo	gaNsji		***		*sji$_2$	-i$_1$	mata$_1$
	Lex. Gloss	治す	SEQ	SFP	そして		***		する	SEQ	また

oosaka	izjii		ano
oosaka	*izj	-i	anu
oosaka	*ik$_2$	-i$_1$	anu$_1$
大阪	行く	SEQ	FIL

Free 治してね、そうして色々して、また大阪に行って

25	**Word**	sjigutu	sjaja		<	iroiro	>	ano	sjizuokamo	
	Morphemes	sjigutu	*sji	-aja		iroiro		anu	sjizuoka	=mu
	Lex. Entries	sjigutu	*sji$_2$	-aja		***		anu$_1$	sjizuoka	=mu
	Lex. Gloss	仕事	する	SEL		***		FIL	静岡	ADD

izji		kicjaNdojaa				
*izj	-i	*kicj	-a	-N	=do	=jaa
*ik$_2$	-i$_1$	*kicj	-a	-N	=doo+fr. var.	=jaa
行く	SEQ	来る	PST	IND	SFP	SFP

Free 仕事をしたり色々‥静岡も行ってきたんですよ

26	**Word**	gaNsji	<	iroiro	>	sjasjiga			anoo	acjaga		<
	Morphemes	gaNsji		iroiro		*sji	-a	-sjiga	anu	acja	=ga	
	Lex. Entries	gaNsji		***		*sji$_2$	-a	-sjiga	anu$_1$	acja	=ga$_2$	
	Lex. Gloss	そして		***		する	PST	CNC	FIL	父親	GEN1	

bjooki	>	sjii
***		*sji -i
***		*sji$_2$ -i$_1$
***		する SEQ

Free そして色々したけど、父親が病気をして

27	**Word**	moisjii		sjimotijo			gaNsji	sjidu		
	Morphemes	*moisj	-i	*sjimot	-i	=jo	gaNsji	*sji	-i	=du
	Lex. Entries	*mois	-i$_1$	*sjimo	-i$_1$	=jo	gaNsji	*sji$_2$	-i$_1$	=du
	Lex. Gloss	死ぬ.HON	SEQ	しまう	SEQ	SFP	そして	する	SEQ	FOC

naa
naa
naa$_1$
もう

Free 亡くなってしまってね、だからもう

28	**Word**	tarumo		sjimacji		mudujunu			<	kjoodai	>	
	Morphemes	taru	=mu	sjima	=cji	*mudu	-ju	-nu		***		
	Lex. Entries	taru	=mu	sjima	=cji$_2$	*mudu$_1$	-ju$_1$	-nu		***		
	Lex. Gloss	誰	ADD	島	ALL	戻る	NPST	ADN		***		

no	uradana	
=nu	*u	-radana
=nu$_1$	*u	-radana$_1$
NOM2	いる	SEQ

Free 誰も島へ戻る兄弟がいなくて

29	**Word**	waga		sjimacji		muduti		kicjii		anoo	<		
	Morphemes	wa	=ga	sjima	=cji	*mudut	-i	*kicj	-i	anu			
	Lex. Entries	wa	=ga$_2$	sjima	=cji$_2$	*mudu$_1$	-i$_1$	*kicj	-i$_1$	anu$_1$			
	Lex. Gloss	1SG	GEN1	島	ALL	戻る	SEQ	来る	SEQ	FIL			

noogjoo	>	cjizjijo		
***		*cjizj	-i	=jo
***		*cjig$_1$	-i$_1$	=jo
***		継ぐ	SEQ	SFP

Free 私が島に戻ってきて、農業を継いでね

30	**Word**	gaNsji	<	noogjoo	>	cjizji		sjiigacjana		
	Morphemes	gaNsji		***		*cjizj	-i	*sji	-i	=gacjana
	Lex. Entries	gaNsji		***		*cjig$_1$	-i$_1$	*sji$_2$	-i$_1$	=gacjana
	Lex. Gloss	そして		***		継ぐ	SEQ	する	SEQ	ながら

haNsji
haNsji
haNsji
こうして

Free そうして農業を継ぎながら、こうして

31	**Word**	<	sjiNbuNhaNbaiteN	>	dinu		munu
	Morphemes		***		=di	=nu	munu
	Lex. Entries		***		=di	$=nu_2$	munu
	Lex. Gloss		***		QT	GEN2	もの

sjiijo			gaNsjidu	
*sji	-i	=jo	gaNsji	=du
$*sji_2$	$-i_1$	$=joo_1$+fr. var.	gaNsji	=du
する	SEQ	SFP	そして	FOC

Free 新聞販売店というものをしてね、そうして

32	**Word**	naa	<	nizjuugoneN	>	be	naNja		<
	Morphemes	naa		***		=be	*na	-N	=jaa
	Lex. Entries	naa_1		***		=bee+fr. var.	$*na_2$	-N	=jaa
	Lex. Gloss	もう		***		APPR	なる	IND	SFP

sjiNbuN	>	sjiikara		
***		*sji	-i	=kara
***		$*sji_2$	$-i_1$	=kara
***		する	SEQ	ABL

Free もう二十五年くらいになるよ。新聞を始めてから

33	**Word**	gaNsjanu	munu	sjuNdooja				
	Morphemes	gaNsjanu	munu	*sji	-u	-N	=doo	=ja
	Lex. Entries	gaNsjanu	munu	$*sji_2$	-u	-N	=doo	=jaa+fr. var.
	Lex. Gloss	そんな	もの	する	CONT	IND	SFP	SFP

Free そんなことをしていますよ。

20130125-2

TKさん昔の話

1	**Word**	wacjaga		ikusaataN				tukiwajoo		
	Morphemes	wacja	=ga	*iku	-sa	-a	-N	tuki	=wa	=joo
	Lex. Entries	wacja	$=ga_1$	*iku	$-sa_1$	-a	-N	tuki	=wa	$=joo_1$
	Lex. Gloss	1PL	NOM1	小さい	ADJ	PST	IND	時	TOP	SFP

Free 私達が小さかった時はね

2	**Word**	kunigaminu		anu	murawa		XX	<	biNboo	>
	Morphemes	kunigami	=nu	anu	mura	=wa	***		biNboo	
	Lex. Entries	kunigami	$=nu_2$	anu_1	mura	=wa	***		***	
	Lex. Gloss	国頭集落	GEN2	FIL	集落	TOP	***		***	

jatijoo

*jat	-i	=joo
$*ja_4$	$-i_1$	$=joo_1$
COP	SEQ	SFP

Free 国頭の集落は貧乏だったよ

3	**Word**	anu	kamimuNwa				naazji	
	Morphemes	anu	*kam	-i	+	muN	=wa	*naazj	-i
	Lex. Entries	anu_1	*kam	$-i_3$	***	muN	=wa	*naazj	$-i_1$
	Lex. Gloss	FIL	食べる	INF1	***	もの	TOP	ない	SEQ

Free 食べものは無くて

4	**Word**	icjimu	jarabukee		kadi		
	Morphemes	icjimu	jarabu	+	kee	kad	-i
	Lex. Entries	icjimu	jarabu	***	kee	*kam	$-i_1$
	Lex. Gloss	いつも	蘇鉄の実	***	粥	食べる	SEQ

Free いつも蘇鉄の実の粥を食べて

5	**Word**	gaNsji	umu	icjama	kadi	
	Morphemes	gaNsji	umu	icjama	kad	-i
	Lex. Entries	gaNsji	umu	icjama	*kam	$-i_1$
	Lex. Gloss	そして	芋	少し	食べる	SEQ

Free そして芋を少し食べて

6	**Word**	wacja	ikusainiwa					wara	...
	Morphemes	wacja	*iku	-sa	-i	=ni	=wa	wara	
	Lex. Entries	wacja	*iku	-sa$_1$	-i$_2$	=ni$_1$	=wa	***	
	Lex. Gloss	1PL	小さい	ADJ	Q	LOC1	TOP	***	

waraNcjanu			<	sjigotu	>	di	ʔjuusjiwa		
warabi	-Ncja	=nu		***		=di	*ʔj	-ju	-sji	=wa
warabi	-Ncja	=nu$_2$		***		=di	*ʔj$_1$	-ju$_1$	-sji$_2$	=wa
子供	-PL	GEN2		***		QT	言う	NPST	COMP	TOP

Free 私達が小さい時には、子供たちの仕事というのは

7	**Word**	<	mocjiroN	>	jazjinu		mee	usjinu		mee	kusa
	Morphemes		mocjiroN		jazji	=nu	mee	usji	=nu	mee	kusa
	Lex. Entries		***		jazji	=nu$_2$	mee$_3$	usji$_1$	=nu$_2$	mee$_3$	kusa
	Lex. Gloss		***		山羊	GEN2	ため	牛	GEN2	ため	草

hati	
*hat	-i
*ha	-i$_1$
刈る	SEQ

Free もちろん山羊のため、牛のため草を刈って

8	**Word**	gaNsji	sjii		unu	<	aida	>	niwa	
	Morphemes	gaNsji	*sji	-i	unu		aida		=ni	=wa
	Lex. Entries	gaNsji	*sji$_2$	-i$_1$	uN$_1$		***		=ni$_1$	=wa
	Lex. Gloss	そして	する	SEQ	その		***		LOC1	TOP

Free そうしてその間には

9	**Word**	umu	nuNgura	nuNgura	umu	cjaataja	
	Morphemes	umu	nuNgura	nuNgura	umu	*cjaat	-aja
	Lex. Entries	umu	nuNgura	nuNgura	umu	*cjaa	-aja
	Lex. Gloss	芋	FIL	FIL	芋	掘る	SEL

Free 芋を掘ったり

10	**Word**	<	iroNna	noosagjoo	tecudai	>	sjii	
	Morphemes		iroNna	noosagjoo	tecudai		*sji	-i
	Lex. Entries		***	***	***		*sji$_2$	-i$_1$
	Lex. Gloss		***	***	***		する	SEQ

Free 色んな農作業の手伝いをして

11	**Word**	gaNsji	jiru	narutuwajoo					anu
	Morphemes	gaNsji	jiru	*na	-ru	-tu	=wa	=joo	anu
	Lex. Entries	gaNsji	jiru$_1$	*na$_2$	-ru$_2$	-tu	=wa	=joo$_1$	anu$_1$
	Lex. Gloss	そして	夜	なる	COND3	COND	TOP	SFP	FIL

gazjamuNnu		jiinu			muN	jati		
gazjamuN	=nu	*jii	-ju	-nu	muN	*jat	-i	
gazjamuN	=nu$_1$	*jii	-ju$_1$	-nu	muN	*ja$_4$	-i$_1$	
蚊	NOM2	入る	NPST	ADN	もの	COP	SEQ	

Free そして夜になるとね、蚊が入るものだから

12	**Word**	anu	gazjamuN	ari	sjunu			kusanu	
	Morphemes	anu	gazjamuN	ari	*sji	-ju	-nu	kusa	=nu
	Lex. Entries	anu$_1$	gazjamuN	ari	*sji$_2$	-ju$_1$	-nu	kusa	=nu$_1$
	Lex. Gloss	FIL	蚊	あれ	する	NPST	ADN	草	NOM2

ati			
*at	-i		
*a$_1$	-i$_1$		
ある	SEQ		

Free 蚊をあれする（＝殺す）草があって

13	**Word**	uN	<	kusao	>	mucji		kicji		anu	<
	Morphemes	uN		kusao		*mucj	-i	*kicj	-i	anu	
	Lex. Entries	uN$_1$		***		*mut	-i$_1$	*kicj	-i$_1$	anu$_1$	
	Lex. Gloss	その		***		持つ	SEQ	来る	SEQ	FIL	

geNkaN	>	niti	haNsji	ibusutujoo		
***		=niti	haNsji	*ibus	-ru	-tu	=joo
***		=niti	haNsji	*ibus	-ru$_2$	-tu	=joo$_1$
***		LOC2	こうして	いぶす	COND3	COND	SFP

Free その草を持って来て玄関でこうしていぶすとね

14	**Word**	hjibusji	natijoo			hjibusji	nati		jaa
	Morphemes	hjibusji	*nat	-i	=joo	hjibusji	*nat	-i	jaa
	Lex. Entries	hjibusji	*na$_2$	-i$_1$	=joo$_1$	hjibusji	*na$_2$	-i$_1$	jaa$_1$
	Lex. Gloss	煙	なる	SEQ	SFP	煙	なる	SEQ	家

naacji		irirutu		
naa	=cji	*iri	-ru	-tu
naa$_3$	=cji$_2$	*iri	-ru$_2$	-tu
中	ALL	入れる	COND3	COND

Free 煙になってね、煙になって家の中へいれると

15	**Word**	gazjamuNnu		hjiNzjiti		gaNsji	jiruwa	
	Morphemes	gazjamuN	=nu	*hjiNzjit	-i	gaNsji	jiru	=wa
	Lex. Entries	gazjamuN	=nu$_1$	*hjiNzji	-i$_1$	gaNsji	jiru$_1$	=wa
	Lex. Gloss	蚊	NOM2	逃げる	SEQ	そして	夜	TOP

niburinugajoo

*nibu	-ra	-nu	=ga	=joo
*nibu	-ra$_2$	-nu	=gaa+fr. var.	=joo$_1$
眠る	POT	ADN	EMPH	SFP

Free 蚊が逃げて、そして夜は眠れるんだよ

16	**Word**	gaNsji	jirudi		?juusjiwa				naa	uN
	Morphemes	gaNsji	jiru	=di	*?j	-ju	-sji	=wa	naa	uN
	Lex. Entries	gaNsji	jiru$_1$	=di	*?j$_1$	-ju$_1$	-sji$_2$	=wa	naa$_1$	uN$_1$
	Lex. Gloss	そして	夜	QT	言う	NPST	COMP	TOP	もう	その

tukiwa		are
tuki	=wa	are
tuki	=wa	***
時	TOP	***

Free そして夜というのは、もうその時は

17	**Word**	<	futoN	>	mu	anu	<	moofu	>
	Morphemes		futoN		=mu	anu		***	
	Lex. Entries		***		=mu	anu$_1$		***	
	Lex. Gloss		***		ADD	FIL		***	

?juusjimu				naazji		
*?i	-ju	-sji	=mu	*naazj	-i	
*?i$_1$	-ju$_1$	-sji$_2$	=mu	*naazj	-i$_1$	
言う	NPST	COMP	ADD	ない	SEQ	

Free 布団も毛布というのもなくて

18	**Word**	tada	cjibara	muuru	haNsji	habutidu		
	Morphemes	tada	cjibara	muuru	haNsji	*habut	-i	=du
	Lex. Entries	tada	cjibara	muuru	haNsji	*habu	-i$_1$	=du
	Lex. Gloss	ただ	着物	皆	こうして	かぶる	SEQ	FOC

nibujuN

*nibu	-ju	-N	
*nibu	-ju$_1$	-N	
眠る	NPST	IND	

Free ただ着物を全部こうしてかぶって眠る、

19	**Word**	anu	uturusjanu			<	biNboona	seikacu	>
	Morphemes	anu	*uturu	-sja	-nu		biNboona	***	
	Lex. Entries	anu$_1$	*uturu	-sa$_1$	-nu		***	***	
	Lex. Gloss	FIL	大変	ADJ	ADN		***	***	

jatamujaa
*jat -a -mu =jaa
*ja$_4$ -a -mu =jaa
COP PST EPI SFP

Free 大変に貧乏な生活だったよ

20	**Word**	gaNsji	maani	<	sjoogakkoo	saNneNka	joneN	>
	Morphemes	gaNsji	maa =ni		***	saNneNka	joneN	
	Lex. Entries	gaNsji	maa$_1$ =ni$_1$		***	***	***	
	Lex. Gloss	そして	ここ LOC1		***	***	***	

bee narutuwajoo
=bee *na -ru -tu =wa =joo
=bee *na$_2$ -ru$_2$ -tu =wa =joo$_1$
APPR なる COND3 COND TOP SFP

Free そしてここに、小学校三年か四年ばかりになるとね

21	**Word**	<	nihoNfukkiuNdoo	>	dinu	munu	<	hajatti	>
	Morphemes		***		=di =nu	munu		***	
	Lex. Entries		***		=di =nu$_2$	munu		***	
	Lex. Gloss		***		QT GEN2	もの		***	

gaNsji
gaNsji
gaNsji
そして

Free 日本復帰運動というものが流行って、そして

22	**Word**	wacjawa	<	nihoNfukkiuNdoo	>	gara	amagoigara
	Morphemes	wacja =wa		***		=gara	amagoi =gara
	Lex. Entries	wacja =wa		***		=gara	amagoi =gara
	Lex. Gloss	1PL TOP		***		か	雨乞い か

nuugara wakaiwa sjiradanaatasjiga
nuu =gara *waka -i =wa *sji -radana -a sjiga
nuu =gara *waka$_1$ -i$_3$ =wa *sji$_1$ -radana$_2$ -a ***
何 か 分かる INF1 TOP 知る NEG PST CNC

Free 私達は、日本復帰運動か雨乞いか何か、分かりは知らなかったけど

23	**Word**	<	cjoocjiN	>	cukuti	hata	<	nihoN	>	nu
	Morphemes		cjoocjiN		*cukut -i	hata		***		=nu
	Lex. Entries		***		*cuku -i$_1$	hata$_2$		***		=nu$_2$
	Lex. Gloss		***		作る SEQ	旗		***		GEN2

hata	cukuti		<	issjookeNmee	>
hata	*cukut	-i		***	
$hata_2$	*cuku	$-i_1$		***	
旗	作る	SEQ		***	

Free 提灯を作って、旗…日本の旗を作って一生懸命

24	**Word**	anu	<	pareedo	>	sjaja		sjiijaa			gaNsji	<
	Morphemes	anu		***		*sji	-aja	*sji	-i	=jaa	gaNsji	
	Lex. Entries	anu_1		***		$*sji_2$	-aja	$*sji_2$	$-i_1$	=jaa	gaNsji	
	Lex. Gloss	FIL		***		する	SEL	する	SEQ	SFP	そして	

cjoocjiN	gjoorecu	>	sjicji	
cjoocjiN	***		*sjicj	-i
***	***		***	$-i_1$
***	***		***	SEQ

Free パレードしたりしてね、そして提灯行列して

25	**Word**	<	nihoN	...	naaNde	kaesanu	erabutu	joroNto	iu	>
	Morphemes		***		***	kaesanu	erabutu	***	iu	
	Lex. Entries		***		***	***	***	***	***	
	Lex. Gloss		***		***	***	***	***	***	

Free 日本…「なんで返さぬエラブと与論」という

26	**Word**	gaNsjinu	uta	utooti		haNsji	<	fukkiuNdoo	>
	Morphemes	gaNsjinu	uta	*utoot	-i	haNsji		***	
	Lex. Entries	gaNsjinu	uta	*utoo	$-i_1$	haNsji		***	
	Lex. Gloss	そんな	歌	歌う	SEQ	こうして		***	

sjaNjaa			
*sji	-a	-N	=jaa
$*sji_2$	-a	-N	=jaa
する	PST	IND	SFP

Free そんな歌を歌って、こうして復帰運動したんだよ

27	**Word**	gaNsji	unu	tukimunaa			anu	gakkoocji	
	Morphemes	gaNsji	unu	tuki	=mu	=naa	anu	gakkoo	=cji
	Lex. Entries	gaNsji	uN_1	tuki	=mu	$=naa_1$	anu_1	gakkoo	$=cji_2$
	Lex. Gloss	そして	その	時	ADD	SFP	FIL	学校	ALL

izjimu		
*izj	-i	=mu
$*ik_2$	$-i_1$	=mu
行く	SEQ	ADD

Free そしてその時もね、学校に行っても

28	**Word**	ure	anu	nuNgura	beNtoowa		naazji			
	Morphemes	***	anu	nuNgura	beNtoo	=wa	*na	-azj	-i	
	Lex. Entries	***	anu_1	nuNgura	***	=wa	$*na_4$	-ran	$-i_1$	
	Lex. Gloss	***	FIL	FIL	***	TOP	ない	NEG	SEQ	

Free 弁当は無くて

29	**Word**	jaacji		muduti		kicji		anu	nuNgura	anu			
	Morphemes	jaa	=cji	*mudut	-i	*kicj	-i	anu	nuNgura	anu			
	Lex. Entries	jaa_1	$=cji_2$	$*mudu_1$	$-i_1$	*kicj	$-i_1$	anu_1	nuNgura	anu_1			
	Lex. Gloss	家	ALL	戻る	SEQ	来る	SEQ	FIL	FIL	FIL			

nuNgura
nuNgura
nuNgura
FIL

Free 家に戻ってきて、

30	**Word**	<	sotecu	>	nu	miinujaa			jarabunu		<					
	Morphemes		***		=nu	mii	=nu	=jaa	jarabu	=nu						
	Lex. Entries		***		$=nu_2$	mii_2	$=nu_2$	=jaa	jarabu	$=nu_2$						
	Lex. Gloss		***		GEN2	実	GEN2	SFP	蘇鉄の実	GEN2						
okaju	>	gaNsjanu			munu	kadi										
okaju		gaN	-sja	-nu	munu	kad	-i									
***		gaN	$-sa_1$	-nu	munu	*kam	$-i_1$									
***		そう	ADJ	ADN	もの	食べる	SEQ									

Free 蘇鉄の実のね、蘇鉄の実のお粥、そんなものを食べて

31	**Word**	mata	gakkoocji			<	cuku	>	tu		<	cjikoku	>			
	Morphemes	mata	gakkoo	=cji			***		-tu			cjikoku				
	Lex. Entries	$mata_1$	gakkoo	$=cji_2$			***		-tu			***				
	Lex. Gloss	また	学校	ALL			***		COND			***				
sjiijaa																
*sji	-i	=jaa														
$*sji_2$	$-i_1$	=jaa														
する	SEQ	SFP														

Free また学校に着くと遅刻してね

32	**Word**	seNseeni		amaratijoo			
	Morphemes	seNsee	=ni	*ama	-rat	-i	=joo
	Lex. Entries	seNsee	$=ni_2$	$*ama_1$	$-ra_1$	$-i_1$	$=joo_1$
	Lex. Gloss	先生	DAT	怒る	PASS	SEQ	SFP

Free 先生に怒られてね

33	**Word**	gaNsjanu	anuu	<	seikacu	>	du	<	sjita	>	sjiga
	Morphemes	gaNsjanu	anu		***		=du		***		-sjiga
	Lex. Entries	gaNsjanu	anu_1		***		=du		***		-sjiga
	Lex. Gloss	そんな	FIL		***		FOC		***		CNC

Free そんな生活をしたけど

34	**Word**	maa	anu	moo	kuNzjaidinu			sjimawa	
	Morphemes	maa	anu	moo	kuNzjai	=di	=nu	sjima	=wa
	Lex. Entries	***	anu_1	***	kuNzjai	=di	$=nu_2$	sjima	=wa
	Lex. Gloss	***	FIL	***	国頭	QT	GEN2	集落	TOP

uturusja	<	biNboo	>	jati
*uturu -sja		biNboo		*jat -i
*uturu $-sa_1$		***		$*ja_4$ $-i_1$
大変 ADJ		***		COP SEQ

Free 国頭という集落は本当に貧乏だった

35	**Word**	namawa	sono	<	urio	>	haNsji	<	kono	>
	Morphemes	nama =wa	sono		uri =o		haNsji		***	
	Lex. Entries	nama =wa	***		uri ***		haNsji		***	
	Lex. Gloss	今 TOP	***		それ ***		こうして		***	

hanekaesaadicji
*hanekaes -aa =dicji
*hanekaes -raa =dicji
跳ね返す INT QT

Free 今はそれを跳ね返そうと言って

36	**Word**	<	issjookeNmee	>	hataracji
	Morphemes		***		*hataracj -i
	Lex. Entries		***		*hatarak $-i_1$
	Lex. Gloss		***		働く SEQ

Free 一生懸命働いて

37	**Word**	namawa	erabu	icjibaN	<	jutakana	>
	Morphemes	nama =wa	erabu	icjibaN		jutakana	
	Lex. Entries	nama =wa	erabu	icjibaN		***	
	Lex. Gloss	今 TOP	沖永良部島	一番		***	

sjimani natasjigajaa
sjima =ni *nat -a sjiga =jaa
$sjima =ni_1$ $*na_2$ -a *** =jaa
島 LOC1 なる PST CNC SFP

Free 今は沖永良部島で一番の豊かな島になったけどね

38	**Word**	kunigamidinu			<	sjuurakuwa		hoNtooni	>	anu
	Morphemes	kunigami	=di	=nu		sjuuraku	=wa	hoNtooni		anu
	Lex. Entries	kunigami	=di	$=nu_2$		***	***	***		anu_1
	Lex. Gloss	国頭集落	QT	GEN2		***	***	***		FIL

Free 国頭という集落は、本当に

39	**Word**	umu	cukutimu			anu	<	kitakaze	>	nu
	Morphemes	umu	*cukut	-i	=mu	anu		***		=nu
	Lex. Entries	umu	*cuku	$-i_1$	=mu	anu_1		***		$=nu_1$
	Lex. Gloss	芋	作る	SEQ	ADD	FIL		***		NOM2

nisjihazjinu				fukutuwa			
nisji	+	hazji	=nu	*fuk	-u	-tu	=wa
nisji	***	$hazji_2$	$=nu_1$	$*fuk_1$	$-ru_2$	-tu	=wa
北	***	風	NOM2	吹く	COND3	COND	TOP

Free 芋を作っても、北風が吹くと

40	**Word**	umu	muuru	hazjiramu		hariti	
	Morphemes	umu	muuru	hazjira	=mu	*harit	-i
	Lex. Entries	umu	muuru	hazjira	=mu	$*hari_1$	$-i_1$
	Lex. Gloss	芋	全部	つる	ADD	枯れる	SEQ

Free 芋は全部ツルが枯れて

41	**Word**	gaNsji	umumu		mii	jaadanajaa		
	Morphemes	gaNsji	umu	=mu	mii	*ʔj	-radana	=jaa
	Lex. Entries	gaNsji	umu	=mu	mii_2	$*ʔj_2$	$-radana_1$	=jaa
	Lex. Gloss	そして	芋	ADD	実	入る	SEQ	SFP

Free 芋も実が入らなくてね

42	**Word**	gaNsji	anu	<	biNbooni	natta	>	nu	sjimadu	
	Morphemes	gaNsji	anu		biNbooni	***		-nu	sjima	=du
	Lex. Entries	gaNsji	anu_1		***	***		-nu	sjima	=du
	Lex. Gloss	そして	FIL		***	***		ADN	島	FOC

jaasjiga	
*ja	sjiga
$*ja_4$	***
COP	CNC

Free 貧乏になった島だけど

43	**Word**	maa	icjaka		haaka		sjuti			seekacu
	Morphemes	maa	icja	=ka	haa	=ka	*sji	-ut	-i	seekacu
	Lex. Entries	***	$icja_1$	=ka	haa	=ka	$*sji_2$	-u	$-i_1$	seekacu
	Lex. Gloss	***	どう	Q	こう	Q	する	CONT	SEQ	生活

sjiijoo

*sji -i =joo

*sji$_{2}$ -i$_{1}$ =joo$_{1}$

する SEQ SFP

Free どうにかこうにかして生活してね

44	**Word**	haNsji	fuditi		kicjaNdoojaa				
	Morphemes	haNsji	*fudit	-i	*kicj	-a	-N	=doo	=jaa
	Lex. Entries	haNsji	*fudi	-i$_{1}$	*kicj	-a	-N	=doo	=jaa
	Lex. Gloss	こんなに	育つ	SEQ	来る	PST	IND	SFP	SFP

Free こんなに大きくなってきたんですよ

45	**Word**	gassaa	ii	tuusa		agari	tuusa	
	Morphemes	gassaa	ii	*tuu	-sa	agari	*tuu	-sa
	Lex. Entries	gassaa	ii	*tuu$_{1}$	-sa$_{1}$	agari	*tuu$_{1}$	-sa$_{1}$
	Lex. Gloss	それだけ	西	遠い	ADJ	東	遠い	ADJ

Free それだけ、おしまいおしまい

20150113_toilet

昔のトイレの話

1	**Word**	[	YK	]	anuu	butani		kamasjunu			
	Morphemes		***		anu	buta	=ni	*kam	-as	-ju	-nu
	Lex. Entries		***		anu_1	***	$=ni_2$	*kam	-as	$-ju_1$	-nu
	Lex. Gloss		***		FIL	***	DAT	食べる	CAUS	NPST	ADN

niiwasja			
nii	=wa	=sja	
nii_1	=wa	=sja	
ところ	TOP	EMPH	

Free あの、豚に食べさせるところはね

2	**Word**	[	YK	]	ufagucji		natija		
	Morphemes		***		*ufa	+ kucji	*nat	-i	=ja
	Lex. Entries		***		*ufa	*** kucji	$*na_2$	$-i_1$	=jaa+fr. var.
	Lex. Gloss		***		大きい	*** 口	なる	SEQ	SFP

Free 大きな口が空いていてね

3	**Word**	[	TN	]	gaN	sjuNtu				ʔwaani			
	Morphemes		***		gaN	*sji	-ju	-N	-tu	ʔwaa	=ni		
	Lex. Entries		***		gaN	$*sji_2$	$-ju_1$	-N	-tu	ʔwaa	$=ni_2$		
	Lex. Gloss		***		そう	する	NPST	IND	COND	豚	DAT		

kamasjunu				tukinimu		uN	
*kam	-as	-ju	-nu	tuki	=ni	=mu	uN
*kam	-as	$-ju_1$	-nu	tuki	$=ni_1$	=mu	uN_1
食べる	CAUS	NPST	ADN	時	LOC1	ADD	その

Free だから、豚に食べさせる時にも、その

4	**Word**	[	TN	]	anuu	sjikakunu			Maani		ippoN	anuu	<
	Morphemes		***		anu	sjikaku	=nu		Maa	=ni	***	anu	
	Lex. Entries		***		anu_1	***	$=nu_2$		Maa_2	$=ni_1$	***	anu_1	
	Lex. Gloss		***		FIL	***	GEN2		馬	LOC1	***	FIL	

itao	>	sjiriba		
ita	=o	*sji	-riba	
***	$=o_2$	$*sji_2$	-riba	
***	ACC	する	COND1	

Free あのー、四角のそこに、こうして一本、あのー、板をすれば（かければ）

5	**Word**	[	TN	]	Maaniti		kusumati	
	Morphemes		***		Maa	=niti	*kusumat	-i
	Lex. Entries		***		Maa_1	=niti	*kusuma	$-i_1$
	Lex. Gloss		***		そこ	LOC2	排便する	SEQ

Free そこで排便して

6	**Word**	[	SK	]	kamacjuutamu				
	Morphemes		***		*kam	-acj	-ut	-a	-mu
	Lex. Entries		***		*kam	-as	-u	-a	-mu
	Lex. Gloss		***		食べる	CAUS	CONT	PST	EPI

Free 食べさせていた。

7	**Word**	[	YK	]	TNakitagasja	zjidai	aramaze			?
	Morphemes		***		***	***	*a	-ra	-maz	-e
	Lex. Entries		***		***	***	$*a_1$	-ran	-maz	$-e_1$
	Lex. Gloss		***		***	***	ある	NEG	CONF	YNQ

Free 富明たちの時代に無かったでしょ？

8	**Word**	[	TN	]	abe	waga		ikusaN			tukiwa	
	Morphemes		***		abee	wa	=ga	*iku	-sa	-N	tuki	=wa
	Lex. Entries		***		abee	wa	$=ga_1$	*iku	$-sa_1$	-nu	tuki	=wa
	Lex. Gloss		***		あら！	1SG	NOM1	小さい	ADJ	ADN	時	TOP

Free あら！　私たちが小さい時は

9	**Word**	[	SK	]	ee
	Morphemes		***		ee
	Lex. Entries		***		ee
	Lex. Gloss		***		えっと

Free えっと

10	**Word**	[	TN	]	gaNsji	mai	...	mai
	Morphemes		***		gaNsji	mai		mai
	Lex. Entries		***		gaNsji	mai		mai
	Lex. Gloss		***		だから	尻		尻

nugujusjimujaa

*nugu	-ju	-sji	=mu	=jaa
$*nugu$	$-ju_1$	$-sji_2$	=mu	=jaa
拭う	NPST	COMP	ADD	SFP

Free だから、尻‥　尻を拭うのもね

11	**Word**	[	TN	]	<	kami	>	araNkojaa				hjiinu	
	Morphemes		***			kami		*a	-raNko	=jaa		hjii	=nu
	Lex. Entries		***			***		$*a_2$	-raNko	=jaa		$hjii_5$	$=nu_2$
	Lex. Gloss		***			***		COP	NEG.SEQ	SFP		木	GEN2

faaja	anuu	...
faa =ja	anu	
faa_1 =jaa+fr. var.	anu_1	
葉 SFP	FIL	

Free 紙ではなくてね、木の葉ね。あの‥

12	**Word**	[	YK	]	baNsjirugiibaatuka						
	Morphemes		***		baNsjiru	+	kii	+	haa	=tuka	
	Lex. Entries		***		baNsjiru	***	$hjii_5$	***	faa_1	=tuka	
	Lex. Gloss		***		グァバ	***	木	***	葉	ENU	

Free グァバの木の葉とか

13.1	**Word**	[	TN	]	uN	?							
	Morphemes		***		uN								
	Lex. Entries		***		uN_2								
	Lex. Gloss		***		うん								

Free うん？

13.2	**Word**	anuu	mainuguigiidi									icjii		
	Morphemes	anu	mai	+	*nugu	-i	+	kii	=di			*icj	-i	
	Lex. Entries	anu_1	mai	***	*nugu	$-i_3$	***	$hjii_5$	=di			$*?i_1$	$-i_1$	
	Lex. Gloss	FIL	尻	***	拭う	INF1	***	木	QT			言う	SEQ	

atasadja	?			
*at -a -sa	=dja			
$*a_1$ -a $-sa_2$	$=djaa_1$			
ある PST MRT	SFP			

Free 尻拭いの木と言ったんじゃない？

14	**Word**	[	SK	]	<	soo	soo	soo	>
	Morphemes		***			soo	soo	soo	
	Lex. Entries		***			***	***	***	
	Lex. Gloss		***			***	***	***	

Free そうそうそう

15	**Word**	[	TN	]	uN	mainuguigiiwa							
	Morphemes		***		uN	mai	+	*nugu	-i	+	kii	=wa	
	Lex. Entries		***		uN_1	mai	***	*nugu	$-i_1$	***	$hjii_5$	=wa	
	Lex. Gloss		***		その	尻	***	拭う	SEQ	***	木	TOP	

hjoozjuNgosji		nuudi		JuNkaja			?	
hjoozjuNgo	=sji	nuu	=di	*ʔi	-ju	-N	=kaja	
***	=sji	nuu	=di	*ʔi$_1$	-ju$_1$	-N	=kaja	
***	INS	何	QT	言う	NPST	IND	Q	

Free その尻拭いの木は、標準語で何て言うかな？

16	**Word**	[YK]	ariwa		anu	hamabiwadja			hamabiwa		
	Morphemes	***	ari	=wa	anu	hamabiwa	=dja		hamabiwa		
	Lex. Entries	***	ari	=wa	anu$_1$	***	=djaa$_1$		***		
	Lex. Gloss	***	あれ	TOP	FIL	***	SFP		***		

araNkaja			?	
*a	-ran	-N	=kaja	
*a$_2$	-ran	-N	=kaja	
COP	NEG	IND	Q	

Free あれは、ハマビワでしょ。ハマビワじゃないかな？

17.1	**Word**	[TN]	hamabiwa	?
	Morphemes	***	hamabiwa	
	Lex. Entries	***	***	
	Lex. Gloss	***	***	

Free ハマビワ？

17.2	**Word**	uN	nama	aNkajadja				?
	Morphemes	uN	nama	*a	-N	=kaja	=dja	
	Lex. Entries	uri	nama	*a$_1$	-N	=kaja	=djaa$_1$	
	Lex. Gloss	それ	今	ある	IND	Q	SFP	

Free それは、今あるかな？

18	**Word**	[YK]	aNdja			gabadja		
	Morphemes	***	*a	-N	=dja	gaba	=dja	
	Lex. Entries	***	*a$_1$	-N	=djaa$_1$	gaba	=djaa$_1$	
	Lex. Gloss	***	ある	IND	SFP	たくさん	SFP	

Free あるよ、沢山だよ。

19	**Word**	[TN]	nama	aNmai	micji		naadana		...	
	Morphemes	***	nama	aNmai	*micj	-i	*n	-adana		
	Lex. Entries	***	nama	aNmai	*mi$_1$	-i$_1$	*n$_1$	-radana$_1$		
	Lex. Gloss	***	今	あんまり	見る	SEQ	ない	SEQ		

Free 最近、あんまり見ていなくて‥

20	**Word**	[YK]	uN	attainu		naani	
	Morphemes	***	uN	attai	=nu	naa	=ni
	Lex. Entries	***	uN_1	attai	$=nu_2$	naa_3	$=ni_1$
	Lex. Gloss	***	その	集落（集住地）	GEN2	中	LOC1

gabadu		jaru	
gaba	=du	*ja	-ru
gaba	=du	$*ja_4$	$-ru_1$
たくさん	FOC	COP	MSB

Free 集落の中に沢山だよ。

21	**Word**	[TN]	attainu		jasjikiniwa		
	Morphemes	***	attai	=nu	jasjiki	=ni	=wa
	Lex. Entries	***	attai	$=nu_2$	jasjiki	$=ni_1$	=wa
	Lex. Gloss	***	集落（集住地）	GEN2	屋敷	LOC1	TOP

naamaze			...
*n	-ran	-maz	-e
$*n_1$	-ran	-maz	$-e_1$
ない	NEG	CONF	YNQ

Free 集落の屋敷にはないでしょう？

22	**Word**	[TN]	anusjaa		anuu	udakara		eda
	Morphemes	***	anu	=sja	anu	uda	=kara	***
	Lex. Entries	***	anu_1	=sja	anu_1	uda	=kara	***
	Lex. Gloss	***	FIL	EMPH	FIL	どこ	ABL	***

mucji		kicjii	
*mucj	-i	*kicj	-i
*mut	$-i_1$	*kicj	$-i_1$
持つ	SEQ	来る	SEQ

Free あのさ、どこから枝を持ってきて

23	**Word**	[TN]	gaNsji	oosaN			tukini		mucji	
	Morphemes	***	gaNsji	*oo	-sa	-N	tuki	=ni	*mucj	-i
	Lex. Entries	***	gaNsji	$*oo_2$	$-sa_1$	-nu	tuki	$=ni_1$	*mut	$-i_1$
	Lex. Gloss	***	そして	青い	ADJ	ADN	時	LOC1	持つ	SEQ

kicjuutidu				cjikojutaanu				baakajadja		
*kicj	-ut	-i	=du	*cjiko	-jut	-a	-nu	baa	=kaja	=dja
*kicj	-u	$-i_1$	=du	*cjiko	$-ju_3$	-a	-nu	baa_2	=kaja	$=djaa_1$
来る	CONT	SEQ	FOC	使う	NPREF	PST	ADN	事	Q	SFP

Free そして、青い時に持ってきて置いて、使っていたという事かな？

24	**Word**	[	YK	]	uNsja	muuru	abutasja				
	Morphemes		***		uNsja	muuru	abu	-ta		=sja	
	Lex. Entries		***		uNsja	muuru	abu	-taa+fr. var.		=sja	
	Lex. Gloss		***		ほら	皆	母親	PL		EMPH	

hasabiti		ucjicji				atamaze				?	
*hasabi	-i	*ucj	-i	*ucj	-i	*at	-a	-maz	-e		
*hasabi	-i_1	*ucj$_1$	-i_1	*ucj$_2$	-i_1	*a$_1$	-a	-maz	-e$_1$		
重ねる	SEQ	置く	SEQ	おく	SEQ	ある	PST	CONF	YNQ		

Free ほら、全部、お母さん達が重ねて置いてあったでしょ？

25	**Word**	[	TN	]	<	uN	ja	>...
	Morphemes		***			uN	ja	
	Lex. Entries		***			***	***	
	Lex. Gloss		***			***	***	

Free うん‥

26	**Word**	[	YK	]	gaN	sjigeenasjajoN				
	Morphemes		***		gaN	*sji	-i	=gena	=sja	=joN
	Lex. Entries		***		gaN	*sji$_2$	-i_1	=gena	=sja	=joN
	Lex. Gloss		***		そう	する	SEQ	後	EMPH	SFP

Free そうした後にさ

27	**Word**	[	YK	]	ikusa		narutu			taacji		
	Morphemes		***		*iku	-sa	*na	-ru	-tu	*taa	=cji	
	Lex. Entries		***		*iku	-sa$_1$	*na$_2$	-ru$_2$	-tu	*taa	=cji$_1$	
	Lex. Gloss		***		小さい	ADJ	なる	COND3	COND	2	個	

oocjidu			wacja	cjikojutaNdja					
*oocj	-i	=du	wacja	*cjiko	-jut	-a	-N	=dja	
*oocj	-i_1	=du	wacja	*cjiko	-ju$_3$	-a	-N	=djaa$_1$	
合わせる	SEQ	FOC	1PL	使う	NPREF	PST	IND	SFP	

Free 小さくなると、２つ合わせて私たちは使っていたんだよ。

28	**Word**	@
	Morphemes	
	Lex. Entries	
	Lex. Gloss	

Free

29	**Word**	[	TN	]	tiini		cjicjunu		
	Morphemes		***		tii	=ni	*cjik	-ju	-nu
	Lex. Entries		***		tii	=ni$_1$	*cjik$_3$	-ju$_1$	-nu
	Lex. Gloss		***		手	LOC1	付く	NPST	ADN

hazjidjaja
hazji　＝dja　＝ja
hazji$_{1}$　＝djaa$_{1}$　＝jaa+fr. var.
はず　SFP　SFP

Free 手に付くはずだよね。

30	**Word**	[	SK	]	<	omosjiroine	mukasjino	hanasjiwa	>
	Morphemes		***			***	***	hanasji ＝wa	
	Lex. Entries		***			***	***	***	***
	Lex. Gloss		***			***	***	***	***

Free 面白いね、昔の話は。

20150113_satokibi

サトウキビ工業

1	**Word**	[	YK	]	<	saisjo	>	wajoo		sjoowa	sjoowa
	Morphemes		***			***		=wa	=joo	sjoowa	sjoowa
	Lex. Entries		***			***		=wa	$=joo_1$	***	***
	Lex. Gloss		***			***		TOP	SFP	***	***

saNzjuuneNna ?

saNzjuuneN =na

*** $=naa_2$+dial. var.

*** YNQ

Free 〔四男子〕最初はね、昭和、昭和30年か？

2	**Word**	[	TN	]	saNzjuuneN	...
	Morphemes		***		***	
	Lex. Entries		***		***	
	Lex. Gloss		***		***	

Free 〔富明〕30年‥

3	**Word**	[	YK	]	amamikoohacudinu			ninu		
	Morphemes		***		amamikoohacu	=di	=nu	nii	=nu	
	Lex. Entries		***		***	=di	$=nu_2$	nii_1	$=nu_1$	
	Lex. Gloss		***		***	QT	GEN2	ところ	NOM2	

dikitija			uritu		...	
*dikit	-i	=ja	uri	=tu		
*deki+dial. var.	$-i_1$	=jaa+fr. var.	uri	$=tu_1$		
出来る	SEQ	SFP	それ	COM		

Free 〔四男子〕奄美興発というところが出来てね〔四男子〕それと‥

4	**Word**	[	TN	]	wadomaricjooni		anu	...
	Morphemes		***		wadomaricjoo	=ni	*a	-nu
	Lex. Entries		***		***	$=ni_1$	$*a_1$	-nu
	Lex. Gloss		***		***	LOC1	ある	ADN

Free 〔富明〕和泊町にある‥

5	**Word**	[	YK	]	wadomaricjoonijaa					
	Morphemes		***		wadomaricjoo	=ni	=jaa			
	Lex. Entries		***		***	$=ni_1$	=jaa			
	Lex. Gloss		***		***	LOC1	SFP			

Free 〔四男子〕和泊町にね‥

6	**Word**	[	YK	]	cjinaniwa			teekokubussaNdinu		
	Morphemes		***		cjina	=ni	=wa	teekokubussaN	=di	=nu
	Lex. Entries		***		cjina	$=ni_1$	=wa	***	=di	$=nu_2$
	Lex. Gloss		***		知名	LOC1	TOP	***	QT	GEN2

ninu		dikiti			
nii	=nu	*dikit	-i		
nii_1	$=nu_1$	*deki+dial. var.	$-i_1$		
ところ	NOM2	出来る	SEQ		

Free 〔四男子〕知名には帝国物産というところが出来て

7	**Word**	[	YK	]	gaNsji	<	koNdo	>	wanaa		<	rjoohoo	
	Morphemes		***		gaNsji		koNdo		=wa	=naa		***	
	Lex. Entries		***		gaNsji		***		=wa	$=naa_1$		***	
	Lex. Gloss		***		そして		***		TOP	SFP		***	

kjoosoo	>	sjaNgijoo				
***		*sji	-a	-N	=gi	=joo
***		$*sji_2$	-a	-N	=gi	$=joo_1$
***		する	PST	IND	EXP	SFP

Free そうして今度は、両方が競争したんだよ。

8	**Word**	[	YK	]	sjii		uNga		atudu		<	koNdo	>
	Morphemes		***		*sji	-i	uN	=ga	atu	=du		koNdo	
	Lex. Entries		***		$*sji_2$	$-i_1$	uri	$=ga_2$	atu_1	=du		***	
	Lex. Gloss		***		する	SEQ	それ	GEN1	後	FOC		***	

wa	amamikoohacutu		
=wa	amamikoohacu	=tu	
=wa	***	$=tu_1$	
TOP	***	COM	

Free （競争）して、その後に今度は奄美興発と

9	**Word**	[	YK	]	teekokubussaN	gappee	nati		naNeetoogjoo
	Morphemes		***		***	***	*nat	-i	***
	Lex. Entries		***		***	***	$*na_2$	$-i_1$	***
	Lex. Gloss		***		***	***	なる	SEQ	***

nataNgijo
*nat -a -N =gi =jo
*na_2 -a -N =gi =jo
なる PST IND EXP SFP

Free 帝国物産が合併になって、南栄糖業になったんだよ。

10	**Word**	[YK]	gaNsji	wacja	keekeN	naasjigajoo			
	Morphemes	***	gaNsji	wacja	***	*na	-ran	-sjiga	=joo
	Lex. Entries	***	gaNsji	wacja	***	*na_4	-ran	-sjiga	=joo_1
	Lex. Gloss	***	そして	1PL	***	ない	NEG	CNC	SFP

Free そして、私たちは経験がないけどね

11	**Word**	[YK]	wacja	<	karitori	>	sjuusaja			<
	Morphemes	***	wacja		karitori		*sji	-u	-sa	=jaa
	Lex. Entries	***	wacja		***		*sji_2	-u	-sa_2	=jaa
	Lex. Gloss	***	1PL		***		する	CONT	MRT	SFP

karitori > sjuusaja
karitori *sji -u -sa =jaa
*** *sji_2 -u -sa_2 =jaa
*** する CONT MRT SFP

Free 私たちは刈り取りするでしょう、刈り取りをするでしょう。

12	**Word**	[YK]	uNga		atuni		ittoN
	Morphemes	***	uN	=ga	atu	=ni	***
	Lex. Entries	***	uri	=ga_2	atu_1	=ni_1	***
	Lex. Gloss	***	それ	GEN1	後	LOC1	***

mucjizjidu
*mucj -i *izj -i =du
*mut -i_1 *ik_2 -i_1 =du
持つ SEQ 行く SEQ FOC

Free その後に1トン持って行って

13	**Word**	[YK]	barikinudoojaa				happjakueN
	Morphemes	***	bariki	=nu	=doo	=jaa	***
	Lex. Entries	***	***	=nu_2	=doo	=jaa	***
	Lex. Gloss	***	***	GEN2	SFP	SFP	***

Free 馬力でね。800円。

14	**Word**	[YK]	ittoN	...
	Morphemes	***	***	
	Lex. Entries	***	***	
	Lex. Gloss	***	***	

Free 1トン‥

15	**Word**	[	TN	]	oo	...	anuu	basjaa	basjaa	basjawa	...
	Morphemes		***		oo		anu	basja	basja	basja =wa	
	Lex. Entries		***		***		anu_1	$basja_2$	$basja_2$	$basja_2$ =wa	
	Lex. Gloss		***		***		FIL	馬車	馬車	馬車 TOP	

Free おお、馬車、馬車、馬車は‥

16	**Word**	[	YK	]	basjawa		ittoNdu		ʔjuuru	
	Morphemes		***		basja	=wa	ittoN	=du	*ʔj	-ju -ru
	Lex. Entries		***		$basja_2$	=wa	***	=du	$*ʔj_2$	$-ju_1$ $-ru_1$
	Lex. Gloss		***		馬車	TOP	***	FOC	入る	NPST MSB

uNniwa			naa	zjidoosjawa		naazjijaa			
uN	=ni	=wa	naa	zjidoosja	=wa	*na	-razj	-i	=jaa
uri	$=ni_1$	=wa	naa_1	***	=wa	$*na_4$	-ran	$-i_1$	=jaa
それ	LOC1	TOP	もう	***	TOP	ない	NEG	SEQ	SFP

Free 馬車は1トンしか入らない。その頃には、もう自動車はないしね。

17	**Word**	[	YK	]	naa	barikidu		aNtuja		
	Morphemes		***		naa	bariki	=du	*a	-N	=tu =ja
	Lex. Entries		***		naa_1	***	=du	$*a_2$	-N	$=tu_2$ =jaa+fr. var.
	Lex. Gloss		***		もう	***	FOC	COP	IND	CSL SFP

Free もう、馬力だからね。

18	**Word**	[	YK	]	matajo		Maawa		<	sjoozjiki >
	Morphemes		***		mata	=jo	Maa	=wa		***
	Lex. Entries		***		$mata_1$	=jo	Maa_2	=wa		***
	Lex. Gloss		***		また	SFP	馬	TOP		***

doojaa	
=doo	=jaa
=doo	=jaa
SFP	SFP

Free またね、馬は正直ですよ

19	**Word**	[	YK	]	<	hoNtooni		sjoozjiki	>	Maadi
	Morphemes		***			hoNtoo	=ni	***		Maa =di
	Lex. Entries		***			***	$=ni_1$	***		Maa_2 =di
	Lex. Gloss		***			***	LOC1	***		馬 QT

ʔjuusjiwa			
*ʔj	-ju	-sji	=wa
$*ʔj_1$	$-ju_1$	$-sji_2$	=wa
言う	NPST	COMP	TOP

Free 本当に正直。馬と言うのは。

20	**Word**	[	TN	]	Maanu		<	sjoozjiki	>	di
	Morphemes		***		Maa	=nu		***		=di
	Lex. Entries		***		Maa_2	$=nu_1$		***		=di
	Lex. Gloss		***		馬	NOM2		***		QT

?juusjiwa				ubusa		arutu			duduku
*?j	-ju	-sji	=wa	*ubu	-sa	*a	-ru	-tu	duduku
$*?j_1$	$-ju_1$	$-sji_2$	=wa	*ubu	$-sa_1$	$*a_2$	$-ru_2$	-tu	duduku
言う	NPST	COMP	TOP	重い	ADJ	COP	COND3	COND	(家畜が）嫌がる事

sjuumudinu					baana		?
*s	-ju	-mu	=di	=nu	baa	=naa	
*s	$-ju_1$	-mu	=di	$=nu_2$	baa_2	$=naa_2$	
する	NPST	EPI	QT	GEN2	事	YNQ	

Free 馬が正直と言うのは、重いと嫌がるという事か？

21	**Word**	[	YK	]	gaNsji	seNeNnu		seNeNnu		zjiN	...
	Morphemes		***		gaNsji	seNeN	=nu	seNeN	=nu	zjiN	
	Lex. Entries		***		gaNsji	***	$=nu_2$	***	$=nu_2$	zjiN	
	Lex. Gloss		***		そして	***	GEN2	***	GEN2	金	

Free そして1000円のお金、1000円のお金。

22	**Word**	[	YK	]	unu	kuru	seNeNnu		zjiN
	Morphemes		***		unu	kuru	seNeN	=nu	zjiN
	Lex. Entries		***		uN_1	kuru	***	$=nu_2$	zjiN
	Lex. Gloss		***		その	頃	***	GEN2	金

mookijumudi				icjidu			bariki	sjuNgijoo				
*mooki	-ju	-mu	=di	*icj	-i	=du	***	*s	-ju	-N	=gi	=joo
$*mooki$	$-ju_1$	-mu	=di	$*?i_1$	$-i_1$	=du	***	*s	$-ju_1$	-N	=gi	$=joo_1$
儲ける	NPST	EPI	QT	言う	SEQ	FOC	***	する	NPST	IND	EXP	SFP

Free その頃、千円のお金を儲けると言って馬力をしたんだよ。

23	**Word**	[	YK	]	uritu		namanu		keesacukara	
	Morphemes		***		uri	=tu	nama	=nu	keesacu	=kara
	Lex. Entries		***		uri	$=tu_1$	nama	$=nu_1$	***	=kara
	Lex. Gloss		***		それ	COM	今	NOM2	***	ABL

amacjiwa				koozjicjuu	jatijaa			<	dooro	>	nu
ama	=cji	=wa		***	*jat	-i	=jaa		***		=nu
ama_2	$=cji_2$	=wa		***	$*ja_4$	$-i_1$	=jaa		***		$=nu_1$
あそこ	ALL	TOP		***	COP	SEQ	SFP		***		NOM2

Free それと、今の警察からあそこへは工事中でね、道路が。

24	**Word**	[	YK	]	gaN	sjirutuwa				<	koNdo		
	Morphemes		***		gaN	*sji	-ju	-ru	-tu	=wa	koNdo		
	Lex. Entries		***		gaN	*sji$_2$	-ju$_1$	-ru$_2$	-tu	=wa	koNdo		
	Lex. Gloss		***		そう	する	NPST	COND3	COND	TOP	今度		
>	wa	naa											
	=wa	naa											
	=wa	naa$_1$											
	TOP	もう											

Free そうするとね、今度はもう

25	**Word**	[	YK	]	uN	durumicjimu				ikaNnja			
	Morphemes		***		uN	duru	+	micji	=mu	*ik	-an	-nja	
	Lex. Entries		***		uN$_1$	duru	***	micji	=mu	*ik$_2$	-ran	-rja	
	Lex. Gloss		***		その	泥	***	道	ADD	行く	NEG	COND2	
narasajaa													
*na	-ran	-sa	=jaa										
*na$_2$	-ran	-sa$_2$	=jaa										
なる	NEG	MRT	SFP										

Free その泥道も行かなくてはならなくてね

26	**Word**	[	YK	]	Maawa		Maaniti		duduku				
	Morphemes		***		Maa	=wa	Maa	=niti	duduku				
	Lex. Entries		***		Maa$_2$	=wa	Maa$_2$	=niti	duduku				
	Lex. Gloss		***		馬	TOP	馬	LOC2	(家畜が）嫌がる事				
sjiijo													
*sji	-i	=jo											
*sji$_2$	-i$_1$	=jo											
する	SEQ	SFP											

Free 馬はそこで嫌がってね

27	**Word**	[	all	]	@@	
	Morphemes		***			
	Lex. Entries		***			
	Lex. Gloss		***			

Free 笑

28	**Word**	[	YK	]	gaN	sjirja		anuu
	Morphemes		***		gaN	*sji	-rja	anu
	Lex. Entries		***		gaN	*sji$_2$	-rja	anu$_1$
	Lex. Gloss		***		そう	する	COND2	FIL

Free そうしたらあの‥

29.1	**Word**	[	TN	]	Maa	hjippaidu		
	Morphemes		***		Maa	*hjippa	-i	=du
	Lex. Entries		***		Maa_2	*hjippa	$-i_1$	=du
	Lex. Gloss		***		馬	引っ張る	SEQ	FOC

sjuNgina				?
*s	-ju	-N	=gi	=na
*s	$-ju_1$	-N	=gi	$=naa_2$+dial. var.
する	NPST	IND	EXP	YNQ

Free 馬を引っ張ったりするの？

29.2	**Word**	duunaasji		?
	Morphemes	duu	-naa	=sji
	Lex. Entries	duu	-naa	=sji
	Lex. Gloss	REFL	PL	INS

Free 自分たちで

30	**Word**	[	YK	]	ai	ai	naa	Maawa		naa
	Morphemes		***		ai	ai	naa	Maa	=wa	naa
	Lex. Entries		***		ai_1	ai_1	naa_1	Maa_2	=wa	naa_1
	Lex. Gloss		***		いや	いや	もう	馬	TOP	もう

Free いやいや、もう馬はね

31	**Word**	[	TN	]	duduku		sjuN		
	Morphemes		***		duduku		*sji	-ju	-N
	Lex. Entries		***		duduku		$*sji_2$	$-ju_1$	-nu
	Lex. Gloss		***		(家畜が）嫌がる事		する	NPST	ADN

tukiniwa			duduku			sjiribasja			icja
tuki	=ni	=wa	duduku			*sji	-riba	=sja	icja
tuki	$=ni_1$	=wa	duduku			$*sji_2$	-riba	=sja	$icja_1$
時	LOC1	TOP	(家畜が）嫌がる事			する	COND1	EMPH	どう

sjuijosja				
*s	-ju	-i	=jo	=sja
*s	$-ju_1$	$-i_1$	=jo	=sja
する	NPST	SEQ	SFP	EMPH

Free 嫌がる時には‥嫌がったらどうするのよ？

32	**Word**	[	SK	]	duduku		sjuNnja				icja
	Morphemes		***		duduku		*s	-ju	-N	=nja	icja
	Lex. Entries		***		duduku		*s	$-ju_1$	-N	***	$icja_1$
	Lex. Gloss		***		(家畜が）嫌がる事		する	NPST	IND	***	どう

sjuijosja naa ?
*s -ju -i =jo =sja naa
*s -ju$_1$ -i$_2$ =joo$_2$+fr. var. =sja naa$_1$
する NPST Q WHQ EMPH もう

Free 嫌がったら　どうするの　もー

33	**Word**	[YK]	uucji		uucji		naa	duunaamu		
	Morphemes	***	*uucj	-i	*uucj	-i	naa	duu	-naa	=mu
	Lex. Entries	***	*uuk	-i$_1$	*uuk	-i$_1$	naa$_1$	duu	-naa	=mu
	Lex. Gloss	***	起こす	SEQ	起こす	SEQ	もう	REFL	PL	ADD

agumasjanuja
*aguma -sja -nu =ja
*aguma -sa$_1$ -nu =jaa+fr. var.
大変だ ADJ ADN SFP

Free 起こして起こして、もう自分たちも疲れているからね

34	**Word**	[YK]	nuujuNmo				uN	wuzjinu	
	Morphemes	***	*nuu	-ju	-N	=mo	uN	wuzji	=nu
	Lex. Entries	***	*nuu	-ju$_1$	-N	=moo+fr. var.	uN$_1$	wuzji	=nu$_2$
	Lex. Gloss	***	乗る	NPST	IND	EXP	その	砂糖黍	GEN2

waabini
waabi =ni
waabi =ni$_1$
上 LOC1

Free 乗るのさ、その砂糖黍の上に。

35	**Word**	[TN]	aa	wuzjinu		waabini	
	Morphemes	***	aa	wuzji	=nu	waabi	=ni
	Lex. Entries	***	aa$_1$	wuzji	=nu$_2$	waabi	=ni$_1$
	Lex. Gloss	***	ああ	砂糖黍	GEN2	上	LOC1

Free ああ、砂糖黍の上に

36	**Word**	[YK]	iN	iN
	Morphemes	***	iN	iN
	Lex. Entries	***	iN	iN
	Lex. Gloss	***	はい	はい

Free はい、はい

37	**Word**	[YK]	gaNsjinaa		uN	Maa	nidusanu		
	Morphemes	***	gaNsji	=naa	uN	Maa	*nidu	-sa	-nu
	Lex. Entries	***	gaNsji	=naa$_1$	uN$_1$	Maa$_2$	*nidu	-sa$_1$	-nu
	Lex. Gloss	***	そして	SFP	その	馬	可哀想	ADJ	ADN

cjuuwana			miNzjija		
cjuu	＝wa	＝na	*miNzj	-i	＝ja
cjuu$_1$	＝wa	＝naa$_1$+fr. var.	*miNg	-i$_1$	＝jaa+fr. var.
人	TOP	SFP	持つ	SEQ	SFP

Free そしてね、その馬が可哀想な人は（手綱を）持ってね

38	Word	[	YK	]	anu	...	Maatu		hoojoo
	Morphemes		***		anu		Maa	＝tu	hoojoo
	Lex. Entries		***		anu$_1$		Maa$_2$	＝tu$_1$	hoojoo
	Lex. Gloss		***		FIL		馬	COM	一緒に

acjija		
*acj	-i	＝ja
*ak$_1$	-i$_1$	＝jaa+fr. var.
歩く	SEQ	SFP

Free あの··馬と一緒に歩いてね

39	Word	[	TN	]	Maatu		uN	uN
	Morphemes		***		Maa	＝tu	uN	uN
	Lex. Entries		***		Maa$_2$	＝tu$_1$	uN$_2$	uN$_1$
	Lex. Gloss		***		馬	COM	うん	その

Free 馬と··うんうん

40	Word	[	YK	]	na	agumasjanu			cjuuwa		nu	...
	Morphemes		***		naa	*aguma	-sja	-nu	cjuu	＝wa	nu	
	Lex. Entries		***		naa$_1$	*aguma	-sa$_1$	-nu	cjuu$_1$	＝wa	***	
	Lex. Gloss		***		もう	大変だ	ADJ	ADN	人	TOP	***	

nuutijaa		
*nuut	-i	＝jaa
*nuu	-i$_1$	＝jaa
乗る	SEQ	SFP

Free もう疲れた人は乗ってね

41	Word	[	YK	]	gaN	sjirutu				Maawa	
	Morphemes		***		gaN	*s	-ji	-ru	-tu	Maa	＝wa
	Lex. Entries		***		gaN	*s	-ju$_1$+fr. var.	-ru$_2$	-tu	Maa$_2$	＝wa
	Lex. Gloss		***		そう	する	NPST	COND3	COND	馬	TOP

icjuNmo			
*ic	-ju	-N	＝mo
*ik$_2$	-ju$_1$	-N	＝moo+fr. var.
行く	NPST	IND	EXP

Free そうすると、馬は行くのよ。

42	**Word**	[	YK	]	ohoosadu			nii			
	Morphemes		***		*ohoo	-sa	=du	nii			
	Lex. Entries		***		*ohoo	-sa$_1$	=du	nii$_4$			
	Lex. Gloss		***		多い	ADJ	FOC	荷物			

uusuutuwajoo				Maawa		haNsji	atu	
*uus	-u	-tu	=wa	=joo	Maa	=wa	haNsji	atu
*uus$_1$	-ru$_2$	-tu	=wa	=joo$_1$	Maa$_2$	=wa	haNsji	atu$_1$
積む	COND3	COND	TOP	SFP	馬	TOP	こうして	後ろ

micjijo			
*micj	-i	=jo	
*mi$_1$	-i$_1$	=jo	
見る	SEQ	SFP	

Free たくさん荷物を積むとね、馬はこうして後ろをみてね

43	**Word**	[	YK	]	@@	atu	micji		kwaaNdi		
	Morphemes		***			atu	*micj	-i	kwaaN	=di	
	Lex. Entries		***			atu$_1$	*mi$_1$	-i$_1$	***	=di	
	Lex. Gloss		***			後ろ	見る	SEQ	***	QT	

sjuNdoojaa					
*s	-ju	-N	=doo	=jaa	
*s	-ju$_1$	-N	=doo	=jaa	
する	NPST	IND	SFP	SFP	

Free 後ろを見て噛もうとするんだよ。

44	**Word**	[	all	]	@@						
	Morphemes		***								
	Lex. Entries		***								
	Lex. Gloss		***								

Free 笑

45	**Word**	[	TN	]	<	jappa	>	anu	ittoNbedu				
	Morphemes		***			jappa		anu	ittoN	=be		=du	
	Lex. Entries		***			***		anu$_1$	***	=bee+fr. var.		=du	
	Lex. Gloss		***			***		FIL	***	APPR		FOC	

anu	<	tekitoo	>	di	ʔjuunu			muNjaa		
anu		***		=di	*ʔi	-ju	-nu	muN	=jaa	
anu$_1$		***		=di	*ʔi$_1$	-ju$_1$	-nu	muN	=jaa	
FIL		***		QT	言う	NPST	ADN	もの	SFP	

Free やっぱり、1トンくらいが適当ということね。

46	**Word**	[	YK	]	soo	soo	soo	ittoNbedu				...
	Morphemes		***		soo	soo	soo	ittoN	=be	=du		
	Lex. Entries		***		***	***	***	***	=bee+fr. var.	=du		
	Lex. Gloss		***		***	***	***	***	APPR	FOC		

Free そうそうそう、1トンくらいが‥

47	**Word**	[	TN	]	ittoN	gohjaku	beetuka	...
	Morphemes		***		***	gohjaku	=bee =tuka	
	Lex. Entries		***		***	***	=bee =tuka	
	Lex. Gloss		***		***	***	APPR ENU	

Free 1トン500くらいとか‥

48	**Word**	[	YK	]	haNsjanu	marucjinu		nizjuugo	
	Morphemes		***		haNsjanu	marucji	=nu	***	
	Lex. Entries		***		haNsjanu	marucji	$=nu_1$	***	
	Lex. Gloss		***		こんな	一絡げ	NOM2	***	

saNzjuube		aNtuja					
saNzjuu	=be	*a	-N	=tu	=ja		
***	=bee+fr. var.	$*a_1$	-N	$=tu_2$	=jaa+fr. var.		
***	APPR	ある	IND	CSL	SFP		

Free こんな一絡げが２５、３０くらいあるからね

49	**Word**	[	YK	]	icjiicji		judidu		
	Morphemes		***		icji	icji	*jud	-i	=du
	Lex. Entries		***		$icji_1$	$icji_1$	*jum	$-i_1$	=du
	Lex. Gloss		***		いつ	いつ	数える	SEQ	FOC

cjimitaNmo				
*cjimit	-a	-N	=mo	
*cjim	-a	-N	=moo+fr. var.	
積む	PST	IND	EXP	

Free その都度その都度数えて積んでいたんだよ

50	**Word**	[	TN	]	nizjuugokara			saNzjuu	sjirjaa		ittoN
	Morphemes		***		nizjuugo	=kara		***	*sji	-rja	***
	Lex. Entries		***		***	=kara		***	$*sji_2$	-rja	***
	Lex. Gloss		***		***	ABL		***	する	COND2	***

najumudinu					baa	
*na	-ju	-mu	=di	=nu	baa	
$*na_2$	$-ju_1$	-mu	=di	$=nu_2$	baa_2	
なる	NPST	EPI	QT	GEN2	事	

Free 25から30したら1トンになるということ‥

51	**Word**	[	YK	]	gaNsji		koNdowa			cjinanu			bussaN	...
	Morphemes		***		gaNsji		koNdo	=wa		cjina	=nu		bussaN	
	Lex. Entries		***		gaNsji		koNdo	=wa		***	$=nu_2$		***	
	Lex. Gloss		***		そして		今度	TOP		***	GEN2		***	

Free そして今度は知名の物産‥

52	**Word**	[	YK	]	teekokubussaNtani					mucji			ikiba	
	Morphemes		***		teekokubussaN		=Ntani			*mucj	-i		*ik	-iba
	Lex. Entries		***		***		=Ntani			*mut	$-i_1$		$*ik_2$	-riba
	Lex. Gloss		***		***		TERM			持つ	SEQ		行く	COND1

Maanu		baidu		murojuNgijo					ittoNsji	
Maa	=nu	bai	=du	*muru	-ju	-N	=gi	=jo	ittoN	=sji
Maa_1	$=nu_2$	***	=du	*muru	$-ju_1$	-N	=gi	=jo	***	=sji
そこ	GEN2	***	FOC	もらう	NPST	IND	EXP	SFP	***	INS

Free 帝国物産まで持っていけば、そこの2倍貰うんだよ、1トンで。

53	**Word**	[	TN	]	nimaNeNdi			ʔjuunu				baana		?
	Morphemes		***		nimaNeN	=di		*ʔj	-ju	-nu		baa	=naa	
	Lex. Entries		***		***	=di		$*ʔj_2$	$-ju_1$	-nu		baa_2	$=naa_2$	
	Lex. Gloss		***		***	QT		入る	NPST	ADN		事	YNQ	

Free 2万円ということ？

54	**Word**	[	SK	]	niseNeN
	Morphemes		***		***
	Lex. Entries		***		***
	Lex. Gloss		***		***

Free 2千円

55	**Word**	[	TN	]	aa	aa	niseNeN ...
	Morphemes		***		aa	aa	***
	Lex. Entries		***		aa_1	aa_1	***
	Lex. Gloss		***		ああ	ああ	***

Free あーあー　2千円‥

56	**Word**	[	SK	]	niseNeNgaa	
	Morphemes		***		niseNeN	=gaa
	Lex. Entries		***		***	=gaa
	Lex. Gloss		***		***	EMPH

Free 2千円だよ

57 **Word** [all] @@
Morphemes ***
Lex. Entries ***
Lex. Gloss ***

Free 笑

58 **Word** [YK] gaNsji ...
Morphemes *** gaNsji
Lex. Entries *** gaNsji
Lex. Gloss *** そして

Free だから‥

59 **Word** [TN] ata tuusaNtujaa
Morphemes *** ata *tuu -sa -N =tu =jaa
Lex. Entries *** ata *tuu$_1$ -sa$_1$ -N =tu$_2$ =jaa
Lex. Gloss *** その通り 遠い ADJ IND CSL SFP

Free 言うとおり　遠い　からねー

60 **Word** [TN] iN
Morphemes *** iN
Lex. Entries *** iN
Lex. Gloss *** はい

Free うん

61 **Word** [YK] anuu joone ucji izji anu
Morphemes *** anu joone ucji *izj -i anu
Lex. Entries *** anu$_1$ joonee+fr. var. *** *ik$_2$ -i$_1$ anu$_1$
Gloss *** FIL 夕方 *** 行く SEQ FIL

cjidi zjuNbi sjiija
*cjid -i *** *sji -i =ja
*cjim -i$_1$ *** *sji$_2$ -i$_1$ =jaa+fr. var.
積む SEQ *** する SEQ SFP

Free あのー夕方のうちに行って、積んで準備してね

62 **Word** [YK] gaNsji naacjanu asawa naa
Morphemes *** gaNsji naacja =nu asa =wa naa
Lex. Entries *** gaNsji naacja =nu$_2$ asa$_1$ =wa naa$_1$
Lex. Gloss *** そして 明日 GEN2 朝 TOP もう

Free そして翌日の朝はもう

63	**Word**	[YK]	juunu	ʔjeerutu		anu	...
	Morphemes	***	juu =nu	*ʔjee	-ru	-tu	anu
	Lex. Entries	***	juu_2 =nu_1	*ʔjee	$-ru_2$	-tu	anu_1
	Lex. Gloss	***	夜 NOM2	明ける	COND3	COND	FIL

sjikodi		icjuNmo				mukooNtani	
*sjikod	-i	*ic	-ju	-N	=mo	mukoo	=Ntani
*sjikom	$-i_1$	$*ik_2$	$-ju_1$	-N	=moo+fr. var.	$mukoo_2$	=Ntani
仕込む	SEQ	行く	NPST	IND	EXP	向こう	TERM

Free 夜が明けると、支度して行くんだ。向こうまで

64	**Word**	[YK]	ʔjaa	juu	izjanu		muNjaa	
	Morphemes	***	ʔjaa	juu	*izj	-a -nu	muN	=jaa
	Lex. Entries	***	ʔjaa	juu_1	$*ik_2$	-a -nu	muN	=jaa
	Lex. Gloss	***	ねえ	よく	行く	PST ADN	もの	SFP

gaNsjisjaa
gaNsji =sja
gaNsji =sja
そして EMPH

Free ねえ、よく行ったものさ。そして‥

65	**Word**	[TN]	gaN	sjirutusjaa			kaisjatu	
	Morphemes	***	gaN	*sji	-ru	-tu =sja	kaisja	=tu
	Lex. Entries	***	gaN	$*sji_2$	$-ru_2$	-tu =sja	***	***
	Lex. Gloss	***	そう	する	COND3	COND EMPH	***	***

sjiiwajaa				anuu	maa	wadomainu		kaisjani		anuu
*sji	-i	=wa	=jaa	anu	Maa	wadomai	=nu	kaisja	=ni	anu
$*sji_2$	$-i_1$	=wa	=jaa	anu_1	Maa_1	***	$=nu_2$	***	$=ni_1$	anu_1
する	SEQ	TOP	SFP	FIL	そこ	***	GEN2	***	LOC1	FIL

Free そうするとさ、会社としてはさー、和泊の会社にあの‥

66	**Word**	[TN]	cjuNginaa					wuzjinu	
	Morphemes	***	*c	-ju	-N	=gi	=naa	wuzji	=nu
	Lex. Entries	***	$*ku_2$	$-ju_1$	-N	=gi	$=naa_1$	wuzji	$=nu_1$
	Lex. Gloss	***	くる	NPST	IND	EXP	SFP	砂糖黍	NOM2

mukooNtani		ikjaajaa		
mukoo	=Ntani	*ik	-ja	=jaa
$mukoo_2$	=Ntani	$*ik_2$	-rja	=jaa
向こう	TERM	行く	COND2	SFP

Free 来るべき砂糖黍が、向こうまで行ったなら

67	Word	[	TN	]	Maaniti		anuu	sjori	sjuunu		
	Morphemes		***		Maa	＝niti	anu	sjori	*sji	-ju	＝nu
	Lex. Entries		***		Maa$_1$	＝niti	anu$_1$	***	*sji$_2$	-ju$_1$	＝nu$_2$
	Lex. Gloss		***		そこ	LOC2	FIL	***	する	NPST	GEN2

wuzjinu		sukunasa		najuN			gisaN		
wuzji	＝nu	*sukuna	-sa	*na	-ju	-N	*gii	-sa	-N
wuzji	＝nu$_1$	*sukuna	-sa$_1$	*na$_2$	-ju$_1$	-N	*gi	-sa$_1$	-N
砂糖黍	NOM2	少ない	ADJ	なる	NPST	IND	EVD	ADJ	IND

Free そこで処理する砂糖黍が少なくなるでしょ？

68	Word	[	TN	]	gaN	jasjiga		gjakuni		koNdowa	
	Morphemes		***		gaN	*ja	-sjiga	gjaku	＝ni	koNdo	＝wa
	Lex. Entries		***		gaN	*ja$_4$	-sjiga	***	＝ni$_1$	koNdo	＝wa
	Lex. Gloss		***		そう	COP	CNC	***	LOC1	今度	TOP

cjinanu		cjuNcjamu		
cjina	＝nu	cju	-Ncja	＝mu
cjina	＝nu$_2$	cjuu$_1$	-Ncja	＝mu
知名	GEN2	人	-PL	ADD

Free そうだけど逆に今度は知名の人たちも、

69	Word	[	TN	]	naa	anuu	wadomaitani		mucji	
	Morphemes		***		naa	anu	wadomai	＝tani	*mucj	-i
	Lex. Entries		***		naa$_1$	anu$_1$	***	＝Ntani+fr. var.	*mut	-i$_1$
	Lex. Gloss		***		もう	FIL	***	TERM	持つ	SEQ

kurjaa		niseNeN	najumudi				icji	
*ku	-rja	***	*na	-ju	-mu	＝di	*icj	-i
*ku$_1$	-rja	***	*na$_2$	-ju$_2$	-mu	＝di	*ʔj$_1$	-i$_1$
来る	COND2	***	なる	POT	EPI	QT	言う	SEQ

Free 和泊まで持って来れば2千円になると言って

70	Word	[	TN	]	gaN	kookaN	sjuutikaja				?
	Morphemes		***		gaN	kookaN	*sji	-ut	-i	＝kaja	
	Lex. Entries		***		gaN	***	*sji$_2$	-u	-i$_1$	＝kaja	
	Lex. Gloss		***		そう	***	する	CONT	SEQ	Q	

Free そう交換していたかな？

71	Word	[	YK	]	Maawa		icja	sjutaNkaja					?
	Morphemes		***		Maa	＝wa	icja	*sji	-ut	-a	-N	＝kaja	
	Lex. Entries		***		Maa$_1$	＝wa	icja$_1$	*sji$_2$	-u	-a	-N	＝kaja	
	Lex. Gloss		***		そこ	TOP	どう	する	CONT	PST	IND	Q	

Free そこはどうしていたんだろうな

72	**Word**	[	YK	]	gaN	sjuNtuni				cjikaranu		anu
	Morphemes		***		gaN	*s	-ju	-N	=tuni	cjikara	=nu	anu
	Lex. Entries		***		gaN	*s	$-ju_1$	-N	=tuni	cjikara	$=nu_1$	anu_1
	Lex. Gloss		***		そう	する	NPST	IND	CSL	力	NOM2	FIL

MaaNcjadu			cjinacji		icjuru			
Maa	-Ncja	=du	cjina	=cji	*ic	-ju	-ru	
Maa_2	-Ncja	=du	cjina	$=cji_2$	$*ik_2$	$-ju_1$	$-ru_1$	
馬	-PL	FOC	知名	ALL	行く	NPST	MSB	

Free それだから力のある馬達が知名へ行く

73	**Word**	[	YK	]	<	fucuu	>	nu	MaagwaNcjawa			
	Morphemes		***			fucuu		=nu	Maa	-gwa	-Ncja	=wa
	Lex. Entries		***			***		$=nu_2$	Maa_2	-gwa	-Ncja	=wa
	Lex. Gloss		***			***		GEN2	馬	DIM	-PL	TOP

naa	agattoocji		ikasaja			
naa	agatoo	=cji	*ik	-a	-sa	=ja
naa_6	***	$=cji_2$	$*ik_2$	-ran	$-sa_2$	=jaa+fr. var.
FIL	***	ALL	行く	NEG	MRT	SFP

Free 普通の　（並みの馬）達は　あんなに遠い所には　行かないね

74	**Word**	[	all	]	@@
	Morphemes		***		
	Lex. Entries		***		
	Lex. Gloss		***		

Free 笑

75	**Word**	[	TN	]	aa	tokubecunu		anu	...
	Morphemes		***		aa	tokubecu	=nu	anu	
	Lex. Entries		***		aa_1	***	$=nu_2$	anu_1	
	Lex. Gloss		***		ああ	***	GEN2	FIL	

Free あー　特別の　あの‥

76	**Word**	[	YK	]	<	soo	soo	soo	>
	Morphemes		***			soo	soo	soo	
	Lex. Entries		***			***	***	***	
	Lex. Gloss		***			***	***	***	

Free そうそうそう

77	**Word**	[	SK	]	cjikara	...	cjikara	anu		Maajaa	
	Morphemes		***		cjikara		cjikara	*a	-nu	Maa	=jaa
	Lex. Entries		***		cjikara		cjikara	$*a_1$	-nu	Maa_2	=jaa
	Lex. Gloss		***		力		力	ある	ADN	馬	SFP

Free カ‥力がある馬よ

78	**Word**	[	SK	]	<	fuuN	nacukasjiine	>
	Morphemes		***			fuuN	nacukasjiine	
	Lex. Entries		***			***	***	
	Lex. Gloss		***			***	***	

Free ふーん　懐かしいね

79	**Word**	[	YK	]	uN	gaNsjanu	sjasjiNnu		anu	
	Morphemes		***		uN	gaNsjanu	sjasjiN	=nu	*a	-nu
	Lex. Entries		***		uN_2	gaNsjanu	***	$=nu_1$	$*a_1$	-nu
	Lex. Gloss		***		うん	そんな	***	NOM2	ある	ADN

muNwa

muN　=wa

muN　=wa

もの　TOP

Free うん　そんな　写真が　あるものだね（よくあったね）

80	**Word**	[	SK	]	ʔjaa
	Morphemes		***		ʔjaa
	Lex. Entries		***		ʔjaa
	Lex. Gloss		***		ねえ

Free ねえ

岬神社の話-1

1	**Word**	hoogeNsji		hanasaaja				
	Morphemes	hoogeN	=sji	*hanas	-raa	=ja		
	Lex. Entries	hoogeN	=sji	*hanas	-raa	=jaa+fr. var.		
	Lex. Gloss	方言	INS	話す	INT	SFP		

Free 方言で話そうね

2	**Word**	<	eeto	meezji	zjidaini	ano	kunigamino	>
	Morphemes		eeto	***	***	anu	***	
	Lex. Entries		***	***	***	***	***	
	Lex. Gloss		***	***	***	***	***	

Free ええと、明治時代の、あの国頭の

3	**Word**	misakizjiNzjadinu			munu	ati	
	Morphemes	misakizjiNzja	=di	=nu	munu	*at	-i
	Lex. Entries	misakizjiNzja	=di	=nu_2	munu	*a_1	-i_1
	Lex. Gloss	岬神社	QT	GEN2	もの	ある	SEQ

Free 岬神社というものがあって

4	**Word**	mukoowa		ano	umino		kamisama	
	Morphemes	mukoo	=wa	anu	umi	=nu	kamisama	
	Lex. Entries	$mukoo_2$	=wa	anu_1	umi	=nu_2	kamisama	
	Lex. Gloss	向こう	TOP	FIL	海	GEN2	神様	

Free そこは海の神様

5	**Word**	<	anoo	aNzeNwo	negau	>	kamisamadinu			gutusji
	Morphemes		anu	***	***		kamisama	=di	=nu	gutusji
	Lex. Entries		***	***	***		kamisama	=di	=nu_2	gutusji
	Lex. Gloss		***	***	***		神様	QT	GEN2	ように

Free 安全を願う神様といって

6	**Word**	<	icjibaN	saisjowa		ano	>
	Morphemes		icjibaN	saisjo	=wa	anu	
	Lex. Entries		***	***	***	***	
	Lex. Gloss		***	***	***	***	

Free 一番最初は

7	**Word**	ufuni		cjizjinu		takasaN		
	Morphemes	ufu	=ni	cjizji	=nu	*taka	-sa	-N
	Lex. Entries	ufu	$=ni_1$	cjizji	$=nu_1$	*taka	$-sa_1$	-nu
	Lex. Gloss	ウフ（地名）	LOC1	高い所	NOM2	高い	ADJ	ADN

tokoroni	atasjiga
tokoro =ni	*at -a -sjiga
tokoro $=ni_1$	$*a_1$ -a -sjiga
所 LOC1	ある PST CNC

Free ウフの高いところにあったけれど

8	**Word**	<	arewa		anoo	mukasjino	>	ujahoNcjanu			izaisji
	Morphemes		are	=wa	anu	***		ujaho	-Ncja	=nu	***
	Lex. Entries		***	***	anu_1	***		ujaho	-Ncja	$=nu_1$	***
	Lex. Gloss		***	***	FIL	***		先祖	-PL	NOM2	***

acjariba
acja -riba
*** -riba
*** COND1

Free あれは昔の先祖たちが（??）

9	**Word**	kurumadinu			umini		anu	
	Morphemes	kuruma	=di	=nu	umi	=ni	*a	-nu
	Lex. Entries	$kuruma_1$	=di	$=nu_2$	umi	$=ni_1$	$*a_1$	-nu
	Lex. Gloss	クルマ（地名）	QT	GEN2	海	LOC1	ある	ADN

Free クルマという海にある

10	**Word**	hjikaahjika	isjinu		ati	
	Morphemes	hjikahjika	isji	=nu	*at	-i
	Lex. Entries	$hjikahjika_2$	isji	$=nu_1$	*at	$-i_1$
	Lex. Gloss	ピカピカ	石	NOM2	知る	SEQ

Free ピカピカ光る石があって

11	**Word**	gaN	sjirja		aru	cjuunu		furiwa	
	Morphemes	gaN	*sji	-rja	aru	cjuu	=nu	furi	=wa
	Lex. Entries	gaN	$*sji_2$	-rja	***	$cjuu_1$	$=nu_1$	$furi_2$	=wa
	Lex. Gloss	そう	する	COND2	***	人	NOM2	これ	TOP

kamiisjidu	aNtuni
kamiisji =du	*a -N =tuni
*** =du	$*a_2$ -N =Ntuni
*** FOC	COP IND CSL

Free そうしたらある人が「これは神石だから

12	**Word**	uriwa		atenaNko			
	Morphemes	uri	=wa	*at	-i	*n	-raNko
	Lex. Entries	uri	=wa	*at	$-i_1$	$*n_1$	-raNko
	Lex. Gloss	それ	TOP	知る	SEQ	ない	NEG.SEQ

Free それは知らなくて

13	**Word**	gaNsji	koNdowa		uN	cjuunu		naamu	
	Morphemes	gaNsji	koNdo	=wa	uN	cjuu	=nu	naa	=mu
	Lex. Entries	gaNsji	koNdo	=wa	uN_1	$cjuu_1$	$=nu_2$	naa_2	=mu
	Lex. Gloss	そして	今度	TOP	その	人	GEN2	名前	ADD

asjiga

*a -sjiga

$*a_1$ -sjiga

ある CNC

Free その人の名前もあるけど

14	**Word**	naNneN	maedu		aasjiga	
	Morphemes	naNneN	mae	=du	*a	-sjiga
	Lex. Entries	***	mee_1+fr. var.	=du	$*a_2$	-sjiga
	Lex. Gloss	***	前	FOC	COP	CNC

Free 何年前かだったけど

15	**Word**	gaNsji	koNdowa		anoo
	Morphemes	gaNsji	koNdo	=wa	anu
	Lex. Entries	gaNsji	koNdo	=wa	anu_1
	Lex. Gloss	そして	今度	TOP	FIL

Free そうして今度はあの

16	**Word**	agu	soocji		kicji	
	Morphemes	agu	*soot	-i	*kicj	-i
	Lex. Entries	agu	*soo	$-i_1$	*kicj	$-i_1$
	Lex. Gloss	友達	連れる	SEQ	来る	SEQ

Free 友達を連れて来て

17	**Word**	gaNsji	uN	<	isjiwo	>	tuti	
	Morphemes	gaNsji	uN		***		*tut	-i
	Lex. Entries	gaNsji	uN_1		***		*tu	$-i_1$
	Lex. Gloss	そして	その		***		取る	SEQ

Free その石を取って

18	**Word**	gaNsji	uri	<	wo	>	koNdowana			kaNri
	Morphemes	gaNsji	uri		wo		koNdo	=wa	=naa	kaNri
	Lex. Entries	gaNsji	uri		***		koNdo	=wa	=naa$_1$	***
	Lex. Gloss	そして	それ		***		今度	TOP	SFP	***

sjitinu	gutusji
sjitinu	gutusji
***	gutusji
***	ように

Free そしてそれを今度は、管理して

19	**Word**	macuraadinu				kutusji	
	Morphemes	*macu	-aa	=di	=nu	kutu	=sji
	Lex. Entries	*macu	-raa	=di	=nu$_2$	kutu	=sji
	Lex. Gloss	祀る	INT	QT	GEN2	事	INS

Free 祀ろうということになって

20	**Word**	gaNsji	kunigaminu		icjibaN	takasanu		
	Morphemes	gaNsji	kunigami	=nu	icjibaN	*taka	-sa	-nu
	Lex. Entries	gaNsji	kunigami	=nu$_2$	icjibaN	*taka	-sa$_1$	-nu
	Lex. Gloss	そして	国頭集落	GEN2	一番	高い	ADJ	ADN

jamani		anu	tumusjii
jama	=ni	anu	*tumusj -i
jama$_1$	=ni$_1$	anu$_1$	*tumus -i$_1$
山	LOC1	FIL	供える SEQ

Free そうして国頭の一番高い山にお供えして

21	**Word**	uNni		umiki		sjii		ugadiba	
	Morphemes	uN	=ni	u-	miki	*sji	-i	*ugad	-iba
	Lex. Entries	uri	=ni$_1$	u-	miki	*sji$_2$	-i$_1$	*ugam	-riba
	Lex. Gloss	それ	LOC1	POL	神酒	する	SEQ	拝む	COND1

Free それにお神酒をして拝んだら

22	**Word**	erabuzjuunu			cjuNcjaanu			<	wadaini	>
	Morphemes	erabu	zjuu	=nu	cjuu	-Ncja	=nu		wadai	=ni
	Lex. Entries	erabu	***	=nu$_2$	cjuu$_1$	-Ncja	=nu$_2$		***	=ni$_1$
	Lex. Gloss	沖永良部島	***	GEN2	人	-PL	GEN2		***	LOC1

izjiti	
*izjit	-i
*izji	-i$_1$
出る	SEQ

Free 沖永良部島中の人々の話題に出て

23	**Word**	naa	urjawana			uturusjanu			kamisamadicji	
	Morphemes	naa	uri	=wa	=naa	*uturu	-sja	-nu	kamisama	=dicji
	Lex. Entries	naa_1	uri	=wa	$=naa_1$	*uturu	$-sa_1$	-nu	kamisama	=dicji
	Lex. Gloss	もう	それ	TOP	SFP	大変	ADJ	ADN	神様	QT

kicji		ugadi	
*kicj	-i	*ugad	-i
*kicj	$-i_1$	*ugam	$-i_1$
来る	SEQ	拝む	SEQ

Free もうそれはね、大変な神様だと言って、来て拝んで

24	**Word**	gaNsji	ariba		Aoodinu				uturusjanu		
	Morphemes	gaNsji	*a	-riba	A	oo	=di	=nu	*uturu	-sja	-nu
	Lex. Entries	gaNsji	$*a_2$	-riba	***	oo_2	=di	$=nu_2$	*uturu	$-sa_1$	-nu
	Lex. Gloss	そして	COP	COND1	***	翁	QT	GEN2	大変	ADJ	ADN

cjuunu		uti	
cjuu	=nu	*ut	-i
$cjuu_1$	$=nu_2$	*u	$-i_1$
人	GEN2	いる	SEQ

Free そうしたら、Aという大変な人がいて

25	**Word**	uriga		uriwa		icja	sjimu		
	Morphemes	uri	=ga	uri	=wa	icja	*sji	-i	=mu
	Lex. Entries	uri	$=ga_1$	uri	=wa	$icja_1$	$*sji_2$	$-i_1$	=mu
	Lex. Gloss	それ	NOM1	それ	TOP	どう	する	SEQ	ADD

Free それが、それはどうしても

26	**Word**	misakizjiNzja	mukasjiwa		sacjibarudi		ʔjuunu		
	Morphemes	misakizjiNzja	mukasji	=wa	sacjibaru	=di	*ʔj	-ju	-nu
	Lex. Entries	misakizjiNzja	mukasji	=wa	***	=di	$*ʔj_1$	$-ju_1$	-nu
	Lex. Gloss	岬神社	昔	TOP	***	QT	言う	NPST	ADN

muN	atii	
muN	*at	-i
muN	$*a_1$	$-i_1$
人	ある	SEQ

Free 岬神社には、昔は、サキバルという人がいて

27	**Word**	urja		sacjibaru	jamanu		kamisamanu		gutusjii
	Morphemes	uri	=wa	***	jama	=nu	kamisama	=nu	gutusji
	Lex. Entries	uri	=wa	***	$jama_1$	$=nu_2$	***	$=nu_2$	gutusji
	Lex. Gloss	それ	TOP	***	山	GEN2	***	GEN2	ように

Free それはサキバル山の神様のように

28

Word	<	uriwo		>	koNdowa		ano	bisjinu		namanu		niicji	
Morphemes		uri	=wo		koNdo	=wa	anu	bisji	=nu	nama	=nu	nii	=cji
Lex. Entries		uri	***		koNdo	=wa	anu$_1$	bisji	=nu$_1$	nama	=nu$_2$	nii$_1$	=cji$_2$
Lex. Gloss		それ	***		今度	TOP	FIL	ビシ（地名）	NOM2	今	GEN2	ところ	ALL

Free それ（石）を今度はビシ（地名）の今のところへ

29

Word	anu	tumu	sjiraadinu				gutusji
Morphemes	anu	tumu	*sji	-raa	=di	=nu	gutusji
Lex. Entries	anu$_1$	tumu	*sji$_2$	-raa	=di	=nu$_2$	gutusji
Lex. Gloss	FIL	弔い	する	INT	QT	GEN2	ように

Free お供えしようということになって

30

Word	gaNsji	namanu		tukuru	arazji		
Morphemes	gaNsji	nama	=nu	tukuru	*a	-razj	-i
Lex. Entries	gaNsji	nama	=nu$_2$	tukuru	*a$_2$	-ran	-i$_1$
Lex. Gloss	そして	今	GEN2	所	COP	NEG	SEQ

Free 今のところではなくて

31

Word	Maanu		nama	hjiroba	naasjiga			Maani		sji		atasjiga		
Morphemes	Maa	=nu	nama	***	*n	-ran	-sjiga	Maa	=ni	*sji	-i	*at	-a	-sjiga
Lex. Entries	Maa$_1$	=nu$_1$	nama	***	*n$_1$	-ran	-sjiga	Maa$_1$	=ni$_1$	*sji$_2$	-i$_1$	*a$_1$	-a	-sjiga
Lex. Gloss	そこ	NOM2	今	***	ない	NEG	CNC	そこ	LOC1	する	SEQ	ある	PST	CNC

Free そこが今は広場になったけど、そこにあったけど

32

Word	anuu	Maa	<	wo	>	koNdowa		<	cjoono		>
Morphemes	anu	Maa		=wo		koNdo	=wa		cjoo	=nu	
Lex. Entries	anu$_1$	Maa$_1$		=wo		koNdo	=wa		***	***	
Lex. Gloss	FIL	そこ		ACC		今度	TOP		***	***	

Free そこを今度は町の

33

Word	<	cjuusjazjootoka	hjiroba	>	sjumutu			
Morphemes		***	***		*sji	-ju	-mu	=tu
Lex. Entries		***	***		*sji$_2$	-ju$_1$	-mu	=tu$_1$
Lex. Gloss		***	***		する	NPST	EPI	（～と）なる

sjii
*sji -i
*sji$_2$ -i$_1$
する SEQ

Free 駐車場とか、広場にしようとして

34	**Word**	uriwo		koNdowa		okinahanu		anuu	nuu	unu
	Morphemes	uri	=wo	koNdo	=wa	okinaha	=nu	anu	nuu	unu
	Lex. Entries	uri	=wo	koNdo	=wa	okinaha	=nu$_2$	anu$_1$	nuu	uN$_1$
	Lex. Gloss	それ	ACC	今度	TOP	沖縄	GEN2	FIL	何	その

cjuNcja nuu jattakaja
cjuu -Ncja nuu *jat -a =kaja
cjuu$_1$ -Ncja nuu *ja$_4$ -a =kaja
人 -PL 何 COP PST Q

Free それを今度は、あの沖縄の人達は何だったっけ

35	**Word**	unu	cjuunu		anu	unu	<	kamisamawo		iteN
	Morphemes	unu	cjuu	=nu	anu	unu		kamisama	=wo	iteN
	Lex. Entries	uN$_1$	cjuu$_1$	=nu$_1$	anu$_1$	uN$_1$		***	***	***
	Lex. Gloss	その	人	NOM2	FIL	その		***	***	***

surutameni >
***
***
***

Free その人が、神様を移転するために

36	**Word**	<	saNzjuumaN	>	uriwo		ano	sjii	
	Morphemes		***		uri	=wo	anu	*sji	-i
	Lex. Entries		***		uri	=wo	anu$_1$	*sji$_2$	-i$_1$
	Lex. Gloss		***		それ	ACC	FIL	する	SEQ

kurijunu gutusji
*kuri -ju -nu gutusji
*kuri -ju$_2$ -nu gutusji
くれる POT ADN ように

Free 三十万、それ（移転）をしてもらうために　1653

37	**Word**	na	uriwanaa		
	Morphemes	naa	uri	=wa	=naa
	Lex. Entries	naa$_1$	uri	=wa	=naa$_1$
	Lex. Gloss	もう	それ	TOP	SFP

Free もうそれはね

38	**Word**	<	ano	sjoowani		haitte	>	icjiga	
	Morphemes		anu	sjoowa	=ni	haitte		icji	=ga
	Lex. Entries		anu_1	***	$=ni_1$	***		$icji_1$	$=ga_5$
	Lex. Gloss		FIL	***	LOC1	***		いつ	FOC

ataNkaja

*a -a -N =kaja

$*a_2$ -a -N =kaja

COP PST IND Q

Free あの、昭和に入ったいつかだったかな

39	**Word**	gaNsji	uriwo		saNzjuumaNsji	
	Morphemes	gaNsji	uri	=wo	saNzjuumaN	=sji
	Lex. Entries	gaNsji	uri	=wo	***	=sji
	Lex. Gloss	そして	それ	ACC	***	INS

Free そうしてそれを、三十万で

40	**Word**	namanu		tukuruni		burokku	cjizjii		cjurasa	
	Morphemes	nama	=nu	tukuru	=ni	***	*cjizj	-i	*cjura	-sa
	Lex. Entries	nama	$=nu_2$	tukuru	$=ni_1$	***	$*cjig_2$	$-i_1$	*cjura	$-sa_1$
	Lex. Gloss	今	GEN2	所	LOC1	***	積む	SEQ	きれい	ADJ

sjii

*sji -i

$*sji_2$ $-i_1$

する SEQ

Free 今のところに、ブロックを積んで、きれいにして

41	**Word**	gaNsji	nama	ano	uriwo		koNdowanaa		
	Morphemes	gaNsji	nama	anu	uri	=wo	koNdo	=wa	=naa
	Lex. Entries	gaNsji	nama	anu_1	uri	=wo	koNdo	=wa	$=naa_1$
	Lex. Gloss	そして	今	FIL	それ	ACC	今度	TOP	SFP

waga

wa =ga

wa $=ga_1$

1SG NOM1

Free そうして今は、それを今度はね、私が

42	**Word**	Maanu		<	kaNrisja	nattutti	>
	Morphemes	Maa	=nu		kaNrisja	***	
	Lex. Entries	Maa_1	$=nu_2$		***	***	
	Lex. Gloss	そこ	GEN2		***	***	

Free そこの管理者になっていて

43	**Word**	gaNjado		satocjuNcjanu			
	Morphemes	gaNja	=du	sato	cjuu	-Ncja	=nu
	Lex. Entries	***	=du	sato	$cjuu_1$	-Ncja	$=nu_1$
	Lex. Gloss	***	FOC	他集落	人	-PL	NOM2

Free （？？）他集落の人達が

44	**Word**	uN	isjibutukiwa			nuujodicji		
	Morphemes	uN	isji	+	futuki =wa	nuu	=joo	=dicji
	Lex. Entries	uN_1	isji	***	futuki =wa	nuu	$=joo_2$	=dicji
	Lex. Gloss	その	石	***	仏 TOP	何	WHQ	QT

cjicjunu			muN	jati	
*cjic	-ju	-nu	muN	*jat	-i
$*cjik_1$	$-ju_1$	-nu	muN	$*ja_4$	$-i_1$
聞く	NPST	ADN	もの	COP	SEQ

Free その石仏は何かと聞くので

45	**Word**	aa	tarumu		wakarasajaa			
	Morphemes	aa	taru	=mu	*waka	-ran	-sa	=jaa
	Lex. Entries	***	taru	=mu	$*waka_1$	-ran	$-sa_2$	=jaa
	Lex. Gloss	***	誰	ADD	分かる	NEG	MRT	SFP

Free ああ、誰も分からないよ

46	**Word**	uriwo		<	naNtoka	>	sjiranu			gotosji
	Morphemes	uri	=wo		naNtoka		*sji	-raa	=nu	gutusji
	Lex. Entries	uri	=wo		***		$*sji_2$	-raa	$=nu_2$	gutusji
	Lex. Gloss	それ	ACC		***		する	INT	GEN2	ように

koNdowa		Maani		anu	takasanu			isji	cukuti	
koNdo	=wa	Maa	=ni	anu	*taka	-sa	-nu	isji	*cukut	-i
koNdo	=wa	Maa_1	$=ni_1$	anu_1	*taka	$-sa_1$	-nu	isji	*cuku	$-i_1$
今度	TOP	そこ	LOC1	FIL	高い	ADJ	ADN	石	作る	SEQ

uNni		ano
uN	=ni	anu
uri	$=ni_1$	anu_1
それ	LOC1	FIL

Free それを何とかしようということで、今度はそこに高い石を作って、そこに

47	**Word**	kurumaama	sjoorjuu	kaNdakenu		kotosji	hacjii	
	Morphemes	***	***	kaNdake	=nu	kutusji	*hacj	-i
	Lex. Entries	***	***	***	$=nu_2$	***	*hak	$-i_1$
	Lex. Gloss	***	***	***	GEN2	***	書く	SEQ

Free 「クルマショウリュウカンダケ（岬神社の名前）」と書いて

48	**Word**	haNsji	Maani		anu	<	jurai	>	hacjii	
	Morphemes	haNsji	Maa	=ni	anu		jurai		*hacj	-i
	Lex. Entries	haNsji	Maa_1	$=ni_1$	anu_1		***		*hak	$-i_1$
	Lex. Gloss	こうして	そこ	LOC1	FIL		***		書く	SEQ

sjii		arutu		
*sji	-i	*a	-ru	-tu
$*sji_2$	$-i_1$	$*a_2$	$-ru_1$	-tu
する	SEQ	COP	MSB	COND

Free こうして、そこに由来を書いて、そうすると

49	**Word**	naa	sato	cjuNcjanu			kicjii	
	Morphemes	naa	sato	cjuu	-Ncja	=nu	*kicj	-i
	Lex. Entries	naa_1	sato	$cjuu_1$	-Ncja	$=nu_1$	*kicj	$-i_1$
	Lex. Gloss	もう	他集落	人	-PL	NOM2	来る	SEQ

Free もう他集落の人達が来て

50	**Word**	naa	anu	isji	kamisamadi		Juunu		
	Morphemes	naa	anu	isji	kamisama	=di	*i	-ju	-nu
	Lex. Entries	naa_1	anu_1	isji	kamisama	=di	$*ʔj_2$	$-ju_1$	-nu
	Lex. Gloss	もう	FIL	石	神様	QT	入る	NPST	ADN

uturusjanu			neucji	mucjusajaadi					icji		gaNsjii
*uturu	-sja	-nu	neucji	*mucj	-u	-sa	=jaa	=di	*icj	-i	gaNsji
*uturu	$-sa_1$	-nu	neucji	*mut	-u	$-sa_2$	=jaa	=di	$*ʔi_1$	$-i_1$	gaNsji
大変	ADJ	ADN	値打ち	持つ	CONT	MRT	SFP	QT	言う	SEQ	そして

wana	maiasana
wana	maiasana
wa	***
1SG	***

Free もう石神様というのは、大変な値打ちを持つんだねと言って、私は毎朝

51	**Word**	ee	maiasa	araN			anuu	gaNzjicu	naa
	Morphemes	ee	maiasa	*a	-ran	-N	anu	***	naa
	Lex. Entries	***	***	$*a_2$	-ran	-N	anu_1	***	naa_1
	Lex. Gloss	***	***	COP	NEG	IND	FIL	***	もう

Free いや、毎朝じゃない　元日ね

52	**Word**	saNzjuuneNbee		najusjiga			ano	wawo	asawa	
	Morphemes	saNzjuuneN	=bee	*na	-ju	-sjiga	anu	wawo	asa	=wa
	Lex. Entries	***	=bee	$*na_2$	$-ju_1$	-sjiga	anu_1	***	asa_1	=wa
	Lex. Gloss	***	APPR	なる	NPST	CNC	FIL	***	朝	TOP

Free 三十年くらいになるけど、朝は

53	**Word**	gaNzjicunu		asawa		naa	zjuunizjini	
	Morphemes	gaNzjicu	=nu	asa	=wa	naa	zjuunizji	=ni
	Lex. Entries	***	$=nu_2$	asa_1	=wa	naa_1	***	$=ni_1$
	Lex. Gloss	***	GEN2	朝	TOP	もう	***	LOC1

nariba

*na -riba

$*na_2$ -riba

なる COND1

Free 元日の朝は、もう十二時になると

54	**Word**	izji		maizji	muuru	deNki	cjikiti		maa	tooto
	Morphemes	*izj	-i	***	muuru	***	*cjikit	-i	maa	tooto
	Lex. Entries	$*ik_2$	$-i_1$	***	muuru	***	*cjiki	$-i_1$	***	tooto
	Lex. Gloss	行く	SEQ	***	全部	***	つける	SEQ	***	お祈り

<	suruto	>	maa	cjinacjoo	<	hotoNdo	>	no	cjuNcjano		
	suruto		maa	***		***		=nu	cjuu	-Ncja	=nu
	***		***	***		***		$=nu_2$	$cjuu_1$	-Ncja	$=nu_1$
	***		***	***		***		GEN2	人	-PL	NOM2

Free 行って、全部電気つけてお祈りすると、知名町のほとんどの人達が

55	**Word**	ano	gwaNzjicuno		naa	zjuunizjiniwa		sugu
	Morphemes	anu	gwaNzjicu	=nu	naa	zjuunizjini	=wa	***
	Lex. Entries	anu_1	gwaNzjicu	$=nu_2$	naa_1	***	=wa	***
	Lex. Gloss	FIL	元日	GEN2	もう	***	TOP	***

cjuumudjajaa					Maaniti		muuru	omiki		kuriti	
*c	-ju	-mu	=dja	=jaa	Maa	=niti	muuru	u-	miki	*kurit	-i
*c	$-ju_1$	-mu	$=djaa_1$	=jaa	Maa_1	=niti	muuru	u-	miki	*kuri	$-i_1$
来る	NPST	EPI	SFP	SFP	そこ	LOC2	皆	POL	神酒	くれる	SEQ

Free 元日の十二時には、すぐに人が来るんだよ。そこで全部お神酒を振る舞って

56	**Word**	gaNsji	aru	tukiwa		ano	joneN	maedoo		wana
	Morphemes	gaNsji	aru	tuki	=wa	anu	joneN	mae	=doo	wana
	Lex. Entries	gaNsji	***	tuki	=wa	anu_1	***	***	=doo	wa
	Lex. Gloss	そして	***	時	TOP	FIL	***	***	SFP	1SG

asa	izjutariba			ee	zjuunizjini		izjuutariba		
asa	*iz	-juta	-riba	ee	zjuunizji	=ni	*iz	-juta	-riba
asa_1	$*ik_2$	-juta	-riba	***	***	$=ni_1$	$*ik_2$	-juta	-riba
朝	行く	PST2	COND1	***	***	LOC1	行く	PST2	COND1

Free そしてある時は、四年前に私は朝に行ったら、十二時に行ったら

57	**Word**	cjuraasanu			wunagunu			kwaanu			kicji		
	Morphemes	*cjura	-sa	-nu	wunagu	=nu		kwaa	=nu		*kicj	-i	
	Lex. Entries	*cjura	-sa_1	-nu	wunagu	=nu_2		$kwaa_1$	=nu_1		*kicj	-i_1	
	Lex. Gloss	きれい	ADJ	ADN	女	GEN2		子供	NOM2		来る	SEQ	

Free きれいな女の子が来て

58	**Word**	wana	wunagunu		kwaanu	
	Morphemes	wana	wunagu	=nu	kwaa	=nu
	Lex. Entries	wa	wunagu	=nu_2	$kwaa_1$	=nu_1
	Lex. Gloss	1SG	女	GEN2	子供	NOM2

Free 私は女の子が

59	**Word**	aNmaidu		cjurasa		mjaatuni				<	mitorete	>		
	Morphemes	aNmai	=du	*cjura	-sa	*mj	-a	=tuni			***			
	Lex. Entries	***	=du	*cjura	-sa_1	*mj	-ra_2	=tuni			***			
	Lex. Gloss	***	FOC	きれい	ADJ	見る	POT	CSL			***			

sjimoti
*sjimot -i
*sjimo -i_1
しまう SEQ

Free あまりに綺麗に見えてみとれてしまって

60	**Word**	are	hoNtonu			cjuudarookaja					kamisama			
	Morphemes	are	hoNto	=nu		cjuu	=daru	=kaja			kamisama			
	Lex. Entries	***	***	=nu_2		cjuu$_1$	=daru	=kaja			kamisama			
	Lex. Gloss	***	***	GEN2		人	EPI	Q			神様			

anaNkajaadi					Muuti									
*a	-a	-N	=kaja	=di	*Muut	-i								
*a_2	-ran	-N	=kaja	=di	*Muu$_3$	-i_1								
COP	NEG	IND	Q	QT	思う	SEQ								

Free あれは本当の人だろうか、神様じゃないかなと思って

61	**Word**	gaNsji	unu	kwaacji
	Morphemes	gaNsji	unu	kwaa =cji
	Lex. Entries	gaNsji	uN$_1$	$kwaa_1$ =cji$_2$
	Lex. Gloss	そして	その	子 ALL

Free その子に

62	**Word**	omodetoogozaimasu	sjii		sjarutu					
	Morphemes	***	*sji	-i	*sji	-a	-ru	=tu		
	Lex. Entries	***	*sji$_2$	-i_1	*sji$_2$	-a	-ru_2	=tu_1		
	Lex. Gloss	***	する	SEQ	する	PST	COND3	COM		

Free おめでとうございますと言ったら

63	**Word**	uN	kwaamu		aisacu	<	modotte	>	kicjija	
	Morphemes	uN	kwaa	=mu	***		***		*kicj	-i
	Lex. Entries	uN_1	$kwaa_1$	=mu	***		***		*kicj	$-i_1$
	Lex. Gloss	その	子供	ADD	***		***		来る	SEQ

Free その子も挨拶をしてきてね

64	**Word**	ai	urja		attaimeenu		cjuu	jasaadi		
	Morphemes	ai	uri	=wa	attaimee	=nu	cjuu	*ja	-sa	=di
	Lex. Entries	ai_1	uri	=wa	attaimee	$=nu_2$	$cjuu_1$	$*ja_4$	$-sa_2$	=di
	Lex. Gloss	いや	それ	TOP	普通	GEN2	人	COP	MRT	QT

Muuti

*Muut -i

$*Muu_3$ $-i_1$

思う SEQ

Free いや、これは普通の人だと思って

65	**Word**	gaNsji	muNgatai	sjii		nuudisjaa		gaNsji
	Morphemes	gaNsji	muNgatai	*sji	-i	nuudi	=sja	gaNsji
	Lex. Entries	gaNsji	muNgatai	$*sji_2$	$-i_1$	nuudi	=sja	gaNsji
	Lex. Gloss	そして	話	する	SEQ	なぜ	EMPH	そんなに

heesa

*hee -sa

$*hee_1$ $-sa_1$

早い ADJ

Free そして話をして、なんでこんな早く

66	**Word**	ura	jamatunu		kwaa	jasjiga	
	Morphemes	ura	jamatu	=nu	kwaa	*ja	-sjiga
	Lex. Entries	ura	jamatu	$=nu_2$	$kwaa_1$	$*ja_4$	-sjiga
	Lex. Gloss	2SG	大和（本土）	GEN2	子	COP	CNC

Free あんたは大和の子供だけど

67	**Word**	nuudi	gaNsji	asa	maacji		kicjiijoo		
	Morphemes	nuudi	gaNsji	asa	maa	=cji	*kicj	-i	=joo
	Lex. Entries	nuudi	gaNsji	asa_1	maa_1	$=cji_2$	*kicj	$-i_1$	$=joo_2$
	Lex. Gloss	なぜ	そんなに	朝	ここ	ALL	来る	SEQ	WHQ

icjarjaa

*?j -a -nja

$*?j_1$ -a -rja

言う PST COND2

Free なんで朝ここに来たの？と言ったら

68	**Word**	anu	wacja	amaga		kunigaminu	
	Morphemes	anu	wacja	ama	=ga	kunigami	=nu
	Lex. Entries	anu_1	wacja	ama_1	$=ga_2$	kunigami	$=nu_2$
	Lex. Gloss	FIL	1PL	母親	GEN1	国頭集落	GEN2

Free 「私達の母親が『国頭の

69	**Word**	icjibaN	misakinu		hooniwa		
	Morphemes	icjibaN	misaki	=nu	hoo	=ni	=wa
	Lex. Entries	icjibaN	misaki	$=nu_2$	hoo_1	$=ni_1$	=wa
	Lex. Gloss	一番	岬	GEN2	方	LOC1	TOP

Free 一番岬の方には

70	**Word**	anu	kamisamanu		aNtuni			Maadaki	
	Morphemes	anu	kamisama	=nu	*a	-N	=Ntuni	Maa	=daki
	Lex. Entries	anu_1	***	$=nu_1$	$*a_2$	-N	=Ntuni	Maa_1	=daki
	Lex. Gloss	FIL	***	NOM2	COP	IND	CSL	そこ	LIM

ugadi		fuudicji	
*ugad	-i	fuu	=dicji
$*ugam$	$-i_1$	fuu_3	=dicji
拝む	SEQ	来る.IMP	QT

Free 神社があるから、そこだけ拝んで来いと言ったので

71	**Word**	kicjamudi				icji		arigataijaadi		
	Morphemes	*kicj	-a	-mu	=di	*icj	-i	arigatai	=jaa	=di
	Lex. Entries	*kicj	-a	-mu	=di	$*?i_1$	$-i_1$	***	=jaa	=di
	Lex. Gloss	来る	PST	EPI	QT	言う	SEQ	***	SFP	QT

Muuti	
*Muut	-i
$*Muu_3$	$-i_1$
思う	SEQ

Free 来たと言って、ありがたいと思って

72	**Word**	uN	tukini		uN	kwaanu		zjuusjotu	
	Morphemes	uN	tuki	=ni	uN	kwaa	=nu	zjuusjo	=tu
	Lex. Entries	uN_1	tuki	$=ni_1$	uN_1	$kwaa_1$	$=nu_2$	***	$=tu_1$
	Lex. Gloss	その	時	LOC1	その	子供	GEN2	***	COM

naabemu			cjicjiba		jukasjiga	
naa	=be	=mu	*cjicj	-iba	jukwa	-sjiga
naa_3	=bee+fr. var.	=mu	$*cjik_1$	-riba	jukwa	-sjiga
中	APPR	ADD	聞く	COND1	良い	CNC

Free その時に、その子の住所と名前も聞けば良かったけど

73	**Word**	aNmai	cjurasanu			muN	jaNtuni	
	Morphemes	aNmai	*cjura	-sa	-nu	muN	*ja	=Ntuni
	Lex. Entries	aNmai	*cjura	-sa_1	-nu	muN	*ja_2	=Ntuni
	Lex. Gloss	あんまり	きれい	ADJ	ADN	もの	易い	CSL

miifuriti					sjimooti	
*m	-i	+	*furit	-i	*sjimot	-i
*mi_1	-i_3	***	*$furi_1$	-i_1	*sjimo	-i_1
見る	INF1	***	惚れる	SEQ	しまう	SEQ

Free あんまり綺麗なものだから見惚れてしまって

74	**Word**	nama	kookai	sjusjigajoo				gassaafudu	
	Morphemes	nama	kookai	*sji	-u	-sjiga	=joo	gassaa	=fudu
	Lex. Entries	nama	***	*sji_2	-u	-sjiga	=joo_1	gassaa	=fudu
	Lex. Gloss	今	***	する	CONT	CNC	SFP	それだけ	ほど

neucjinu		aN		kamisama
neucji	=nu	*a	-N	kamisama
neucji	=nu_1	*a_2	-nu	kamisama
値打ち	NOM2	COP	ADN	神様

Free 今は後悔をしているけど、それ程までに値打ちのある神様

75	**Word**	zjuugonicjinu		kamisamaccji	
	Morphemes	zjuugonicji	=nu	kamisama	=cji
	Lex. Entries	zjuugonicji	=nu_2	kamisama	=cji_3
	Lex. Gloss	十五日	GEN2	神様	QUOT

Free 15日の神様って

76	**Word**	naa	urjaa		kamisamanu		juraiwa		anu
	Morphemes	naa	uri	=wa	kamisama	=nu	jurai	=wa	anu
	Lex. Entries	naa_1	uri	=wa	kamisama	=nu_2	***	=wa	anu_1
	Lex. Gloss	もう	それ	TOP	神様	GEN2	***	TOP	FIL

hanacjanu			toori
*hanasj	-a	-nu	toori
*hanas	-a	-nu	***
話す	PST	ADN	***

Free もうそれは、神様の由来は、話した通り

77	**Word**	namani		<	cjaNtu	jurai	>	mu	hacji	
	Morphemes	nama	=ni		cjaNtu	jurai		=mu	*hacj	-i
	Lex. Entries	nama	=ni_1		***	***		=mu	*hak	-i_1
	Lex. Gloss	今	LOC1		***	***		ADD	書く	SEQ

aNtuni			uri	miiba		wakajusjiga		
*a	-N	=Ntuni	uri	*mi	-iba	*waka	-ju	-sjiga
*a_1	-N	=Ntuni	uri	*mi_1	-riba	*$waka_1$	-ju_1	-sjiga
ある	IND	CSL	それ	見る	COND1	分かる	NPST	CNC

Free 今にちゃんと由来も書いてあるから、それを見ればわかるけど

米と麦と粟の姉妹

1	**Word**	<	mukaasji	mukasji	aru	tokoroni		>	
	Morphemes		mukasji	mukasji	aru	tokoro	=ni		
	Lex. Entries		***	***	***	***	***		
	Lex. Gloss		***	***	***	***	***		

Free 昔々あるところに

2	**Word**	ano	seekacumo		muuru	<	juufukude	>
	Morphemes	anu	seekacu	=mu	muuru		***	
	Lex. Entries	anu_1	seekacu	=mu	muuru		***	
	Lex. Gloss	FIL	生活	ADD	皆		***	

kuracjutatuwa

*kuracj	-u	-a	-tu	=wa
*kuras	-u	-a	-tu	=wa
暮らす	CONT	PST	COND	TOP

Free 生活も全部裕福で暮らしていたら

3	**Word**	ano	kuranu		cukuti		ati	
	Morphemes	anu	kura	=nu	*cukut	-i	*at	-i
	Lex. Entries	anu_1	$kura_2$	$=nu_1$	*cuku	$-i_1$	$*a_1$	$-i_1$
	Lex. Gloss	FIL	蔵	NOM2	作る	SEQ	ある	SEQ

Free あの、蔵が作ってあって

4	**Word**	<	sono	iewane	kuraga	atte	>
	Morphemes		sono	iewane	kuraga	atte	
	Lex. Entries		***	***	***	***	
	Lex. Gloss		***	***	***	***	

Free その家はね、蔵があって

5	**Word**	<	soreni	komejara	anoo	mugi	awa	zeeNbu	cume	koNde	>
	Morphemes		***	***	anu	mugi	awa	***	***	***	
	Lex. Entries		***	***	anu_1	***	***	***	***	***	
	Lex. Gloss		***	***	FIL	***	***	***	***	***	

Free それに米やら麦、粟、全部詰め込んで

6	**Word**	<	sorede	moo	nani	fuzjijuu	>	naaNko	
	Morphemes		sorede	moo	nani	fuzjijuu		*na	-raNko
	Lex. Entries		***	***	***	***		*na$_4$	-raNko
	Lex. Gloss		***	***	***	***		ない	NEG.SEQ

kuracjutamudi

*kuracj	-u	-a	-mu	=di
*kuras	-u	-a	-mu	=di
暮らす	CONT	PST	EPI	QT

Free それでもう何不自由なくて暮らしていたんだって。

7	**Word**	gaN	sjatuwa				ano	nuNgura	sji	
	Morphemes	gaN	*sji	-a	-tu	=wa	anu	nuNgura	*sji	-i
	Lex. Entries	gaN	*sji$_2$	-a	-tu	=wa	anu$_1$	nuNgura	*sji$_2$	-i$_1$
	Lex. Gloss	そう	する	PST	COND	TOP	FIL	FIL	する	SEQ

naa	haNsji	kuracji
naa	haNsji	*kuracj -i
naa$_1$	haNsji	*kuras -i$_1$
もう	こんなに	暮らす SEQ

Free そうしたら、もうこうして暮らして

8	**Word**	haNsji	sjutatuwa				
	Morphemes	haNsji	*sji	-u	-a	-tu	=wa
	Lex. Entries	haNsji	*sji$_2$	-u	-a	-tu	=wa
	Lex. Gloss	こんなに	する	CONT	PST	COND	TOP

Free こんなにしていたら

9	**Word**	<	komega	icjibaN	saki	>	kajaadicji		<	kiitara
	Morphemes		komega	icjibaN	saki		=kajaa	=dicji		kiitara
	Lex. Entries		***	***	***		=kaja+fr. var.	=dicji		***
	Lex. Gloss		***	***	***		Q	QT		***

>

Free 米が一番先かな？って来たら

10	**Word**	ʔjaa	<	icjibaN	saisjowa	>	muzjinu		muzjidu	
	Morphemes	ʔjaa		icjibaN	saisjowa		muzji	=nu	muzji	=du
	Lex. Entries	ʔjaa		***	***		muzji$_1$	=nu$_1$	muzji$_1$	=du
	Lex. Gloss	いや		***	***		麦	NOM2	麦	FOC

< neesaN >

***

***

***

Free いや、一番最初は麦の…麦が姉さん

11	**Word**	<	sono	cugiga	awaga	zjizjoga	awa	>
	Morphemes		sono	cugiga	awaga	zjizjoga	awa	
	Lex. Entries		***	***	***	***	***	
	Lex. Gloss		***	***	***	***	***	

Free その次が…粟が次女、粟

12	**Word**	<	saNbaNmeni	>	Maaritanu			muNga	
	Morphemes		***		*Maari	-a	-nu	muN	=ga
	Lex. Entries		***		*Maari	-a	-nu	muN	$=ga_1$
	Lex. Gloss		***		産まれる	PST	ADN	もの	NOM1

fumidojaadicji

fumi	=do	=jaa	=dicji
fumi	=doo+fr. var.	=jaa	=dicji
米	SFP	SFP	QT

Free 生まれたものが、米だよと言って

13	**Word**	fumi	fuminu		dekiti		gaNsji	sjii	
	Morphemes	fumi	fumi	=nu	*dekit	-i	gaNsji	*sji	-i
	Lex. Entries	fumi	fumi	$=nu_1$	*deki	$-i_1$	gaNsji	$*sji_2$	$-i_1$
	Lex. Gloss	米	米	NOM2	出来る	SEQ	そして	する	SEQ

sjatana			<	hoNtoni	hoosaku	>	sji	
*sji	-aa	=naa		hoNtoni	hoosaku		*sji	-i
$*sji_2$	-raa	$=naa_1$		***	***		$*sji_2$	$-i_1$
する	***	SFP		***	***		する	SEQ

Free 米が出来て、そんなにしたら、本当に豊作で

14	**Word**	haNsji	turati			haNsji	<	cume	koNde	>
	Morphemes	haNsji	*tu	-rat	-i	haNsji		***	***	
	Lex. Entries	haNsji	*tu	$-ra_2$	$-i_1$	haNsji		***	***	
	Lex. Gloss	こんなに	取る	POT	SEQ	こうして		***	***	

sjii		sjatuwa			
*sji	-i	*sji	-a	-tu	=wa
$*sji_2$	$-i_1$	$*sji_2$	-a	-tu	=wa
する	SEQ	する	PST	COND	TOP

Free こんなに取れて、こんなに詰め込んで、そうしたら

15	**Word**	cjuinu		kwaanu		haNsji	kamiN		
	Morphemes	cjui	=nu	kwaa	=nu	haNsji	*kam	-i	-N
	Lex. Entries	cjui	$=nu_2$	$kwaa_1$	$=nu_1$	haNsji	*kam	$-ju_1$	-nu
	Lex. Gloss	1人	GEN2	子	NOM2	こうして	食べる	NPST	ADN

tukini
tuki =ni
tuki =ni$_1$
時 LOC1

Free 一人の子供がこうして食べる時に

16	**Word**	<	moo	sjitani	>	naa	utusji		cjaacji	
	Morphemes		moo	sjitani		=naa	*utusj	-i	*cjaacj	-i
	Lex. Entries		***	***		=naa$_1$	*utusj	-i$_1$	*cjaas	-i$_1$
	Lex. Gloss		***	***		SFP	落とす	SEQ	消す	SEQ

Free もう下にね、落とし散らかして

17	**Word**	<	moo	zeNbu	otosjite	fukuzacuni	tabete	>
	Morphemes		moo	zeNbu	otosjite	fukuzacuni	tabete	
	Lex. Entries		***	***	***	***	***	
	Lex. Gloss		***	***	***	***	***	

Free もう全部落として、複雑に食べて

18	**Word**	gaNsji	<	moo	>	naa	baa	naa	baa
	Morphemes	gaNsji		moo		naa	baa	naa	baa
	Lex. Entries	gaNsji		***		naa$_1$	baa$_1$	naa$_1$	baa$_1$
	Lex. Gloss	そして		***		もう	嫌だ	もう	嫌だ

Free そして「もう嫌だもう嫌だ」

19	**Word**	gaNsji	uticjaatatuwa		
	Morphemes	gaNsji	*uticjaata	-tu	=wa
	Lex. Entries	gaNsji	***	-tu	=wa
	Lex. Gloss	そして	***	COND	TOP

Free そしてXX

20	**Word**	anujoo		waraNcja		anu	nuNgura	gaN
	Morphemes	anu	=joo	*wara	-Ncja	anu	nuNgura	gaN
	Lex. Entries	anu$_1$	=joo$_1$	*wara	-Ncja	anu$_1$	nuNgura	gaN
	Lex. Gloss	FIL	SFP	子供	-PL	FIL	FIL	そう

sjirutuwa
*sji -ju -ru -tu =wa
*sji$_2$ -ju$_1$ -ru$_2$ -tu =wa
する NPST COND3 COND TOP

Free あのね、子供たち。あの…何やらすると

21	**Word**	fumiganasjinimu					buuri	najuNtuni			
	Morphemes	fumi	+	kanasji	=ni	=mu	buuri	*na	-ju	-N	=tuni
	Lex. Entries	fumi	***	kanasji	$=ni_1$	=mu	buuri	$*na_2$	$-ju_1$	-N	=tuni
	Lex. Gloss	米	***	神様	LOC1	ADD	無礼	なる	NPST	IND	CSL

nuNgura
nuNgura
nuNgura
FIL

Free お米の神様にも無礼になるから

22	**Word**	muzjimu		<	awa	>	mu	ucjani		
	Morphemes	muzji	=mu		awa		=mu	ucja	=ni	
	Lex. Entries	$muzji_1$	=mu		***		=mu	ucja	$=ni_2$	
	Lex. Gloss	麦	ADD		***		ADD	2PL	DAT	

kamajunu			<	tame	>	du
*kam	-a	-ju	-nu	***		=du
*kam	$-ra_2$	$-ju_1$	-nu	***		=du
食べる	POT	NPST	ADN	***		FOC

Free 麦も粟もあんた達に食べられるために

23	**Word**	haNsji	cjukkee		cjukkee		fusji	fusji
	Morphemes	haNsji	*cju	=kkee	*cju	=kkee	fusji	fusji
	Lex. Entries	haNsji	$*cju_2$	=kkee	$*cju_2$	=kkee	$fusji_1$	$fusji_1$
	Lex. Gloss	こうして	1	回	1	回	節	節

Free こうして1回1回、節々

24	**Word**	uudo	nati		icjuNdoojaadicji					
	Morphemes	uudo	*nat	-i	*ic	-ju	-N	=doo	=jaa	=dicji
	Lex. Entries	uuduu+fr. var.	$*na_2$	$-i_1$	*ic	$-ju_1$	-N	=doo	=jaa	=dicji
	Lex. Gloss	大きい	なる	SEQ	いく	NPST	IND	SFP	SFP	QT

Free 大きくなっていくんだよと言って

25	**Word**	a	gaNkajaadicji				unu	waaraNcjawa		
	Morphemes	a	gaN	=kajaa		=dicji	unu	*wara	-Ncja	=wa
	Lex. Entries	***	gaN	=kaja+fr. var.		=dicji	uN_1	*wara	-Ncja	=wa
	Lex. Gloss	***	そう	Q		QT	その	子供	-PL	TOP

gaN	sjii		sjatuwa				
gaN	*sji	-i	*sji	-a	-tu	=wa	
gaN	$*sji_2$	$-i_1$	$*sji_2$	-a	-tu	=wa	
そう	する	SEQ	する	PST	COND	TOP	

Free 「あ、そうかな？」とその子供たちは言って

26	**Word**	<	ippai	>	kurani		<	ippai	>	fumimu	
	Morphemes		***		kura	=ni		***		fumi	=mu
	Lex. Entries		***		$kura_2$	$=ni_1$		***		fumi	=mu
	Lex. Gloss		***		蔵	LOC1		***		米	ADD

muzjimu	<	awa	>	mu
muzji	=mu	awa		=mu
$muzji_1$	=mu	***		=mu
麦	ADD	***		ADD

Free 「いっぱい蔵に、いっぱい米も麦も粟も

27	**Word**	muuru	gaaba	amazejoo				amaadicji	
	Morphemes	muuru	gaba	*a	-maz	-e	=joo	ama	=dicji
	Lex. Entries	muuru	gaba	$*a_1$	-maz	$-e_1$	$=joo_1$	ama_1	=dicji
	Lex. Gloss	皆	たくさん	ある	CONF	YNQ	SFP	母親	QT

Free 全部、たくさんあるでしょ？お母さん」と言って

28	**Word**	gaN	sjii		sjatu			ee
	Morphemes	gaN	*sji	-i	*sji	-a	-tu	ee
	Lex. Entries	gaN	$*sji_2$	$-i_1$	$*sji_2$	-a	-tu	ee
	Lex. Gloss	そう	する	SEQ	する	PST	COND	えっと

gaNnaadicji		
gaN	=naa	=dicji
gaN	$=naa_1$	=dicji
そう	SFP	QT

Free そうしたら「ええ、そうか」と言って

29	**Word**	gaNsjii	sjutatuwa					muN	nukuriba	
	Morphemes	gaNsji	*sji	-u	-a	-tu	=wa	muN	*nuku	-riba
	Lex. Entries	gaNsji	$*sji_2$	-u	$-ra_1$	-tu	=wa	muN	$*nuku_2$	-riba
	Lex. Gloss	そして	する	CONT	PASS	COND	TOP	もの	残る	COND1

hanagiti		gaNsji	naa
*fanagit	-i	gaNsji	naa
*fanagi	$-i_1$	gaNsji	naa_1
捨てる	SEQ	そして	もう

Free そうしたら、物が残れば捨てて、そうしてもう

30	**Word**	duunaanu			watanu		ippai	nariba		naa
	Morphemes	duu	-naa	=nu	wata	=nu	***	*na	-riba	naa
	Lex. Entries	duu	-naa	$=nu_2$	wata	$=nu_1$	***	$*na_2$	-riba	naa_1
	Lex. Gloss	REFL	PL	GEN2	腹	NOM2	***	なる	COND1	もう

hanagi-ti		
*hanagit	-i	
*fanagi+fr. var.	-i_1	
捨てる	SEQ	

Free 自分達のお腹がいっぱいになったら、もう捨てて

31	**Word**	gaNsjanu	kurasji	sjutatuwa				
	Morphemes	gaNsjanu	kurasji	*sji	-u	-a	-tu	=wa
	Lex. Entries	gaNsjanu	kurasji	*sji_2	-u	-a	-tu	=wa
	Lex. Gloss	そんな	暮らし	する	CONT	PST	COND	TOP

Free そんな暮らしをしていたら

32	**Word**	koNdowa	kuranu	naakara		
	Morphemes	koNdo =wa	kura =nu	naa =kara		
	Lex. Entries	koNdo =wa	$kura_2$ =nu_2	naa_3 =kara		
	Lex. Gloss	今度 TOP	蔵 GEN2	中 ABL		

Free 今度は蔵の中から

33	**Word**	junaanu		nizjibe		natatuwa			
	Morphemes	junaa	=nu	nizji	=be	*nat	-a	-tu	=wa
	Lex. Entries	juunaa+fr. var.	=nu_2	***	=bee+fr. var.	*na_2	-a	-tu	=wa
	Lex. Gloss	夜中	GEN2	***	APPR	なる	PST	COND	TOP

Free 夜中の二時くらいになったら

34	**Word**	guzjaguzjaguzjaguzjaadicji		hanasjinu		cjikati		
	Morphemes	guzjaguzja	guzjaguzja =dicji	hanasji	=nu	*cjik	-at	-i
	Lex. Entries	guzjaguzja	guzjaguzja =dicji	hanasji	=nu_1	*$cjik_1$	-ra_2	-i_1
	Lex. Gloss	ONM	ONM QT	話	NOM2	聞く	POT	SEQ

Free 「グジャグジャグジャグジャ」と話が聞こえて

35	**Word**	haN	sjita	nuukajaadicji			naa	maanu	
	Morphemes	haN	***	nuu =kajaa		=dicji	naa	Maa	=nu
	Lex. Entries	haN	***	nuu =kaja+fr. var.		=dicji	naa_1	Maa_1	=nu_2
	Lex. Gloss	こう	***	何 Q		QT	もう	そこ	GEN2

amawanaa			uiti		
ama	=wa	=naa	*uit	-i	
ama_1	=wa	=naa_1	*ui_1	-i_1	
母親	TOP	SFP	起きる	SEQ	

Free そうしたら「何かな？」と、もうそこの母親はね、起きて

36	**Word**	gaNsji	kicjiga			haNsji	nuzucji	
	Morphemes	gaNsji	*kicj	-i	=ga	haNsji	*nuzucj	-i
	Lex. Entries	gaNsji	*kicj	$-i_1$	$=ga_3$	haNsji	*nuzuk	$-i_1$
	Lex. Gloss	そして	来る	SEQ	CNC	こうして	覗く	SEQ

micjatuwa

*micj	-a	-tu	=wa
$*mi_1$	-a	-tu	=wa
見る	PST	COND	TOP

Free そうして来たけど、こんな風に、覗いてみたら

37	**Word**	guzjaguzjaguzjaguzjaa	<	moo	>	anu	tooraanu		moo
	Morphemes	***		moo		anu	toora	=nu	moo
	Lex. Entries	***		***		anu_1	toora	$=nu_1$	***
	Lex. Gloss	***		***		FIL	俵	NOM2	***

muni iicjuNgi

muni	*icj	-u	-N	=gi
muni	$*?i_1$	-u	-N	=gi
言葉	言う	CONT	IND	EXP

Free グジャグジャグジャグジャと、もう俵が言葉を言っているんだよ。

38	**Word**	haN	sjatuwa				nuudi	agaNsjanu		
	Morphemes	haN	*sji	-a	-tu	=wa	nuudi	agaN	-sja	-nu
	Lex. Entries	haN	$*sji_2$	-a	-tu	=wa	nuudi	$agaN_1$	$-sa_1$	-nu
	Lex. Gloss	こう	する	PST	COND	TOP	なぜ	あんな	ADJ	ADN

fuinu cjikarukajaadi

fui	=nu	*cjik	-a	-ru	=kaja	=di
fui	$=nu_1$	$*cjik_1$	$-ra_2$	$-ru_1$	=kaja	=di
声	NOM2	聞く	POT	MSB	Q	QT

Free そうしたら「なんであんな声が聞こえるかな？」と

39	**Word**	Muuti		kuranu		sjaanu		juucjinu		
	Morphemes	*Muut	-i	kura	=nu	sjaa	=nu	*juu	=cji	=nu
	Lex. Entries	$*Muu_3$	$-i_1$	$kura_2$	$=nu_1$	sjaa	$=nu_2$	*juu	$=cji_1$	$=nu_2$
	Lex. Gloss	思う	SEQ	蔵	NOM2	下	GEN2	4	個	GEN2

hasjirani mimi cjikiti

hasjira	=ni	mimi	*cjikit	-i
***	$=ni_1$	mimi	*cjiki	$-i_1$
***	LOC1	耳	つける	SEQ

Free 思って、蔵の4つの柱に耳を付けて

40	**Word**	joo	sjuti			haNsji	cjicjamudi			
	Morphemes	joo	*sji	-ut	-i	haNsji	*cjicj	-a	-mu	=di
	Lex. Entries	joo_2	$*sji_2$	-u	$-i_1$	haNsji	$*cjik_1$	-a	-mu	=di
	Lex. Gloss	じっと	する	CONT	SEQ	こうして	聞く	PST	EPI	QT

cjicjatuwa

*cjicj	-a	-tu	=wa
$*cjik_1$	-a	-tu	=wa
聞く	PST	COND	TOP

Free 静かにして、こうして聞いていたんだって。聞いていたら

41	**Word**	koNdowa		muzjinu		icjibaN	uinu	
	Morphemes	koNdo	=wa	muzji	=nu	icjibaN	ui	=nu
	Lex. Entries	koNdo	=wa	$muzji_1$	$=nu_2$	***	ui_2	$=nu_2$
	Lex. Gloss	今度	TOP	麦	GEN2	***	上	GEN2

neNneNga

neNneN	=ga
neNneN	$=ga_1$
姉	NOM1

Free 今度は、麦の一番上の姉さんが

42	**Word**	wanajoo		naa	maanu		jaaniwa		
	Morphemes	wana	=joo	naa	Maa	=nu	jaa	=ni	=wa
	Lex. Entries	wa	$=joo_1$	naa_1	Maa_1	$=nu_2$	jaa_1	$=ni_1$	=wa
	Lex. Gloss	1SG	SFP	もう	そこ	GEN2	家	LOC1	TOP

baadjaadicji

baa	=djaa	=dicji
baa_1	$=djaa_1$	=dicji
嫌だ	SFP	QT

Free 私はね、もうそこの家に（いるの）は嫌だと言って

43	**Word**	<	issjookeNmee	>	wana	fuditi		haNsji	muuruni	
	Morphemes		***		wana	*fudit	-i	haNsji	muuru	=ni
	Lex. Entries		***		wa	*fudi	$-i_1$	haNsji	muuru	$=ni_1$
	Lex. Gloss		***		1SG	育つ	SEQ	こうして	全部	LOC1

kamajusjiga

*kam	-a	-ju	-sjiga
*kam	$-ra_2$	$-ju_1$	-sjiga
食べる	POT	NPST	CNC

Free 私は一生懸命育って、こんな風に皆に食べられるけど

44	**Word**	wacjawanaa			nuunu		gutusji	hjiicjarasji		
	Morphemes	wacja	=wa	=naa	nuu	=nu	gutusji	hji-	*cjarasj	-i
	Lex. Entries	wacja	=wa	=naa_1	nuu	=nu_2	gutusji	hji-	***	-i_1
	Lex. Gloss	1PL	TOP	SFP	何	GEN2	ように	ひっ	***	SEQ

Free 私たちはね、何のようにひっ散らかして

45	**Word**	muuru	fanagiratidu				uNdoojaadicji				
	Morphemes	muuru	*fanagi	-rat	-i	=du	*u	-N	=doo	=jaa	=dicji
	Lex. Entries	muuru	*fanagi	-ra_1	-i_1	=du	*u	-N	=doo	=jaa	=dicji
	Lex. Gloss	全部	捨てる	PASS	SEQ	FOC	いる	IND	SFP	SFP	QT

Free 全部捨てられているんだよ、と言って

46	**Word**	haNsji	sjatuwasjaa				
	Morphemes	haNsji	*sji	-a	-tu	=wa	=sja
	Lex. Entries	haNsji	*sji_2	-a	-tu	=wa	=sja
	Lex. Gloss	こうして	する	PST	COND	TOP	EMPH

wacjamukajaadicji

wacja	=mu	=kaja	=dicji
wacja	=mu	=kaja	=dicji
1PL	ADD	Q	QT

Free そうしたらさ、「私たちもかな？」って

47	**Word**	ucjamu		jiinu		muNdoodicji			gaNsji
	Morphemes	ucja	=mu	jii	=nu	muN	=doo	=dicji	gaNsji
	Lex. Entries	ucja	=mu	jii_1	=nu_2	muN	=doo	=dicji	gaNsji
	Lex. Gloss	2PL	ADD	同じ	GEN2	もの	SFP	QT	そして

sjatuwa				naa
*sji	-a	-tu	=wa	naa
*sji_2	-a	-tu	=wa	naa_1
する	PST	COND	TOP	もう

Free 「あんた達も同じだよ」と言って、そしたらもう

48	**Word**	gaN	sjiriba		wanamu		wanamu	
	Morphemes	gaN	*sji	-riba	wana	=mu	wana	=mu
	Lex. Entries	gaN	*sji_2	-riba	wa	=mu	wa	=mu
	Lex. Gloss	そう	する	COND1	1SG	ADD	1SG	ADD

fajumuudicji

*fa		-ju	-mu	=dicji
*fa		-ju_1	-mu	=dicji
ついて行く		NPST	EPI	QT

Free そうしたら、私もついて行くと言って

49	**Word**	sjii		sjatuwa				gaN
	Morphemes	*sji	-i	*sji	-a	-tu	=wa	gaN
	Lex. Entries	*sji$_2$	-i$_1$	*sji$_2$	-a	-tu	=wa	gaN
	Lex. Gloss	する	SEQ	する	PST	COND	TOP	そう

sjatuwa				koNdowana			icjibaN	sjaanu	
*sji	-a	-tu	=wa	koNdo	=wa	=naa	icjibaN	sjaa	=nu
*sji$_2$	-ra$_1$	-tu	=wa	koNdo	=wa	=naa$_1$	***	sjaa	=nu$_2$
する	PASS	COND	TOP	今度	TOP	SFP	***	下	GEN2

Free そうしたら、そうしたら今度はね、一番下の

50	**Word**	naa	nibaNmeni		Maaritanu			anu
	Morphemes	naa	nibaNme	=ni	*Maari	-a	-nu	anu
	Lex. Entries	naa$_1$	***	=ni$_1$	*Maari	-a	-nu	anu$_1$
	Lex. Gloss	もう	***	LOC1	産まれる	PST	ADN	FIL

Free もう二番目に産まれた

51	**Word**	nuNgura	sji		<	awa	>	mu	sjimanu	
	Morphemes	nuNgura	*sji	-i		awa		=mu	sjima	=nu
	Lex. Entries	nuNgura	*sji$_2$	-i$_1$		***		=mu	sjima	=nu$_2$
	Lex. Gloss	FIL	する	SEQ		***		ADD	島	GEN2

munisji		oodidu			Juusjiga		
muni	=sji	oo	=di	=du	*ʔi	-ju	-sjiga
muni	=sji	oo$_3$	=di	=du	*ʔi$_1$	-ju$_1$	-sjiga
言葉	INS	粟	QT	FOC	言う	NPST	CNC

Free なんだっけ、粟も島の言葉では「オー」と言うけど

52	**Word**	oomu		neNneN	wanamu		fajumuudi			
	Morphemes	oo	=mu	neNneN	wana	=mu	*fa	-ju	-mu	=di
	Lex. Entries	oo$_3$	=mu	neNneN	wa	=mu	*fa	-ju$_1$	-mu	=di
	Lex. Gloss	粟	ADD	姉	1SG	ADD	ついて行く	NPST	EPI	QT

Free 粟も、「姉さん、私もついて行く」と

53	**Word**	sjii		sjatuwa				gaNnaadicji		
	Morphemes	*sji	-i	*sji	-a	-tu	=wa	gaN	=naa	=dicji
	Lex. Entries	*sji$_2$	-i$_1$	*sji$_2$	-a	-tu	=wa	gaN	=naa$_2$	=dicji
	Lex. Gloss	する	SEQ	する	PST	COND	TOP	そう	YNQ	QT

gaNnjaa		uramu	
gaN	=naa	ura	=mu
gaN	=naa$_2$	ura	=mu
そう	YNQ	2SG	ADD

Free そうしたら「そうか？」と言って「そうしたらあんたも

54	**Word**	ikaagaadicji				udakacji			haNsji
	Morphemes	*ik	-aa	=gaa	=dicji	uda	=ka	=cji	haNsji
	Lex. Entries	*ik$_2$	-raa	=gaa	=dicji	uda	=ka	=cji$_2$	haNsji
	Lex. Gloss	行く	INT	EMPH	QT	どこ	Q	ALL	こうして

acji		ikiba	
*acj	-i	*ik	-iba
*ak$_1$	-i$_1$	*ik$_2$	-riba
歩く	SEQ	行く	COND1

Free 行こうよ」と、どこかへこうして歩いて行けば

55	**Word**	jukwanu		jaanu		tomirajunu				niicji	
	Morphemes	jukwa	-nu	jaa	-nu	*tumi	-ra	-ju	-nu	nii	=cji
	Lex. Entries	jukwa	-nu	jaa$_1$	-nu	*tumi$_1$	-ra$_2$	-ju$_1$	-nu	nii$_1$	=cji$_2$
	Lex. Gloss	良い	ADN	家	ADN	探す	POT	NPST	ADN	ところ	ALL

Free 良い家が見つかるところへ

56	**Word**	wacja	ikagaadicji				sjii	
	Morphemes	wacja	*ik	-a	=gaa	=dicji	*sji	-i
	Lex. Entries	wacja	*ik$_2$	-a	=gaa	=dicji	*sji$_2$	-i$_1$
	Lex. Gloss	1PL	行く	PST	EMPH	QT	する	SEQ

sjatuwa			
*sji	-a	-tu	=wa
*sji$_2$	-a	-tu	=wa
する	PST	COND	TOP

Free 私たちは行こうよ」と言って、そうしたら

57	**Word**	iN	naa	maanu		jaaniwa		
	Morphemes	iN	naa	maa	=nu	jaa	=ni	=wa
	Lex. Entries	iN	naa$_1$	maa$_1$	=nu$_2$	jaa$_1$	=ni$_1$	=wa
	Lex. Gloss	はい	もう	ここ	GEN2	家	LOC1	TOP

uraraNdiicji				
*u	-ra	-ra	-N	=dicji
*u	-ra$_2$	-ran	-N	=dicji
いる	POT	NEG	IND	QT

Free うん、もうそこの家にはいられないと言って

58	**Word**	gaNsji	sjatuwa				mata	icjibaN	sjaanu	
	Morphemes	gaNsji	*sji	-a	-tu	=wa	mata	icjibaN	sjaa	=nu
	Lex. Entries	gaNsji	*sji$_2$	-a	-tu	=wa	mata$_1$	***	sjaa	=nu$_2$
	Lex. Gloss	そして	する	PST	COND	TOP	また	***	下	GEN2

fumimu
fumi ＝mu
fumi ＝mu
米 ADD

Free そうしたらまた、一番下の米も

59	**Word**	waNmu		fajuNdjaa			
	Morphemes	waN	＝mu	*fa	-ju	-N	＝djaa
	Lex. Entries	wa	＝mu	*fa	-ju$_1$	-N	＝djaa$_1$
	Lex. Gloss	1SG	ADD	ついて行く	NPST	IND	SFP

ajagwaadicji
aja -gwaa ＝dicji
aja -gwa+dial. var. ＝dicji
姉 DIM QT

Free 「私もXXよ、お姉さん」と言って

60	**Word**	060	nibaNmenu		ajawa		ajagwaadicji		
	Morphemes	***	nibaNme	＝nu	aja	＝wa	aja	-gwaa	＝dicji
	Lex. Entries	***	***	＝nu$_2$	aja	＝wa	aja	-gwa+dial. var.	＝dicji
	Lex. Gloss	***	***	GEN2	姉	TOP	姉	DIM	QT

JuNdu jati
*?i -ju -N ＝du *jat -i
*?i$_1$ -ju$_1$ -N ＝du *ja$_4$ -i$_1$
言う NPST IND FOC COP SEQ

Free 二番目のお姉は「アヤグヮー」と言うから

61	**Word**	061	gaNsji	ajagwaawa			waamu	
	Morphemes	***	gaNsji	aja	-gwaa	＝wa	waa	＝mu
	Lex. Entries	***	gaNsji	aja	-gwa+dial. var.	＝wa	waa	＝mu
	Lex. Gloss	***	そして	姉	DIM	TOP	1SG	ADD

fajuNdicji
*fa -ju -N ＝dicji
*fa -ju$_1$ -N ＝dicji
ついて行く NPST IND QT

Free そして次女は「私もついて行く」と言って

62	**Word**	062	gaNsji	sjiina			haNsji	muuru
	Morphemes	***	gaNsji	*sji	-i	＝na	haNsji	muuru
	Lex. Entries	***	gaNsji	*sji$_2$	-i$_1$	＝naa$_1$+fr. var.	haNsji	muuru
	Lex. Gloss	***	そして	する	SEQ	SFP	こうして	皆

izji
*izj -i
*ik_2 -i_1
行く SEQ

Free そうしてね、こうして全員が出て

63	**Word**	063	gudoogudo	sji		haNsji	izjiti		izji	
	Morphemes	***	gudogudo	*sji	-i	haNsji	*izjit	-i	*izj	-i
	Lex. Entries	***	gudogudo	*sji_2	-i_1	haNsji	*izji	-i_1	*ik_2	-i_1
	Lex. Gloss	***	ONM	する	SEQ	こうして	出る	SEQ	行く	SEQ

sjigata mjaarasjiga
sjigata *mi -a -ra -sjiga
sugata+fr. var. *mi_1 -ra_2 -ran -sjiga
姿 見る POT NEG CNC

Free グドグドして、こうして出て行って、姿は見えないけど

64	**Word**	064	haNsji	icjibaN	saisjoni		muzjinu	
	Morphemes	***	haNsji	icjibaN	saisjo	=ni	muzji	=nu
	Lex. Entries	***	haNsji	***	***	=ni_1	$muzji_1$	=nu_2
	Lex. Gloss	***	こうして	***	***	LOC1	麦	GEN2

neNneNga izjiti
neNneN =ga *izjit -i
neNneN =ga_1 *izji -i_1
姉 NOM1 出る SEQ

Free こうして、一番最初に麦の姉さんが出て

65	**Word**	065	haNsji	zjoocji		izjiti		izji	
	Morphemes	***	haNsji	zjoo	=cji	*izjit	-i	*izj	-i
	Lex. Entries	***	haNsji	zjoo	=cji_2	*izji	-i_1	*ik_2	-i_1
	Lex. Gloss	***	こうして	門	ALL	出る	SEQ	行く	SEQ

uNga atukara
uN =ga atu =kara
uri =ga_2 atu_1 =kara
それ GEN1 後ろ ABL

Free こうして門へ出て行って、その後から

66	**Word**	066	oonu		cjicji		izji		haNsji
	Morphemes	***	oo	=nu	*cjicj	-i	*izj	-i	haNsji
	Lex. Entries	***	oo_3	=nu_1	*$cjik_2$	-i_1	*ik_2	-i_1	haNsji
	Lex. Gloss	***	粟	NOM2	着く	SEQ	行く	SEQ	こうして

Free 粟が付いて行って、こうして

67	**Word**	067	uNga		atukara		fuminu		cjicji	
	Morphemes	***	uN	=ga	atu	=kara	fumi	=nu	*cjicj	-i
	Lex. Entries	***	uN_2	$=ga_2$	atu_1	=kara	fumi	$=nu_1$	$*cjik_2$	$-i_1$
	Lex. Gloss	***	うん	GEN1	後	ABL	米	NOM2	着く	SEQ

izji		gaNsji	sjii		sjata		
*izj	-i	gaNsji	*sji	-i	*sji	-a	-ta
$*ik_2$	$-i_1$	gaNsji	$*sji_2$	$-i_1$	$*sji_2$	-a	-ta
行く	SEQ	そして	する	SEQ	する	PST	COND?

Free その後から、米が付いて行って、そうしたら

68	**Word**	068	aa	naa	wacja	jaawa		saigodu	
	Morphemes	***	aa	naa	wacja	jaa	=wa	saigo	=du
	Lex. Entries	***	***	naa_1	wacja	jaa_3	=wa	***	=du
	Lex. Gloss	***	***	もう	1PL	明後日	TOP	***	FOC

assajaadicji				
*a	-ssa	=jaa	=dicji	
$*a_2$	$-sa_2$+dial. var.	=jaa	=dicji	
COP	MRT	SFP	QT	

Free ああ「もう私たちの家は最後だね」と言って

69	**Word**	069	uN	amawana			uturusja		sjiwa
	Morphemes	***	uN	ama	=wa	=naa	*uturu	-sja	sjiwa
	Lex. Entries	***	uN_1	ama_1	=wa	$=naa_1$	*uturu	$-sa_1$	sjiwa
	Lex. Gloss	***	その	母親	TOP	SFP	大変	ADJ	心配

sjii	
*sji	-i
$*sji_2$	$-i_1$
する	SEQ

Free その母親はね、大変に心配して

70	**Word**	070	wacja	naasjitanu		naa	mununu		naa
	Morphemes	***	wacja	naasjita	-nu	naa	munu	=nu	naa
	Lex. Entries	***	wacja	***	-nu	naa_1	munu	$=nu_1$	naa_1
	Lex. Gloss	***	1PL	***	ADN	もう	もの	NOM2	もう

fumimuu		oomu	
fumi	=mu	oo	=mu
fumi	=mu	oo_3	=mu
米	ADD	粟	ADD

Free 私達はXX、食べ物がもう、米も粟も

71	**Word**	071	muuru	muzjimu		muuru
	Morphemes	***	muuru	muzji	=mu	muuru
	Lex. Entries	***	muuru	muzji$_1$	=mu	muuru
	Lex. Gloss	***	全部	麦	ADD	皆

kamaraNgara					wakaraNjaa			
*kam	-a	-ra	-N	=gara	*waka	-ra	-N	=jaa
*kam	-ra$_2$	-ran	-N	=gara	*waka$_1$	-ran	-N	=jaa
食べる	POT	NEG	IND	か	分かる	NEG	IND	SFP

Free 全部、麦も全部食べられないかもしれないね。

72	**Word**	072	futabidakidu			ano	nuNgura	sji	
	Morphemes	***	futabi	=daki	=du	anu	nuNgura	*sji	-i
	Lex. Entries	***	futabi	=daki	=du	anu$_1$	nuNgura	*sji$_2$	-i$_1$
	Lex. Gloss	***	今回	LIM	FOC	FIL	FIL	する	SEQ

torajuNgaraadicji					
*to	-ra	-ju	-N	=gara	=dicji
*tu+fr. var.	-ra$_2$	-ju$_1$	-N	=gara	=dicji
取る	POT	NPST	IND	か	QT

Free 今回だけは何とかして、取れるかと言って

73	**Word**	073	naa	uturusja		sjiwa	sjii		utanu		
	Morphemes	***	naa	*uturu	-sja	sjiwa	*sji	-i	*ut	-a	-nu
	Lex. Entries	***	naa$_1$	*uturu	-sa$_1$	sjiwa	*sji$_2$	-i$_1$	*u	-a	-nu
	Lex. Gloss	***	もう	大変	ADJ	心配	する	SEQ	いる	PST	ADN

muNga	
muN	=ga
muN	=ga$_1$
もの	NOM1

Free もうとっても心配していたが

74	**Word**	074	janinu		tusjini		nati		futusji
	Morphemes	***	jani	=nu	tusji	=ni	*nat	-i	futusji
	Lex. Entries	***	jani	=nu$_2$	tusji	=ni$_1$	*na$_2$	-i$_1$	futusji
	Lex. Gloss	***	来年	GEN2	年	LOC1	なる	SEQ	今年

cukutanu			muNwa	
*cuku	-a	-nu	muN	=wa
*cuku	-a	-nu	muN	=wa
作る	PST	ADN	もの	TOP

Free 来年の年になって、今年作った食料は

75	**Word**	075	muuru	kadi		mata	jaani		nuNgura
	Morphemes	***	muuru	kad	-i	mata	jaa	=ni	nuNgura
	Lex. Entries	***	muuru	*kam	$-i_1$	$mata_1$	jaa_1	$=ni_1$	nuNgura
	Lex. Gloss	***	皆	食べる	SEQ	また	家	LOC1	FIL

sjii		muzji	uiti	
*sji	-i	muzji	*uit	-i
$*sji_2$	$-i_1$	$muzji_1$	$*ui_3$	$-i_1$
する	SEQ	麦	植える	SEQ

Free 皆食べて、また家に何やらして、麦を植えて

76	**Word**	076	oo	uiti		mata	fumi	uiti	
	Morphemes	***	oo	*uit	-i	mata	fumi	*uit	-i
	Lex. Entries	***	oo_3	$*ui_3$	$-i_1$	$mata_1$	fumi	$*ui_3$	$-i_1$
	Lex. Gloss	***	粟	植える	SEQ	また	米	植える	SEQ

sjanu			muNga	
*sji	-a	-nu	muN	=ga
$*sji_2$	-a	-nu	muN	$=ga_1$
する	PST	ADN	もの	NOM1

Free 粟を植えて、また米を植えて、したけれど

77	**Word**	077	haN	sjanu			muNga	
	Morphemes	***	haN	*sji	-a	-nu	muN	=ga
	Lex. Entries	***	haN	$*sji_2$	-a	-nu	muN	$=ga_1$
	Lex. Gloss	***	こう	する	PST	ADN	もの	NOM1

muzjimuna				cjiibu	toradana	
muzji	=mu	=na		cjibu	*to	-radana
$muzji_1$	=mu	$=naa_1$	+fr. var.	$cjibu_1$	*tu+fr. var.	$-radana_1$
麦		ADD	SFP	少しも	取る	SEQ

Free こうしたけれど、麦もね、ちっとも取れなくて

78	**Word**	078	haNsji	mata	sjii		sjatu			mata
	Morphemes	***	haNsji	mata	*sji	-i	*sji	-a	-tu	mata
	Lex. Entries	***	haNsji	$mata_1$	$*sji_2$	$-i_1$	$*sji_2$	$-ra_1$	-tu	$mata_1$
	Lex. Gloss	***	こうして	また	する	SEQ	する	PASS	COND	また

Free こうして、またしてしたら、また

79	**Word**	079	oonu		zjikini		mata	oomu		haN
	Morphemes	***	oo	=nu	zjiki	=ni	mata	oo	=mu	haN
	Lex. Entries	***	oo_3	$=nu_2$	***	$=ni_1$	$mata_1$	oo_3	=mu	haN
	Lex. Gloss	***	粟	GEN2	***	LOC1	また	粟	ADD	こう

najumunaadicji

*na	-ju	-mu	=naa	=dicji
*na$_{2}$	-ju$_{1}$	-mu	=naa$_{1}$	=dicji
なる	NPST	EPI	SFP	QT

Free 粟もじきに、また粟もこうなるの？と言って

80	**Word**	080	naa	wacja	nuu	kadi		<	ikicji	iko	>
	Morphemes	***	naa	wacja	nuu	kad	-i		ikicji	***	
	Lex. Entries	***	naa$_{1}$	wacja	nuu	*kam	-i$_{1}$		***	***	
	Lex. Gloss	***	もう	1PL	何	食べる	SEQ		***	***	

kajaadicji

=kajaa	=dicji	
=kaja+fr. var.	=dicji	
Q	QT	

Free もう私達は、何を食べて生きていこうかな？と言って

81	**Word**	081	naa	icjaasjimu	fumi	uiNnja		
	Morphemes	***	naa	icjaasjimu	fumi	*ui	-ran	-rja
	Lex. Entries	***	naa$_{1}$	icjaasjimu	fumi	*ui$_{3}$	-ran	-rja
	Lex. Gloss	***	もう	どうしても	米	植える	NEG	COND2

Free もうどうしても米を植えないと

82	**Word**	082	fuminu		muN	naidu		
	Morphemes	***	fumi	=nu	muN	*na	-i	=du
	Lex. Entries	***	fumi	=nu$_{1}$	muN	*na$_{2}$	-i$_{3}$	=du
	Lex. Gloss	***	米	NOM2	もの	なる	INF1	FOC

sjurudi

*sji	-ju	-ru	=di
*sji$_{2}$	-ju$_{1}$	-ru$_{1}$	=di
する	NPST	MSB	QT

Free 米がものになるだろうと

83	**Word**	083	haN	sjata			fumi	uitimu		
	Morphemes	***	haN	*sji	-a	-ta	fumi	*uit	-i	=mu
	Lex. Entries	***	haN	*sji$_{2}$	-a	-ta	fumi	*ui$_{3}$	-i$_{1}$	=mu
	Lex. Gloss	***	こう	する	PST	COND?	米	植える	SEQ	ADD

aNmai	dekiradana	
aNmai	*deki	-radana
aNmai	*deki	-radana$_{1}$
あんまり	出来る	SEQ

Free けれども、米を植えても、あんまり出来なくて

84	**Word**	084	haNsjinaa		hjii	kaminu			muNmu	
	Morphemes	***	haNsji	=naa	hjii	*kam	-i	-nu	muN	=mu
	Lex. Entries	***	haNsji	=naa$_1$	hjii$_1$	*kam	-ju$_1$	-nu	muN	=mu
	Lex. Gloss	***	こんなに	SFP	日	食べる	NPST	ADN	もの	ADD

naani		nati	
naa	=ni	*nat	-i
naa$_5$	=ni$_1$	*na$_2$	-i$_1$
無い状態？	LOC1	なる	SEQ

Free そうしてね、日々食べるものも無くなって

85	**Word**	085	koNdowa		umu	mazjiritaja		ano	oofaa
	Morphemes	***	koNdo	=wa	umu	*mazjirit	-aja	anu	oofaa
	Lex. Entries	***	koNdo	=wa	umu	*mazjirit	-aja	anu$_1$	oofaa
	Lex. Gloss	***	今度	TOP	芋	混じる	SEL	FIL	大葉

iritaja	
*irit	-aja
*iri	-aja
入れる	SEL

Free 今度は芋が混じったり、大葉を入れたり

86	**Word**	086	mazjirituti			misjizji	sjaja		kee
	Morphemes	***	*mazjirit	-ut	-i	misjizji	*sji	-aja	kee
	Lex. Entries	***	*mazjirit	-u	-i$_1$	misjizji	*sji$_2$	-aja	kee
	Lex. Gloss	***	混じる	CONT	SEQ	雑炊	する	SEL	粥

tacjaja	
*tacj	-aja
*tacj$_2$	-aja
炊く	SEL

Free 混じっていて、雑炊をしたり、粥を炊いたり

87	**Word**	087	sjuti			wata	kucji	micjitija		
	Morphemes	***	*sji	-ut	-i	wata	kucji	*micjit	-i	=ja
	Lex. Entries	***	*sji$_2$	-u	-i$_1$	wata	kucji	*micji	-i$_1$	=jaa+fr. var.
	Lex. Gloss	***	する	CONT	SEQ	腹	口	満ちる	SEQ	SFP

gaNsji	sjii		sjatuwa			
gaNsji	*sji	-i	*sji	-a	-tu	=wa
gaNsji	*sji$_2$	-i$_1$	*sji$_2$	-a	-tu	=wa
そして	する	SEQ	する	PST	COND	TOP

Free していて、お腹も口も満ちて、そうしていただ

88	**Word**	088	aa	gaNdo		atasaa		
	Morphemes	***	aa	gaN	=du	*at	-a	-sa
	Lex. Entries	***	***	gaN	=du	*a_1	-a	-sa_2
	Lex. Gloss	***	***	そう	FOC	ある	PST	MRT

Free ああ、そうだった

89	**Word**	089	waaraNcja		waaraNcja		macji		fuu
	Morphemes	***	wara	-Ncja	wara	-Ncja	maa	=cji	fuu
	Lex. Entries	***	warabi	-Ncja	warabi	-Ncja	maa_1	=cji_2	fuu_3
	Lex. Gloss	***	子供	-PL	子供	-PL	ここ	ALL	来る.IMP

Free 子供たち、子供たち、こっちへおいで。

90	**Word**	090	gaNsji	uN	amatu		acjatuga		
	Morphemes	***	gaNsji	uN	ama	=tu	acja	=tu	=ga
	Lex. Entries	***	gaNsji	uN_1	ama_1	=tu_1	acja	=tu_1	=ga_1
	Lex. Gloss	***	そして	その	母親	COM	父親	COM	NOM1

abiti
*abit -i
*abi_1 -i_1
呼ぶ SEQ

Free その母親と父親が呼んで

91	**Word**	091	maani		muuru	jiisjiti		ucjaga		fuN
	Morphemes	***	maa	=ni	muuru	jiisjit	-i	ucja	=ga	fuN
	Lex. Entries	***	maa_1	=ni_1	muuru	***	-i_1	ucja	=ga_1	fuN_1
	Lex. Gloss	***	ここ	LOC1	皆	***	SEQ	2PL	NOM1	この

fumimu
fumi =mu
fumi =mu
米 ADD

Free ここに皆座って（？）あんた達が、この米も

92	**Word**	092	oomu		muzjimu		muuru	utusji	
	Morphemes	***	oo	=mu	muzji	=mu	muuru	*utusj	-i
	Lex. Entries	***	oo_3	=mu	$muzji_1$	=mu	muuru	*utusj	-i_1
	Lex. Gloss	***	粟	ADD	麦	ADD	皆	落とす	SEQ

cjaacji sjuuti
*cjaacj -i *sji -ut -i
*cjaas -i_1 *sji_2 -u -i_1
消す SEQ する CONT SEQ

Free 粟も麦も全部落とし散らかして、

93	**Word**	093	muNnu		bacji	kabutidu			haNsji
	Morphemes	***	muN	=nu	bacji	*habut	-i	=du	haNsji
	Lex. Entries	***	muN	$=nu_2$	***	*habu	$-i_1$	=du	haNsji
	Lex. Gloss	***	食べ物	GEN2	***	かぶる	SEQ	FOC	こうして

wacjamu
wacja =mu
wacja =mu
1PL ADD

Free 食べ物のばちを被って、こうして私たちも

94	**Word**	094	muN	dekirarini				natamu		
	Morphemes	***	muN	*deki	-ra	-ri	=ni	*na	-a	-mu
	Lex. Entries	***	muN	*deki	-ran	***	$=ni_1$	$*na_2$	-a	-mu
	Lex. Gloss	***	食べ物	出来る	NEG	***	LOC1	なる	PST	EPI

kwaNcjaadicji
kwa -Ncja =dicji
$kwaa_1$ -Ncja =dicji
子供 -PL QT

Free 食べ物が出来なくなったんだよ、子供たち」と言って

95	**Word**	095	haNsji	kicji		araa	gaNdoojaa			gaN
	Morphemes	***	haNsji	*kicj	-i	araa	gaN	=doo	=jaa	gaN
	Lex. Entries	***	haNsji	*kicj	$-i_1$	***	gaN	=doo	=jaa	gaN
	Lex. Gloss	***	こうして	来る	SEQ	***	そう	SFP	SFP	そう

< datta > sajaadicji
*** -sa =jaa =dicji
*** $-sa_2$ =jaa =dicji
*** MRT SFP QT

Free こうして「そうだね、そうだったね」と言って

96	**Word**	096	muNwa		muuru	deezjini		sjii	
	Morphemes	***	muN	=wa	muuru	deezji	=ni	*sji	-i
	Lex. Entries	***	muN	=wa	muuru	deezji	$=ni_1$	$*sji_2$	$-i_1$
	Lex. Gloss	***	もの	TOP	全部	大事	LOC1	する	SEQ

kamanja
*kam -an -rja
*kam -ran -rja
食べる NEG COND2

Free ものは全部大事にして食べないと

97	**Word**	097	narasajaadicji						gaNsjidu		
	Morphemes	***	*na	-ra	-sa	=jaa	=dicji		gaNsji	=du	
	Lex. Entries	***	*na$_2$	-ran	-sa$_2$	=jaa	=dicji		gaNsji	=du	
	Lex. Gloss	***	なる	NEG	MRT	SFP	QT		そして	FOC	

hanacjaNtuni
*hanacj -a -N =tuni
*hanas -a -N =tuni
話す PST IND CSL

Free いけないよと言って、そして話したから

98	**Word**	098	gaNsjidu		ucjamu		muuru	anu	nuNgura
	Morphemes	***	gaNsji	=du	ucja	=mu	muuru	anu	nuNgura
	Lex. Entries	***	gaNsji	=du	ucja	=mu	muuru	anu$_1$	nuNgura
	Lex. Gloss	***	そして	FOC	2PL	ADD	皆	FIL	FIL

Free だからあんた達も皆

99	**Word**	099	seekacu	sjii		cjaatu	
	Morphemes	***	seekacu	*sji	-i	*kicj	-a -tu
	Lex. Entries	***	seekacu	*sji$_2$	-i$_1$	*kicj	-a -tu
	Lex. Gloss	***	生活	する	SEQ	来る	PST COND

kaminiwa hjii mikure
*kam -i =ni =wa hjii ***
*kam -i$_1$ =ni$_1$ =wa hjii$_1$ ***
食べる SEQ LOC1 TOP 日 ***

Free 生活をして来たから、食べる時には、日をXX

100	**Word**	100	arigatasaadi			Muuti		cjimuni	
	Morphemes	***	*arigata	-sa	=di	*Muut	-i	cjimu	=ni
	Lex. Entries	***	*arigata	-sa$_1$	=di	*Muu$_3$	-i$_1$	cjimu	=ni$_1$
	Lex. Gloss	***	有り難い	ADJ	QT	思う	SEQ	肝	LOC1

sumiti anu nuNgura sji
*sumit -i anu nuNgura *sji -i
*sumi -i$_1$ anu$_1$ nuNgura *sji$_2$ -i$_1$
染める SEQ FIL FIL する SEQ

Free 有り難いと思って、肝に染めて、

101	**Word**	101	muN	kamijoojaadicji					gaNsji
	Morphemes	***	muN	*kam	-i	=joo	=jaa	=dicji	gaNsji
	Lex. Entries	***	muN	*kam	-ri$_1$	=joo$_1$	=jaa	=dicji	gaNsji
	Lex. Gloss	***	食べ物	食べる	IMP	SFP	SFP	QT	そして

sjiigane

*sji	-i	=gane
*sji$_2$	-i$_1$	=gane$_1$
する	SEQ	～あと

Free 食べ物を食べてね、と言って、そうしてから

102	**Word**	102	gaNsjanu	seekacudu		sjiinudu		
	Morphemes	***	gaNsjanu	seekacu	=du	*sji	-ju	-nu	=du
	Lex. Entries	***	gaNsjanu	seekacu	=du	*sji$_2$	-ju$_1$	-nu	=du
	Lex. Gloss	***	そんな	生活	FOC	する	NPST	ADN	FOC

ucjamu

ucja	=mu	
ucja	=mu	
2PL	ADD	

Free そんな生活をして、あんた達も

103	**Word**	103	cjuraasa		sjuti			cjimukukuru
	Morphemes	***	*cjura	-sa	*sji	-ut	-i	cjimukukuru
	Lex. Entries	***	*cjura	-sa$_1$	*sji$_2$	-u	-i$_1$	cjimukukuru
	Lex. Gloss	***	きれい	ADJ	する	CONT	SEQ	肝心

cjurasa sjuti

*cjura	-sa	*sji	-ut	-i
*cjura	-sa$_1$	*sji$_2$	-u	-i$_1$
きれい	ADJ	する	CONT	SEQ

Free きれいにしていて、心をきれいにしていて

104	**Word**	104	mata	fumimu		cjucjibu		haNsji
	Morphemes	***	mata	fumi	=mu	*cju	=cjibu	haNsji
	Lex. Entries	***	mata$_1$	fumi	=mu	*cju$_2$	=cjibu	haNsji
	Lex. Gloss	***	また	米	ADD	1	粒	こうして

kaminudu

*kam	-i	-nu	=du
*kam	-i$_1$	-nu	=du
食べる	SEQ	ADN	FOC

Free また、米も1粒こうして食べるのが

105	**Word**	105	arigataijaadicji			tii	oocjuti			muN
	Morphemes	***	arigatai	=jaa	=dicji	tii	*oocj	-ut	-i	muN
	Lex. Entries	***	***	=jaa	=dicji	tii	*oos	-u	-i$_2$	muN
	Lex. Gloss	***	***	SFP	QT	手	合わす	CONT	Q	食べ物

Free 有り難いねと言って、手を合わせて、食べ物を

106	**Word**	106	kamijoojaadicji					gaN
	Morphemes	***	*kam	-i	=joo	=jaa	=dicji	gaN
	Lex. Entries	***	*kam	$-ri_1$	$=joo_1$	=jaa	=dicji	gaN
	Lex. Gloss	***	食べる	IMP	SFP	SFP	QT	そう

sjiganedu

*sji	-i	=gane	=du	
$*sji_2$	$-i_1$	$=gane_1$	=du	
する	SEQ	とか？	FOC	

Free 食べなさいよと言って、

107	**Word**	107	gassaadoojaadicji				hanacji		agari
	Morphemes	***	gassaa	=doo	=jaa	=dicji	*hanacj	-i	agari
	Lex. Entries	***	gassaa	=doo	=jaa	=dicji	*hanas	$-i_1$	agari
	Lex. Gloss	***	それだけ	SFP	SFP	QT	話す	SEQ	東

tuusa		ii	tuusadicji		
*tuu	-sa	ii	*tuu	-sa	=dicji
$*tuu_1$	$-sa_1$	ii	$*tuu_1$	$-sa_1$	=dicji
遠い	ADJ	西	遠い	ADJ	QT

Free それだけですよと言って話して、おしまいおしまい。

東のお爺さんと西のお爺さん

1	**Word**	sjimanu		<	hazureni		>	agarinu	
	Morphemes	sjima	=nu		hazure	=ni		agari	=nu
	Lex. Entries	sjima	=nu$_2$		hazure	=ni$_1$		agari	=nu$_2$
	Lex. Gloss	島	GEN2		外れ	LOC1		東	GEN2

hooniwa

hoo =ni =wa

hoo$_1$ =ni$_1$ =wa

方角 LOC1 TOP

Free 島のはずれに、東の方には

2	**Word**	awari	sjunu			zjaazjatu		azituga		
	Morphemes	awari	*sji	-ju	-nu	zjaazja	=tu	azji	=tu	=ga
	Lex. Entries	awari	*sji$_2$	-ju$_1$	-nu	zjaazja	=tu$_1$	azji$_1$	=tu$_1$	=ga$_1$
	Lex. Gloss	貧乏	する	NPST	ADN	お爺さん	COM	お婆さん	COM	NOM1

Meetija

*Meet -i =jaa

*Mee -i$_1$ =jaa

いらっしゃる SEQ SFP

Free 貧乏なお爺さんとお婆さんがいらっしゃって

3	**Word**	Maanu		janu		iiniwa			oicjuunu	
	Morphemes	Maa	=nu	jaa	=nu	ii	=ni	=wa	oicjuu	=nu
	Lex. Entries	Maa$_1$	=nu$_2$	jaa$_1$	=nu$_2$	ii	=ni$_1$	=wa	oicjuu	=nu$_2$
	Lex. Gloss	そこ	GEN2	家	GEN2	西	LOC1	TOP	金持ち	GEN2

jaanu ati

jaa =nu *at -i

jaa$_1$ =nu$_1$ *a$_1$ -i$_1$

家 NOM2 ある SEQ

Free そこの家の西には、お金持ちの家があって

4	**Word**	agarinu		azitu		zjaazjatu	
	Morphemes	agari	=nu	azji	=tu	zjaazja	=tu
	Lex. Entries	agari	=nu$_2$	azji$_1$	=tu$_1$	zjaazja	=tu$_1$
	Lex. Gloss	東	GEN2	お婆さん	COM	お爺さん	COM

Free 東のお婆さんとお爺さんと

5	**Word**	awari	sjunu		<	kazoku	>	nu
	Morphemes	awari	*sji	-ju -nu		kazoku		=nu
	Lex. Entries	awari	$*sji_2$	$-ju_1$ -nu		kazoku		$=nu_1$
	Lex. Gloss	貧乏	する	NPST ADN		家族		NOM2

Meeti

*Meet -i

*Mee $-i_1$

いらっしゃる SEQ

Free 貧乏な家族がいらっしゃって

6	**Word**	di	uNtaga		jaawa		naa	hjuu	nuu
	Morphemes	=di	uN	-taa =ga	jaa	=wa	naa	hjuu	nuu
	Lex. Entries	=di	uN_1	-taa $=ga_2$	jaa_1	=wa	naa_1	hjuu	nuu
	Lex. Gloss	***	その	PL GEN1	家	TOP	もう	今日	何

kamuka

*kam -u =ka

*kam $-ru_2$ =ka

食べる COND3 Q

Free その人達の家は、もう今日何を食べるか

7	**Word**	asjiwa		nuu	kamuka			gaNsjanu	<
	Morphemes	asji	=wa	nuu	*kam	-u	=ka	gaNsjanu	
	Lex. Entries	$asji_1$	=wa	nuu	*kam	$-ru_2$	=ka	gaNsjanu	
	Lex. Gloss	昼飯	TOP	何	食べる	COND3	Q	そんな	

teidono		seekacu	>	du	sjuusjiga		
teedo	=nu	seekacu		=du	*sji	-u	-sjiga
***	***	***		=du	$*sji_2$	-u	-sjiga
***	***	***		FOC	する	CONT	CNC

Free 昼ご飯は何を食べるか、そんな程度の生活をしていたけれど

8	**Word**	juuzai	sjanu		kutumu		naadanaja		
	Morphemes	juuzai	*sji	-a -nu	kutu	=mu	*na	-radana	=ja
	Lex. Entries	juuzai	$*sji_2$	-a -nu	kutu	=mu	$*na_4$	$-radana_1$	=jaa+fr. var.
	Lex. Gloss	喧嘩	する	PST ADN	事	ADD	ない	SEQ	SFP

Free 喧嘩したこともなくてね

9	**Word**	hiizjuni		wana	<	zjoodaN	>	icijo		
	Morphemes	hjiizju	=ni	wana		zjoodaN		*ʔj	-i	=jo
	Lex. Entries	hjiizju	$=ni_1$	wa		***		$*ʔj_1$	$-i_1$	=jo
	Lex. Gloss	ずっと	LOC1	1SG		***		言う	SEQ	SFP

warootaja		sjuti		
*waro	-aja	*sji	-ut	-i
*waro$_{1}$	-aja	*sji$_{2}$	-u	-i$_{1}$
笑う	SEL	する	CONT	SEQ

Free ずっと冗談を言ったりね、笑ったりして

10	**Word**	ma	iinu		jaawa		oicjuunu		jaa	jasjiga	
	Morphemes	maa	ii	=nu	jaa	=wa	oicjuu	=nu	jaa	*ja	-sjiga
	Lex. Entries	***	ii	=nu$_{2}$	jaa$_{1}$	=wa	oicjuu	=nu$_{2}$	jaa$_{1}$	*ja$_{4}$	-sjiga
	Lex. Gloss	***	西	GEN2	家	TOP	金持ち	GEN2	家	COP	CNC

Free まあ、西の家はお金持ちの家だけど

11	**Word**	asakara		baNtani		juuzaibee		sjuutija			
	Morphemes	asa	=kara	baN	=Ntani	juuzai	=bee	*sji	-ut	-i	=jaa
	Lex. Entries	asa$_{1}$	=kara	baN	=Ntani	juuzai	=bee	*sji$_{2}$	-u	-i$_{1}$	=jaa
	Lex. Gloss	朝	ABL	夜	TERM	喧嘩	APPR	する	CONT	SEQ	SFP

Free 朝から晩まで喧嘩ばかりしてね

12	**Word**	juuzainu		kiriradana	
	Morphemes	juuzai	=nu	*kiri	-radanat
	Lex. Entries	juuzai	=nu$_{1}$	*kiri	-radana$_{1}$
	Lex. Gloss	喧嘩	NOM2	切れる	SEQ

Free 喧嘩が絶えなくてね

13	**Word**	gaNsji	fusjigina	muNjaa		agarinu		jaawa	
	Morphemes	gaNsji	***	muN	=jaa	agari	=nu	jaa	=wa
	Lex. Entries	gaNsji	***	muN	=jaa	agari	=nu$_{2}$	jaa$_{1}$	=wa
	Lex. Gloss	そして	***	もの	SFP	東	GEN2	家	TOP

Free そして不思議なものだ、東の家は

14	**Word**	nuumu		naanu		awarijaa			jasjiga		nuudi
	Morphemes	nuu	=mu	*n	-nu	awari	+	jaa	*ja	-sjiga	nuudi
	Lex. Entries	nuu	=mu	*n$_{1}$	-nu	awari	***	jaa$_{1}$	*ja$_{4}$	-sjiga	nuudi
	Lex. Gloss	何	ADD	ない	ADN	貧乏	***	家	COP	CNC	なぜ

juuzai	sjiraNkajajaadi	Muuti	
juuzai	***	*Muu	ti
juuzai	***	*Muu$_{2}$	***
喧嘩	***	思う	***

Free 何もない貧乏家だけど、なぜ喧嘩をしないんだろうと思って

15	**Word**	haNsji	uN	iinu		zjaazjaga		agarinu	
	Morphemes	haNsji	uN	ii	=nu	zjaazja	=ga	agari	=nu
	Lex. Entries	haNsji	uN_1	ii	$=nu_2$	zjaazja	$=ga_1$	agari	$=nu_2$
	Lex. Gloss	こうして	その	西	GEN2	お爺さん	NOM1	東	GEN2

zjaazjaci
zjaazja =cji
zjaazja $=cji_2$
お爺さん ALL

Free その西のお爺さんが東のお爺さんに

16	**Word**	nuudi	ucja	jaawa		awarinu		sjunu		
	Morphemes	nuudi	ucja	jaa	=wa	awari	=nu	*s	-ju	-nu
	Lex. Entries	nuudi	ucja	jaa_1	=wa	awari	$=nu_2$	*s	$-ju_1$	-nu
	Lex. Gloss	なぜ	2PL	家	TOP	貧乏	GEN2	する	NPST	ADN

kuseniwa			juuzai	sjaja			sjiranoo
kuse	=ni	=wa	juuzai	si	ja	=	***
***	$=ni_1$	=wa	juuzai	***	***	=jaa	***
***	LOC1	TOP	喧嘩	***	***	SFP	***

Free なぜあんた達の家は、貧乏をしている癖に、喧嘩したりしないの？

17	**Word**	cimu	izinu		cjuuwa		urazinaadi				
	Morphemes	cjimu	*izji	-nu	cjuu	=wa	*u	raz	-i	=naa	=di
	Lex. Entries	cjimu	*izji	-nu	$cjuu_1$	=wa	*u	***	$-i_1$	$=naa_1$	=di
	Lex. Gloss	肝	出る	ADN	人	TOP	いる	***	SEQ	SFP	QT

icjura			agarinu		zjaazja	iwaku
*?j	-ju	-rja	agari	=nu	zjaazja	***
$*?j_1$	$-ju_1$	-rja	agari	$=nu_2$	zjaazja	***
言う	NPST	COND2	東	GEN2	お爺さん	***

Free 腹が立つ人はいないのか？と聞いたら、東のお爺さん曰く

18	**Word**	wacja	jaawa		muuru	warosanu		
	Morphemes	wacja	jaa	=wa	muuru	*waro	-sa	-nu
	Lex. Entries	wacja	jaa_1	=wa	muuru	$*waro_2$	$-sa_1$	-nu
	Lex. Gloss	1PL	家	TOP	全部	悪い	ADJ	ADN

muNcjabe			utijoodiici					
muN	-cja	=bee	*u	ti	=joo	=di	*?j	-i
muN	-cja	=bee	*u	***	$=joo_1$	=di	$*?j_1$	$-i_1$
人	PL	APPR	いる	***	SFP	QT	言う	SEQ

Free 私達の家は、みな悪い人ばかりいてね、と言って

19	**Word**	gaNsjido	juuzai	sjaburaNdoojaa					
	Morphemes	***	juuzai	si	-jabu	-ran	-N	=doo	=jaa
	Lex. Entries	***	juuzai	***	-jabu	-ran	-N	=doo	=jaa
	Lex. Gloss	***	喧嘩	***	POL	NEG	IND	SFP	SFP

Free だから喧嘩をしないのですよ

20	**Word**	natata	niwa		muuru	jukwanu		cjuube	
	Morphemes	natata	nii	=wa	muuru	jukwa	=nu	cjuu	=bee
	Lex. Entries	natata	nii_1	=wa	muuru	jukwa	$=nu_2$	$cjuu_1$	=bee
	Lex. Gloss	2PL	ところ	TOP	全部	良い	GEN2	人	APPR

atidu			juuzai	sjabuNdoojaa				
*a	ti	=du	juuzai	*s	-jabu	-N	=doo	=jaa
$*a_1$	***	=du	juuzai	*s	-jabu	-N	=doo	=jaa
ある	***	FOC	喧嘩	する	POL	IND	SFP	SFP

Free あなた方のところは、みな良い人ばかりだから喧嘩をするのですよ

21	**Word**	iinu		zjaazja	hatenadi		Muuti	
	Morphemes	ii	=nu	zjaazja	hatena	=di	*Muu	ti
	Lex. Entries	ii	$=nu_2$	zjaazja	***	=di	$*Muu_2$	***
	Lex. Gloss	西	GEN2	お爺さん	***	QT	思う	***

Free 西のお爺さんは「はてな？」と思って

22	**Word**	jukwanudu			cjuube		arja		nuudi	juuzai
	Morphemes	jukwa	-nu	=du	cjuu	=bee	*a	-nja	nuudi	juuzai
	Lex. Entries	jukwa	-nu	=du	$cjuu_1$	=bee	$*a_1$	-rja	nuudi	juuzai
	Lex. Gloss	良い	ADN	FOC	人	APPR	ある	COND2	なぜ	喧嘩

sjabuijoo			
*s	-jabu	-i	=joo
*s	-jabu	$-i_2$	$=joo_2$
する	POL	Q	WHQ

Free 良い人ばかりだったら、なんで喧嘩をするのですか？

23	**Word**	warosanu			cjuu	ariba		juuzai
	Morphemes	*waro	-sa	-nu	cjuu	*a	-riba	juuzai
	Lex. Entries	$*waro_2$	$-sa_1$	-nu	$cjuu_1$	$*a_2$	-riba	juuzai
	Lex. Gloss	悪い	ADJ	ADN	人	COP	COND1	喧嘩

sjiidu			sjuru		
*sji	-i	=du	*s	-ju	-ru
$*sji_2$	$-i_1$	=du	*s	$-ju_1$	$-ru_1$
する	SEQ	FOC	する	NPST	MSB

Free 悪い人だったら、喧嘩をするだろうに

24	**Word**	natataniwa			juu	warosanu			cjuube	
	Morphemes	natata	=ni	=wa	juu	*waro	-sa	-nu	cjuu	=bee
	Lex. Entries	natata	$=ni_1$	=wa	juu_1	$*waro_2$	$-sa_1$	-nu	$cjuu_1$	=bee
	Lex. Gloss	2PL	LOC1	TOP	もっと	悪い	ADJ	ADN	人	APPR

ariba		nuudisa		juuzai	sjirazijoo
*a	-riba	nuudi	=sa	juuzai	***
$*a_1$	-riba	nuudi	=sa	juuzai	***
ある	COND1	なぜ	SFP	喧嘩	***

Free あなた方のところはもっと悪い人ばかりなら、なぜ喧嘩をしないの？

25	**Word**	icjura			agarinu		zjaazjaga	
	Morphemes	*ʔj	-ju	-rja	agari	=nu	zjaazja	=ga
	Lex. Entries	$*ʔj_1$	$-ju_1$	-rja	agari	$=nu_2$	zjaazja	$=ga_1$
	Lex. Gloss	言う	NPST	COND2	東	GEN2	お爺さん	NOM1

Free 言ったら、東のお爺さんが

26	**Word**	nuuka		moNdainu		ariba		moNdaino	
	Morphemes	nuu	=ka	moNdai	=nu	*a	-riba	moNdai	=nu
	Lex. Entries	nuu	=ka	***	$=nu_1$	$*a_1$	-riba	***	$=nu_2$
	Lex. Gloss	何	Q	***	NOM2	ある	COND1	***	GEN2

ataN			nuukanu			ataN			tukiniwa		
*a	-a	-N	nuu	=ka	=nu	*a	-a	-N	tuki	=ni	=wa
$*a_1$	-a	-N	nuu	=ka	$=nu_2$	$*a_1$	-a	-N	tuki	$=ni_1$	=wa
ある	PST	IND	何	Q	GEN2	ある	PST	IND	時	LOC1	TOP

Free 何か問題があれば、問題があった何かあった時には

27	**Word**	waga		warosamudjaadiba						
	Morphemes	wa	=ga	*waro	-sa	-mu	=djaa	=di	i	-iba
	Lex. Entries	wa	$=ga_1$	$*waro_2$	$-sa_1$	-mu	$=djaa_1$	=di	$*ʔj_1$	-riba
	Lex. Gloss	1SG	NOM1	悪い	ADJ	EPI	SFP	QT	言う	COND1

tokunagasaNga	
tokunagasaN	=ga
***	$=ga_1$
***	NOM1

Free 私が悪いよと言えば、トクナガさんが

28	**Word**	ai	urja		waga		warosaN			gaN
	Morphemes	ai	uri	=wa	wa	=ga	*waro	-sa	-N	gaN
	Lex. Entries	ai_1	uri	=wa	wa	$=ga_1$	$*waro_2$	$-sa_1$	-N	gaN
	Lex. Gloss	いや	それ	TOP	1SG	NOM1	悪い	ADJ	IND	そう

jattamu

*ja -a -mu

*ja_4 -a -mu

COP PST EPI

Free いや、それは私が悪かった。

29	**Word**	miiwa		aN	gaaja		anaN		
	Morphemes	mii	=wa	aN	gaa	=ja	*a	-a	-N
	Lex. Entries	mii_1	=wa	***	gaa	$=ja_2$	$*a_1$	-ran	-N
	Lex. Gloss	兄	TOP	***	そう	TOP?	ある	NEG	IND

wagadu warosaru

wa =ga =du *waro -sa -ru

wa $=ga_1$ =du $*waro_2$ $-sa_1$ $-ru_1$

1SG NOM1 FOC 悪い ADJ MSB

Free 兄は「そうではない、私こそが悪い」

30	**Word**	muuruga		waga		warosa		waga	
	Morphemes	muuru	=ga	wa	=ga	*waro	-sa	wa	=ga
	Lex. Entries	muuru	$=ga_1$	wa	$=ga_1$	$*waro_2$	$-sa_1$	wa	$=ga_1$
	Lex. Gloss	全部	NOM1	1SG	NOM1	悪い	ADJ	1SG	NOM1

warosadi juuharu muNbe naNgizjajaa

*waro -sa =di *?i -ju + *ha -ru muN =bee naNgi =zja =jaa

$*waro_2$ $-sa_1$ =di $*?i_1$ $-ju_1$ *** *** *** muN =bee naNgi =zja =jaa

悪い ADJ QT 言う NPST *** *** *** もの APPR 大変 SFP SFP

Free みんなが「自分が悪い」「自分が悪い」と言い張る者ばかりだから大変だ

31	**Word**	haNsjamu			iinu		jaawa		icjakajadi		
	Morphemes	haN	-sja	=mu	ii	=nu	jaa	=wa	icja	=kaja	=di
	Lex. Entries	haN	$-sa_1$	=mu	ii	$=nu_2$	jaa_1	=wa	$icja_1$	=kaja	=di
	Lex. Gloss	こう	ADJ	ADD	西	GEN2	家	TOP	どう	Q	QT

sjurutu

*s -ju -ru -tu

*s $-ju_1$ $-ru_2$ -tu

する NPST COND3 COND

Free 西の家はいかがかというと、

32	**Word**	nuuka		moNdainu		arutuwa			
	Morphemes	nuu	=ka	moNdai	=nu	*a	-ru	-tu	=wa
	Lex. Entries	nuu	=ka	moNdai	$=nu_1$	$*a_1$	$-ru_2$	-tu	=wa
	Lex. Gloss	何	Q	問題	NOM2	ある	COND3	COND	TOP

Free 何か問題があると

33	**Word**	uraga		warosanu			darusja	
	Morphemes	ura	=ga	*waro	-sa	-nu	daru	=sja
	Lex. Entries	ura	$=ga_1$	$*waro_2$	$-sa_1$	-nu	daru	=sja
	Lex. Gloss	2SG	NOM1	悪い	ADJ	ADN	だろう	EMPH

Free あんたが悪いんだろう

34	**Word**	wana	icjamu		naN		wana	jukwaNmoo		
	Morphemes	wana	icja	=mu	*n	-N	wana	jukwa	-N	=moo
	Lex. Entries	wa	$icja_1$	=mu	$*n_1$	-N	wa	jukwa	-N	=moo
	Lex. Gloss	1SG	どう	ADD	ない	IND	1SG	良い	IND	EXP

Free 私は何もない、私は良い（悪くない）よ！

35	**Word**	di	miiwa		mii	utunudu		
	Morphemes	=di	mii	=wa	mii	utu	=nu	=du
	Lex. Entries	=di	mii_1	=wa	mii_2	utu_1	$=nu_1$	=du
	Lex. Gloss	QT	兄	TOP	実	弟・妹	NOM2	FOC

warosamu

*waro	-sa	-mu
$*waro_2$	$-sa_1$	-mu
悪い	ADJ	EPI

Free と兄は、弟が悪い

36	**Word**	wana	jukwaN		jukwacjuube			naNgizjajaa		
	Morphemes	wana	jukwa	-N	jukwa	cjuu	=bee	naNgi	=zja	=jaa
	Lex. Entries	wa	jukwa	-N	jukwa	$cjuu_1$	=bee	naNgi	=zja	=jaa
	Lex. Gloss	1SG	良い	IND	良い	人	APPR	大変	SFP	SFP

Free 私は良い」　良い人ばかりだと大変だ

37	**Word**	haNsjidu	jukwacjuudi			urutuwa			
	Morphemes	***	jukwa	cjuu	=di	*u	-ru	-tu	=wa
	Lex. Entries	***	jukwa	$cjuu_1$	=di	*u	$-ru_2$	-tu	=wa
	Lex. Gloss	***	良い	人	QT	いる	COND3	COND	TOP

Free だから良い人といると

38	**Word**	<	cuneni	>	arasoigotunu		aNdoojaadi			
	Morphemes		cuneni		arasoigotu	=nu	*a	-N	=doo	=jaa	=di
	Lex. Entries		***		***	$=nu_2$	$*a_1$	-N	=doo	=jaa	=di
	Lex. Gloss		***		***	GEN2	ある	IND	SFP	SFP	QT

Free 常に争いごとがあるんだよって

39	**Word**	waga		warosanu			warosanuci			
	Morphemes	wa	=ga	*waro	-sa	-nu	*waro	-sa	-nu	=cji
	Lex. Entries	wa	$=ga_1$	$*waro_2$	$-sa_1$	-nu	$*waro_2$	$-sa_1$	-nu	$=cji_2$
	Lex. Gloss	1SG	NOM1	悪い	ADJ	ADN	悪い	ADJ	ADN	ALL

hikaerutuwa

*hjikae	-ru	-tu	=wa
*hjikae	$-ru_2$	-tu	=wa
控える	COND3	COND	TOP

Free 自分が悪い、自分が悪いと言って控えると

40	**Word**	<	maruku	>	osamajuNdjaadinu						hanasji
	Morphemes		maruku		*osama	-ju	-N	=djaa	=di	=nu	hanasji
	Lex. Entries		***		*osama	$-ju_1$	-N	$=djaa_1$	=di	$=nu_2$	hanasji
	Lex. Gloss		***		収まる	NPST	IND	SFP	QT	GEN2	話

Free 丸く収まるのだという話

41	**Word**	ii	tuusa		agari	tuusa	
	Morphemes	ii	*tuu	-sa	agari	*tuu	-sa
	Lex. Entries	ii	$*tuu_2$	$-sa_1$	agari	$*tuu_2$	$-sa_1$
	Lex. Gloss	西	聞く	ADJ	東	聞く	ADJ

Free おしまいおしまい

An empty paragraph
An empty paragraph

引用文献

Aissen, Judith. 2003. Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy. *Natural Language & Linguistic Theory21* (3) 435-483.

Alan Cruttenden. 1997. *Intonation.* Cambridge: Cambridge University Press.

Alexandra Y. Aikhenvald. 2006. *Evidentiality*. Oxford University Press.

Blake, Barry. 1994. *Case*. Cambridge: Cambridge University Press.Bossong.

Boersma, Paul & Weenink, David (2015). Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 5.4.17, retrieved 20 August 2015 from http://www.praat.org/

Catford, John Cunnison. 1977. Fundamental problems in phonetics. Indiana University Press.

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge University Press.

Comrie, Bernard. 1985. *Language universals adn linguistic Typology* 2nd edition. The University of Chicago Press.

Crystal, David 2000. *Language Death*. Cambridge University Press.

Crystal, David. 2009. *Dictionary of Linguistics and Phonetics*, 6th Edition. Wily.

D. Robert Ladd. 2009. *Intonational Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dixon, R. M. W. 1979. Ergativity. *Language* 55:59–138.

Dixon, Robert M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dixon, R. M. W. 2006. Adjective Classes in Typological Perspective. In Dixon, R. M. W., adn Aikhenvald, Alexadnra Y. (eds.) *Adjective Classes : A Cross-Linguistic Typology.* Oxford, GBR: Oxford University Press.

Ekkehard König, Peter Siemund (with Stephan Töpper). 2013. Intensifiers adn Reflexive Pronouns. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) The World Atlas of Language StructuresOnline. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at http://wals.info/chapter/47, Accessed on 2015-10-26.)

Gillian Brown, Karen. L. Currie and Joanne Kenworthy. 1980. *Questions of Intonation*. London: Croom helm London.

Givon, T. 1984. *Syntax: a Typological Functional Introduction*, vol.1. Amsterdam adn Philadelphia: John Benjamins.

Graham Mallinson, Barry John Blake. 1981. *Language Typology: Cross-Linguistic Studies in Syntax.* North-Holland Publ.

Greenberg, Joseph H. 1963. Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In Greenberg, Joseph H. (ed.), *Universals of Human Language*, 73-113. Cambridge, Mass: MIT Press.

Hajek, John. 2006. Adjective Classes: what can we Conclude? In Dixon, R. M. W., adn Aikhenvald,

Alexadnra Y. (eds.) *Adjective Classes : A Cross-Linguistic Typology.* Oxford, GBR: Oxford University Press.

Haspelmath, Martin. 1993. More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In Bernard Comrie & Maria Polinsky (eds.), *Causatives and transitivity*. Amsterdam: Benjamins. 87-120.

Haspelmath, Martin. 2010. *Understadning Morphology* 2nd edition. Routledge.

Heinrich, Patrick, Shimoji, Michinori and Shinsho Miyara (eds.) *Handbook of Ryukyuan Languages*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Hopper, Paul and Thompson, Sandra A. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56. 251-299.

Ian Maddieson. 2013. Glottalized Consonants. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) The World Atlas of Language Structures Online. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at http://wals.info/chapter/7, Accessed on 2015-09-05.)

Igarashi, Yosuke. 2012. Typology of intonational phrasing in Japanese dialects. In: Jun, Sun-ah (ed.) *Prosodic Typology2*. 464-492. Oxford: Oxford University Press.

Igarashi, Yosuke. 2015. Intonation. In: H. Kubozono (ed.) *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*. Berlin: Walter de Gruyter, 525-568.

Ishihara, Shinichiro. 2015. Syntax-prosody interface. *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*. Berlin: Walter de Gruyter, 569-618.

Ito, Junko. 1990. Prosodic minimality in Japanese. In K. Deaton et al. (ed.), *Papers from the Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*. Chicago Linguistics Society 26: Part Ⅱ. 213-39. Chicago: Chicago Linguistics Society, University of Chicago.

Kubozono, Haruo. 1989. The mora and syllable structure in Japanese: Evidence from speech errors. *Language and Speech*. 32 (3). 249-278.

Ladefoged, Peter, and Maddieson, Ian. 1989. Vowels of the world's languages. Journal of Phonetics 18:93-122.

Ladefoged, Peter, and Maddieson, Ian. 1996. The sounds of the world's languages. Oxford: Blackwell.

Lambrecht, Knud. 1994. *Information structure and sentence form: Topic, focus, and the mental representation of discourse referents*. In Cambridge Studies in Linguistics 71. Cambridge: Cambridge University Press.

Lewis, M. Paul, Gary F. Simons & Charles D. Fennig (eds.) 2013. *Ethnologue: Languages of the World, 17th edition*. Dallars: SIL International.

Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. 2015. Leipzig Glossing Rules

https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/Glossing-Rules.pdf

Moseley, Christopher. 2010. Atlas of the World's Languages in Danger, 3rd edition. Paris: UNESCO Publishing.

Nettle, Daniel and Suzanne Romaine 2000. Vanishing Voices: The Extinction of the World's Languages. Oxford University Press.

Nichols, Johanna, David A. Peterson and Jonathan Barnes. 2004. Transitivizing and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8:2: 149-211.

Nishie, Ann Sarah.1968. *Dictionary of Okinoerabu dialect*. http://innowayf.net/download.html#okinoerabu.

Niinaga, Yuto. 2014. *A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language*. Unpublished. Ph D dissertation.

Payne, Thomas E. 1997. *Describing Morphosyntax: A Guide For Field Linguists*. Cambridge University Press.

Pellard, Thomas. 2009. *Ōgami. Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū.* Unpublished. Ph D dissertation.

Pellard, Thomas. 2015. The linguistic archaeology of Ryukyu Islands. Handbook of the Ryukyuan Languages. In Heinrich, Patrick, Shimoji, Michinori and Shinsho Miyara(eds.) *Handbook of Ryukyuan Languages*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Scalise, Sergio, Antonio Fábregas adn Francesta Forza. 2009. Exocentricity in Compounding. *Gengo Kenkyu* 135:49-84.

Shibatani, Masayoshi. 1973. Semantics of Japanese causativization. *Foundation of Language* 9: 323-373.

Shilverstein, Michael. 1976. Hierarchy of features adn ergativity. In Dixon, R.M.W. (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171, Camberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

Shimoji, Michinori. 2012. Northern Ryukyuan. In Nicolas Tranter (eds.) *Languages of Japan and Korea*. Routledge.

Shimoji, Michinori. 2008. *A Grammar of Irabu: A Southern Ryukyuan Languages*. Unpublished. Ph D dissertation.

Shimoji, Michinori& Thomas Pellard.2012. *An Introduction to Ryukyuan Langauges*. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Trudgill, Peter. 1974. *Sociolinguistics*. Penguin Books.

Van der Lubbe, Gijs and Tokunaga, Akiko. 2015. Okinoerabu grammar. In Heinrich, Patrick, Shimoji, Michinori and Shinsho Miyara(eds.) *Handbook of Ryukyuan Languages*. Berlin: De Gruyter Mouton.

UNESCO. Language Vitality and Endangerment,

http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/pdf/Language_vitality_and_endangerment_EN.pdf

Uwano, Zendo. 2012. Three types of accent kernels in Japanese. *Lingua.* 122(13): 1415-1440. Amsterdam: Elsevier.

有元光彦（1993）「沖縄・首里方言の規則動詞の形態音韻論：試論」『日本文学研究』29: 1-12.

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラールトマ・久保智之（2012）「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1), 134-148.

五十嵐陽介（2016）「名詞の意味が関わるアクセントの合流ー南琉球宮古語池間方言の事例ー」『音声研究』20: 3. 1-20. 日本音声学会.

岩倉市郎（1940）『沖永良部島昔話』民間伝承の会.

ウェイン・ローレンス（2006）「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』第 40 巻 2 号,沖縄：沖縄文化協会, 87-101.

上野善道（1997）「沖永良部島諸方言の用言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』26：123ー233. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

上野善道（1998a）「沖永良部島諸方言の活用形のアクセント資料(1)」『琉球の方言』23:1-34.

上野善道（1998b）「沖永良部島諸方言の体言のアクセント資料」『アジアアフリカの言語と文化』27:131-262.

上野善道（1999）「沖永良部島諸方言の活用形のアクセント資料(2)」『琉球の方言』24:1-36.

上野善道（2004a）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(1)」『琉球の方言』30:1-49.

上野善道（2004b）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(2)」『アジアアフリカ文法研究』33:155-204.

上野善道（2005）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(3)」『琉球の方言』30:1-49.

上野善道（2006a）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(4)」『アジアアフリカ文法研究』1: 129‐157.

上野善道（2006b）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(5)」『東京大学言語学論集』25: 249‐297.

上野善道（2006c）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(6)」『琉球の方言』31:1-38.

上野善道（2006d）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130. 1-42.

上野善道（2007a）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(7)」『琉球の方言』32: 1‐40.

上野善道（2008a）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(8)」『東京大学言語学論集』27: 267‐307.

上野善道（2008b）「沖永良部方言語彙のアクセント資料(9)」『琉球の方言』33: 99‐123.

上村幸雄（1961）「沖縄本島」東条操監修『方言学講座 第四巻』東京堂

上村幸雄（1997）「琉球列島の言語（総説）」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『日本列島の言語』東京：三省堂, 311-354.
内間直仁（1984）『琉球方言文法の研究』笠間書院.
沖縄言語研究センター（1990）『奄美諸島方言の言語地理学的研究: 徳之島沖永良部島に関する言語地理学的調査の報告』
沖縄国際大学高橋ゼミグループ編（1984）『沖永良部方言調査報告―言語地理学的研究―』沖縄言語研究センター
影山太郎（2010）「複合語のタイポロジーと日本語の特質－「日本語は特殊でない」というけれどー」『国語研プロジェクトレビュー』1: 5-27. 東京：国立国語研究所.
狩俣繁久（2000）「奄美沖縄方言群における沖永良部方言の位置づけ」『日本東洋文化論集（6）』:43-69.
亀井孝・河野六郎・千野栄一編（1988-2001）『言語学大辞典』東京： 三省堂.
かりまたしげひさ（2007）「沖縄県うるま市安慶名方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法－標準語研究を超えてー』225-240. ひつじ書房.
甲東哲（2006）『島のことば』三笠出版.
甲東哲・先田光演（2011）『分類沖永良部島民族語彙集』和泊町歴史民俗資料館.
木部暢子（2006=2008）日本語諸方言イントネーションのデータベース構築と音調記述に関する研究（科学研究費助成事業）
木部暢子（2010）「日本語諸方言の疑問文イントネーション」『日本語の研究』7(2)：75－80「日本語学会 2010 年度秋期大会シンポジウム報告：イントネーション研究の現在」
木部暢子（2014）「鹿児島県沖永良部島方言」『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究　報告書』p15-27.
金田一京助（1941）「女性語と敬語」『婦人公論』中央公論社.
工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美（2007）「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー」大阪大学大学院文学研究科紀要 47. 151-183.
工藤真由美編（2004）『日本語におけるアスペクト、テンス、モダリティー標準語研究を超えて』東京：ひつじ書房.
佐々木冠・當山奈那（2016）「日本語族における他動性交替の地域差」）『有対動詞の通言語的研究 ―日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』くろしお出版.
重野裕美（2015）「北琉球奄美大島浦方言の動詞形態論」33-47. 『琉球の方言』法政大学沖縄文化研究所.
島袋幸子・かりまたしげひさ「沖縄県今帰仁村謝名方言のアスペクト・テンス・ムード」日本東洋文化論集 15: 243 -295.
下地理則（2016）「宮崎県椎葉村尾前方言の Differential Object Marking」琉球諸語記述研究会発表資料．琉球大学 50 周年記念館. 2016/03.

白田理人（2015）「喜界島上嘉鉄方言の動詞形態論」『琉球の方言』11-31. 法政大学沖縄文化研究所.
白田理人（2016）『琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法』京都大学博士論文.
角田太作（2009）『世界の言語と日本語 改訂版―言語類型論から見た日本語』くろしお出版.
須山名保子（2007）「鹿児島県大島郡大和村大和浜方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法ー標準語研究を超えてー』183-204. ひつじ書房.
高橋俊三（1991）『おもろさうしの動詞の研究』武蔵野書院.
高橋孝代（2006）『境界性の人類学―重層する沖永良部島民のアイデンティティ』弘文堂.
高山林太郎（2013）「系列語彙を用いたアクセント調査―沖永良部国頭方言を例に―」JLVC2013 発表原稿集:141-150.国立国語研究所.
辻村敏樹（1971）「敬語史の方法と問題」『講座国語史五　敬語史』大修館書店.
徳永晶子（2012）『奄美沖永良部島におけるオノマトペの言語地理学的研究』修士論文.
永野マドセン泰子、狩俣繁久（2009）「首里方言のイントネーション」法政大学沖縄文化研究所（編）『琉球の方言』34：175-191. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
永野マドセン泰子（2010）「首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション」法政大学沖縄文化研究所（編）『琉球の方言』35：1-16. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
永野マドセン泰子（2012）「南琉球・宮古伊良部島にみる無アクセント方言のイントネーション」『琉球の方言』37：25-43. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
仲間恵子（2007）「鹿児島県大島郡与論町麦屋方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法ー標準語研究を超えてー』205-224. ひつじ書房.
名嘉真三成 1986「琉球方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要 第一部』29.
永吉敏人（2005）『いらぶぬくとぅば』私家出版.
中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』法政大学出版.
ナロック・ハイコ、パルデシ・プラシャント、赤瀬川 史朗（2015）「日本語自他動詞対のコード化の頻度論的動機付け:大規模コーパスによる検証」パルデシ他（編）『有対動詞の通言語的研究 ―日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』くろしお出版.
新永悠人（2013）「北琉球湯湾方言の複数を表す形態素と名詞句階層」『第 96 回方言研究会発表予稿集』41-48.
新永悠人（2015）「北琉球奄美大島湯湾方言の動詞形態論」『琉球の方言』49-74. 法政大学沖縄文化研究所.
日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法〈4〉第 8 部モダリティ』くろしお出版.
日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法〈7〉談話・待遇表現』くろしお出版.
橋口満（1987）『鹿児島方言辞典』桜楓社.

服部四郎、金城朝永（1955）「琉球語」『世界言語概説』下巻. 研究社.
原田走一郎（2014）「南琉球八重山黒島方言における形容詞のサブグループ ― 接辞 ku が続く形式に注目して ―」『阪大日本語研究』26: 71-85.
原田走一郎（2015）『南琉球八重山黒島方言の文法』大阪大学博士論文.
林由華（2013）『南琉球宮古語池間方言の文法』京都大学博士論文.
パルデシ・プラシャント、桐生和幸、ナロック・ハイコ他（2015）『有対動詞の通言語的研究 ―日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』くろしお出版.
平山輝男・大島一郎・中本正智（1966）『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院.
平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院.
平山輝男（1986）『奄美方言基礎語彙の研究』821-827. 東京：角川書店.
広島大学教育学部国語教育学研究室方言研究ゼミナール（1997）『方言資料叢刊 7 巻』http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/HU_journals/AA11460132/7/--
ファン・デル・ルベ, ハイス（2016）『琉球沖永良部語正名方言の記述文法研究』琉球大学博士論文.
福島光義（2010）『なちかしや国頭の方言（しまヌムニ）』私家出版.
松森晶子（2000a）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発 : 沖永良部島の調査から」『音声研究』 4(1) : 61-71. 日本音声学会.
松森晶子（2000b）「琉球の多型アクセント体系についての一考案－琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方－」『国語学』第 51 巻 1 号. 93－109.
松森晶子（2010）「多良間島の 3 型アクセントと『系列別語彙』」上野善道（監）『日本語研究の 12 章』490-503，明治書院.
松森晶子（2012）「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16(1) : 30-40. 日本音声学会.

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方のご支援とご協力を賜りました。謹んで御礼申し上げます。

調査地である沖永良部島の方々には、長年にわたり、多大なご協力を賜りました。特に、川上忠志様、西村富明先生、松村雪枝様には、言語調査を超えて、島の文化や歴史、精神性など、様々なことを教えて頂きました。国頭集落の、国分四男子様、福島カネ様、田畑孝子様、国分スエ様、石原ツル様、先田タケ子様、田畑玲子様には何度も調査に付き合っていただき、貴重な昔話や伝承・歌などを教えて頂きました。佐々木隆様には、一人では難しいデータの書き起こしを何度も手伝って頂きました。西村タカ子様、川島昭様、川島文慧様には、島での生活を様々な側面からご支援頂きました。知名町の前利潔様、郷土研究会の先田光演先生には、沖永良部の歴史・文化・自然について、豊富な知識を教えて頂き、また島内での成果発信の機会を頂きました。このような暖かいご支援に感謝し、これから少しでも御恩返しが出来るよう、務めて参りたいと思います。

本論文を執筆するにあたり、一橋大学大学院社会学研究科の中島由美先生、五十嵐陽介先生には、指導教官として、長年にわたり、丁寧なご指導を賜り、多くの知識と知見を戴きました。先生方がいらっしゃらなければ、論文をまとめ上げることも叶わなかったことと思います。ここに深く御礼申し上げます。

最後になりますが、論文の執筆を傍で支えてくれた夫と子、両親と弟に深く感謝致します。

なお、本論文の一部は、JSPS 科学研究費補助金（科研費）課題番号：13J03186 の助成を受けたものです。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方のご支援とご協力を賜りました。謹んで御礼申し上げます。

調査地である沖永良部島の方々には、長年にわたり、多大なご協力を賜りました。特に、川上忠志様、西村富明先生、松村雪枝様には、言語調査を超えて、島の文化や歴史、精神性など、様々なことを教えて頂きました。国頭集落の、国分四男子様、福島カネ様、田畑孝子様、国分スヱ様、石原ツル様、先田タケ子様、田畑玲子様には何度も調査に付き合っていただき、貴重な昔話や伝承・歌などを教えて頂きました。佐々木隆様には、一人では難しいデータの書き起こしを手伝って頂きました。西村タカ子様、川島昭様、川島文慧様には、島での生活を様々な側面からご支援頂きました。知名町の前利潔様、郷土研究会の先田光演先生には、沖永良部の歴史・文化・自然について、豊富な知識を教えて頂き、また島内での成果発信の機会を頂きました。このようなご縁に感謝し、これから少しでも御恩返しが出来るよう、務めて参りたいと思います。

本論文を執筆するにあたり、一橋大学大学院社会学研究科の中島由美先生、五十嵐陽介先生には、指導教官として、丁寧なご指導を賜り、多くの知識と知見を戴きました。先生方がいらっしゃらなければ、論文をまとめ上げることも叶わなかったことと思います。また、博士論文の審査委員である一橋大学社会学研究科の森村敏巳先生、九州大学文学部の下地理則先生には、論文の内容に関して、大変貴重なコメントを頂きました。先生方のご指導に深く御礼申し上げます。

最後になりますが、論文の執筆を支えてくれた夫と子、両親と弟に深く感謝致します。

なお、本論文の一部は、JSPS 科学研究費補助金（科研費）課題番号：13J03186 の助成を受けたものです。